

高知空港拡張整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

田 村 遺 跡 群

第5分冊

1986

高知県教育委員会

田 村 遺 跡 群

第 5 分 冊

本文 V

例　　言

1. 本書は、高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財－田村遺跡群－の発掘調査報告書15分冊の内、第5分冊である。
2. 調査は、運輸省第三港湾建設局の委託を受け、高知県教育委員会が実施した。調査期間は、昭和54～58年度に発掘調査、昭和58～60年度に整理作業及び報告書作成を行い、7年間にわたった。
3. 遺跡の名称としては、調査対象地の大部分から各時代の遺構、遺物を検出しており、調査区も多いため、これを一括して田村遺跡群と呼ぶこととした。また、各調査区はLoc. 1～48と呼称した。
4. 本書の作成にあたっては、本文執筆、図版作成、写真撮影等の作業を各調査区を担当した調査員が行い、各時期、時代についても担当者を決め、これをまとめた。編集は高知県教育委員会である。
5. 発掘調査、整理作業及び報告書作成を通じて、顧問岡本健児教授（高知女子大学）には、御指導、御助言をいただいた。記して感謝する次第である。
6. 図中の方位はすべて磁北であり、標高は海拔高である。遺構図の縮尺は、竪穴住居址、掘立柱建物址、柵列を $\frac{1}{80}$ 、その他の遺構、断面図及びセクション図を $\frac{1}{60}$ とした。遺物実測図の縮尺は、原則として土器については、縄文・弥生時代を $\frac{1}{4}$ 、古墳時代以降を $\frac{1}{3}$ 、石器、金属器を $\frac{1}{2}$ 、木器を $\frac{1}{8}$ とした。写真図版は約 $\frac{1}{2}$ ～ $\frac{1}{3}$ であるが縮尺不同である。
7. 遺構の略号は、竪穴住居址－S T、掘立柱建物址－S B、土塙－S K、溝－S D、井戸－S E、柵列－S A、水溜り状遺構－S P、性格不明遺構－S X、ピット－P、自然流路－S Rとした。
8. 調査期間を通じて多くの方々、諸機関に御協力、御援助をいただいた。各々の名称はあげないが、記して感謝する次第である。
9. 出土遺物その他の資料については、高知県教育委員会が保管の任にあたっている。

本文 目次

第V章 弥生時代〈中～後期2〉

1.	Loc.35B	1
2.	Loc.35C	57
3.	Loc.36A	65
4.	Loc.36B	135
5.	Loc.41.....	179
6.	Loc.45.....	195
7.	Loc.46.....	279
8.	弥生時代中期小結.....	313
9.	弥生時代後期小結	325
10.	総括 I - 繩文・弥生時代一	337

挿 図 目 次

1. Loc.35B	第30図 S D 1、S R 2出土遺物
第1図 調査区設定図	第31図 S T 1、S R 2出土遺物
第2図 調査区セクション	2. Loc.35C
第3図 調査区セクション (S R 2)	第32図 調査区設定図
第4図 S T 1・2、S D 1	第33図 第V～VII層出土遺物
第5図 S K 1～3、S D 2、S X 1	第34図 "
第6図 S T 1出土遺物	3. Loc.36A
第7図 S T 2、S K 3、S D 1、S X 1、 S R 2出土遺物	第35図 調査区設定図
第8図 S R 2出土遺物	第36図 調査区セクション
第9図 "	第37図 S K 2～6、S D 2
第10図 "	第38図 S K 4、S D 1・2出土遺物
第11図 "	第39図 S D 2出土遺物
第12図 "	第40図 S R 2出土遺物
第13図 "	第41図 "
第14図 "	第42図 "
第15図 "	第43図 "
第16図 "	第44図 "
第17図 S K 2、S R 2出土遺物	第45図 "
第18図 S T 1・2、S R 2出土遺物	第46図 "
第19図 S R 2出土遺物	第47図 "
第20図 S T 1出土遺物	第48図 "
第21図 "	第49図 "
第22図 S T 1・2、S X 1、S R 2出土遺物	第50図 "
第23図 S R 2出土遺物	第51図 "
第24図 "	第52図 "
第25図 S T 2、S K 3、S X 1、S R 2 出土遺物	第53図 "
第26図 S K 3、S R 2出土遺物	第54図 "
第27図 S R 2出土遺物	第55図 "
第28図 "	第56図 "
第29図 S T 1、S K 1・3出土遺物	第57図 "
	第58図 "
	第59図 "

- | | |
|----------------------------|---------------------------------------|
| 第60図 S R 2出土遺物 | 第92図 S R 2出土遺物 |
| 第61図 " | 第93図 " |
| 第62図 " | 第94図 S D 1、S R 2出土遺物 |
| 第63図 " | 第95図 S R 2出土遺物 |
| 第64図 " | 第96図 S D 1、S R 2出土遺物 |
| 第65図 " | 6. Loc.45 |
| 4. Loc.36B | |
| 第66図 調査区設定図 | 第97図 調査区設定図 |
| 第67図 S T 1、S K 7・8 | 第98図 調査区セクション |
| 第68図 S R 2南北トレンチセクション | 第99図 S T 1・2 |
| 第69図 S R 2東トレンチセクション | 第100図 S T 5・6、S T 6-P 1、
S T 5-P 9 |
| 第70図 S T 1、S K 8、S R 2出土遺物 | 第101図 S T 3・4、S T 4炭化物出土状況 |
| 第71図 S R 2出土遺物 | 第102図 S T 7・8 |
| 第72図 " | 第103図 S T 9・10 |
| 第73図 " | 第104図 S K 1~4 |
| 第74図 " | 第105図 S K 5~8 |
| 第75図 " | 第106図 S K 9~15 |
| 第76図 " | 第107図 S K 16~18、S D 2 |
| 第77図 " | 第108図 S D 1 |
| 第78図 " | 第109図 S D 3~7 |
| 第79図 S T 1、S R 2出土遺物 | 第110図 P 1~10 |
| 第80図 " | 第111図 P 13・14、18~20、22~26 |
| 第81図 S R 2出土遺物 | 第112図 S T 1・2出土遺物 |
| 第82図 S T 1、S R 2出土遺物 | 第113図 S T 2~5出土遺物 |
| 第83図 " | 第114図 S T 6出土遺物 |
| 第84図 " | 第115図 S T 6~8出土遺物 |
| 第85図 " | 第116図 S T 8・9出土遺物 |
| 第86図 " | 第117図 S T 9・10出土遺物 |
| 第87図 " | 第118図 S K 1~5、S K 9~11出土遺物 |
| 第88図 " | 第119図 S K 11~16出土遺物 |
| 5. Loc.41 | 第120図 S K 16~19、S D 1出土遺物 |
| 第89図 調査区設定図 | 第121図 S D 1出土遺物 |
| 第90図 S D 1、S R 2セクション | 第122図 " |
| 第91図 S D 2、S R 2出土遺物 | 第123図 " |

第124図 S D 2出土遺物

第125図 "

第126図 "

第127図 S D 2・6・7出土遺物

第128図 S D 7、P 2・7・12出土遺物

第129図 S T 3・6・8・9、S K 13出土遺物

第130図 S D 1・3、S T 6出土遺物

第131図 S T 6・9出土遺物

第132図 S T 1・6出土遺物

第133図 S T 6・9出土遺物

第134図 S T 7・9出土遺物

第135図 S T 4、S K 5・9、S D 2出土遺物

第136図 S T 1・4・6・9、S D 6出土遺物

第137図 S T 1・8・9、S K 1・16、

S D 2・7出土遺物

第138図 S T 1・5・6・9出土遺物

第139図 S T 1出土鏡片

7. Loc.46

第140図 調査区設定図

第141図 調査区セクション

第142図 調査区セクション、S D 1

第143図 S R 1・セクション

第144図 S R 1出土遺物

第145図 "

第146図 "

第147図 "

第148図 "

第149図 "

第150図 "

第151図 "

第152図 "

第153図 "

表 目 次

1. Loc.35B

第1表 竪穴住居址計測表

第2表 土塙計測表

第3表 遺構出土土器観察表

第4表 遺構出土石器観察表

2. Loc.35C

第5表 包含層出土土器観察表

第6表 包含層出土石器観察表

3. Loc.36A

第7表 土塙計測表

第8表 遺構出土土器観察表 (A トレンチ)

第9表 遺構出土石器観察表 (")

第10表 遺構出土土器観察表 (B トレンチ)

第11表 遺構出土石器観察表 (")

4. Loc.36B

第12表 竪穴住居址計測表

第13表 土塙計測表

第14表 遺構出土土器観察表

第15表 遺構出土石器観察表

5. Loc.41

第16表 遺構出土土器観察表

第17表 遺構出土石器観察表

6. Loc.45

第18表 竪穴住居址計測表

第19表 土塙計測表

第20表 遺構出土土器観察表

第21表 遺構出土石器観察表

7. Loc.46

第22表 遺構出土土器観察表

第23表 遺構出土石器観察表

8. 弥生時代中期小結

第24表 中期に編入される住居址の時期区分

9. 弥生時代後期小結

第25表 後期に編入される住居址の時期区分

第26表 調査区における後期竪穴住居址の規模

1. Loc. 35B

Loc. 35B

I. 位置と調査経過

Loc. 35Bは、田村遺跡群の北西部に位置し、小字名は、田村川を挟んで西は横手、東は南土居の前である。当地点の北は西見当遺跡であり、南西部には弥生後期の集落址を検出したLoc. 34がある。

当地点は、空港拡張事業に伴う田村川改修工事によってその両岸の水田の一部が用水路化されることになったため、急遽設定された調査区である。すなわち、田村川の右岸に南北に細長いトレンチ（Bトレンチ）と小トレンチ（Dトレンチ）とを設定し、左岸の工事区域内に4つの小トレンチ（C・E・F・Gトレンチ）を設けた。後に、Bトレンチの北の農道にも拡張工事が行われることになったため、道路下の部分をAトレンチとして調査した。

各トレンチの試掘調査の結果、Bトレンチでは弥生時代の竪穴式住居址が検出されたため、工事区域内全面を拡張発掘した。また、E・Fトレンチでは下層より多量の弥生土器を出土したため、両トレンチをできるだけ拡張し、結果的には1つのトレンチ（Eトレンチ）とした。（それに伴ってGトレンチはFトレンチと改称す。）以下、Eトレンチとは旧E・Fトレンチを指し、Fトレンチとは旧Gトレンチを意味する。全体図等も新トレンチ名で示している。

2. 調査概要

当地点の最終的な発掘面積は、Aトレンチ92m²、Bトレンチ57m²、Cトレンチ8m²、Dトレンチ8m²、Eトレンチ78m²、Fトレンチ14m²で、計 257m²に及んだ。

弥生時代に関するものだけに限ってみると、Aトレンチでは土括2基を確認し、Bトレンチでは竪穴住居址1棟、竪穴状遺構1基、土塙1基、溝状遺構2条、それに性格不明の落ち込み（S X 1）1ヶ所を検出した。また、Eトレンチの下層においては、非常に多量の遺物（弥生土器、石器）が出土した。このEトレンチは、遺物の出土状況がLoc.35AのSR2およびLoc.36のSR2と類似しており、全体的な位置関係からしても自然流路SR2の一部と考えられる。

3. 層序と出土遺物

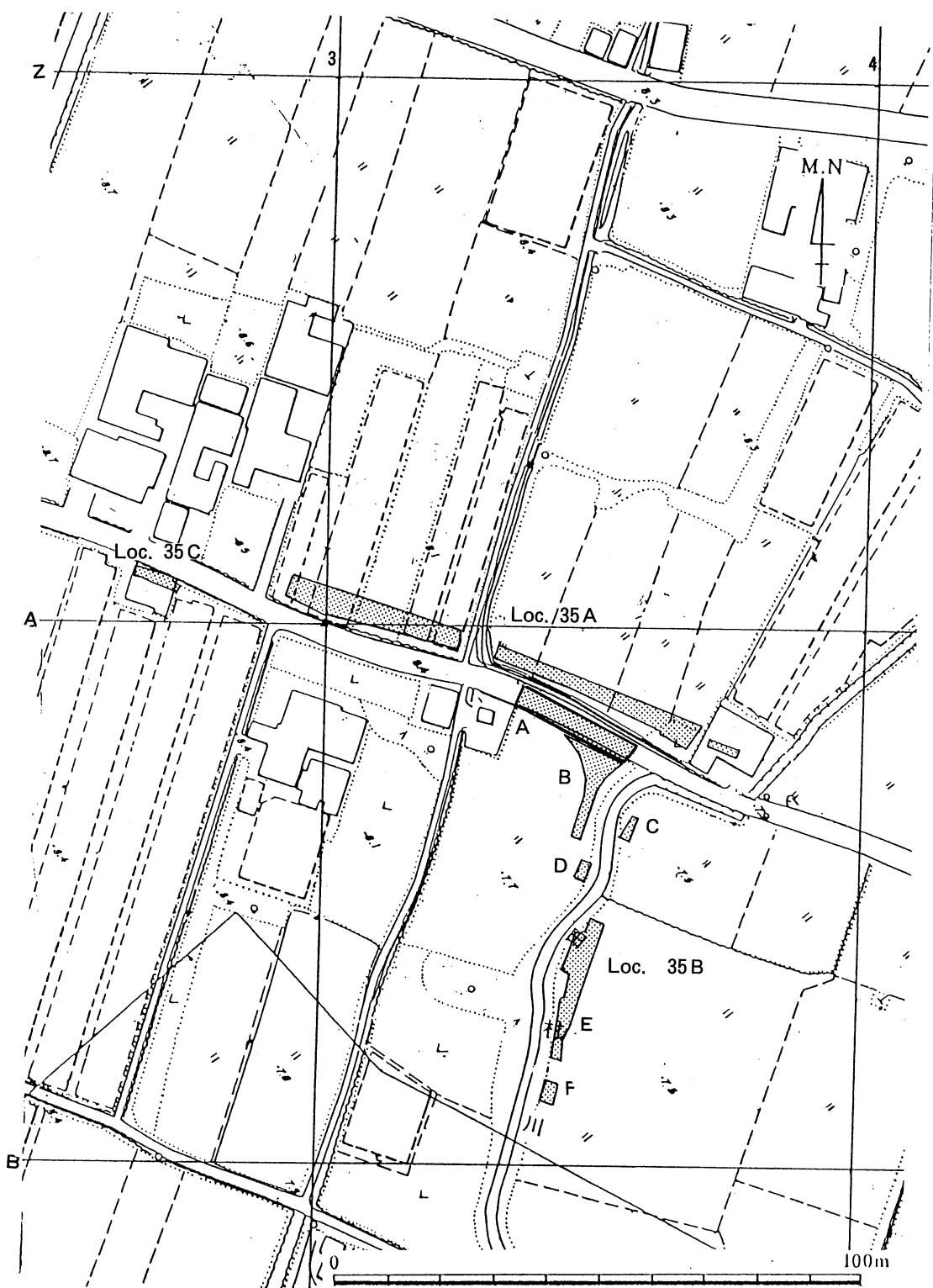
Loc.35Bの各トレンチの層序は余り整然とはしていないが、基本的には、

第I層 耕作土

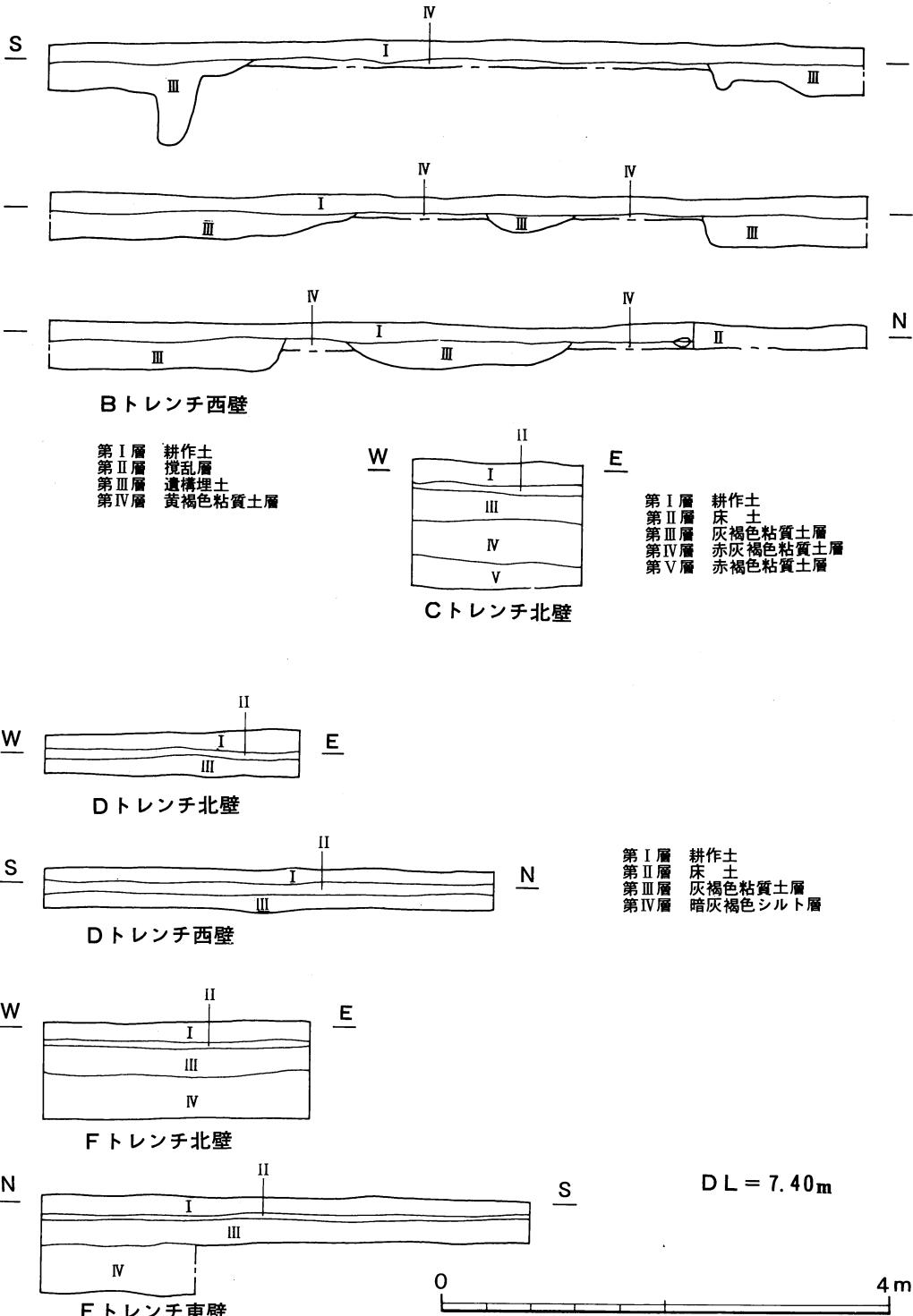
第II層 床土

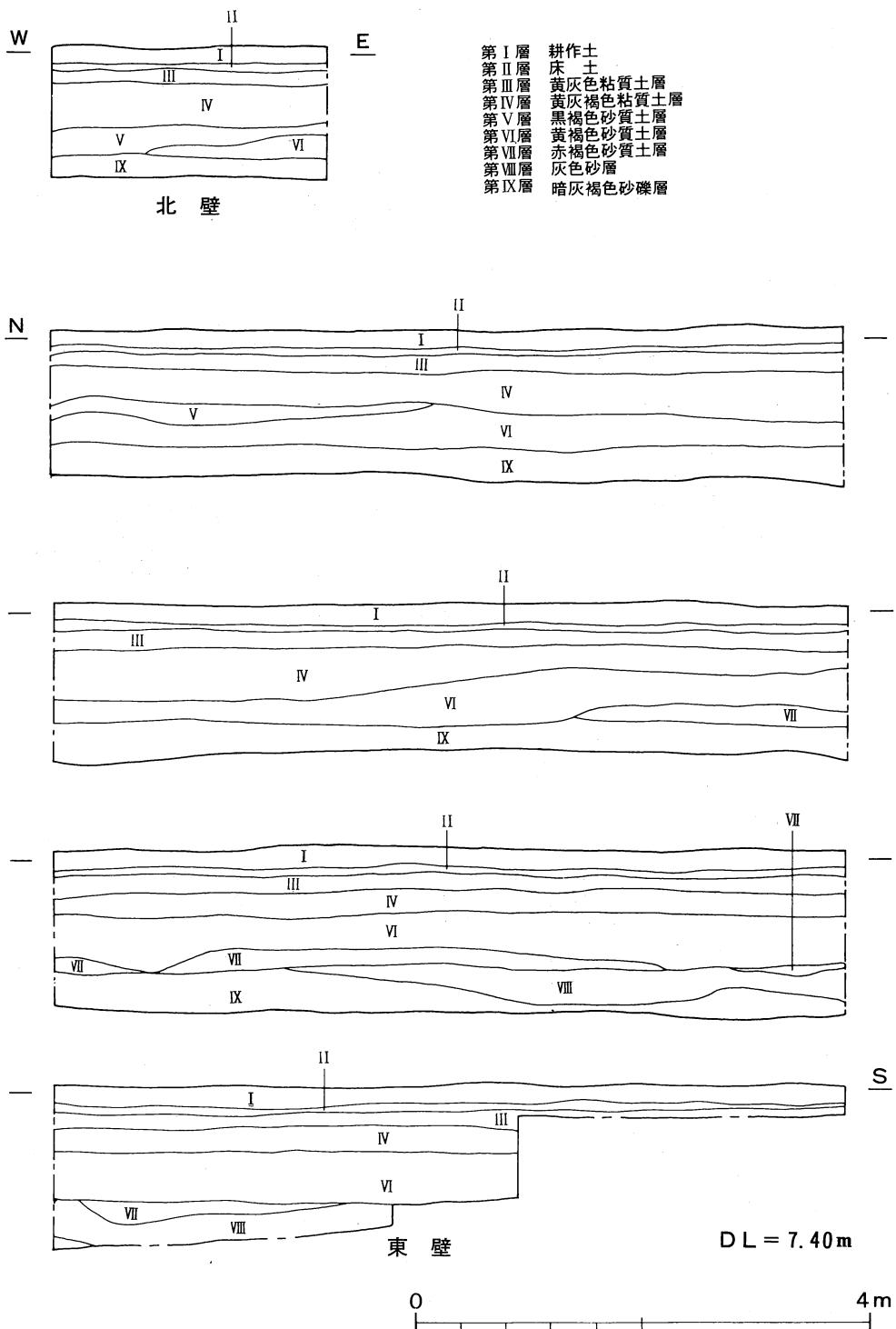
第III層 灰褐色粘質土層

であり、第III層までは統一的に把握できる。但し、Aトレンチは、旧農道工事によって全面が搅乱を受けているため、搅乱層を除去した段階がいきなり遺構検出面（黄褐色粘質土層）となっており、また、Bトレンチでは、第II・III層の堆積はみられず、耕作土除去の時点で遺構が



第1図 調査区設定図





第3図 調査区セクション (SR 2)

確認された。

C～Fトレーニチにおいても、第Ⅳ層以下の層序は、田村川氾濫のためか若干の相違がある。なお、Eトレーニチにおける遺物の出土は第V層以下で著しくなっており、同層以下がSR2の埋土として捉えることができ得る。

出土遺物は、各遺構や自然流路を別にすると、第I～III層より若干の弥生土器片と中世土師質土器片および近世陶磁類を出土しただけであり、図示できるものはなかった。

4. 遺構と遺物

住居址

S T I

S T Iは、Bトレーニチの北部において、耕作土除去直後に検出された。平面形は直径6.10mの円形を呈するものの、北端は旧農道工事によって破壊されており、東端は田村川に接しているため、全容を確認することはできなかった。住居址埋土上面には、南西部を中心に木炭片が広がり、また、木炭塊が弧状をなして並んでいた。

埋土は、黒褐色粘質土をベースとしているが、3層に分層され、第I層が灰黒褐色粘質土、第II層茶褐色粘質土（両者の差は僅少）、そして第III層が黒黄褐色粘質土であった。深さは0.30mを測り、床面の標高は7.00m前後である。床面の状況は、住居址としては起伏が多く、西側に深さ0.10mほどの方形状の掘り込みを有す。なお、東端部は、田村川の氾濫のためか、埋土に砂礫が混入しており、床面も若干乱れていた。南部は、残存状態が良好であり、壁直下が段状にやや高くなっていた。その東で浅い壁溝が確認されたが、全周を巡るものではなかつた。

ピットは、第II層除去の段階から検出されたが、第III層除去後に確認されたものも多い。主柱穴と考えられるピットはP3～6とP7～10との2組があり、建て替えが行われている。各柱穴の形状は、平面形が直径35cm前後の円形を呈し、深さ40cmを標準とする。中央ピットと目されるP1は、平面形が直径64cmの円形を呈し、深さは42cmを測り、底面中央が若干凹んでいる。P1は北のP2とともに第II層除去段階で検出された。なお、S T Iの南隣で検出されたSK3は住居址に付属するものと考えられる。

出土遺物の中では、中期II段階を中心とする土器（1～24）の出土が目立ち、また、石器の出土も著しかった（192、193、200～208、238、241、242、250～253）。遺物は、第II層出土が主であったが、第III層からの出土も少なくなかった。

ピットのうち第II層除去段階での確認が明瞭であったのは、P1・2の他にP4・5・6およびP11がある。このことから、まずP7～10を主柱穴とする竪穴住居があつて、後に第III層上面を床面としたP3～6を主柱穴とする住居が設営されたのであるまい。

ところで、ST1は、SD1によって明確に切られている。また、西側はST2とも切り合い関係にある。両者の埋土は同一であり、検出段階ではST1の南端から弧状に並ぶ木炭塊に沿って発掘を試みた。それゆえ、西側の壁の立ち上がりは極めて不明瞭であった。ST2からの出土遺物は後期的要素が強く、切り合いを逆に判断してしまった可能性がある。

ST2

ST2も、Bトレンチの北西部において、耕作土除去直後に検出された。先述の如く、ST1と微妙な切り合い関係があり、北端は旧農道工事によって破壊されており、また、南西部は調査区外であるため、その全容は不明である。

深さは0.20mを測り、底面は比較的平坦であった。但し、底面において検出されたピットは、数も少なく、小規模なものであり、主柱穴らしきものも確認できなかった。ゆえに、ST2は、住居址と判断することは難しく、現時点では「竪穴状遺構」として扱った方が妥当と考えられる。

埋土は黒褐色粘質土であり、ST1にみられた黒黄褐色粘質土は下層にも堆積していなかった。出土土器は25~30で弥生後期1段階のものが主であり、石器は194、195、209、221、222である。底面よりやや浮いた状態での出土が多かった。

土塙

SK1

SK1は、Aトレンチの中央部東寄りで、搅乱層を除去した段階で検出された。この搅乱は、旧農道工事に伴うものであり、深さ0.40mに達しており、遺構の残存状態は不良であった。

平面形は、南北方向に長い不整長方形を呈し、長径1.20m、短径0.28mを測る。長軸方向は、N-3°Wであり、ほぼ真北を指す。埋土は黒褐色粘質土であるが、深さは0.10mと極めて浅い土塙である。東端部より石包丁(240)が出土した。

SK2

SK2は、Aトレンチの東部に位置し、搅乱層除去後に検出された。BトレンチのST1あるいはST2の延長かと期待されたが、南北両端の搅乱が深く、両者の関連は不明であった。また、平面の形状からしても、ST1あるいはST2として扱うことは難しいと判断されたため、単独の土塙として扱った。

底面は、西部と南部はほぼ平坦であるが、北部中央がさらに落ち込んでおり、東北端は盛り上がっていた。また、東半部には大小の礫も混入していた。埋土は、上層が赤褐色粘質土であり、落ち込み部は黒褐色粘質土であった。

遺物は、底面直上より弥生土器片の出土をみたが、図示できるものはなかった。扁平片刃石斧（187）が、ほぼ底面直上より出土している

S K 3

S K 3 は、S T 1 の南側に位置し、耕作土除去直後に検出された。平面形は直径1.12mの円形を呈し、深さ0.37mを測る。底面はほぼ平坦で、壁は垂直に近く立ち上がっている。但し、その東西は段状に0.10m程凹をなしている。埋土は黒褐色粘質土である。

遺物は、埋土中位を中心に、弥生土器片および石器が出土している。とりわけ石器類の出土が目立った（37、220、224、225、239）。S K 3 はその位置からしても、S T 1 に付属する施設であると考えるべきであろう。

溝

S D 1

S D 1 は、B トレンチ北部において、耕作土除去後に検出された。幅0.60mで断面U字状を呈し、深さ0.30mを測る。確認長は10mで、東西方向に走る。埋土は、2層に分層され、第1層が褐色粘質土で、第II層が暗褐色粘質土である。

弥生時代後期のものと考えられる溝であり、出土遺物には31～34および243がある。S T 1 およびS T 2 のほぼ中央部を切っている。

S D 2

S D 2 は、B トレンチの南部において、耕作土除去の段階で検出された。南北に縦走する比較的規模の大きい溝の西肩部と考えられ、底面には不規則な起伏がみられる。埋土は、3層に分層され、第I層黄灰褐色粘質土、第II層灰褐色土、第III層暗褐色粘質土である。

上層の埋土はどちらかと言えば中世的であるが、出土遺物は弥生土器片のみであった。図示できる遺物はなかったが、埋土第III層の状況等から考えて、S R 2 の西肩部である可能性がある。この点について確認すべく南側のD トレンチの掘り下げを試みたが、湧水が激しく不可能であった。

性格不明遺構

S X 1

S X 1 は、S D 2 の北に接する位置において、耕作土除去の段階で検出された。東西方向に流れる溝の可能性もあるが、調査区が狭小で断定できないためS Xとした。南北幅は3.60m、

深さ0.20mを測る。

埋土は灰黒褐色粘質土で、埋土中より多くの弥生土器および石器を出土した（35、36および211、223）。その東南端はS R 2によって切られている。

自然流路

S R 2

S R 2は、Eトレンチを第V層上面まで掘り下げた段階で検出された。

Eトレンチは、第IV層までは粘質土系であり、遺物の出土も僅少であった。ところが、第V層以下では砂質を帯び、所によつては砂礫を噛むようになり、弥生土器の出土が夥しくなつた。発掘当初は、これらは単なる弥生の包含層と考えられたが、その全体的な位置関係および埋土の状況からして、Loc.36から続くS R 2の延長と判断された。

Eトレンチ全体がS R 2の中央部になるものと推定され、肩部への立ち上がりは確認できなかつた。弥生土器の出土は非常に多く、特に、第V・VII・IX層からの出土が著しかつた（38～174）。時期的にも前期から後期に至るまで幅が広い。但し、前期III段階以前および後期II段階以降の遺物は僅少であった。また、各種の石器（175～255）も出土している。

かかる状況から判断すると、弥生時代に機能したS R 2の埋土は、セクション図での第V層から第IX層までと考えられる。

5. まとめ

Loc.35Bにおける主要な弥生遺構はBトレンチのS T 1と、Eトレンチで検出されたS R 2である。

S T 1は、中期II段階の住居址と考えられ、田村遺跡群内では比較的例の少ない中期中葉遺構の1つである。中期後半の住居址は、当地点より約400m北方にある正善遺跡でも発見されており、この一帯に中期集落が存在していたものと推定される。S R 2出土の多くの中期遺物も、その可能性を強くさせるものである。

ところで、S R 2からの出土遺物は前期から後期まで広範囲にわたつておらず、中期に限らず弥生時代を通じて、当地点周辺に集落が形成されていたことを示唆している。また、別の視点から言えば、かかる自然流路の存在そのものが、弥生集落形成のため的一大要因となつていたであろうことも疑いない。

第1表 積穴住居址計測表

挿図番号	遺構番号	平面形	規模 (m)	主軸方向	柱穴	面積 (m ²)	施設	備考
第4図	S T 1	円形	6.10	—	19	(29.21)		

第2表 土塙計測表

挿図番号	遺構番号	平面形	規模(m)			長軸方向	断面形	備考
			長径	短径	深さ			
第5図	S K 1	不整長方形	1.20	0.28	0.10	N - 3° - W	逆台形	
"	S K 2	—	3.96	—	0.25	—	"	
"	S K 3	円形	1.12	—	0.37	—	"	

第3表 遺構出土土器観察表

挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手 法	備考
1	S T 1	壺	17.4 (5.8) — —	口縁部外面に扁平な粘土帯を貼付し、刻目を施す。			
2	"	"	30.8 (2.9) — —	口縁部は下方に拡張。口唇部に斜格子文。			
3	"	"	16.2 (5.9) — —	大きく外反する口縁部を有す。口唇部は幅広く凹状を呈し、下端に刻目を施す。			
4	"	"	22.2 (4.5) — —	口縁部は滑らかに外反し、幅2cmの粘土帯を貼付。口唇部は広い面をなし下垂する。			
5	"	"	15.4 (8.8) — —	頸部から口縁部にかけてわずかに外反する。頸部には7条のない凹線を有す。口縁端部は内外に肥厚し、口唇部には2条の凹線を施す。			
6	"	"	7.0 (12.5) — —	やや外方に立ち上がる長頸壺の口頸部。	外面ハケ調整。 内面ナデ調整。		
7	"	"	— (11.2) — 4.4	上胴部で内側に屈曲する壺である。	内面ナデ調整。	底部から胴部にかけて黒斑を有す。	
8	"	"	— (7.8) — 8.4	上げ底状の底部。	"	底部から下胴部にかけて黒斑を有す。	

挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm) 口徑 器高 胸徑 底径	形態・文様	手法	備考
9	S T 1	壺	—— (5.5) —— (8.0)	上げ底気味の底部。	内面が全体的に剥離しており、調整観察不能。	
10	"	"	—— (9.2) —— 6.3		外面ナデ調整。	底部から下胸部にかけて黒斑を有す。
11	"	"	—— (17.8) —— 9.2	上げ底状の底部。		
12	"	甕	14.9 (8.3) —— ——	口縁部滑らかに外反。 口唇部は面をなす。	口縁部外面横方向の強いナデ調整。	
13	"	"	16.2 (5.0) —— ——	頸部から強く屈曲して外反する。 口唇部は幅広い面をなす。		
14	"	壺	—— (2.9) —— 3.0			
15	"	"	—— (2.9) —— 6.6	やや上げ底気味の底部。		外底部に黒斑を有す。
16	"	"	—— (3.5) —— 5.5			胸部外面に 5cm幅の黒斑 を有す。
17	"	"	—— (4.1) —— 5.3	上げ底状の底部。	内面に下方から上方へ向かうへラ削り。	内面に黒斑を有す。
18	"	"	—— (3.6) —— 5.5	"		外底部全面に 黒斑を有す。
19	"	"	—— (4.9) —— 4.0			
20	"	"	—— (4.6) —— 5.5		外面剥離が激しく、調整観察不能。	
21	"	"	—— (6.3) —— 5.0		内面ナデ調整。	
22	"	"	5.8 —— —— 6.0	上げ底状の底部。	"	
23	"	小型土器	9.4 9.0 —— 4.8	小型の甕。 底部を外方につまみ出したような 形を呈している。		胸部外面に黒 斑を有す。

挿図番号	遺構番号	器種	法量 口径 器高 底径 (cm)	形態・文様	手法	備考
24	S T 1	小型土器	全長(4.1) 径 1.9	使途不明土製品。		
25	S T 2	甕	12.1 (4.3) — —	口縁部は丸く外反し、口唇部は外傾する面をなす。		
26	"	"	14.7 (5.0) — —		口縁端部を上方へつまみ上げて横方向にナデる。頸部内面直下より横方向のヘラ削り。	
27	"	"	— (3.7) — 5.4			底部に黒斑を有す。
28	"	"	— (2.8) — 5.2			内面に黒斑を有す。
29	"	"	— (4.0) — 6.5		外面ハケ調整。	底部から下胴部にかけて黒斑を有す。
30	"	不明	14.6 (4.8) — —	口径が著しく小さい。	内外面剥離が激しく、調整観察不能。	高杯か。
31	S D 1	壺	12.2 (9.3) — —	直線的にゆるく外反する頸部に外反した口縁部がつく。口縁端部を上下に拡張させ、口唇部に2条の凹線文を施す。	頸部の上に粘土を継ぎ足して口縁部を成形している。 外面ハケ調整。	擬口縁を觀察できる。
32	"	"	— (2.7) — 6.0	断面台形を呈する上げ底状の底部。		
33	"	高杯	— (3.2) — 13.8		内面のヘラ削りの方向が(右→左)である。普通は(左→右)であり、壺の口縁部とするよりも高杯の脚部とした方が妥当であろう。	
34	"	甕	10.6 (7.3) — —	口縁部は「く」の字状に外反、口唇部は面をなす。		胸部外面に黒斑を有す。
35	S X 1	"	12.5 (5.4) — —	丸く外反する口縁部を有し、外面に粘土を不規則な幅で貼付しており、その部分が肥厚している。	口唇部は横方向の強いナデ調整により凹状をなす。内面は右から左へ強く削っている。	内面に黒斑を有す。
36	"	"	12.0 (7.4) — —	口縁部は強く外方に屈曲し、上方に拡張している。 口唇部に2条の弱い凹線有り。	外面右下りのハケ調整を施し、上胴部はナデ消している。 内面のヘラ削りの有無は不明。	
37	S K 3	"	— (6.6) — 4.9	上げ底状の底部。		
38	S R 2	壺	43.1 (10.0) — —	大型壺。口縁部は強く外反し、端部は面をなす。口頸間に1条のヘラ描沈線を有す。		口縁部内面および上胴部に黒斑を有す。

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm)	口径器高 胸径底径	形態・文様	手法	備考
39	S R 2	壺	11.2 (4.0) — —	口縁部はあまり発達していない。 口縁端部は丸くおさめる。 頸部外面に5条のヘラ描沈線を有す。			
40	"	"	15.6 (6.7) — —	「く」の字状に外反する口縁部。 口縁端部に刻目を有し、口唇部は外傾する面をなす。頸部に3条のヘラ描沈線、その下に刻突文を配す。			
41	"	"	20.8 (5.7) — —	大きく外反する口縁部外面に1cm幅の粘土帯を貼付。口唇部は凹状をなし、上下に刻目を配す。外面5条のヘラ描沈線、上から2条と3条の間及び4条と5条の間に列点文を配す。			
42	"	"	21.3 (8.1) — —	凹状をなす口唇部の上下に刻目を配す。頸部外面に7条のヘラ描沈線帯を有し、その下に双線による孤文を2列、さらにその下にヘラ描沈線を2条認める。	口唇部横方向の強いナデ調整。		
43	"	"	16.0 (13.5) — —	口縁部は頸部から滑らかに外反。 口縁端部は面をなし、下端に刻目を配す。上胸部に2条のD突帯を有す。		脇部外面に擦痕あり。	
44	"	"	28.4 (4.7) — —	薄手式土器。口唇部下端に刻目。 口縁外面にD突帯。頸部外面にD突帯3条よりなる上弦の重孤文を有す。	口唇部の刻目は右方向からハケ状原体によって施されている。 内面ナデ調整。		
45	"	"	17.4 (8.4) — —	滑らかに外反する口縁部を有し、 口唇部は外傾する面をなす。頸部に9条のヘラ描沈線を施し、その上に2条の突帯Aを貼付している。	突帯A貼付によって、ヘラ描沈線2条は見えなくなっている。 内外面ハケ調整。	突帯の胎土は脇部と同じ。	
46	"	"	11.4 (9.0) — —	滑らかに外反する口縁部。 口縁端部は面をなす。 頸部に15条のヘラ描沈線と4条のA突帯。			
47	"	"	14.4 (7.2) — —	口縁部は滑らかに外反。口縁部外面に扁平な粘土帯を貼付。口縁部内面に2条、外面に3条のA突帯。頸部突帯間に2~3条のヘラ描沈線。	外面縦方向のハケ調整。 内面横方向のハケ調整。	内面の突帯は一部つながっている。	
48	"	"	22.8 (9.2) — —	口縁部は大きく外反。頸部に3条の貼付突帯A。突帯間に櫛描直線文を施すが、磨耗が激しい。 口縁部内面にも突帯A貼付。	口唇部は横方向の強いナデ調整によって凹状を呈す。内外面ハケ調整。	田村式土器の典型。	
49	"	"	21.6 (10.1) — —	直線的に立ち上がった頸部から滑らかに外反する口縁部を有す。口唇部下端に刻目。口縁部内面に2条のA突帯、頸部外面に3条のA突帯。突帯間及びその上下に沈線。	口唇部は横方向のナデ調整により上下にやや肥厚している。 沈線施文部位に爪による圧痕を不規則に施す。	大簇式土器一般の胎土とは異なり、乳白色を呈す。	
50	"	"	22.2 (9.0) — —	滑らかに外反する口縁。頸部外面3条1单の櫛描直線文を4帯、その間にA突帯。口唇部は凹状をなし、上下に刻目。	口唇部は横方向の強いナデ調整により凹状をなす。内面に2条の突帯を貼付し、その上からハケ状原体により押庄を加えている。	突帯と脇部の胎土とは全く異なる。	
51	"	"	28.1 (6.6) — —	頸部から滑らかに外反する口縁部。 頸部外面に櫛描直線文を施し、その下位にA突帯。口唇部の上下に刻目。	口縁外面に断面三角形の粘土帯を貼付し、厚い口唇部をつくる。		
52	"	"	25.2 (4.7) — —	滑らかに外反する口縁部で、外面に粘土帯を貼付。口唇部上下端に細い刻目。	口唇部は横方向のナデ調整により凹状をなす。内面横方向、外面縦方向のハケ調整。		
53	"	"	27.0 (11.8) — —	滑らかに外反する口縁部。口唇部は凹状をなす。口縁部内外面刺突文。頸部外面には突帯Aを5条貼付、その間に櫛描直線文。	文様帶と口縁間は縦方向のハケ調整。口縁部下は横方向のナデ調整によってハケは消えている。中期土器には珍しく、粘土帯接合部がみられる。	突帯と脇部の胎土が異なる。	

挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口径 器高 脣径 底径	形態・文様	手法	備考
54	S R 2	壺	17.8 (4.0) — —	口唇部は面をなし、ハケ状原体による刻目を施す。口縁内面にハケ原体による圧痕、その上に細いヘラ描沈線。その外側に櫛描波状文。	口縁端部に粘土帯を接続することによって、外反する口縁部をつくっている。		
55	"	"	15.1 (6.1) — —	貼付口縁。口唇部はハケ状原体による刻目。口縁部内面も同原体による刻目を配し、その上を3条の沈線が走る。			
56	"	"	15.4 (7.0) — —	頸部から滑らかに外反する口縁部で2cm幅の粘土帯を貼付。口唇部は面をなし、斜格子文を配す。			
57	"	"	16.2 (6.0) — —	やや外反気味に立ち上がる頸部から口縁部は強く外反。口唇部上下にハケ状原体による刻目。頸部に櫛描波状文。	口縁外面は幅2cmの粘土帯貼付。口唇部は横方向のナデ調整により、やや凹状を呈す。		
58	"	"	24.4 (7.9) — —	口縁部外面に粘土帯を貼付して肥厚させる。口唇部がやや下垂。	貼付粘土帯の上に指頭圧痕が顕著。外面ハケ調整。		
59	"	"	15.6 (3.8) — —	直立気味の頸部は粘土帯を接合し、外反した口縁部をつくる。口縁端部は凹状をなし、若干下垂気味。	口縁端部に横方向の強いナデ調整。外面ハケ調整後に粘土帯貼付。		
60	"	"	21.4 (9.9) — —	口縁部は大きく外反し、外面に粘土帯を貼付。頸部に円形浮文を貼付し、その上を刺突。その下には櫛描直線文。	粘土帯貼付の際のヒダ状の圧痕が残る。口唇部は横方向の強いナデ調整により凹状をなす。		
61	"	"	18.8 (6.2) — —	強く外反する口縁部を有し、口唇部は面をなし。	口縁部外面に幅2cmの扁平な粘土帯を貼付する。		
62	"	"	13.9 (7.8) — —	滑らかに外反する口縁部を有し、口縁部外面に粘土帯を貼付。口唇部は凹状を呈し、上端に刻目を施す。	口唇部に横方向の強いナデ調整。口縁部内外面ナデ調整。頸部外面綫方向のハケ調整。		
63	"	"	17.6 (5.7) — —	滑らかに外反する口縁。口唇部は凹状をなし、わずかに肥厚。	幅3cmの粘土帯を頸部に貼付して口縁を形成。		
64	"	"	13.3 (5.7) — —	漏斗状に外反する口縁部を有し、外面粘土帯貼付。口唇部は外傾する面をなし、下方にやや肥厚する。	貼付部には指頭圧痕が著しい。	外面が焼けている。	
65	"	"	13.4 (3.9) — —	口縁部外面に扁平な粘土帯を貼付。端部をつまんで水平に近く折り曲げている。口唇部は丸くおさめる。	外面横方向のハケ調整。		
66	"	"	18.0 (5.5) — —	滑らかに外反する口縁。外面幅2cmの貼付口縁。口唇部は面をなし。			
67	"	"	17.3 (6.3) — —	粘土帯貼付口縁。口唇部は凹状をなし、わずかに下垂する。	口唇部横方向の強いナデ調整。		
68	"	"	20.0 (6.4) — —	口縁部は大きく外反し、外面に幅1cmの粘土帯を貼付。口唇部は凹状をなし。	"		

挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm) 口徑 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
69	S R 2	壺	21.1 (12.5) — —	長い頸部から滑らかに外反する口縁部を有す。口縁部外面に幅2.5cmの粘土帶貼付。	内外面共に調整観察不能。	
70	"	"	17.8 (13.0) — —	滑らかに外反する口縁部を有し、口縁部外面に粘土帶を貼付。口唇部は凹状をなす。	外面にヘラ磨きを認める。 口頸部内面横方向のハケ調整。 上胴部内面に指頭圧痕著。	
71	"	"	17.0 (5.0) — —	薄手で大きく外反する口縁部をもつ。端部は丸くおさめ、下端は刻目を有す。	内外面横方向のナデ調整。	薄手式土器。
72	"	"	28.6 (2.7) — —	強く大きく外反する口縁部。口唇部は面をなし、下端に刻目。口縁端部近くに突帯B、頸部近くに突帯Dを貼付。		"
73	"	"	17.8 (3.8) — —	口縁部は強く外反、端部は厚い。面をなす口唇部の下端に刻目。口縁部外面に突帯D、その上下に櫛描直線文。		"
74	"	"	14.8 (3.7) — —	口縁部は強く外反、外面を厚くつくり、端部下端に刻目。刻目直下に突帯Bを貼付。		"
75	"	"	15.6 (3.0) — —	"		"
76	"	"	13.6 (7.9) — —	口頸部はわずかに外反して立ち上がる。 口唇部は外傾する面をなす。	口縁部上端外面には扁平な粘土帶を貼付し、指頭圧痕が残る。	
77	"	"	14.2 (7.4) — —	球形に近い胴部をもつものと考えられ、口縁部は頸部から滑らかに外反。 上胴部に3条のC突帯。	口縁部外面に幅1cm余りの粘土帶を貼付。	
78	"	"	17.3 (4.6) — —	口縁部は滑らかに外反。 口唇部は面をなし、下端に列点文状の刻目。	口縁部外面に幅1.5cmの扁平な粘土帶を貼付。	
79	"	"	19.0 (7.6) — —	滑らかに外反する口縁部。幅広い口唇部は凹状をなし、ハケ状原体で縦及び斜め方向の圧痕を施す。	口縁部外面に幅2cmの粘土帶を貼付。端部を指頭で強くおさえ、外方につまみ出す。	
80	"	"	15.6 (10.9) — —	直線的に外方に立ち上がる頸部に外反する口縁部がつく。口唇部は面をなす。	口縁部に粘土帶貼付。 内面上胴部以下左から右へのヘラ削り。	
81	"	"	9.6 (4.0) — —	外反気味に立ち上がる頸部から口縁部は短く外方に屈曲。 口縁下に双孔。頸部下端に刺突文。	口縁部外面に扁平な粘土帶貼付。 穿孔は焼成前。	
82	"	"	(3.8) — 9.4	直線的に外方にのびる口縁部。 端部は丸く仕上げる。		
83	"	"	23.0 (5.4) — —	口縁部は滑らかに外反。口唇部は凹状を呈し、下端に刻目を配す。	口縁部外面に粘土帶貼付。 口唇部は横方向の強いナデ調整。	

挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
84	S R 2	壺	12.7 (5.5) — —	外反して立ち上がる口縁部。端部は肥厚。口唇部に2条の凹線文。頸部内面が段状をなす。	口縁部外面に粘土帶貼付。口縁部内外面ナデ調整。	口縁部に黒斑を有す。	
85	"	"	17.6 (5.0) — —	強く外方にカーブする口縁部。口唇部は厚く、3条の凹線文、上下端はわずかに拡張。			
86	"	"	27.8 (9.8) — —	大型壺の口頸部。口縁部外面は肥厚し、口唇部には2条の凹線文。			
87	"	"	33.4 (12.0) — —	口縁部が強く外反。口唇部に半截竹管による刺突文を2列配す。(ほぼ、同方向なるも、5~7個毎に逆方向)。			
88	"	"	14.9 (5.8) — —	外方に強くカーブする口縁部。口唇部凸状。口縁部外面にハケ状工具によるやや長目の刻目。	口唇部は横方向の強いナデ調整。		
89	"	"	19.8 (6.9) — —	滑らかに外反する口縁部。口唇部は面をなし、下端にハケ状原体による刻目。	外面縦方向のハケ調整の上を部分的に横方向のヘラ磨き。		
90	"	"	16.6 (5.8) — —	頸部から口縁部へ滑らかに外反。端部は面をなし、ハケ状原体による刻目。頸部に列点文。	口縁部内外面横方向のナデ調整。		
91	"	"	13.9 (7.0) — —	球形に近い胴部から外反する口頸部。口唇部は外傾する面をなし、下端にヘラ状原体による刻目。	口唇部横方向のナデ調整。 頸部外面縦方向、内面横方向のハケ調整。		
92	"	"	11.2 (9.3) — —	胴部中位に最大径。口縁部は頸部から滑らかに外反。口唇部は凹状をなす。	口唇部横方向の強いナデ調整。 口縁部内外面横方向のナデ調整。		
93	"	"	10.6 (6.8) — —	滑らかに短く外反する口縁部。口唇部は面をなす。全体的に器壁が厚い。	上胴部内面左から右へのヘラ削り。		
94	"	"	12.4 (5.8) — —	直立気味に立ち上がる頸部から短く外反する口縁部。口唇部は上下にわずかに拡張され、面をなす。			
95	"	"	18.0 (6.5) — —	滑らかに外反する口縁部を有し、口唇部は面をなす。			
96	"	"	13.2 (5.3) — —	滑らかに外反する口縁部を有し、端部は凹状をなす。	口唇部横方向の強いナデ調整。		
97	"	"	23.2 (6.2) — —	滑らかに外反する口縁部。口唇部は外傾する面をなす。	口縁部外面は縦方向のハケ調整の上を横方向に強くナデしている。		
98	"	"	24.0 (10.0) — —	大きく外反する口縁部を有し、器壁は厚い。口唇部は凹状をなす。		大型壺。	

捕図番号	遺構番号	器種	法量 器高 口径 底径 (cm)	形態・文様	手法	備考
99	S R 2	壺	9.6 (4.6) — —	口縁部は強く外反。 口唇部は凹状をなす。	口唇部横方向の強いナデ調整。	
100	"	"	15.6 (6.2) — —	磨耗が激しいが、外傾する口唇部に2条の凹線をわずかに認める。		
101	"	"	15.2 (7.3) — —	口唇部は下方に拡張され、沈線化した凹線文が2条入る。		
102	"	"	— (19.6) — 5.9	上胴部に櫛描波状文2帯。 原体は5条で右廻り、不連続点有り。		長胴の壺。
103	"	"	— (1.8) — 7.7	やや上げ底気味の底部。 薄手。		
104	"	"	— (3.6) — 8.0			薄手式土器。
105	"	"	— (5.3) — 7.8			
106	"	"	— (4.6) — 4.4	やや上げ底気味の底部。		
107	"	"	— (4.5) — 5.2	"		胸部の一部に黒斑。
108	"	"	— (5.0) — 8.6	"	外面ハケ調整。 擬口縁を観察できる。	下胴部に黒斑。
109	"	"	— (3.8) — 8.8	上げ底気味の底部。		
110	"	"	— (4.1) — 7.0	わずかに外に張り出した底部。.		胸部内面が煤けている。
111	"	"	— (4.1) — 9.5	厚い底部。	擬口縁の一部が観察できる。	
112	"	"	— (5.4) — 13.4	"	接合部で剥離している。	
113	"	"	— (6.8) — 9.2	上げ底状の底部。		内面に黒斑。

挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
114	S R 2	壺		— (6.3) — 7.2		内外面とも磨耗。	
115	"	"		— (6.1) — 4.0			底部内外面に黒斑。
116	"	"		— (5.2) — 11.6			
117	"	"		— (9.3) — 8.0		外面ハケ調整の上をナデ調整。 底部と胴部との接合部を明瞭に観察できる。	
118	"	"		— (9.4) — 9.0		内外面とも調整観察不能。	
119	"	"		— (6.0) — 8.8	上げ底状の底部。		
120	"	甕		— (7.5) — 7.6	上げ底気味の底部。	内外面ナデ調整。	
121	"	壺		— (7.6) — 8.8		外面器表の荒れがひどく、調整観察不能。	
122	"	"		— (7.1) — 6.8	上げ底気味の底部。		
123	"	"		— (6.9) — 8.8	上げ底状の底部。		外底の一部及び下胴部に大きな黒斑。
124	"	"		— (11.1) — 8.8		内面指頭によるナデ調整が著しい。	胴部下端に黒斑。
125	"	"		— (7.2) — 5.7		外面器表が荒れており、調整観察不能。	
126	"	"		— (8.5) — 8.4	上げ底状の底部。	内外面とも器表磨耗。	
127	"	"		— (6.7) — 9.8		内外面剥離が著しい。	
128	"	"		— (6.1) — 8.2			胴部下端に黒斑。

挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm) 口徑 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
129	S R 2	壺	— (4.8) — 8.0			底部外面に黒斑。
130	"	"	— (11 1) — 7.8			下胸部と底部の一部に黒斑。
131	"	"	— (5.9) — 6.5	上げ底状の底部。	内外面とも器表磨耗。	
132	"	"	— (9.3) — 5.8		外面わずかにハケ調整が認められる。	胸部外面は煤けている。
133	"	"	— (13.1) — 7.0	上げ底状の底部。	内外面調整観察不能。	
134	"	"	— (5.9) — 8.8		"	
135	"	"	— (7.3) — 9.5			底部内面に黒斑。
136	"	"	— (13.1) — 9.2			下胸部に黒斑。
137	"	"	— (6.8) — 10.0			
138	"	"	— (6.1) — 13.8		内外面磨耗。	
139	"	甕	14.5 (10.1) —	滑らかに外反する口縁部。 口唇部は外傾する面をなし、下端にハケ状工具による刻目。 上胸部に突帯B 2条。	口頸部外面縦方向のハケ調整。 胸部外面縦及び横方向のハケ調整。 口縁下をハケ調整後に、横に強くナデる。	
140	"	"	18.1 (12.7) —	口縁端部は外傾する面をなし、下端が部分的にわずかに肥厚。 上胸部に突帯C。	口縁端部の肥厚はつまみ出しによるものか。 胸部内面板状工具による擦痕あり。 外面ハケ調整。	
141	"	"	26.1 (7.4) —	口縁部緩やかに外反、端部に刻目。	擬口縁を観察できる。	繩文系の延長上に位置付けられる新段階の甕。
142	"	"	13.1 (4.5) —		口縁端部つまみ上げ。 内面頸部直下よりヘラ削りあり。	
143	"	"	14.8 (4.5) —	跳ね上がり口縁。	口縁端部をつまみ上げて、横方向に強くナデる。内面頸部直下より左から右へのヘラ削り。	

插図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
144	S R 2	甕	15.3 (4.7) — —	口縁部「く」の字状に外反。 上下に拡張された幅広い口唇部に 2条の凹線文。	頸部内面直下より右から左へのヘラ削りあり。		
145	"	"	14.0 (4.1) — —	口縁部は「く」の字状に屈曲。 口唇部はやや上下に肥厚し、凹状 を呈す。口縁部内面が段状を呈す。	口唇部に横方向のナデ調整。 頸部内面直下に下から上へのヘラ削りあり。		
146	"	"	12.9 (7.2) — —	口縁部は一旦水平に開き、上方に 立ち上がる。内面屈曲部は稜をな す。口唇部1条の凹線文。	口縁部内外面横方向のナデ調整。 胴部外面ハケ調整。		
147	"	"	17.3 (7.6) — —	口縁部は内面に稜をなして水平に 近く屈曲し、跳ね上がり口縁を呈 す。 口唇部に3条の凹線文。	上胴部内面以下右から左へのヘラ削り。		胸部中位に最大径を有する ものか。
148	"	"	— (3.2) — 6.2	上げ底状の底部。 器壁が著しく薄い。			胸部内面が煤けている。
149	"	"	— (3.1) — 5.5				"
150	"	"	— (4.0) — 6.2				"
151	"	"	— (5.8) — 6.5		内面下から上方向へのヘラ削り。 底部内面に指頭圧痕顯著。		胸部外面火を受けて変色、 内面煤けている。
152	"	"	— (6.2) — 6.0				
153	"	"	— (6.1) — 5.0	上げ底気味の底部。	外面ヘラ磨き。 内面指頭による強いナデ調整。		
154	"	"	— (6.6) — 7.8	上げ底状の底部。			
155	"	高杯	— (8.8) — 13.8	脚部に鋭利な工具による沈線6条。 その下に縦方向の沈線。 裾端部はやや凹状。	裾端部に横方向の強いナデ調整。 内面は荒れがひどい(ヘラ削りが あったものか)。		縦方向の沈線 は3条1単位 か。
156	"	"	— (8.8) — 7.2	裾部に7条のヘラ描沈線。	内面にしづり目あり。		
157	"	"	— (3.0) — 10.6	脚端部は凹状をなす。	内面右方向へのヘラ削り。		
158	"	"	— (3.7) — 12.0	裾部に三角形の透かしを有す。	透かしは外面から入れている。 裾端部外面をつまみ、横方向のナ デ調整。		

挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口径 高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
159	S R 2	高杯		— (5.5) — 5.4	器壁が厚い。 接合部で欠損している。		
160	"	"		22.3 (3.3) —	外面に5条の擬凹線。 口唇部は面をなす。		
161	"	"		19.4 (4.1) — —	杯部立ち上がりは稜をつくらず滑らかにカーブする。 端部は外傾する面をなす。	口縁部横方向のナデ調整。 内面ハケ調整を横方向に施した後、中心部に向かって調整。	
162	"	"		26.0 (3.2) —	口縁部は内傾に立ち上がり、端部は面をなす。外面に2条の凹線文を認める。		
163	"	鉢		— (7.0) 4.1 7.7	脚付鉢。 外方にしっかりふんばった脚を有す。		
164	"	"		— (7.4) — 7.0	脚付鉢。 脚端部は外反気味に開く。		
165	"	"		— (4.8) — 4.2	上げ底状の底部。		下胴部から底部外面にかけて黒斑。
166	"	"		— (5.2) — 5.0	指でつまみ出したような脚状の底部。		
167	"	"		— (5.5) — 5.8	台付鉢。		
168	"	"		— (6.3) — 4.3	底部は断面台形状で、上げ底状を呈す。	底部は指頭によって外方につまみ出している。	製塩土器の可能性大。
169	"	"		— (6.7) — 5.3	脚状を呈する底部。		下胴部から底部外面にかけて黒斑。
170	"	"		— (8.8) — 5.5	断面台形を呈する厚い底部。	胴部外面にハケ調整が残る。	
171	"	小型土器		1.8 3.0 — 1.2	ミニチュア。 手捏土器。		
172	"	"		2.6 3.3 — 1.4	"		
173	"	"		— (2.5) — 2.8	小型土器の底部。		

插図番号	遺構番号	器種	法量 (cm) 口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
174	S R 2	紡錘車	直径 5.2 厚さ 1.1 重量(g) 34.0	土器転用紡錘車。	剥離している部分が粘土帯接合部と考えられる。	

第4表 遺構出土石器観察表

插図番号	遺構番号	器種	計測値 (cm, g) 最大長 最大幅 最大厚 重量	材質	特徴	備考
175	S R 2	石斧	(11.2) 5.9 (2.8) 330.0	緑色片岩	大型蛤刃石斧の下半部欠損品である。残存面はよく研磨されている。	
176	"	"	(14.5) 6.3 4.2 755.0	"	大型蛤刃石斧であるが、基端部が欠損している。後に叩石に転用されたものと考えられ、刃部先端も潰されている。	
177	"	"	(15.7) 7.5 5.2 1115.0	"	大型蛤刃石斧の未製品。整形段階で刃部が欠損したものと考えられる。	
178	"	"	(10.9) 6.1 4.0 422.0	"	大型蛤刃石斧の下半部欠損品である。表面はよく研磨されており、また、短側縁部の一部にも敲打痕が残る。	
179	"	"	6.4 1.7 9.0 15.7	"	小型の局部磨製石斧である。下半が縮小しているのは、使用によって欠損した後も使用した為と考えられる。	
180	"	"	8.0 1.2 2.2 35.0	"	柱状片刃石斧の未製品と考えられ、側縁部を研磨することによって、刃部を作り出そうとしている。	
181	"	"	5.4 1.5 0.7 7.6	粘板岩(頁岩)	柱状片刃石斧の側辺部破片。刃部の形状からして、よく使い込まれていたものと考えられる。	
182	"	"	(9.7) 5.3 2.2 192.5	砂岩	上半部が欠損しており、表面の風化が激しい。短側縁部、長側縁部とともに敲打痕が残る。	磨製。
183	"	"	(13.2) 6.8 3.9 520.0	緑色片岩	大型蛤刃石斧の刃部欠損品である。表面の研磨は全面には及んでおらず、製作段階での欠損の可能性がある。	
184	"	"	(13.2) 5.0 2.6 291.0	"	磨製石斧の刃部欠損品である。全面に研磨が施されているが、側縁部に敲打痕が残っており、欠損後叩石に転用された可能性もある。	
185	"	"	6.2 1.8 0.7 12.0	"	自然石をそのまま利用した両刃の局部磨製石斧である。	
186	"	"	6.2 2.2 1.5 32.0	頁岩	両刃の局部磨製石斧である。基部に横方向の擦痕が残る。	

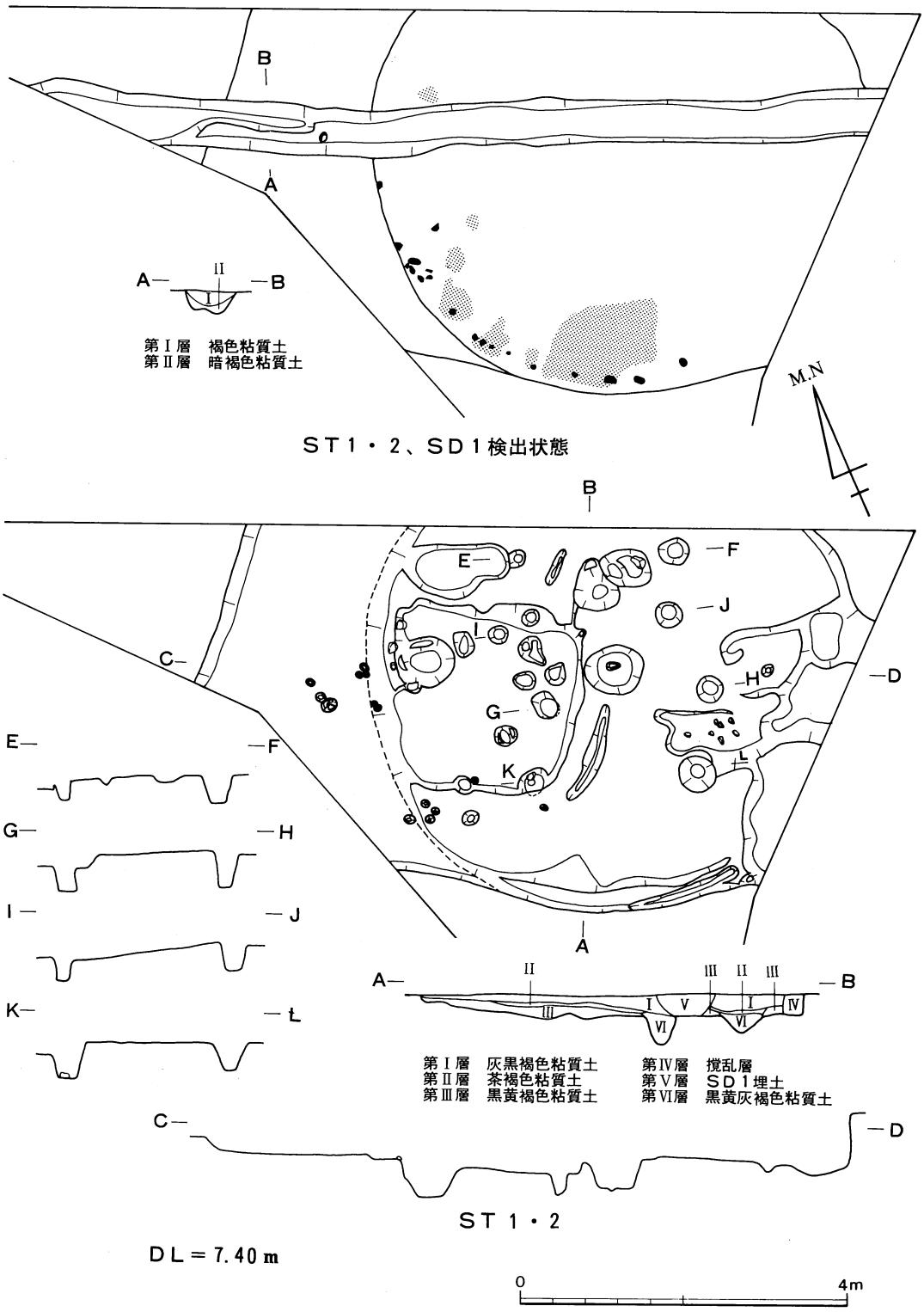
挿図番号	遺構番号	器種	最大長 計測値 (cm, g)	最大幅 最大厚 重量	材 質	特 徴	備 考
187	S K 2	石斧	(6.6) 4.6 2.4 128.0		頁 岩	基端部を欠損しているが、全面を研磨によつて整形している。 刃部に刃こぼれが見られる。	
188	S R 2	"	(5.1) 3.9 7.5 45.0		蛇 紋 岩	扁平片刃石斧の刃部欠損品である。 欠損後も新しく刃部を作り出して使用していいる。	
189	"	"	7.0 4.0 1.5 79.0		"	よく使い込まれた扁平片刃石斧であり、刃部の一方の磨耗が著しい。 長側縁部と短側縁部とに抉りが作られてゐる。	
190	"	"	(5.4) 3.3 1.0 35.0		綠泥片岩	基部を損傷した扁平片刃石斧の未製品と考えられる。 刃部にもシャープさがない。	
191	"	"	8.1 3.3 1.5 65.0		泥 岩	よく使い込まれており、刃部から基部にかけて縱に割れているが、扁平片刃石斧の類であろう。	
192	S T 1	叩 石	(9.8) 5.4 4.7 302.0		砂 岩	棒状の叩石であるが、上半部を欠損している。短側縁部に荒い敲打痕が残る。	床面出土。
193	"	"	(9.3) 4.3 (2.4) 168.0		頁 岩	棒状の叩石で基端部が欠損している。短側縁部のみでなく、長側縁部の一部にも敲打痕が見られる。	
194	S T 2	"	10.6 2.7 1.5 89.0		"	細い棒状の叩石である。 短側縁部に敲打痕を残す。	
195	"	"	7.7 3.9 2.1 97.5		砂 岩	河原石を利用したもので、両短側縁部に敲打痕が見られる。	
196	S R 2	"	12.0 6.4 3.7 436.0		泥 岩	両短側縁部に敲打痕が見られ、表面中央部にも敲打痕を残す。表裏両面とも研磨されており、擦痕も確認できる。	
197	"	"	11.2 49.5 2.7 362.5		砂 岩	棒状の叩石で、両短側縁部に敲打痕が残る。	
198	"	"	12.5 6.5 2.7 302.5		"	河原石をそのまま利用したもので、両短側縁部に敲打痕が残る。	
199	"	"	15.5 4.2 1.5 105.0		粘板岩(頁岩)	短側縁部及び長側縁部の片側に敲打痕が残る。 但し、正面は研磨されており、石斧類の未製品を転用したものと考えられる。	
200	S T 1	"	9.3 8.4 3.4 395.0		砂 岩	河原石を利用したもので、周縁部に若干の敲打痕を残す。	
201	"	"	10.9 8.6 2.6 375.0		"	河原石を利用したもので、正面中央部と長側縁部の一部に敲打痕が見られる。	

挿図番号	遺構番号	器種	計測値 最大長 幅 最大厚 重 (cm, g)	材質	特徴	備考
202	S T 1	叩石	12.4 8.6 2.9 472.0	砂岩	河原石を利用したもので、表裏両面の中央部に敲打痕が見られる。 長側縁部にも2ヶ所に敲打痕を残す。	
203	"	"	10.3 8.3 3.5 428.0	"	河原石を利用したもので、表裏両面の中央部及び周縁部に敲打痕を残す。	
204	"	"	12.0 9.9 4.3 740.0	"	河原石をそのまま利用したものである。周縁部に若干の敲打痕を残すが、あまり使い込まれてはいない。	
205	"	"	7.0 6.5 2.2 155.0	"	円形の河原石を利用したもので、周縁部に若干の擦痕を残すのみである。	
206	"	"	11.0 8.9 3.0 433.0	"	河原石をそのまま利用しており、両短側縁部に若干の擦痕が確認できる。	
207	"	"	9.8 8.0 2.9 360.0	"	河原石を利用したもので、表裏両面及び周縁部に敲打痕を残す。	
208	"	"	9.1 8.6 1.8 320.0	"	河原石をそのまま利用したもので、表裏両面の中央部に敲打痕が見られる。 特に表面の方は、敲打による凹みが激しい。	
209	S T 2	"	9.0 7.5 3.0 323.0	"	表裏両面中央部と周縁部に浅い敲打痕を残すのみである。	
210	S T 1 P 6	"	(8.5) 8.2 3.2 335.0	"	河原石を利用したもので、中央部の敲打痕を残す部分から半分を欠損している。全体の形状は長円形を呈するものと考えられる。 短側縁部にも若干の敲打痕が見られる。	
211	S X 1	"	9.7 7.3 1.8 292.0	"	河原石をそのまま利用したもので、正面中央に敲打痕が見られる。	
212	S R 2	"	6.5 6.5 3.7 217.5	"	円形の河原石をそのまま利用したもので、中央部に若干敲打痕が残るが、磨石の範疇に入れるべきものかもしれない。	
213	"	"	10.5 7.8 2.6 315.0	"	河原石をそのまま利用したもので、正面中央部と周縁部に敲打痕を有す。	
214	"	"	9.5 9.1 4.0 490.0	"	河原石をそのまま利用したもので、中央部に敲打痕が残る。	
215	"	"	9.9 7.9 2.9 355.0	"	よく使い込まれており、表裏両面の凹みも著しく、また、長側縁部の敲打痕も顕著である。	
216	"	"	11.9 9.1 4.0 660.0	"	表面は中央部が凹む一般的な形状を呈しているが、裏面は中央部の擦痕が微弱で、上方に丸い凹みがあり、下方にも横に長い敲打痕が残っている。	

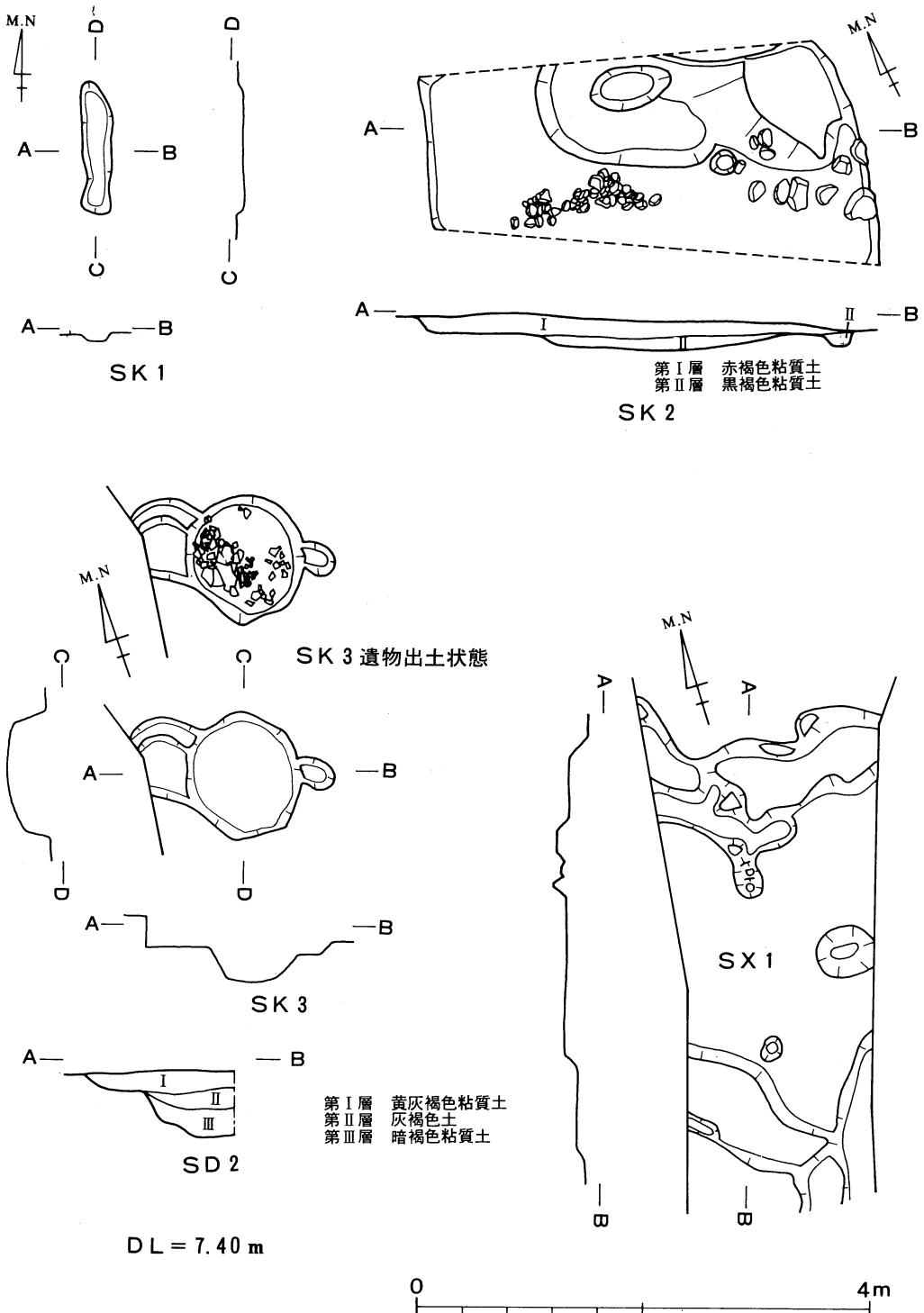
挿図番号	遺構番号	器種	計測値 最大長 最大幅 最大厚 重 (cm, g)	材質	特徴	備考
217	S R 2	叩石	10.9 12.1 5.1 925.0	砂岩	表裏両面の中央部が敲打により凹んでいる。周縁部にも若干の敲打痕が見られる。	
218	"	"	24.7 (15.0) 5.0 2500.0	"	大型の叩石であり、中央部の凹状の使用部を中心半壊している。台石として利用されたものと考えられ、正面の一部に研磨面も有す。	
219	"	"	8.2 6.7 1.8 140.0	"	自然面と剥離面とからなる。周縁部に敲打痕を有す。	
220	S K 3	"	6.9 4.4 1.2 41.0	"	河原石を利用したもので、自然面と剥離面とからなる。あまり使い込まれてはいない。	
221	S T 2	"	9.1 6.3 1.8 134.0	"	自然面と剥離面とからなり、形状は叩石のようであるが、片側の長側縁部を研磨した形跡がある。	
222	"	"	8.5 5.4 1.3 75.5	"	自然面と剥離面とからなる。使用痕は少ない。	
223	S X 1	"	10.8 6.4 1.6 152.0	"	自然面と剥離面とからなる。剥離面側の中央部にも敲打痕が見られる。短側縁部の一方にも敲打痕が確認できる。	
224	S K 3	"	8.8 5.2 1.5 75.0	"	河原石を利用したもので、自然面と剥離面とからなる。長側縁部を中心に若干の敲打痕が見られる。	
225	"	"	9.5 6.5 1.6 110.0	"	河原石を利用したもので、自然面と剥離面とからなる。長側縁部の両端に敲打痕がみられる。	
226	S R 2	"	6.4 7.1 1.8 120.0	"	自然面と剥離面とからなる。孤状の周縁部に敲打痕が残る。	
227	"	"	14.2 8.1 2.2 325.0	"	河原石を打割することにより製作している。周縁部の敲打痕は微弱である。	
228	"	"	8.4 6.2 1.8 100.0	"	自然面と剥離面とからなる。側縁部に敲打痕が残る。	
229	"	"	8.0 7.5 2.0 140.0	"	自然面と剥離面とからなる。よく使い込まれており、周縁部に敲打痕が著しい。	
230	"	"	9.1 4.6 1.1 45.0	"	自然面と剥離面とからなる。周縁部に浅い敲打痕が残る。	
231	"	"	11.0 5.8 2.2 159.0	"	長側縁部に敲打痕が認められ、扁平叩石の欠損品と考えられる。	

挿図番号	遺構番号	器種	計測値 最大長 最大幅 最大厚 重量 (cm, g)	材質	特徴	備考
232	S R 2	叩石	14.6 6.7 1.4 140.0	砂岩	自然面と剥離面とからなる。長側縁部に敲打痕が残っており、扁平叩石の範疇に入るものと考えられる。	
233	"	"	7.3 4.9 1.2 51.0	"	自然面と剥離面とからなる。小型で周縁部の敲打痕は微弱である。	
234	"	"	10.1 8.6 1.5 162.5	"	河原石を利用したもので、自然面と剥離面とからなる。周縁部に敲打痕が残る。	
235	"	"	9.5 8.4 2.2 222.0	"	河原石を利用したもので、自然面と剥離面とからなる。周縁部に敲打痕が見られる。	
236	"	"	11.4 7.4 2.2 189.0	"	自然面と剥離面とからなる。周縁部に浅い敲打痕が残る。	
237	"	"	9.9 7.8 1.4 134.0	"	自然面と剥離面とからなる。周縁部に敲打痕が残る。	
238	S T 1 P 12	砥石	17.5 12.1 7.5 2085.0	"	4面を使用している。そのうち2面は水平でシャープな面をもつが、他の2面は使用によって凹状になっている。	流紋岩かもしれない。
239	S K 3	"	4.6 2.6 1.9 32.0	流紋岩	4面を使用している。小型であるが研磨面は緻密で、よく使い込まれている。	
240	S K 1	石包丁	(5.2) 4.0 0.8 25.0	頁岩	外湾刃両刃である。全体の約半分を欠損しているが、1つの円孔の一部を確認できる。	磨製。
241	S T 1	"	— — 1.3 93.0	"	外湾刃両刃の形状を呈しているが、抉りの位置からして、元は直刃であった可能性もある。	"
242	"	"	5.0 9.5 8.5 65.0	"	打割によって整形した両端に抉りを有する直刃片刃的な石包丁である。背部も直線的に仕上げられている。	"
243	S D 1	"	(7.0) 4.2 8.8 45.0	砂岩	双孔の直刃型の石包丁で、欠損品である。自然面と剥離面とからなるが、全面に研磨が施されている。	
244	S R 2	"	4.5 12.8 0.8 84.0	粘板岩(頁岩)	刃部の片方が若干外湾する両刃の石包丁で、刃部の一部を欠損している。双孔を持つが、両面より穿孔している。背部の一部も研磨によって調整されている。	
245	"	"	(11.8) 4.7 0.9 75.4	緑色片岩	双孔を有する磨製石包丁である。刃部は直刃型の片刃である。背部まで研磨されている。	
246	"	"	(12.0) 4.9 0.7 70.0	頁岩	双孔を持つ直刃型の石包丁である。穿孔の際の敲打痕が両面に見られる。刃部は片刃であるが、よく使い込まれており、刃こぼれが見られ、端部を欠損している。	

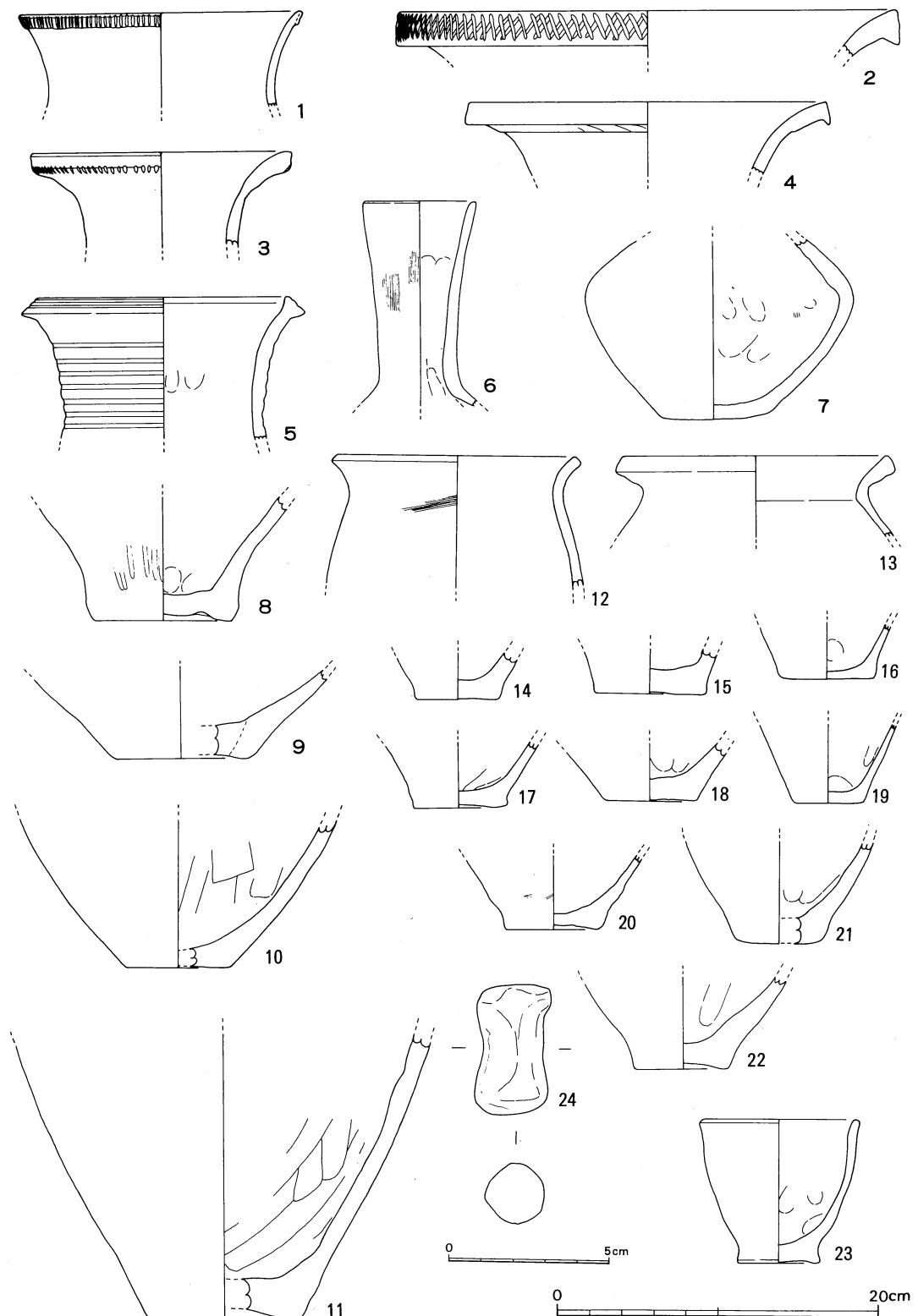
挿図番号	遺構番号	器種	計測値 (cm, g)	材質	特徴	備考
247	S R 2	石包丁	— 6.5 42.0	細粒砂岩	双孔を持つ石包丁で、両側から穿孔されている。端部が欠損しているが、全面研磨されており、刃部は両刃で直刃型である。	
248	"	"	(4.7) 5.5 0.7 27.0	千枚岩	双孔の両刃石包丁の欠損品である。全面が研磨によって調整されている。 背部が外湾しており、刃部は直刃型のものと考えられる。	
249	"	"	(7.4) 5.0 1.3 55.0	泥岩	磨製石包丁の未製品である。 穿孔の際の敲打によって欠損したものと思われる。	
250	S T 1 P 2	石鎌	2.5 1.8 0.4 1.7	サヌカイト	扁平な基式打製石鎌である。基部刃部とも両面から押圧剥離によって調整されている。	
251	S T 1	"	2.0 2.0 0.4	"	平基式石鎌で、刃部・基部とも、両面を押圧剥離によって調整されている。	
252	"	"	3.1 2.3 0.4 2'5	"	平面形は三角形で扁平な平基式打製石鎌である。刃部・基部とも、両面から押圧剥離によって調整されている。	
253	"	"	2.8 1.7 0.3 1.5	"	圓基式の打製石鎌である。刃部・基部とも、両面から押圧剥離によって調整されている。	
254	S R 2	石劍	9.9 3.3 1.3 55.0	千枚岩	表裏両面にしっかりした鎬を有する鉄劍型石劍である。よく研磨されているが、基端部を若干欠損している。断面菱形を呈するが、刃部は意識的に面取りがなされている。	
255	"	紡錘車	直径 5.3 厚さ 0.6 重量(g)17.5	頁岩	石製紡錘車の半損品である。全面よく研磨されており、縁部は稜をなして屈曲する。	



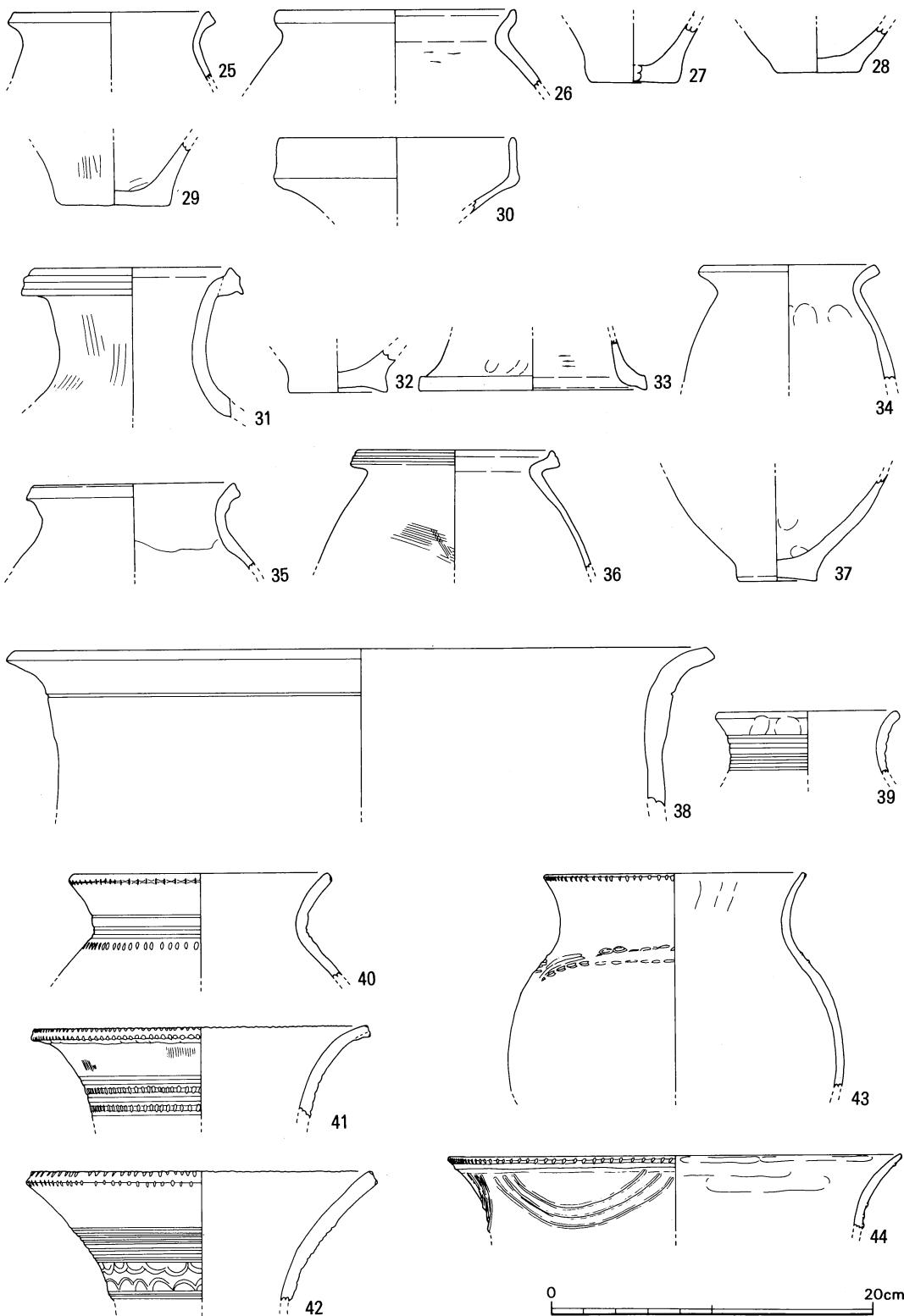
第4図 ST 1・2、SD 1



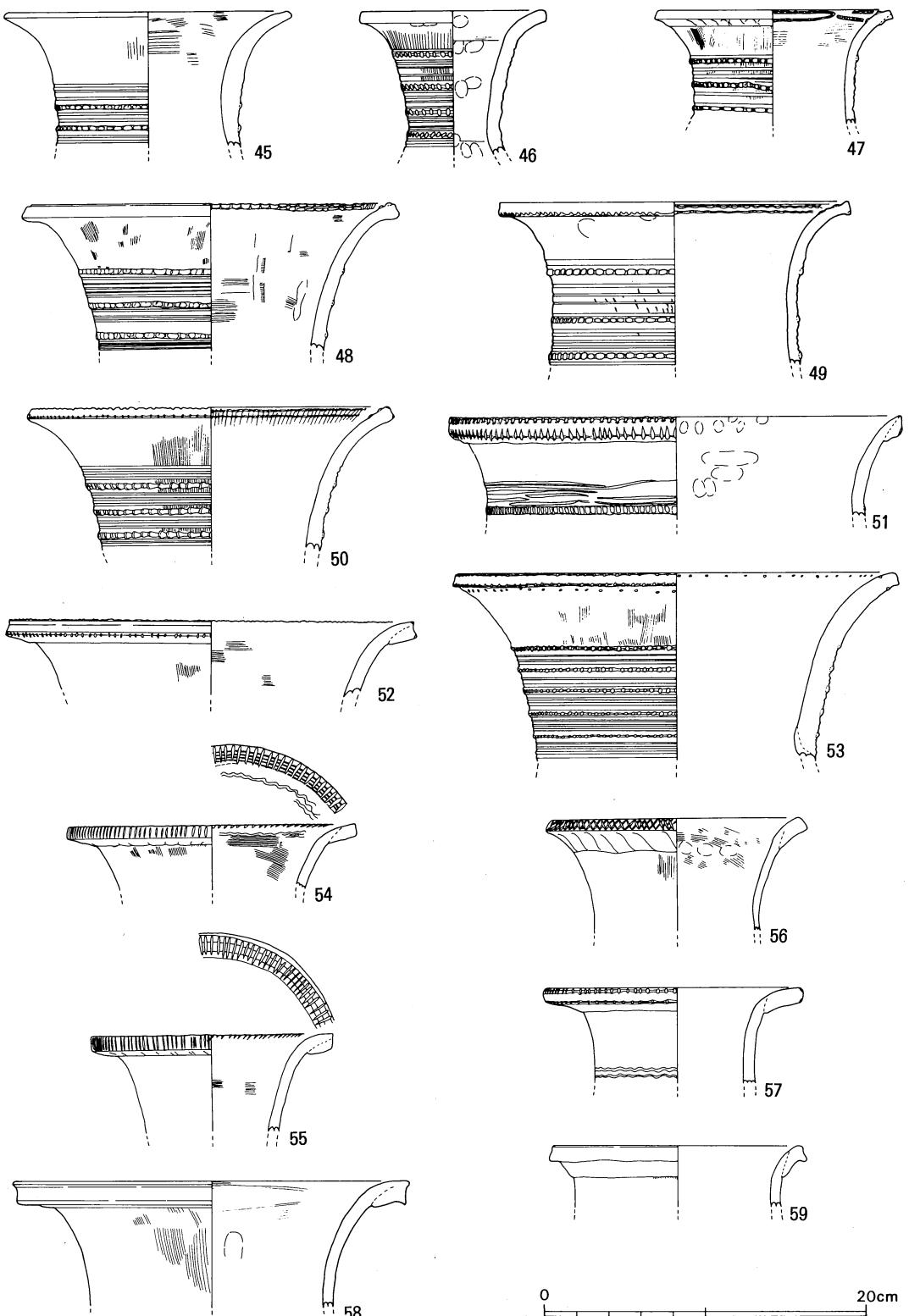
第5図 SK 1~3, SD 2, SX 1



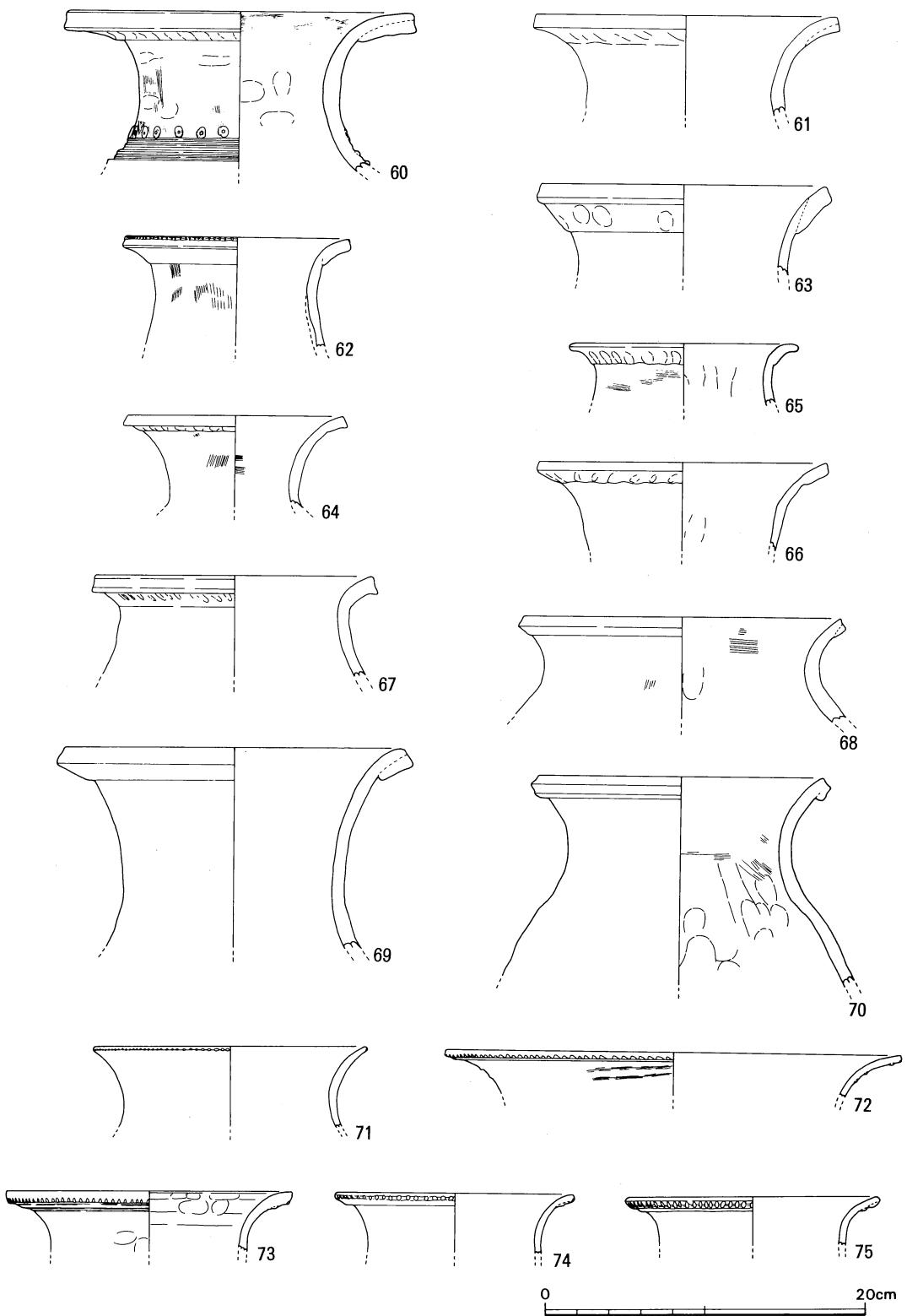
第6図 ST 1 出土遺物



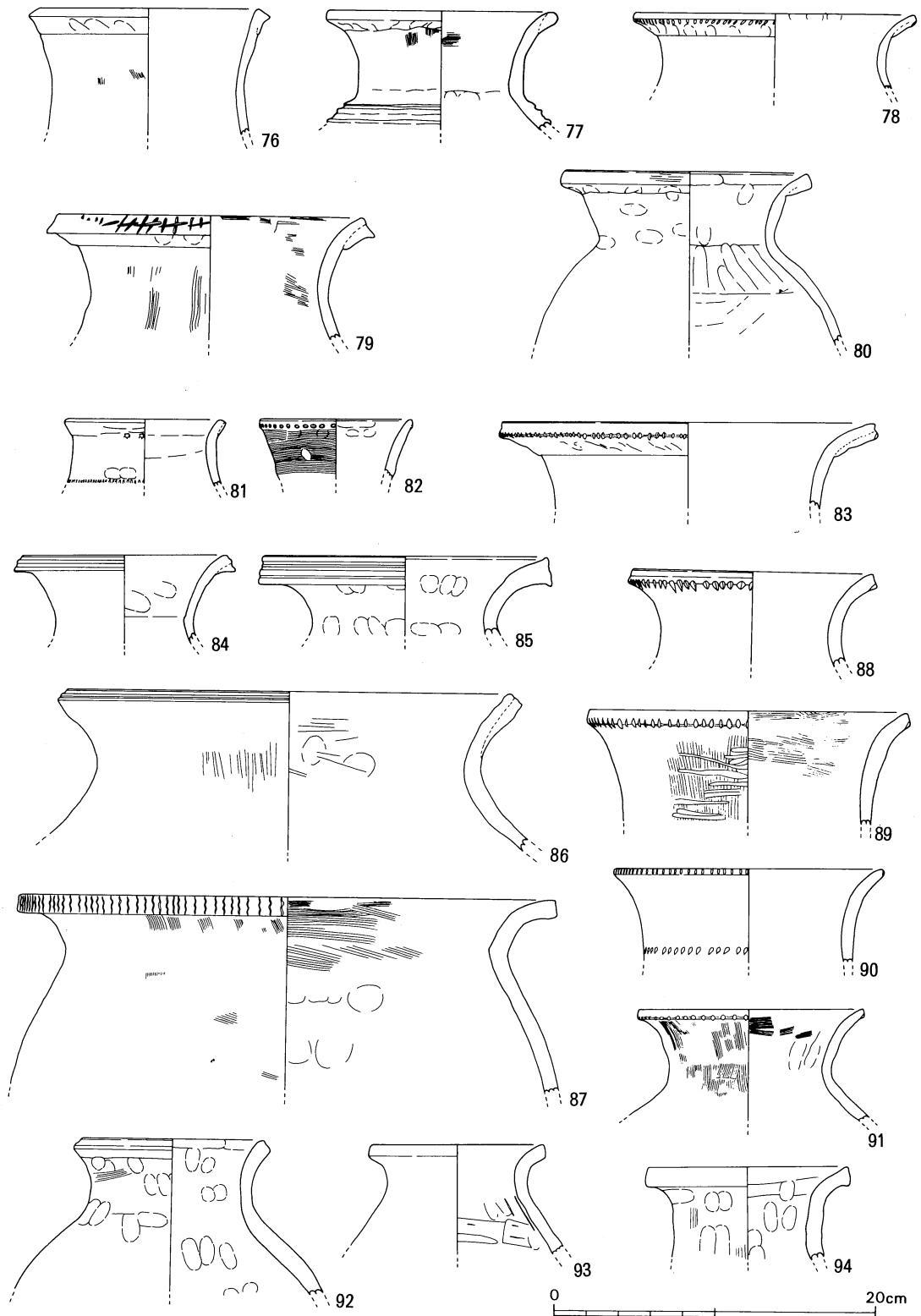
第7図 ST 2、SK 3、SD 1、SX 1、SR 2 出土遺物



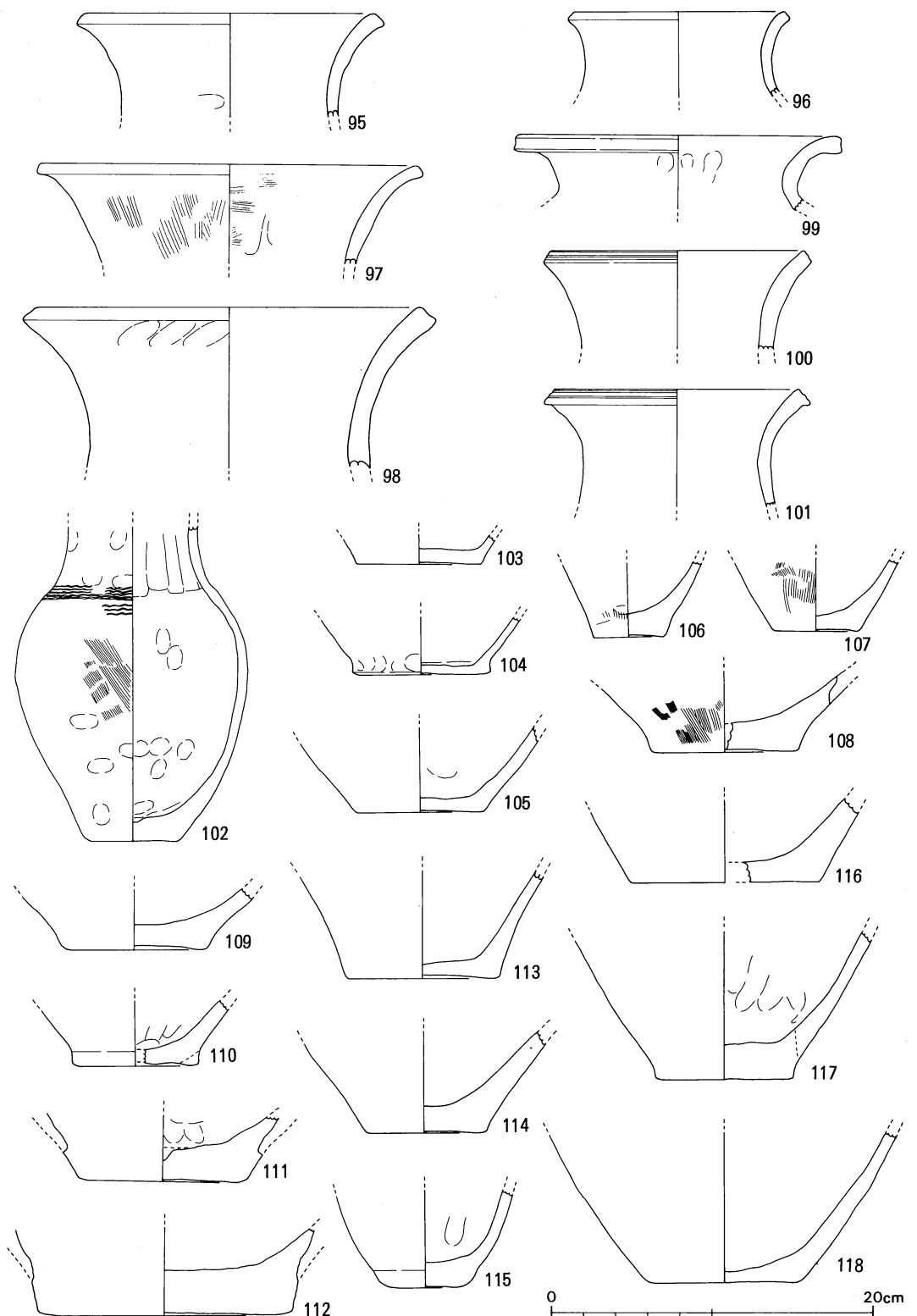
第8図 SR2出土遺物



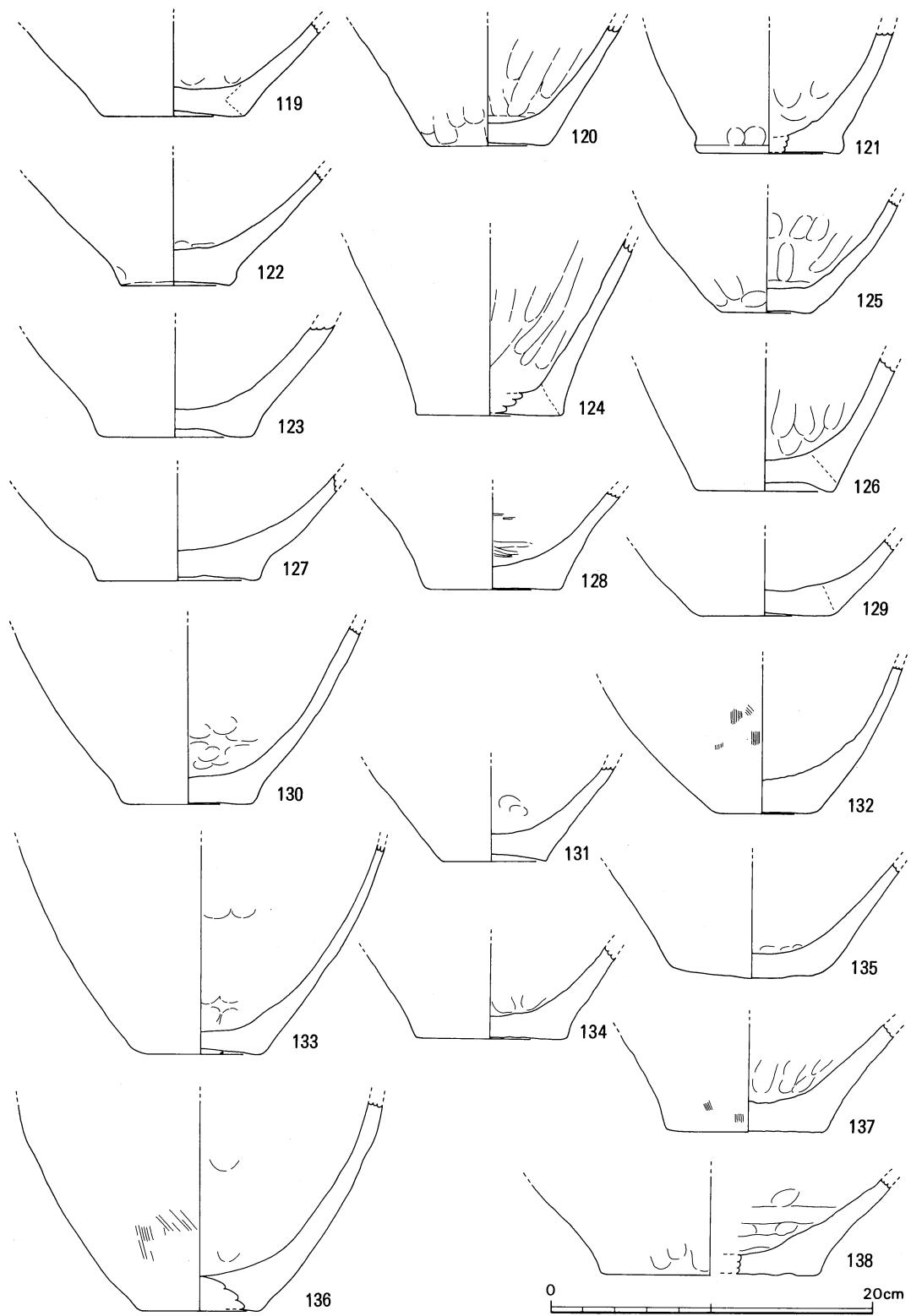
第9図 SR2出土遺物



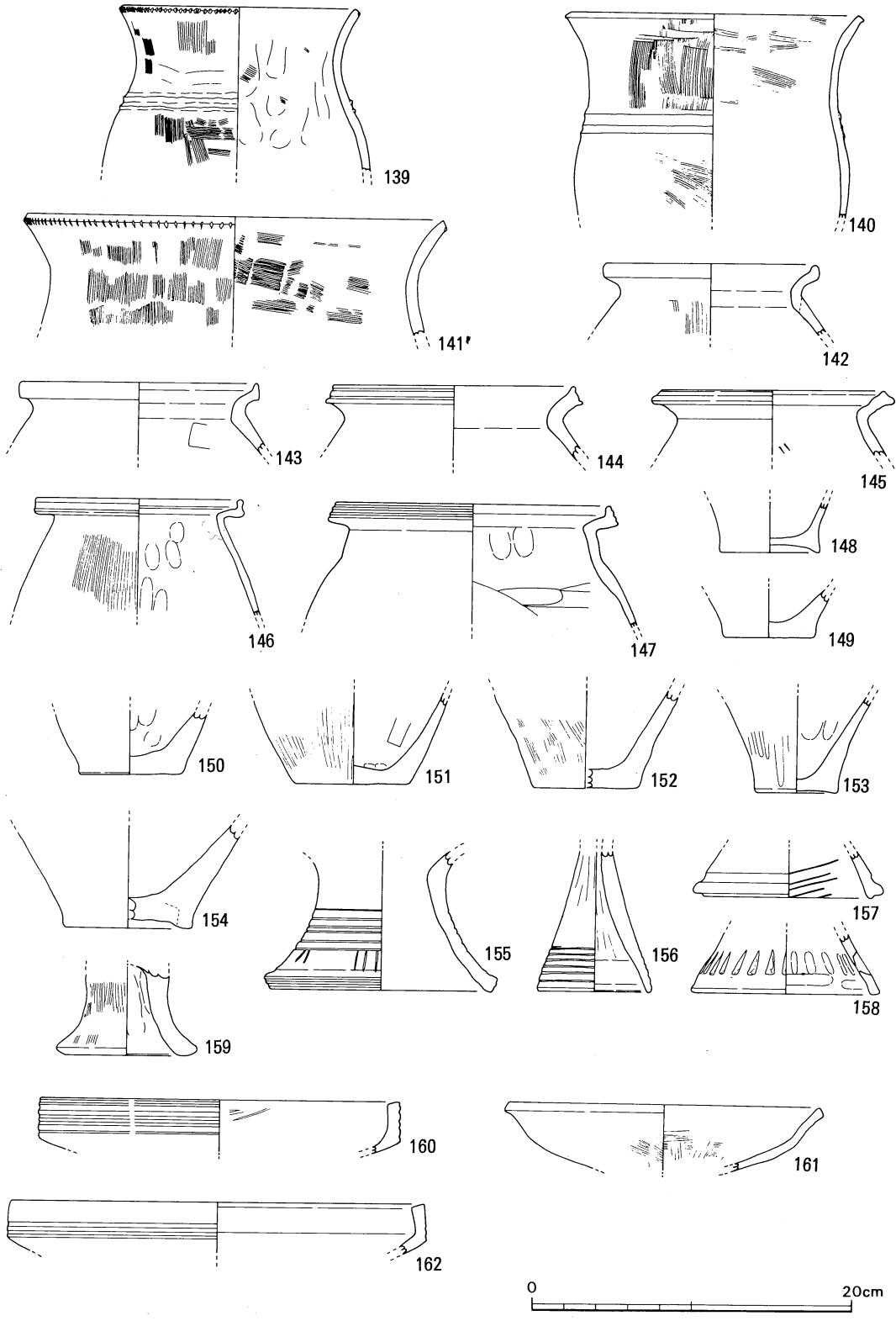
第10図 SR 2出土遺物



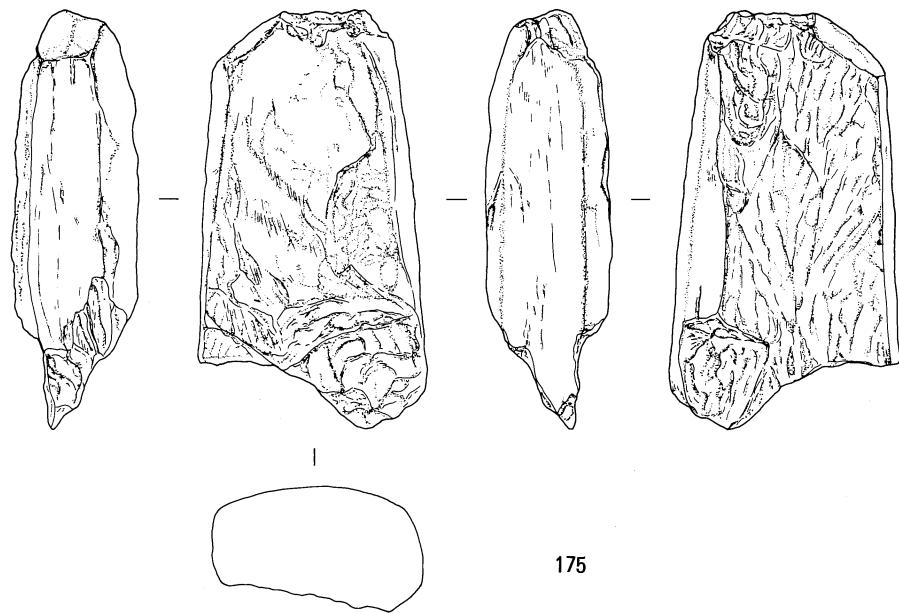
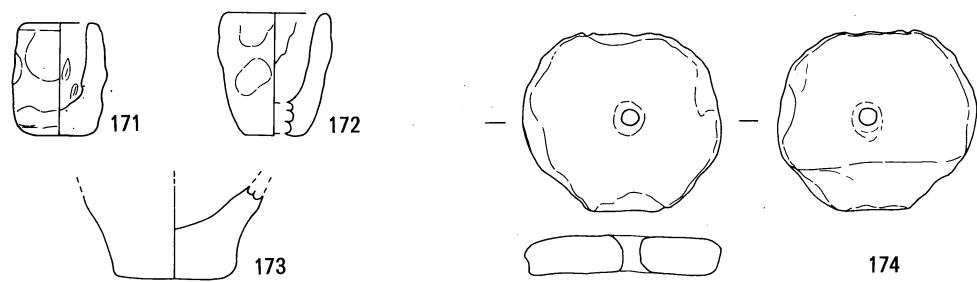
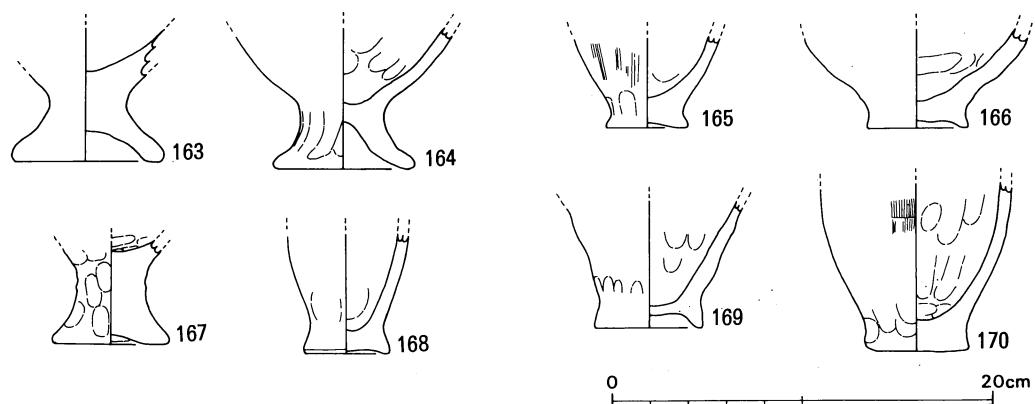
第 11 図 SR 2 出土遺物



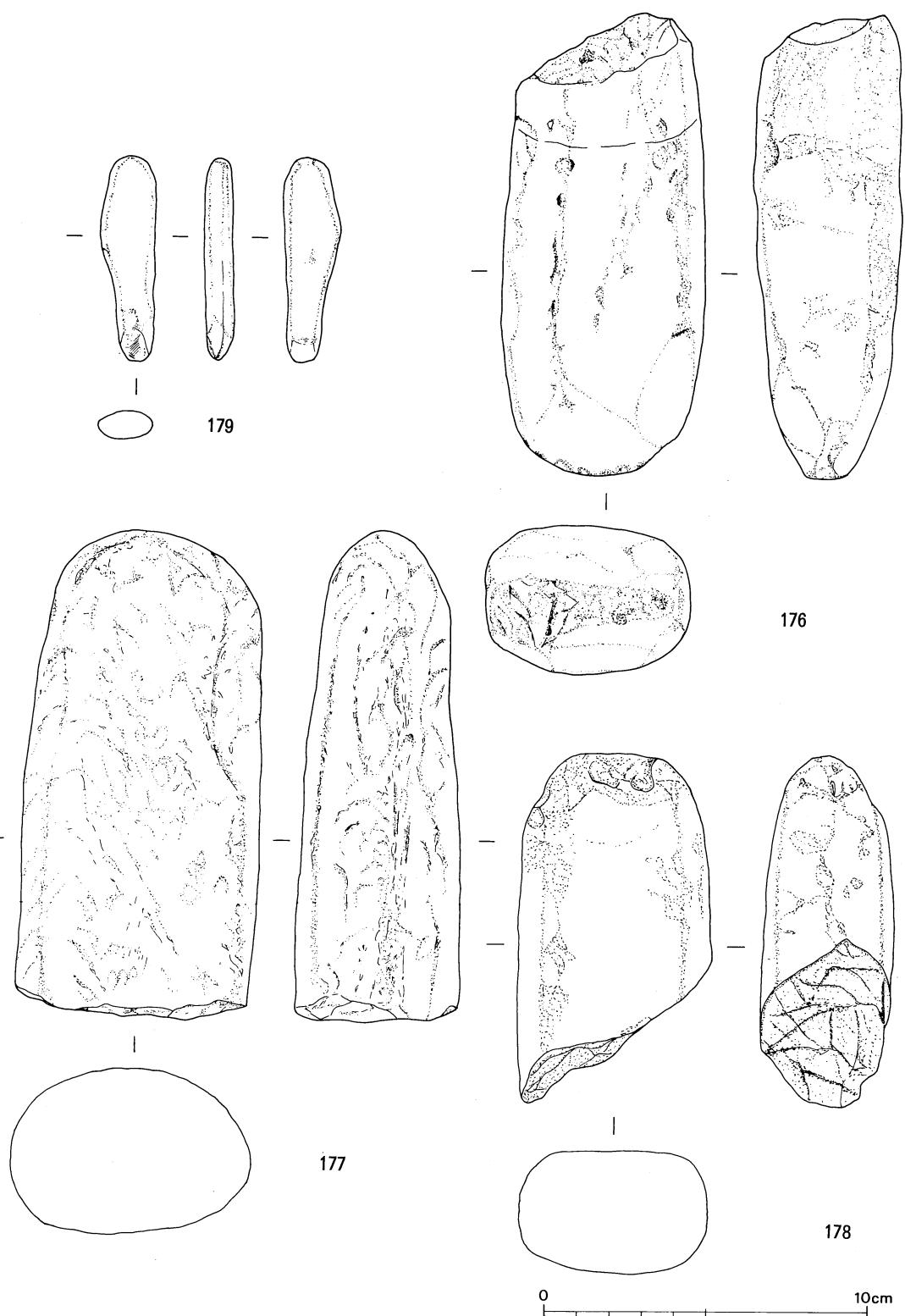
第12図 SR2出土遺物



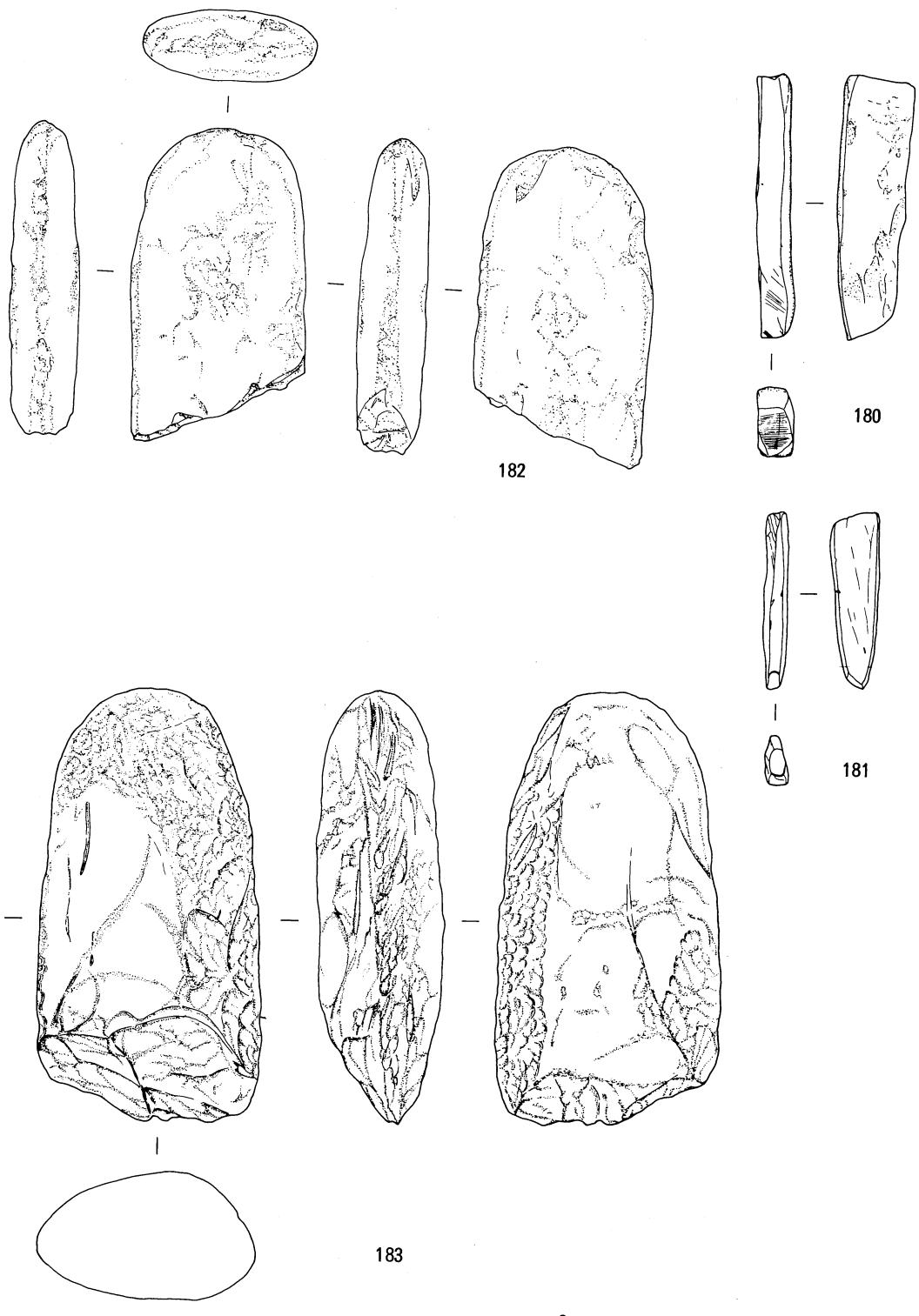
第13図 SR 2出土遺物



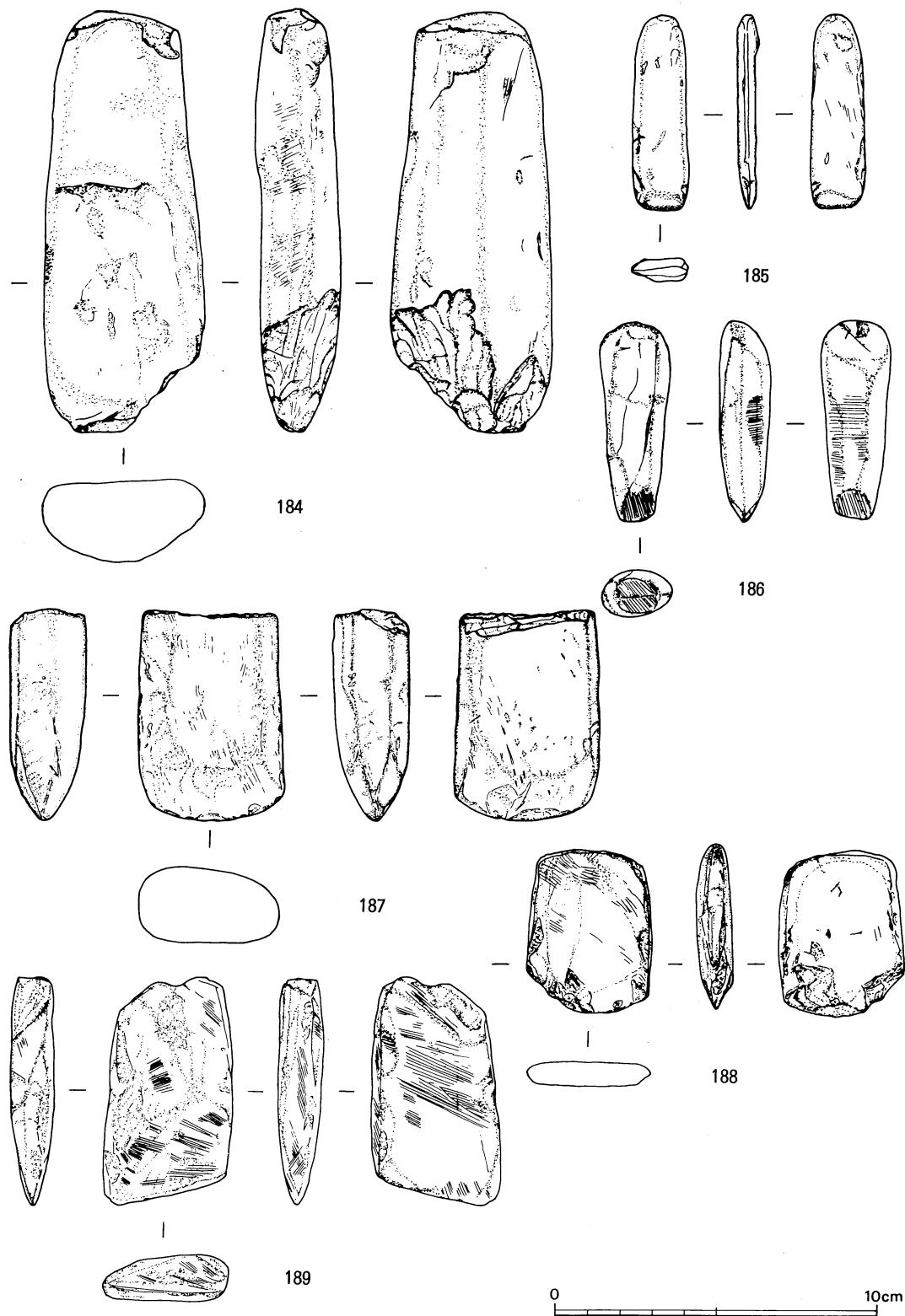
第14図 SR2出土遺物



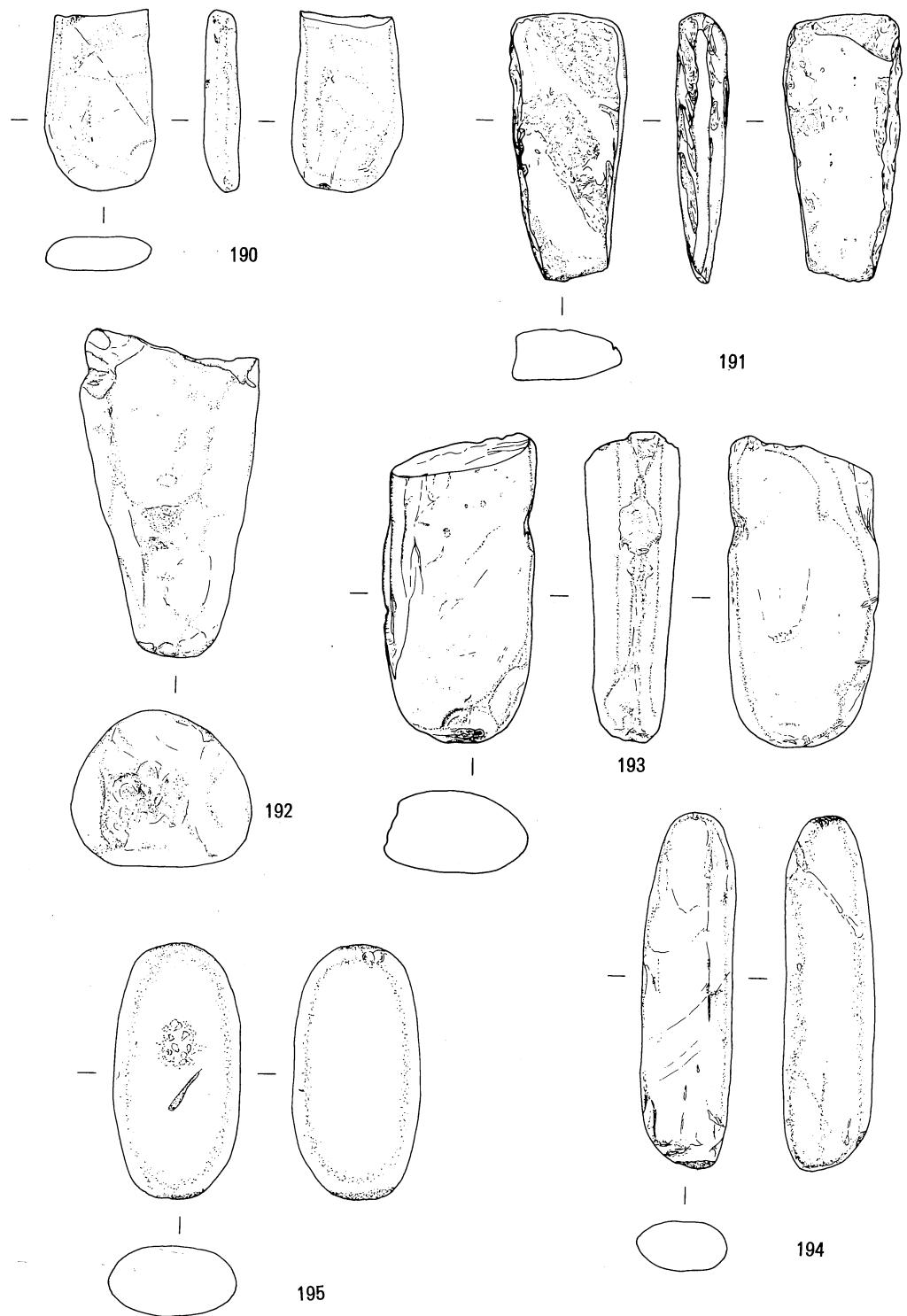
第15図 SR2出土遺物



第16図 SR 2出土遺物

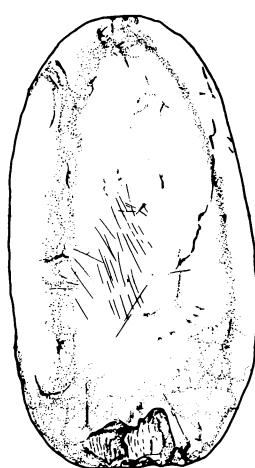


第17図 SK 2、SR 2 出土遺物

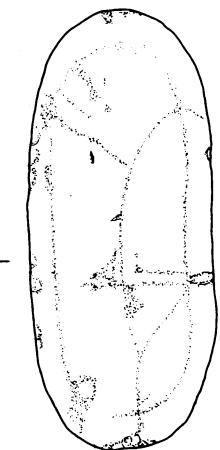
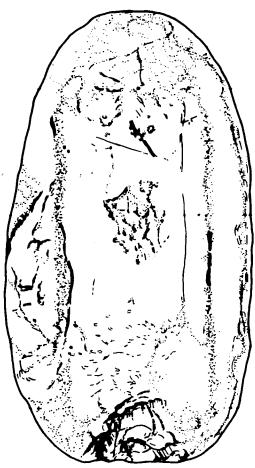


0 10cm

第18図 ST 1・2、SR 2出土遺物



196



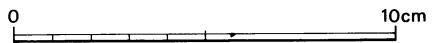
197



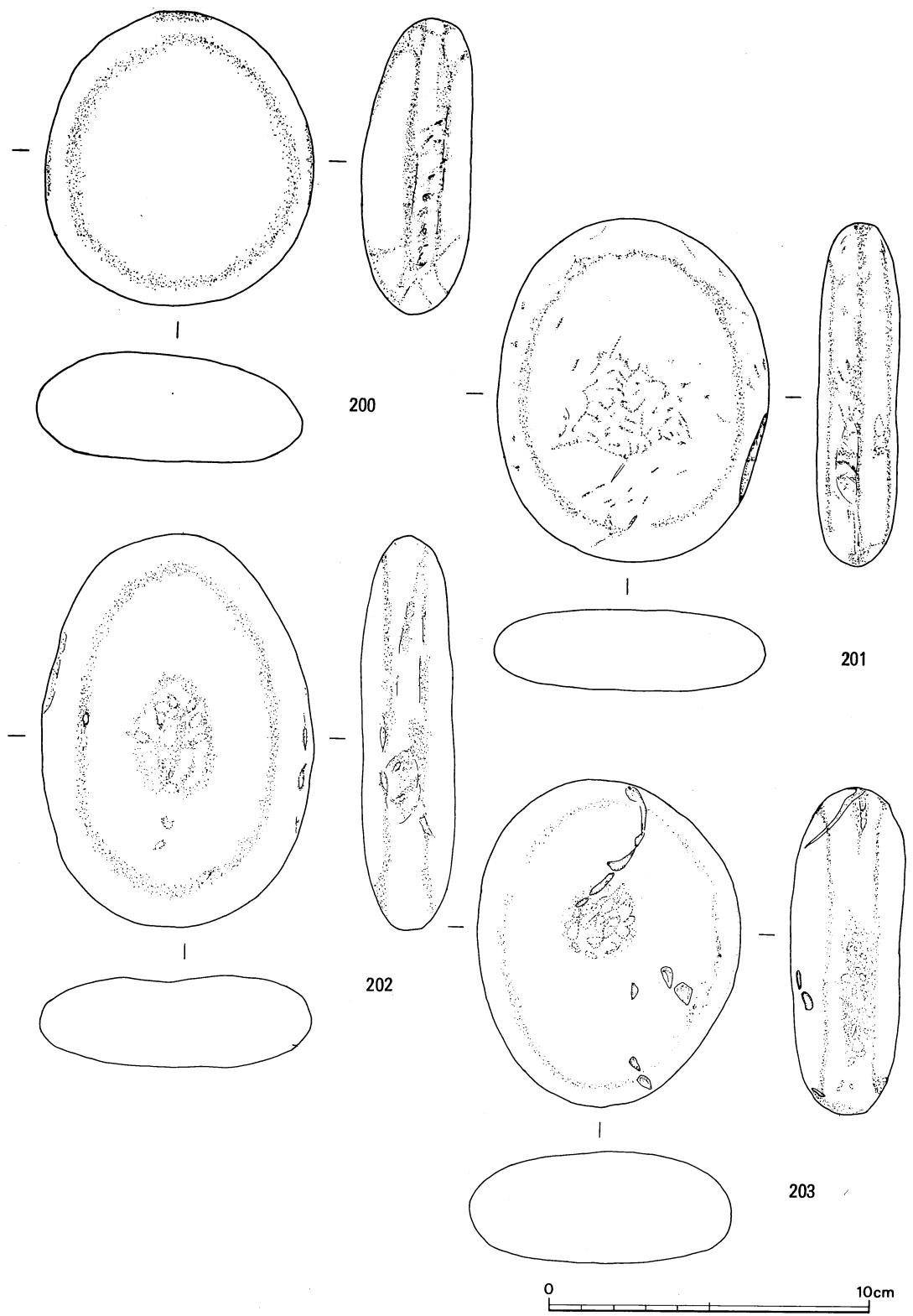
198



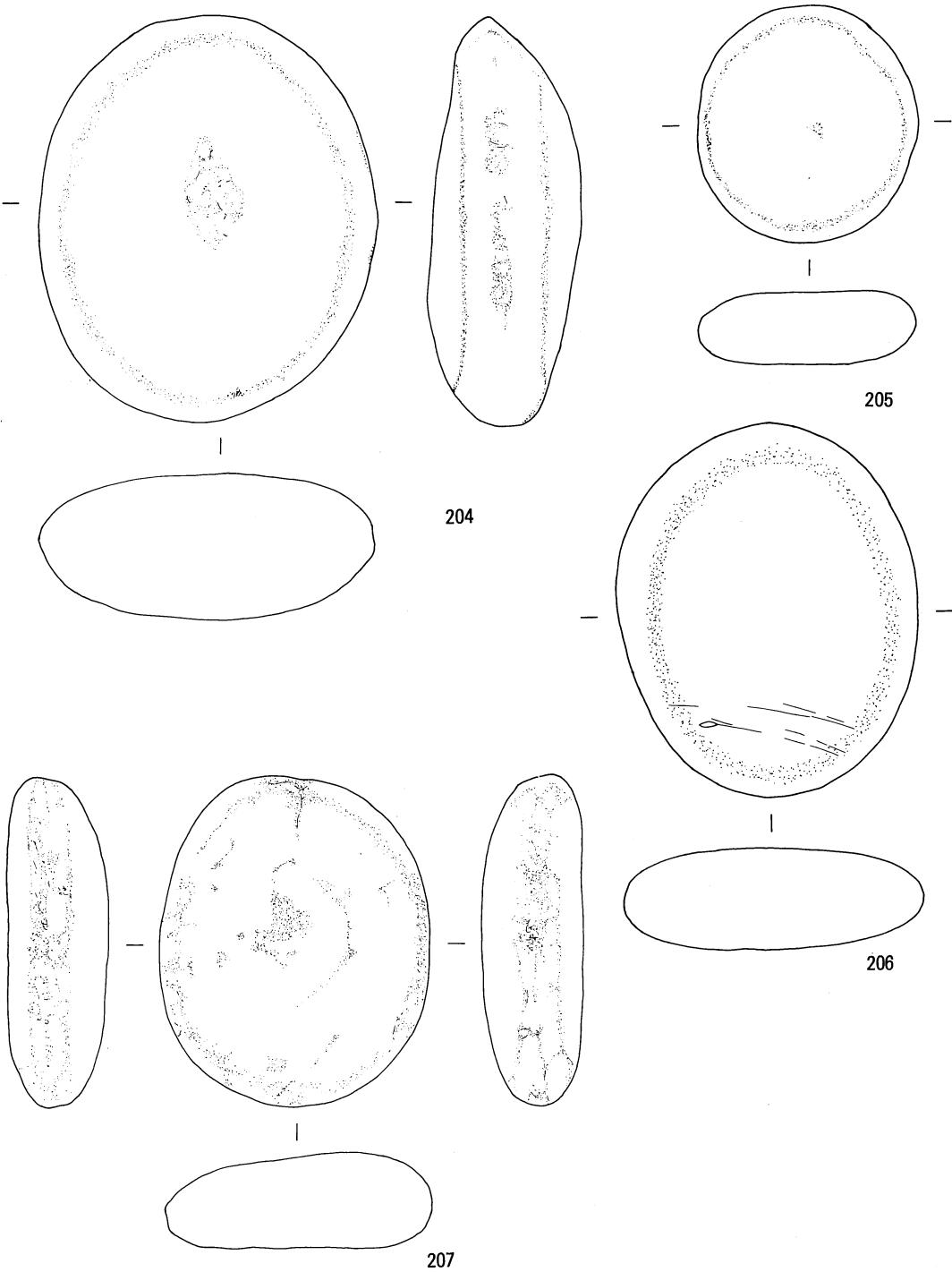
199



第19図 SR2出土遺物

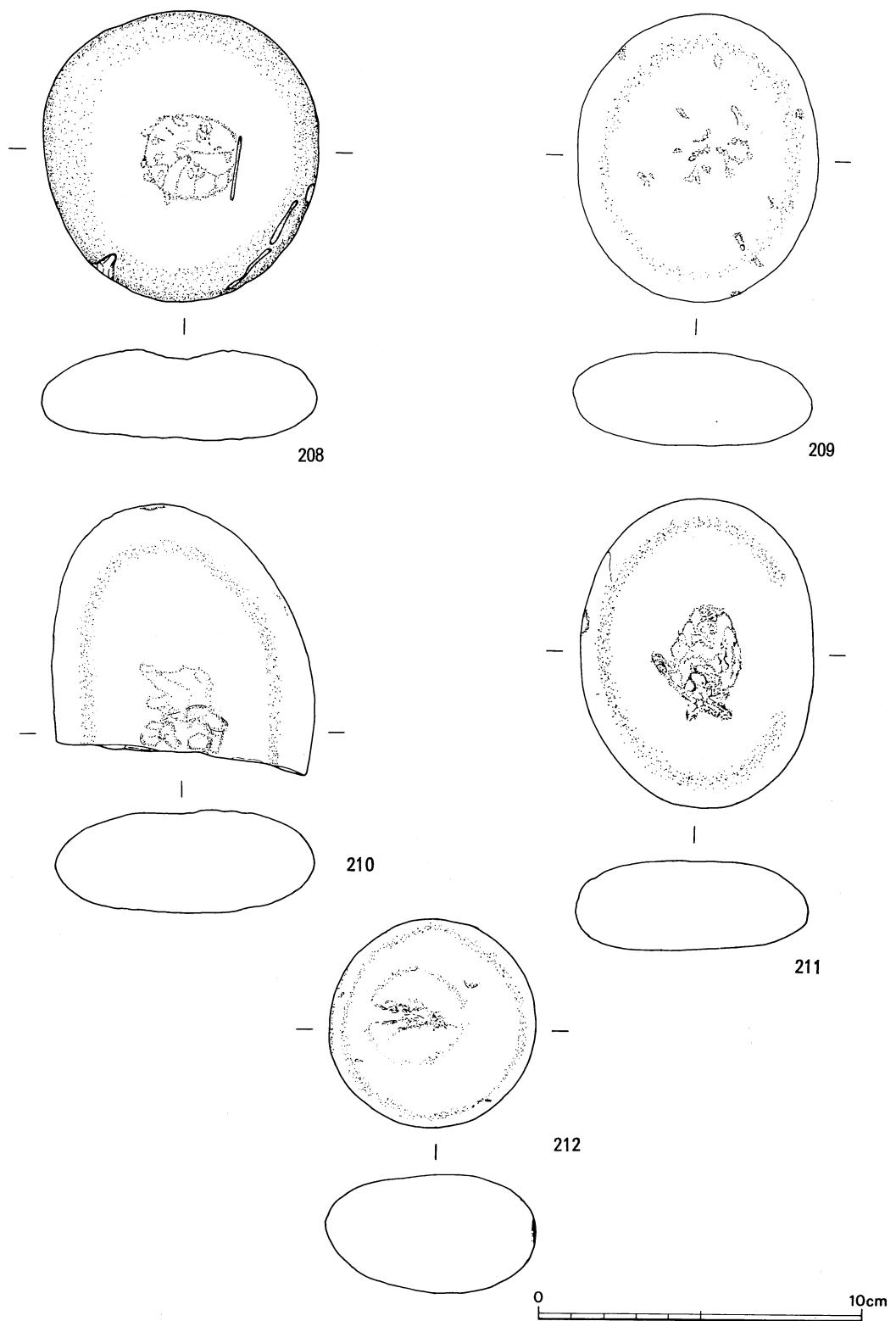


第20図 ST1出土遺物

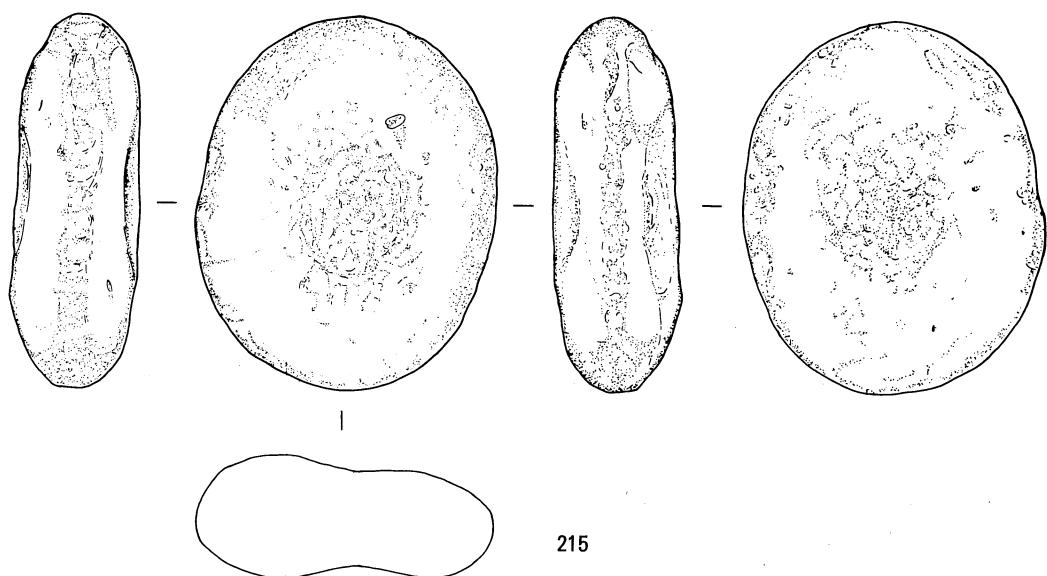
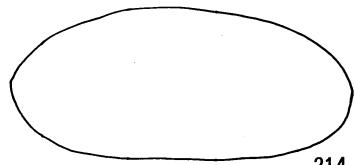
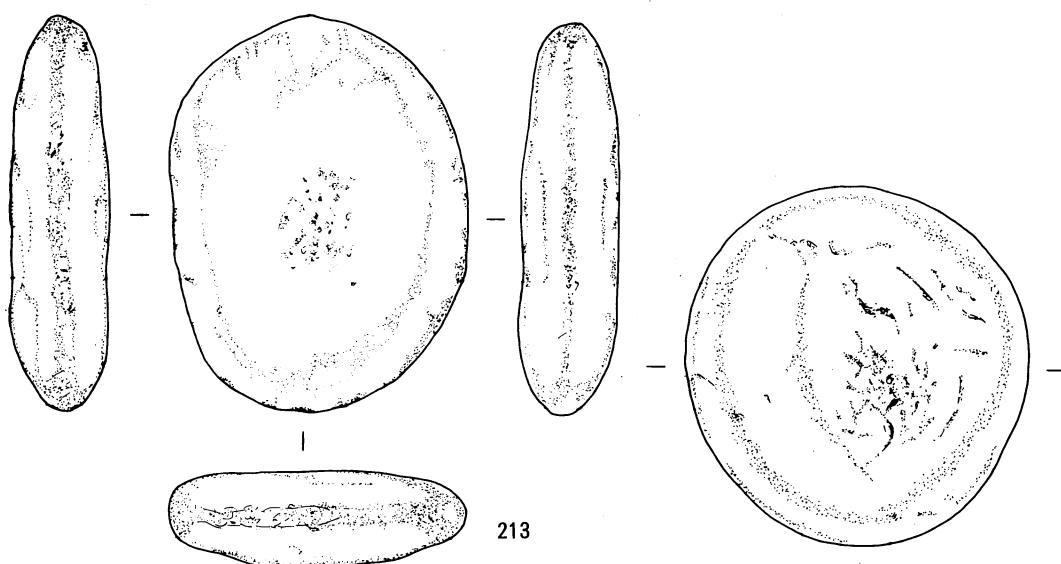


0 10cm

第21図 ST1出土遺物

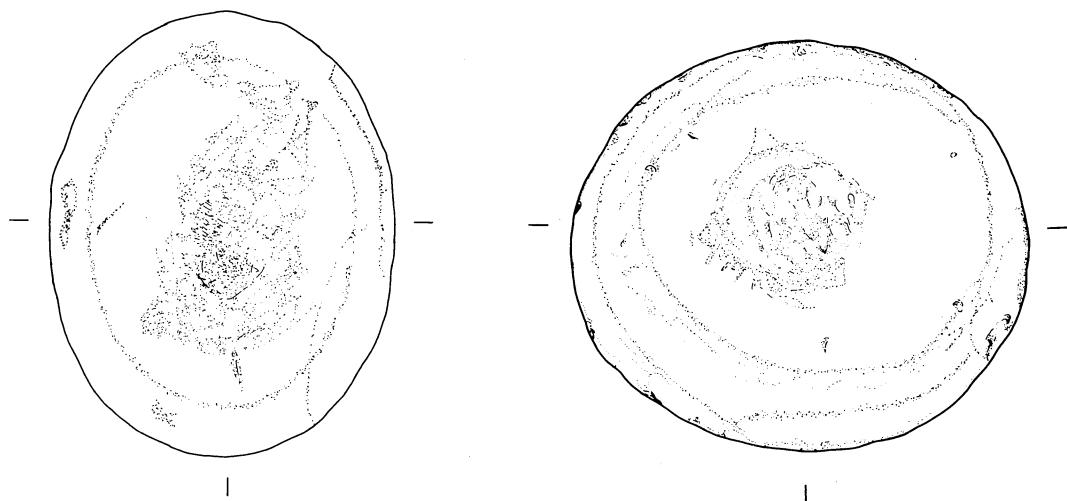


第22図 ST1・2、SX1、SR2出土遺物



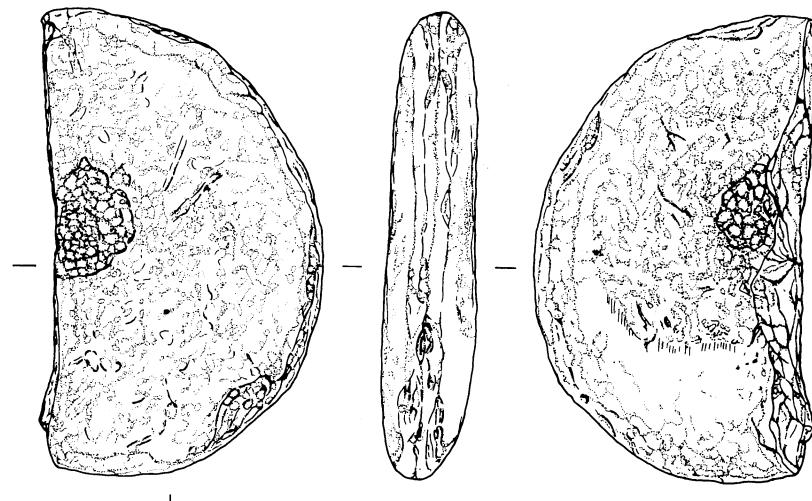
0 10cm

第23図 SR 2出土遺物

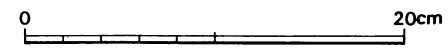


216

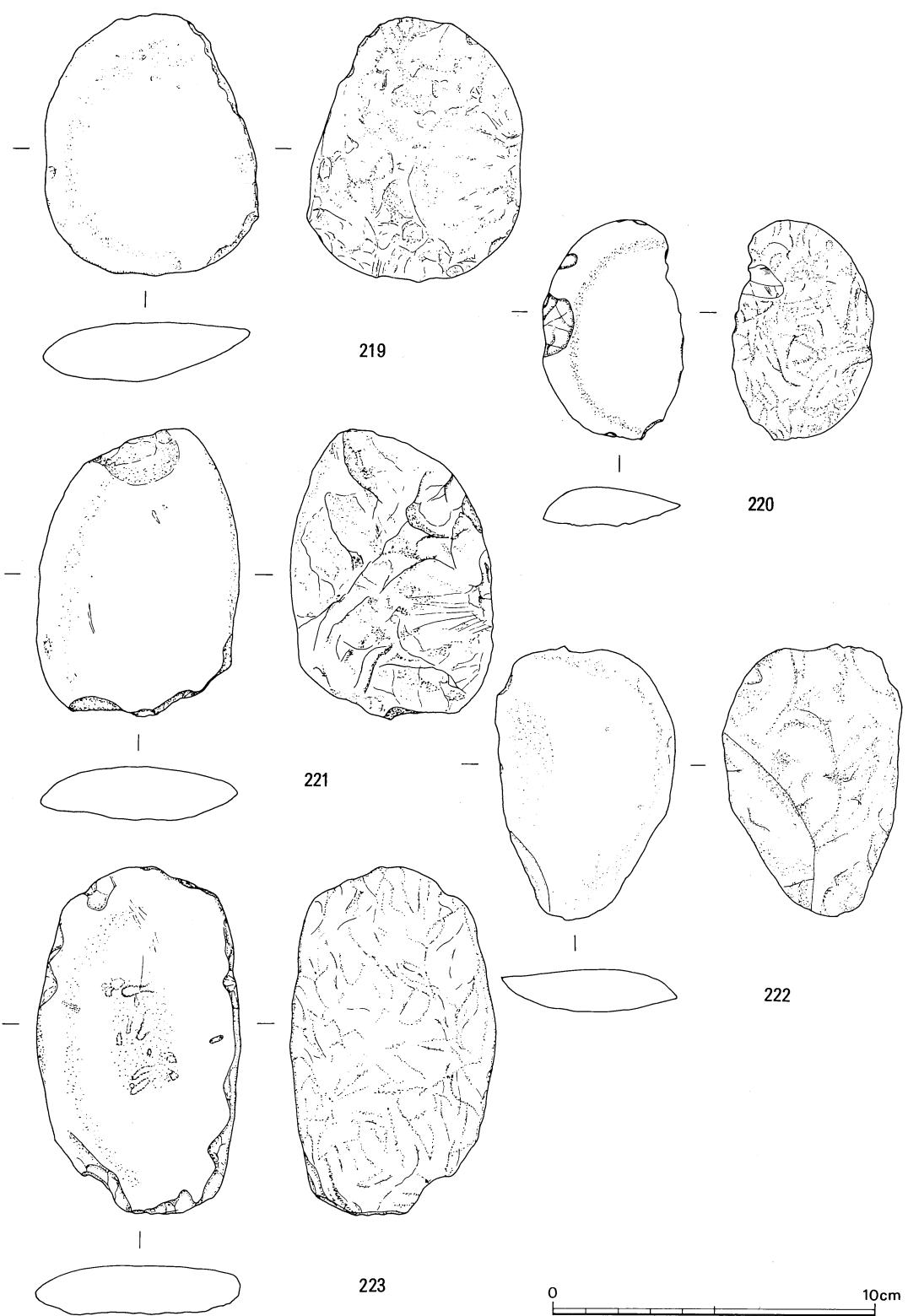
217



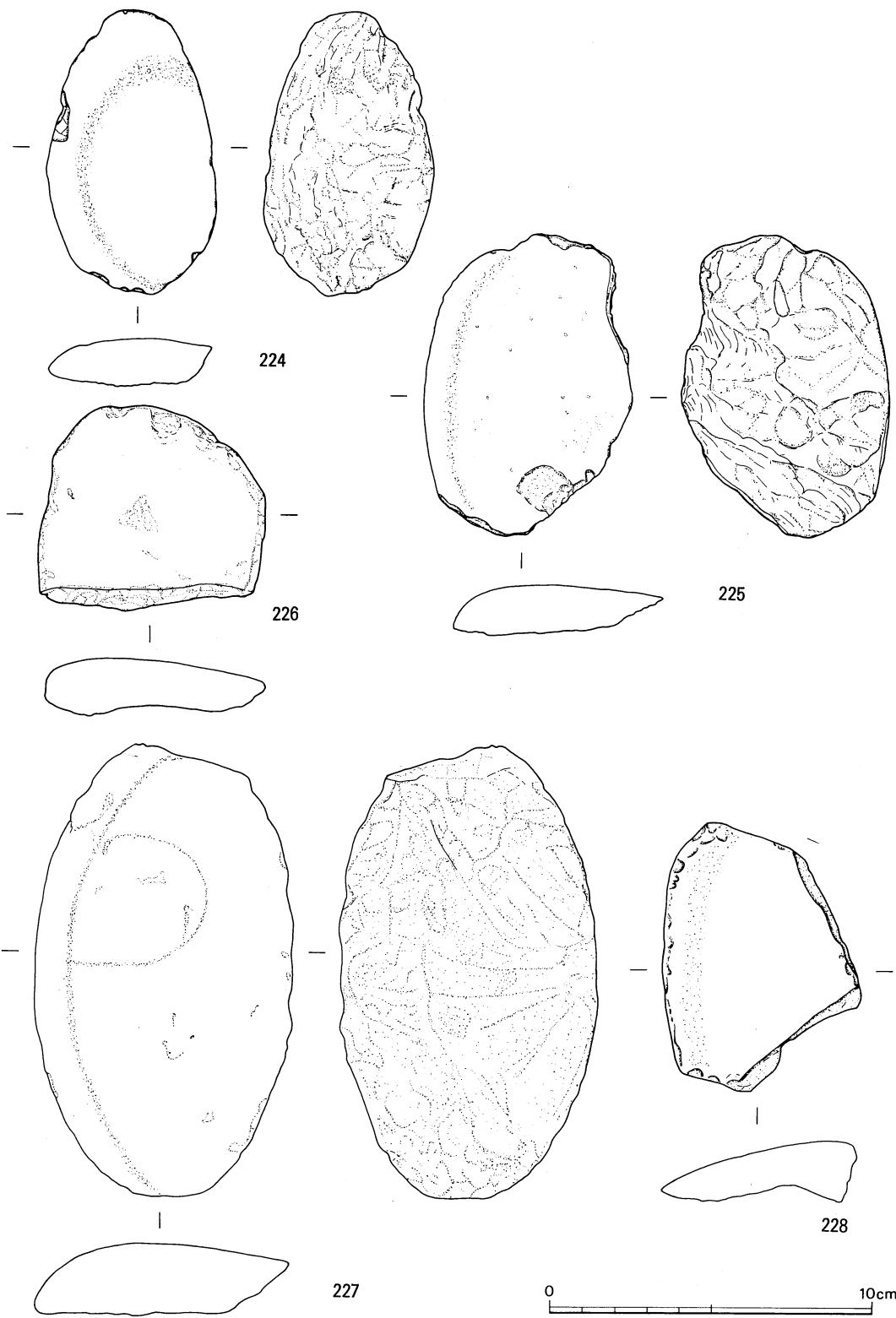
218



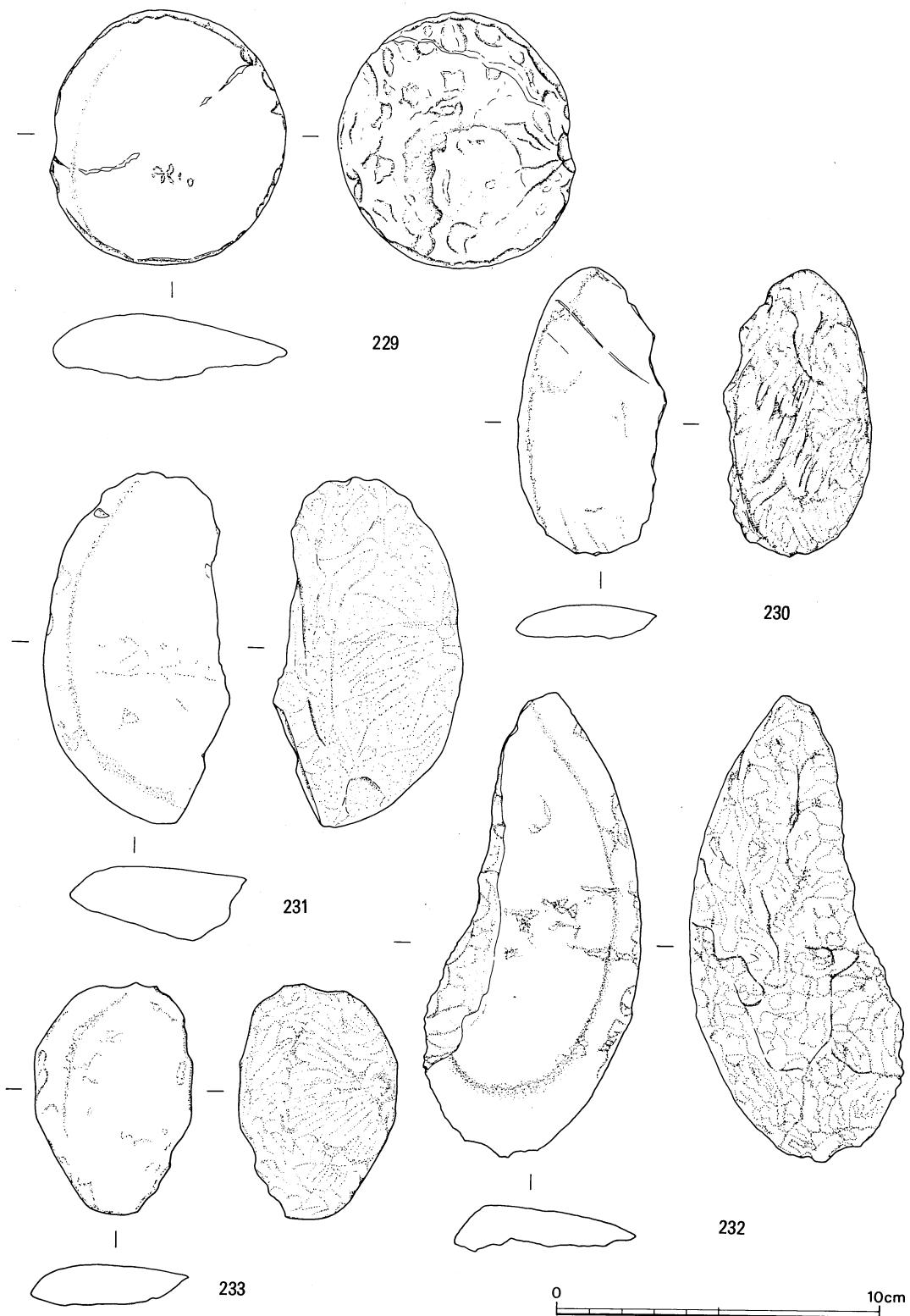
第24図 SR2出土遺物



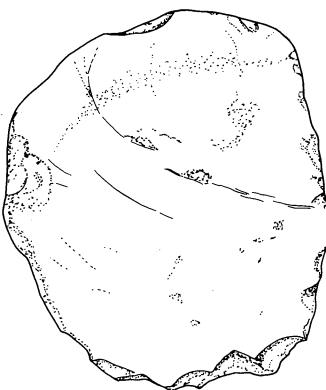
第25図 ST2、SK3、SX1、SR2出土遺物



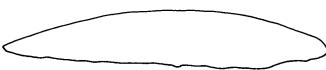
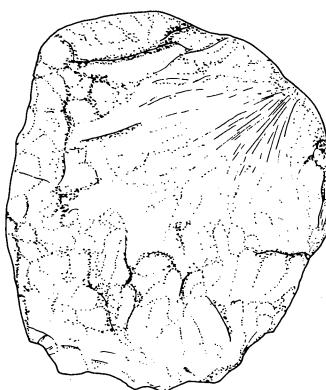
第 26 図 SK 3、SR 2 出土遺物



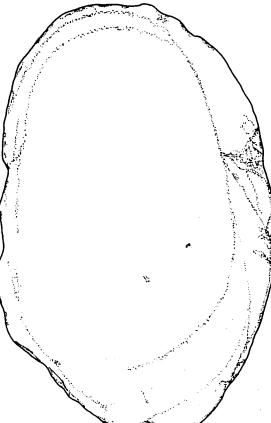
第 27 図 SR 2 出土遺物



234



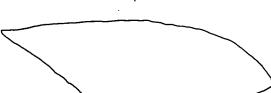
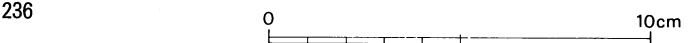
235



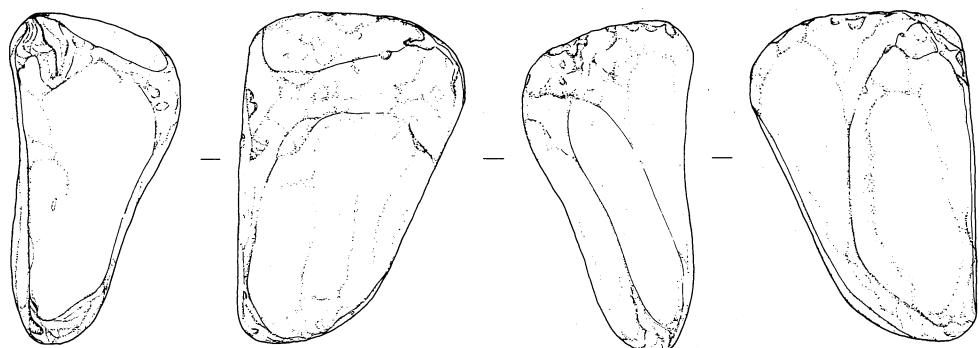
236

第28図 SR2出土遺物

- 53 -

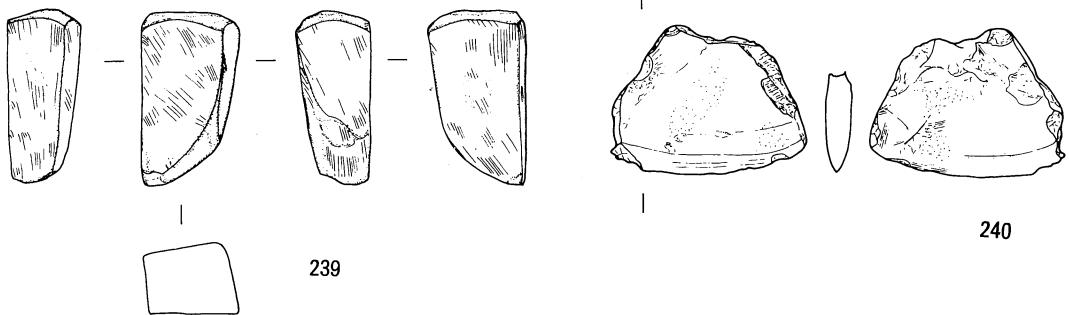


237



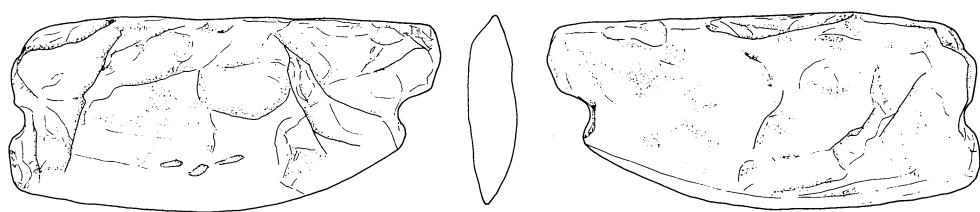
238

0 20cm

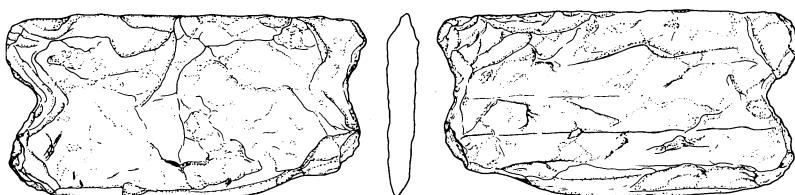


239

240



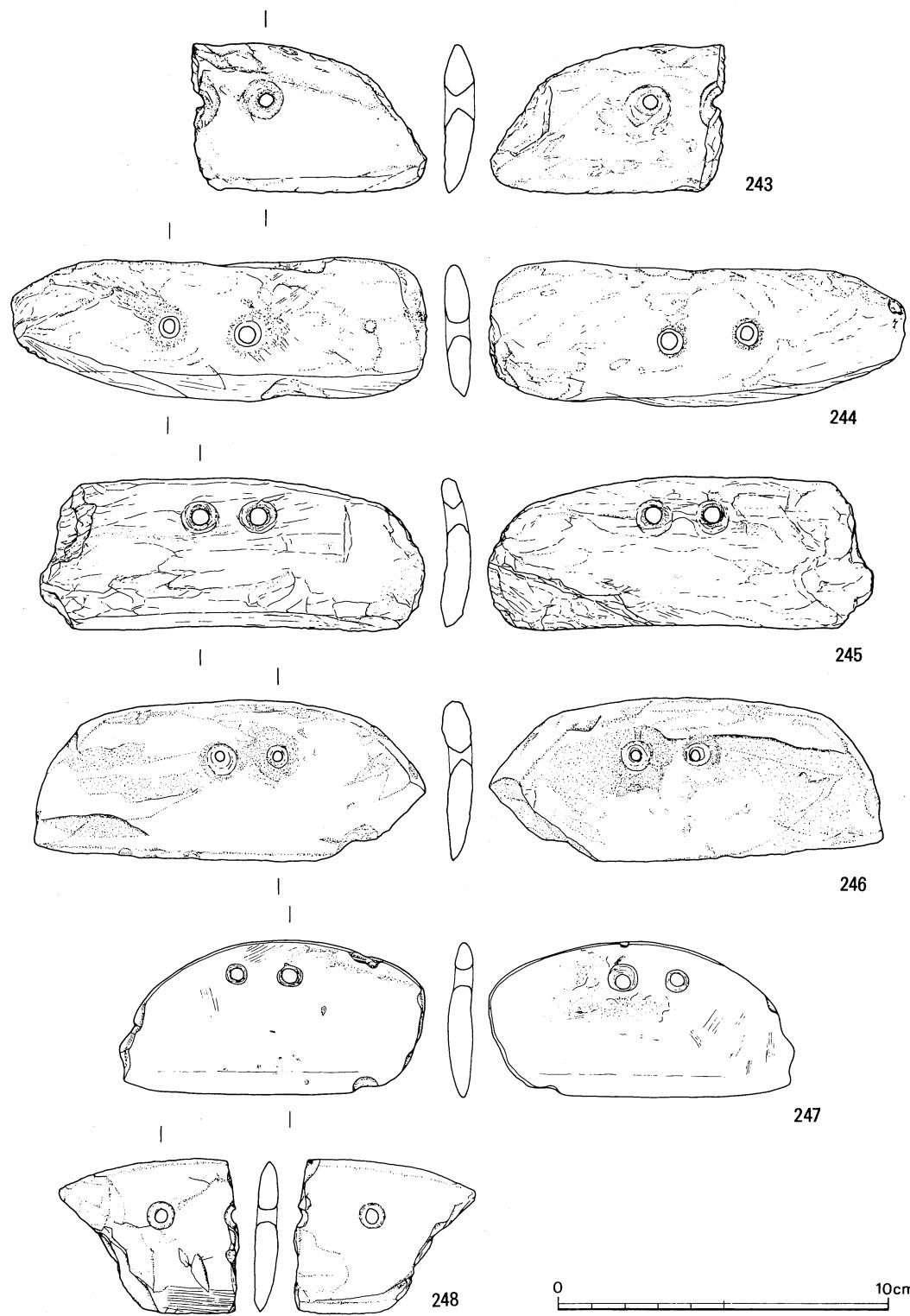
241



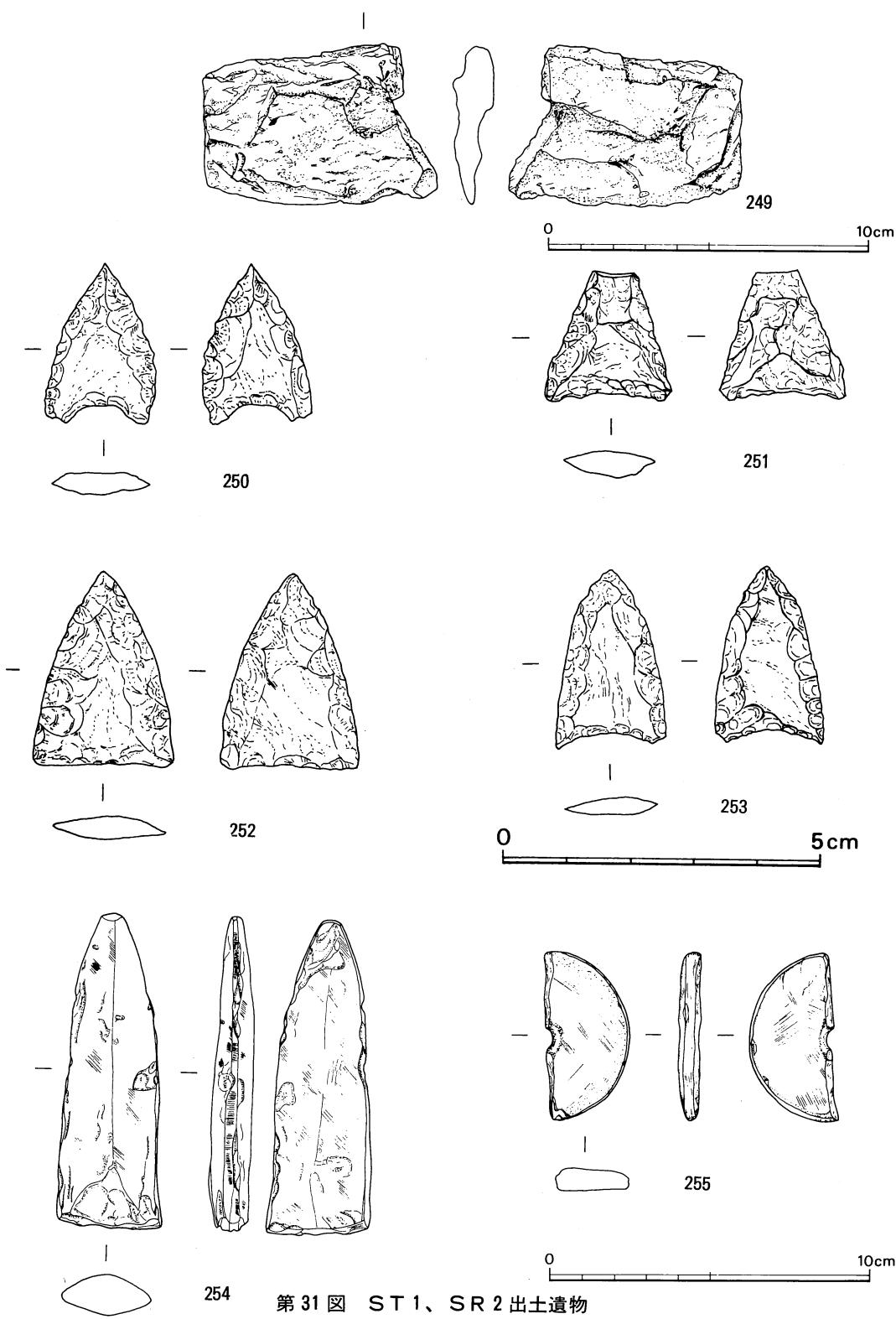
242

0 10cm

第29図 ST1、SK1・3出土遺物



第30図 SD 1、SR 2 出土遺物



第31図 ST 1、SR 2出土遺物

2. Loc. 35C

Loc.35C

1. 位置と調査経過

Loc.35Cは、田村遺跡群の西北端、Loc.35Aの更に西に位置し、小字横手の北端にあたる地点である。当調査区は、空港周辺整備事業の一環として行われた農道拡幅工事に伴い、急遽水田部分に設定された小トレンチである。

2. 調査概要

Loc.35Cは幅0.70m、長さ3.80mの小さな東西トレンチであり、明確な遺構は検出されなかった。しかし、下層より多くの弥生遺物を出土しており、調査区全域が溝状遺構あるいは自然流路の一部にかかっていたものと考えられる。

3. 層序と出土遺物

Loc.35Cで確認された層序は、

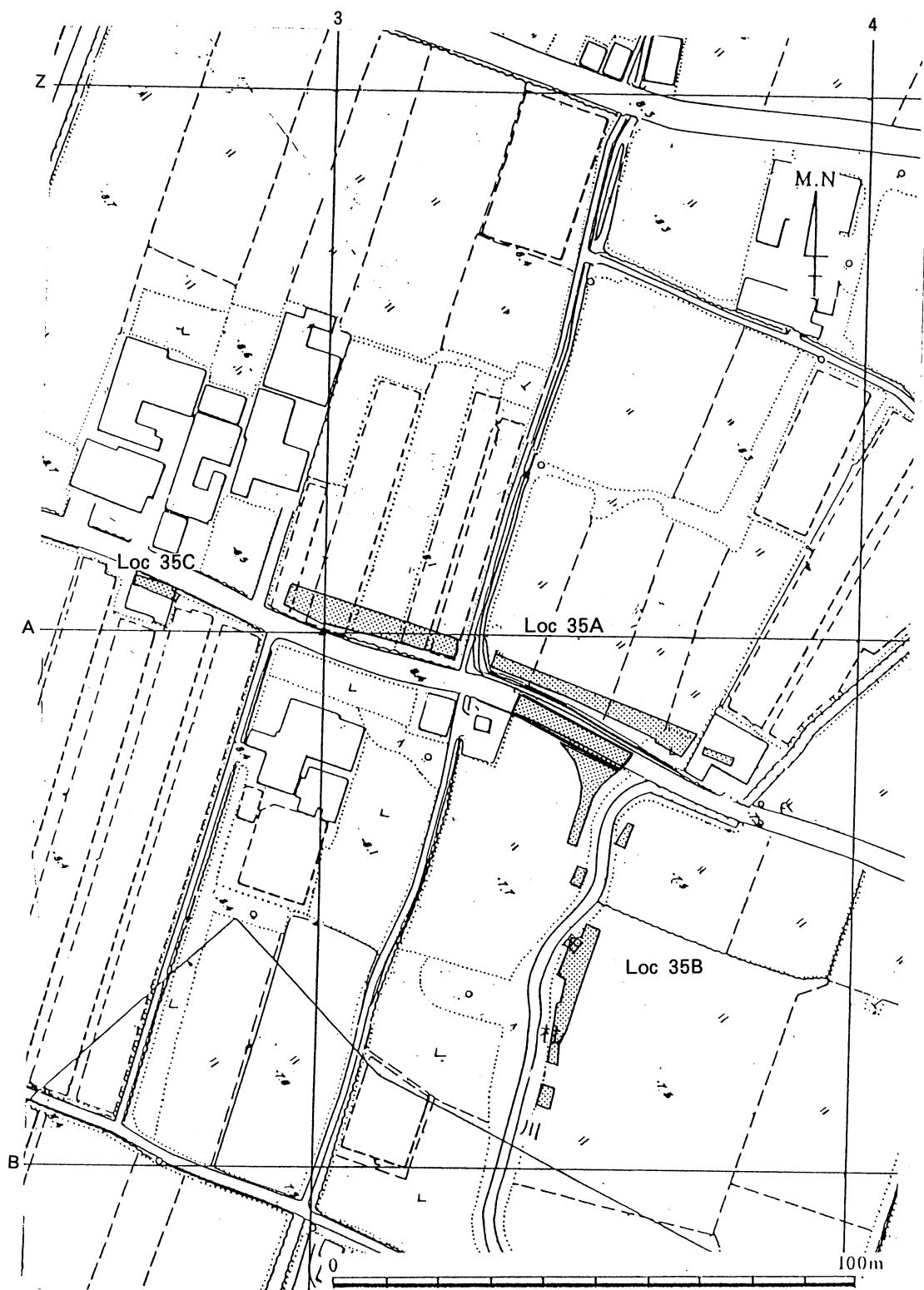
- 第Ⅰ層 耕作土
- 第Ⅱ層 床土
- 第Ⅲ層 灰褐色粘質土層
- 第Ⅳ層 青灰色砂層
- 第Ⅴ層 黒褐色粘質土層
- 第Ⅵ層 黒灰褐色粘質土層
- 第Ⅶ層 砂礫層

であり、第Ⅴ層から第Ⅶ層上面にかけて弥生遺物が大量に出土した（1～13）。土器は中期IIから後期Iの時期のものであり、石器の中では磨製石包丁の出土が著しかった。

4. まとめ

Loc.35Cは、極めて狭小な調査区であり、多くの弥生遺物を出土した第Ⅴ層以下が、いかなる平面形を有しているのか不明である。とは言え、その遺物出土量の多大さ、なかんずく石包丁の著しい出土は、調査面積に比して異常とも言うべきものがある。

幸いにも、当調査区周辺は空港用地とされていないので、今後の調査が期待される。



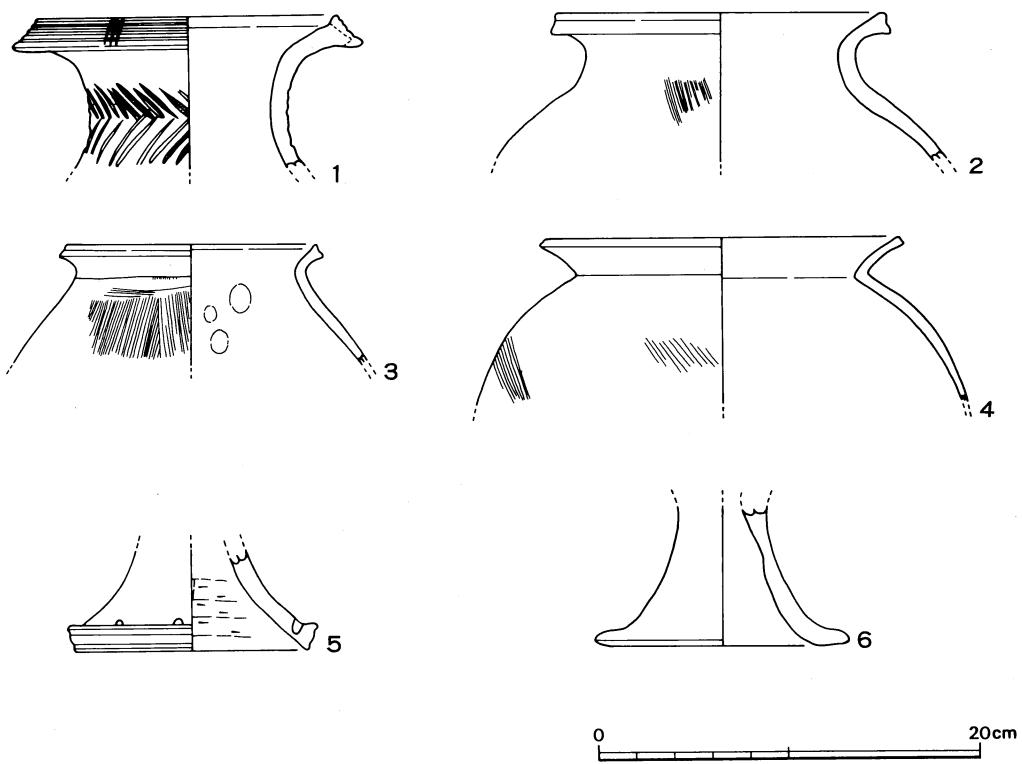
第32図 調査区設定図

第5表 包含層出土土器観察表

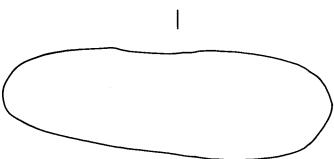
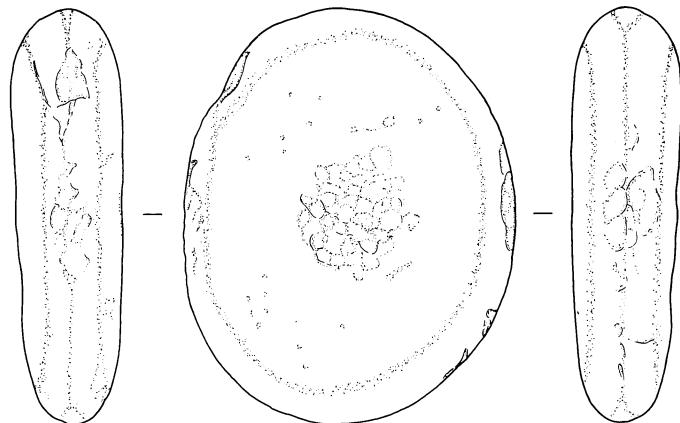
挿図番号	層位	器種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
1	第V層	壺	15.8 (8.0) — —	口縁部は大きく外反し、端部は上下に拡張され、4条の凹線文、更に部分的にヘラ状原体で圧痕を配す。 頸部にも羽状文状に圧痕を巡らす。	頸部の圧痕はハケ状原体による。 口縁部内外面横方向の強いナデ調整。		
2	"	甕	17.4 (7.8) — —	肩の張った上胸部に短い頸部。口縁部は大きく外反し、端部はやや肥厚。口唇部は凹状をなす。			
3	第VI層	"	13.2 (6.4) — —	胸部中位に最大径を有す。口縁部は「く」の字状に外反、端部を上方につまみ上げて拡張し、口唇部は凹状をなす。	口縁部内外面横方向の強いナデ調整。胸部内面指頭による縦方向のナデ調整、外面縦方向のハケ調整。		
4	第VII層	"	18.6 (8.8) — —	肩の張った胸部から口縁部は「く」の字に強く屈曲し、内面に棱をなす。口唇部は凹状を呈す。	口縁部内外面横方向のナデ調整。 胸部外面は木理の粗いハケ状原体による右下がりのハケ調整。		
5	"	高杯	— (5.3) — 12.2	「ハ」の字状に開く脚部。端部は上方に拡張し、2条の凹線を配す。 裾部には貫通しない円孔を施す。			
6	"	"	— (7.4) — 13.4	「ハ」の字状に開く脚部で、裾部で水平に屈曲し、端部は丸くおさめる。	杯底部は円板充填であるが剥落している。	外面に黒斑あり。	

第6表 包含層出土石器観察表

挿図番号	層位	器種	計測値 最大長 最大幅 最大厚 (cm, g)	材質	特徴	備考
7	第V層	叩石	11.0 8.8 3.0 445.0	砂岩	河原石をそのまま利用した叩石である。 表面中央部及び両長側縁部に敲打痕を残す。	
8	"	石包丁	(7.7) 4.9 0.8 38.9	粘板岩	外湾型磨製石包丁である。円孔は1つしか確認できないが、双孔を持つものと考えられる。敲打による穿孔で両面から穿たれている。刃部は片刃である。	
9	第VII層	"	(5.7) 4.6 0.5 21.7	"	双孔を持つ磨製石包丁の半損品である。 刃部は両刃で若干外湾する。円孔は両面より穿たれている。全面研磨されており、擦痕が残る。	
10	"	"	(4.3) 4.2 0.7 19.1	千枚岩	外湾刃両刃磨製石包丁である。抉りと双孔とを併せ持つタイプである。 円孔は両面から穿たれている。 刃部はよく研磨されている。	
11	"	"	(7.7) 5.7 0.8 46.5	粘板岩	双孔を持つ直刃型磨製石包丁の半損品である。 敲打による穿孔で両面から穿たれている。 両面に研磨擦痕が見られる。	
12	"	"	(12.7) 3.7 0.8 71.5	砂質片岩	双孔を有する磨製石包丁である。 穿孔に際する敲打は見られない。 刃部は内湾気味である。	
13	"	"	8.6 4.5 1.2 52.9	石英質緑色岩	両端に抉りを有する打製石包丁である。 刃部は両面より調整されている。	

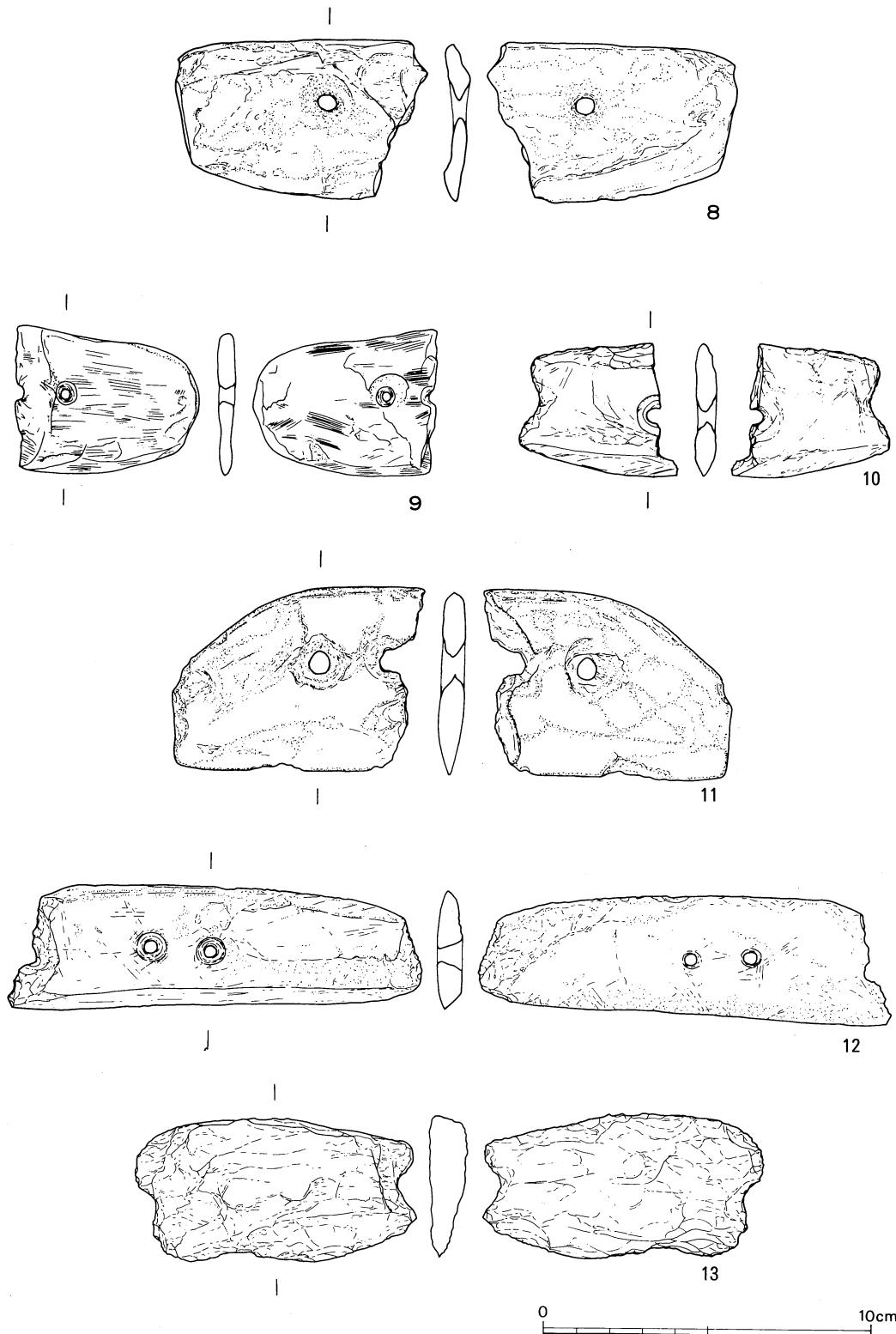


0 20cm



0 10cm

第33図 第V～VII層出土遺物



第34図 第V～VII層出土遺物

3. Loc. 36 A

Loc. 36A

I. 位置と調査経過

Loc.36は、田村遺跡群の北西部に位置しており、小字は、旧田村川を境にして西側が横手で、東側が南土居の前である。

当調査区は、場周道路の工事及び田村川の改修工事等の関係で、昭和56年度と昭和57年度の両年度にわたって調査を実施した。昭和56年度に試掘調査を実施した箇所をA地点 (Loc.36A) とし、設定した各トレンチを西部からAトレンチ、Bトレンチ、Cトレンチとする。昭和57年度にはLoc.36AのAトレンチの南部の発掘調査を実施しており、この箇所をB地点 (Loc.36B) とする。

2. 調査概要

Loc. 36Aは、昭和56年度に試掘調査を実施した箇所であるが、場周道路及び田村川の改修工事等の関係から、各トレンチで検出した遺構を完掘せざるを得ない状況であった。

Aトレンチは、旧田村川の西側に設定した東西方向に細長いトレンチで、中央部が南側に方形状に突出している。Aトレンチでは弥生時代の土塙、溝、自然流路等の遺構を確認することができた。

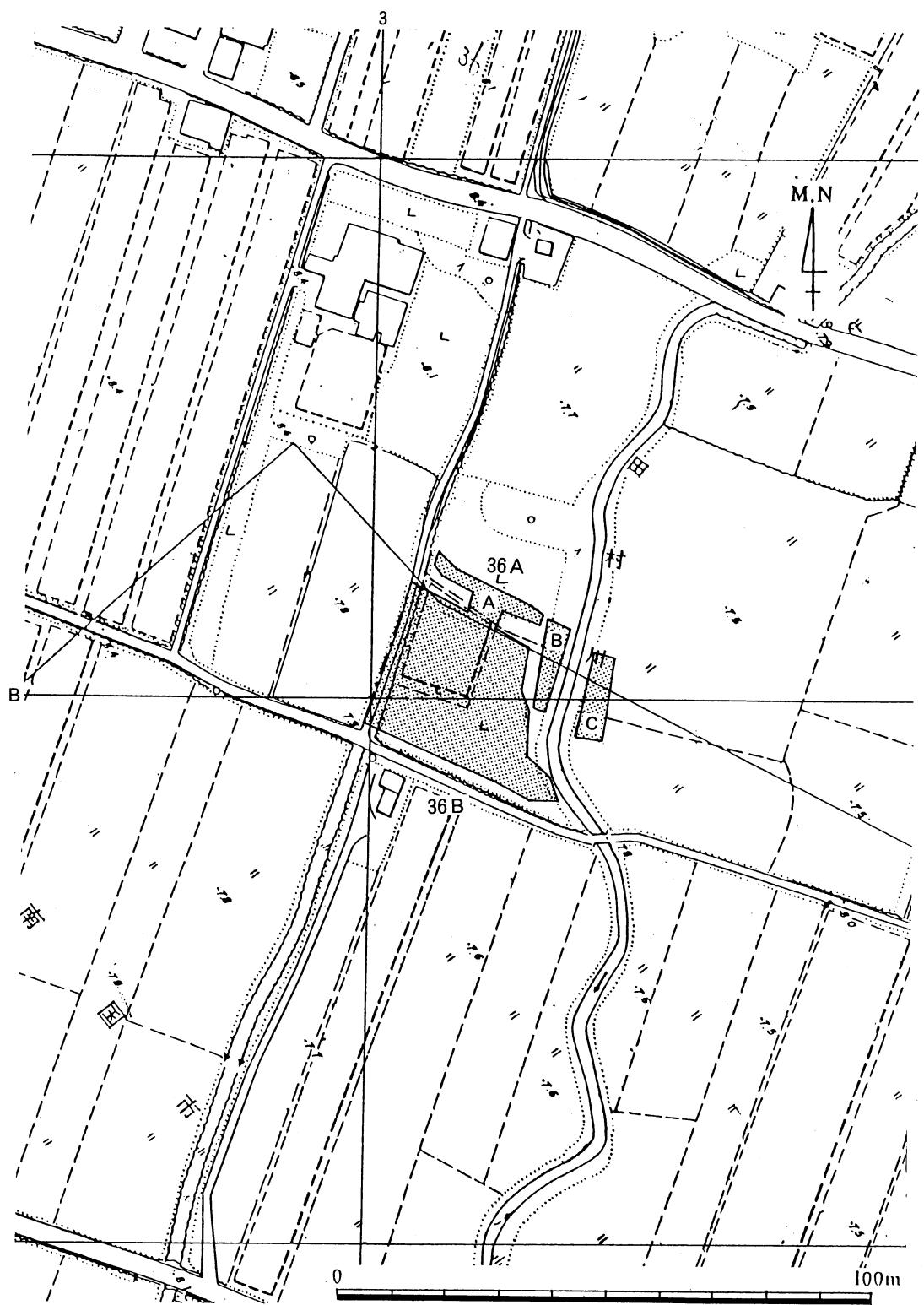
Bトレンチは、Aトレンチの南東方向に近接して設定した南北方向のトレンチで、自然流路 (S R 2) の中に入り込んでいるが、北東部では縦方向に現代の搅乱を受けた箇所がある。

Cトレンチは、旧田村川の東側に設定した縦方向に細長いトレンチであり、遺構及び遺物を確認することはできなかった。

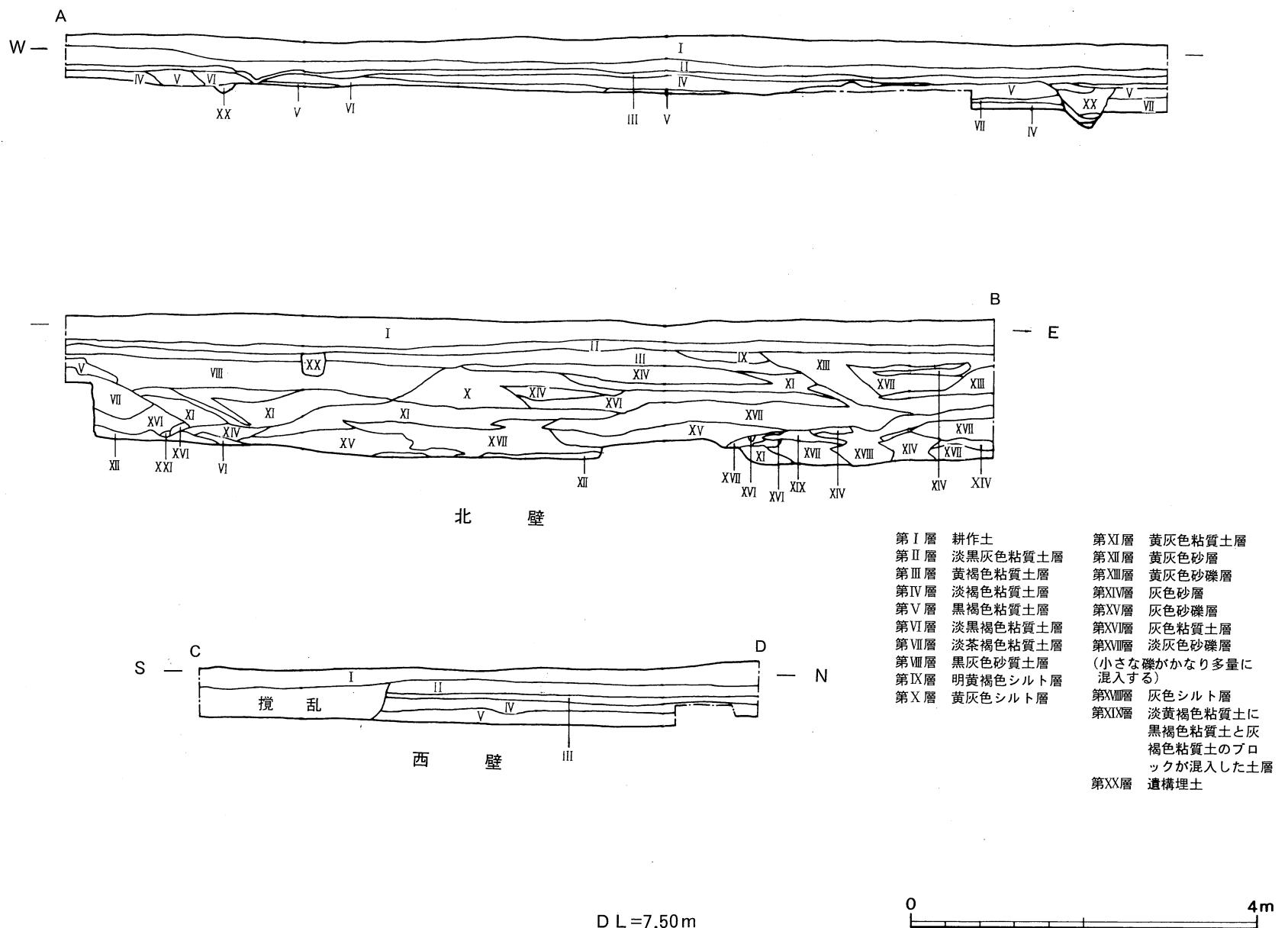
3. 層序と出土遺物

Loc.36AのBトレンチは、自然流路 (S R 2) の中に入り込んでおり、Cトレンチは遺構、遺物共に皆無であるために、B、C両トレンチの層序は省略し、Aトレンチの層序についてのみ記述する。

- 第I層 耕作土
- 第II層 淡黒灰色粘質土層
- 第III層 黄褐色粘質土層
- 第IV層 淡褐色粘質土層
- 第V層 黒褐色粘質土層
- 第VI層 淡黒褐色粘質土層
- 第VII層 淡茶褐色粘質土層
- 第VIII層 黒灰色砂質土層



第35図 調査区設定図



第36図 調査区セクション

- 第IX層 明黄褐色シルト層
第X層 黄灰色シルト層
第XI層 黄灰色粘質土層
第XII層 黄灰色砂層
第XIII層 黄灰色砂礫層
第XIV層 灰色砂層
第XV層 灰色砂礫層
第XVI層 灰色粘質土層
第XVII層 淡灰色砂礫層
第XVIII層 灰色シルト層
第XIX層 淡黄褐色粘質土に黒褐色粘質土と灰褐色粘質土のブロックが混入した土層

第I層は耕作土で全域に堆積がみられた。第II層の淡黒灰色粘質土層は、中世の遺物包含層であり、西部ではやや厚く堆積している。第III層の黄褐色粘質土層は、中世の遺構検出面である。第IV層は、淡褐色粘質土層で無遺物層である。第V層の黒褐色粘質土層は西部に堆積がみられるが、無遺物層で、弥生時代の遺構検出面である。第VI層の淡黒褐色粘質土層は、V層に酷似しており、無遺物層である。第VII～XIX層に至る土層は、自然流路（S R 2）に堆積した土層で複雑な様相を呈している。

4. 遺構と遺物

Aトレーニチのほぼ全域で弥生時代の遺構がみられ、西部では土塙群及び溝を検出し、東部では自然流路を確認した。

土塙

S K 1

S K 1は、現代の搅乱塙で、S D 1の南部を切り取っており、現代の瓦等が出土している。

S K 2

S K 2は、西端部付近で検出された不整円形の土塙で深く、断面形は擂鉢形を呈す。長径0.88m、短径0.80m、深さ約0.52mを測る。長軸方向はN-72°E、埋土は暗茶褐色粘質土で、ごく少量の弥生土器片が出土している。

S K 3

S K 3 は、西部で検出された楕円形の土塙で、南東部は S K 4 に切られており、上層は搅乱を受けている。長径0.88m、短径0.76m、深さ約0.28mを測る。長軸方向はN—59°—W、埋土は暗茶褐色粘質土であり、弥生土器片が数点出土している。

S K 4

S K 4 は、西部で検出された円形の土塙で、北西部と南東部の2箇所に小段を有し、S K 3 の南東部を切り取っている。長径0.78m、短径0.76m、深さ0.32mを測る。長軸方向はN—4°—W、埋土は茶褐色粘質土であり、壺（1）の他に少量の弥生土器片が出土している。

S K 5

S K 5 は、西部で検出された不整楕円形の土塙で、北半部が調査区外に延びているため、全体の形状は不明である。長径0.88m、短径の残存長0.36m、深さ0.26mを測る。長軸方向はN—62°—W、埋土は茶褐色粘質土であり、ごく少量の弥生土器片が出土している。

S K 6

S K 6 は、西部で検出された不整円形の土塙で、南端部は調査区外に延びている。長径1.04m、短径の残存長0.76m、深さ0.36mを測る。長軸方向はN—80°—E、埋土は茶褐色粘質土で少量の弥生土器片が出土している。

溝

S D 1

S D 1 は、西端部で検出された溝で、北部から南部に向かって縦走する。北部と南部の両端部が調査区外に延びているため、全長は不明であるが、検出長は約3mである。断面形はゆるやかなU字状を呈し、幅0.54m、深さ0.30mを測り、南部は現代の搅乱塙に切られている。

埋土は茶褐色粘質土であり、かなり多量の弥生土器片が出土している。S D 1 からは壺（2、3）、甕（4～7）、小型土器（8）等の遺物が出土している。

S D 1 は、中期IIIの時期に機能し、廃絶した溝で、自然流路（S R 2）に向かって流れたと考えられる。

S D 2

S D 2 は、A トレンチのほぼ中央部で検出した溝で、北部は調査区外に延びているため、全長は不明である。検出長約3.40m、幅0.68m、深さ0.52mを測る。断面形はV字形を呈し、埋土は5層に分層される。

第Ⅰ層は、淡黄褐色粘質土に黒褐色粘質土と灰褐色粘質土の小ブロックが混入した土層で、約0.10mほど堆積しており、少量の弥生土器片を含んでいる。第Ⅱ層は、淡黒灰色砂質土で、約0.30mほど堆積しており、多量の弥生土器片を含んでいる。第Ⅲ層は、黒灰色砂質土で、約8cmほどレンズ状に堆積しており、少量の弥生土器片を含んでいる。第Ⅳ層は、黒灰色シルトで、約8cmほどが西寄りに堆積しており、多量の弥生土器片が出土している。第Ⅴ層は、灰褐色粘質土で黒褐色粘質土と黄褐色粘質土の小ブロックが混入しており、約4cmほど堆積し、多量の炭化物と弥生土器片が出土している。

S D 2 からは壺（9～22）、甕（23～27）等の遺物が出土しており、中期Ⅰの溝か、もしくは細長い溝状の土塹と考えられる。

S R 2

S R 2 は、A トレンチの東半部で検出された自然流路で、北東方向から南西方向に向かって南流する。A トレンチの中央部でS R 2 の西壁を確認したが、端部が調査区外に延びているために、全長や全幅等は不明である。残存長約9.0m、残存幅10.2m、深さ1.9mを測る。

S R 2 の基底部には島状の高まりがあり、その西側はやや低くなっている、拳大程度の自然礫が集中して堆積している。また、島状の高まりの東側はかなり傾斜して低くなっている。

A トレンチのS R 2 から出土した弥生土器は、壺（28～274）、甕（275～346）、甕用の蓋（347）、鉢（348～350）、高杯（351～366）、小型土器（367）等である。石器は、石斧（368～379）、穿孔具（380）、叩石（381～387）、砥石（388～396）、石包丁（397～406）、石鎌（407、408）等が出土している。

A トレンチで検出したS R 2 からの出土遺物は、前期Ⅳから後期Ⅰの時期であり、S R 2 は、前期Ⅳの時期にはすでに機能しており、後期Ⅰの時期に廃絶したと考えられる。

B トレンチ及びC トレンチがS R 2 の東壁付近であろうと考えて調査を進めたが、S R 2 の東壁を確認することはできなかった。

以上のことから、B トレンチのすぐ東側に旧田村川が隣接していることを考えると、S R 2 の東壁は旧田村川に切られていることが判明した。

B トレンチのS R 2 からも弥生時代の遺物が多量に出土している。B トレンチのS R 2 から出土した弥生土器は、壺（409～443）、甕（444～460）、高杯（461）等であり、石器は、石斧（462）、叩石（463）、石包丁（464～467）等が出土している。

5. まとめ

Loc.36Aでは、Aトレンチの西半部で弥生時代中期の溝及び土塙群を検出したが、その中でも、SD2から出土した弥生土器は中期Iの非常に良好な一括資料である。また、Loc.36AのA～Cの各トレンチを調査した結果、SR2の推定幅は、約36mと非常に広大であることが判明した。

第7表 土塙計測表

挿図番号	遺構番号	平面形	規 模 (m)			長軸方向	断面形	備 考
			長 径	短 径	深 さ			
—	S K 1	不整円形	1.36	(0.84)	0.60	N- 72°-W	かまぼこ形	
第37図	S K 2	"	0.88	0.80	0.52	N- 72°-E	擂鉢形	
"	S K 3	楕円形	0.88	0.76	0.28	N- 59°-W	逆台形	
"	S K 4	円 形	0.78	0.76	0.32	N- 4°- W	擂鉢形	
"	S K 5	不整楕円形	0.88	(0.36)	0.26	N- 62°-W	逆台形	
"	S K 6	不整円形	1.04	(0.76)	0.36	N- 80°-E	"	

第8表 遺構出土土器観察表（Aトレンチ）

挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm) 口徑 器高 胴徑 底径	形態・文様	手法	備考
1	S K 4	壺	14.3 (4.7) — —	かなり鋭く外反する口頸部である。	口縁部外面はヨコナデで、内面はヨコハケのあとにヨコナデである。頸部はナデで仕上げる。貼付口縁である。	
2	S D 1	"	18.8 (2.1) — —	口縁部は鋭く外反する。	口縁部は貼付口縁でヨコナデで仕上げる。	薄手の壺である。
3	"	"	— (7.3) — 10.1	平底である。	ナデで仕上げる。	
4	"	甕	16.5 (2.7) — —	くの字状にかなり鋭く外反する口縁部で跳び上がり口縁である。口唇部に2条の凹線文を施す。	口縁部はヨコナデで仕上げる。	口唇部に小さな黒斑がある。
5	"	"	14.0 (3.1) — —	くの字状に鋭く外反する口縁部で口唇部に3条の凹線文を施す。	"	口縁部外面に煤状炭化物が付着する。
6	"	"	19.7 (3.5) — —	くの字状に鋭く外反する口縁部で脣はかなり張る。口唇部に2条の凹線文を施す。	口縁部はヨコナデで仕上げる。上脣部外面はナデで仕上げ、内面は横方向のヘラ削りで仕上げる。	
7	"	"	15.4 (16.7) 19.4 —	くの字状に鋭く外反する口縁部で脣もやや張り出す。口唇部に1条の凹線文を施す。	口縁部はヨコナデで仕上げる。上脣部はナデで仕上げる。下脣部外面はナデのあとに紙方向のヘラ磨きで仕上げ、内面はヘラ削りである。	
8	"	小型土器	— (1.6) — 2.7	小型土器底部で上げ底を呈す。	ナデで仕上げる。	焼成は良好である。
9	S D 2	壺	19.0 (5.8) — —	かなり鋭く外反する口頸部である。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。	
10	"	"	17.2 (3.4) — —	ゆるく外反する口縁部で口縁部内面に2条の貼付突帯を施す。口唇部上端に刻目を施す。	口縁部外面はヨコナデで仕上げる。	
11	"	"	22.7 (6.0) — —	かなり鋭く外反する口縁部で口唇部の上下両端に刻目を施す。	口縁部はヨコナデで仕上げる。	
12	"	"	16.3 (19.1) 22.1 —	ゆるやかに外反する口縁部に長脣の脣部が続く。口唇部下端に刻目を施す。上脣部に1条のヘラ描沈線を施す。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。頸部はハケ調整のあとにナデで仕上げる。上脣部外面はハケ調整のあとにヘラ磨きを施す。	上脣部に施した1条のヘラ描沈線の上下両端に刻突文をめぐらす。
13	"	"	17.4 (6.6) — —	かなり鋭く外反する口縁部である。口唇部下端に刻目を施す。	器表面が磨耗し、調整は不明である。貼付口縁である。	
14	"	"	23.5 38.1 28.4 9.4	ゆるく外反する頸部に続く口縁部は鋭く外反する。脣部は卵型である。頸部を横直線文と4条の貼付突帯で飾る。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデである。頸部はナデで仕上げる。脣部外面はタテハケのあとにナデ、内面はナデである。	完形で口縁部内面にも4条の細い突帯を貼付する。
15	"	"	15.0 (8.4) — —	ゆるく外反する口縁部に続く脣部はやや張り出す。上脣部に3条の微隆起帯がある。	口縁部はヨコナデで仕上げ、頸部以下はナデで仕上げる。	薄手の壺である。

挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口縁 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
16	S D 2	壺		(8.6) 18.4	ゆるく外反する口縁部に続く胴部は張りが弱い。上胴部に3条の微隆起帯を施し、その下に円形浮文をつらねる。	ナデで仕上げる。	薄手の壺である。
17	"	"		(7.6) 16.2	長胴の胴部である。上胴部に10条のやや乱れた桜描波状文が施される。	外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、右下がりのヘラ磨きを加える。内面はナデで仕上げる。	
18	"	"		(16.8) 28.2	卵型のやや長胴の下胴部である。	外面は右下がり方向のハケ調整のあとにナデを施し、綫方向のヘラ磨きを加える。内面はナデである。	
19	"	"		(14.5) 16.8	卵型のやや長胴の胴部である。	外面はナデで仕上げ、内面は綫方向の指ナデで仕上げる。	
20	"	"		(23.4) 26.6 8.1	卵型を呈した長胴の下胴部である。	外面は右下がり方向のハケ調整のあとにナデを施し、ヘラ磨きを加える。内面は綫方向の指ナデである。	
21	"	"		(5.2) 10.5	平底の底部で器壁は非常に厚い。	ナデで仕上げる。	
22	"	"		(6.7) 9.5	平底の底部である。	器表面が磨耗し、調整は不明である。	
23	"	甕		15.0 (12.8) 17.4	ほぼ直立気味に立ち上がる口縁部に続く胴部はやや張る。	口縁部は丁寧なヨコナデで仕上げ、上胴部はナデで仕上げる。	外面の口縁部から上胴部にかけての部分に煤状炭化物が付着する。
24	"	"		(4.8) 4.8	平底の底部で胴の張りが弱い。	ナデで仕上げる。	
25	"	"		(4.2) 6.5	"	"	下胴部内面に黒斑がある。
26	"	"		(3.5) 7.8	平底の底部である。	器表面が磨耗し、調整は不明である。	
27	"	"		(3.6) 10.2	"	外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	壺底部かもしれない。
28	S R 2	壺		18.9 (3.2)	かなり鋭く外反する口縁部である。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。	
29	"	"		17.8 (3.1)	鋭く外反する口縁部である。	口縁部はヨコナデで仕上げる。	
30	"	"		20.4 (3.5)	"	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。	

挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
31	S R 2	壺	17.7 (2.9) — —	銳く外反する口縁部である。	口縁部はヨコナデで仕上げる。	"	
32	"	"	15.0 (2.2) — —	かなり銳く外反する口縁部で3個 1対の穿孔がある。	"	"	
33	"	"	17.6 (5.5) — —	ゆるく外反する口縁部である。	口縁部外面はヨコナデで仕上げ, 内面はヨコハケのあとにヨコナデ で仕上げる。	"	
34	"	"	20.6 (8.0) — —	口縁部はゆるやかに外反する。口 唇部の縁取りをしている。	口縁部外面はヨコハケのあとにヨ コナデで仕上げ, 内面はヨコナデ で仕上げる。	薄手の壺か?	
35	"	"	16.6 (4.0) — —	ゆるく外反する口縁部である。頸 部に2条のヘラ描沈線がある。	口縁部外面はタテハケのあとにヨ コナデで仕上げ, 内面はヨコハケ のあとにヨコナデで仕上げる。	"	
36	"	"	10.7 (5.4) — —	直立する頸部に続く口縁部はゆる やかに外反する。頸部に6条のヘ ラ描沈線がある。	口縁部はヨコナデで仕上げ, 頸部 はナデで仕上げる。	やや細頸の壺 である。	
37	"	"	15.1 (7.1) — —	直立気味の頸部に続く口縁部はゆ るやかに外反する。頸部に7条のヘ ラ描沈線を施し, その下に刺突文 をめぐらす。	口縁部外面はタテハケのあとにヨ コナデで仕上げ, 内面はヨコナデ である。頸部外面はタテハケのあ とにナデで仕上げ, 内面はナデで ある。	"	
38	"	"	18.8 (2.4) — —	ゆるやかに外反する口縁部で口唇 部に刻目を施す。頸部に1条のヘラ 描沈線がある。	口縁部外面はタテハケのあとにヨ コナデで仕上げ, 内面はヨコナデ で仕上げる。	"	
39	"	"	9.7 (5.7) — —	ゆるやかに外反する口縁部である。 口縁部に2個1対の穿孔がある。 頸部に7条のヘラ描沈線と3条の貼 付突帯がある。	口縁部外面はタテハケのあとにヨ コナデで仕上げ, 内面はヨコハケ のあとにヨコナデで仕上げる。	やや細頸の壺 である。	
40	"	"	19.4 (7.0) — —	かなり銳く外反する口縁部で頸部 に6条のヘラ描沈線と2条の貼付突 帯がある。	器表面が磨耗し, 調整は不明であ る。	"	
41	"	"	18.4 (6.9) — —	直立する頸部に続く口縁部はかな り銳く外反する。頸部をヘラ描沈線 と貼付突帯で飾る。	口縁部外面はタテハケのあとにヨ コナデで仕上げ, 内面はヨコハケ のあとにヨコナデで仕上げる。頸 部はナデで仕上げる。	"	
42	"	"	26.4 (5.2) — —	口縁部はゆるく外反する。口唇部 下端に刻目を入れる。頸部にヘラ描 沈線と貼付突帯がある。	口縁部はヨコナデで仕上げる。	広口壺である。 口縁部に2個 1対の穿孔が ある。	
43	"	"	22.8 (10.0) — —	直立する頸部に続く口縁部は銳く 外反する。頸部をヘラ描沈線と貼付 突帯で飾る。	口縁部はヨコナデで仕上げる。頸 部外面はナデで仕上げ, 内面はヨ コハケのあとにナデで仕上げる。	広口壺	
44	"	"	11.8 (5.0) — —	わずかに外反する頸部に続く口縁 部はかなり銳く外反する。頸部を 貼付突帯とヘラ描沈線で飾る。	口縁部はヨコナデで仕上げ, 頸部 はナデで仕上げる。	口縁部内面に も2条の幅の 狭い貼付突 帯がある。	
45	"	"	18.8 (3.7) — —	ややゆるやかに外反する口縁部で ある。口縁部外面に2条の微隆起 帯がある。	口縁部はヨコナデで仕上げる。	薄手の壺	

挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm) 口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
46	S R 2	壺	18.5 (3.7) — —	ゆるく外反する口縁部である。口縁部に1条の微隆起帯がある。	口縁部はヨコナデで仕上げる。	薄手の壺である。
47	"	"	23.7 (3.1) — —	かなり鋭く外反する口縁部である。	口縁部はヨコナデで仕上げる。口唇部をヨコナデにより拡張する。	
48	"	"	14.6 (3.0) — —	ゆるく外反する口縁部である。口唇部下端に刻目がある。	"	
49	"	"	18.6 (3.4) — —	かなり鋭く外反する口縁部である。頸部に2条のヘラ描沈線がある。口縁部に小穿孔がめぐらされる。	口縁部はヨコナデにより仕上げる。	
50	"	"	20.9 (5.3) — —	かなり鋭く外反する口縁部である。口唇部に刻目が施される。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデである。口唇部をヨコナデにより拡張する。	
51	"	"	16.0 (2.8) — —	かなり鋭く外反する口縁部である。口縁部内面に2条の貼付突帯がある。口唇部上端に刻目がある。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデである。	
52	"	"	18.6 (5.3) — —	ゆるやかに外反する頸部に続く口縁部は鋭く外反する。口唇部下端に刻目がある。頸部に櫛描波状文と直線文がある。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデである。頸部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
53	"	"	21.8 (10.5) — —	わずかに外反する頸部に続く口縁部は鋭く外反する。口唇部下端に刻目がある。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。頸部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにナデで仕上げる。	
54	"	"	21.0 (2.6) — —	非常に鋭く外反する口縁部である。口唇部下端に刻目がある。	器表面が磨耗し、調整は不明である。	
55	"	"	22.0 (2.3) — —	鋭く外反する口縁部で口唇部下端に刻目がある。口縁部内面に櫛状原体による施文があるが判然しない。	器表面が磨耗し、調整は不明である。貼付口縁である。	
56	"	"	22.6 (2.5) — —	かなり鋭く外反する口縁部である。口唇部の上下両端に刻目を施す。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデである。貼付口縁である。	
57	"	"	19.8 (2.2) — —	鋭く外反する口縁部である。口唇部下端に刻目がある。	口縁部はヨコナデで仕上げる。貼付口縁である。	
58	"	"	20.9 (3.5) — —	かなり鋭く外反する口縁部である。口縁部内面に2条の貼付突帯がある。口縁部に3個1対の小円孔がある。	器表面が磨耗し、調整は不明である。	
59	"	"	28.5 (2.3) — —	鋭く外反する口縁部である。口縁部に小円孔がめぐらされる。口縁部内面に3条の貼付突帯がある。	"	
60	"	"	14.4 (2.1) — —	鋭く外反する口縁部である。口唇部の上下両端に刻目がある。口縁部内面に2条の貼付突帯がある。	口縁部はヨコナデで仕上げる。	口縁部に小円孔がめぐらされる。

挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口径 器高 脣径 底径	形態・文様	手法	備考
61	S R 2	壺	21.2 (3.7) — —	ゆるやかに外反する頸部に続く口縁部は鋭く外反する。口唇部に刻目がある。口縁部内面に2条の貼付突帯を施し、その間に櫛描波状文がある。	口縁部はヨコナデである。	口縁部内面の波状文はかなり乱れている。	
62	"	"	27.2 (3.2) — —	鋭く外反する口縁部である。口唇部の上下両端に刻目を施す。口縁部に小円孔がめぐらされる。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデである。貼付口縁である。		
63	"	"	26.4 (4.3) — —	かなり鋭く外反する口縁部で頸部に5条の櫛描直線文がある。	口縁部はヨコナデで仕上げる。貼付口縁である。		
64	"	"	26.2 (2.9) — —	鋭く外反する口縁部である。口唇部の上下両端に刻目を施す。頸部に3条の櫛描直線文がある。	"		
65	"	"	26.4 (4.8) — —	かなり鋭く外反する口縁部である。口唇部上端に刻目を施す。頸部に5条の櫛描直線文を施す。	口縁部はヨコナデで仕上げる。		
66	"	"	24.4 (3.4) — —	鋭く外反する口縁部である。口唇部の上下両端に刻目を施す。頸部に1条のヘラ描沈線がある。	"		
67	"	"	20.3 (8.2) — —	わずかに外反する頸部に続く口縁部はかなり鋭く外反する。頸部を貼付突帯と櫛描直線文と波状文で飾る。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。頸部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにナデで仕上げる。		
68	"	"	20.7 (7.2) — —	ゆるやかに外反する頸部に続く口縁部はかなり鋭く外反する。口縁部には小円孔がめぐらされる。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデで仕上げる。頸部はナデで仕上げる。	口縁部内面に3条の幅の狭い貼付突帯がある。	
69	"	"	23.3 (9.6) — —	ゆるやかに外反する頸部に続く口縁部は鋭く外反する。口縁部内面に2条の貼付突帯がある。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデである。頸部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	口縁部内面に小円孔がめぐらされる。頸部外面を貼付突帯と櫛描直線文で飾る。	
70	"	"	23.6 (10.0) — —	ゆるやかに外反する頸部に続く口縁部はかなり鋭く外反する。口縁部内面に3条の貼付突帯がある。口縁部に小円孔がめぐらされる。	口縁部はヨコナデで仕上げ、頸部はナデで仕上げる。	頸部外面を貼付突帯と櫛描直線文で飾る。	
71	"	"	15.4 (6.7) — —	ゆるく外反する頸部に続く口縁部は鋭く外反する。口縁部に3個1対の小円孔がある。頸部を貼付突帯と櫛描直線文で飾る。	"		
72	"	"	21.0 (6.0) — —	ゆるやかに外反する口縁部である。口唇部に刻目を施す。頸部を貼付突帯と櫛描波状文と直線文で飾る。	器表面が磨耗し、調整は不明である。		
73	"	"	20.8 (5.0) — —	鋭く外反する口縁部である。口縁部内面に2条の貼付突帯がある。	"		
74	"	"	26.6 (3.9) — —	鋭く外反する口縁部で、内面に3条の貼付突帯がある。口縁部に3個1対の小円孔がある。	口縁部はヨコナデで仕上げる。		
75	"	"	18.0 (4.0) — —	鋭く外反する口縁部で、内面に3条の貼付突帯がある。口縁部に3個1対の小円孔がある。	器表面が磨耗し、調整は不明である。		

挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
76	S R 2	壺	20.2 (4.2) — —	かなり鋭く外反する口縁部で内面に3条の貼付突帯がある。口縁部に3個1対の小円孔がある。	口縁部はヨコナデで仕上げる。		
77	"	"	22.8 (8.1) — —	ゆるく外反する頸部に続く口縁部はなめらかに外反する。口縁部内面に2条の貼付突帯がある。口縁部に6個1対の小円孔がある。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。頸部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにナデである。	頸部を貼付突帯とヘラ描沈線で飾る。	
78	"	"	23.7 (9.8) — —	やや斜行する頸部に続く口縁部はゆるやかに外反する。口唇部下端に刻目がある。上胸部に2条の微隆起帯がある。	口縁部はヨコナデで仕上げる。頸部はナデで仕上げる。		
79	"	"	— (7.2) — —	かなり胴の張る上胸部である。上胸部に4帯の横描直線文帯を配し、その下に乱れた横描波状文を施す。	上胸部はナデで仕上げる。		
80	"	"	16.9 (4.4) — —	かなり鋭く外反する口縁部である。口唇部の上下両端に刻目を施す。	口縁部はヨコナデで仕上げる。		
81	"	"	25.3 (3.1) — —	鋭く外反する口縁部である。口唇部の上下両端に刻目を施す。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。		
82	"	"	16.4 (2.7) — —	"	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデである。貼付口縁である。		
83	"	"	10.0 (2.5) — —	"	器表面が磨耗し、調整は不明である。貼付口縁である。		
84	"	"	21.3 (4.7) — —	かなり鋭く外反する口縁部である。口唇部の上下両端に刻目がある。	口縁部はヨコナデで仕上げる。貼付口縁である。		
85	"	"	23.4 (3.8) — —	鋭く外反する口縁部である。口唇部の上下両端に刻目がある。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデである。貼付口縁である。		
86	"	"	20.6 (2.3) — —	鋭く外反する口縁部である。口唇部の上下両端に刻目を入れる。口縁部内面に櫛状原体による刺突文がある。	器表面が磨耗し、調整は不明である。貼付口縁である。		
87	"	"	19.2 (5.1) — —	ややゆるやかに外反する口縁部である。口唇部の上下両端に刻目を施す。	"		
88	"	"	25.2 (7.1) — —	ゆるやかに外反する頸部に続く口縁部は鋭く外反する。口唇部の上下両端に刻目がある。	口縁部はヨコナデで仕上げ、頸部はナデで仕上げる。貼付口縁である。		
89	"	"	23.1 (10.6) — —	直立気味の頸部に続く口縁部はかなり鋭く外反する。口唇部の上下両端に刻目がある。	"	上胸部外面にも梢円形の刺突文がめぐらされる。	
90	"	"	20.0 (7.0) — —	ゆるく外反する口縁部である。口唇部の上下両端に刻目を施す。頸部下端に刺突文がある。	"		

挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
91	S R 2	壺	23.3 (6.0) — —	直立気味の頸部に続く口縁部はかなり鋭く外反する。口唇部下端に刻目がある。	口縁部外面はヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。頸部外面は縦方向のナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにナデ。		
92	"	"	13.8 (4.9) — —	ゆるく外反する口縁部である。口唇部の上下両端に刻目がある。	器表面が磨耗し、調整は不明であるが、口縁部内面には右下がり方向のハケ目痕が残る。		
93	"	"	14.0 (5.4) — —	ゆるく外反する口縁部である。口唇部下端に刻目がある。頸部下端にも列点文がめぐらされる。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデで仕上げる。		
94	"	"	15.6 (3.7) — —	ゆるやかに外反する口縁部で口唇部下端に刻目がある。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデで仕上げる。		
95	"	"	14.8 (4.8) — —	かなり鋭く外反する口縁部である。口唇部下端に刻目がある。	口縁部はヨコナデで仕上げる。		
96	"	"	18.5 (4.8) — —	ゆるやかに外反する口縁部である。	"		
97	"	"	14.6 (3.2) — —	かなり鋭く外反する口縁部で口唇部下端に刻目がある。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。		
98	"	"	17.6 (9.5) — —	直立する頸部に続く口縁部はゆるく外反する。口唇部下端に刻目がある。口縁部外面に2条の微隆起帯がある。	口縁部はヨコナデで仕上げ、頸部はナデで仕上げる。	上胸部外面に3条の微隆起帯がある。頸部にも縦方向の微隆起帯がある。	
99	"	"	19.6 (8.5) — —	わずかに斜行する頸部に続く口縁部は鋭く外反する。頸部に縦方向の微隆起帯がある。	口縁部はヨコナデで仕上げる。頸部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	上胸部にも3条の微隆起帯がある。	
100	"	"	12.7 (3.5) — —	鋭く外反する口縁部である。口唇部下端に刻目がある。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデで仕上げる。		
101	"	"	20.7 (4.0) — —	ゆるやかに外反する口縁部である。口唇部下端に刻目がある。	口縁部はヨコナデで仕上げる。貼付口縁である。	口縁部内面に黒斑がある。	
102	"	"	10.6 (5.0) — —	直立気味の頸部に続く口縁部はゆるやかに外反する。	"	細頸壺か？	
103	"	"	11.4 (1.9) — —	かなり鋭く外反する口縁部である。口唇部下端に刻目がある。	"	細頸壺か？頸部に描直線文がある。	
104	"	"	11.2 (4.7) — —	わずかに外反する頸部に続く口縁部は鋭く外反する。口唇部下端に刻目がある。口縁部外面には笠圧痕がある。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。頸部外面はタテハケのあとにナデで仕上げる。	やや頸の細い壺である。	
105	"	"	12.9 (3.7) — —	かなり鋭く外反する口縁部である。口唇部下端に刻目がある。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデで仕上げる。貼付口縁である。		

挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm) 口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
106	S R 2	壺	14.3 (4.6) — —	ゆるく外反する口縁部である。口唇部下端に刻目がある。	口縁部はヨコナデで仕上げる。貼付口縁である。	
107	"	"	18.2 (2.8) — —	かなり鋭く外反する口縁部である。口唇部下端に刻目がある。	"	
108	"	"	17.4 (3.4) — —	"	口縁部外面はヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。貼付口縁である。	
109	"	"	20.4 (3.0) — —	ゆるやかに外反する口縁部で口唇部下端に刻目を施す。	口縁部はヨコナデで仕上げる。貼付口縁である。	薄手の壺である。
110	"	"	19.9 (4.6) — —	ゆるく外反する頸部に続く口縁部は鋭く外反する。頸部に1条の突帯を貼付し、その下に櫛描波状文を施す。	口縁部はヨコナデで仕上げ、頸部はナデで仕上げる。貼付口縁である。	
111	"	"	17.5 (6.0) — —	ゆるく外反する頸部に続く口縁部は鋭く外反する。口唇部下端に刻目を施す。頸部外面に綫方向のヘラ描沈線がある。	"	
112	"	"	22.3 (4.7) — —	鋭く外反する口縁部である。口唇部上端に櫛状原体による刻目が部分的に残る。口縁部内面に櫛描廉状文がある。	口縁部外面はヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。	
113	"	"	16.1 (6.1) — —	直立気味の頸部に続く口縁部はゆるく外反する。口唇部に刻目がある。	口縁部はヨコナデで仕上げる。頸部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	上胴部に1条のヘラ描沈線を施し、その下に刺突文をめぐらす。
114	"	"	18.0 (3.2) — —	かなり鋭く外反する口縁部である。口唇部に刻目を施す。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデである。	
115	"	"	13.0 (7.0) — —	ほぼ直立気味に立ち上がる頸部に続く口縁部はゆるやかに外反する。口唇部に刻目がある。	口縁部はヨコナデで仕上げる。頸部はナデで仕上げる。貼付口縁である。	
116	"	"	15.2 (6.2) — —	わずかに斜行する頸部に続く口縁部はゆるやかに外反する。口唇部に刻目を施す。	器表面が磨耗し、調整は不明である。貼付口縁である。	
117	"	"	13.8 (7.2) — —	"	器表面が剥落し、調整は不明である。貼付口縁である。	
118	"	"	15.0 (5.4) — —	"	口縁部はヨコナデで仕上げ、頸部はナデで仕上げる。貼付口縁である。	
119	"	"	20.8 (4.6) — —	わずかに外反する頸部に続く口縁部は鋭く外反する。口唇部に刻目を施す。	"	
120	"	"	26.0 (4.0) — —	鋭く外反する口縁部である。口唇部に斜格子目状に刻目を入れる。口縁部内面にはハケ状原体で羽状文を施す。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。貼付口縁である。	施文はハケ状原体で施している。

挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm) 口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
121	S R 2	壺	20.8 (5.0) — —	かなり鋭く外反する口縁部である。口唇部にハケ状原体による刻目を施す。	口縁部外面はヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。貼付口縁である。	
122	"	"	26.9 (4.6) — —	鋭く外反する口縁部で口唇部にハケ状原体による刻目を施す。	口縁部はヨコナデで仕上げる。貼付口縁である。	
123	"	"	31.0 (2.8) — —	かなり鋭く外反する口縁部である。口唇部に列点文風の刻目がある。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデで仕上げる。	広口壺である。
124	"	"	19.4 (7.8) — —	やや斜行する頸部に続く口縁部は鋭く外反する。口唇部に刻目を施し、頸部下端に1条の貼付突帯がある。	口縁部はヨコナデで仕上げ、頸部はナデで仕上げる。貼付口縁である。	
125	"	"	24.2 (4.5) — —	鋭く外反する口縁部である。口唇部に刻目を施し、口縁部内面に椭状原体で扇形文をめぐらす。	口縁部外面はヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。貼付口縁である。	
126	"	"	16.5 (4.2) — —	かなり鋭く外反する口縁部である。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面は器表面が磨耗し、不明である。貼付口縁である。	
127	"	"	15.1 (4.2) — —	鋭く外反する口縁部である。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。貼付口縁である。	
128	"	"	15.3 (3.9) — —	かなり鋭く外反する口縁部である。	"	
129	"	"	15.6 (2.2) — —	鋭く外反する口縁部である。	"	
130	"	"	12.0 (4.4) — —	ゆるやかに外反する口縁部である。	口縁部はヨコナデで仕上げ、貼付口縁である。	
131	"	"	15.1 (5.7) — —	直立する頸部に続く口縁部は鋭く外反する。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。貼付口縁である。	
132	"	"	16.0 (3.4) — —	かなり鋭く外反する口縁部である。	器表面が磨耗し、調整は不明である。	
133	"	"	15.9 (3.0) — —	鋭く外反する口縁部である。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。貼付口縁である。	
134	"	"	17.0 (5.4) — —	わずかに外反する頸部に続く口縁部は鋭く外反する。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。頸部外面はタテハケのあとにナデで仕上げる。貼付口縁である。	
135	"	"	16.2 (2.0) — —	鋭く外反する口縁部である。	口縁部はヨコナデで仕上げる。貼付口縁である。	

捕図番号	遺構番号	器種	法量 (cm) 口径 器高 脇径 底径	形態・文様	手法	備考
136	S R 2	壺	14.0 (3.1) — —	銳く外反する口縁部である。	口縁部外面はヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとヨコナデで仕上げる。貼付口縁である。	
137	"	"	20.2 (3.1) — —	"	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。貼付口縁である。	
138	"	"	18.5 (5.6) — —	ゆるやかに外反する頸部に続く口縁部は銳く外反する。	口縁部はヨコナデで仕上げ、頸部はナデで仕上げる。貼付口縁である。	口唇部はヨコナデにより偽凹線文風になる。
139	"	"	17.2 (3.2) — —	銳く外反する口縁部である。	口縁部はヨコナデで仕上げる。貼付口縁である。	
140	"	"	18.4 (6.2) — —	ゆるく外反する頸部に続く口縁部は銳く外反する。	器表面が磨耗し、調整は不明である。貼付口縁である。	
141	"	"	15.0 (3.4) — —	かなり銳く外反する口縁部である。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデで仕上げる。貼付口縁である。	
142	"	"	17.8 (3.9) — —	銳く外反する口縁部である。	器表面が剥落し、調整は不明である。貼付口縁である。	
143	"	"	18.0 (4.8) — —	かなり銳く外反する口縁部である。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデで仕上げる。貼付口縁である。	
144	"	"	11.6 (4.4) — —	ゆるやかに外反する口縁部である。	口縁部はヨコナデで仕上げる。頸部はナデで仕上げる。貼付口縁である。	
145	"	"	17.9 (7.2) — —	ゆるく外反する頸部に続く口縁部は銳く外反する。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデで仕上げる。頸部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデ。貼付口縁である。	
146	"	"	20.7 (5.9) — —	口頸部は銳く外反する。	器表面が磨耗し、調整は不明である。貼付口縁である。	
147	"	"	11.1 (3.8) — —	やや斜行する頸部に続く口縁部は銳く外反する。	口縁部はヨコナデで仕上げ、頸部はナデで仕上げる。貼付口縁である。	
148	"	"	20.7 (3.7) — —	銳く外反する口縁部である。	口縁部はヨコナデで仕上げる。貼付口縁である。	
149	"	"	19.5 (6.9) — —	ゆるやかに外反する頸部に続く口縁部は銳く外反する。	口縁部外面はヨコナデで仕上げ、内面は横方向のヘラ磨きで仕上げる。頸部はナデである。貼付口縁である。	
150	"	"	11.5 (5.6) — —	直立気味の頸部に続く口縁部はゆるやかに外反する。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデである。頸部はナデで仕上げる。貼付口縁である。	

挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm) 口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
151	S R 2	壺	19.8 (3.7) — —	鋭く外反する口縁部である。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデで仕上げる。貼付口縁である。	
152	"	"	12.7 (5.2) — —	やや斜行する頸部に続く口縁部は鋭く外反する。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。貼付口縁である。	
153	"	"	17.3 (1.9) — —	鋭く外反する口縁部である。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデである。貼付口縁である。	
154	"	"	20.1 (7.9) — —	ゆるやかに外反する頸部に続く口縁部は鋭く外反する。	口縁部はヨコナデで仕上げ、頸部はナデで仕上げる。口唇部はヨコナデにより凹んでいる。貼付口縁である。	
155	"	"	16.0 (2.8) — —	直立する頸部に続く口縁部は鋭く外反する。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。貼付口縁である。	上脣部外面に煤状炭化物が付着する。
156	"	"	24.6 (2.9) — —	鋭く外反する口縁部である。口縁部外面に刻目を施す。	口縁部はヨコナデで仕上げる。貼付口縁である。	やや広口の壺である。
157	"	"	15.8 (3.2) — —	ゆるやかに外反する口縁部外面に刻目を施す。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデで仕上げる。貼付口縁である。	
158	"	"	23.8 (1.6) — —	鋭く外反する口縁部である。	口縁部はヨコナデで仕上げる。貼付口縁である。	
159	"	"	24.4 (3.8) — —	"	口縁部はヨコナデで仕上げる。口唇部はヨコナデによりやや凹んでいる。貼付口縁である。	
160	"	"	22.8 (2.8) — —	"	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデである。貼付口縁である。	
161	"	"	24.3 (1.7) — —	"	器表面が磨耗し、調整は不明である。	
162	"	"	22.9 (3.3) — —	かなり鋭く外反する口縁部である。	口縁部外面はヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。貼付口縁である。	やや広口の壺である。
163	"	"	24.3 (3.9) — —	"	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。貼付口縁である。	
164	"	"	22.5 (4.5) — —	"	器表面が磨耗し、調整は不明である。貼付口縁である。	口縁部内面に黒斑がある。
165	"	"	20.9 (4.9) — —	ゆるやかに外反する口縁部である。	口縁部外面はヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。貼付口縁である。	

插図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
166	S R 2	壺	24.2 (5.3) — —	かなり鋭く外反する口縁部である。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。貼付口縁である。		
167	"	"	22.8 (3.1) — —	ゆるやかに外反する口縁部である。	口縁部はヨコナデで仕上げる。貼付口縁である。		
168	"	"	23.5 (3.4) — —	かなり鋭く外反する口縁部である。	"		
169	"	"	18.5 (4.8) — —	ゆるやかに外反する頸部に続く口縁部は鋭く外反する。	"		
170	"	"	13.8 (3.7) — —	ゆるやかに外反する口縁部である。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。貼付口縁である。		
171	"	"	18.1 (5.9) — —	斜行する頸部に続く口縁部はゆるく外反する。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデである。頸部はナデで仕上げる。貼付口縁である。		
172	"	"	12.6 (3.1) — —	ゆるやかに外反する口縁部である。	器表面が磨耗し、調整は不明である。貼付口縁である。		
173	"	"	14.0 (3.0) — —	"	口縁部はヨコナデで仕上げる。貼付口縁である。		
174	"	"	15.4 (3.3) — —	"	"		
175	"	"	15.4 (2.7) — —	鋭く外反する口縁部である。	"		
176	"	"	17.0 (4.0) — —	ゆるやかに外反する口縁部である。	"		
177	"	"	12.1 (3.1) — —	ややゆるやかに外反する口縁部である。	口縁部外面はヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。貼付口縁である。		
178	"	"	15.0 (2.7) — —	鋭く外反する口縁部である。	口縁部はヨコナデで仕上げる。貼付口縁である。		
179	"	"	14.8 (2.7) — —	ややゆるやかに外反する口縁部である。	口縁部はヨコナデで仕上げる。	口縁部外面に煤状炭化物が付着する。	
180	"	"	6.9 15.7 11.4 4.5	ゆるやかに外反する口縁部に卵型の胴部が続く形態である。	口縁部はヨコナデで仕上げ、胴部外面はヨコハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。貼付口縁である。	完形である。	

捕図番号	遺構番号	器種	口径 法量 (cm) 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
181	S R 2	壺	16.4 (3.0) — —	ゆるやかに外反する口縁部である。	口縁部はハケ調整のあとにヨコナデで仕上げる。貼付口縁である。	
182	"	"	16.8 (4.2) — —	"	口縁部はヨコナデで仕上げる。	
183	"	"	19.8 (7.6) — —	"	器表面が磨耗し、調整が不明である。貼付口縁である。	
184	"	"	17.0 (3.7) — —	かなり鋭く外反する口縁部である。	口縁部外面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデで仕上げる。頸部外面はナデで仕上げ、内面は綫方向のナデ。貼付口縁である。	
185	"	"	17.0 (3.3) — —	直立する頸部に続く口縁部は鋭く外反する。口唇部に刻目を施す。	口縁部はヨコナデで仕上げる。貼付口縁である。	薄手の壺である。
186	"	"	21.6 (4.0) — —	かなり鋭く外反する口縁部である。口唇部下端に刻目がある。	口縁部外面はハケ調整のあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデである。貼付口縁である。	"
187	"	"	20.0 (4.0) — —	鋭く外反する口縁部である。口唇部外面に刻目がある。口縁部外面に2条の微隆起帯がある。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデである。	薄手の壺である。口縁部外面に櫛描直線文がある。
188	"	"	20.6 (4.8) — —	ゆるやかに外反する口縁部である。口唇部に刻目がある。口縁部外面に2条の微隆起帯がある。	口縁部はヨコナデで仕上げる。	薄手の壺である。
189	"	"	20.2 (3.7) — —	口縁部は鋭く外反する。口唇部に刻目があり、口縁部外面に2条の微隆起帯がある。	"	"
190	"	"	19.7 (2.2) — —	かなり鋭く外反する口縁部である。口唇部に刻目がある。口縁部外面に2条の微隆起帯がある。	口縁部はヨコナデで仕上げる。貼付口縁である。	"
191	"	"	20.8 (2.8) — —	鋭く外反する口縁部である。口縁部外面に刻目を入れ、その下に2条の微隆起帯をめぐらし、列点文を加える。	"	"
192	"	"	19.5 (2.7) — —	鋭く外反する口縁部である。口唇部下端に刻目を入れる。口縁部外面に1条の微隆起帯がある。	口縁部はヨコナデで仕上げる。	薄手の壺である。口縁部外面に綫方向のヘラ描短直線がある。
193	"	"	23.4 (1.5) — —	鋭く外反する口縁部で口唇部下端に刻目を入れ、その下に1条の微隆起帯をめぐらす。	"	口縁部外面に綫方向の棒状浮文がある。薄手の壺である。
194	"	"	27.0 (1.7) — —	非常に鋭く外反する口縁部で口唇部に刻目をめぐらす。口縁部外面に2条の微隆起帯がある。	"	薄手の壺である。
195	"	"	20.6 (2.6) — —	ほぼ直立気味にゆるく外反する口縁部である。口唇部に刻目を施す。	"	薄手の壺で、口縁部外面に煤状炭化物が付着する。

挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm) 口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手 法	備考
196	S R 2	壺	16.6 (5.4) — —	ゆるく外反する頸部に続く口縁部はなめらかに外反する。口唇部下端に刻目がある。	口縁部外面はヨコナデで仕上げ、頸部外面はナデである。口頸部内面は器表面が磨耗し、調整が不明である。	口頸部外面に綫方向の棒状浮文がある。薄手の壺である。
197	"	"	11.0 (6.0) — —	ゆるやかに外反する口頸部である。口縁部外面には2条の微隆起帯がある。	口縁部はヨコナデで仕上げ、頸部はナデで仕上げる。	薄手の壺か?
198	"	"	12.1 (6.5) — —	直立気味の頸部に続く口縁部はゆるやかに外反する。口縁部外面に列点文を施し、その下に突帶を貼付する。	器表面が磨耗し、調整が不明である。	
199	"	"	12.4 (7.0) — —	内湾して屈曲する頸部に続く口縁部はゆるやかに外反する。	口縁部はヨコナデで仕上げ、頸部はナデで仕上げる。	
200	"	"	13.8 (2.3) — —	かなり鋭く外反する口縁部である。口縁部内面に櫛状原体により山形文をめぐらす。	口縁部はヨコナデで仕上げる。貼付口縁である。	口縁部内面に1条の沈線を入れ、施文部位の区画をしている。
201	"	"	19.0 (3.2) — —	鋭く外反する口縁部である。口縁部内面には幅の狭い2条の貼付突帶をめぐらし、その上にヘラ描列点文を加える。	"	
202	"	"	17.1 (4.5) — —	ゆるやかに外反する頸部に続く口縁部は鋭く外反する。口縁部外面に2条のヘラ描沈線を施し、その上にヘラ状原体で刻目を施す。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデである。頸部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	口縁部外面の上端にはハケ状原体による圧痕がある。貼付口縁である。
203	"	"	23.7 (2.5) — —	鋭く外反する口縁部で内面に3条の微隆起帯を施している。	口縁部はヨコナデで仕上げる。貼付口縁である。	
204	"	"	14.3 (4.7) — —	直立気味の頸部に続く口縁部はゆるやかに外反する。口縁部内面に櫛描波状文がある。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。頸部はハケ調整のあとにナデで仕上げる。貼付口縁である。	
205	"	"	11.2 (3.6) — —	かなり鋭く外反する口縁部である。口縁部内面に櫛描直線文と扇形文がある。	口縁部はヨコナデである。貼付口縁である。	
206	"	"	16.3 (7.1) — —	ゆるく外反する細い頸部に続く口縁部は大きく外反する。頸部に櫛描直線文を施す。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。頸部はナデで仕上げる。貼付口縁である。	
207	"	"	16.7 (14.3) — —	直立気味の頸部に続く口縁部はゆるやかに外反する。口唇部に2条の凹線文がある。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。頸部はハケ調整のあとにナデで仕上げる。	上胸部外面はタテハケで仕上げ、内面はナデである。
208	"	"	27.6 (12.9) — —	ゆるく外反する頸部に続く口縁部は鋭く外反する。口唇部に3条の凹線文を施す。上胸部にヘラ描列点文を加える。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデである。頸部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
209	"	"	21.9 (5.7) — —	かなり鋭く外反する口縁部で口唇部に3条の凹線文が施される。	器表面が磨耗し、調整が不明である。	
210	"	"	22.0 (8.4) — —	ゆるく外反する頸部に続く口縁部は鋭く外反する。口唇部に4条の凹線文がめぐらされる。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデである。頸部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	

挿図番号	遺構番号	器種	法量 器高 胴径 底径 (cm)	形態・文様	手法	備考
211	S R 2	壺	21.8 (5.1) _____ _____ _____	かなり鋭く外反する口縁部で口唇部に5条の凹線文がある。口縁部外面にヘラ描列点文がめぐらされる。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。	
212	"	"	14.3 (7.0) _____ _____ _____	直立気味の頸部に続く口縁部はゆるやかに外反する。口唇部に4条の凹線文を施し、その上に刻目を部分的に入れる。	口縁部はヨコナデで仕上げ、頸部はナデで仕上げる。	頸部外面にはハケ状原体で羽状文を施す。
213	"	"	16.6 (8.9) _____ _____ _____	わずかに斜行する頸部に続く口縁部は鋭く外反する。上脣部もやや張る。口唇部に1条の偽凹線文を入れる。	口縁部はヨコナデで仕上げ、頸部はナデで仕上げる。上脣部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	口唇部に円形の竹管文を施す。頸部下端にも刺突文をめぐらす。
214	"	"	18.2 (3.1) _____ _____ _____	鋭く外反する口縁部で口唇部に2条の偽凹線文を施す。口唇部に円形竹管文がみられ、口縁部外面には列点文がある。	口縁部はヨコナデで仕上げる。	
215	"	"	13.7 (2.9) _____ _____ _____	直立気味の頸部に続く口縁部はゆるやかに外反する。口唇部に2条の偽凹線文がある。	"	
216	"	"	18.8 (2.5) _____ _____ _____	ゆるやかに外反する口縁部で口唇部に2条の凹線文がある。	"	口縁部内面に小さな黒斑がある。
217	"	"	17.2 (3.0) _____ _____ _____	かなり鋭く外反する口縁部で口唇部に2条の凹線文がある。	"	
218	"	"	15.4 (4.2) _____ _____ _____	直立する頸部に続く口縁部は鋭く外反し、口唇部に2条の凹線文がある。	口縁部はヨコナデで仕上げる。頸部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
219	"	"	14.6 (7.3) _____ _____ _____	ゆるやかに外反する口頸部で口唇部に3条の偽凹線文がある。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデである。頸部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデで仕上げる。	
220	"	"	17.0 (3.3) _____ _____ _____	ややゆるやかに外反する口縁部で口唇部に2条の偽凹線文がある。	口縁部はヨコナデで仕上げる。	
221	"	"	14.1 (3.9) _____ _____ _____	斜行する頸部に続く口縁部はかなり鋭く外反する。口唇部に3条の偽凹線文がある。	口縁部はヨコナデで仕上げ、頸部はナデで仕上げる。	
222	"	"	13.3 (3.5) _____ _____ _____	ゆるやかに外反する口縁部で口唇部に3条の凹線文を施す。	口縁部はヨコナデで仕上げる。	
223	"	"	15.2 (3.4) _____ _____ _____	直立気味の頸部に続く口縁部は鋭く外反する。口唇部の縁取りをして2条の凹線文を入れる。	"	
224	"	"	16.4 (4.4) _____ _____ _____	ゆるやかに外反する頸部に続く口縁部は鋭く外反し、口唇部に2条の凹線文を入れる。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。	
225	"	"	14.0 (6.1) _____ _____ _____	ゆるやかに外反する口頸部で口唇部に2条の凹線文を入れる。	口縁部はヨコナデで仕上げ、頸部はナデで仕上げる。	

挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口径 器高 脣径 底径	形態・文様	手法	備考
226	S R 2	壺	18.0 (6.2) — —	直立気味の頸部に続く口縁部は鋭く外反し、口唇部に2条の偽凹線文を施す。	口縁部はヨコナデで仕上げ、頸部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにナデで仕上げる。		
227	"	"	15.0 (5.0) — —	かなり鋭く外反する口縁部である。口唇部に2条の偽凹線文がある。頸部外面に彫刻直線文が残る。	器表面が磨耗し、調整は不明である。		
228	"	"	10.8 (5.0) — —	ゆるやかに外反する頸部に続く口縁部は鋭く外反する。口唇部に2条の凹線文がある。	口縁部はヨコナデで仕上げ、頸部はナデで仕上げる。		頸部下端にハケ状原体による列点文がめぐらされる。
229	"	"	20.0 (5.3) — —	ゆるやかに外反する口頸部で口唇部に1条の凹線文が残る。	口縁部はヨコナデで仕上げ、頸部はナデで仕上げる。貼付口縁である。		
230	"	"	19.4 (3.5) — —	非常に鋭く外反する口縁部で口唇部に1条の偽凹線文がある。	口縁部はヨコナデで仕上げる。貼付口縁である。		
231	"	"	16.0 (2.4) — —	鋭く外反する口縁部である。	器表面が磨耗し、調整は不明である。		
232	"	"	17.4 (3.6) — —	かなり外反する口縁部である。	器表面が剥落し、調整は不明である。		
233	"	"	11.7 (5.0) — —	直立気味の頸部に続く口縁部はややゆるやかに外反する。	口縁部はヨコナデで仕上げ、頸部はナデで仕上げる。		
234	"	"	18.4 (7.0) — —	ゆるく外反して立ち上がる口頸部である。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。		
235	"	"	14.9 (6.7) — —	直立気味の頸部に続く口縁部はゆるやかに外反する。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。頸部はハケ調整のあとにナデ。		口頸部外面に大きな黒斑がある。
236	"	"	13.3 (3.7) — —	直立気味の頸部に続く口縁部は短いが鋭く外反する。口唇部に竹管状工具による円形の刺突文がある。	口縁部はヨコナデで仕上げ、頸部はナデで仕上げる。		頸部上端にも刻目がめぐらされる。
237	"	"	(11.1) (23.6) 17.6 5.8	直立気味に立ち上がる口頸部に卵型の胸部が続く。	頸部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。胸部は器表面が磨耗し、調整は不明である。		
238	"	"	13.2 (6.3) — —	直立する頸部に続く口縁部はゆるやかに外反する。	器表面が磨耗し、調整は不明である。		
239	"	"	13.2 (3.5) — —	ややゆるやかに外反する口頸部である。	口縁部はヨコナデで仕上げる。		
240	"	"	15.4 (10.1) — —	わずかに外反気味に立ち上がる口頸部である。	口縁部外面はヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。頸部外面はタテハケのあとにナデ、内面はナデで仕上げる。		

挿図番号	遺構番号	器種	口径 法量 (cm) 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
241	S R 2	壺	14.7 (5.5) — —	ゆるく外反気味に立ち上がる口頸部である。	口縁部はヨコナデで仕上げ、頸部はナデで仕上げる。	
242	"	"	12.6 (5.7) — —	ゆるやかに外反しながら立ち上がる頸部に続く口縁部は短いが、鋭く外反する。	"	
243	"	"	14.4 (12.0) — —	直立気味に立ち上がる口頸部に続く上胴部は張りが弱い。	器表面が磨耗し、調整は不明である。	
244	"	"	14.2 (5.0) — —	わずかに斜行する頸部に続く口縁部は短いが、鋭く外反する。	口縁部はヨコナデで仕上げ、頸部はナデで仕上げる。 頸部外面に縦方向の2条の箇描沈線がある。	
245	"	"	12.0 (2.8) — —	ゆるく外反する頸部に続く口縁部は短いが鋭く外反する。口唇部はヨコナデによりややくぼむ。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。	
246	"	"	8.6 (11.5) — —	ほぼ直立しながら立ち上がる細長い口頸部に続く上胴部は張りが弱い。	口頸部外面はタテハケのあとに縦方向のヘラ磨きで仕上げ、内面はヨコハケのあとにナデで仕上げる。上胴部はナデで仕上げる。	細頸壺か？
247	"	"	16.0 (6.0) — —	ほぼ直立する頸部に続く口縁部はなめらかに外反する。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデである。頸部はナデで仕上げる。	器表面が磨耗もしくは剥落する。
248	"	"	16.4 (8.8) — —	かなり鋭く外反する口頸部に続く上胴部は張りが弱い。頸部下端に1条のヘラ描沈線がある。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。上胴部はナデで仕上げる。上胴部内面は縦方向の指ナデで仕上げる。	
249	"	"	17.4 (6.4) — —	ゆるく外反しながら立ち上がる頸部に続く口縁部はかなり鋭く外反する。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデである。頸部外面はタテハケのあとにナデ、内面はナデで仕上げる。	頸部内面に輪積み成形痕が残る。
250	"	"	17.0 (5.6) — —	直立して立ち上がる頸部に続く口縁部はゆるく外反する。	口縁部はヨコナデで仕上げ、頸部はナデである。	
251	"	"	27.0 (6.3) — —	ゆるく外反して立ち上がる頸部に続く口縁部はなめらかに外反する。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。	
252	"	"	24.1 (11.9) — —	ゆるく外反して立ち上がる頸部に続く口縁部はゆるやかに外反する。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデである。頸部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。上胴部はナデで仕上げる。	
253	"	"	15.6 (4.8) — —	ゆるく外反する口縁部である。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。貼付口縁である。	頸部外面に輪積み成形痕が残る。
254	"	"	13.1 (8.3) — —	直立気味の頸部に続く口縁部はゆるく外反する。上胴部の張りは弱い。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。上胴部外面はタテハケのあとにナデで仕上げる。	上胴部内面は縦方向の指ナデで仕上げる。貼付口縁である。
255	"	"	15.5 (8.2) — —	直立気味に立ち上がる頸部に続く口縁部は短いが鋭く外反する。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデである。上胴部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにナデで仕上げる。	

挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
256	S R 2	壺	20.8 (8.0) — —	直立気味の頸部に続く口縁部はゆるやかに外反する。上胴部の張りは弱い。頸部下端にヘラ描列点文がある。	口縁部外面はヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。貼付口縁である。		
257	"	"	14.0 (9.6) — —	ほぼ直立気味に立ち上がる口縁部に続く上胴部は非常に強く張り出す。	器表面が磨耗し、調整は不明な点が多いが、上胴部内面は右下がり方向のヘラ削りで仕上げる。		
258	"	"	14.4 (4.2) — —	直立して立ち上がる頸部に続く口縁部はゆるやかに外反する。	口縁部はヨコナデで仕上げ、頸部はナデで仕上げる。		口縁部外面に煤状炭化物が付着する。
259	"	"	14.6 (3.5) — —	かなり鋭く外反する口縁部である。	器表面が磨耗し、調整は不明であるが、口縁部外面にハケ目痕が残る。		
260	"	"	15.9 (7.8) — —	ほぼ直立して立ち上がる頸部に続く口縁部はゆるく外反する。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。頸部はハケ調整のあとにナデである。		
261	"	"	13.7 (3.9) — —	ゆるやかに外反する口縁部である。	口縁部はヨコナデで仕上げる。		
262	"	"	18.8 (2.5) — —	かなり鋭く外反する口縁部である。	"		
263	"	"	17.0 (6.3) — —	ほぼ直立して立ち上がる頸部に続く口縁部はなめらかに外反する。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、頸部外面はナデである。内面は器表面が磨耗し、調整は不明である。		
264	"	"	27.8 (5.8) — —	ゆるく外反して立ち上がる頸部に続く口縁部は鋭く外反する。口唇部に二枚目の腹縁部で施した刻目がある。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。頸部はハケ調整のあとにナデである。		
265	"	"	14.9 (2.9) — —	ゆるやかに外反する口縁部である。	口縁部はヨコナデで仕上げる。		壺の口縁部かもしれない。 口縁部外面に煤状炭化物が付着する。
266	"	"	17.3 (3.5) — —	斜行する頸部に続く口縁部は短いが鋭く外反する。	"		
267	"	"	14.2 (4.7) — —	直立する頸部に続く口縁部はゆるやかに外反する。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。頸部外面はタテハケのあとにナデで仕上げる。頸部内面はナデ。		
268	"	"	11.1 (4.1) — —	斜行する頸部に続く口縁部はややゆるやかに外反する。	器表面が磨耗し、調整は不明である。		
269	"	"	13.9 (3.9) — —	ゆるやかに外反する口縁部である。	口縁部はヨコナデで仕上げる。		壺の口縁部かもしれない。
270	"	"	14.1 (5.5) — —	わずかに外反して立ち上がる口縁部である。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデで仕上げる。		

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
271	S R 2	壺	11.4 (4.7) — —	ゆるく外反する口縁部でやや胴が張る。	口縁部外面はヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。貼付口縁の名残りをとどめる。	
272	"	"	16.6 (5.9) — —	わずかに斜行する頸部に続く口縁部はゆるやかに外反する。	口縁部は粗いヨコナデで仕上げ、頸部はナデで仕上げる。	
273	"	"	15.2 (4.9) — —	斜行する頸部に続く口縁部はかなり鋭く外反する。	器表面が磨耗し、調整は不明である。	
274	"	"	17.9 (4.8) — —	なめらかに外反する口縁部である。	口縁部は粗いヨコナデで仕上げる。	
275	"	甕	21.6 (5.5) — —	如意形に外反する口縁部に続く上胴部の張りは弱い。	器表面が磨耗し、調整は不明である。	
276	"	"	24.7 (4.4) — —	如意形にゆるく外反する口縁部で胴の張りは弱い。	口縁部外面は粗いタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデである。	
277	"	"	21.2 (5.3) — —	如意形に非常に鋭く外反する口縁部で胴の張りは弱い。	器表面が磨耗し、調整は不明である。	
278	"	"	19.4 (7.8) — —	如意形にかなり鋭く外反する口縁部で胴の張りは弱い。口唇部に刻目を施す。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデで仕上げる。上胴部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデ。	上胴部外面に黒斑がある。
279	"	"	21.0 (4.6) — —	如意形にゆるく外反する口縁部で口唇部に刻目を施す。	口縁部はヨコナデで仕上げる。上胴部外面はナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにナデで仕上げる。	
280	"	"	20.0 (2.5) — —	"	口縁部はヨコナデで仕上げる。	
281	"	"	21.9 (3.2) — —	如意形にゆるく外反する口縁部である。上胴部に3条のヘラ描沈線がある。	口縁部はヨコナデで仕上げる。器表面が磨耗する。	
282	"	"	23.0 (3.5) — —	如意形にゆるやかに外反する口縁部である。口唇部に刻目を施し、上胴部に6条のヘラ描沈線がある。	口縁部外面はヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。上胴部はナデで仕上げる。	
283	"	"	20.9 (4.0) — —	逆L字状口縁の甕でやや胴が張る。	口縁部はヨコナデで仕上げ、上胴部はナデで仕上げる。	
284	"	"	24.5 (3.9) — —	逆L字状口縁の甕で口唇部に刻目を施す。上胴部に10条のヘラ描沈線を施す。	口縁部は丁寧なヨコナデで仕上げ、胴部は丁寧なナデで仕上げる。	胎土は精選され、焼成も非常に良好な精製の甕である。
285	"	"	16.0 (4.4) — —	如意形にゆるやかに外反する口縁部である。	口縁部はヨコナデで仕上げる。	

挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm) 口徑 器高 洞徑 底径	形態・文様	手法	備考
286	S R 2	鑿	20.8 (9.8) — —	如意形にゆるやかに外反する口縁部に続く胸部はやや張り出す。上胸部に3条の微隆起帯がある。	口縁部はヨコナデで仕上げ、上胸部はナデで仕上げる。	
287	"	"	17.4 (6.4) — —	如意形に鋭く外反する口縁部で脣の張りは弱い。口唇部に刻目を施し、上脣部に1条の突帯がある。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデで仕上げる。上脣部はナデで仕上げる。貼付口縁である。	
288	"	"	14.9 (7.4) — —	如意形にややゆるやかに外反する口縁部に続く胸部は張りが弱い。	口縁部はヨコナデで仕上げ、上脣部はナデで仕上げる。	
289	"	"	12.6 (8.9) — —	如意形にゆるく外反する口縁部に続く胸部は張りが弱い。	口縁部はヨコナデで仕上げ、上脣部はナデで仕上げる。口唇部はヨコナデで仕上げる。	やや小型の甕である。上脣部内面にかなり大きな黒斑がある。
290	"	"	13.4 (15.8) 13.1	如意形にかなり鋭く外反する口縁部で脣の張りの弱い長脣の脣部が続く。	口縁部外面はヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。脣部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデで仕上げる。	貼付口縁の甕で下脣部外面にかなり大きな黒斑がある。
291	"	"	14.0 (3.9) — —	くの字状に鋭く外反する口縁部に続く上脣部はやや張り出す。口唇部の縁取りをして2条の凹線文を入れる。	口縁部はヨコナデで仕上げ、上脣部はナデで仕上げる。	跳び上がり口縁である。
292	"	"	16.0 (3.4) — —	くの字状にかなり鋭く外反する口縁部で口唇部に3条の凹線文を施す。	口縁部はヨコナデで仕上げる。	"
293	"	"	16.8 (2.4) — —	くの字状に鋭く外反する口縁部で口唇部の縁取りをして2条の凹線文をめぐらす。	"	"
294	"	"	15.2 (3.3) — —	くの字状に鋭く外反する口縁部で口唇部に2条の偽凹線文を施す。	口縁部はヨコナデで仕上げる。上脣部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	"
295	"	"	14.8 (3.7) — —	くの字状にかなり鋭く外反する口縁部で口唇部に2条の凹線文を施す。	口縁部はヨコナデで仕上げる。上脣部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面は横方向のヘラ削りである。	
296	"	"	15.2 (2.5) — —	くの字状に鋭く外反する口縁部で口唇部に3条の凹線文を施す。	口縁部はヨコナデで仕上げる。	跳び上がり口縁である。
297	"	"	12.9 (2.6) — —	くの字状に鋭く外反する口縁部で口唇部に2条の偽凹線文が施される。	口縁部はヨコナデで仕上げる。上脣部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	"
298	"	"	13.8 (3.2) — —	くの字状に非常に鋭く外反する口縁部で口唇部の縁取りをして2条の凹線文を施す。	"	やや跳び上がり口縁である。
299	"	"	14.4 (2.4) — —	くの字状に鋭く外反する口縁部で口唇部の縁取りをして3条の偽凹線文を施す。	口縁部はヨコナデで仕上げる。	
300	"	"	13.1 (2.8) — —	くの字状にやや鋭く外反する口縁部で口唇部の縁取りをして3条の偽凹線文を施す。	口縁部はヨコナデで仕上げる。上脣部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	跳び上がり口縁である。

挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm) 口徑 器高 胴徑 底径	形態・文様	手法	備考
301	S R 2	甕	15.2 (3.1) — —	くの字状にゆるやかに外反する口縁部である。口唇部の縁取りをして3条の凹線文を施す。	口縁部はヨコナデで仕上げる。	
302	"	"	13.6 (3.1) — —	くの字状にややゆるやかに外反する口縁部で口唇部の縁取りをして2条の偽凹線文を施す。	"	口縁部外面に煤状炭化物が付着する。
303	"	"	12.5 (3.5) — —	くの字状にゆるやかに外反する口縁部で口唇部に1条の偽凹線文を施す。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。	
304	"	"	17.4 (3.0) — —	くの字状に鋭く外反する口縁部で口唇部を拡張し2条の凹線文を施す。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデである。	
305	"	"	13.3 (2.6) — —	くの字状に鋭く外反する口縁部で口唇部を拡張して、2条の偽凹線文を施す。	口縁部はヨコナデで仕上げる。	跳び上がり口縁である。
306	"	"	12.1 (2.9) — —	くの字状に鋭く外反する口縁部で口唇部がややくぼんでいる。	"	"
307	"	"	16.2 (3.5) — —	くの字状にゆるく外反する口縁部で口唇部に2条の偽凹線文を施す。	"	
308	"	"	16.9 (4.5) — —	くの字状にかなり鋭く外反する口縁部で口唇部に2条の偽凹線文を施す。	口縁部はヨコナデで仕上げる。上胴部外面はナデで仕上げ、内面は横方向のヘラ削りである。	
309	"	"	16.2 (3.0) — —	くの字状にかなり鋭く外反する口縁部で口唇部に1条の偽凹線文を施す。	口縁部はヨコナデで仕上げる。	
310	"	"	14.8 (3.2) — —	"	口縁部はヨコナデで仕上げる。上胴部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面は横方向のヘラ削りである。	
311	"	"	16.6 (3.8) — —	くの字状にかなり鋭く外反する口縁部で口唇部に2条の偽凹線文が施される。	口縁部はヨコナデで仕上げる。上胴部外面はナデで仕上げ、内面は横方向のヘラ削りで仕上げる。	
312	"	"	15.8 (4.5) — —	くの字状に鋭く外反する口縁部で口唇部に1条の偽凹線文がある。	口縁部はヨコナデで仕上げる。上胴部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面は横方向のヘラ削りで仕上げる。	
313	"	"	16.4 (4.9) — —	くの字状に非常にゆるく外反する口縁部で口唇部に3条の偽凹線文が施される。上胴部はかなり強く張り出す。	口縁部はヨコナデで仕上げ、上胴部はナデで仕上げる。	口唇部に小さな黒斑がある。
314	"	"	15.6 (5.1) — —	くの字状にかなり鋭く外反する口縁部で口唇部に2条の偽凹線文がある。	口縁部はヨコナデで仕上げる。上胴部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデで仕上げる。	口縁部外面に煤状炭化物が付着する。
315	"	"	18.5 (3.4) — —	くの字状に鋭く外反する口縁部で、口唇部を拡張して3条の凹線文を施す。	口縁部はヨコナデで仕上げる。	跳び上がり口縁である。

插図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
316	S R 2	甕	20.0 (3.0) — —	くの字状に鋭く外反する口縁部で口唇部を拡張して2条の偽凹線文を施す。	口縁部はヨコナデで仕上げる。	"	跳び上がり口縁である。
317	"	"	21.2 (3.3) — —	くの字状にかなり鋭く外反する口縁部で口唇部に3条の凹線文を施す。	"	"	口縁部外面に煤状炭化物が付着する。
318	"	"	21.2 (3.6) — —	くの字状にやや鋭く外反する口縁部で口唇部を拡張して3条の偽凹線文を施す。	"	"	跳び上がり口縁である。
319	"	"	19.5 (2.8) — —	くの字状にゆるく外反する口縁部で口唇部の縁取りをして2条の偽凹線文を施す。	"	"	口縁部外面に煤状炭化物が付着する。跳び上がり口縁である。
320	"	"	19.4 (3.1) — —	くの字状にゆるく外反する口縁部で口唇部の縁取りをして2条の偽凹線文を施す。	口縁部外面はヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。	"	
321	"	"	17.4 (7.4) — —	くの字状にかなり鋭く外反する口縁部で口唇部の縁取りをして2条の偽凹線文を施す。	口縁部はヨコナデで仕上げる。上胴部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	"	
322	"	"	16.5 (7.3) — —	くの字状にやや鋭く外反する口縁部で口唇部を拡張して2条の凹線文を施す。	口縁部はヨコナデで仕上げる。上胴部外面はナデで仕上げ、内面は横方向のヘラ削りで仕上げる。	"	上胴部外面に煤状炭化物が付着する。
323	"	"	20.3 (6.1) — —	くの字状に鋭く外反する口縁部で口唇部に2条の偽凹線文を施す。	口縁部外面はヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。上胴部外面はタテハケのあとにナデで仕上げる。上胴部内面は横方向のヘラ削りで仕上げる。	"	
324	"	"	20.3 (6.3) — —	くの字状にゆるやかに外反する口縁部で口唇部に2条の偽凹線文がある。	口縁部外面はヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。上胴部外面はナデで仕上げ、内面は横方向のヘラ削りである。	"	上胴部内面に輪積み成形痕が残る。上胴部内面に大きな黒斑がある。
325	"	"	19.0 (7.5) — —	くの字状にゆるく外反した口縁部でやや脛が張る。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデで仕上げる。上胴部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面は横方向のヘラ削りである。	"	上胴部外面に黒斑がある。
326	"	"	13.4 (2.5) — —	くの字状にゆるく外反する口縁部で上胴部はやや張り出す。	口縁部はヨコナデで仕上げる。	"	
327	"	"	14.6 (2.4) — —	くの字状に鋭く外反する口縁部である。	口縁部はヨコナデで仕上げる。上胴部外面はナデで仕上げ、内面は横方向のヘラ削りで仕上げる。	"	跳び上がり口縁である。口縁部外面に煤状炭化物が付着する。
328	"	"	19.9 (3.3) — —	くの字状にややゆるやかに外反する口縁部である。	口縁部はヨコナデで仕上げる。	"	
329	"	"	14.7 (6.0) — —	くの字状にやや鋭く外反する口縁部で上胴部の張りは弱い。	口縁部はヨコナデで仕上げる。上胴部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面は横方向のヘラ削りである。	"	口縫部に小さな黒斑がある。
330	"	"	18.8 (3.5) — —	くの字状にやや鋭く外反する口縁部である。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデで仕上げる。	"	

挿図番号	遺構番号	器種	口径 法量 (cm) 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
331	S R 2	甕	20.0 (7.4) — —	くの字状にややゆるやかに外反する口縁部で上胴部の張りは弱い。	口縁部外面はハケ調整のあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデである。上胴部外面はヨコハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
332	"	"	19.0 (9.8) — —	くの字状に鋭く外反する口縁部で上胴部はやや張る。	器表面が磨耗し、調整は不明である。	
333	"	"	13.0 (5.9) — —	くの字状に鋭く外反する口縁部で胴の張りは弱い。口唇部に1条の偽凹線文がある。	口縁部はヨコナデで仕上げる。上胴部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面は横方向のヘラ削りで仕上げる。	
334	"	"	16.2 (3.7) — —	口縁部はくの字状にゆるく外反する。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデで仕上げる。口縁部外面に横方向のヘラ圧痕が残る。	
335	"	"	14.5 (2.2) — —	くの字状にやや鋭く外反する口縁部である。	口縁部はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。	
336	"	"	14.8 (4.3) — —	くの字状に非常にゆるく外反する口縁部である。	口縁部はヨコナデで仕上げる。上胴部外面はナデで仕上げ、内面は縦方向の粗いヘラ削りで仕上げる。	
337	"	"	16.3 (4.8) — —	くの字状にかなり鋭く外反する口縁部に続く上胴部はやや張り出す。	口縁部はヨコナデで仕上げる。上胴部外面はナデで仕上げ、内面は横方向のヘラ削りである。	口縁部内面に輪積み成形痕が残る。
338	"	"	12.7 (4.9) — —	くの字状にかなり鋭く外反する口縁部で上胴部の張りは弱い。上胴部外面にヘラ描列点文をめぐらす。	口縁部はヨコナデで仕上げ、上胴部はナデで仕上げる。	
339	"	"	14.2 (3.2) — —	くの字状に鋭く外反する口縁部である。	口縁部はヨコナデで仕上げる。	
340	"	"	16.2 (4.4) — —	くの字状に鋭く外反する口縁部に続く上胴部の張りは弱い。	口縁部はヨコナデで仕上げる。上胴部外面はナデで仕上げ、内面は横方向のヘラ削りである。	上胴部内面に輪積み成形痕が残る。
341	"	"	15.7 (5.7) — —	くの字状にかなり鋭く外反する口縁部で上胴部の張りは弱い。	口縁部はヨコナデで仕上げる。上胴部外面はナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにナデで仕上げる。	
342	"	"	14.2 (3.5) — —	くの字状にややゆるやかに外反する口縁部である。	口縁部外面はヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。	口縁部外面に煤状炭化物が付着する。
343	"	"	19.5 (5.1) — —	くの字状に鋭く外反する口縁部に続く上胴部の張りは弱い。	口縁部はヨコナデで仕上げ、上胴部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面は横方向のヘラ削りで仕上げる。	
344	"	"	12.8 (4.7) — —	くの字状にゆるく外反する口縁部に続く上胴部の張りは弱い。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。上胴部外面はタテハケのあとにナデである。	上胴部内面は横方向のヘラ削りで仕上げる。口縁部外面に煤状炭化物が付着する。
345	"	"	15.6 (5.3) — —	くの字状にかなりゆるく外反する口縁部で上胴部はやや張る。	口縁部はヨコナデで仕上げる。上胴部外面は叩き調整のあとにタテハケで仕上げ、内面はナデである。	外面全体に煤状炭化物が付着する。

挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
346	S R 2	蓋	14.4 (3.4) — —	くの字状にややゆるく外反する口縁部である。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。口唇部にもヨコハケが残る。	口縁部外面に煤状炭化物が付着する。	
347	"	蓋	17.2 11.2 — 5.2	傘形の蓋で器高の割りに口径が小さい。なだらかに外方に下がる体部に続く口縁部は鋭く外方に開く。	体部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はヘラ磨きで仕上げる。口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデ。	器表面がやや磨耗する。	
348	"	鉢	17.0 14.9 — 10.1	平底のかなり安定した底部に続く体部はゆるく外反して立ち上がる。	口縁部はヨコナデで仕上げ、体部はナデで仕上げる。 底部内面に大きな黒斑がある。		
349	"	"	20.5 (8.5) — —	ゆるやかに外反して立ち上がる体部に続く口縁部は内湾する。	口縁部外面は横方向のヘラ磨きで仕上げ、内面はヨコナデである。 体部外面は右下がり方向のヘラ磨きで仕上げ、内面はナデである。	焼成は非常に良好である。	
350	"	"	19.6 (4.9) — —	如意形にゆるく外反する口縁部である。口唇部に1条の偽凹線文がある。	口縁部はヨコナデで仕上げ、体部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。		
351	"	高杯	21.0 (4.0) — —	かなり鋭く外反する体部に続く口縁部は直立気味に立ち上がる。口縁部に2条の凹線文がある。	口縁部はヨコナデで仕上げ、体部はハケ調整のあとにナデで仕上げる。	焼成は良好である。	
352	"	"	20.1 (2.9) — —	外反する体部に続く口縁部は直立気味に立ち上がる。口縁部に2条の凹線文がある。	口縁部はヨコナデで仕上げ、体部はナデで仕上げる。		
353	"	"	19.9 (4.5) — —	外反する体部に続く口縁部はわずかに内湾して立ち上がる。口縁部に4条の偽凹線文がある。	器表面が磨耗して調整は不明である。		
354	"	"	21.3 (4.4) — —	わずかに外反して立ち上がる口縁部である。口唇部に2条の凹線文がある。	口縁部はヨコナデで仕上げる。		
355	"	"	14.6 (3.9) — —	外反する体部に続く口縁部はわずかに外反して立ち上がる。	口縁部外面はヨコナデのあとに縦方向のヘラ磨きで仕上げ、内面はヨコナデである。体部はナデで仕上げる。		
356	"	"	23.7 (5.4) — —	かなり鋭く外反する体部に続く口縁部はわずかに外反して立ち上がる。	口縁部はヨコナデで仕上げる。体部はタテハケのあとにナデで仕上げる。		
357	"	"	19.3 (7.4) — —	外反してひらく体部に続く口縁部は直立して立ち上がる。かなり器高の深い杯部である。	口縁部外面はヨコナデで仕上げ、内面はヘラ削りで仕上げる。体部外面はナデで仕上げ、内面はヘラ削りで仕上げる。		
358	"	"	24.6 (4.5) — —	外反してひらく体部に続く口縁部はわずかに外反して立ち上がる。	器表面が磨耗し、調整は不明である。	口縁部外面に小さな黒斑がある。	
359	"	"	26.2 (9.2) — —	外反して大きく開く体部に続く口縁部は直立して立ち上がる。	口縁部外面はヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデである。体部外面は縦方向のヘラ削りで仕上げ、内面は縦方向のヘラ磨きである。	口縁部外面に黒斑がある。	
360	"	"	20.2 (7.6) — —	外反して開く体部に続く口縁部は直立気味に立ち上がる。器高の深い杯部である。	口縁部はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。体部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデで仕上げる。	杯部外面に黒斑がある。	

挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
361	S R 2	高杯	— (10.7) —	かなりゆるやかに外方に開く脚部で中空である。	脚部はナデで仕上げる。 粘土板充填法である。	基部内面に黒斑がある。	
362	"	"	— (8.2) — 8.2	かなりゆるやかに外方に開く脚部で中空である。脚部外面に櫛描直線文が施される。	外面は丁寧なナデで仕上げ、内面は横方向のヘラ削りである。 粘土板充填法で基部内面に絞目が残る。	脚部の中央部に4孔を穿ち、裾部には2個1対の穿孔が4箇所ある。	
363	"	"	— (8.4) — 10.4	柱状部から裾部に向かってゆるやかに開く。脚部外面に櫛描直線文がある。	脚部外面は丁寧なナデで仕上げ、内面は横方向のヘラ削りで仕上げる。柱状部内面に絞目が残る。	口唇部を拡張して2条の凹線文をめぐらす。	
364	"	"	— (9.5) —	かなり深い杯部に中空の脚部が続く形態である。	口縁部はヨコナデで仕上げる。体部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。脚部外面はタテハケで、内面はヘラ削りである。	基部外面に縦方向のヘラ削りの痕跡がある。	
365	"	"	— (4.3) — 15.0	柱状部から裾部に向かって外方に大きく開く脚部である。	脚部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにナデで仕上げる。裾端部はヨコナデにより、わずかにくぼむ。		
366	"	"	— (6.0) — 16.8	柱状部から裾部に向かって外方に大きく開く脚部である。裾端部に2条の凹線文を入れる。	器表面が剥落し、調整は不明である。		
367	"	小型土器	3.9 4.5 4.2 2.9	器高の割りに口径の広い壺の小型土器で底部は上げ底である。上胴部に竹管状工具による円形の刺突文がある。完形である。	口縁部はヨコナデで仕上げる。胴部外面はヨコハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	口唇部と口縁部内面にも円形の刺突文がある。底部外面に黒斑がある。	

第9表 遺構出土石器観察表 (Aトレンチ)

挿図番号	遺構番号	器種	計測値 最大長 最大幅 最大厚 (cm, g)	材質	特徴	備考
368	S R 2	石斧	(17.3) (7.5) 4.2 985.0	緑色岩	大型蛤刃石斧で刃部を欠損する。全面に擦痕が残るが、周辺部は横方向の擦痕で中央部は縦方向の擦痕である。	
369	"	"	(10.1) 6.9 4.0 489.0	"	大型蛤刃石斧で基部は全て欠損する。全面に擦痕が残る。刃部の先端部は磨滅がかなり著しい。	
370	"	"	16.6 7.3 5.2 1039.0	はんれい岩質緑色岩	大型蛤刃石斧の未製品で両面に敲打痕が残る。	
371	"	"	16.7 6.8 4.4 834.0	"	大型蛤刃石斧の未製品で両面に擦痕がわずかに残る。	
372	"	"	(13.4) (6.4) (3.2) 500.0	"	大型蛤刃石斧で刃部を欠損する。両面に擦痕が残る。	
373	"	"	8.8 0.8 1.6 22.8	黒色片岩	小型の柱状片刃石斧で完形である。全面に擦痕が残る。また、表裏両面に小さな抉りがある。	

挿図番号	遺構番号	器種	計測値 最大長 最大幅 最大厚 重量 (cm, g)	材質	特徴	備考
374	S R 2	石斧	(4.5) 3.7 0.9 26.8	頁岩	扁平片刃石斧で基部が全て欠損する。全面に擦痕が残る。	
375	"	"	(3.9) (4.6) (1.3) 45.3	"	扁平片刃石斧で刃部を全て欠損する。全面に擦痕が残る。	
376	"	"	11.5 10.9 3.7 795.0	はんれい岩質緑色岩	環状石斧の未製品ではば全面に敲打痕が認められる。	
377	"	"	9.7 3.2 1.5 65.8	頁岩	小型の両刃石斧で完形である。刃部に明瞭な擦痕が残る。	
378	"	"	5.9 1.8 1.0 17.6	千枚岩	非常に小型の両刃石斧で完形である。全面に擦痕が残る。基部の両側に小さな抉りがある。	
379	"	"	8.7 2.0 1.0 29.0	緑色岩	不整の長楕円形を呈した細長い両刃の石斧で完形である。基部は不定形で全面に擦痕がわずかに残る。	
380	"	穿孔具	12.7 2.8 2.6 144.3	砂質頁岩	環状石斧用の穿孔具で先端部に横方向の擦痕が残る。細長い不定形な形であるが完形である。	
381	"	叩石	8.9 4.4 1.3 87.2	砂岩	両面に自然の礫皮面を大きく残し、周縁部に小剝離痕を残す。表面に縱方向の擦痕が残る。敲打痕は認められない。	小型の石斧の未製品かもしれない。
382	"	"	9.9 8.5 3.5 363.0	"	不整円形を呈した叩石で周縁部と表裏両面の中央部に明瞭な敲打痕が残る。	表裏両面の中央部がくぼんでいる。
383	"	"	15.3 5.0 3.1 298.0	"	細長い長楕円形を呈した叩石で上下両端部に明瞭な敲打痕が残る。	
384	"	"	9.7 8.1 4.4 475.0	"	楕円形を呈した叩石で両面に自然の礫皮面を大きく残す。周辺部の一部に剝離面を残す。周縁部に明瞭な敲打痕を残す。	
385	"	"	(7.8) 3.9 1.0 47.4	砂質片岩	不整長方形を呈し、両面に自然面を大きく残す。周辺部に剝離面を残す。敲打痕は認められない。	小型の石斧の未製品かもしれない。
386	"	"	9.8 11.3 2.2 230.0	砂岩	扁平叩石で表面は礫皮面を大きく残し、裏面は主剝離面である。両面の周辺部に小剝離痕がある。周縁部に敲打痕の残る箇所がある。	
387	"	"	8.5 (6.7) 1.4 73.1	"	扁平叩石で1/4程度が欠損する。表面は自然の礫皮面で裏面は主剝離面である。明瞭な敲打痕は認められない。	
388	"	砥石	9.4 9.1 3.7 539.0	"	不整方形を呈した砥石で表裏両面と左側面の3面に研磨痕が残る。表裏両面の中央部に敲打痕が残る。	

插図番号	遺構番号	器種	最大長 計測値 (cm, g) 最大幅 最大厚 重量	材質	特徴	備考
389	S R 2	砥石	(9.5) (6.4) (3.1)	砂岩	砥石の破片で表面と右側面の2面に研磨痕が残る。	
390	"	"	9.9 9.5 4.5 452.0	"	不定形の砥石で表裏両面に研磨痕が残る。裏面は火熱を受け、薄赤く変色している。	やや大型の砥石である。
391	"	"	13.6 11.9 3.6 864.0	"	不整方形を呈した砥石で全面に研磨痕が残る。	"
392	"	"	15.5 13.8 4.4 1392.0	"	不整方形を呈した砥石で表裏両面と左側面の3面に研磨痕がある。裏面は火熱を受け、黒変した箇所がある。	"
393	"	"	(7.4) 5.5 1.9	軽石	不定形な形をした砥石で表裏両面と下面の3面に研磨痕が残る。荒砥として使用されたものか?	表裏両面と下面の3面に擦痕が残る。小型の砥石である。
394	"	"	8.3 6.4 5.7 334.0	砂岩	不整長方形を呈した砥石で、表裏両面と左側面の3面に研磨痕が残る。表面には火熱を受け、赤変した箇所がある。	
395	"	"	9.4 (2.7) 1.6 79.8	粘板岩	楕円形のやや細長い砥石で縦方向に破損する。破損部以外の全面に擦痕が残る。	小型の砥石である。
396	"	"	10.9 7.3 2.7	砂岩	不整長方形を呈した砥石で表面と左側面の2面に研磨痕が残る。	
397	"	石包丁	5.8 3.8 0.9 28.5	千枚岩	表裏両面にかなり大きな剥離面を残した粗製の石包丁である。刃部は両面から研ぎ出しが片刃である。	磨製の小型の石包丁で完形である。
398	"	"	(5.3) 5.1 0.6 21.1	"	外湾する背部に直線状の刃部が続く形態で半分以上を欠損する。両面に擦痕を残し、中央部付近に紐孔1個が認められる。	磨製の石包丁である。
399	"	"	(4.9) (4.8) 8.0 19.5	"	外湾する背部に直線状の刃部が続く形態で両刃である。大半を欠損するが、両面に擦痕が残る。また、中央部付近に紐孔1個が残る。	紐孔の部分の両面に明瞭な敲打痕が残る。磨製である。
400	"	"	10.7 4.1 0.7 43.0	"	外湾する背部に直線状の刃部が続く形態の石包丁で中央部に1個の紐孔がある。片刃で両面に擦痕が残る。	両側辺部がわずかに欠損するがほぼ完形である。磨製である。
401	"	"	8.6 4.2 0.8 46.2	"	外湾する背部に直線状の刃部が続く形態の石包丁で片刃である。中央部に紐孔1個があり、両側辺部に小さな抉りがある。	両面に擦痕がわずかに残る。磨製である。完形である。
402	"	"	(9.1) (3.2) 1.0 34.2	"	横方向にかなり細長い形態の石包丁で中央部に1個の紐孔が穿たれるが刃部は全て欠損する。両面に擦痕が残る。	石包丁の未製品かもしれない。磨製である。
403	"	"	(7.8) (4.5) (0.9) 36.9	"	背部と刃部が直線状を呈し、両側辺部に抉りのある形態であるが、刃部の大半を欠損する。表裏両面にかなり大きな剥離面を残す。	両面に擦痕が残る。磨製である。

挿図番号	遺構番号	器種	最大長 計測値 (cm, g)	材質	特徴	備考
			最大幅 最大厚 重量			
404	S R 2	石包丁	7.4 4.3 0.8 31.7	千枚岩	両側刃部に抉りのある打製の石包丁である。表面は主剝離面で裏面にも大きな剝離面を残す。両面の刃部に小剝離痕を残しており、両刃である。	両面共に器表面がやや磨耗する。
405	"	"	10.2 4.5 1.1 72.5	"	刃部と背部は共に直線状を呈し、両側刃部に抉りのある形態である。刃部のみ粗い磨製で仕上げた局部磨製の石包丁で、両刃である。	両面共にかなり大きな剝離面を残す。刃部に横方向の擦痕が残る。
406	"	"	(5.4) (5.3) (1.2) 37.4	粘板岩	外湾する背部に直線状の刃部が続く形態の石包丁で大半を欠損する。両面に擦痕が残り、片刃である。磨製の石包丁である。	
407	"	石鐵	3.2 1.2 0.3 1.6	サヌカイト	柳葉型を呈した凸基無茎式の打製石鐵ではば完形である。先端部にはやや大きな剝離面を残すが、基部は入念な押圧剝離により小さな剝離面を残す。	
408	"	"	6.0 2.3 0.5 9.4	黒色片岩	磨製の石鐵で先端部しか残存しない。両面に右下がり方向の擦痕が残る。	

第10表 遺構出土土器観察表（Bトレンチ）

挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口径 器高 胸径 底径	形態・文様	手法	備考
409	S R 2	壺	14.0 (8.2) — —	ゆるく外反する頸部に続く口縁部は短いが鋭く外反する。頸部下端に断面台形の突帯を貼付する。	口縁部はヨコナデで仕上げる。頸部以下はナデで仕上げる。	貼付突带上に1条のヘラ描沈線を施す。	
410	"	"	6.3 (13.3) 15.0 —	ほぼ直立気味に立ち上がる細長い口頸部に続く胴部は張りが弱い。頸部以下をヘラ描沈線等で飾る。	口縁部はヨコナデで仕上げ、頸部はナデで仕上げる。上胴部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデで仕上げる。	細頸壺である。上胴部内面に輪積み成形痕が残る。	
411	"	"	18.2 (3.6) — —	かなり鋭く外反する口縁部で口唇部下端に貼付突帯を施し、その直下に小穿孔をめぐらす。口縁部内面にも3条の突帯を貼付する。	口縁部はヨコナデで仕上げる。	頸部は刻目を施した貼付突帶と櫛描直線文で飾る。	
412	"	"	31.0 (4.8) — —	ややゆるやかに外反する口縁部で、頸部に櫛描直線文を施す。	口縁部はヨコナデで仕上げる。貼付口縁である。	広口壺である。	
413	"	"	15.9 (6.1) — —	ほぼ直立気味に立ち上がる口縁部に続く頸部はわずかに斜行する。口唇部下端に1条の貼付突帯をめぐらす。	口縁部はヨコナデで仕上げる。頸部外面はヨコハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	薄手の壺である。	
414	"	"	19.6 (4.7) — —	かなり鋭く外反する口縁部で口唇部下端に刻目を施す。	口縁部はヨコナデで仕上げる。口縁部外面に指頭圧痕が残る。		
415	"	"	14.0 (5.2) — —	ゆるく外反して立ち上がる頸部に続く口縁部はゆるやかに外反する。口唇部にヘラ状原体による斜格子状の刻目がある。	口縁部はヨコナデで仕上げ、頸部はナデで仕上げる。		
416	"	"	16.6 (2.4) — —	かなり鋭く外反する口縁部で口唇部下端に刻目を施す。口縁部外面に1条の微隆起帯をめぐらし、その下に櫛描直線文がある。	口縁部はヨコナデで仕上げる。		

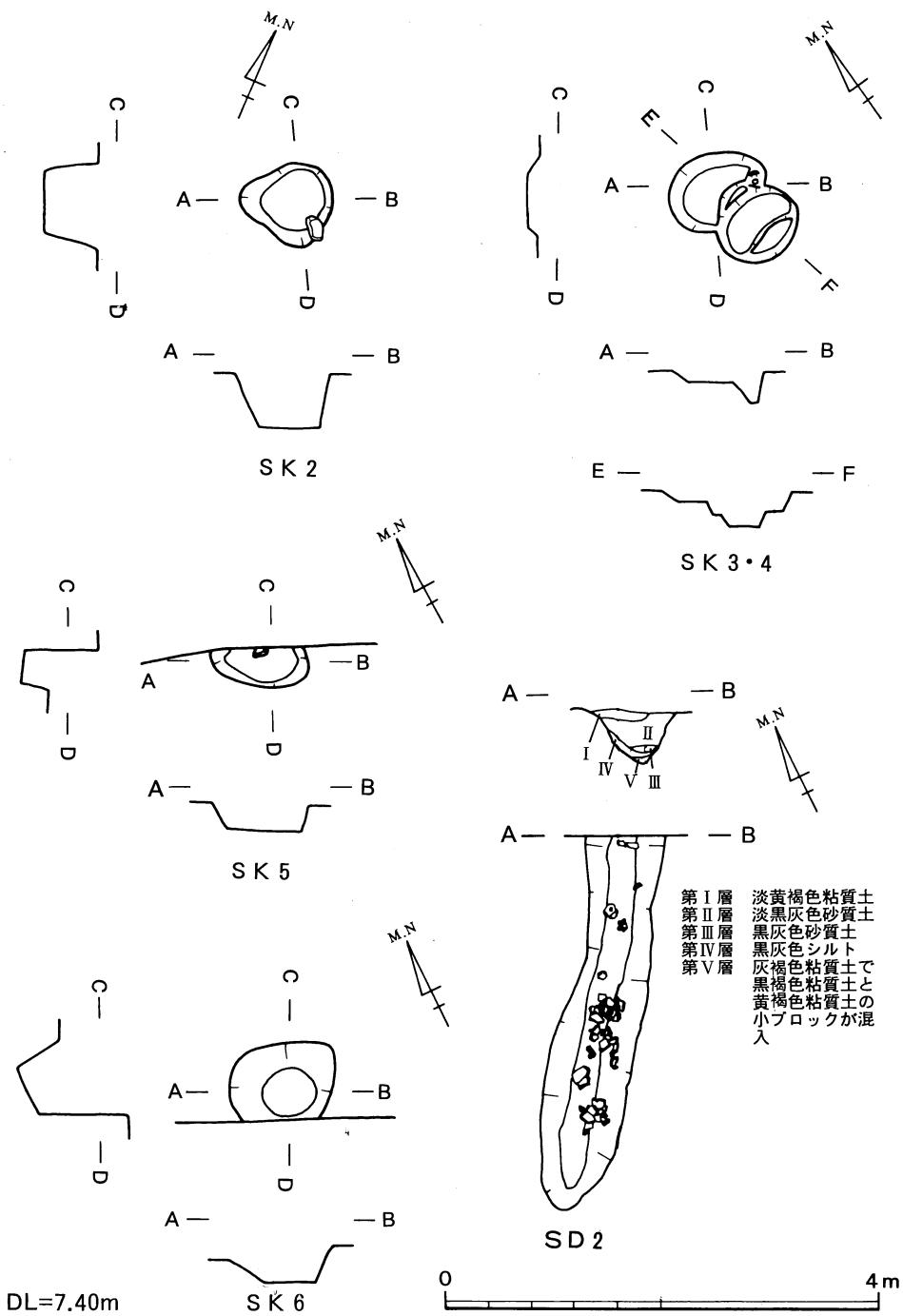
插図番号	遺構番号	器種	法量 (cm) 口徑 器高 胸徑 底径	形態・文様	手法	備考
417	S R 2	壺	17.5 (7.8) — —	ゆるやかに外反して立ち上がる口頸部である。口縁部外面に3条の突帯を貼付する。	口縁部はヨコナデで仕上げ、頸部はナデで仕上げる。	
418	"	"	26.0 (6.0) — —	直立気味の短い頸部に続く口縁部は鋭く外反する。口唇部下端に刻目を施す。頸部下端にテラ描列点文をめぐらす。	"	広口壺か?
419	"	"	17.6 (7.1) — —	直立気味に立ち上がる頸部に続く口縁部はゆるやかに外反する。頸部下端に突帯を貼付し、刻目を入れる。	口縁部はヨコナデで仕上げる。頸部外面はナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにナデで仕上げる。	
420	"	"	13.4 (4.1) — —	ゆるく外反して立ち上がる頸部に続く口縁部は鋭く外反する。口唇部にハケ状原体による刻目がある。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデで仕上げる。頸部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	貼付口縁である。
421	"	"	24.3 (9.8) — —	ゆるく外反して立ち上がる頸部に続く口縁部はゆるやかに外反する。口唇部にハケ状原体で斜格子目状に刻目を入れる。	"	貼付口縁で口縁部内面にハケ状原体による列点文をめぐらす。
422	"	"	17.8 (5.7) — —	ゆるく外反して立ち上がる頸部に続く口縁部は鋭く外反する。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。頸部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	貼付口縁で口唇部は縁取りをして下方にたれ下がる。
423	"	"	18.5 (13.5) — —	わずかに外反して立ち上がる頸部に続く口縁部はゆるやかに外反する。口唇部にはハケ状原体による斜格子目状の刻目がある。	"	口縁部内面にはハケ状原体による列点文がある。 上部取口は簡略直線文がある。
424	"	"	— (14.5) 11.8 5.2	ゆるく外反して立ち上がる頸部に続く胴部は長胴で最大径はかなり下位にある。	頸部外面はナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにナデで仕上げる。胴部外面はハケ調整のあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
425	"	"	— (15.4) 15.5 5.4	無果実形を呈した胴部で最大径はやや上位にある。頸部下端に円形刺突文がある。	上胴部はナデで仕上げ、下胴部はハケ調整のあとにナデで仕上げる。	上胴部内面にかなり大きな黒斑がある。
426	"	"	20.4 (6.2) — —	ややゆるやかに外反する口縁部で跳び上がり口縁である。口唇部には列点文風の刻目がある。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。頸部外面はタテハケのあとにナデ。内面はナデ。	
427	"	"	10.4 (4.9) — —	ややゆるやかに外反する口縁部で口唇部に2条の偽凹線文が施される。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデである。	
428	"	"	19.6 (7.9) — —	直立気味に立ち上がる頸部に続く口縁部は鋭く外反する。口唇部に3条の凹線文を施す。	口縁部はヨコナデで仕上げる。頸部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	口唇部を縁取りして拡張しており、下方にたれ下がる。
429	"	"	15.6 (3.8) — —	ゆるく外反する口縁部で口唇部直下に刻目を施す。	口縁部はヨコナデで仕上げる。貼付口縁である。	薄手の壺である。
430	"	"	19.6 (3.6) — —	ゆるやかに外反する口縁部で口唇部直下に刻目を施す。	"	"
431	"	"	16.8 (6.3) — —	直立して立ち上がる短い頸部に続く口縁部はややゆるやかに外反する。	器表面が磨耗し、調整は不明である。	

挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
432	S R 2	壺	15.4 (5.2) — —	w	わずかに斜行して立ち上がる短い頸部に続く口縁部は鋭く外反する。	器表面が磨耗し、調整は不明である。	
433	"	"	— (7.1) — 7.4	w	平底の底部で胴の張りは弱い。	外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。器表面が磨耗する。	
434	"	"	— (5.7) — 8.0	w	平底の底部でやや胴が張り出す。	外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
435	"	"	— (5.5) — 8.9	w	平底の底部で胴の張りは弱い。	ナデで仕上げる。	
436	"	"	— (4.0) — 9.4	w	平底の底部である。	外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
437	"	"	— (5.3) — 7.4	w	平底の底部で器壁はかなり厚く、中央部がややくぼむ。	ナデで仕上げる。	
438	"	"	— (8.0) — 8.0	w	平底の底部で胴の張りは弱い。	器表面が磨耗し、調整は不明である。	
439	"	"	— (5.8) — 9.0	w	"	外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面は横方向のヘラ削りである。	
440	"	"	— (6.1) — 8.0	w	"	ナデで仕上げる。	
441	"	"	— (8.4) — 7.8	w	"	外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
442	"	"	— (13.8) — 7.6	w	平底の底部で、長胴の胴部である。	"	
443	"	"	— (8.2) — 9.8	w	平底の底部でやや胴が張る。	外面はタテハケのあとにヘラ磨きで仕上げ、内面はハケ調整のあとにナデで仕上げる。	
444	"	甕	15.2 (4.7) — —	w	逆L字状口縁の甕で口唇部にハケ状原体による刻目がある。上胴部に5条のヘラ描沈線を施す。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデである。上胴部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
445	"	"	14.3 (5.3) — —	w	逆L字状口縁に類似した甕である。朝鮮系無文土器か。	口縁部はヨコナデで仕上げる。上胴部外面はナデで仕上げるが、内面は器表面が磨耗して調整は不明である。貼付口縁である。	
446	"	"	18.0 (6.3) — —	w	"	口縁部はヨコナデで仕上げる。上胴部外面はハケ調整のあとにナデで仕上げ、内面はナデである。貼付口縁である。	

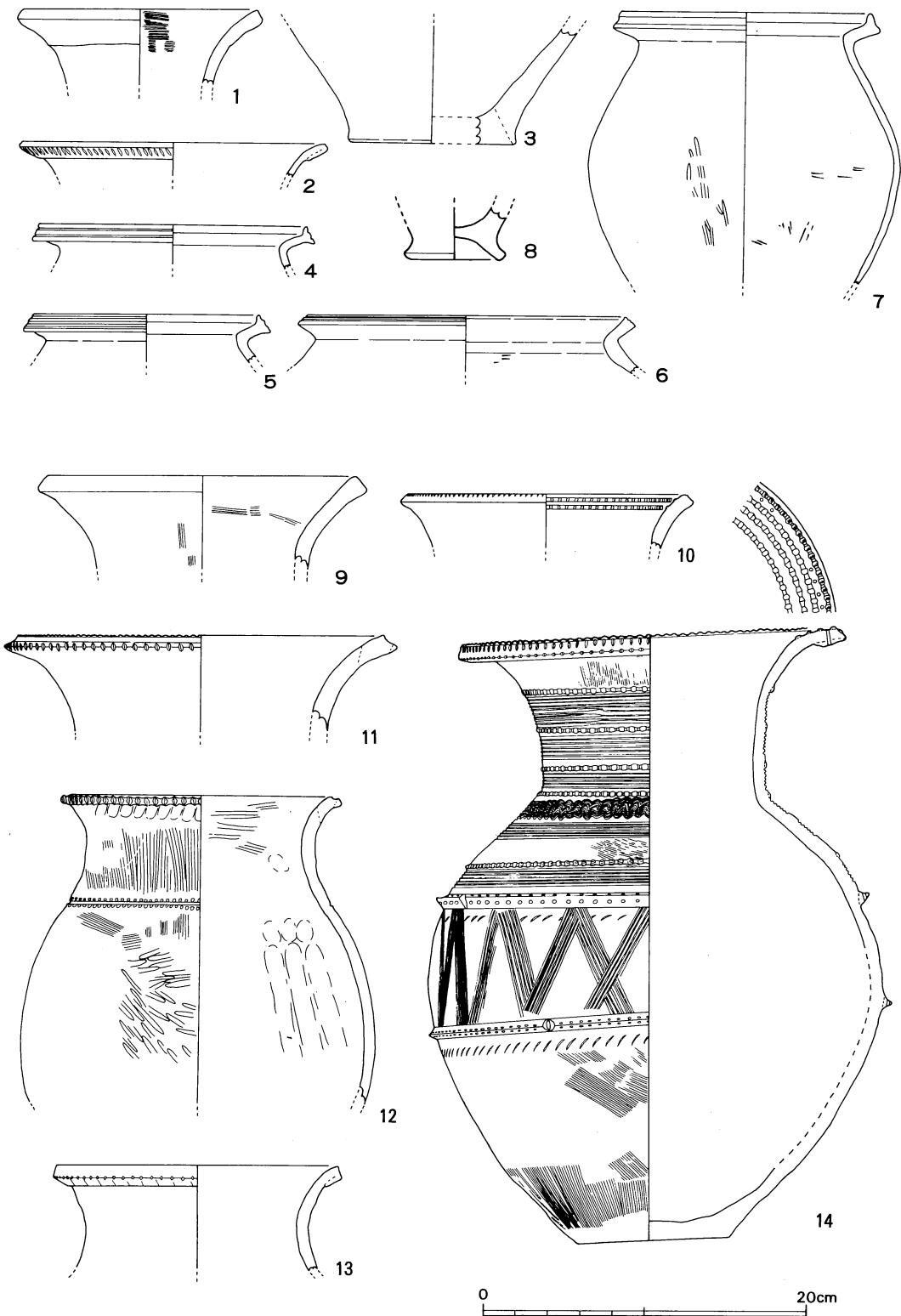
挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm) 口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
447	S R 2	壺	15.6 (4.3) — —	如意形にゆるく外反する口縁部で口唇部下端に刻目を施す。上胴部に3条のヘラ描沈線がある。	口縁部はヨコナデで仕上げ、上胴部はナデである。	
448	"	"	21.6 (12.3) 22.4 —	如意形にゆるく外反する口縁部に続く胴部はやや張る。上胴部に3条の微隆起帯がある。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデである。上胴部外面はタテハケのあとにナデで仕上げる。	口径=胴部最大径 上胴部外面に煤状炭化物が付着する。
449	"	"	16.9 (3.8) — —	如意形にゆるく外反する口縁部である。	口縁部はヨコナデで仕上げる。上胴部はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにナデで仕上げる。 貼付口縁である。	口縁部外面に煤状炭化物が付着する。
450	"	"	10.4 (6.1) — —	如意形にゆるく外反する口縁部で口唇部に2条の回線文がある。	口縁部はヨコナデで仕上げ、頸部はナデで仕上げる。	
451	"	"	13.0 (7.2) — —	くの字状に鋭く外反する口縁部でやや胴が張る。口唇部に3条の偽凹線文がある。	口縁部はヨコナデで仕上げる。上胴部外面はナデで仕上げ、内面は綫方向の指ナデで仕上げる。	
452	"	"	15.1 (4.4) — —	くの字状に鋭く外反する口縁部でやや胴が張る。	口縁部はヨコナデで仕上げる。上胴部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
453	"	"	15.0 (14.0) 19.2 —	くの字状に鋭く外反する口縁部でやや胴が張る。口唇部はヨコナデにより、ややくぼむ。	口縁部はヨコナデで仕上げる。胴部外面はハケ調整で仕上げ、内面はヘラ削りである。	上胴部内面は横方向のヘラ削りで、下胴部内面は綫方向のヘラ削りである。
454	"	"	15.5 (8.6) — —	くの字状にやや鋭く外反する口縁部で胴がかなり張り出す。	口縁部はヨコナデで仕上げる。上胴部外面はハケ調整のあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
455	"	"	23.2 (5.4) — —	くの字状にややゆるやかに外反する口縁部である。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデである。上胴部内面に輪積み成形痕がある。	やや大型の壺である。
456	"	"	— (3.8) — 6.8	平底の底部で器壁は非常に薄い。	ナデで仕上げる。	
457	"	"	— (4.3) — 5.2	平底の底部で胴の張りは弱い。	"	
458	"	"	— (5.4) — 5.3	平底の底部で器壁は薄い。胴の張りもやや弱い。	"	
459	"	"	— (3.8) — 7.9	平底の底部である。	外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
460	"	"	— (5.8) — 7.3	平底の底部で器壁はやや厚いが、胴の張りは弱い。	外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
461	"	高杯	— (6.7) — —	充実した柱状部である。	タテハケのあとにナデで仕上げる。	外面にかなり大きな黒斑がある。

第11表 遺構出土石器観察表 (Bトレンチ)

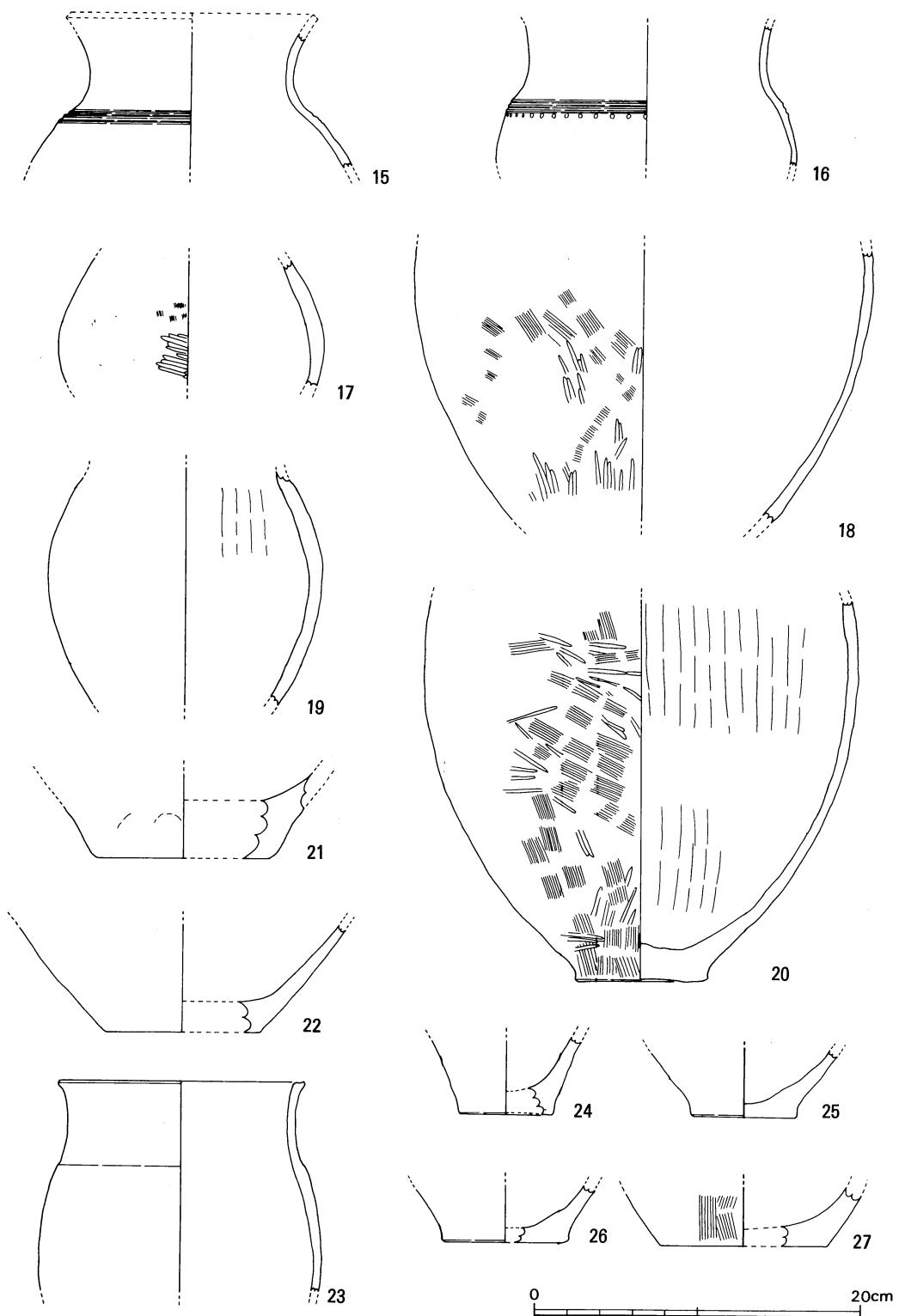
挿図番号	遺構番号	器種	計測値 最大長 最大幅 最大厚 (cm, g)	材質	特徴	備考
462	S R 2	石斧	6.6 3.5 1.0 27.8	千枚岩	粗い打製の石斧であるが表面の刃部のみ研磨し、擦痕が残る。両面にかなり大きな剥離面を残した局部磨製石斧で完形である。	
463	"	叩石	10.0 5.9 1.9 141.1	砂岩	扁平叩石で表面には自然の礫皮面を大きく残し、裏面は主剥離面である。表面の中央部及び周縁部に明瞭な敲打痕がある。	
464	"	石包丁	(3.5) (4.9) 0.6 12.8	千枚岩	磨製の石包丁の破片で大半を欠損する。両面に擦痕が残る。両面に穿孔を意識した敲打痕が残る。	
465	"	"	(6.7) (4.9) 0.6 17.6	"	磨製の石包丁の破片で大半を欠損する。外湾する背部に直線状の刃部の続く形態で両刃である。	両面に擦痕が残り、中央部のやや上に穿孔が1個残る。
466	"	"	10.0 3.9 1.1 51.1	砂質頁岩	両面に大きな剥離面を残す打製の石包丁で粗いつくりである。両刃で側辺部に抉りはみられない。	
467	"	"	(9.1) 4.5 0.8 43.9	結晶片岩	表面に自然の礫皮面を大きく残し、裏面は主剥離面である。外湾する背部に続く両側辺部には小さな抉りがあるが刃部を全て欠損する。	器表面が磨耗するが背部上端に研磨痕が残る。



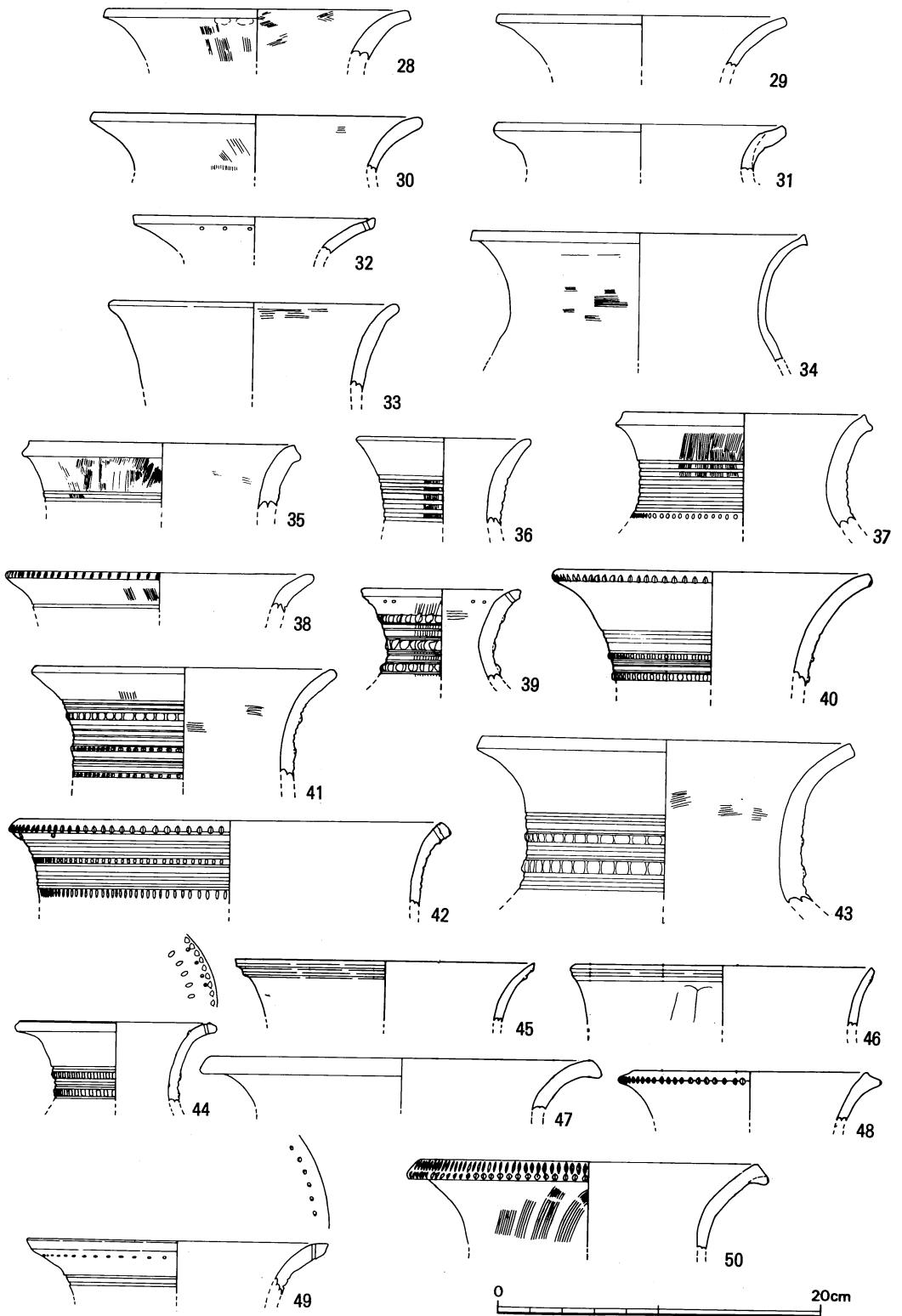
第37図 SK 2～6, SD 2



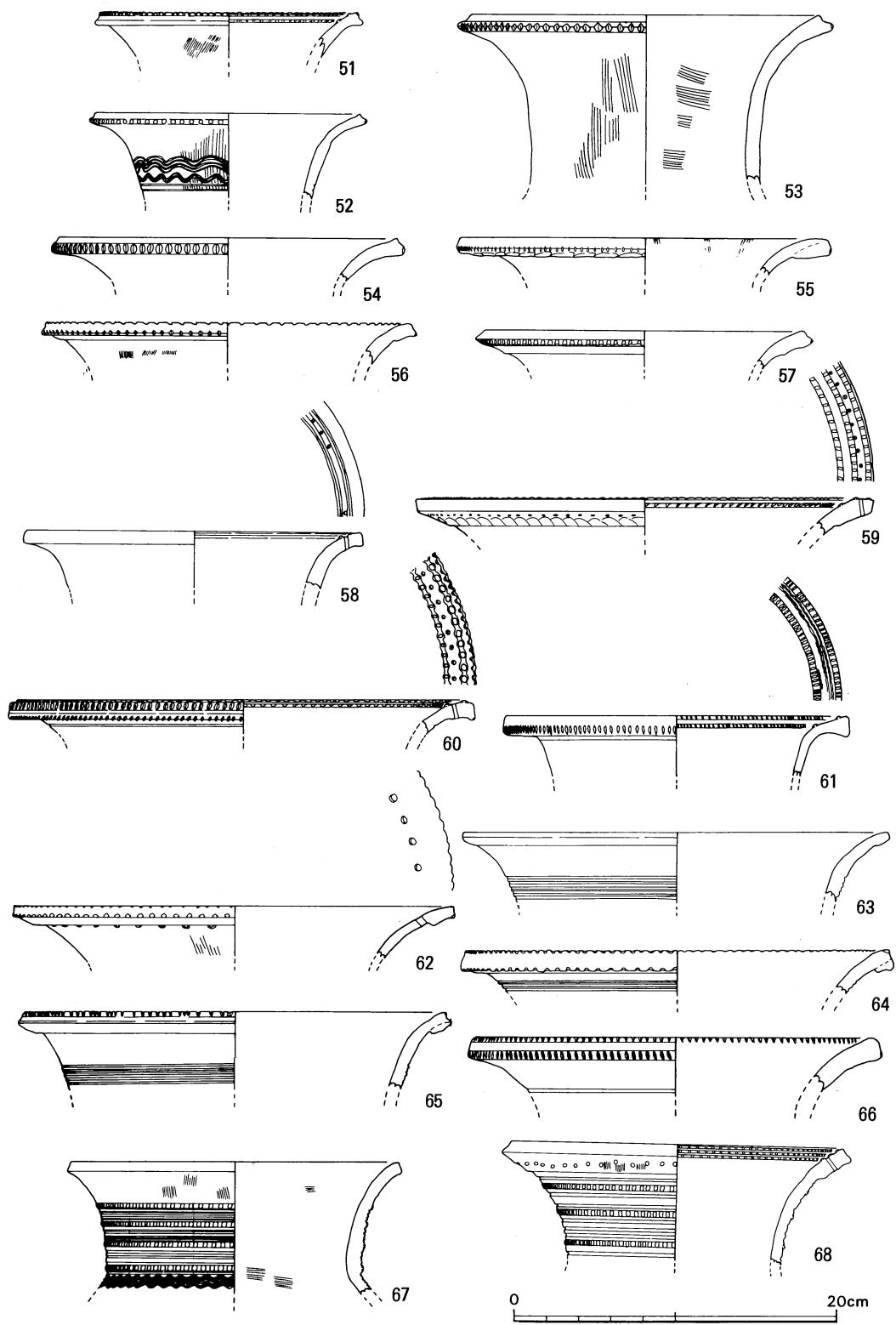
第38図 SK 4, SD 1・2 出土遺物



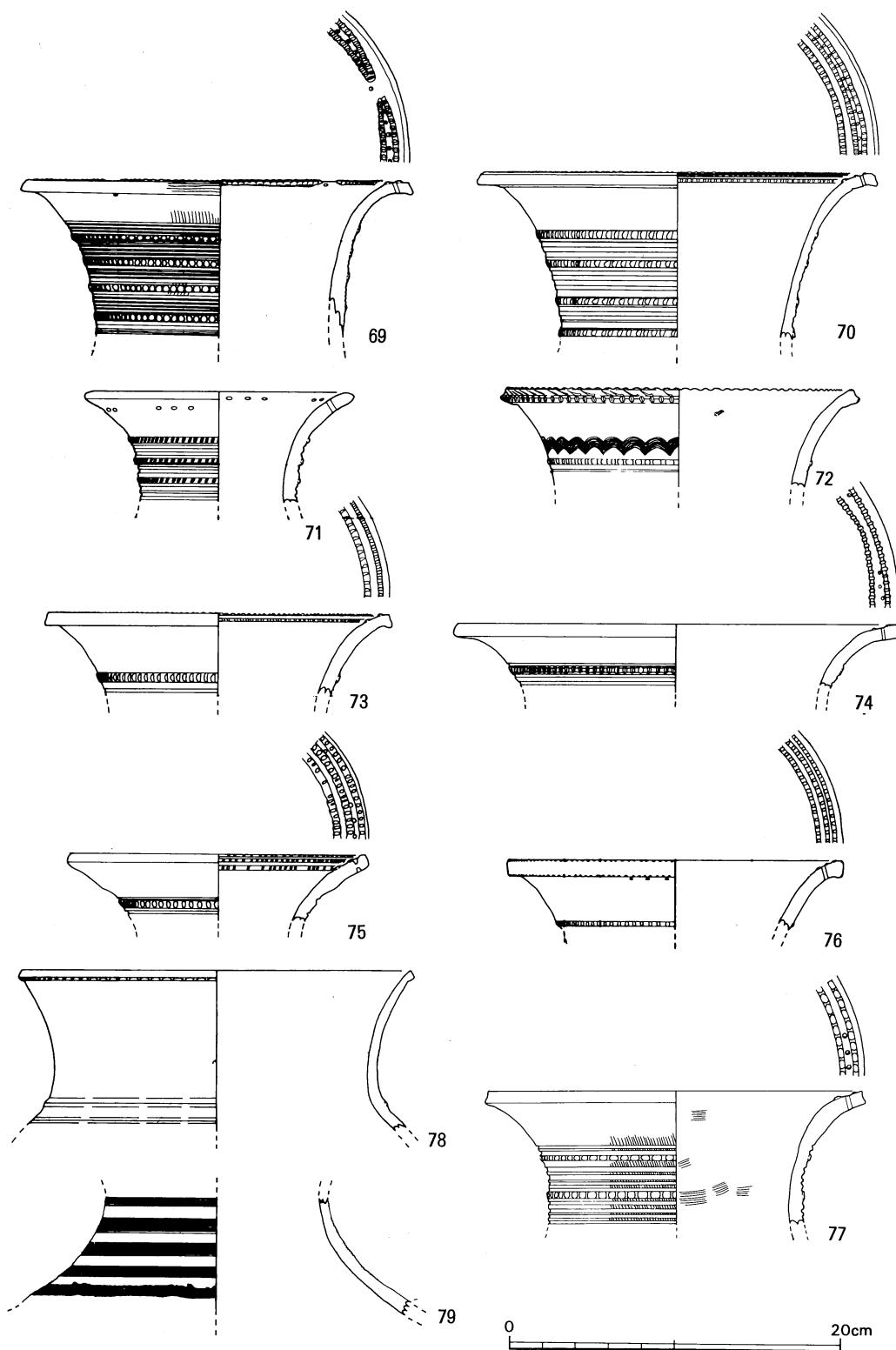
第39図 SD 2 出土遺物



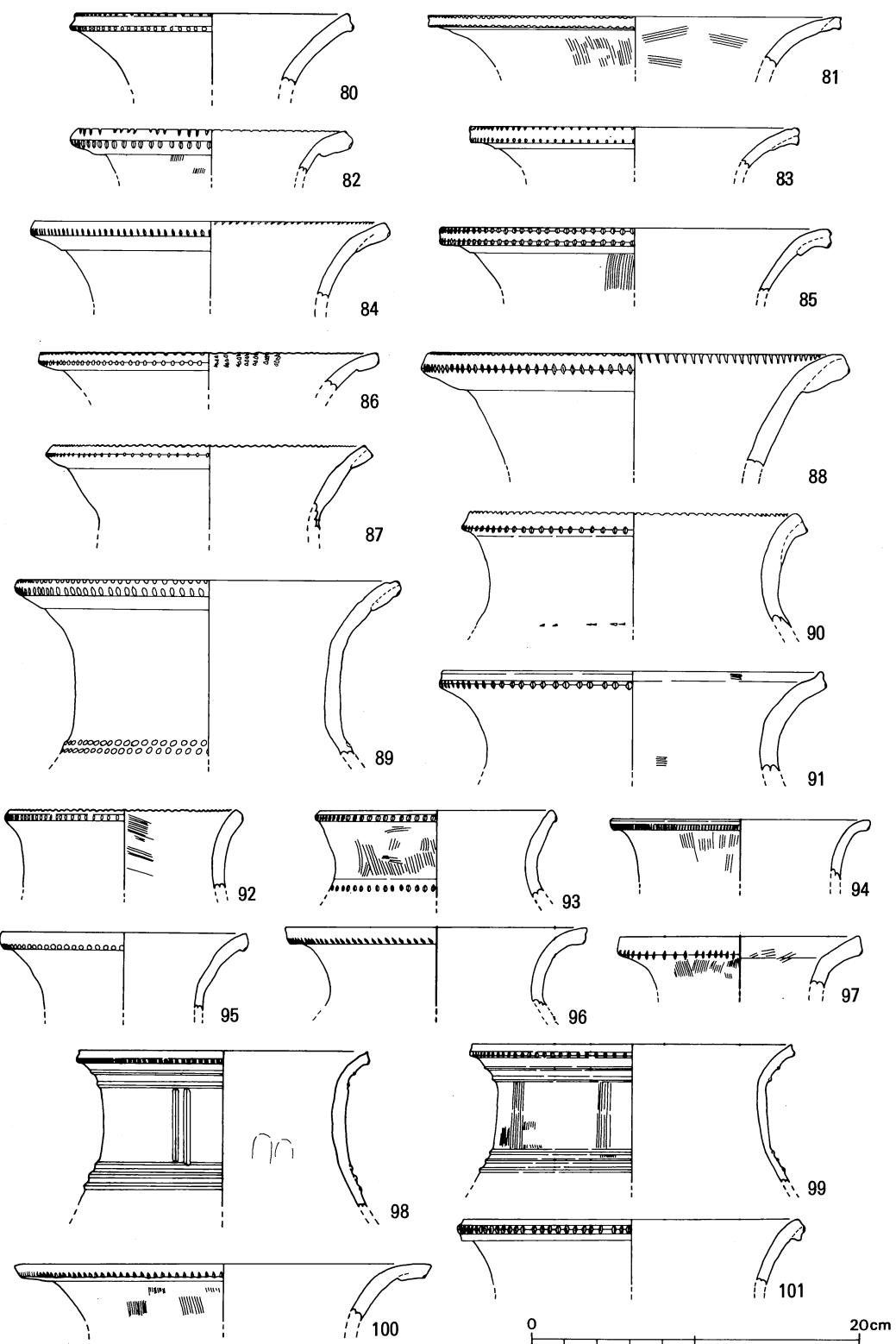
第 40 図 SR 2 出土遺物



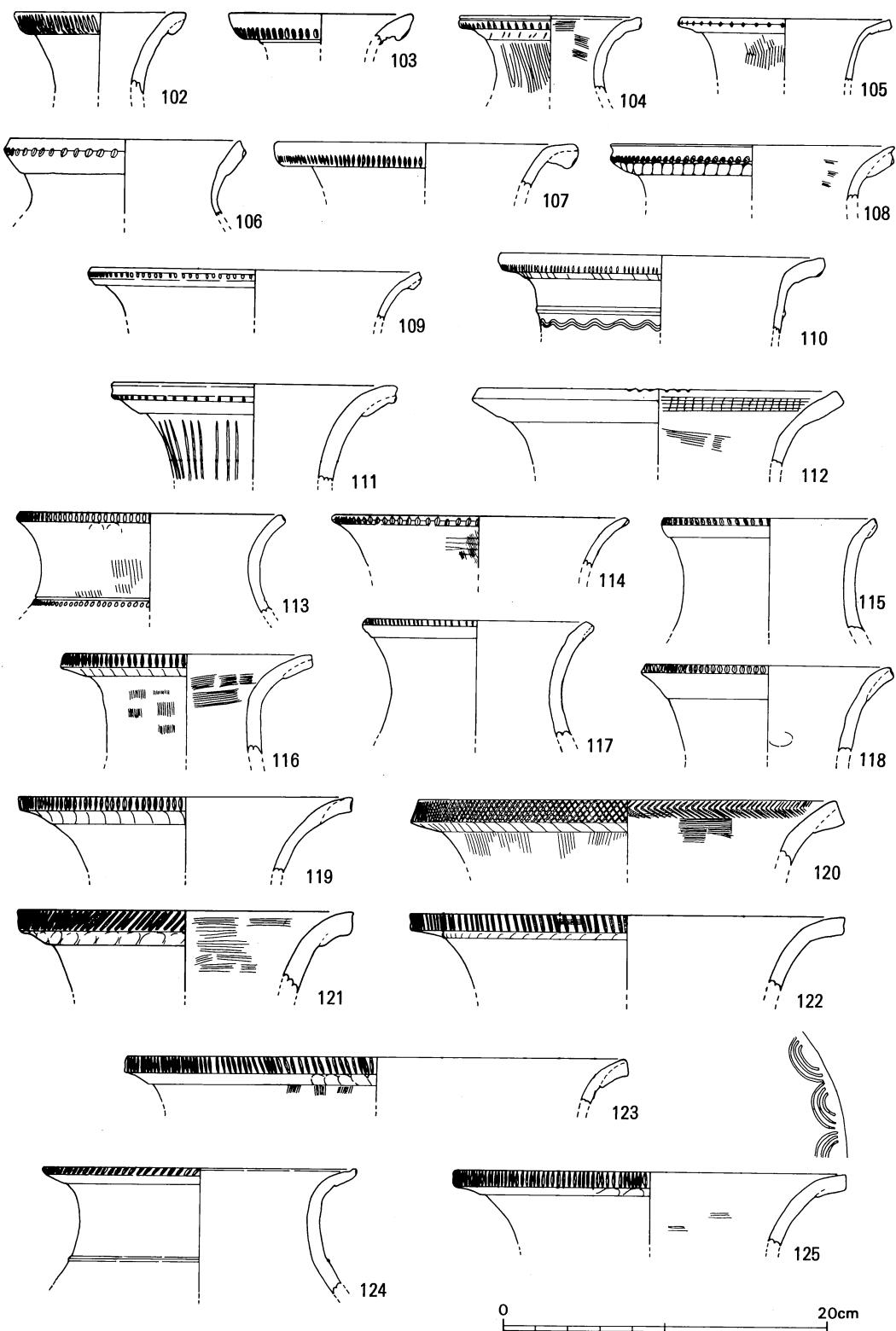
第41図 SR 2出土遺物



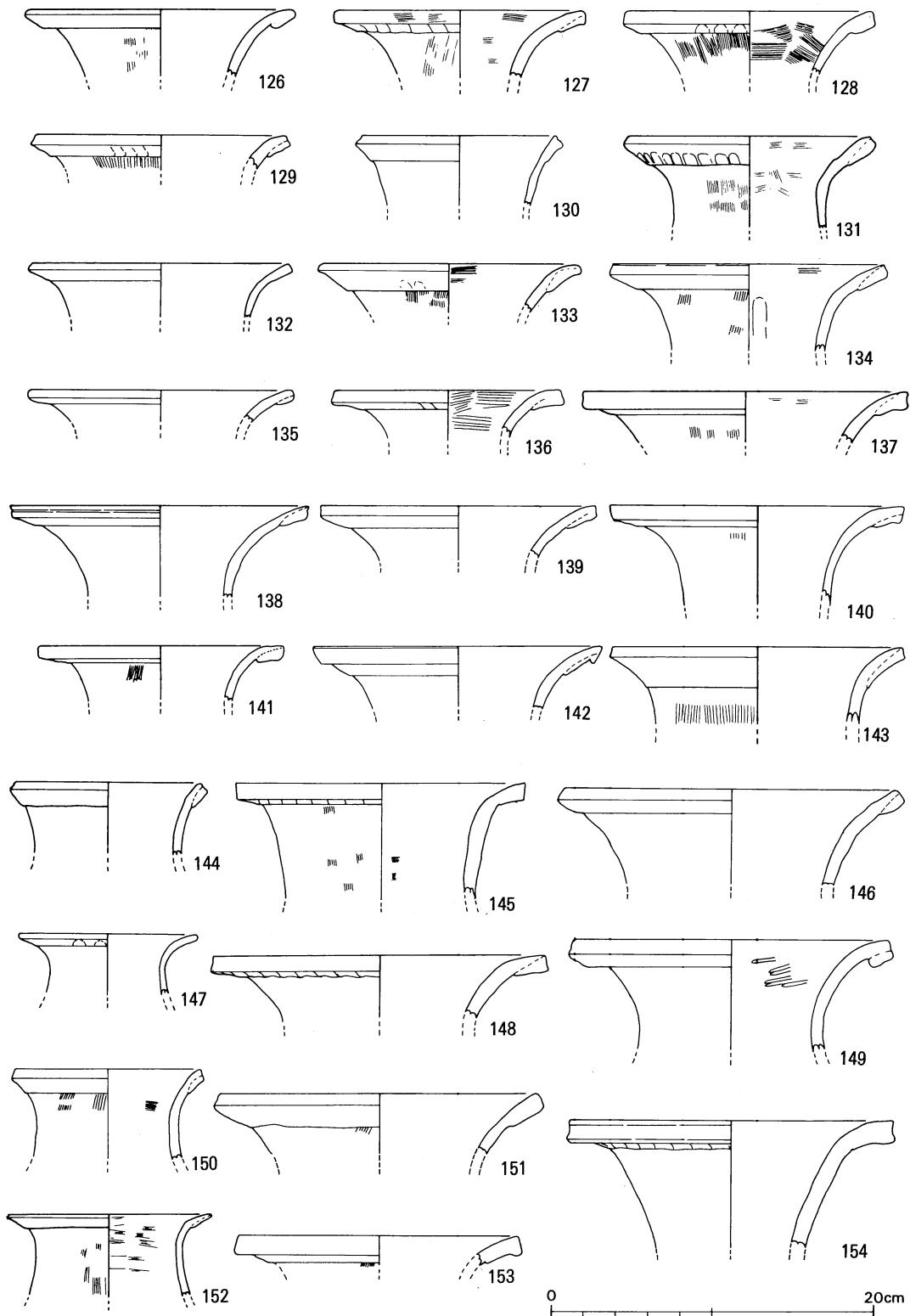
第42図 SR 2出土遺物



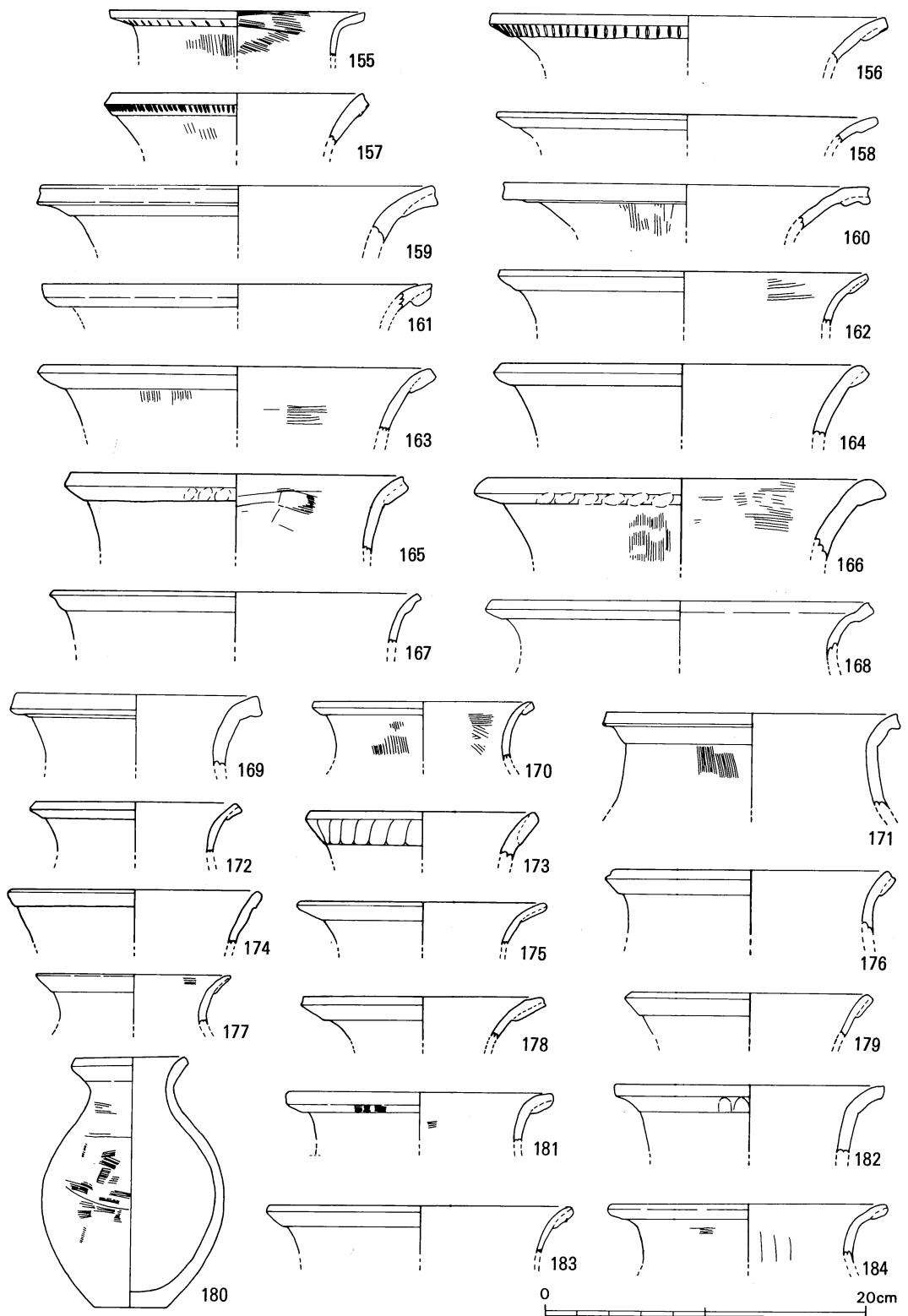
第43図 SR 2出土遺物



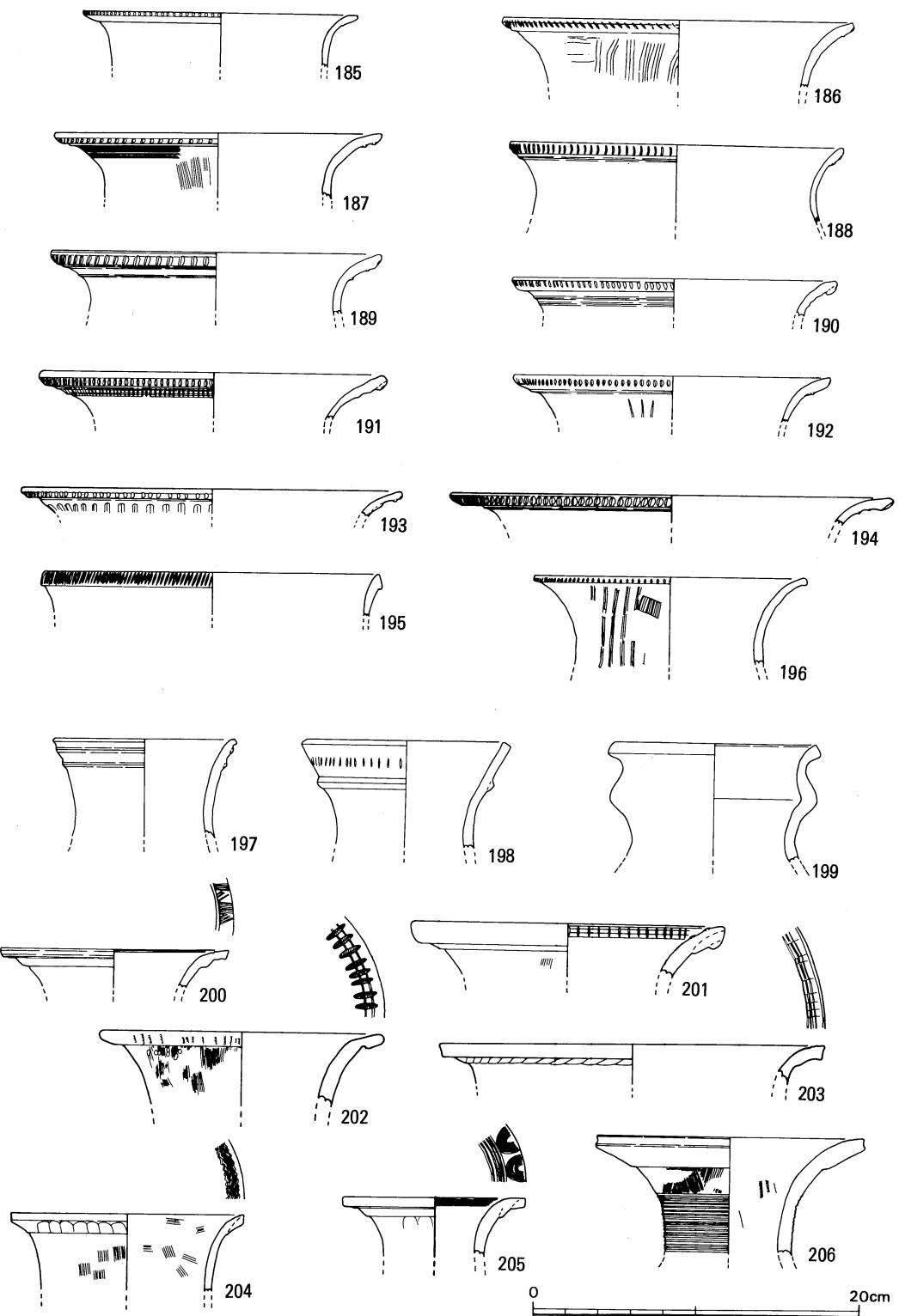
第44図 SR 2出土遺物



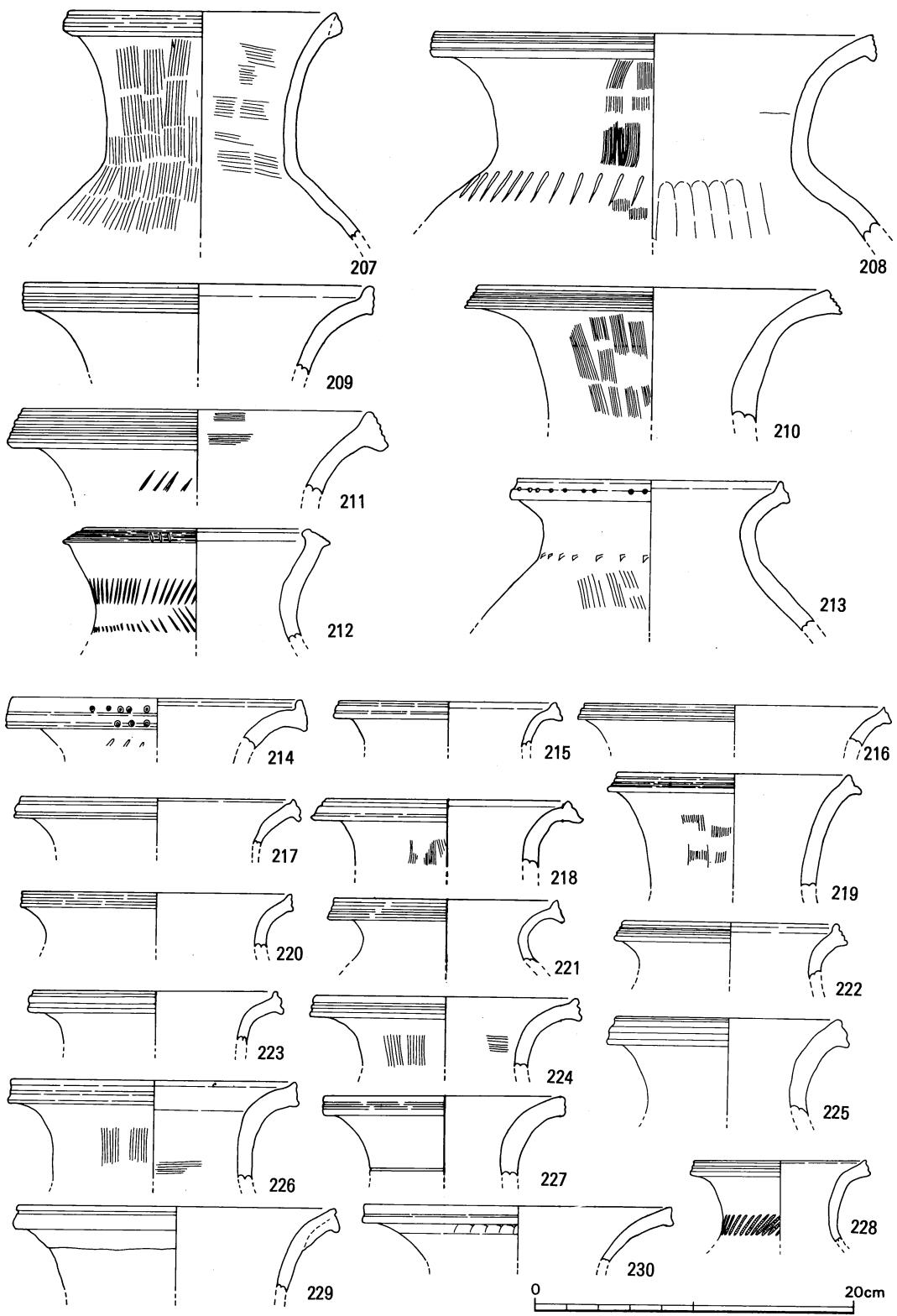
第45図 SR 2出土遺物



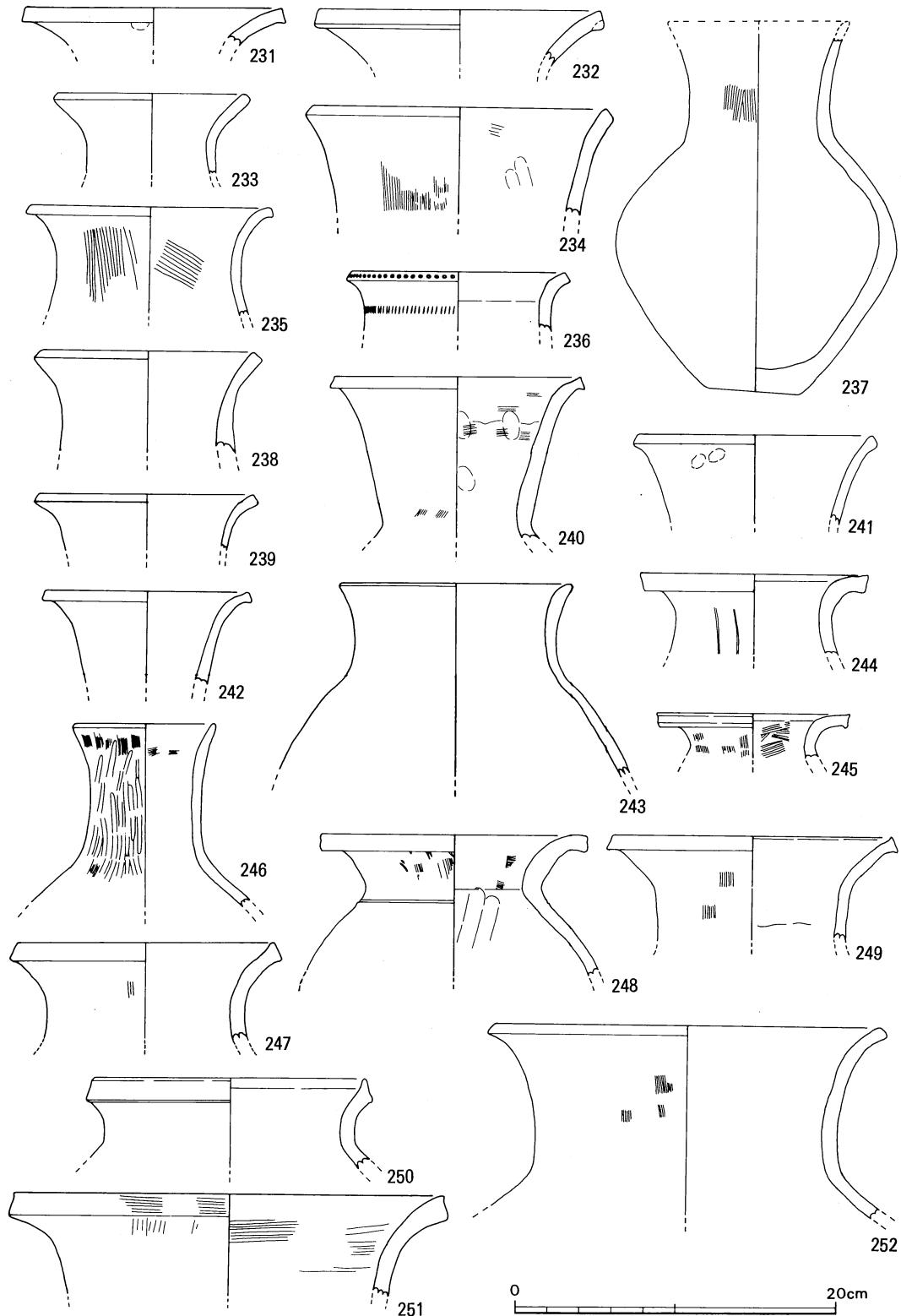
第46図 SR 2出土遺物



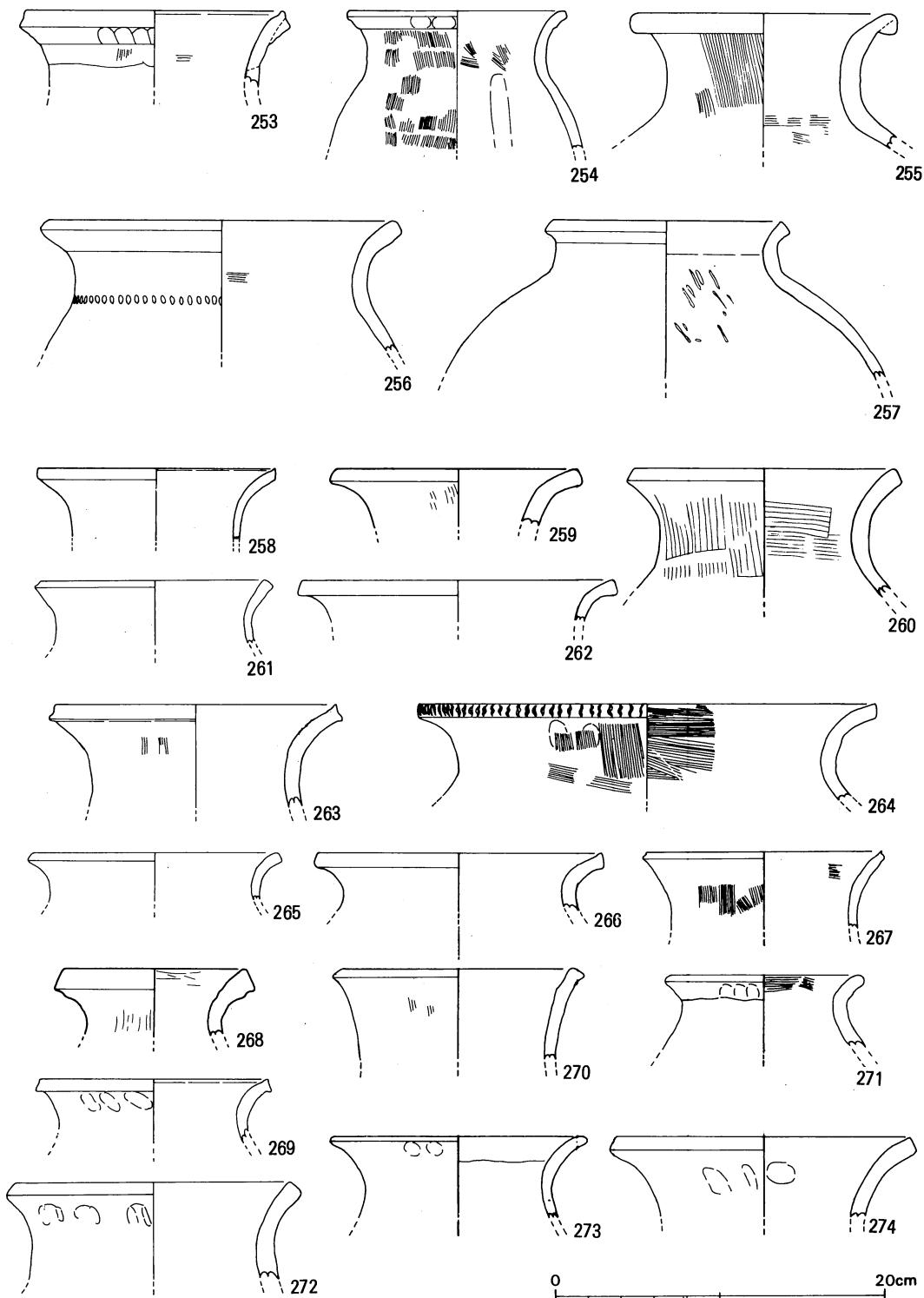
第47図 S R 2 出土遺物



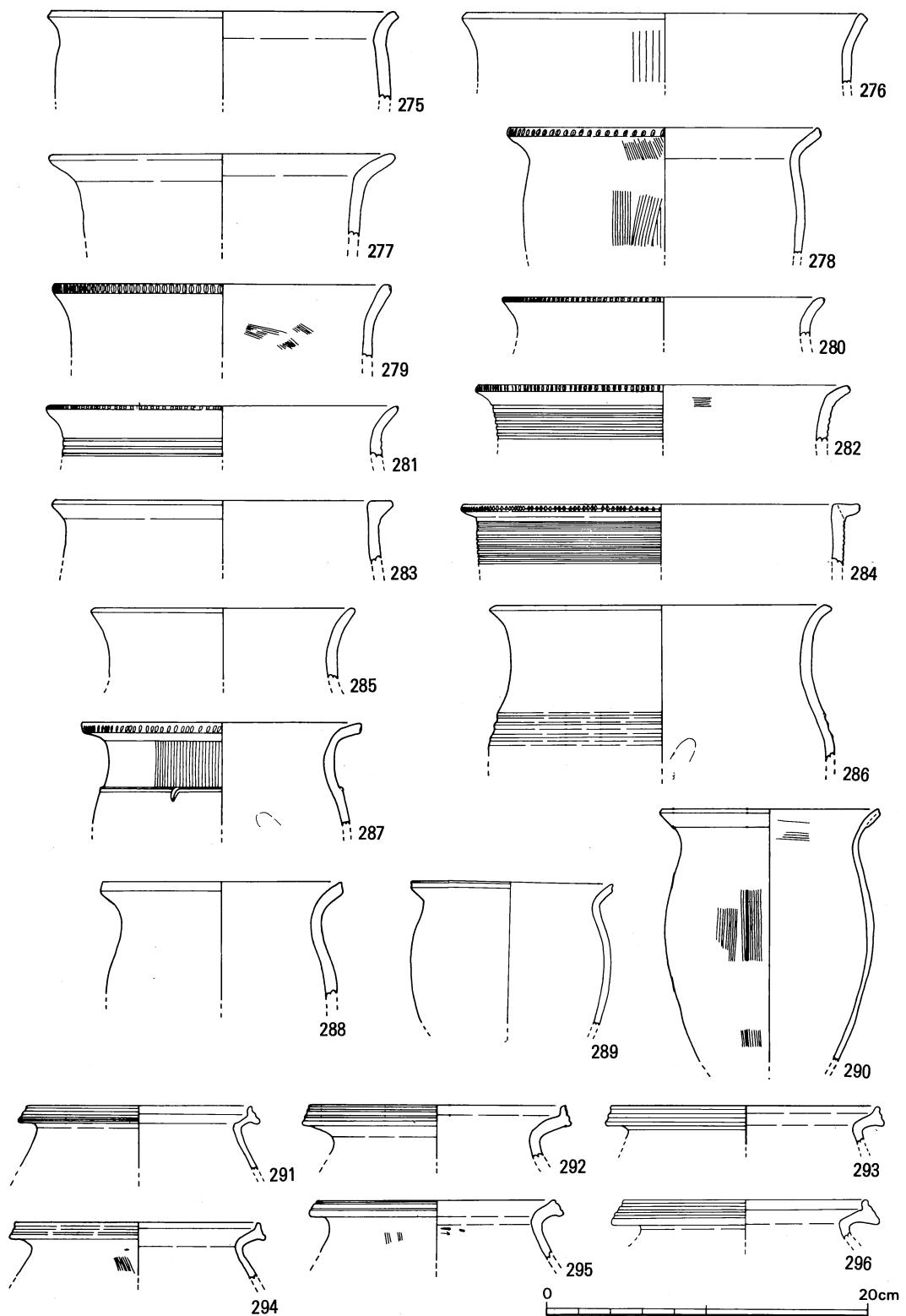
第48図 SR 2 出土遺物



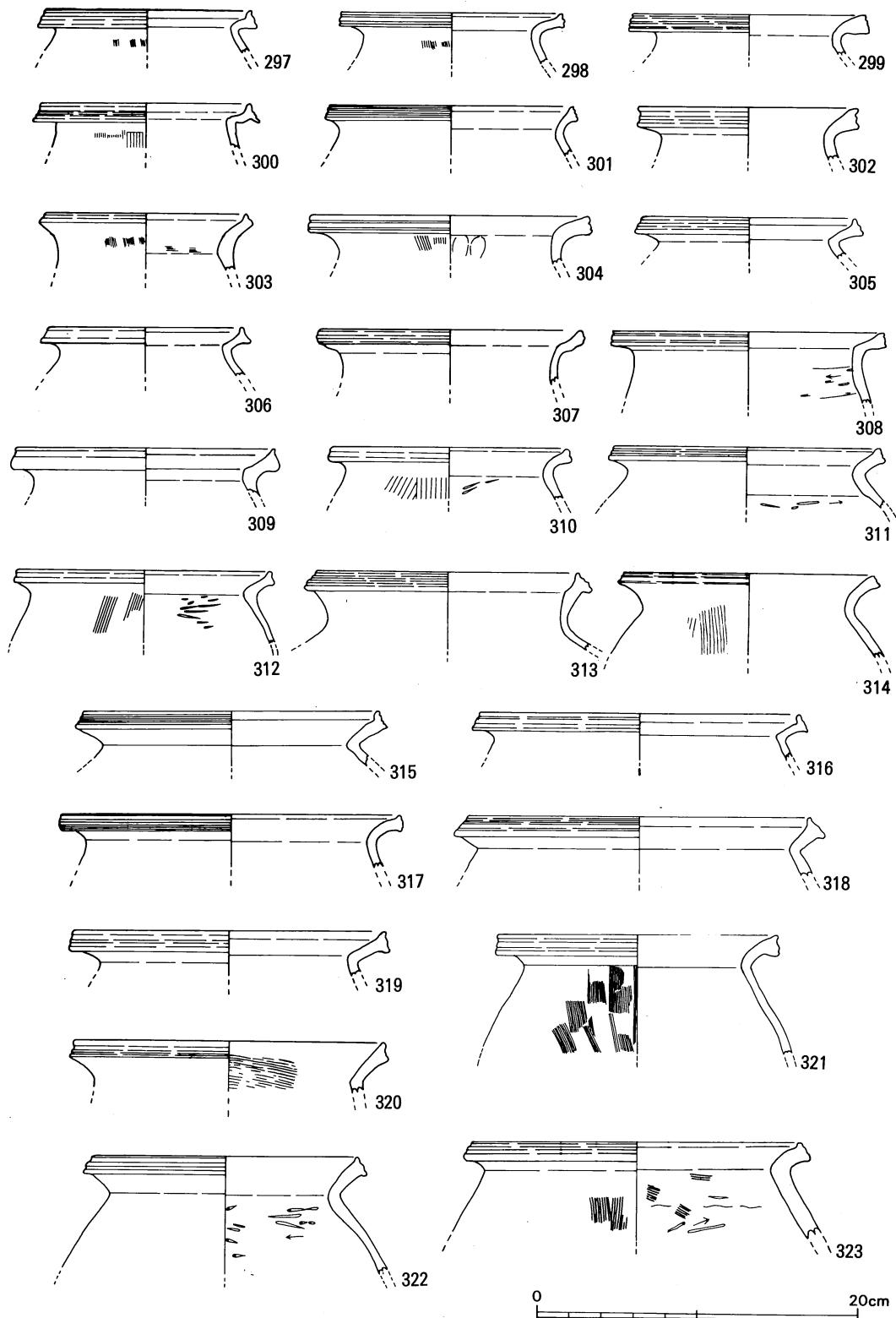
第49図 SR 2出土遺物



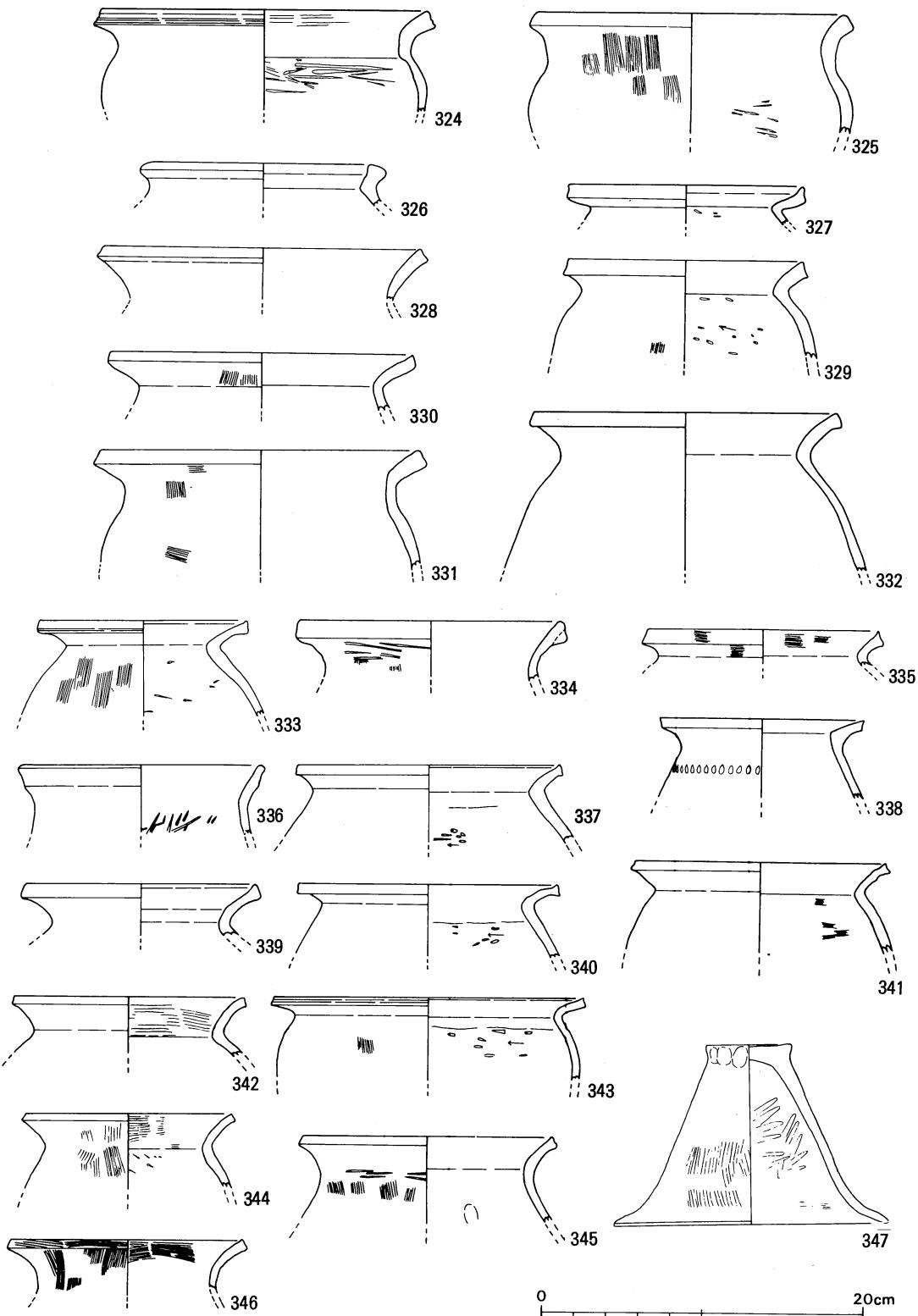
第50図 SR 2 出土遺物



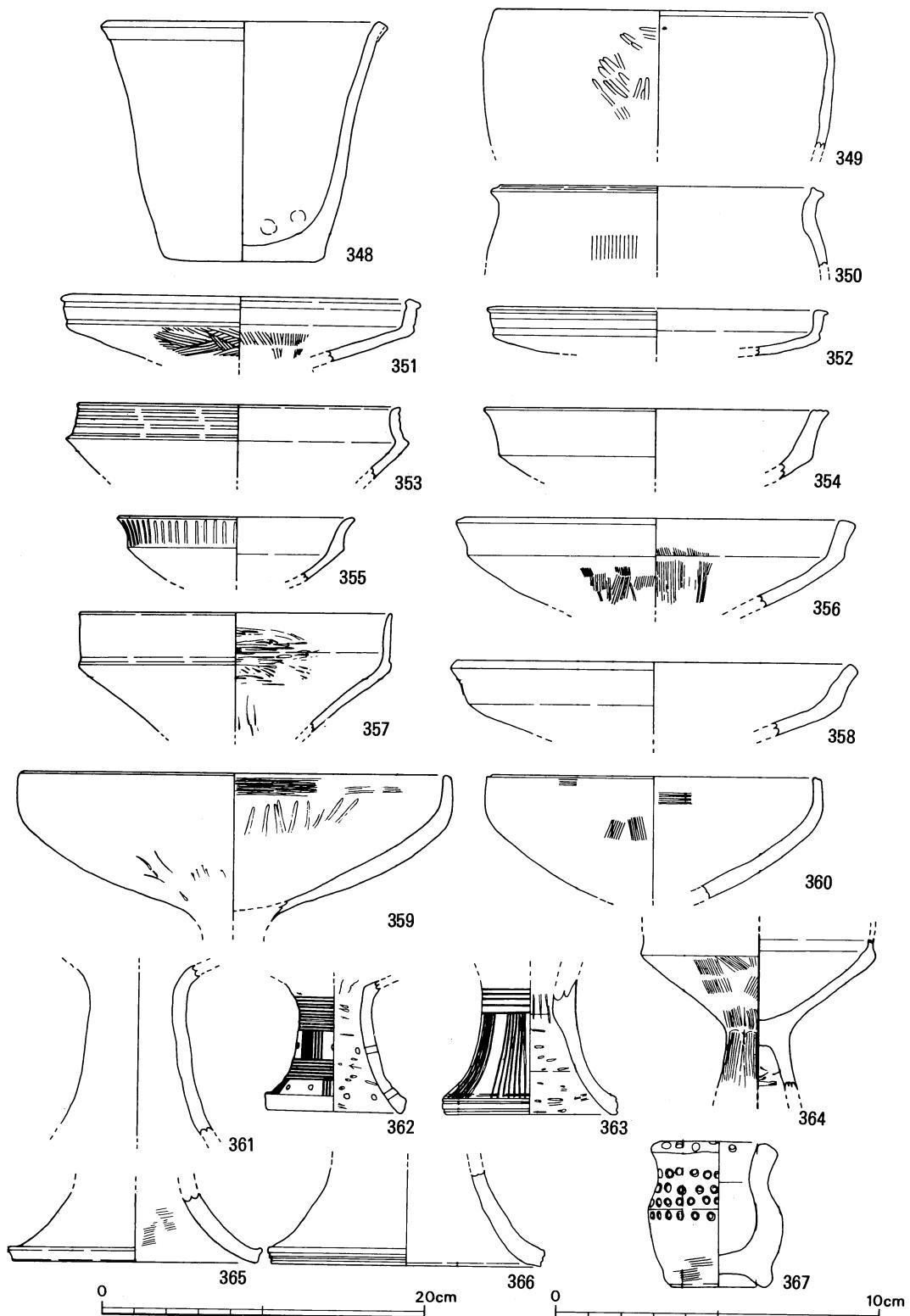
第 51 図 SR 2 出土遺物



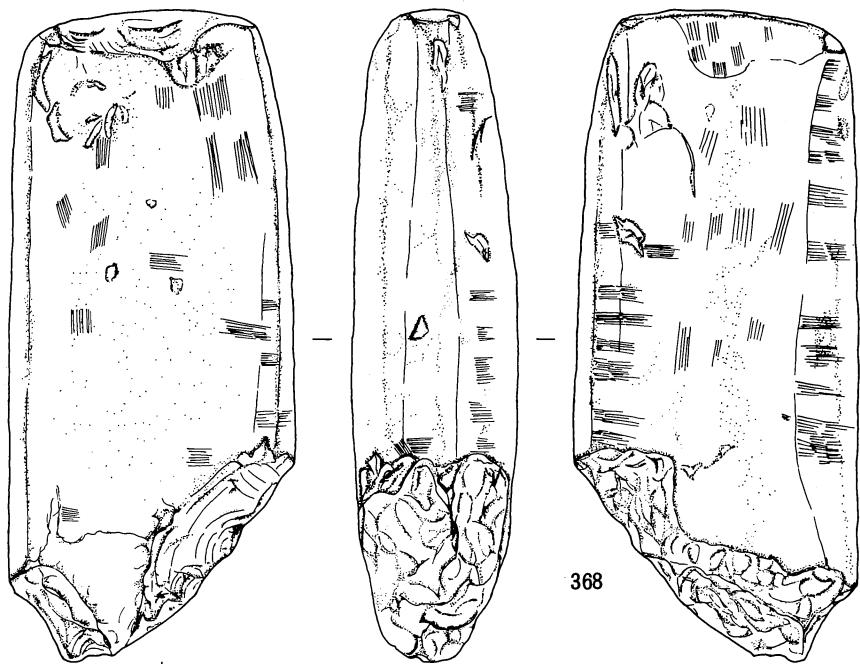
第 52 図 S R 2 出土遺物



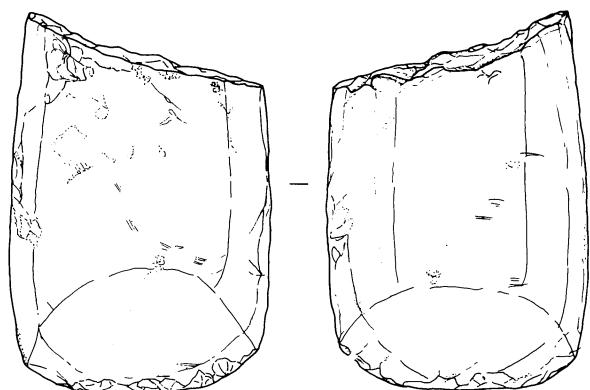
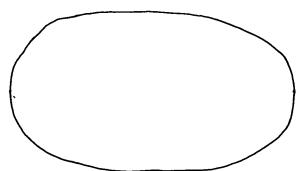
第 53 図 S R 2 出土遺物



第54図 SR 2出土遺物



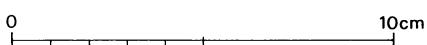
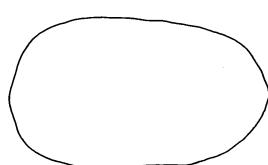
368



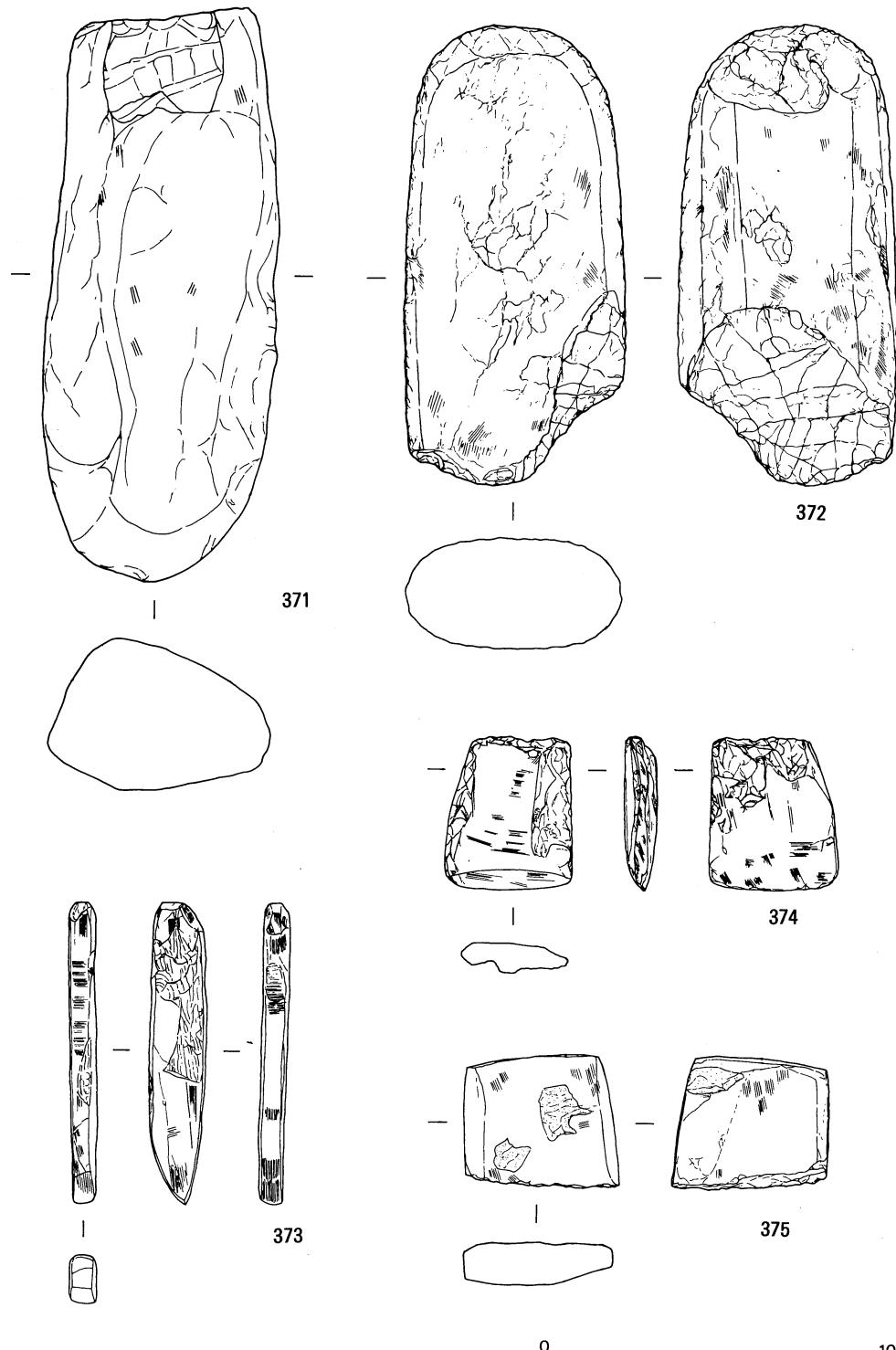
369



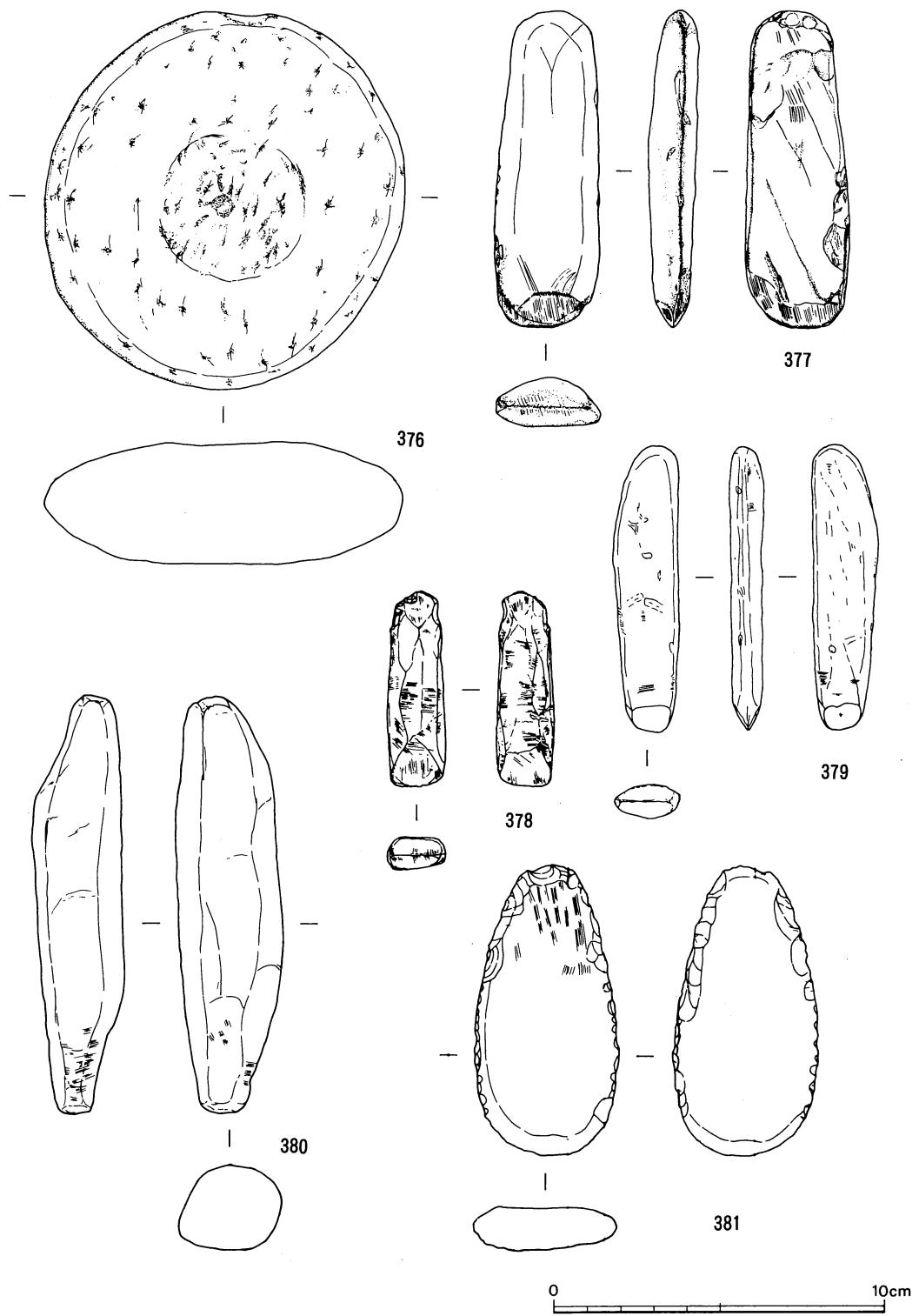
370



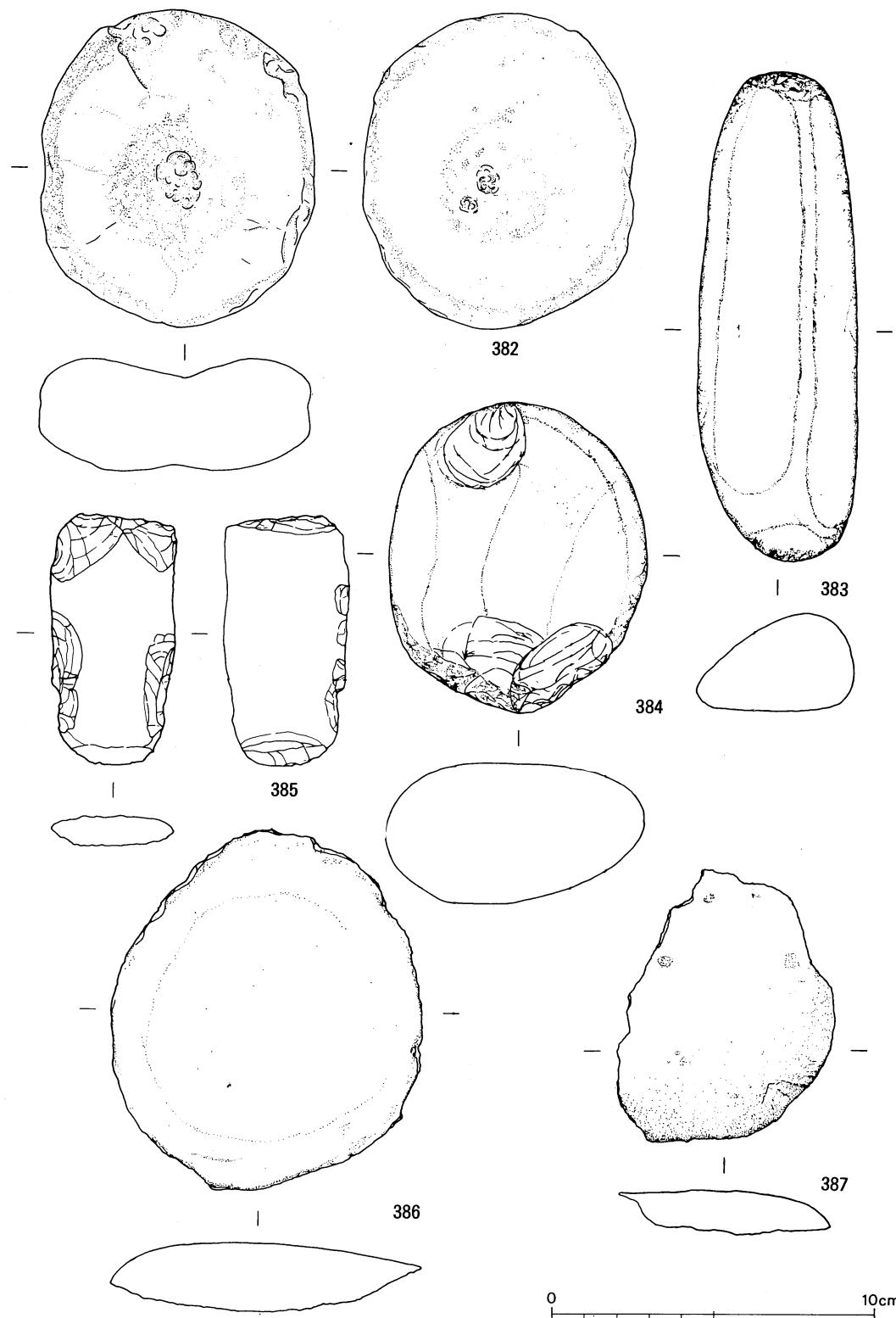
第55図 SR2出土遺物



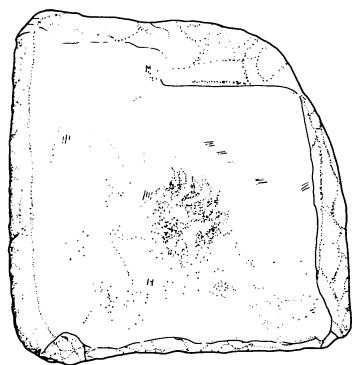
第 56 図 S R 2 出土遺物



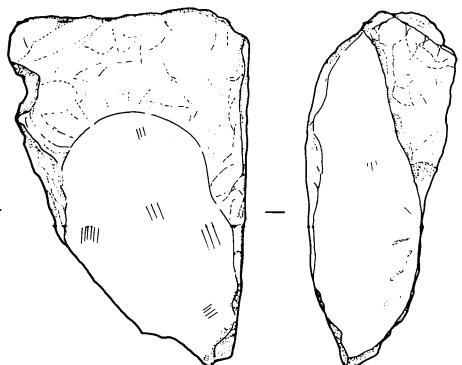
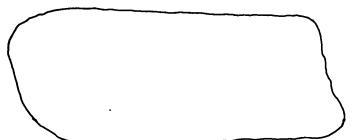
第57図 SR 2 出土遺物



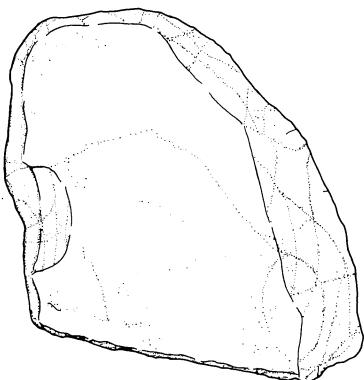
第 58 図 SR 2 出土遺物



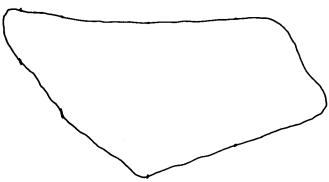
388



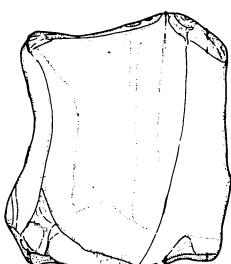
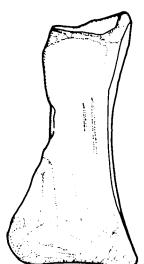
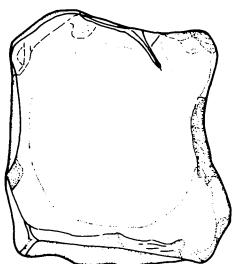
389



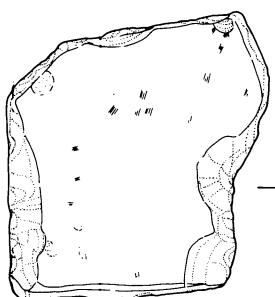
390



0 10cm



391

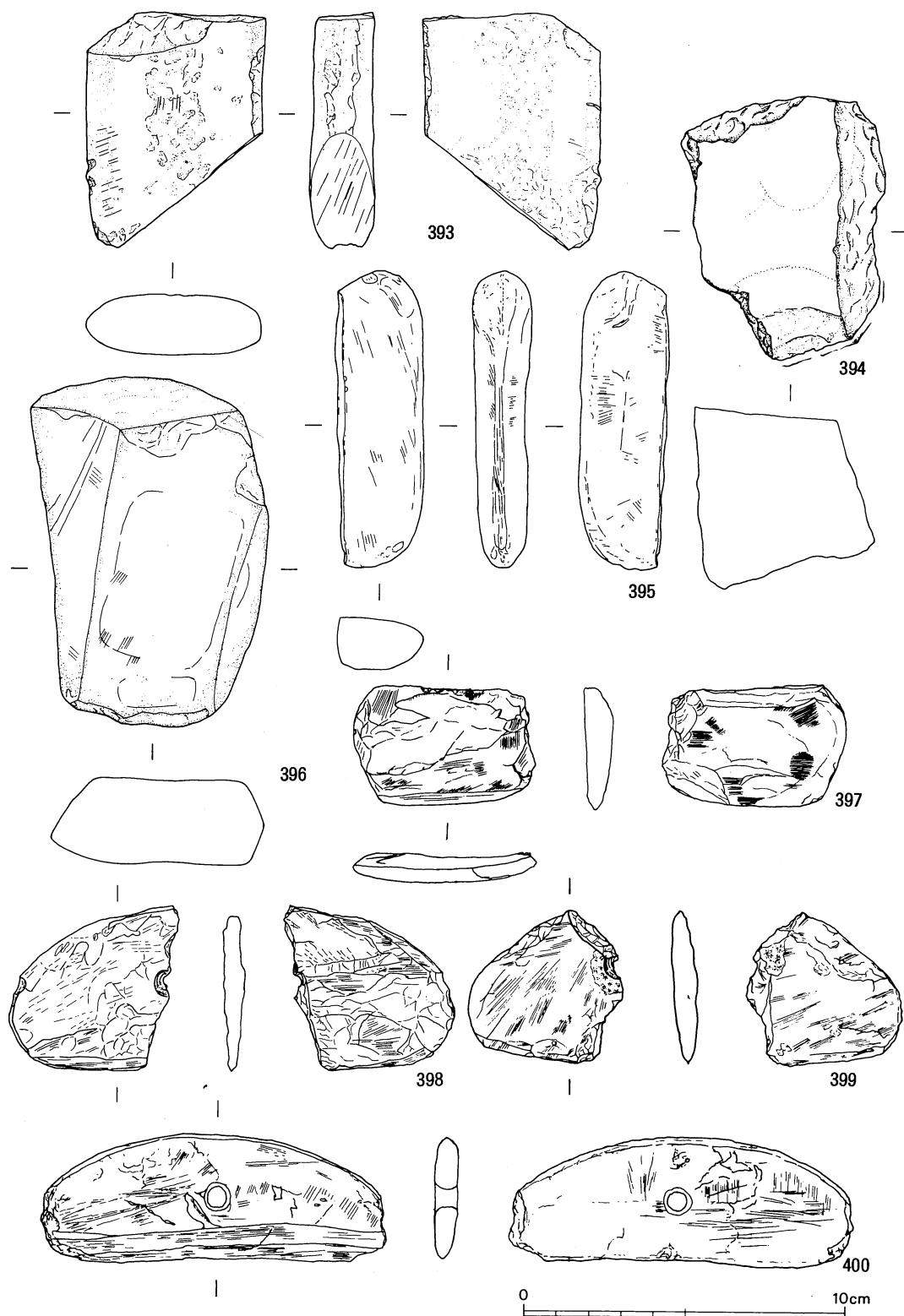


392

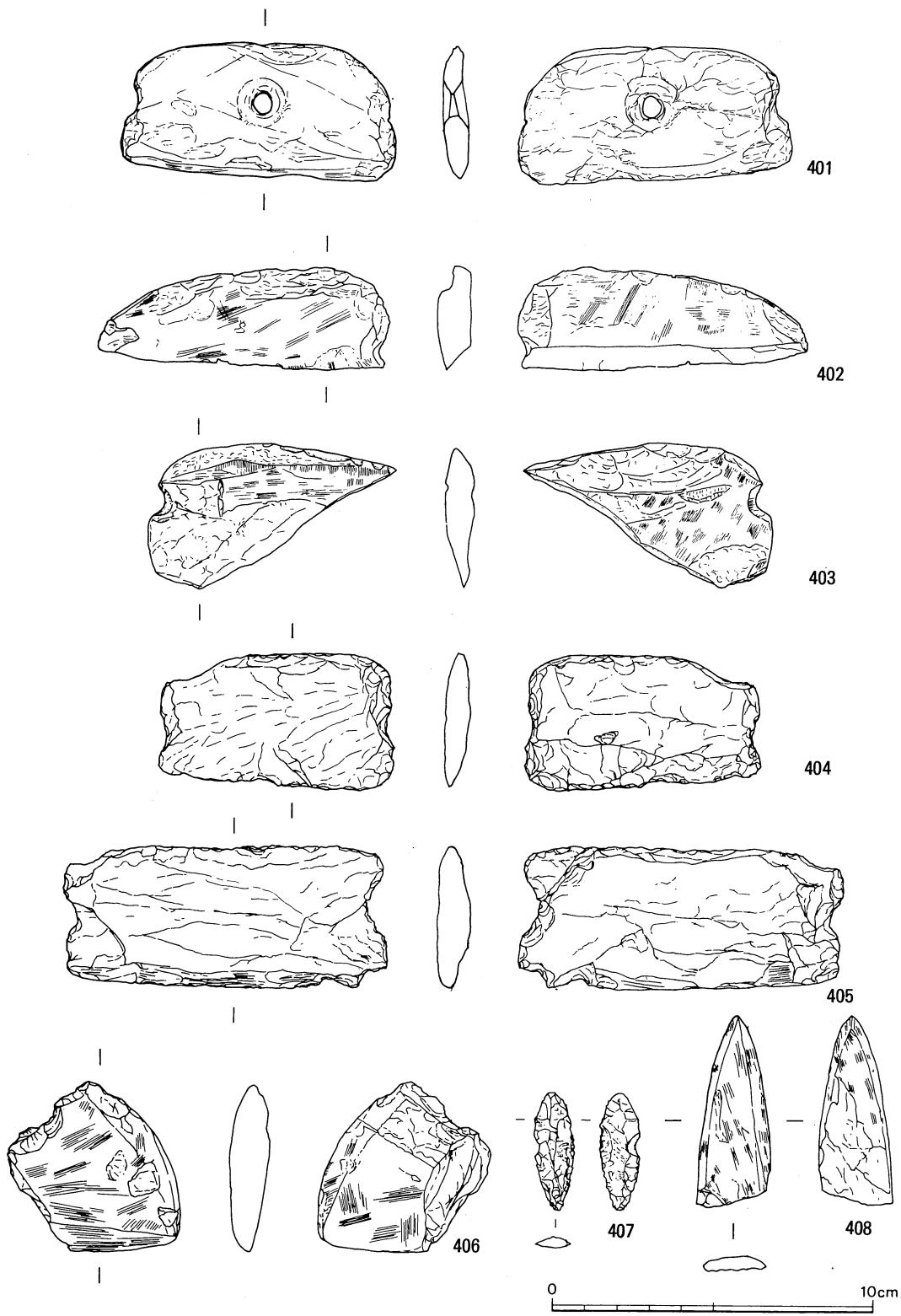


0 20cm

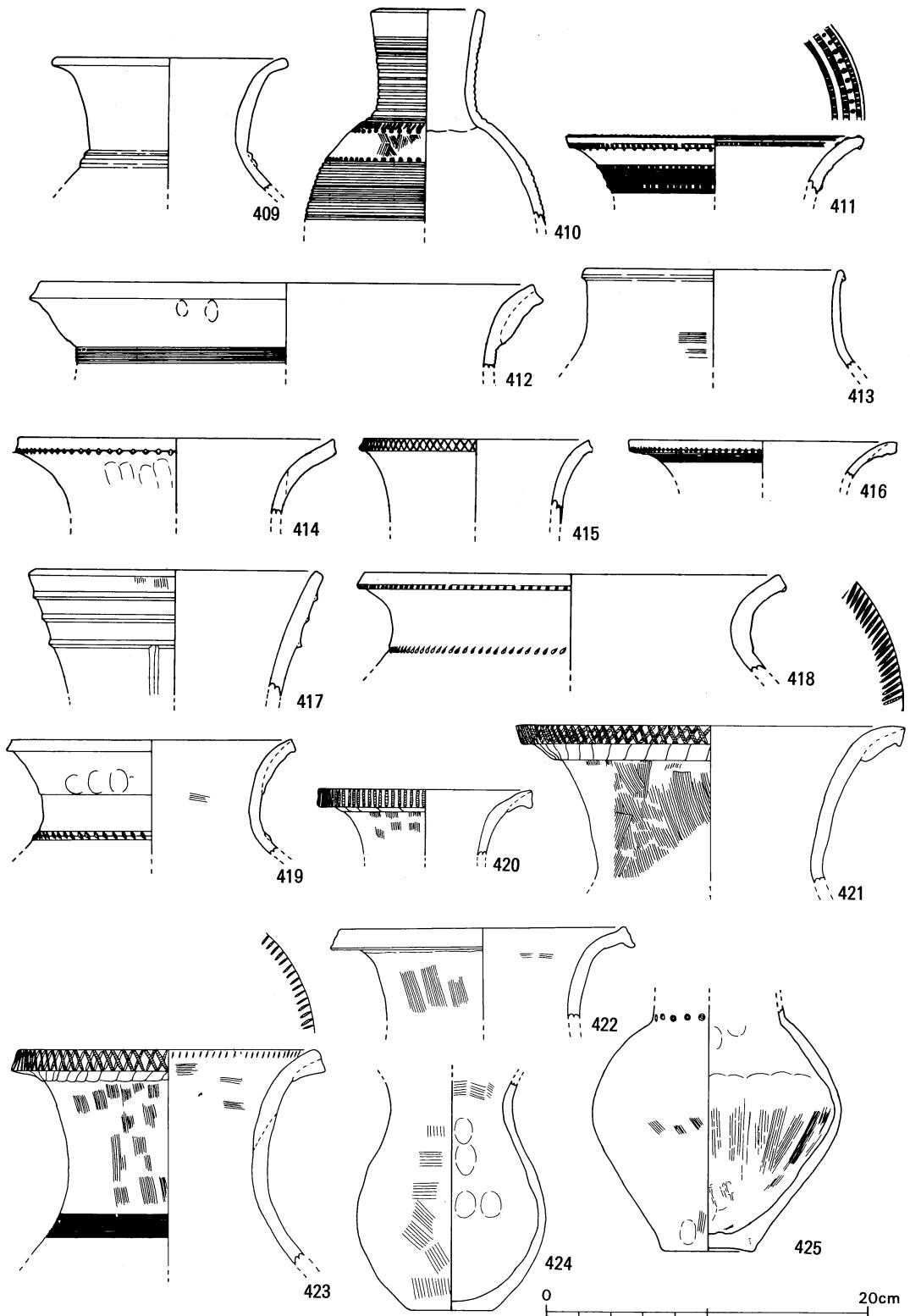
第 59 図 SR 2 出土遺物



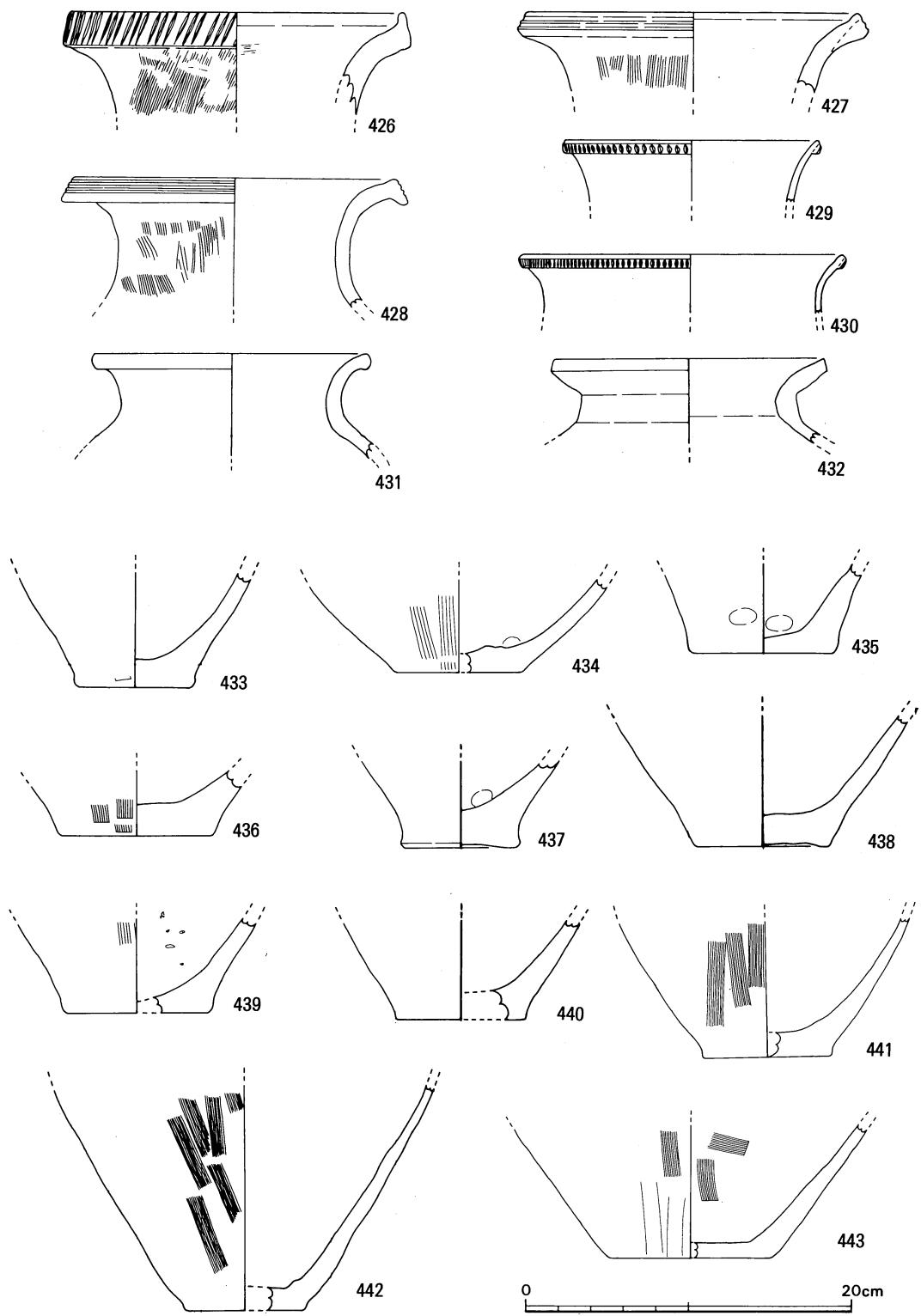
第 60 図 SR 2 出土遺物



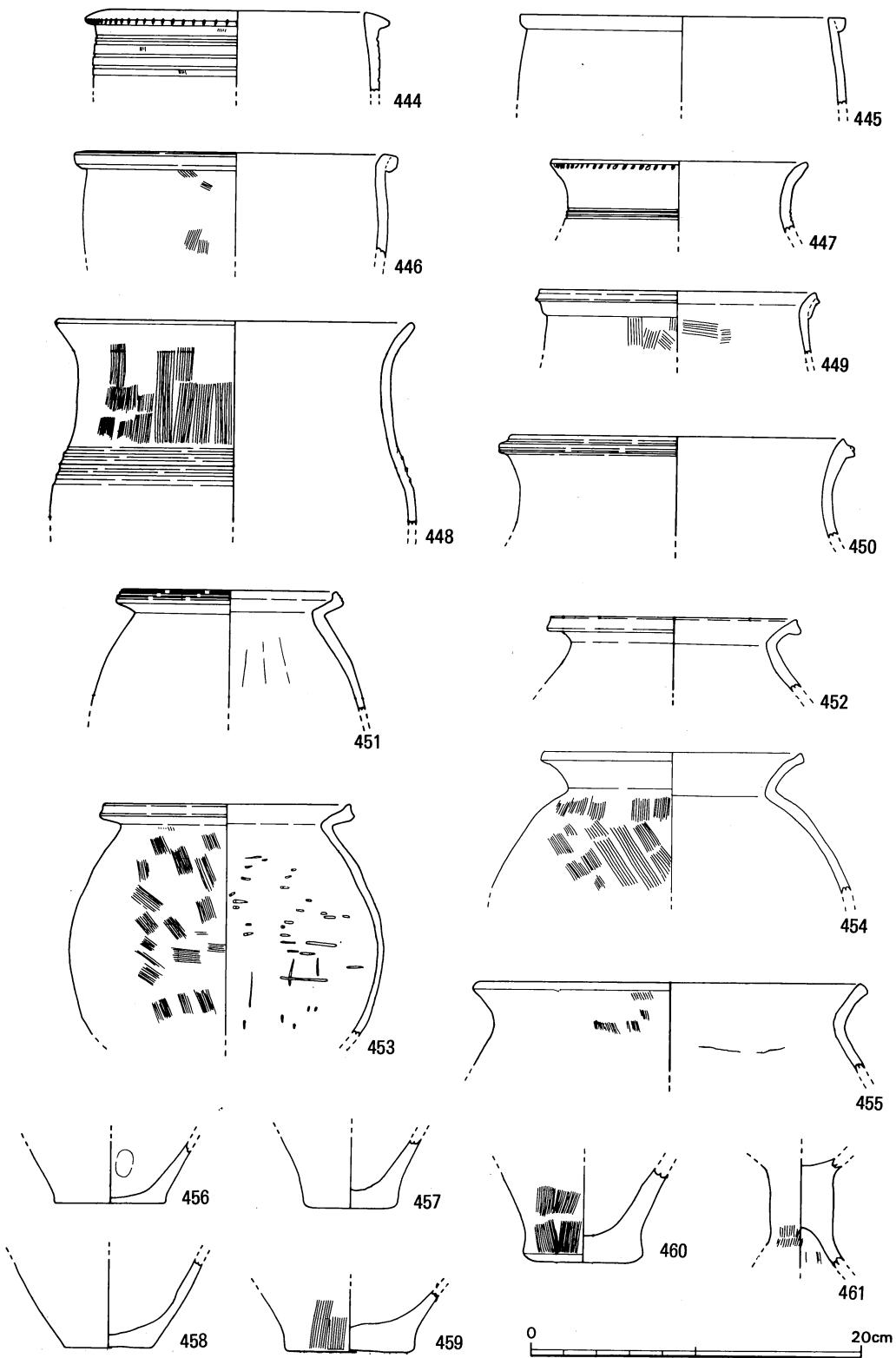
第 61 図 SR 2 出土遺物



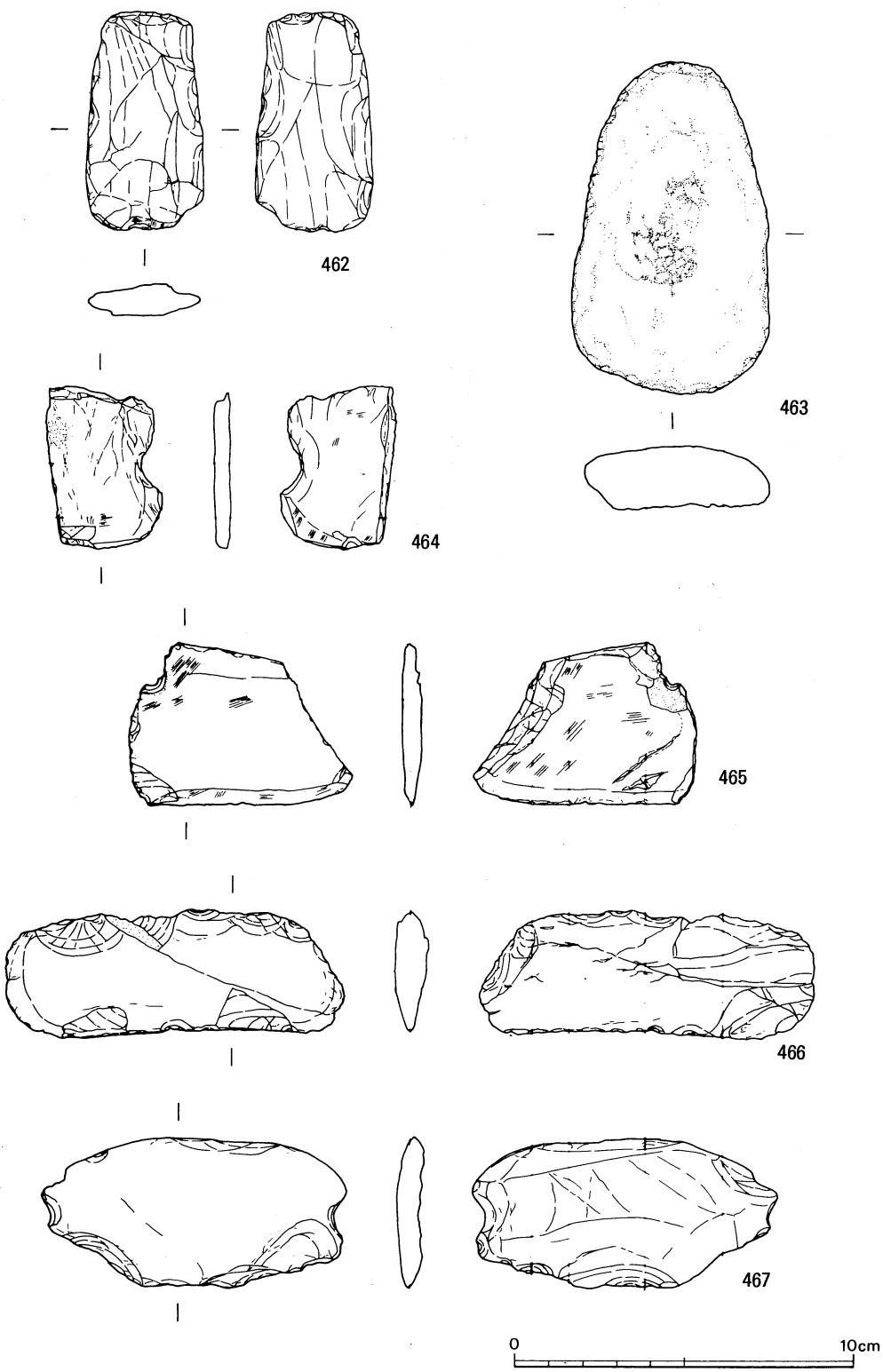
第62図 SR2出土遺物



第 63 図 S R 2 出土遺物



第64図 SR 2出土遺物



第65図 SR 2出土遺物

4. Loc. 36B

Loc.36B

I. 位置と調査経過

Loc.36Bは、田村遺跡群の北西部に位置し、小字横手の東南端にあたる地点である。北はLoc.36AのAトレンチに接し、西は弥生後期の集落址を検出したLoc.34に接している。

当地点は、空港拡張事業に付随した田村川暗渠化工事に伴って、まず東側（A 3-22-12～B 3-7-2 以東）の田村川右岸域 175 m²の調査を緊急に行い、後に西側 675 m²の調査を行った。順序としては、最初東側の中世遺構を調査し、続いてその下層の弥生遺物包含層を発掘、次に西側の中世遺構を調査し、最後に弥生遺構の発掘を行った。

2. 調査概要

当地点の最終的な発掘面積は 850 m²に及び、多くの中世遺構と若干の弥生遺構を確認した。弥生時代に関するものは、竪穴住居址 1 棟、土塙 2 基（北部トレンチを入れると計 8 基）、それに南北方向に流れる大きな自然流路を検出した。住居址および土塙は完掘できたが、自然流路は、長大であるため西側肩部の確認後、本体部に 3 本のトレンチを入れて調査した。この自然流路は北部の Loc.35 A・35 B から続く S R 2 である。よって、Loc.36 B 東側調査区下層の弥生包含層も、S R 2 の埋土の一部としてこれを新たに把握した。

3. 層序と出土遺物

Loc.36 の基本的な層序は、

第 I 層 耕作土

第 II 層 床土

第 III 層 灰褐色粘質土層

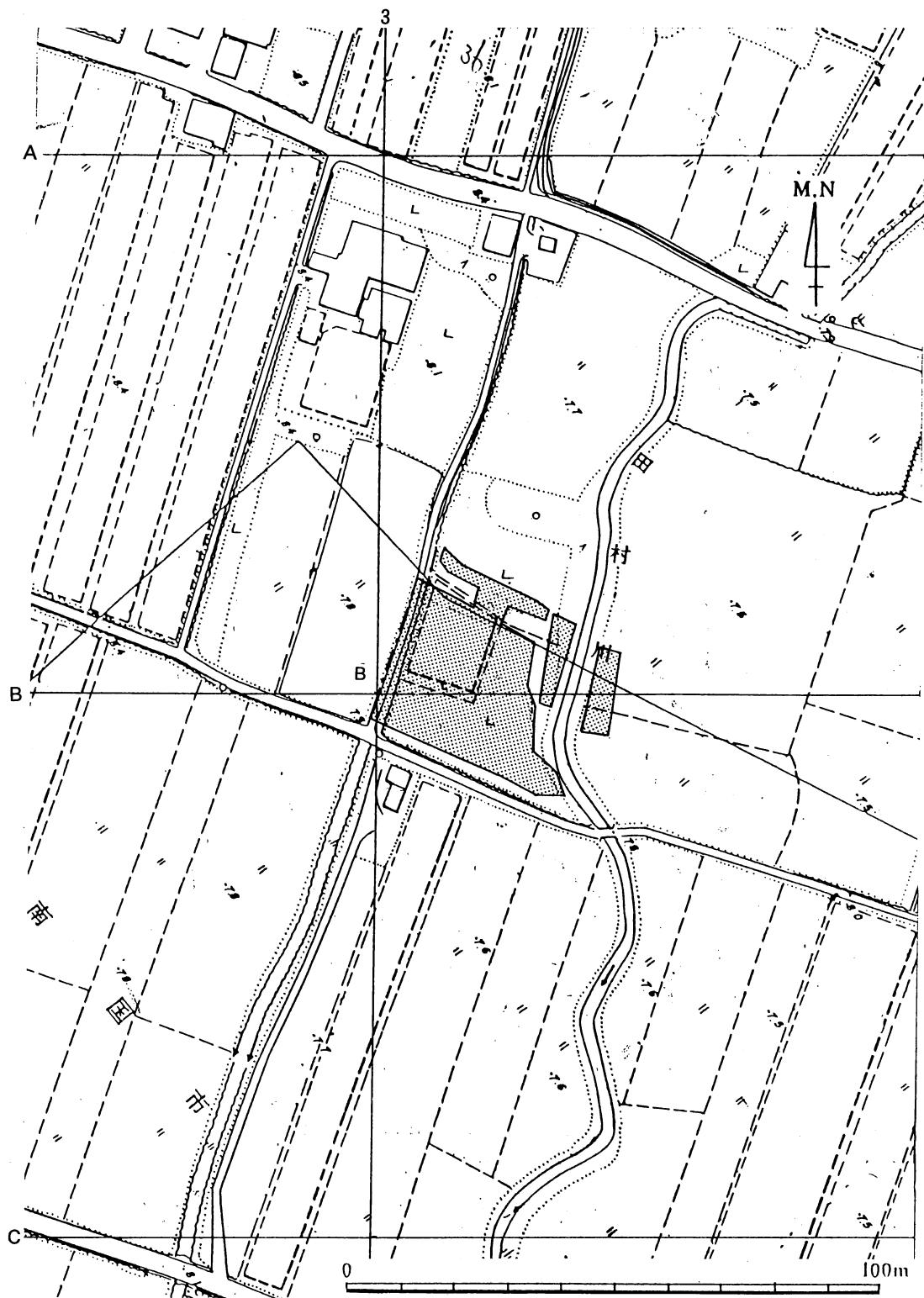
第 IV 層 黄褐色粘質土層

である。但し、第 IV 層の堆積が確認できたのは S R 2 の西肩部以西であり、それより東はすべて、S R 2 の埋土上層が中世遺構の検出面となっていた。すなわち、弥生時代には当地点の大半は自然流路が占めており、西部のみが微高地状をなしていたものと考えられる。

なお、第 III 層は弥生および中世期の遺物を包含していたが、それらについては『中・近世編』で紹介する。

4. 遺構と遺物

住居址



第66図 調査区設定図

STI

STIは、調査区の西端部に位置し、第IV層上面において検出された。平面形は、ほぼ円形であるが南北にやや長く、長径5.84m、短径5.40mを測り、長軸方向はN-21°Eを指す。

壁は垂直に近く立ち上がり、壁高は0.30mを測る。床面の標高は6.86mである。床面は、ほぼ平坦であるが、北東部に若干の凹凸がみられ、小ピット状に凹をなしている箇所もあった。また、西の壁際にベット状の0.15mほどの段が設けられており、壁溝は東南部でわずかに確認されただけであった。

埋土は、黒褐色粘質土をベースとしており、第I層が灰黒褐色粘質土、第II層が茶黒褐色粘質土、そして第III層が黄黒褐色粘質土であった。なお、第I層と第II層とは酷似しており、第II層と第III層の間ほど境界が明瞭でなかった。

ピットは、合計13個確認された。各ピットの形状・規模は右の表の通りである。ピットの深さから考えると、P2・6・7・10・11が主柱穴を構成していたものと考えられる。中央ピットは、平面形が楕円形を呈しており、埋土中位までは炭化物を多く含んでいた。その下位では、一回り小さなピットが確認された。

STI ピット 計測表

No.	径(cm)	深さ(cm)	備考
1	13	31	
2	19	42	主柱穴
3	25	39	
4	24	7	
5	28	22	
6	22	24	主柱穴
7	25	41	"
8	96×76	42	中央ピット
9	63×52	43	
10	32	50	主柱穴
11	21	13	"
12	42	22	
13	23	10	

遺物の出土は埋土全層よりみられたが、特に、第II層からの出土が顕著であった。出土土器は後期I段階のものが大半を占めている(1~10)。特に、9と10は、同一個体と判断され、搬入品と考えられる高杯である。石器類の出土も極めて多かった(177、178、183、191~196、199~203、206、210、211、218、219)。

土塙

SK7

SK7は、調査区の北西部に位置し、第IV層上面において検出された。平面形は、不整楕円形を呈し、長径1.74m、短径0.74m、深さ0.28mを測る。長軸方向はN-60°Wを指す。

底面はほぼ平坦であり、壁は断面U字状を呈して立ち上がる。埋土は黒褐色粘質土であり、埋土中位より弥生土器片を出土した。

SK8

SK8は、調査区の西部南寄りに位置し、第IV層上面において検出された。平面形は、不整楕円形を呈し、長径0.72m、短径0.36mを測り、長軸方向はN-70°Wを指す。

底面はほぼ平坦であり、壁は断面U字状を呈して立ち上がる。深さは0.18mを測り、埋土は黒褐色粘質土である。埋土中位から底面にかけて多くの弥生土器片の出土をみたが、図示できたのは11のみである。

S K 8は、S T 1より南へ4m程の所に位置しており、同住居址に付属する貯蔵穴ではないかと考えられる。

自然流路

S R 2

S R 2は、その西側の肩部の立ち上がりが調査区西部において、第III層除去後に検出された。一方、東側の肩部は調査区東端においても検出されず、そのまま現在の田村川に至っている。少なくとも当地点においては、S R 2は幅40mを越える大きな流路であったと考えられる。

自然流路であるため埋土の堆積状況も極めて乱雑であり、粘質土層と砂層とが交錯し、また、粘質土中に砂層あるいは礫層をサンドウィッチ状に噛むところも多く、逆の場合もみられた。

ところで、S R 2の肩部調査の際、A 3-21-23～A 3-21-25ラインの下層セクション図にみられるように、流路底面（図のXX層上面）は一度隆起して再び東に向かって落ち込んでいることが確認された。この隆起が南部のLoc.33・41において三角州状をなしていたと考えられ、Loc.36のS R 2は、その本流はLoc.41の東半部を南流し、支流はLoc.33のS R 2からLoc.32のS R 3へと注いでいたものと判断される。

S R 2からは、極めて多くの弥生遺物が出土した（12～176の土器および179～217の石器の大部分）。出土遺物は、時期的にも広範囲にわたっており、前期のものから後期のものまで多種多様である。特に、黒褐色粘質土系の埋土と砂礫を含む層からの出土が目立った。但し、前期II・III段階の遺物および後期II段階の遺物の出土は僅少であった。出土状況も、下層からも後期土器が出土し、埋土堆積の乱雑さに比例して法則的なものはみられなかった。

5. まとめ

Loc.36Bにおいて検出された弥生遺構は、S T 1とS K 7・8およびS R 2である。

S T 1は、後期I段階に属する一括資料を出土しており、Loc.34の集落の一環をなすものと考えられる。なお、S T 1の主柱穴は5個と考えられ、特異な形態である。形状的にはP 3・7・11・13の4個を主柱穴とすることが妥当であるが、ピットの位置および深さからしてP 2・6・7・10・11を主柱穴と判断した。

S K 7・8はS T 1の付属施設として捉えられる。特に、S K 8は、遺物出土状態からしてS T 1と密接な関連をもっていたものと考えられる。

S R 2は当地点において非常に大きな規模をもっていたことが確認された。Loc.35から当地

点を経てLoc.41に流れるS R 2は、現在の田村川と重複する部分が多く、「古田村川」とも呼ぶべき存在であったと考えられる。そして、その規模は現在の田村川に数倍しており、田村弥生集落形成において重要な役割を果していたものと推定される。

第12表 穫穴住居址計測表

挿図番号	遺構番号	平面形	規模 (m)	主軸方向	柱穴	面積 (m ²)	施設	備考
第 67 図	S T 1	円 形	5.62	N - 21° - E	13	24.8		

第13表 土塙計測表

挿図番号	遺構番号	平面形	規 模 (m)			長軸方向	断面形	備 考
			長 径	短 径	深 さ			
第 67 図	S K 7	不整梢円形	1.74	0.74	0.28	N - 60° - W	逆台形	
"	S K 8	"	0.72	0.36	0.18	N - 70° - W	"	

第14表 遺構出土土器観察表

挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
1	S T 1	壺	12.7 (16.0) — —	直立する長い頸部から口縁部は滑らかに外反。口唇部は面をなす。	口縁部内外面横方向の強いナデ調整。 頸部下半、上胴部内面に指頭圧痕顯著。 胴頸部接合部内面にしづり目。	頸部内傾接合痕を認める。	
2	"	"	16.3 (9.8) — —	直線的に立ち上がる頸部から口縁部は短く屈曲。口縁部外面に3条のヘラ描沈線。	頸部内面に指頭圧痕顯著。	"	
3	"	壺	12.1 (5.2) — —	口縁部は丸く外反。雑なつくり。	口縁部を指頭により強く折り曲げている。	外面煤けている。脚部外面に黒斑。	
4	"	"	13.5 (7.7) — —	「く」の字状に屈曲する口縁部。口唇部は上下にやや肥厚し、2条の細い凹線文を配す。	口唇部上下端をつまんで横方向にナデる。		
5	"	"	13.6 (5.1) — —	口縁部は丸く外反。口唇部は外傾する面をなす。	内外面剥離が著しい。		
6	"	"	— (7.3) — 6.3		底部外面ナデ調整。 内面にヘラ削りが認められる。	外面は煤け、火を受け変色している。	
7	"	"	— (8.6) — 5.7		下胴部外面横方向のナデ調整。	外面煤けている。	
8	"	"	— (10.8) — 5.0			胸部外面に黒斑。	
9	"	高杯	29.2 (5.2) — —	杯体部から強く屈曲して立ち上がり、口縁部は外反。口唇部は外傾する面をなす。	口唇部下端をつまみ出すようにして横方向に強くナデる。体部内外面ハケ調整。	粘土帶接合部を観察できる。	
10	"	"	— (9.7) — 14.0	脚端部に2条の凹線文。 脚部中、下位に小円孔あり。	脚部内面下半右方向へのヘラ削り。	9の脚部か。	
11	S K 8	壺	13.4 (6.8) — —	口縁部がわずかに外反。 口唇部は外傾する面をなし、刻目を施す。	刻目はハケ状原体による。 口縁部外面に横方向のナデ調整。		
12	S R 2	"	12.6 (8.0) — —	内側に直線的に立ち上がる頸部から、口縁部は強く外方に屈曲。	屈曲部外面に指頭圧痕あり。 外面に細やかなヘラ磨き。	頸部に黒斑。	
13	"	"	17.2 (4.2) — —	口縁部は滑らかに外反。 端部は丸くおさめる。 口頭間に一条のヘラ描沈線。	内外面ヘラ磨き。		
14	"	"	14.1 (4.0) — —	口縁部には内から外に向て、小孔を貫通。頸部外面に貼付突帯。その上下にヘラ描沈線。	口縁部外面に粘土帶貼付。 貼付は埋め込むように行われている。		
15	"	"	14.4 (4.4) — —	頸部が直線的に外方に立ち上がる。 口縁部は発達せず、口唇部は凹状をなす。下端に刻目。頸部外面に7条のヘラ描沈線。	口唇部に横方向の強いナデ調整。 刻目はハケ状原体による。		

挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
16	S R 2	壺	14.2 (6.1) — —	頸部から口縁にかけて滑らかに外反。端部は面をなす。頸部にヘラ描沈線を施し、突帯A貼付。	口縁端部は横方向のナデ調整。	突帯は埋め込むように貼付されている。	
17	"	"	17.8 (7.9) — —	頸部から滑らかに外反して口縁部に至る。端部は面をなす。外面に10数条のヘラ描沈線を有し、その中の3条に突帯Bを貼付。		"	
18	"	"	8.5 (4.6) — —	口縁部は頸部から滑らかに外反。頸部にヘラ描沈線を施す。	口縁部内外面、口唇部は横方向のナデ調整。		
19	"	"	9.4 (5.9) — —	細めの頸部から直線的に外方に立ち上がり、口縁部は外方に屈曲。端部は丸くおさめる。頸部外面に貼付突帯及びヘラ描沈線。口縁部内面にも1条の貼付突帯。		全体的に堅敏。	
20	"	"	7.7 15.1 10.8 4.2	球形に近い胴部。口縁部は滑らかに外反。頸部下端に刻目突帯貼付。その上下にヘラ描沈線を施す。	外面は全面ヘラ磨きがかけられているものと考えられるが、胴部中位に下地のハケ調整がみられる。	外面に黒斑。	
21	"	"	— — (6.9) — —	細くしまった頸部に8条のヘラ描沈線と4条の突帯を確認できる。		擬口縁を観察できる。	
22	"	"	— (17.0) 40.4	やや肩平気味の球形を呈する胴部の中位。3条の太い突帯を貼付。上下2条には貝殻腹縁で圧痕を施す。突帯の上下にヘラ描沈線。	胴部外面縦方向のハケ調整後、ヘラ磨き。内面は横方向のヘラ磨き。	搬入品か。	
23	"	"	24.0 (9.5) — —	大きく外反する口縁部。口唇部は凹状をなし、上下に刻目。口縁部に貫通する刺突文。頸部に突帯及びヘラ描沈線。	外面縦方向、内面横方向のハケ調整。		
24	"	"	25.4 (7.0) — —	頸部から滑らかに外反する口縁部。口唇部は厚く、上下にハケ状原体により刻目。	口縁部外面に粘土帶を接続貼付。		
25	"	"	20.8 (3.8) — —	大きく外反する口縁部。口縁部に刺突文。口縁部内面及び頸部に突帯。頸部突帯上に櫛描直線文あり。	口縁部外面横方向のナデ調整。刺突文は内面から外面へ貫通。	口縁部内面の突帯は環状を呈す。	
26	"	"	26.4 (8.2) — —	滑らかに外反する口頸部。口唇部は凹状をなし、上下にハケ状原体による刻目を配す。	口縁部に粘土帶を接合貼付（貼付部外面に強い指頭圧痕）。口唇部横方向のナデ調整。頸部外面、縦方向のハケ調整。		
27	"	"	27.2 (9.0) — —	大きく外反する口頸部。口唇部は凹状をなし、上下に刻目。内外面に櫛描直線文及び突帯を交互に配す。			
28	"	"	23.4 (4.8) — —	大きく外反する口頸部。口唇部は凹状をなし、上下に刻目。口縁部内面に列点文を配し、その上に6条の細い沈線を巡らす。	口縁部に粘土帶を接合貼付。口唇部横方向の強いナデ調整、刻目及び列点文はハケ状原体による。		
29	"	"	24.8 (11.0) — —	大きく外反する口縁部。口唇部上下に刻目。口縁部内面に2条の突帯。頸部外面に櫛描廉状文及び櫛描直線文。	口唇部は横方向の強いナデにより凹状を呈す。		
30	"	"	20.0 (8.7) — —	口縁部内面に3列の刺突文を配す。口唇部は凹状をなし、上下に刻目を施す。	口唇部横方向の強いナデ調整。		

挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm) 口徑 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
31	S R 2	壺	17.4 (6.6) — —	緩やかに外反する口頸部。端部は面をなす。頸部に3条の突帯を貼付し、その間に櫛描直線文を配す。	突帯は肩平な粘土帶で、頭状のもので刻目風におさえている。	
32	"	"	18.9 (6.0) — —	直立気味の頸部から外反する口縁部に至る。頸部外面に7条1帯の櫛描直線文及び波状文を施す。		
33	"	"	37.6 (13.1) — —	口縁部は滑らかに外反。口縁部に1条、肩部に4条の細い突帯を有し、下端の突帯に接して、橢円形浮文をつける。		大型壺。
34	"	"	17.7 (19.0) 19.4 —	頸部から口縁部にかけて滑らかに外反。端部は丸くおさめ、下端に刻目を配す。肩部に3条の突帯が認められる。		
35	"	"	14.9 (7.0) — —	頸部から口縁部にかけて滑らかに外反。端部は面取り、下端に刻目。肩部に断面三角形の突帯を貼付し、その下に棒状浮文を配す。	口縁部は粘土帶を付け足している。	
36	"	"	16.9 (11.5) — —	張り出した肩部に3条の突帯がつく。口縁部は滑らかに外反し、端部に肩平な刻目突帯を有す。	口頸部外面横方向のナデ調整。胴部内面ナデ調整、外面には擦痕を認める。	薄手式土器。
37	"	"	14.5 (7.0) — —	口縁部は頸部から滑らかに外反し、端部は面をなす。	口縁部外面ハケ調整の後に、粘土帶を貼付。	
38	"	"	17.6 (4.7) — —	頸部から漏斗状に開く口縁部。口唇部は面をなす。	口縁部外面に肩平な粘土帶を貼付。	
39	"	"	15.2 (5.7) — —	わずかに外反気味に立ち上がる頸部から、口縁部は強く外反。	口縁部外面に粘土帶貼付。	
40	"	"	14.4 (6.4) — —	"	口縁部外面に粘土帶貼付。貼付部に強い指頭圧痕。口唇部横方向の強いナデ調整。	口縁部内面に黒斑あり。
41	"	"	17.0 (8.0) — —	滑らかに外反する口縁部。口唇部は凹状をなす。	口縁部外面に厚い粘土帶を貼付。外面縦方向、内面横方向のハケ調整。	
42	"	"	17.6 (9.0) — —	内傾気味の傾部から大きく外反する口縁部。上胴部に突帯を貼付。口唇部は凹状をなす。	口縁部外面に厚い粘土帶を貼付。口唇部横方向のナデ調整。	
43	"	"	15.8 (7.1) — —	口頸部は滑らかに外反。口唇部は凹状を呈し、端部はやや下垂する。	口縁部外面に粘土帶貼付、接合部をナデて消している。口唇部横方向のナデ調整。	
44	"	"	19.0 (3.3) — —	滑らかに外反する口縁部。	口縁部外面に粘土帶貼付。外面縦ハケの下地の上をナデ調整(粘土帶貼付はハケ調整後)。	
45	"	"	19.0 (6.5) — —	"	口縁部外面に粘土帶貼付。貼付部に指頭圧痕顯著。	

插図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
46	S R 2	壺	11.6 (4.7) — —	漏斗状に開く口縁部。 口唇部は外傾する面をなす。口縁部内面に櫛描波状文をわずかに認める。	口縁部外面に粘土帶貼付。		
47	"	"	17.9 (9.8) — —	漏斗状に開く口縁部。口唇部は丸味を帯び、下端に刻目を配す。頸部下端に細いヘラ描沈線2条。	口縁部外面に粘土帶貼付。 口唇部横方向のナデ調整。		
48	"	"	21.9 (7.0) — —	直線的に外方に立ち上がる頸部から口縁部はさらに外反。	口縁部外面に粘土帶貼付。 口唇部横方向のナデ調整。		
49	"	"	20.0 (5.5) — —	直線的に外方に立ち上がる頸部から口縁部は水平に近く外反。 端部は外傾する面をなし、部分的に下垂。	口縁部に粘土帶を接続貼付。 内外面とも調整不明。		
50	"	"	16.6 (4.8) — —	直線的に外方に立ち上がる口縁部。	口縁部外面に粘土帶貼付。 頸部外面に擦痕。	外面煤けてい る。	
51	"	"	19.2 (6.3) — —	直立気味の頸部に短く外反した口縁部が付く。口唇部は凹状をなす。	口縁部外面に粘土帶貼付。 貼付部外面に強い指頭圧痕。 口唇部横方向の強いナデ調整。		
52	"	"	25.4 (9.4) — —	直線的に外方に立ち上がる頸部に滑らかに外反した口縁部が付く。 口唇部は凹状をなす。	口縁部外面に厚い粘土帶貼付。		
53	"	"	22.4 (8.6) — —	頸部から滑らかに外反して口縁部に至る。口唇部は凹状をなす。	口縁部外面に粘土帶貼付。 口唇部横方向のナデ調整。		
54	"	"	18.0 (6.1) — —	わずかに外反気味の頸部から、口縁部は短く外反。端部は面をなし、下端に刻目。頸部に櫛描波状文。	刻目はヘラ状原体によって右方向から施文。波状文は左から右へ施文。	外面煤けてい る。	
55	"	"	18.6 (7.0) — —	内傾気味の頸部に外方に屈曲した口縁部が付く。口唇部は面をなし、刻目を配す。	口縁部外面に肩平な粘土帶を貼付。 刻目はハケ状原体によって左方向から施文。		
56	"	"	14.8 (5.8) — —	滑らかに外反する口縁部。 口唇部には右上がりの刻目を配す。	口縁部外面に粘土帶貼付。 貼付部外面に指頭圧痕。		
57	"	"	11.9 (7.0) — —	直立気味の頸部から外反する口縁部。口縁部に貫通孔。頸部下端に櫛描波状文、上胸部に直線文及び波状文。	口縁部内外横方向のヘラ磨き。 頸部内面横方向、外面縦方向のヘラ磨き。	口縁部の小孔 焼成前に 内から外へ貫 通。	
58	"	"	14.1 (4.0) — —	口縁部は頸部から滑らかに外反。 口唇部は面をなし、ハケ状原体による刻目を配す。			
59	"	"	15.0 (5.7) — —	やや外方に立ち上がる頸部から口縁部は水平に近く外反。口唇部は凹状をなし、ハケ状原体による刻目を配す。	口縁部に粘土帶を接続(ハケ調整後)。 口唇部横方向のナデ調整。		
60	"	"	17.4 (5.5) — —	滑らかに外反する口縁部。 厚い口唇部にはハケ状原体による右上がりの刻目を配す。	外面縦方向のハケ調整後、横方向のハケ調整。		

捕図番号	遺構番号	器種	口径 法量 (cm) 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
61	S R 2	壺	13.2 (5.3) — —	口頸部滑らかに外反。 口縁部内面刻目突帯2条貼付。小孔を有す。 頸部内面にも刻目突帯2条貼付。	小孔は内側から外面へ貫通。	
62	"	"	17.8 (6.9) — —	直立気味の頸部から、口縁部に向かって緩やかに外反。 口唇部にハケ状原体による刻目。	口縁部外面に粘土帶貼付。貼付部ナデ調整。(ハケ調整後に貼付しているが、貼付後も一部ハケ調整)。	
63	"	"	22.0 (9.0) — —	頸部から滑らかに外反する口縁部。 口唇部は厚く、ハケ状原体による刻目。 口縁部内面に同原体による羽状圧痕。	口縁部外面に粘土帶貼付。	
64	"	"	20.4 (8.0) — —	直立気味の頸部から強く外反する口縁部。口縁部に小孔。口唇部は幅広く凹状をなす。頸部に突帯を有す。	口縁部外面に粘土帶貼付。 小孔は内側から外側へ貫通。	
65	"	"	20.1 (5.6) — —	厚めの貼付口縁。 口唇部は面をなし、ハケ状原体による斜格子文を配す。	口縁部外面に厚い粘土帶貼付。 口縁部内面横方向のナデ調整。	
66	"	"	19.2 (6.8) — —	"		
67	"	"	18.4 (5.3) — —	滑らかに外反する口縁部。端部は凹状をなし、下端に深い刻目を有す。外面縦方向に沈線を数条ずつ配す。	外面横方向のナデ調整。	
68	"	"	19.2 (6.4) — —	口頸部滑らかに弱く外反。 端部は外傾する面をなす。	口縁部外面に粘土帶貼付。 内外面全体的にナデ調整。	
69	"	"	18.0 (6.1) — —	口頸部は短く外反気味に立ち上がる。口唇部の内外に太い刻目。肩部に刺突文を有す。		
70	"	"	21.6 (6.3) — —	口縁部は大きく外反。 口唇部は下方に肥厚。	口縁部外面に粘土帶貼付。 口唇部横方向のナデ調整。	
71	"	"	11.0 (2.5) — —	口縁部は滑らかに外反し、口唇部下端に刻目。口縁部外面に微隆起帯。		薄手式土器。
72	"	"	17.2 (2.4) — —	大きく外反する口縁部。 口唇部下端に刻目。 口縁部外面に断面三角形の細い突帯。	刻目は右方向から施す。	"
73	"	"	21.8 (4.6) — —	直線的に外反する口縁部。 外面に突帯貼付。		
74	"	"	23.3 (3.8) — —	大きく外反する口縁部。外面に突帯。口唇部下端に刻目。 頸部外面に縦方向のヘラ描沈線。		薄手式土器。
75	"	"	20.0 (2.6) — —	大きく外反する口縁部。端部が下方に肥厚。口縁下に刻目突帯貼付。 その下に描直線文と縦方向のヘラ描沈線を配す。		"

挿図番号	遺構番号	器種	法量 口径 器高 胴径 底径 (cm)	形態・文様	手法	備考
76	S R 2	壺	26.7 (4.5) — —	口縁部は強く外反。 口唇部は面をなし、下端に刻目。 口縁部外面に2条の突起。	刻目は右方向から施す。	薄手式土器。
77	"	"	18.2 (7.2) — —	滑らかに大きく外反する口頸部。 口縁部下端にハゲ状原体による刻目。	口縁部外面に粘土帶貼付。 器表の荒れがひどく、調整不明。	頸部に櫛描直線文を有する可能性あり。
78	"	"	17.6 (7.9) — —	滑らかに外反する口頸部。 口唇部は若干上方に拡張され、2条の凹線文。頸部下端に刺突文。	頸部内面に指頭圧痕。 口縁部内面横方向のナデ調整。	
79	"	"	23.6 (9.4) — —	口縁部が大きく発達している。	口縁部外面に粘土帶貼付。 口縁部内面横方向のナデ調整。	
80	"	"	15.2 (6.5) — —	口縁端部を下方に拡張し、2条の凹線文を施す。		
81	"	"	9.2 17.2 11.4 4.4	わずかに肩の張った上胴部から口頸部は滑らかに外反。	口縁部外面に粘土帶貼付。 上胴部及び底部内面に指頭圧痕。	外面上胴部と下胴部に黒斑が対称的についている。
82	"	"	12.4 (4.6) — —	滑らかに外反する口縁部。 口唇部は丸くおさめる。	口縁部外面に粘土帶貼付。 外面に指頭圧痕。	
83	"	"	10.2 (3.0) — —	わずかに内傾気味に立ち上がる頸部から短く外反する口縁部に至る。	口唇部は横方向のナデ調整。	
84	"	"	5.5 8.8 8.6 4.3	胴部中位に最大径を有し、口縁部が短く直線的に外反する小型土器。	外面に指頭圧痕著。	
85	"	"	8.9 (5.0) — —	直立気味の頸部から外反する口縁部に至る。	口唇部ナデ調整。	
86	"	"	15.2 (4.6) — —	内傾気味の頸部から口縁部は強く屈曲。口唇部に凹線文。	胴部外面に木口による擦痕。	外面は煤けている。
87	"	"	19.0 (5.2) — —	弓状に外反する口頸部。 端部は丸くおさめる。		
88	"	"	15.8 (4.5) — —	外方に直線的に立ち上がる頸部から短く外方に屈曲する口縁部に至る。 端部はやや下方に肥厚。	口唇部横方向のナデ調整。	
89	"	"	15.6 (4.5) — —	口唇部は幅広くやや外方に拡張。 球形の体部が付くものと考えられる。		
90	"	"	14.6 (7.6) — —	球形に近い体部から、口頸部は外反気味に立ち上がる。 口唇部は凹状をなす。	口唇部横方向のナデ調整。	

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口徑 器高 胸徑 底径	形態・文様	手法	備考
91	S R 2	壺	13.9 (5.2) — —	直立気味の頸部から、短く屈曲する口縁部に至る。	口縁部外面に粘土帶貼付。 貼付部に指頭圧痕顯著。	
92	"	"	12.2 (8.5) — —	わずかに外反気味に立ち上がる長い頸部から、口縁部は短く外方に屈曲。	屈曲部に指頭圧痕が残る。 内外面ハケ調整。	
93	"	"	10.9 (5.0) — —	内湾して立ち上がる上胸部から口縁部は短く外反。	粘土を折り返して口縁部をつくる。 口唇部及び口縁部内外面横方向のナデ調整。 上胸部外面に右下がりのハケ調整。	胸部は煤けている。
94	"	"	— (5.0) — 9.2	厚めの底部。		
95	"	"	— (6.9) — 7.4	異常に厚い底部で、上げ底状を呈す。		
96	"	"	— (5.5) — 7.4		底部内部ナデ調整。	
97	"	"	— (6.2) — 9.2		"	
98	"	"	— (5.1) — 8.2	やや上げ底気味。		
99	"	"	— (4.4) — 7.1		擬口縁部で欠損している。	
100	"	"	— (4.3) — 8.5	異常に厚い底部。	"	
101	"	"	— (9.5) — 18.8	大型壺の底部。		
102	"	"	— (6.4) — 9.8	上げ底気味の底部を有し、下胴部は大きく外方に張り出す。		
103	"	"	— (4.2) — 9.0			外面火を受け変色(壺の底部か?)。
104	"	"	— (9.0) — 8.4		胴部外面ハケ調整。	
105	"	"	— (6.9) — 8.0		底部の粘土板貼付部が剥落している。	

插図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
106	S R 2	壺		(4.9) — 8.2	やや上げ底気味の底部。		
107	"	"		(3.4) — 5.7			
108	"	"		(7.0) — 9.8	前期の壺の底部か。		下胴部から底部外面にかけて黒斑。
109	"	"		(3.4) — 4.8	上げ底気味の底部。		外面焼けている。
110	"	"		(4.4) — 10.9		胴部外面及び底部外面にヘラ磨き。	
111	"	"		(5.0) — 9.8	下胴部は大きく外方に張り出す。		
112	"	"		(4.2) — 4.2	底径が小さい。		
113	"	"		(10.0) — 8.2	やや上げ底気味の底部から、長めの胴部に至る。		
114	"	"		(7.3) — 4.0	"	内面に指頭圧痕が顕著。	外面下胴部から底部にかけて黒斑。
115	"	"		(6.2) — 8.0		外面にハケ調整の痕が若干残る。	
116	"	"		(19.3) — 8.6	厚めの底部から胴部に至る。		下胴部外面に黒斑。
117	"	"		(4.3) — 7.4	断面台形状を呈する底部。		
118	"	"		(5.6) — 6.0	異常に厚い底部を有す。		
119	"	壺	19.0 (20.4) — 20.7		上胴部に最大径を有し、頸部は内傾して立ち上がり、口縁部は滑らかに外反。口唇部上下に刻目。上胴部にヘラ描沈線。その下に列点文。	列点文はハケ状原体による。頸部外面縦方向の粗いハケ調整。胴部外面に擦痕（その後にナデ調整）。	
120	"	"	19.4 (7.6) — —		口縁部は頸部からわずかに外反。端部は丸くおさめる。頸部に削り出し状の突起を有し、ヘラ描沈線3条を確認できる。	口縁部内外面ナデ調整。頸部内外面ハケ調整。	

挿図番号	遺構番号	器種	口径 法量 (cm) 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
121	S R 2	壺	14.4 (3.3) — —	逆L字状口縁。 突出した口縁端部にハケ状原体による刻目。	口縁部端部外面に粘土帶貼付。 口縁部内面に指頭圧痕。 外面のハケ調整は突帯貼付後。	胎土に雲母を含む。
122	"	"	17.4 (4.3) — —	逆L字状口縁を呈す。端部に右方向からの刻目を配し、その直下にヘラ描沈線4条を施す。	口縁部端部外面に断面三角形の粘土帶貼付。	
123	"	"	20.6 (2.1) — —	口縁下に鍔状の突帯を有し、先端に刻目を施す。突帯下にヘラ描沈線を2条まで認める。	口縁下に肩平な粘土帶を貼付。	
124	"	"	15.2 (17.0) 17.7 —	上胸部や張り出す。直立気味の頸部から口縁部は短く外反。口縁部内面に1条、上胸部に3条の突帯を有す。	頸部内外面ハケ調整。 胸部外面下半に擦痕を認める。	外面全面が煤けている。
125	"	"	19.4 (6.0) — —	滑らかに外反する口縁部を有し、端部は面をなす。	口縁部内外面横方向のナデ調整。	
126	"	"	17.0 (4.4) — —	口縁部は頸部から滑らかに外反。端部は面をなし、外面に突帯を貼付。	内外面ハケ調整。	
127	"	"	15.6 (12.7) — —	直立気味の長い頸部から、口縁部はわずかに外反。端部は面をなし、下方にやや肥厚。	外面ハケ調整。	外面全面が煤けている。
128	"	"	15.8 (9.2) — —	胸部から直線的に外傾して立ち上がり、口縁部は短く外反。口唇部は面をなす。	胸部内面下半に左方向へのヘラ削り。 外面縦方向のハケ調整がわずかに残る。	外面全面が煤けている。 外面火を受けて変色。
129	"	"	— (11.3) 11.5 4.6	やや肩の張った胸部を有する小型の壺。	内面に粘土帶接合部が確認できる(4帯で成形)。 内外面に指頭圧痕が顕著。	
130	"	"	26.0 (9.5) — —	上胸部で屈曲するタイプの大型壺形土器。口唇部は水平な幅広い面をなす。	口縁端部に断面三角形の粘土帶貼付。	
131	"	"	13.6 (10.4) 16.4 — —	球形に近い胸部から、口縁部は強く外反。口唇部に2条の凹線を有す。	内面木理の粗いハケ調整。 内傾接合部あり。	外面は煤け、火を受けて変色している。
132	"	"	15.8 (7.5) — —	最大径を胸部に有し、口縁部は外方に鋭く屈曲。口唇部は内傾した面をなし、1条のヘラ描沈線を施す。	口縁部上端をつまんで横方向に強くナデる。	
133	"	"	9.0 (5.9) — —	大きく張った胸部から、細くしづつた頸部へ続き、口縁部は強く外反。口唇部に2条の凹線を有す。	口縁部上端をつまんで横方向に強くナデる。 内面上胸部に右方向へのヘラ削り。	
134	"	"	16.4 (20.2) 21.8 — —	上胸部に最大径を有し、頸部は「く」の字状に強く屈曲。口唇部は凸状をなす。	口唇部及び口縁部内外面横方向の強いナデ調整。	外面は煤けている。
135	"	"	10.7 10.2 10.2 4.0	上胸部が張り出して、外方に強く屈曲した口縁部に至る。底部は厚い。	外面に指頭圧痕を残す。	

挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口径高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
136	S R 2	甕		(9.2) — 4.8	しゃくれた底部から胴部上方へ至る。	外面ハケ調整。	胸部外面が煤けている。
137	"	"		(5.1) — 6.5	上げ底気味で断面台形状の底部。		下胴部内面から底部にかけて黒斑。
138	"	"		(3.9) — 5.4			
139	"	"		(6.3) — 5.9		外面ハケ調整。	
140	"	"		(8.7) — 7.0	比較的厚い底部から直線的に外方にのびる。	"	
141	"	"		(4.2) — 6.2	断面台形状の厚い底部。		
142	"	"		(4.4) — 5.9			
143	"	"		(5.3) — 7.4	上げ底気味の底部。	内面横方向のヘラ削り。	外面が煤けており、内面は火を受けて変色。
144	"	"		(19.2) — 9.0	比較的薄い底部から球形に近い胴部に至る。		
145	"	"		(6.7) — 6.2	上げ底状の厚い底部。		
146	"	"		(4.2) — 7.2		外面ハケ調整。 内面ナデ調整。	下胴部から底部外面にかけて黒斑。
147	"	"		(6.0) — 6.2		外面ハケ調整。	外面煤けている。 内面に黒斑。
148	"	"		(4.0) — 6.9			
149	"	"		(4.0) — 5.2			
150	"	"		(3.5) — 5.8		内外面に指頭圧痕が残る。	下胴部外面に黒斑。

挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口徑高 器径底径	形態・文様	手法	備考
151	S R 2	甕	(4.1) 3.5				下胴部から底部外面に黒斑。
152	"	"	(9.8) 9.1	底部が異常に薄い。	内面ヘラ磨き。 底部の粘土板を貼付する以前の段階のものか。		
153	"	瓶	(15.6) 7.4		外面にハケ調整痕が若干認められるものの、器表の荒れがひどく、他は調整不明。		下胴部から底部外面に黒斑。
154	"	高杯	(7.3) —	杯部と脚部の間に断面三角形の突帶を貼付している。			
155	"	"	17.6 (2.4) —	口縁部外面の凹線は希薄。 口唇部は凹状を呈す。	口縁部内外面及び口唇部ナデ調整。 体部外面にハケ調整をわずかに認める。		
156	"	"	(12.4) 13.6	裾部に2列の刺突文、その下に3条の凹線文。端部は垂直に立ち上がり、外面が凹状をなす。	内面右上方向へのヘラ削り。		
157	"	"	(6.2) —		杯底部は円板充填による。 外縁方向へのヘラ磨き。 脚部内面にはヘラ削りの痕が認められる。		充填の際についたと考えられる爪の圧痕あり。
158	"	"	(7.8) —	杯部は椀状を呈し、脚部は細い。	口縁部は擬口縁で剥落している。		
159	"	"	(11.9) 11.8	直立気味の脚部。端部外面は凹状をなす。	脚上部にしづり目、下半に指頭圧痕あり。脚端部外面横方向の強いナデ調整。		
160	"	"	(10.8) 8.9	直線的に開く脚部とやや内湾気味に立ち上がる杯部を有す。			
161	"	"	(4.7) 12.4		裾部下端横方向の強いナデ調整。		
162	"	"	15.8 (3.7) —	口唇部が凹状をなし、外端にハケ状原体によって刻目を配す。			器形不明。
163	"	鉢	15.8 (3.7) —	やや外反気味に内傾して立ち上がる。肩部で屈曲する繩文系深鉢の延長上に位置する土器か。端部は内傾してやや肥厚。	外縁方向のハケ調整。		
164	"	"	(3.4) 3.6	断面台形状の厚くて小さい底部。			蓋の可能性あり。
165	"	"	(3.1) 6.2	断面台形状の底部。			外面が焼けている。

挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口径 高 胴 底 径	形態・文様	手法	備考
166	S R 2	鉢		(3.5) 6.4	底部は高台状に外方に踏ん張っている。 端部に小孔あり。	小孔は焼成前穿孔。	
167	"	"		(7.6) 5.8	高台状に踏ん張った底部。		鉢底部か。
168	"	"		(3.8) 6.6	"		
169	"	"		(2.9) 4.5	上げ底状の底部。	底部を外方につまみ出している。	
170	"	蓋		(9.2) 5.8	若干凹状をなす頂部から直線的に下降外反。 端部に向て開く。	天井部ナデ調整。 笠部外面ハケ調整。	笠部外面上方に黒斑。
171	"	"		(6.3) 6.2			内面に黒斑。
172	"	"		(4.8) 2.3	細くしまった天井部から外反して下降。	内外面ハケ調整。	
173	"	"		(6.6) 4.4		天井部ナデ調整。 笠部外面ハケ調整。	笠部内外面に黒斑。
174	"	"		(3.6) 2.3			器形不明。
175	"	"		(3.2) 2.4			"
176	"	土錘	全長 直径 重量(g)	6.4 3.4 72.5	円筒形を呈す。		土師質。

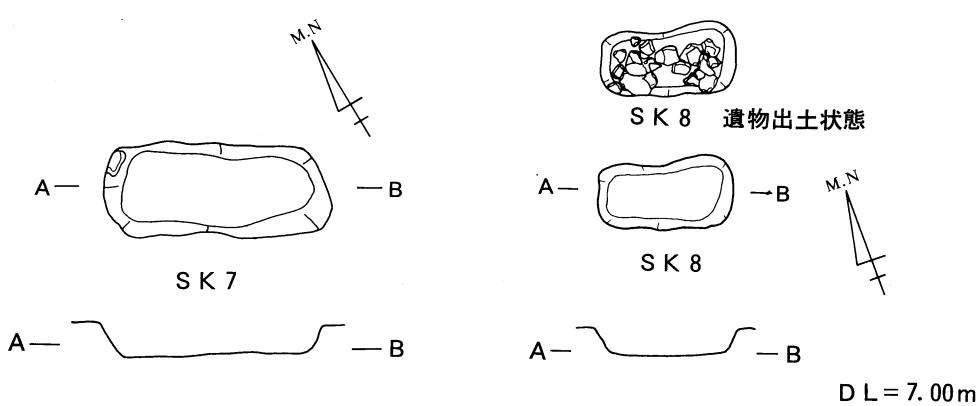
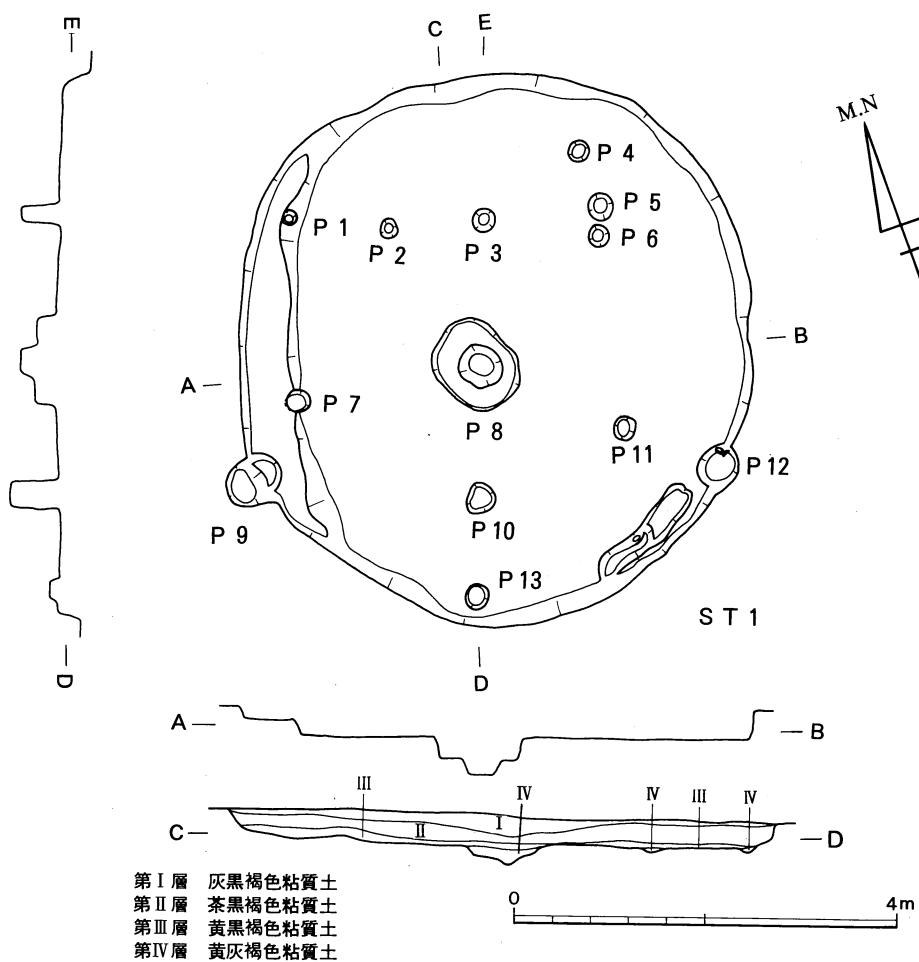
第15表 遺構出土石器観察表

挿図番号	遺構番号	器種	計測値 (cm, g)	最大長 最大幅 最大厚 重量	材質	特徴	備考
177	S T 1	石斧		14.9 7.0 4.7 820.0	緑色片岩	いわゆる大型蛤刃石斧であるが、刃部欠損後叩石として転用されたものと思われ、基端部にも新しく敲打痕がついている。	磨製。
178	"	"		12.3 5.9 2.8 320.0	砂岩(砂質片岩)	全面を研磨によって整形しているが、基端部を欠損している。刃部には敲打痕が残っており、叩石として転用された可能性が大である。	

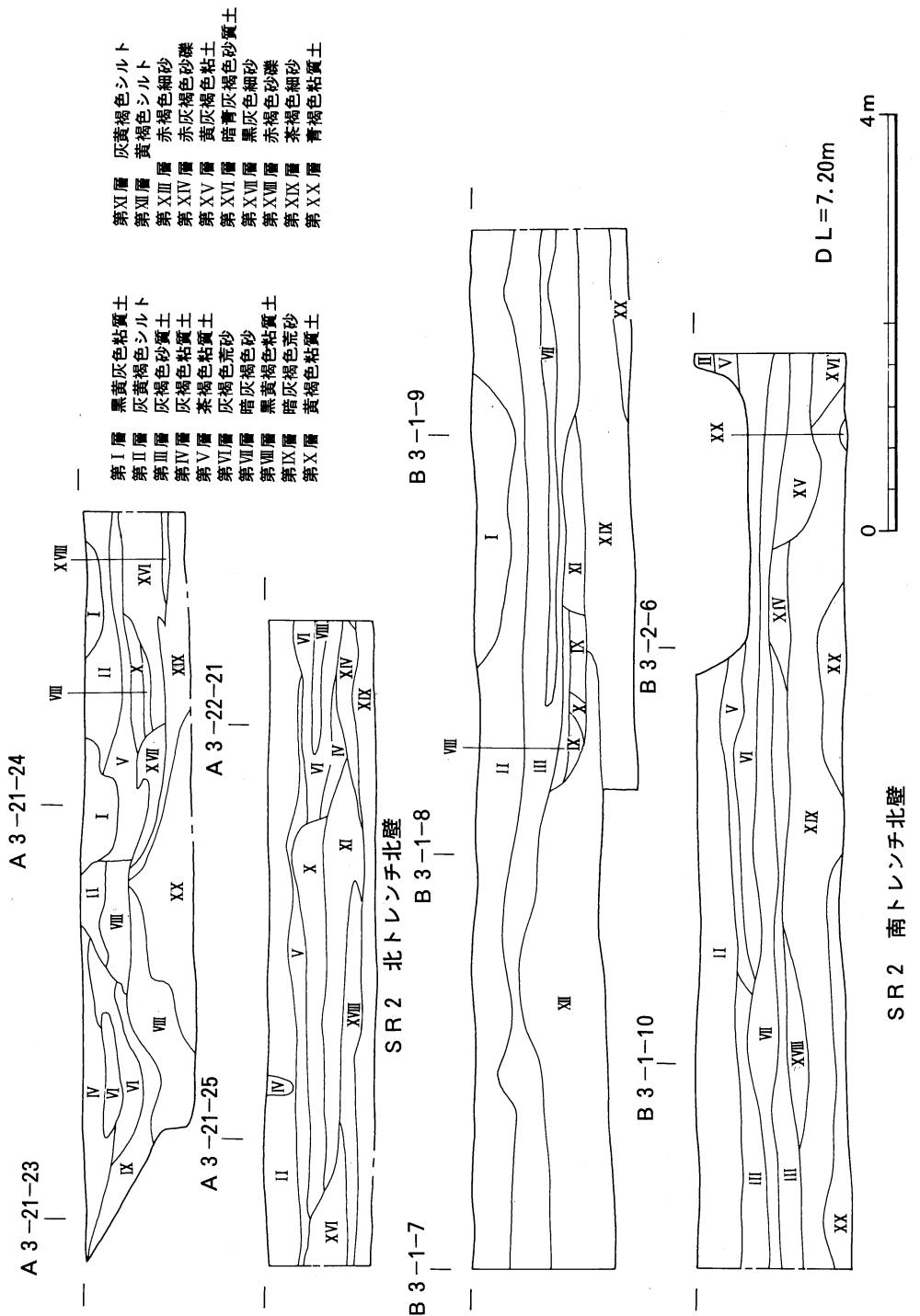
挿図番号	遺構番号	器種	最大長 計測値 (cm, g) 最大幅 最大厚 重量	材質	特徴	備考
179	S R 2	石斧	12.8 6.2 3.7 510.0	緑色片岩	基部から刃部にかけて斜めに欠損している。欠損後叩石に転用されており、基礎部及び刃部に敲打痕が有る。	磨製。
180	"	"	(16.5) 8.6 5.6 1195.0	"	大型蛤刃石斧の未整品。整形段階で基部を欠損したものと考えられ、表面には敲打痕が顕著に残っている。	
181	"	"	5.6 2.6 0.9 25.0	砂岩	小型の局部磨製石斧である。前主面が自然面であり、後主面及び側縁部が剝離面である。	
182	"	"	(3.1) 3.6 0.7 13.0	泥岩	表面と両側縁部を研磨している。小型砥石である可能性もある。	
183	S T 1	砥石	(5.4) 4.7 1.1 40.0	蛇紋岩	主として表裏2面を使用している。また、縁辺部3面にも擦痕が残る。	
184	S R 2	石斧	7.2 4.2 1.4 85.0	粘板岩	刃部を若干欠損しているが、刃部に最大幅を有する扁平片刃石斧である。よく使い込まれており、損傷も目立つが、残存面はよく研磨されている。	
185	"	"	5.1 3.4 1.0 30.0	蛇紋岩	刃部に最大幅を有する扁平片刃石斧である。基部に欠損が見られるものの、全面が研磨によって丁寧に仕上げられている。	
186	"	"	14.0 3.5 2.1 145.0	頁岩	形状的には棒状の叩石であるが、表裏両面を研磨しており、石斧を転用したのか。短側縁部にも擦痕を有している。両長側縁部に敲打痕を残す。	
187	"	石斧	11.8 4.6 1.6 115.0	千枚岩	基部の右側刃が抉られており、下半部の刃部側が広くなっている打製石斧である。刃部に敲打痕が著しい。	
188	"	叩石	(11.5) 5.5 3.2 350.0	砂岩	河原石を利用した棒状の叩石である。主に短側縁部に敲打痕が見られる。	
189	"	"	14.6 5.5 2.3 385.0	緑色片岩	主として両短側縁部及び片側の長側縁部に敲打痕が残る。	
190	"	"	12.3 4.1 2.1 160.0	頁岩	棒状の叩石で、両短側縁部に打痕が著しい。また、長側縁部の一部にも、敲打痕が見られる。	
191	S T 1	"	13.2 5.8 2.5 304.0	砂岩	両短側縁部に、微細な潰痕が見られ、また、裏面下方に若干の敲打痕が見られる。	
192	"	"	13.5 4.8 3.0 318.0	"	河原石を利用した棒状の叩石で、両短側縁部に小刻みな敲打痕が見られる。	
193	"	"	9.2 2.8 1.7 73.0	"	長側刃部は、自然面を残す面と剝離面とかなる。両短側縁部に敲打痕が見られる。	

挿図番号	遺構番号	器種	計測値 最大長 最大幅 最大厚 重量 (cm, g)	材質	特徴	備考
194	S T 1	叩石	13.0 8.6 3.2 525.0	砂岩	上端の一部を欠損しており、敲打痕がわずかに残る。また、下方の短側縁部には、3条の小さい研磨痕が残る。	
195	"	"	8.0 6.0 1.7 155.0	"	河原石を利用したもので、両短側縁部に敲打痕が見られる。	
196	"	"	11.1 9.6 5.2 905.0	"	表裏両面に敲打痕が見られるが、表面には数条の条痕が残る。	
197	S R 2	"	7.9 6.9 3.1 265.0	"	河原石をそのまま利用したものであるが、よく使い込まれており、周縁部に敲打痕が残る。	
198	"	"	10.4 (6.7) 4.6 435.0	"	河原石を利用したものであるが、中央部の使用部位を中心にして、半分が欠損している。側縁部にも敲打痕が残る。	
199	S T 1	"	11.8 8.1 2.1 330.0	"	長円形の扁平な河原石を利用したもので、周縁部に若干の敲打痕が確認できる。	
200	"	磨石	11.6 9.3 4.0 805.0	"	長円形の河原石をそのまま利用したものである。	
201	"	"	11.2 10.2 3.5 580.0	"	円形の河原石をそのまま利用したものである。	
202	"	"	9.2 8.9 2.8 276.0	"	自然面と剥離面とからなり、周縁部に敲打痕が見られる。	
203	"	叩石	11.6 8.1 1.9 190.0	"	自然面と剥離面とからなり、長円形を呈す。周縁部に敲打痕が見られる。	
204	S R 2	"	10.4 7.4 2.3 230.0	"	河原石を利用したもので、自然面と剥離面とからなる。全縁部に敲打痕が見られる。	
205	"	"	8.3 5.3 8.5 75.0	"	河原石を利用したもので、自然面と剥離面とからなる。両短側縁部に敲打痕が見られる。	
206	S T 1	"	10.3 7.2 1.7 130.0	"	自然面を残す面と剥離面とからなる。周縁部に敲打痕が認められる。	
207	S R 2	"	8.3 6.9 1.7 105.0	"	自然面と剥離面とからなる扁平な叩石である。周縁部に若干の敲打痕を残す。	
208	"	砥石	10.8 8.5 2.7 295.0	"	表面と上側辺部とは磁石として使用されている。後に叩石として転用されたものか、表裏両面中央部に敲打痕が残る。	

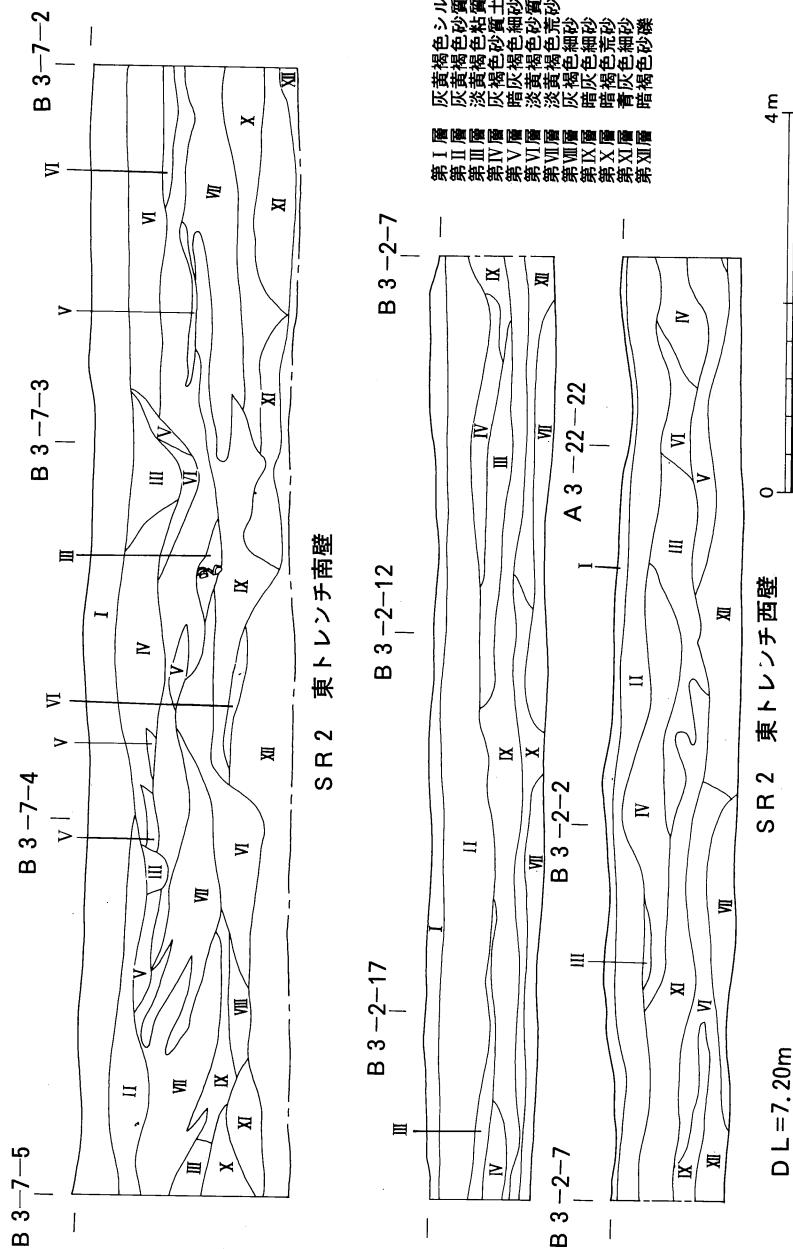
挿図番号	遺構番号	器種	計測値 最大長 最大幅 最大厚 (cm, g)	材質	特徴	備考
209	S R 2	砥石	(7.1) 6.6 4.2 235.0	砂岩	2面を使用している。 表面には、細長い凹状の線が数本縦方向に走っている。	
210	S T 1	"	14.9 13.4 3.5 1355.0	"	表裏2面と側辺部2面とを使用している。 側辺部の1面は使用部位は狭いが、凹状になっている。	
211	"	"	(10.7) 11.4 7.1 995.0	砂岩(細粒砂岩)	欠損が著しく、使用面の残存状態は悪いが、3面の使用面が確認できる。	
212	S R 2	石包丁	(8.7) 5.0 0.7 32.0	千枚岩	双孔を持つ磨製石包丁の欠損品である。 双孔は両側より穿たれており、刃部は残存部の状況では両刃であると考えられる。	
213	"	"	(8.5) 5.0 0.8 55.0	"	双孔を持つ直刃型石包丁である。双孔は両面より穿たれており、両孔の位置は、刃部に対して平行ではない。刃部は両刃であり、表裏両面に研磨による擦痕が残る。背部もよく研磨されており、断面三角形を呈す。	
214	"	"	11.8 4.8 0.7 62.0	緑泥片岩	双孔を持つ直刃型の磨製石包丁である。 双孔は両面より穿たれている。 刃部は片刃であり、磨耗が激しい。 また、背部の一部を欠損している。	
215	"	"	(9.6) 4.0 0.9 50.0	石英片岩(泥岩)	双孔を持つ直刃型片刃石包丁である。 背部まで研磨されているが、よく使い込まれており、右端を欠損している。 また、丄部もシャープさに欠ける。	
216	"	"	(7.4) 4.0 6.0 27.0	千枚岩	双孔を持つ直刃型石包丁の欠損品である。 刃部は片刃であり、表裏両面とも研磨されている。	
217	"	"	(8.2) (5.2) 0.8 47.5	"	双孔を持つ磨製石包丁である。円孔は両側より穿たれている。欠損が激しく、刃部及び背部の状況は不明であるが、表裏両面とも残存面は研磨されている。	
218	S T 1	不明	5.5 4.0 2.9 103.0	砂岩	小卵型の小円礫で、用途は特定できないが、住居址中より出土した。	
219	"	"	3.9 3.2 2.3 42.0	"	"	



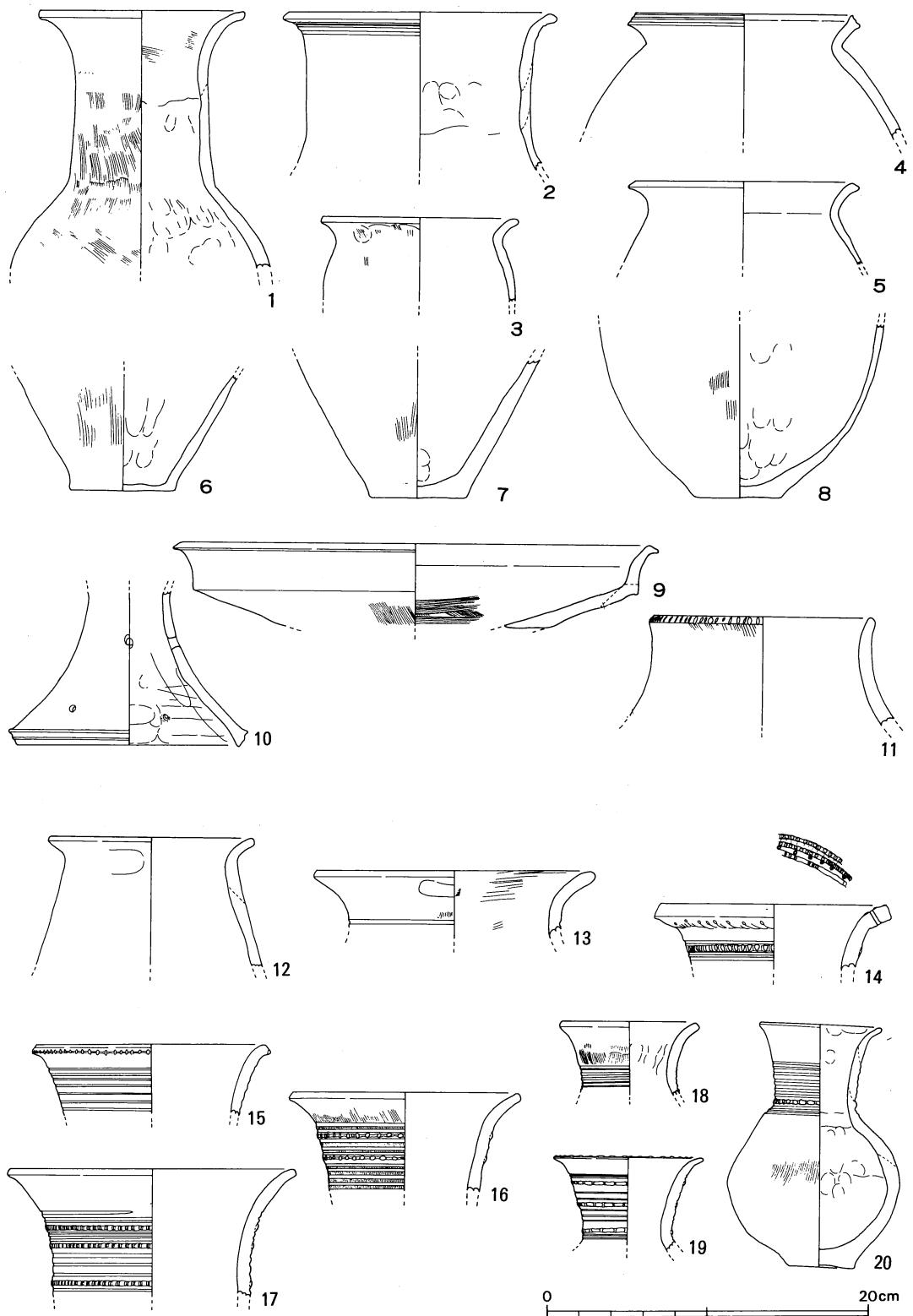
第67図 ST 1、SK 7・8



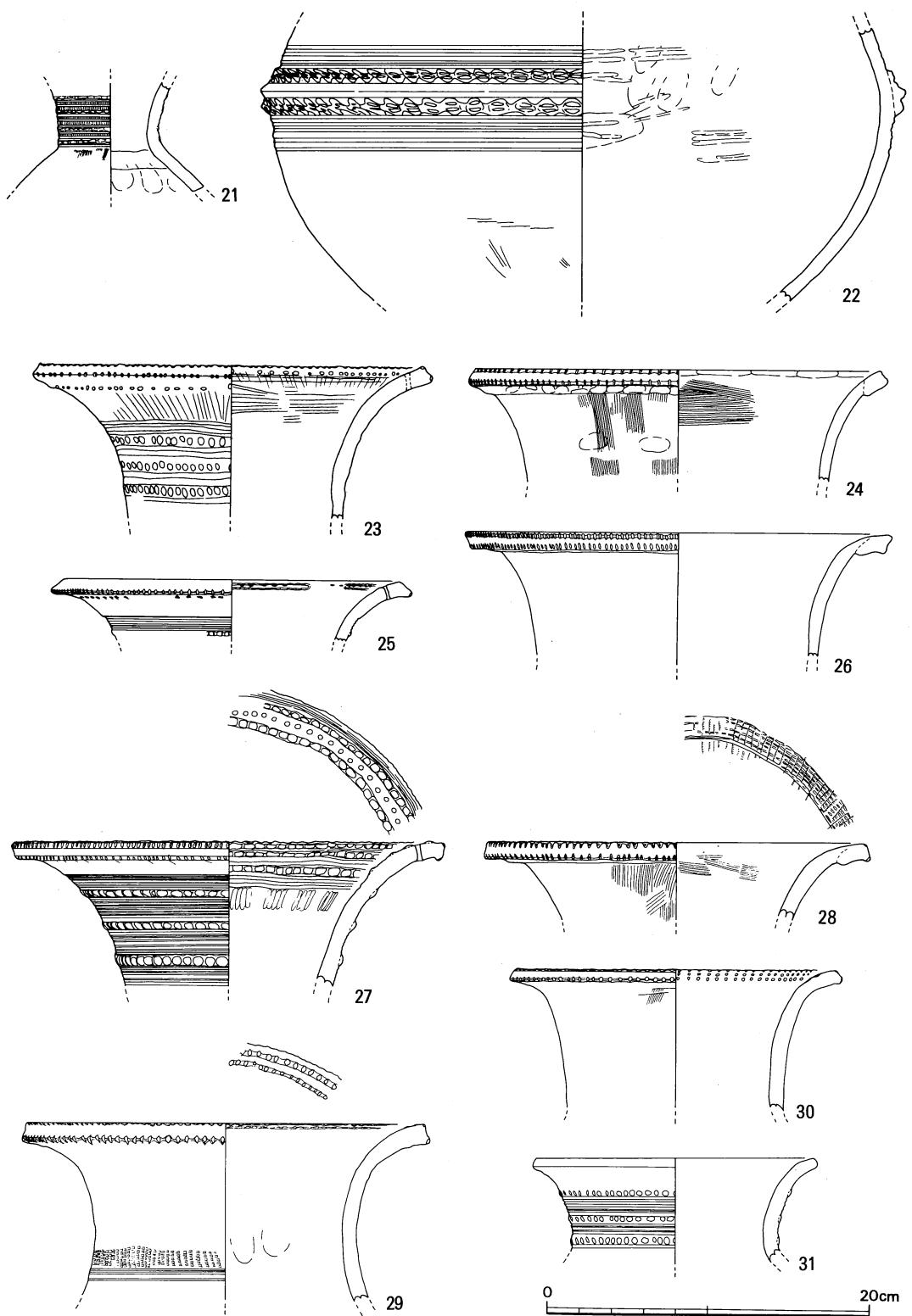
第68図 SR 2南北トレンチセクション



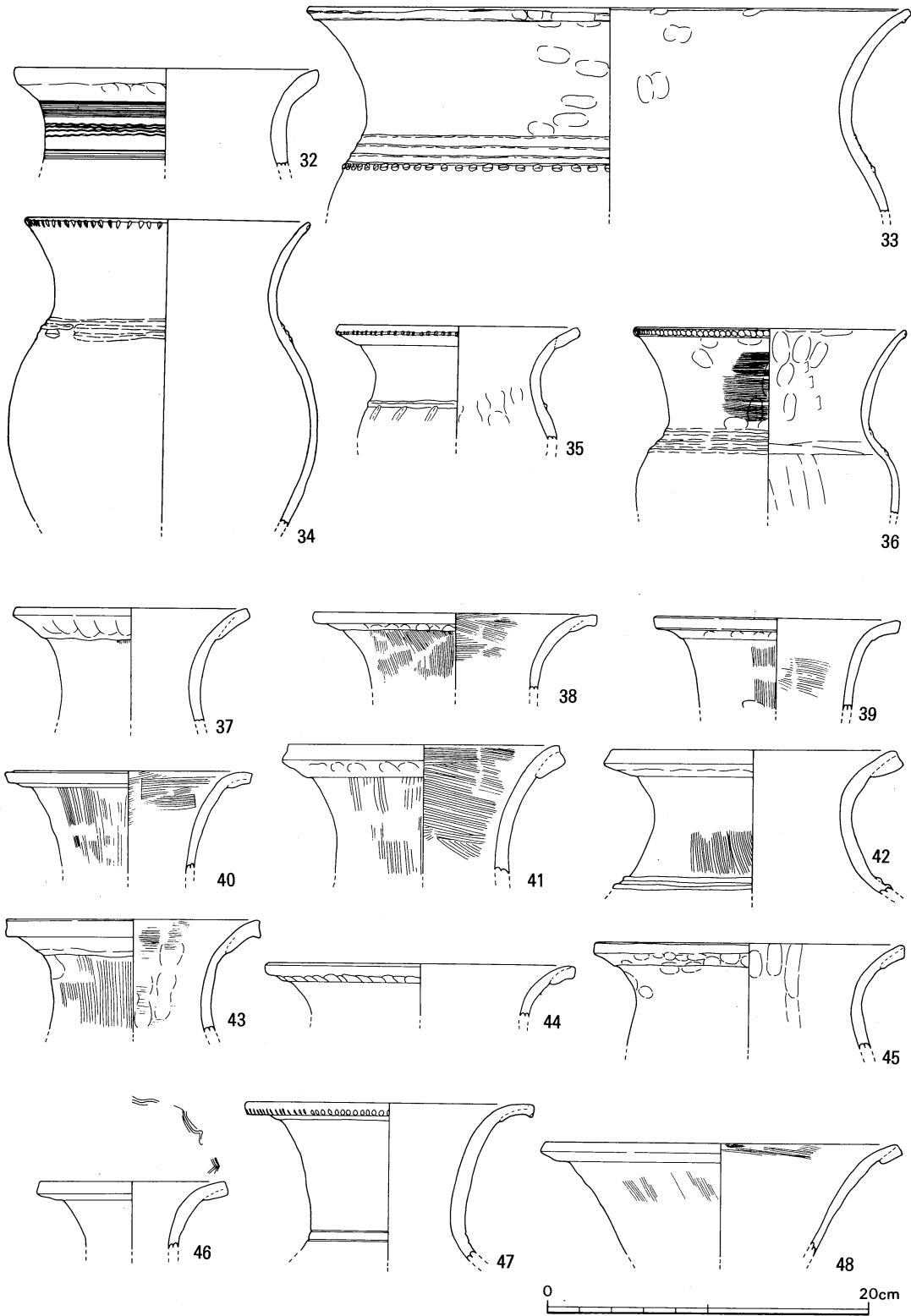
第69図 SR 2 東トレーンチセクション



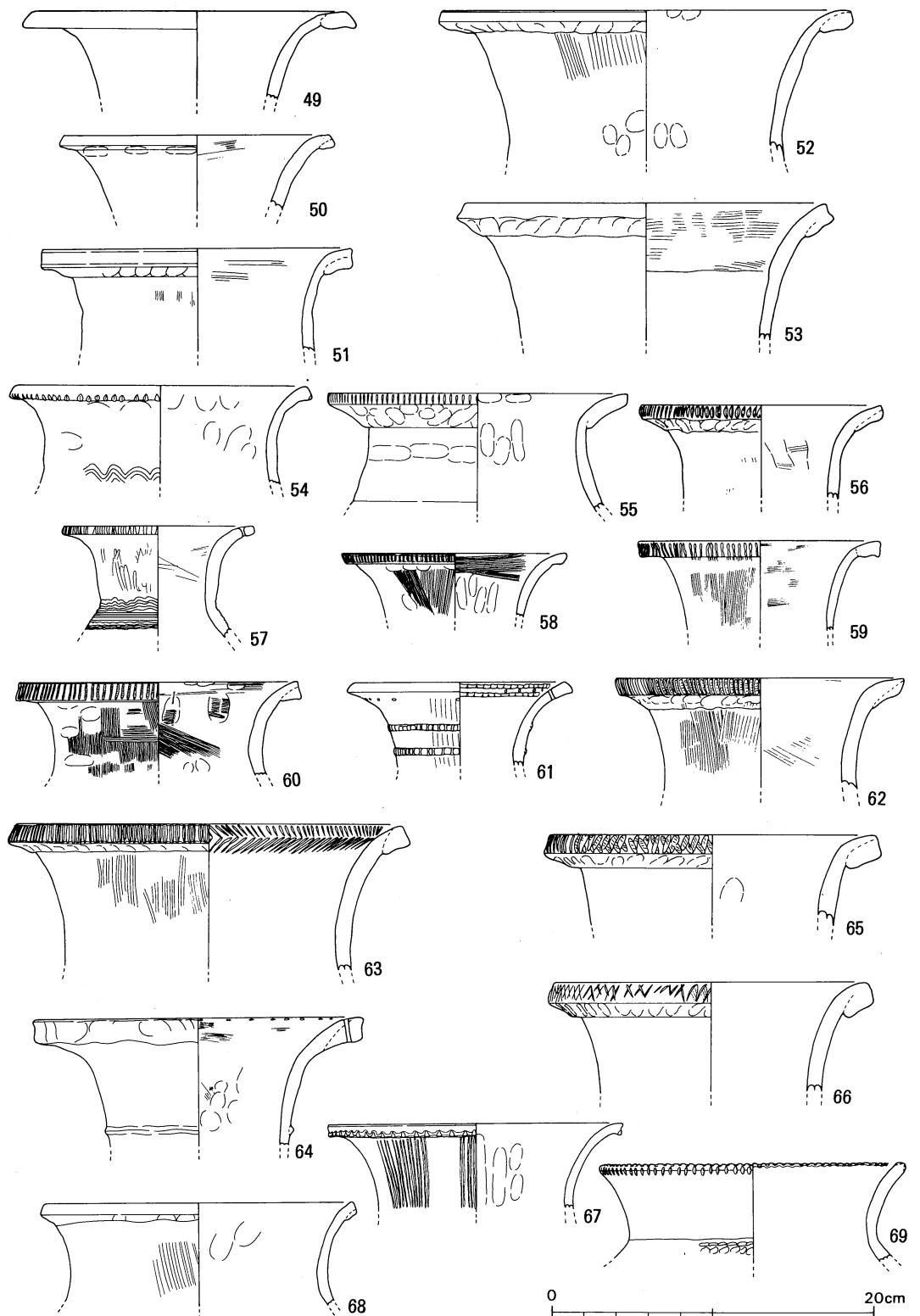
第70図 ST 1、SK 8、SR 2出土遺物



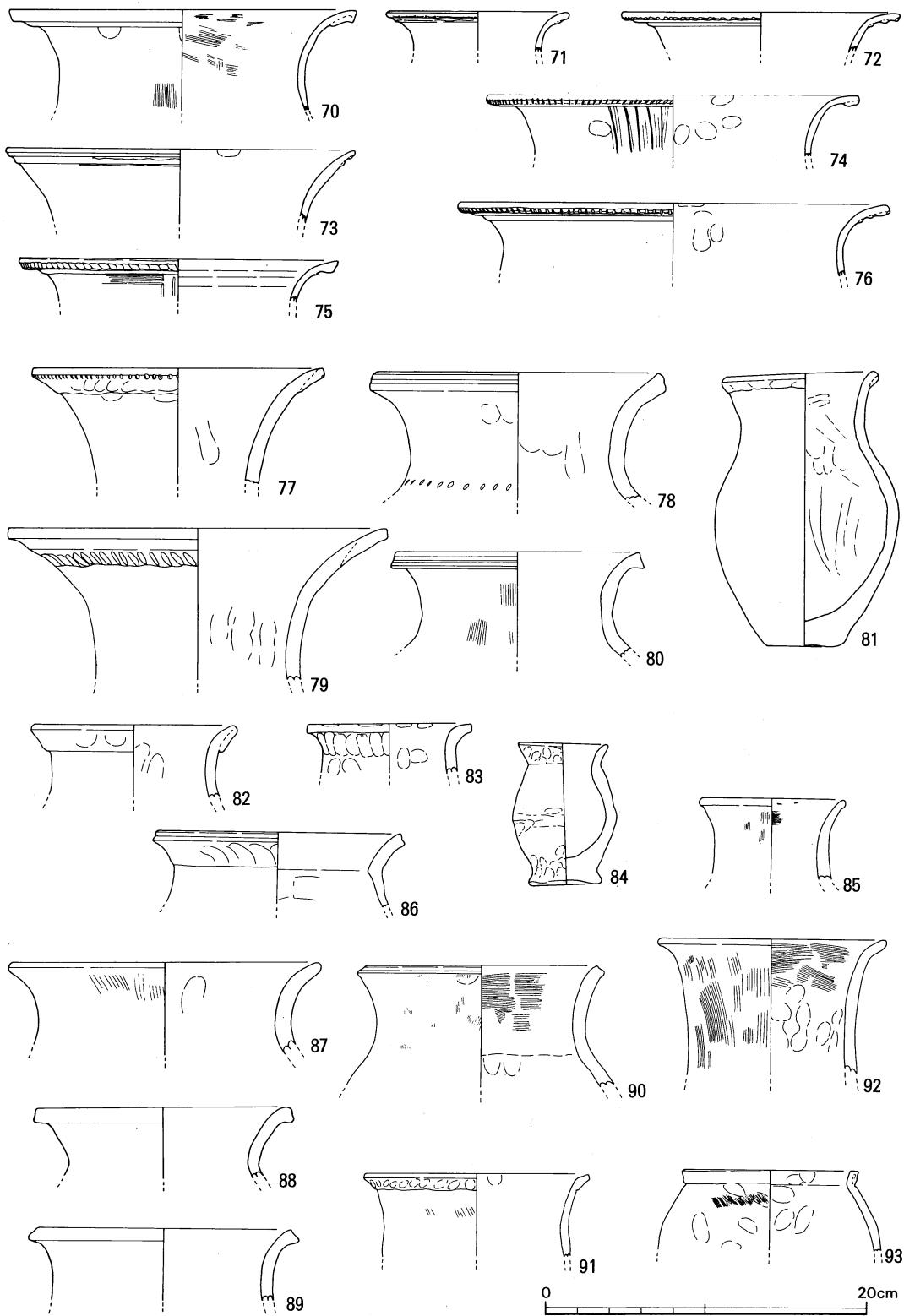
第71図 SR 2出土遺物



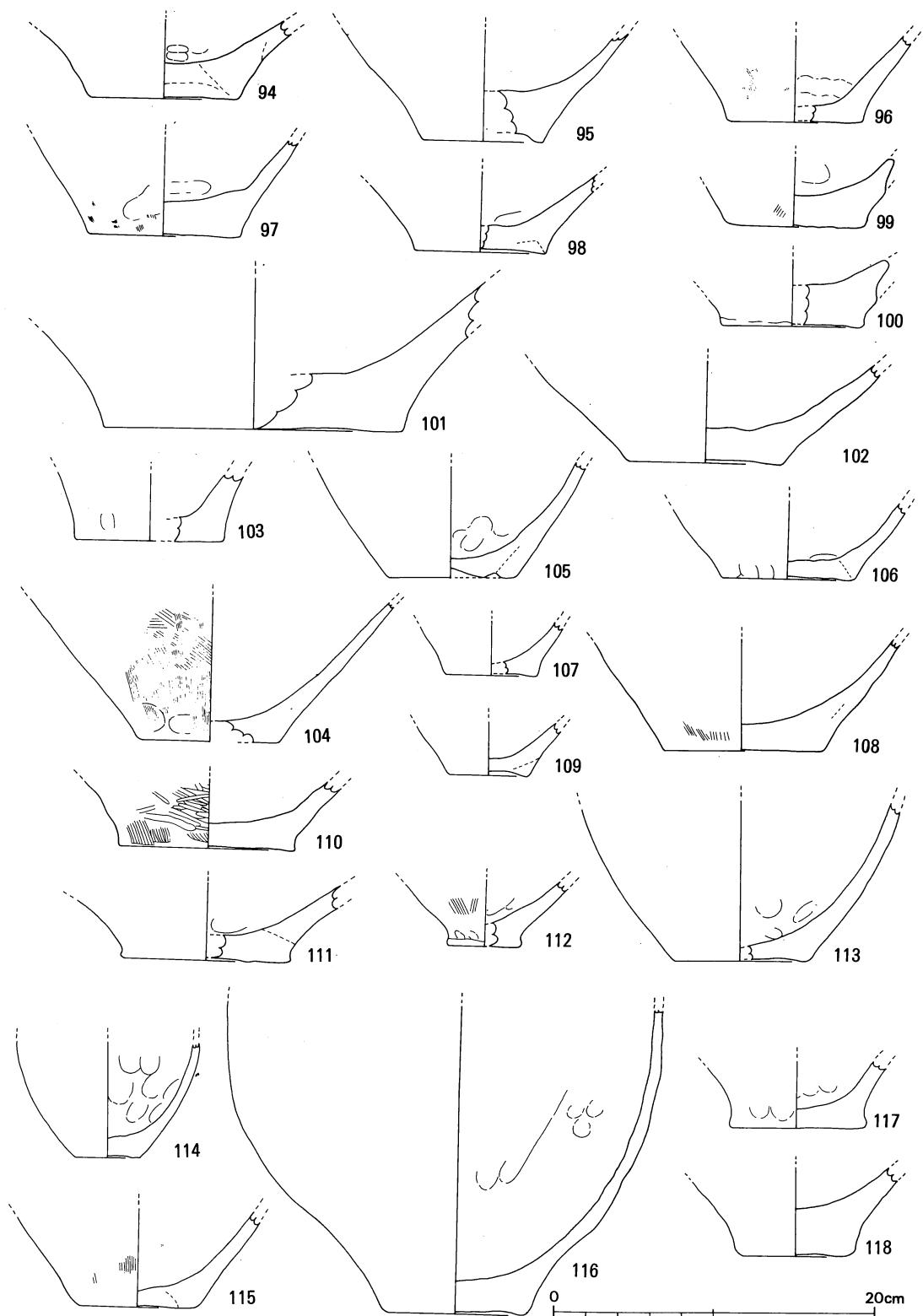
第 72 図 SR 2 出土遺物



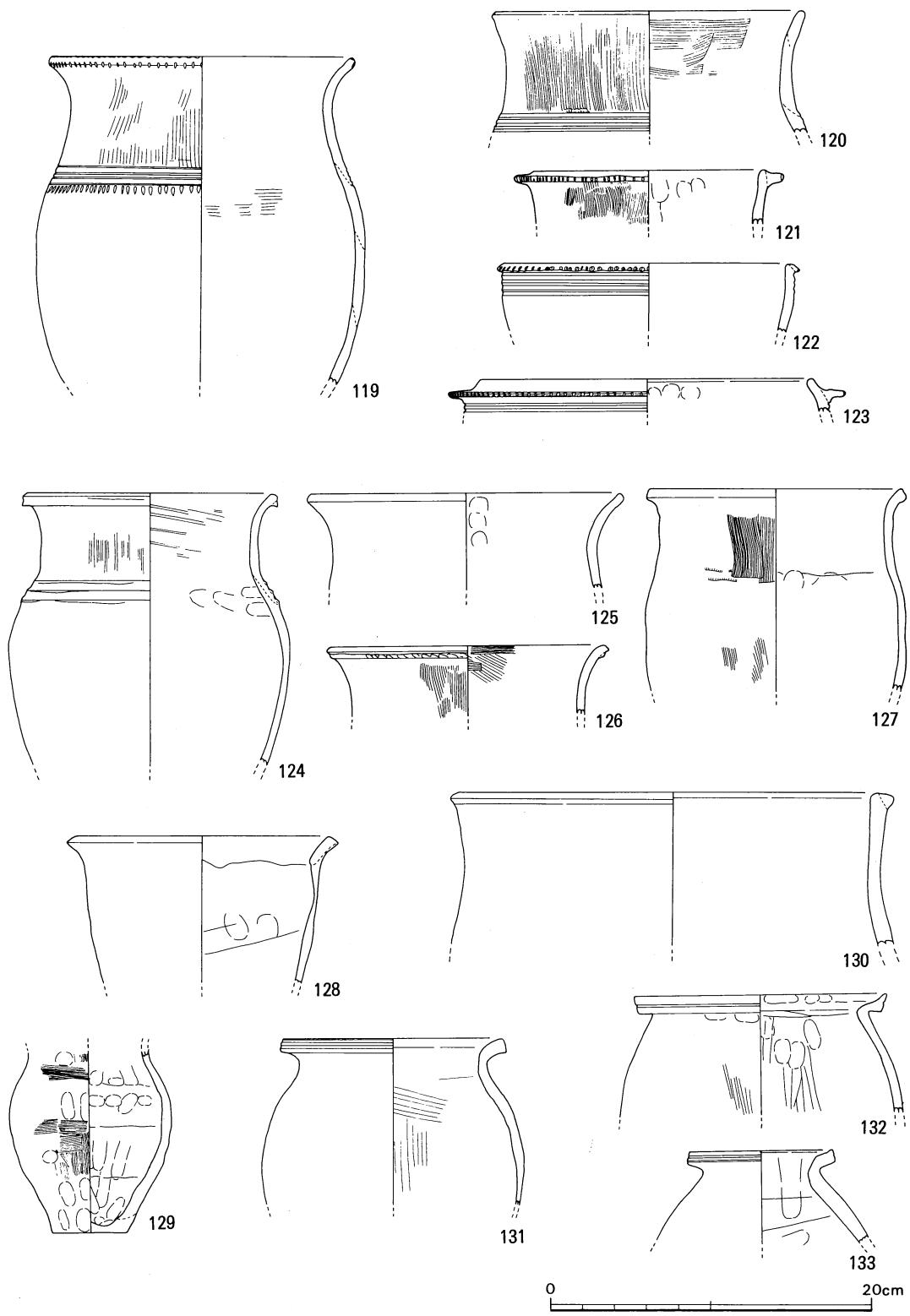
第73図 SR 2出土遺物



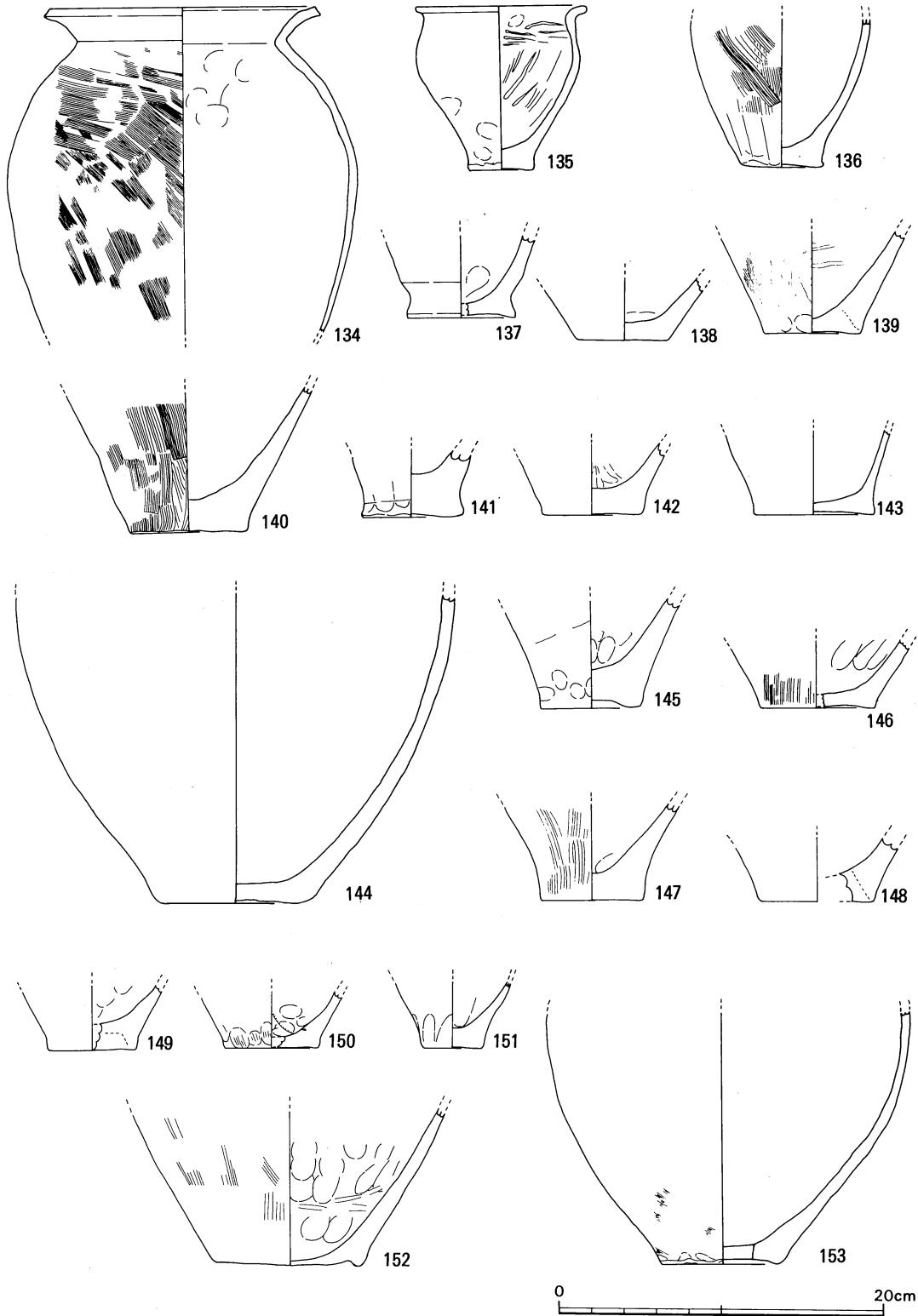
第74図 S R 2 出土遺物



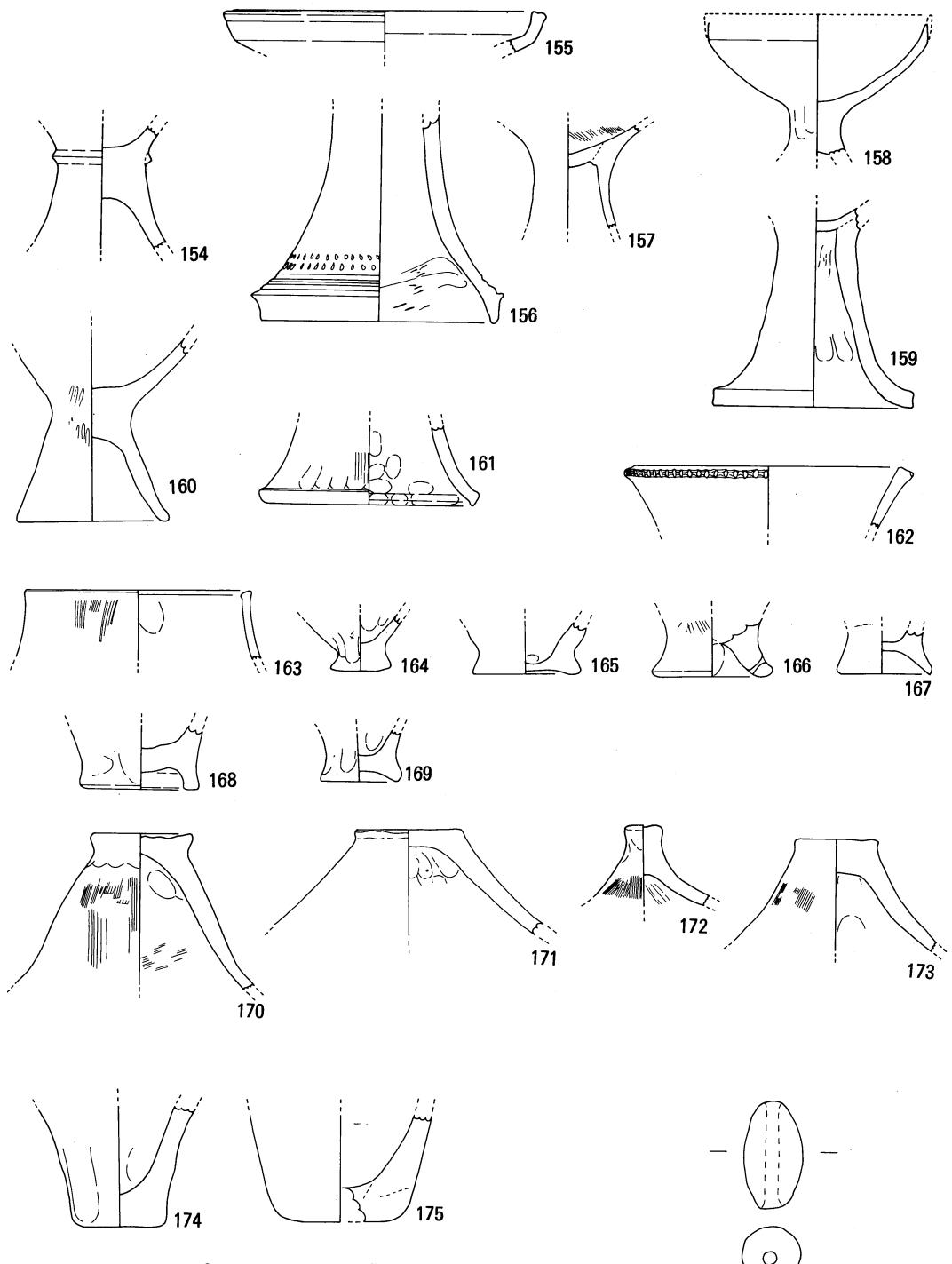
第75図 SR 2出土遺物



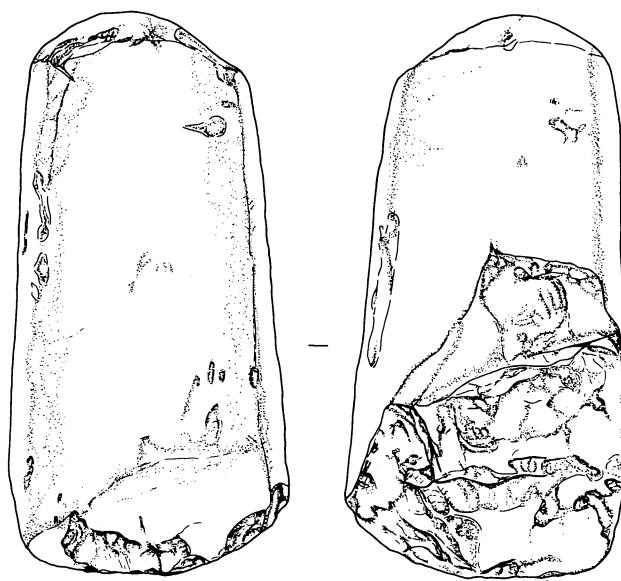
第 76 図 SR 2 出土遺物



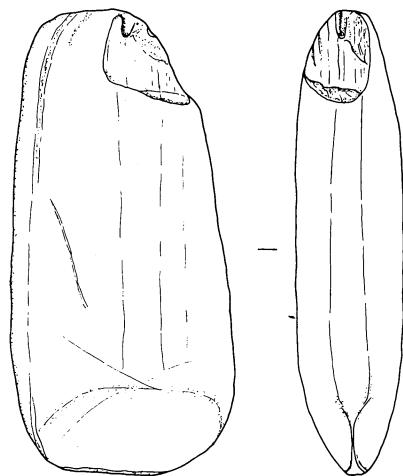
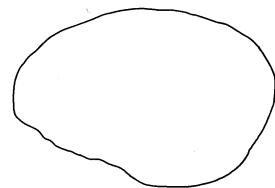
第 77 図 SR 2 出土遺物



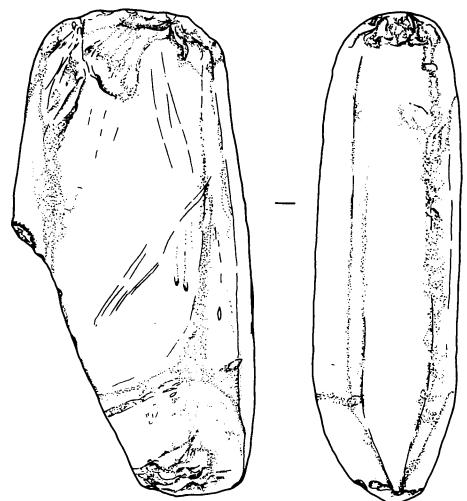
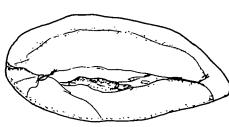
第78図 SR 2 出土遺物



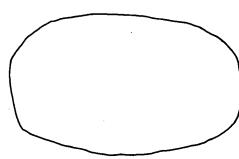
177



178

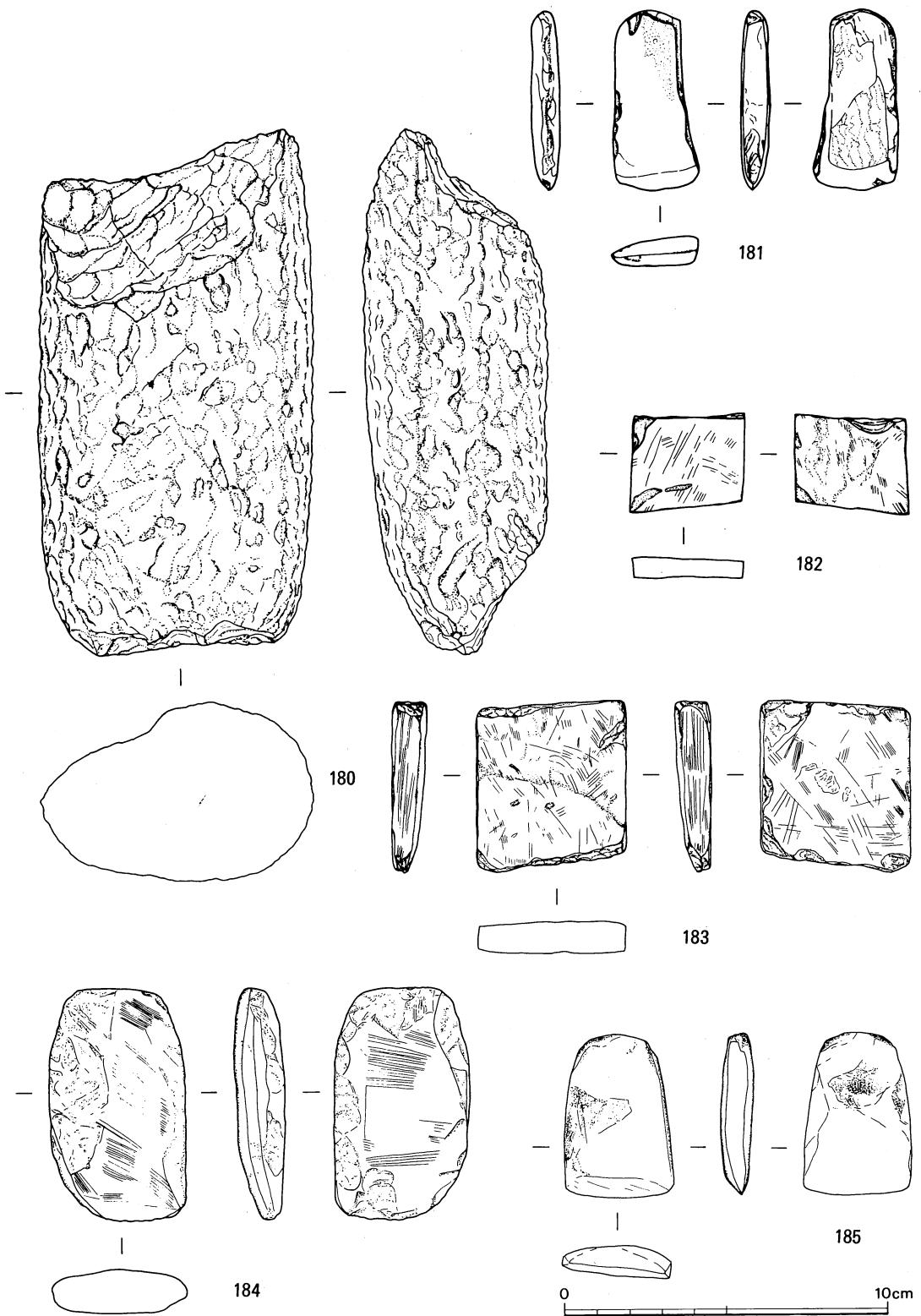


179



0 10cm

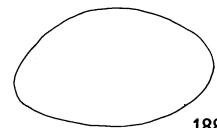
第79図 ST1、SR2出土遺物



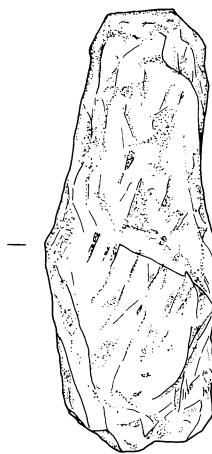
第80図 ST 1、SR 2出土遺物



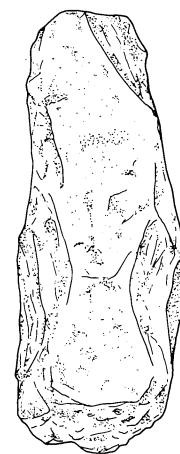
186



188



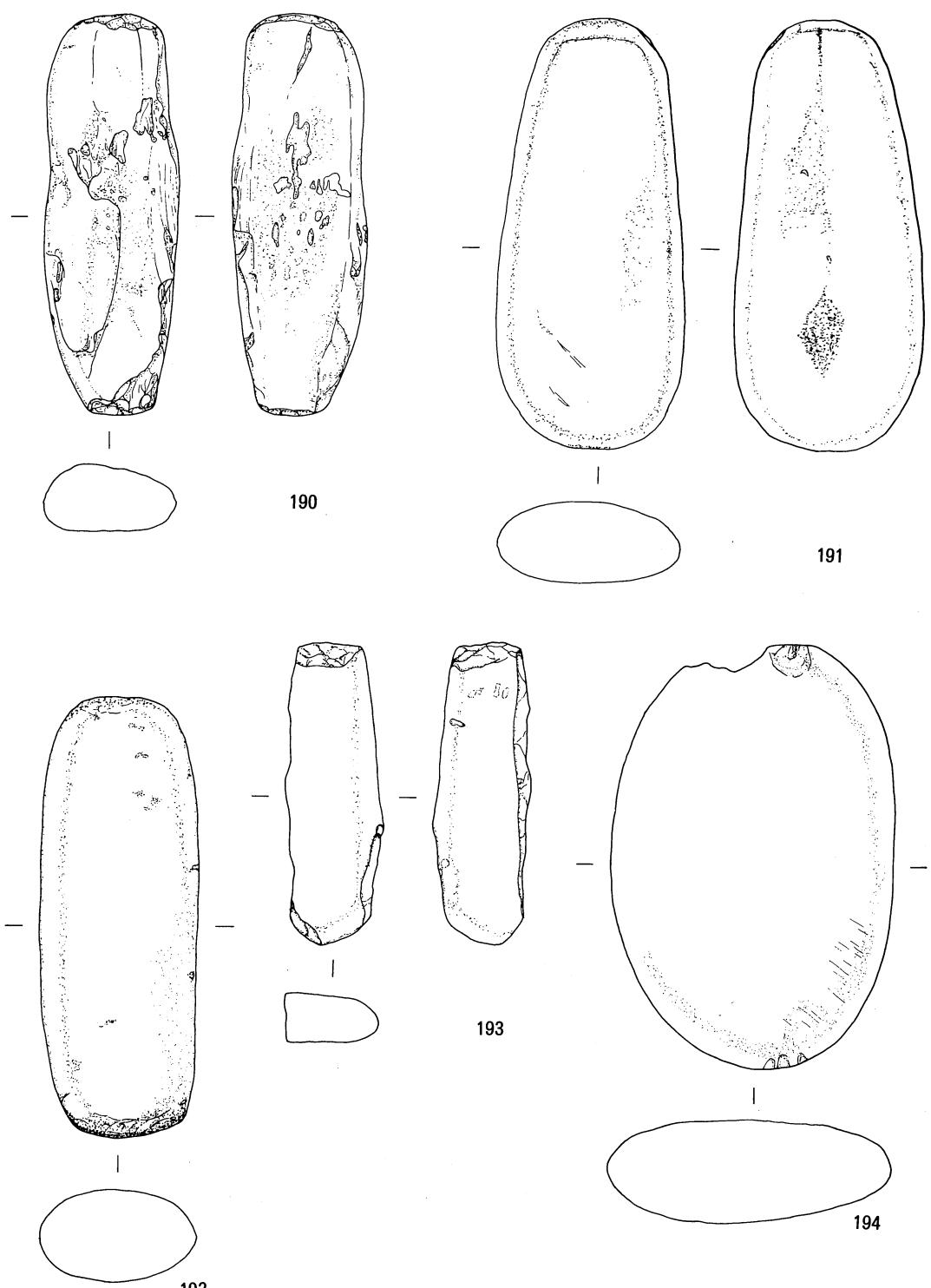
187



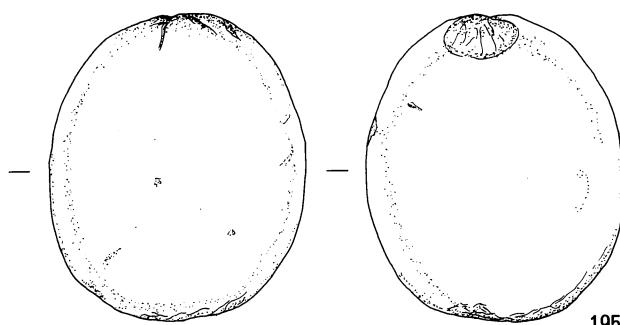
189



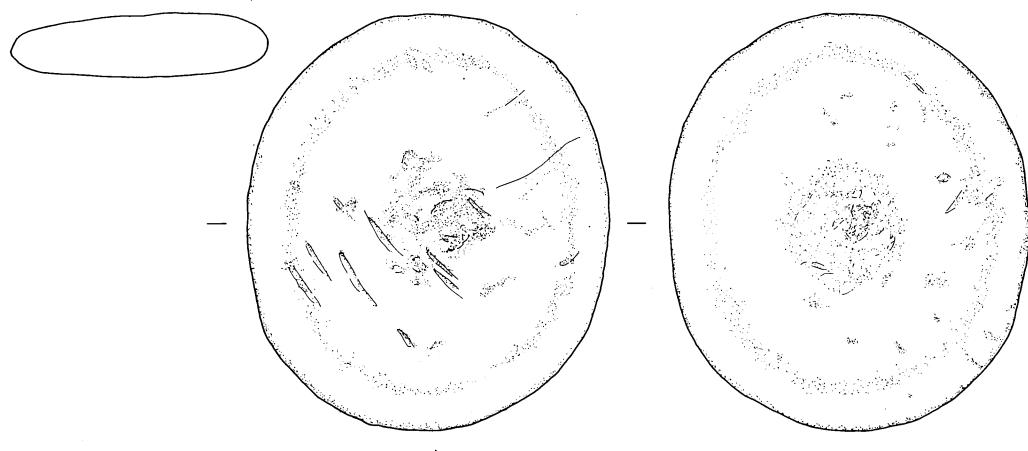
第 81 図 SR 2 出土遺物



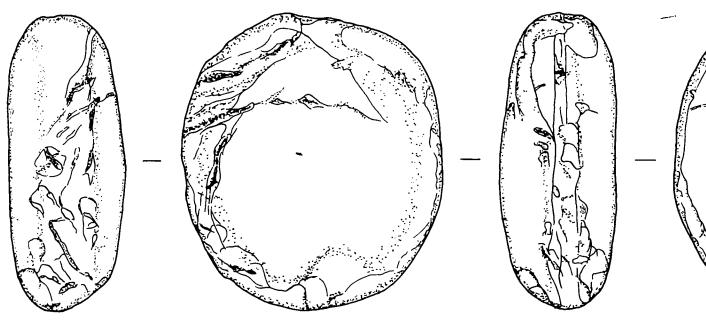
第82図 ST1、SR2出土遺物



195



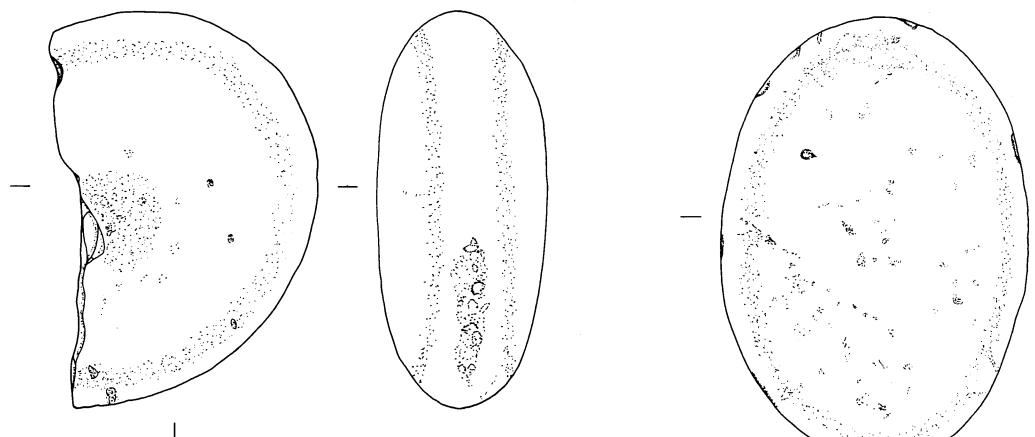
196



197

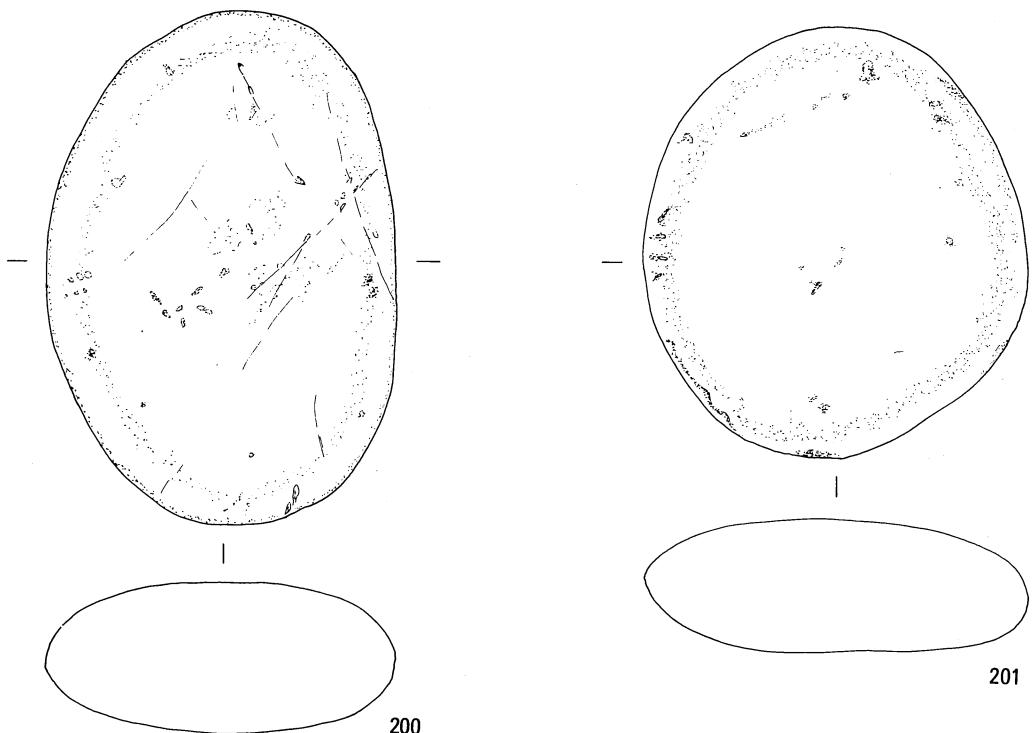


第 83 図 ST 1、SR 2 出土遺物



198

199

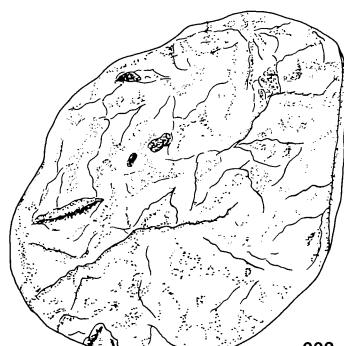


200

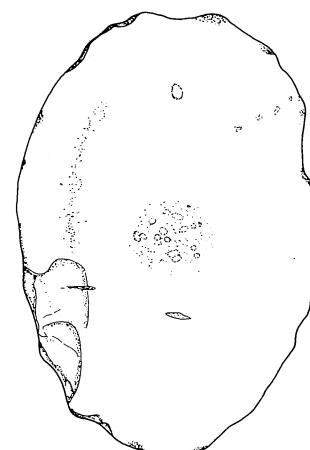
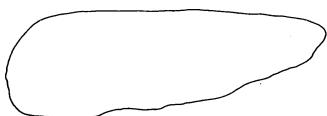
201



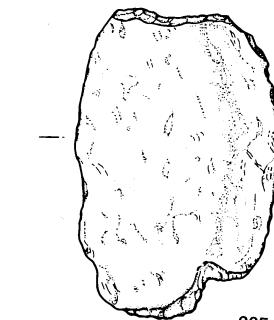
第 84 図 ST 1、SR 2 出土遺物



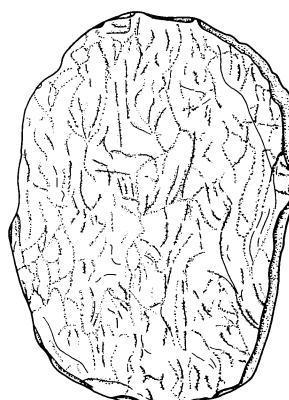
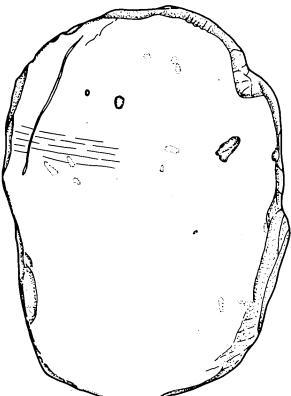
202



203



205



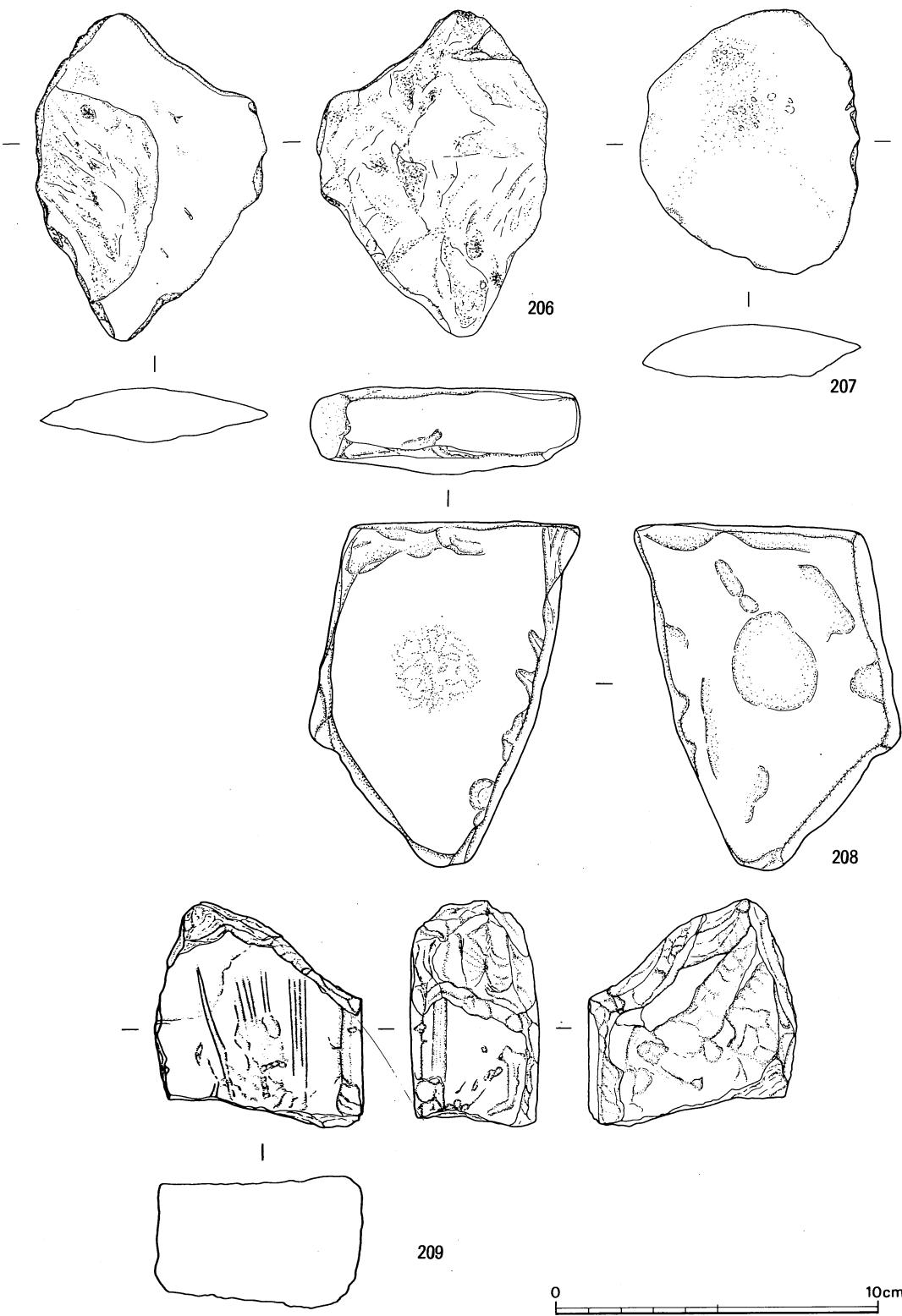
204



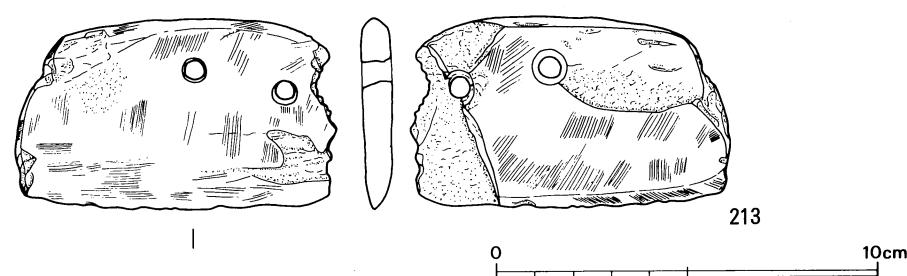
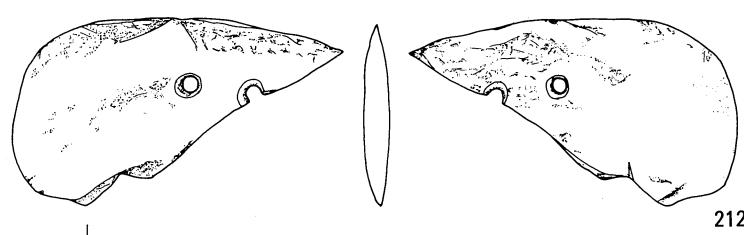
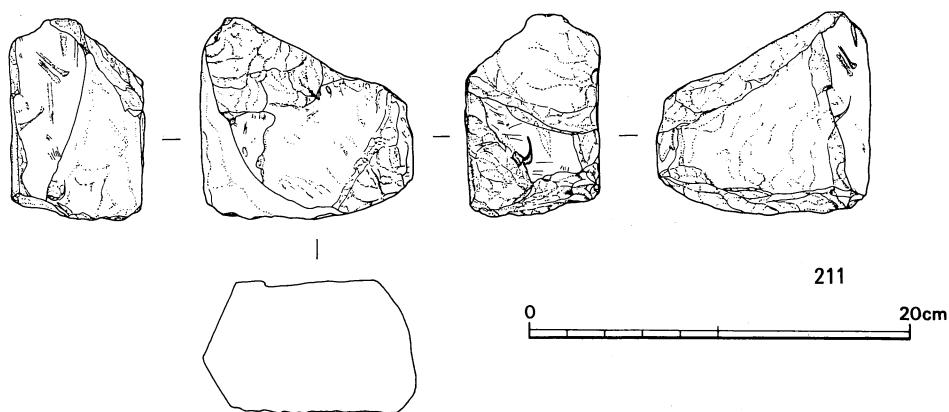
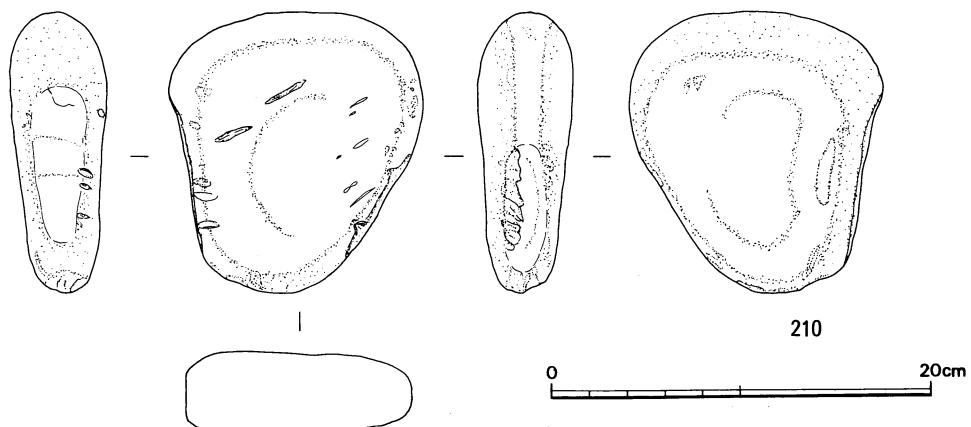
0

10cm

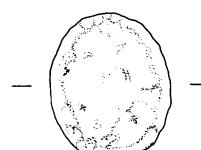
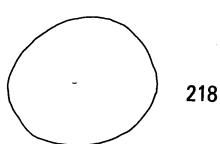
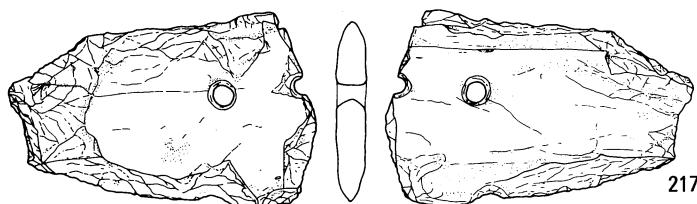
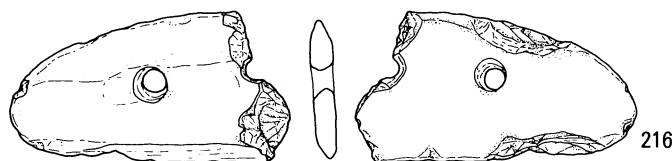
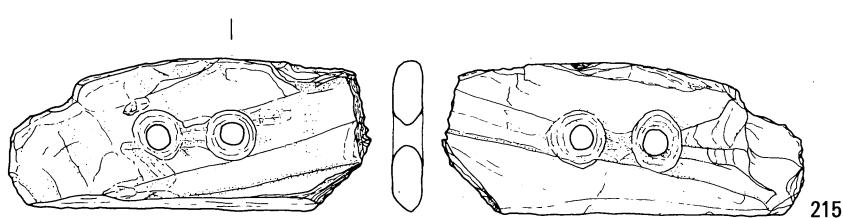
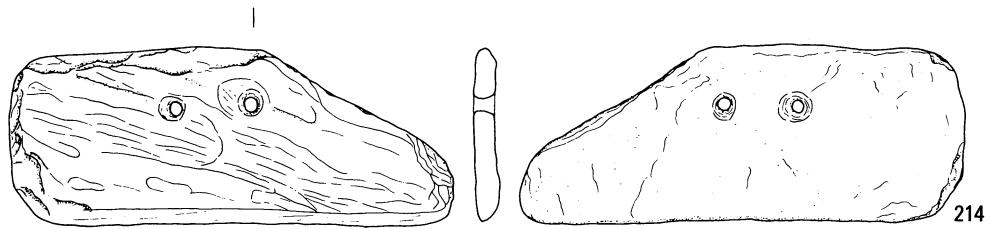
第 85 図 ST 1、SR 2 出土遺物



第 86 図 ST 1、SR 2 出土遺物



第 87 図 ST 1、SR 2 出土遺物



0 10cm

第88図 ST1、SR2出土遺物

5. Loc. 41

Loc.41

1. 位置と調査経過

Loc.41は、田村遺跡群の西部に位置し、小字名は柿の本である。当地点は空港拡張事業に付随した田村川暗渠化工事に伴い、まず、東半部の田村川右岸域 2,275m²の調査を緊急に行い、後に、西半部 2,268m²の調査を行った。弥生遺構を確認できたのは東側の調査区であった。

2. 調査概要

当地点の最終的な発掘面積は 4,543m²に及び、ピット群、土塙、溝などを検出した。うち、弥生時代のものは溝状遺構 1条のみであったが、その下層トレンチ発掘によって自然流路 S R 2 の一部も確認することができた。

3. 層序と出土遺物

Loc.41の基本的な層序は、西部調査区で次の如く確認できた。

- 第Ⅰ層 耕作土
- 第Ⅱ層 黄灰色粘質土層
- 第Ⅲ層 黄褐色粘質土層
- 第Ⅳ層 淡青灰褐色土層
- 第Ⅴ層 淡黒褐色粘質土層
- 第Ⅵ層 淡黄褐色粘質土層

それに対し、弥生時代の溝状遺構を検出した東部調査区においては、第Ⅲ層以下の堆積はみられず、S R 2 の埋土と考えられる砂質を含んだ土層が広範囲に拡がっていた。結局のところ、Loc.41の東半部は S R 2 が存し、その上部を溝状遺構が縦走していたと考えざるを得ない。

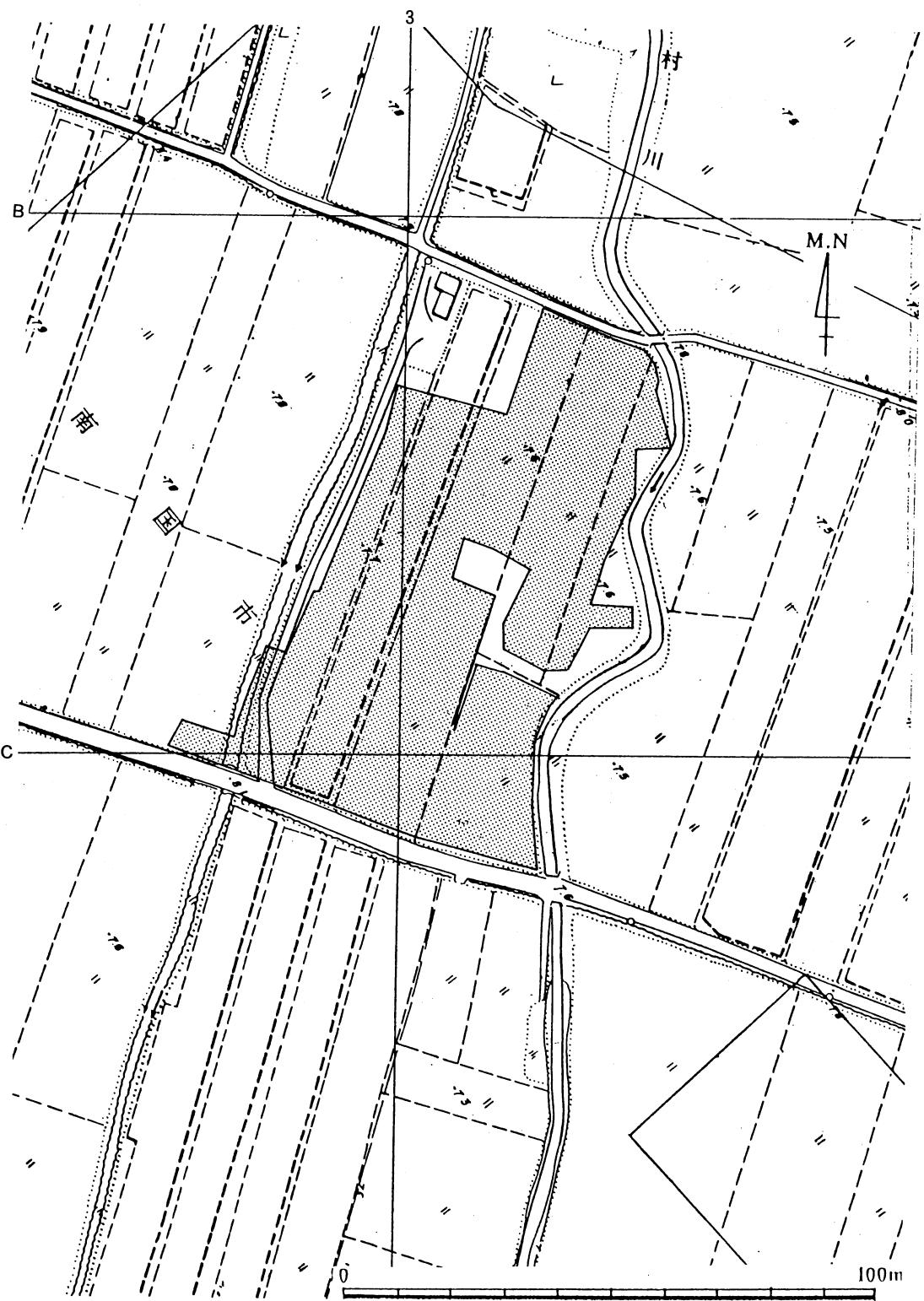
4. 遺構と遺物

溝

S D I

S D 1は、調査区の東端において、第II層除去後に検出された。幅4.00m、深さ0.82mの南北に走る溝である。但し、S D 1は、南部では確かに溝としての形状を呈してはいるが、北部では底面の起伏も激しく自然流路的な様相を濃くしている。

埋土も、砂層や粘質土が交錯しており、自然流路的な堆積状況である。出土土器は図1～4であり、弥生中・後期の土器が多く発見されている。また、石器の出土も若干みられ、ほぼ完形の磨製石包丁(46)も埋土第V層の暗灰褐色細砂層より出土した。



第89図 調査区設定図

S D 1は、中世の溝やピットによって切られ、一方、S R 2を切っている。それがゆえ、S D 1は、S R 2が廃絶または流路を変更した後に、なお溝状に残っていた遺構であると考えた方が妥当と思われる。しかし、下層のS R 2よりも後期土器の出土量が多く、その点で、あるいはS D 1はS R 2の一部であった可能性も考えられる。

SR2

当地点におけるS R 2の調査は、3本のトレンチ調査のみで、これを完了した。すなわち、B 3-1-25、B 3-6-5、B 3-6-10グリッドにわたる南北のトレンチと、B 3-7-11~15およびB 3-17-21~24における東西のトレンチ2本を、深さ1.6mまで掘り下げている。

その結果、いずれのトレンチにおいても、S R 2の埋土とみられる砂層あるいは粘質土層が複雑に交錯した状態で検出され、褐色系砂層を中心に多くの弥生遺物の出土をみた。

出土遺物は、時期的にみてもLoc.36のS R 2とほぼ同様であるが、詳細にみるとLoc.36BのS R 2において出土の少なかった前期II・IIIの土器が多くみられた（5~35および37~45）。

5. まとめ

当地点のS R 2は、水田址を検出したLoc.23・37の西側を北から南へ縦走する流路であり、水田用水の供給源的機能を有していた可能性も多分に存する。しかし、その東端は現在の用水路（田村川）が存し、この地点の発掘はなされなかつたので、その具体的な様相は不明である。とは言え、S R 2が周辺の弥生集落形成あるいは水田經營のための1つの重要な前提となつたであろうことは、十分に予想されるところである。なお、S R 2はLoc.41の西半部の2本の東西トレンチ（B 2-20-13~B 3-16-12とC 2-4-9~C 2-5-9）では検出されおらず、その範囲は当調査区の東半部に限定される。

第16表 遺構出土土器観察表

挿図番号	遺構番号	器種	口径 器高 脣径 底径 法量 (cm)	形態・文様	手法	備考
1	S D 1	壺	13.4 (6.3) — —	直線的に立ち上がる頸部から、口縁部は大きく外反。口唇部は外傾し、刻目を施す。 頸部には櫛描波状文及び簾状文を配す。		
2	"	"	— (13.5) 13.4 6.8	下胴部に最大径を有する壺形土器。	断面に接合部を観察できる(外傾接合)。 内面はナデ調整。	
3	"	甕	— (12.4) — 8.2	甕形土器底部。	外面縦方向のハケ調整。	外面焼けている(底部はドーナツ状に焼けている)。
4	"	高杯	— (4.9) — —	杯部と脚部の接合部。		
5	S R 2	壺	16.6 29.0 28.1 9.0	口頸間及び頸胴間に段を有す。 上胴部に有釉羽状文。文様帶を上下2条の沈線によって区画しており、上の沈線と段の間にも沈線を施す。	口頸間の段をヘラでナデしており、沈線のごとくみえる。全面ヘラ磨きを施していたと思われるが、器表の荒れがひどく観察不能。	
6	"	"	16.0 (8.2) — —	口頸間にしっかりした段を有し、 口縁部は滑らかに外反。 口唇部は面をなす。	全面横方向のヘラ磨き。	
7	"	"	— (11.3) 10.6 4.6	上胴部に最大径を有する綫長の壺。 頸胴間に1条のヘラ描沈線あり。	外面全面横方向のヘラ磨き。	頸部外面の一部に丹塗りが認められる。
8	"	"	15.1 (4.6) — —	直線的に立ち上がる頸部から、口縁部は大きく外反。口唇部は丸くおさめる。 頸部にヘラ描沈線を1条認める。	口縁部内外横方向のナデ調整。	
9	"	"	14.6 (12.1) — —	直線的に立ち上がる頸部から、口縁部は大きく外反。口頸間に突帯を有し、その上に1条のヘラ描沈線を配す。 上胴部に段を有す。	内外横方向のヘラ磨き。 頸部内部以下木理の細いハケ調整。	
10	"	"	— (5.7) — 9.0		内外面ヘラ磨き。	下胴部に黒斑。
11	"	"	15.0 (6.6) — —	滑らかに外反する口頸部。口縁部外面に圧痕を配し、かつ瘤状の粘土を貼付。 頸部には複帯櫛描直線文を配し、3条の付加状沈線を認める。	口縁部外面粘土帶貼付。	
12	"	"	17.2 (9.1) — —	内傾気味に立ち上がる頸部から、口縁部は強く屈曲外反。 口唇部は面をなす。	"	
13	"	"	19.5 (4.9) — —	口縁部は漏斗状に外反し、口唇部は凹状を呈す。	口縁部内面横方向のハケ調整、外面にはヒタ状の圧痕がつく。 口縁部は横方向のナデ調整。	
14	"	"	18.0 (19.3) — —	滑らかに外反する口頸部。口唇部は面をなし、幅広い刻目を配す。 頸部下端に双状工具による列点文を認める。	口縁部外面に断面三角形の粘土帶を貼付。	
15	"	"	22.6 (2.2) — —	大きく外反する口縁部。 口唇部は内傾する幅広い面をなし、斜格子文を配す。	口縁部外面に粘土帶貼付。 外面に指頭圧痕顯著。	

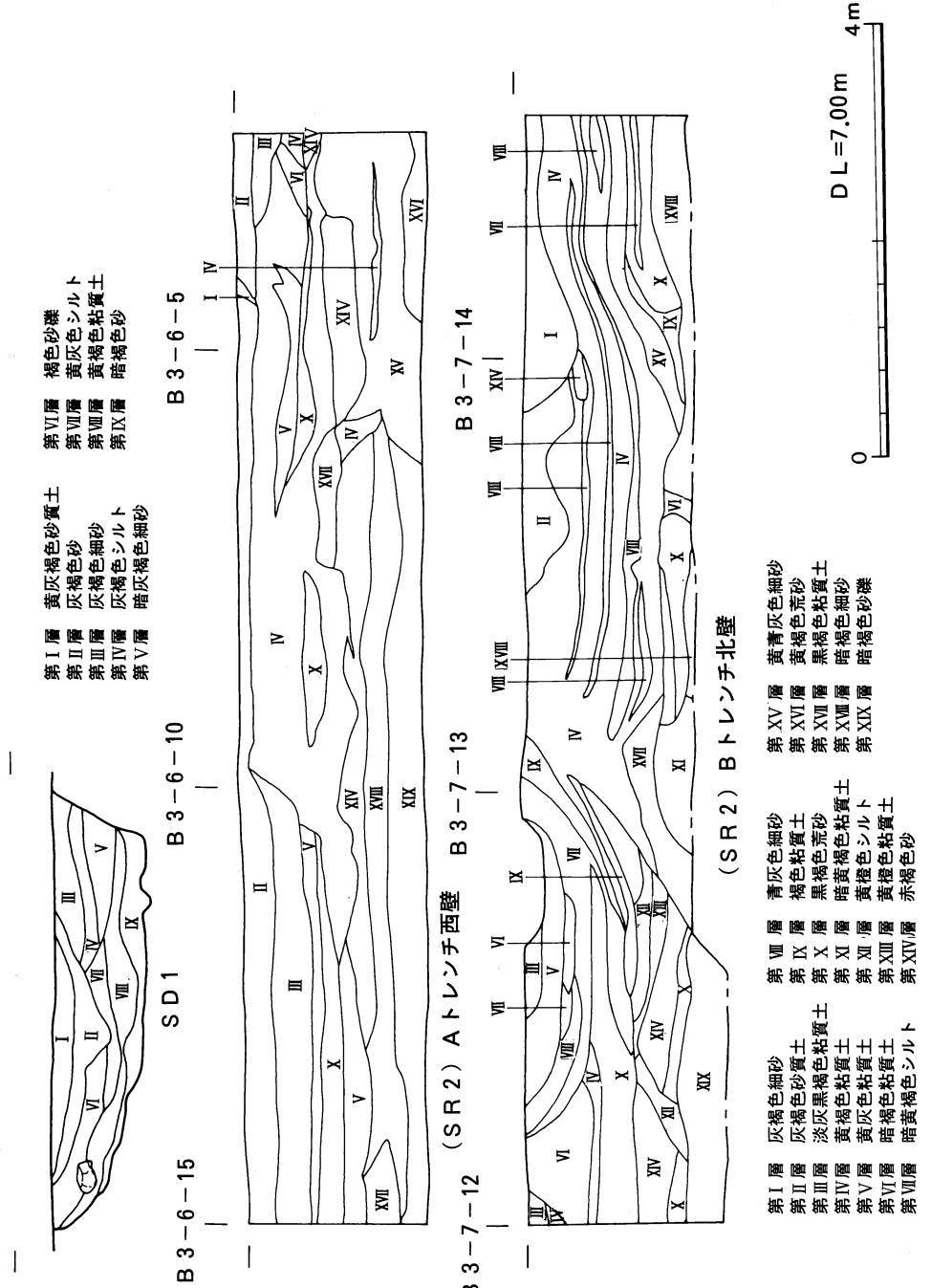
挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
16	S R 2	壺	14.8 (5.8) — —	口縁部は滑らかに外反。 口唇部は凹状をなし、下端に刻目を配す。	口縁部外面に粘土帶貼付。 口唇部横方向のナデ調整。		頸部内面に黒斑。
17	"	"	16.2 (4.9) — —	口縁部は強く外反。口唇部は面をなし、下端に刻目。外面には1~2条の微隆起帶を貼付。頸部外面には部分的に縦方向の双線を施す。		薄手式土器。	
18	"	"	21.2 (6.6) — —	口縁部は強く外反。 口唇部は面をなし、下端にハケ状原体による刻目を配す。	口縁部外面に粘土帶貼付。 頸部外面は縦方向のハケ調整。		
19	"	"	15.3 (6.1) — —	内傾して立ち上がる頸部から、口縁部は強く外反。	口縁部内外面横方向のナデ調整。 胸部外面ハケ調整、内面には指頭圧痕あり。		頸部内面に黒斑。
20	"	壺	9.8 (14.5) 15.0	最大径を胸部中位に有し、口縁部は短く外反。口縁部は肥厚し、口唇部は広い面をなす。	口縁部外面に断面三角形の粘土帶貼付。 胸部内面に粘土帶接合痕を認める。 頸部内面に指頭圧痕あり。		外面は全面煤けている。
21	"	"	24.6 (17.9) 23.5 —	口縁部は如意形に外反。口唇部は面をなし、刻目を配す。頸部外面に1条のヘラ描沈線を配す。			下胸部は火を受けて変色。
22	"	"	20.5 (10.2) — —	口縁部は如意形に外反。口唇部は面をなし(部分的に下垂)，全面に刻目。 頸部に1条のヘラ描沈線。	胸部外面ハケ調整。口頸部外面ハケ調整後、横方向のナデ調整。 口頸部内面ハケ調整。		
23	"	"	20.0 25.2 21.3 —	口縁部は如意形に外反。口唇部は丸くおさめ、全面に刻目。 頸部は削り出し突帯状に段部をつくり出し、3条のヘラ描沈線を施す。	口縁部内外面ハケ調整後横方向のナデ調整。 胸部外面ハケ調整。		胸部外面は火を受けて変色し、全面が煤けている。
24	"	"	20.5 (9.1) 19.0 —	口縁部は如意形に外反。 口唇部は丸くおさめ、刻目を施す。 頸部外面に1条のヘラ描沈線。	胸部外面右下がりの木理の細いハケ調整。		外面は煤けている。
25	"	"	26.3 (24.6) 26.5 —	口縁部は如意形に外反。 口唇部は丸くおさめ、右上がりの刻目を強く施す。頸部に2条のヘラ描沈線。	口縁部内外面横方向の強いナデ調整。 外面ハケ調整。 胸部内面粘土帶接合部に指頭圧痕が並ぶ。		
26	"	"	— (6.5) — 5.7	壺形土器底部。	外面縦方向のハケ調整。		
27	"	"	17.6 (7.7) 15.0 —	口縁部は強く外反。口唇部下端に刻目。頸部外面に縦方向のヘラ描沈線。 上胸部に微隆起帶を巡らし、その上に橢円形浮文貼付。	口縁部外面にも微隆起帶貼付。		頸部のヘラ描沈線は3条1単位。
28	"	"	20.0 (6.9) 20.7 —	口縁部は「く」の字状に外反。 口唇部は上下に拡張され、わずかに凹状をなす。	口縁部内外面横方向のナデ調整。 胸部内面左方向へのヘラ削り。		
29	"	"	17.0 (4.8) — —	短く立ち上がる頸部から、口縁部は水平に近く屈曲(内面に稜をなす)。端部は上下に拡張し、口唇部に3条の凹線。	口頸部内外面横方向の強いナデ調整。 胸部外面縦方向のハケ調整後、ナデ調整。		
30	"	"	17.1 (4.2) — —	口縁部は「く」の字に屈曲。 口唇部は面をなす。	口縁部内外面及び口唇部横方向の強いナデ調整。 胸部外面縦方向のハケ調整。		

挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm) 口徑 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
31	S R 2	高杯	— (14.2) — 18.5	脚部は「ハ」の字状に開く。杯部との接合部に断面三角形の貼付突帯を配するも、ほとんど剥落している。	脚部外面縦方向、内面横方向への磨き。	内外面に丹塗りあり。
32	"	"	15.2 (3.0) — —	皿状の杯部で、端部を上方に拡張し、口唇部は面をなす。	内面右上がりのハケ調整。	
33	"	甕	29.4 (7.0) — —	上胴部に段を有し、口縁部は如意形に外反。口唇部は面をなし、下端に刻目。段部にも刻目を施す。	外面右下がりのハケ調整。 口縁部外面はハケ調整の後、横向のナデ調整。	
34	"	小型土器	6.2 5.6 6.9 —	内湾気味に立ち上がり、口縁部は内傾。上げ底。	底部はつまみ出しによって上げ底状に成形。 内外面ナデ調整。	

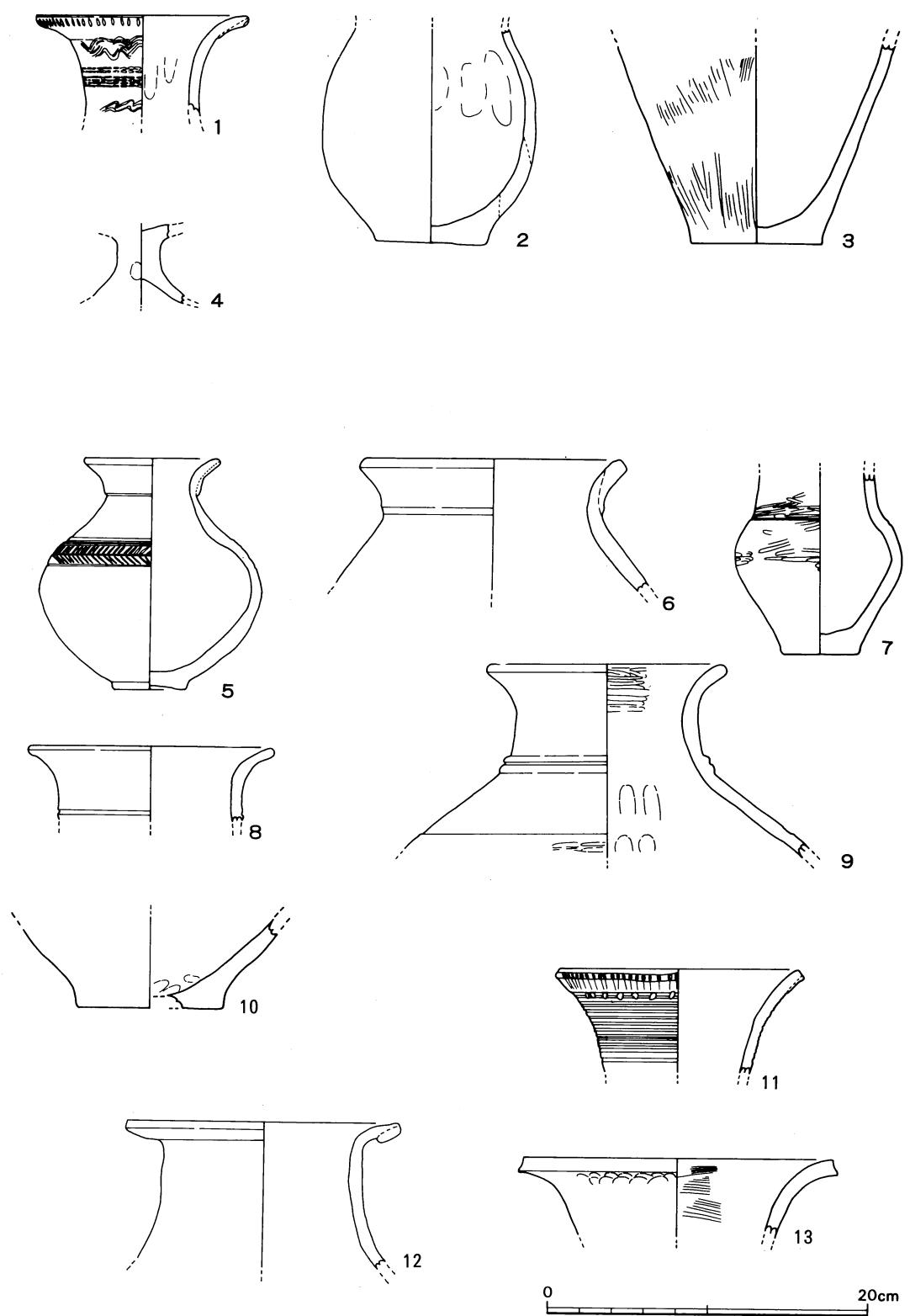
第17表 遺構出土石器観察表

挿図番号	遺構番号	器種	計測値 (cm, g) 最大長 最大幅 最大厚 重量	材質	特徴	備考
35	S R 2	石斧	(9.9) 7.1 4.8 640.0	緑色片岩	大型蛤刃石斧の下半部欠損品である。全面が研磨されているが、基端部には敲打痕を残す。	
36	S D 1	"	(4.2) 3.7 9.5 35.0	砂質片岩	扁平片刃石斧の刃部と基端部とを欠損したものである。残存部全面に研磨痕が有る。	
37	S R 2	"	6.4 3.9 1.1 47.0	"	刃部付近に最大幅を有する扁平片刃石斧であり、刃部の一部を欠損している。 ほぼ全面を研磨によって仕上げている。	
38	"	"	7.0 1.3 0.5 7.7	粘板岩	表面下端部を研磨して、刃部を作り出した細長い局部磨製石斧である。	
39	"	"	5.2 1.5 0.5 6.0	"	局部磨製によって、両刃の刃部を作り出した小型石斧である。 刃部を中心に擦痕が残る。	
40	"	叩石	10.1 11.4 5.0 820.0	砂岩	河原石をそのまま利用した叩石で、正面と短側縁部に敲打痕が残る。	
41	"	"	6.6 6.4 1.6 110.0	"	形状的には磨石として考えられるが、周縁部に若干の敲打痕が見られるため、叩石とした。	
42	"	"	1.1 0.5 0.5 68.0	"	自然面と剥離面とからなる。周縁部に敲打痕が見られる。	
43	"	砥石	8.7 2.2 3.7 120.0	砂質片岩	2面を使用している。 よく使い込まれており、下半部を欠損している。	

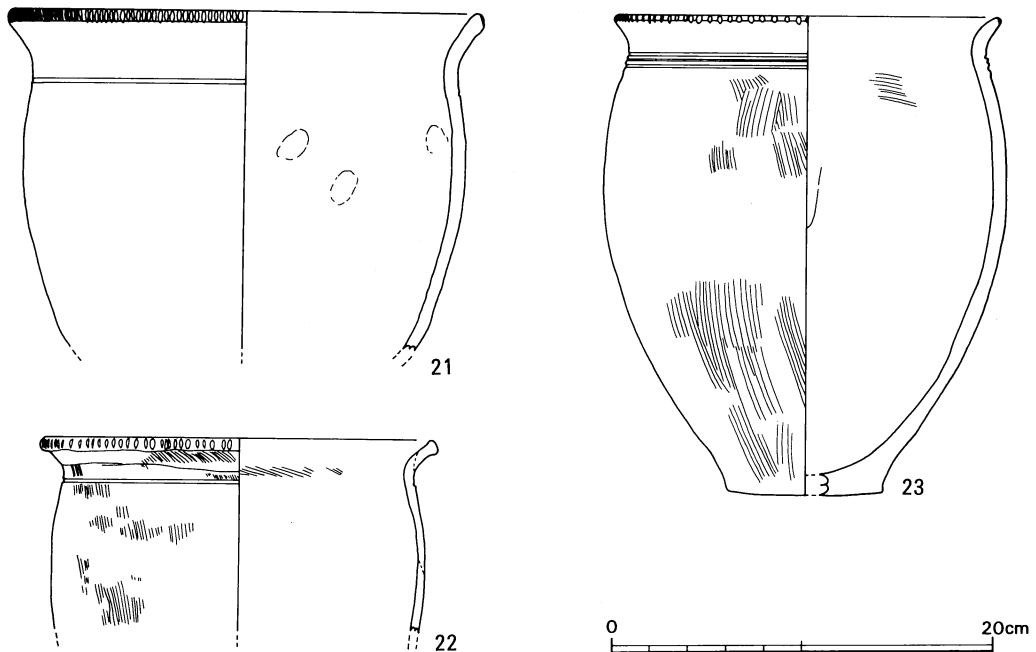
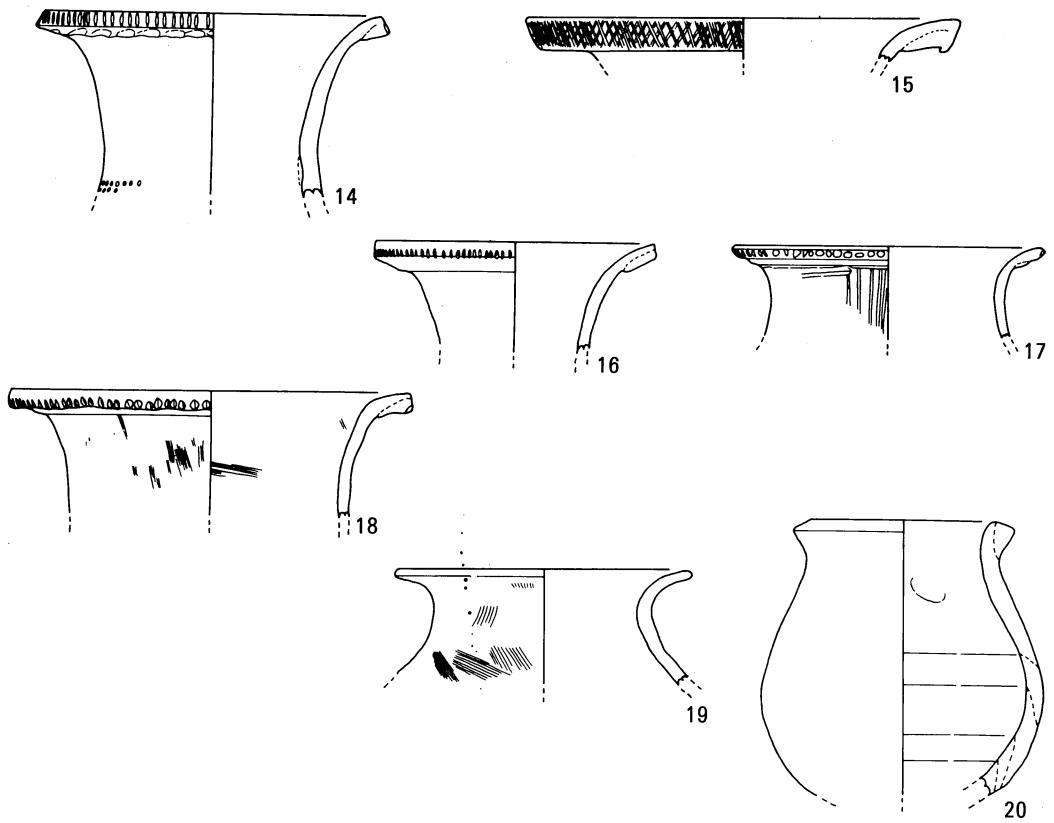
挿図番号	遺構番号	器種	計測値 最大長 最大幅 最大厚 (cm, g)	材質	特徴	備考
44	S R 2	叩石 砥石	(14.5) 5.0 4.0 510.0	砂岩	両短側縁部に敲打痕を有し、叩石と考えられるが、一方の長側辺部は砥石として利用された形跡がある。	
45	"	叩石	(10.0) (5.3) (0.9) 52.5	"	自然面と剝離面とからなる。両端に抉りを有し、刃部はやや外湾氣味である。背部も外湾しており、断面が丸味を帯びるよう調整されている。	
46	S D 1	石包丁	15.0 5.9 0.7 101.0	粘板岩	丁寧に仕上げられた磨製石包丁である。刃部は片刃で外湾する。両面から穿たれた双孔を有す。表裏両面に擦痕を残す。	
47	S R 2	管玉	0.8 0.3 0.3 0.2	碧玉	比較的小型の管玉である。穿孔・仕上げとともに精巧である。	



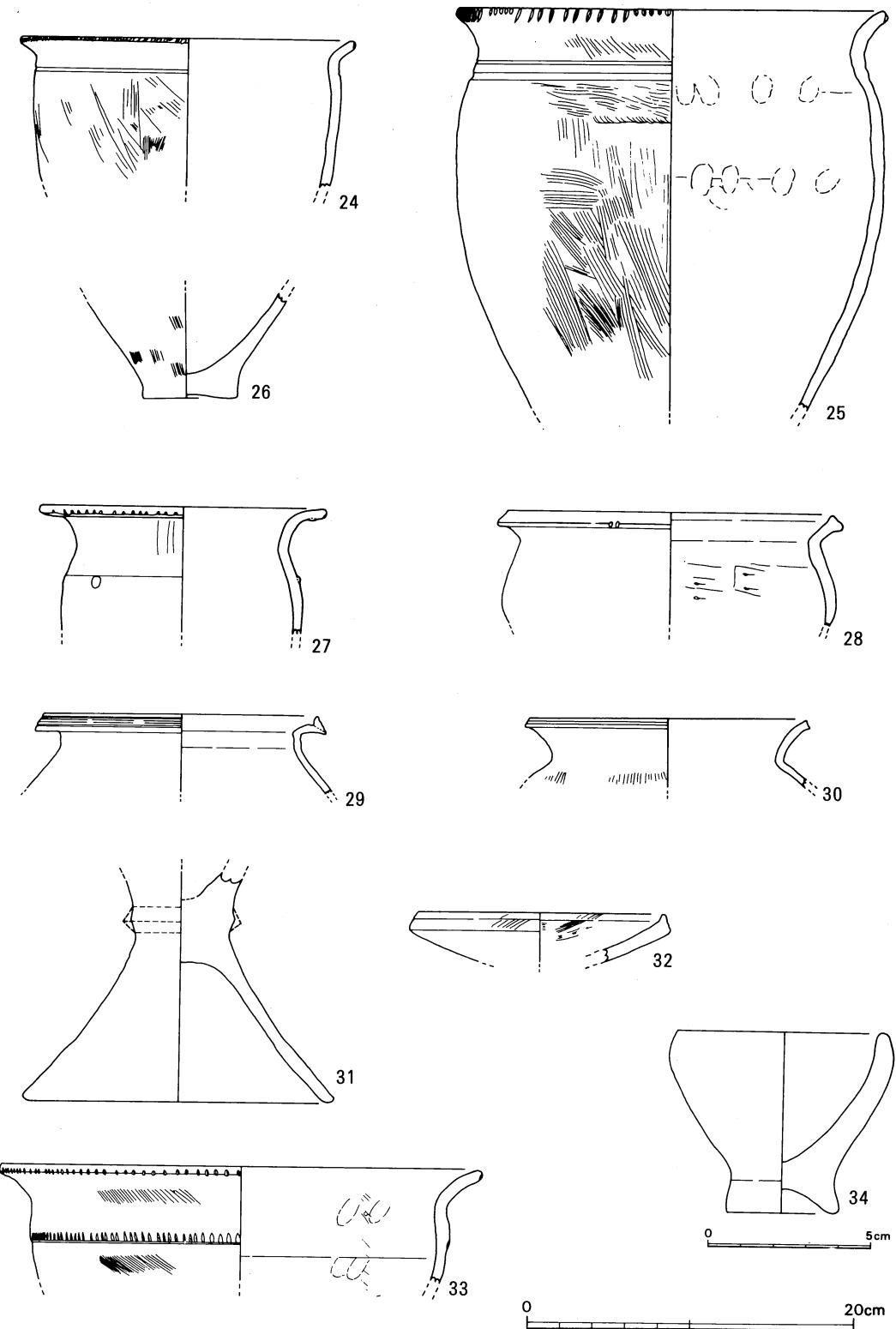
第90図 S D 1、S R 2セクション



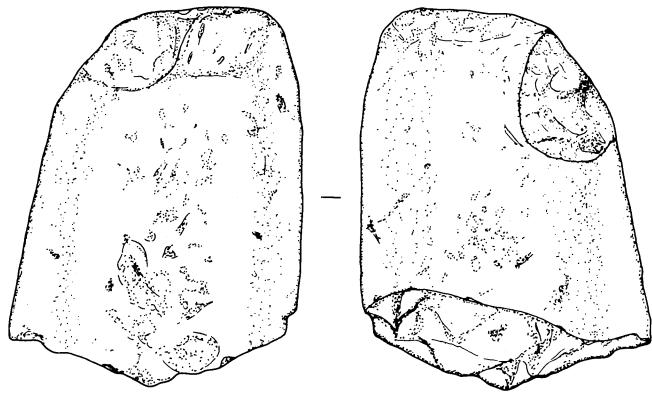
第91図 SD 2、SR 2出土遺物



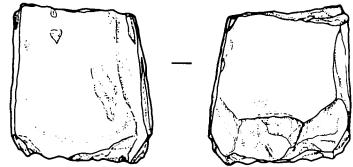
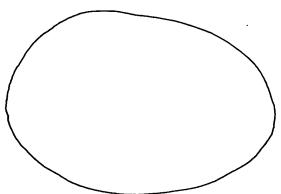
第92図 SR2出土遺物



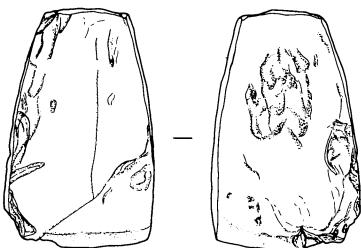
第93図 SR 2 出土遺物



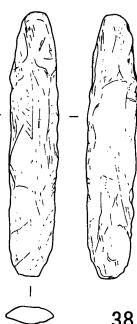
35



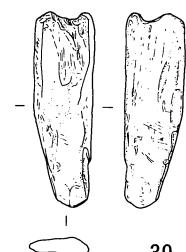
36



37



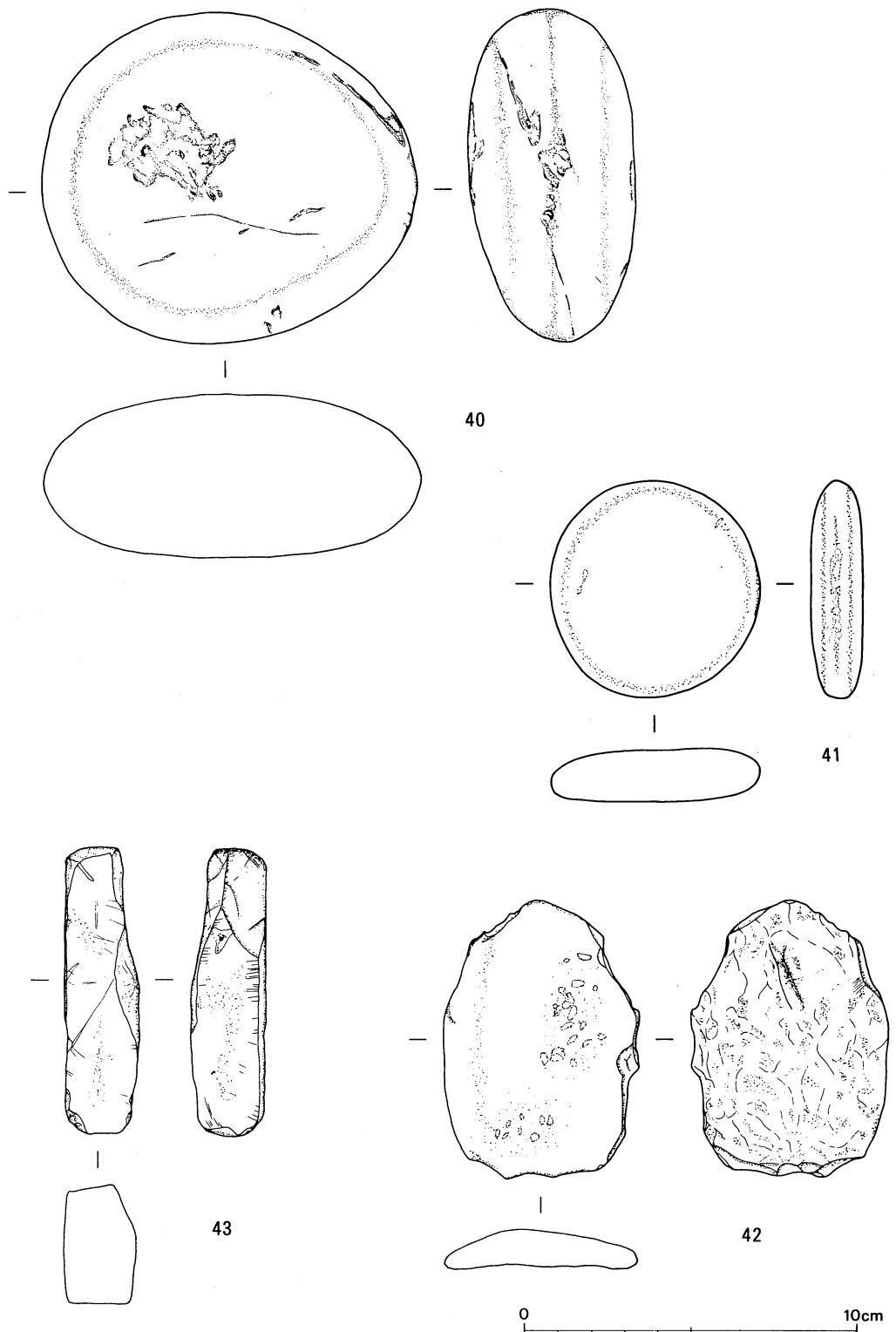
38



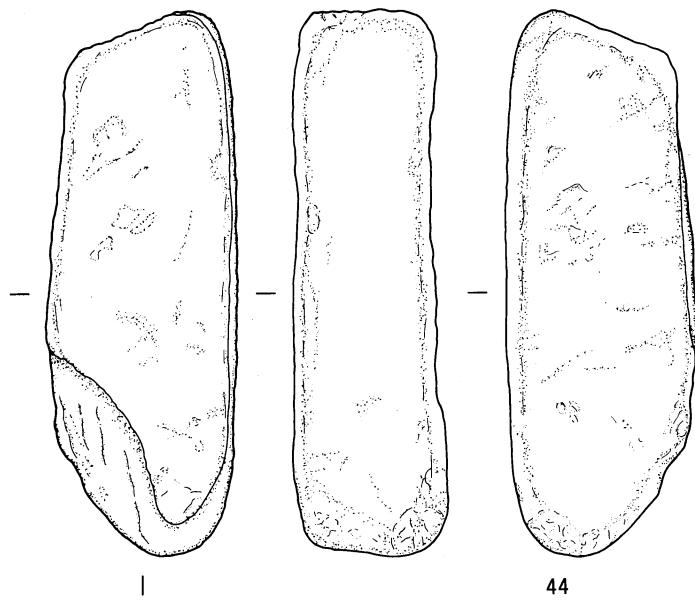
39



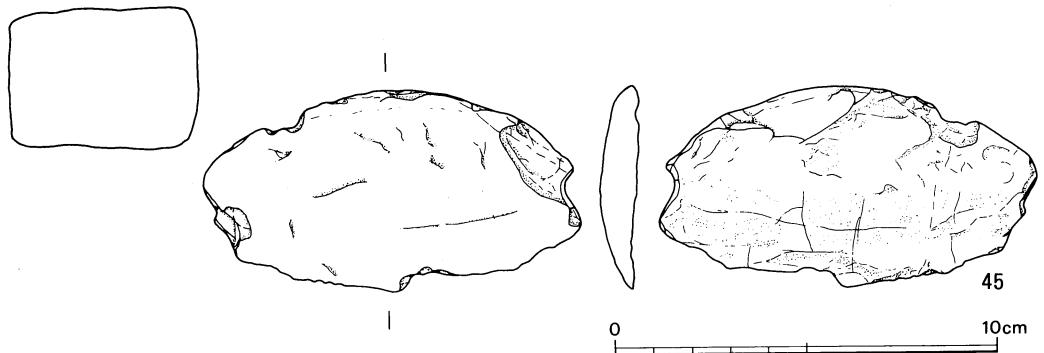
第94図 SD1、SR2出土遺物



第95図 SR 2 出土遺物

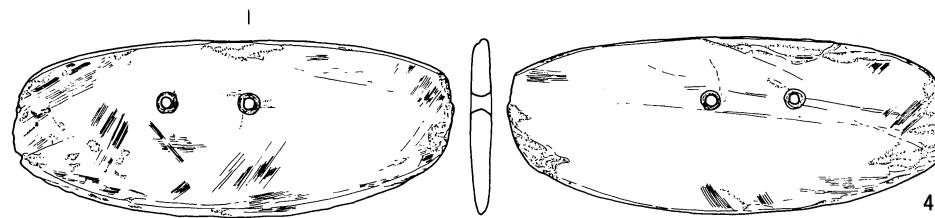


44



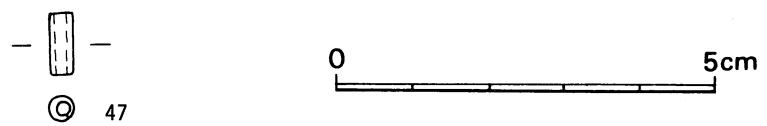
45

0 10cm



46

0 10cm



© 47

第96図 SD1、SR2出土遺物

6. Loc. 45

Loc. 45

I. 位置と調査経過

Loc.45は調査区の西端に位置し、字名を田中と称す。1—2号場周道路改修に伴う調査であり、道路下と西側の拡張部分、幅8m、長さ100mを測る。その面積は約800m²を測る。地形は調査区北端で海拔8.0m、南端で7.3mを測り、南に向ってわずかに降下している。調査は前半に西半分を実施し、後半は道路下の東側半分を実施した。

2. 調査概要

調査区のほぼ全面から遺構が検出された。現地形は上述のように南に向って緩傾斜しているが、旧地形は勾配が現地形より顕著である。したがって調査区南部においては比較的良好な遺物包含層が形成されているが、北半分は厚さ15~20cmの耕作土を除くと弥生時代の遺構検出面であり、包含層の存在する部分はほとんどなく遺構の残存状況も南に比べて悪い。また東側半分の道路下においては相当激しい近・現代の搅乱を受けている。また調査区のほぼ中央部は近代の溝が走っており多くの遺構が切られている。

検出遺構は竪穴住居址、土塙、溝などである。住居址は中期が7棟、後期が3棟の計10棟を検出した。中でも北端で検出した後期後半のS T 1からは、舶載の方格規矩四神鏡の鏡片が出士している。土塙は計16基検出したが、SK 7・14のように溝状をなしているものが注意を引く。溝は北半部のSD 1・2をあげることができる。中でもSD 2は中期II段階の一括資料として把握することができるものである。

3. 層序と遺物

第I層 耕作土

第II層 床土

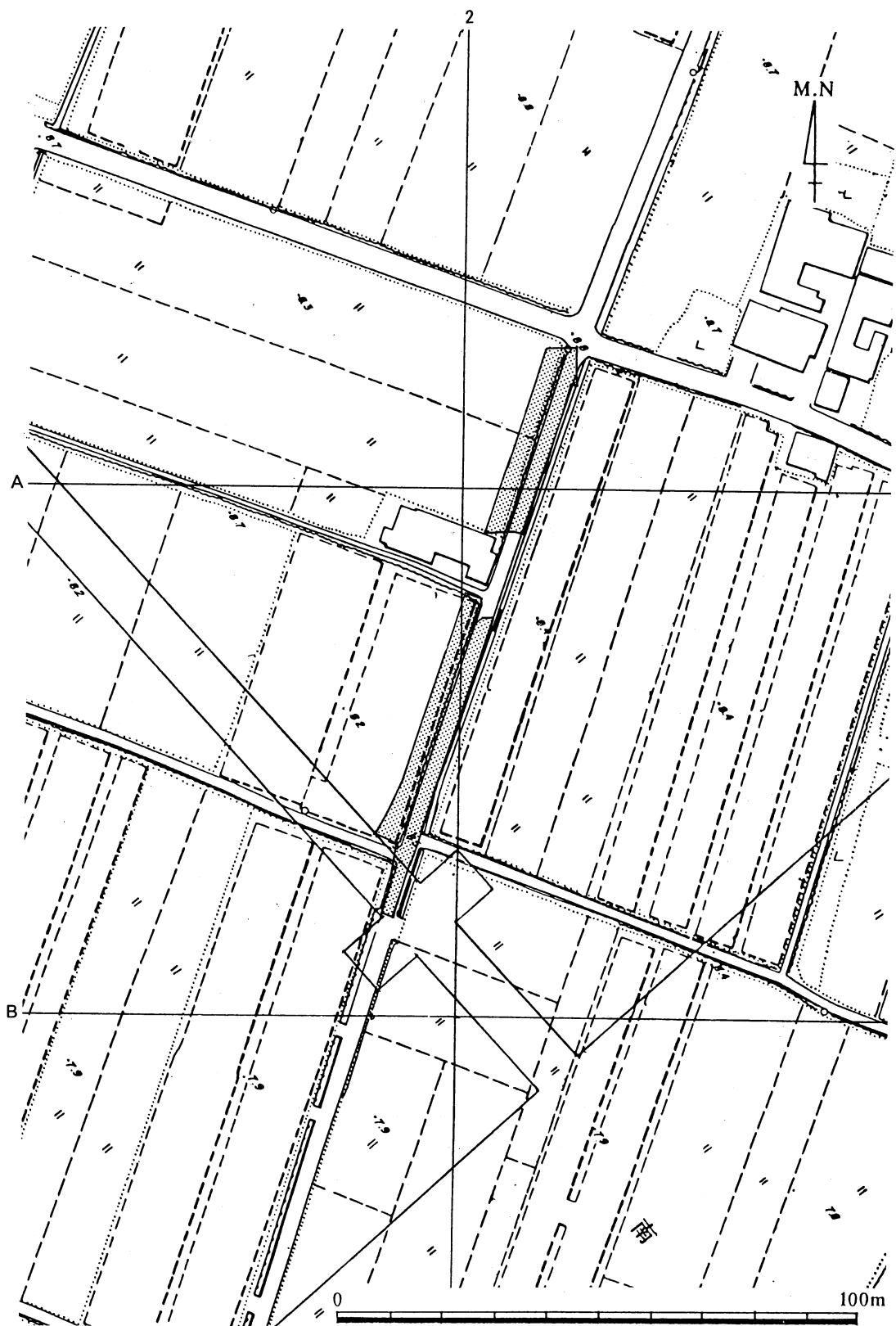
第III層 黄灰色粘質土層

第IV層 黄茶色粘質土層

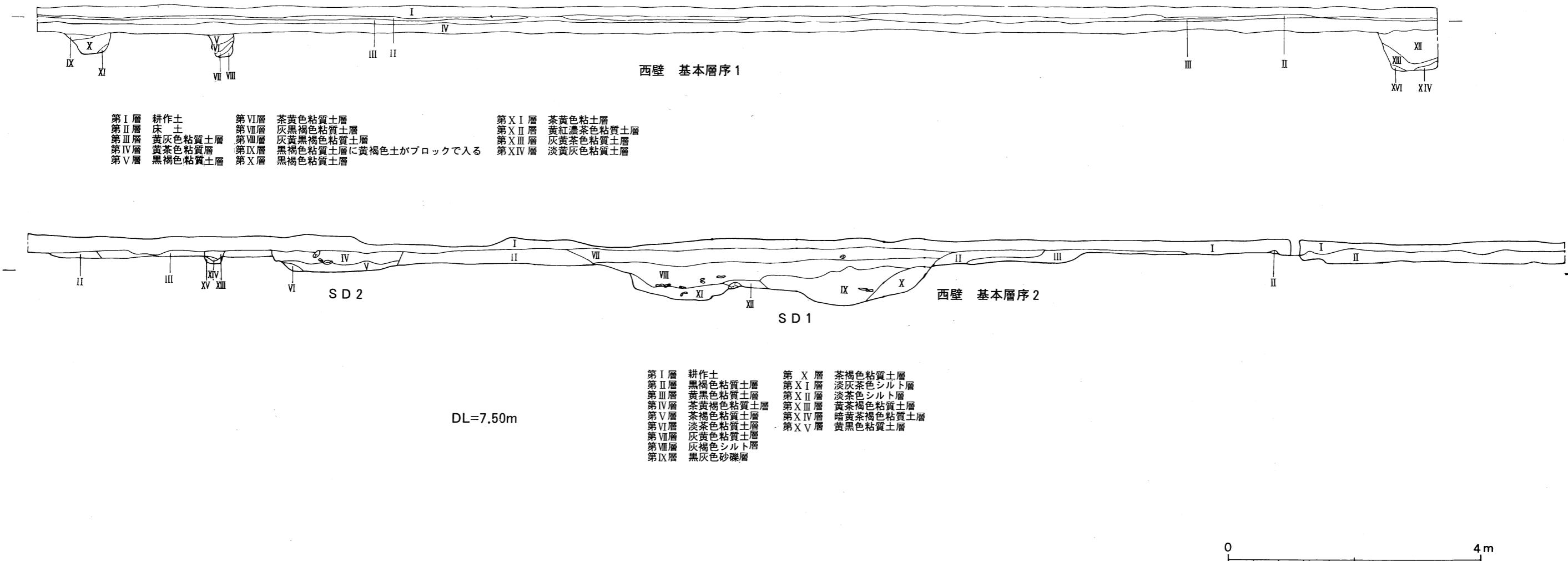
基本層序は調査区の南部と北部においては異なる。南部は西壁基本層序1のように弥生時代中・後期の遺構検出面である黄褐色シルトの地山の上に弥生の包含層(IV層)と中世の包含層(III層)が堆積しているが、北部では中世の遺物包含層が削平されており、耕作土の下はすぐ弥生時代の遺物包含層で、しかもII・III層が堆積しているのはSD 1あたりまでで、それ以北は耕作土を除けば遺構検出面となっている。包含層出土の遺物は弥生、中世ともに少数でしかも細片が多い。

4. 遺構と遺物

竪穴住居址



第97図 調査区設定図



第 98 図 調査区セクション

S T 1

調査区の最北端に位置し、S T 2を切っている。道路下で検出したために、近・現代の攪乱をかなり受けている。円形住居址で、径6.2m、深さは最も残りの良いところで約0.2mを測り、面積は約31m²を測る。床面には幅30~90cm、高さ10cm前後のベット状遺構を有する。床面南西部はS T 2との切り合いのために不明であるが、ベット状遺構は全体に回っていたものと考えられる。中央ピットは不定形を呈し、長軸方向をN-30°-Eに取り、長径1.00m、短径0.64m、深さ0.20mを測り、2段に掘り込んでいる。主柱穴はP 1~4でそれぞれの規模はP 1が28×24cm、深さ18cm、P 2は32×24cm、深さ38cm、P 3は40×24cm、深さ12cm、P 4は32×24cm、深さ40cmを測る。

埋土は基本的にはIII層灰黒色粘質土、II層濃茶褐色粘質土、I層黄茶褐色粘質土の順に堆積しているが、北半分は複雑な堆積を示している。すなわちIII層の堆積がほとんど見られず、IV・VI層の炭化物の層があり、また地山のVII層や灰茶色粘質土が薄く重なり合っている。中央ピットには多くの炭化物が埋っているが壁は焼けていない。

遺物はI・II層から多数の土器と4点の石器が出土し、特に床面より方格規矩四神鏡の鏡片が出土している。I層出土の土器は(1~7、9~11、13、14)で長頸壺(1~3)の存在が目立っている。II層からは高杯(7、8、12)が出土している。石器はI層より叩石(277)、II層より打製石包丁(292、295)が出土している。P 4からは後期末に位置づけられる叩目のある土器片が出土している。鏡片は床面のほぼ中央部で出土し、縁辺部を上に鉢側を下にして床面に垂直に突き刺されたような状態で出土している。

S T 1出土の遺物は中期III(9)から後期後半までのものを含んでおり、遺物からS T 1の時期を明確にすることは困難であるが、I層出土の甕(5)、高杯脚部(9)を混入と考えれば、ほぼ後期IIIと考えることができるのではないかろうか。

S T 2

S T 2はS T 1に切られており、半分が調査区外に出ている。径9.40m、深さは南で0.24m、北で0.2m前後、面積は約69m²と推定することができる。随所に近・現代の攪乱塗がみられる。床面は平坦であるが、わずかに南に傾斜している。中央ピットは全形を掴み得ないが、隅丸長方形の平面形を有し、長軸はN-17°-Eに取るものと考えられる。長径1.36m、短径0.48m、深さ0.5mを測る。床面には大小ピットが10個あるが、主柱穴はP 4・7・8・10を考えることができる。また壁際には幅20cm、

S T 2 ピット計測表

No	径(長×短)(cm)	深さ(cm)	備考
1	20	6	
2	"	44	
3	28×20	46	
4	20	22	主柱穴
5	38×30	12	
6	20	13	
7	28×24	39	主柱穴
8	18	7	"
9	20	40	
10	36×30	70	主柱穴

深さ15cm前後の壁溝がめぐっており、北半分はS T 1によって切られている。

埋土は中央ピットより南ではII・III層からなり、壁際では炭化物(IV層)がやや厚く堆積している。北半分はII層のみである。中央ピット内は南側から炭化物がやや厚く流れ込んでおり、中央ピット付近にも炭化物が広がっているが、中央ピットの壁は焼けていない。遺物はI層より壺(17)、甕(18、21)、高杯(20)が出土し、II層からは壺(15、16)、甕(19)が出土している。(17)は古式土師器であり、混入と考えられる。S T 2はII層の土器を中心に考えて、後期Iとみてよかろう。

S T 3

東側の大半を水路によって切られ、西側も近代の溝によって切られている。その他旧道路下で検出したために隨所に攪乱が見られる。北側の角部分から円形住居址としたが、規模は不明である。北の角部分には幅10cm、深さ6cmの壁溝が見られる。埋土は濃茶褐色粘質土である。床面の北部には1.00×0.80m、深さ4cm程度の窪みがあり、床面中央部とその南には焼土と炭化物が見られる。遺物は少なく、長頸壺(22)が埋土中より出土している。後期Iの住居址である。

S T 4

S T 2の南に位置し、S T 3に切られている。径5.60～5.80m、深さ約0.30mを測る。ほぼ円形の平面形を有し、床面積は約24m²である。S T 1・2と異なり、10cm内外の遺物包含層の下で検出したために残存状況は比較的良好である。しかし東側半分は近代の溝、野ツボ、道路によってかなり攪乱されている。中央ピットの南北の床も抉り取られている。埋土はI・II層からなり、II層の下部にはほぼ全面に炭化物が薄く堆積している。床面東部には炭化した建築材の一部と考えられる棒状のものが中央に向って倒れている。また壁には板材が壁に立っていたような状態で焼けており、床、壁は部分的に紅く変色している。これらの点を総合して、S T 4は焼失住居とみてよかろう。床面はほぼ平坦で、壁は斜めに立ち上がる。周縁部には幅15cm、深さ5cmの壁溝がめぐっているが、南東部と西端の土塹付近には存在しない。北端において壁溝の一部が二重になっており、床面が著しく踏み固められているが、これは出入口の可能性もある。さらにその付近に4個の小ピットが存在しているのは、出入口の施設と関係する可能性もある。

S T 4の構造上の特徴として屋内貯蔵穴の存在を挙げることができる。西端に位置し、1.04×1.44mの長方形を呈し、深さは床面から0.40～0.50mを測る。立ち上がりは壁側は急で、内側は緩かに立ち上がる。中央ピットは東西に長軸を有する楕円

S T 4 ピット計測表

No	径(長×短)(cm)	深さ(cm)	備考
1	24	18	主柱穴
2	36	21	"
3	48×32	17	"
4	36×24	24	"

形の平面形を有し、長径80cm、短径68cm、深さ14cmを測る。内部には炭化物が多量に入っているが、壁及び周辺には焼土はみられない。またピット底面より数cm程浮いて30cm大の礫がのっている。主柱穴はP 1～4が確認できる。柱穴間からP 3とP 4の間にもう1個柱穴があったことが考えられるが、攪乱塙によって欠損している。

遺物はI層より壺(24)、鉢(26)、II層より壺(23)、甕(27)、床面より壺底部(25)、甕(28、29)が出土している。(29)は西壁際の屋内土塙床面に押しつぶされたような状態で出土している。石器は砥石(288)がII層より出土している。ST 4は中期III段階の住居址である。

ST 5

東側の大部分が調査区外に存し、西側はST 6に大きく切られている。径約7.00m、深さ0.20m、推定面積約38m²を測る円形住居址である。床は平坦面をなす。主柱穴はP 10・11がその一部に該当すると考えられるが、他は検出できなかった。P 10は径28cm、深さ7cm、P 11は径16cm、深さ6cmを測る。P 9は中央ピットで隅丸長方形の平面形を有し、長軸を東西方向に取る。長径70cm、短径38cm、深さ40cmを測り、断面形は逆台形をなす。壁溝は住居址の南側のみに存し、幅20cm、深さ6cm内外を測る。埋土は濃茶褐色粘質土単純一層である。また床面の一部（破線によって示す）が火をうけて赤く変色している。遺物は埋土より壺(30～33)、甕(34)が出土し、石器は床面より(301、302)が出土した。ST 5の時期は床面出土の良好な遺物がないために決定し難いが、中期IIIの時期と考えられよう。

ST 6 ピット計測表

ST 6

西側の大部分が調査区外に在り、ST 5と切り合っている。また南でSK 6と接している。径5.60m、深さ0.40m、推定面積約24m²を測る円形住居址である。ST 6は水田下で検出したために残存状態は比較的良好である。埋土はI～IV層からなり、II層が最も厚く堆積している。床面はほぼ平坦

であるが、中央部分がわずかに深くなっている。また部分的に焼土がみられる。主柱穴は明確には把握し難いが、P 2・3がその一部をなすものと考えられる。中央ピットは不定形の平面形をなし、長軸方向はN-15°-Wを取り、長径66cm、短径55cm、深さ41cmを測る。中央ピット内II層からは多量の炭化物が出土しているが、壁及びその周辺は全く焼けていない。

遺物はI・II層、床面から多量に出土しているが、II層が最も多い。土器はI層より壺(43、44、48)、II層から壺(35、37、41、42、45～47)、甕(51～53、55)、床面からは壺(36、38～40)、甕(50)が出土している。壺(40)はII層出土のものと接合している。他に中央ピ

No	径(長×短)(cm)	深さ(cm)	備考
1	66×55	41	中央P
2	34×28	70	主柱穴
3	33	33.	"
4	16×12	6	
5	20×16	31	
6	38×36	50	
7	60×50	65	
8	24	35	

ットから完形に近い鉢（49）、甕（54）が出土している。中央ピット及びP 7からは図示し得ない多量の細片が出土している。石器はI層より磨石（303）、II層より叩石（270、278）、砥石（288）、床面より叩石（268）、縦長の局部磨製石器（264）が出土している。

S T 6の時期は以上の出土遺物から中期IIIに該当する。

S T 7

調査区にわずかにかかっている円形住居址で、深さ0.25m、推定径約7.00~8.00mを測る。S T 8及びS D 3を切っていることを平面形で把握することができる。埋土はII・III層からなり、III層を除くと全面に2~3cmの厚さで炭化物が堆積している。これらの炭化物は、屋根に使用していたと考えられる草屋根の焼けたものである。東壁は火を受けており、部分的に赤く変色している。壁溝は存在しない。遺物は埋土より壺（56、57）、高杯（58、59）、そして石器として叩石（280）が出土している。S T 7は中期IIIに該当する。

S T 8

西側が調査区外に在り、北半はS T 7に切られている。なお東部はS T 9と切り合っている。S T 9との切り合いは、平面形、断面形ともに精査したが充分に把握することができなかった。径6.00m、深さ0.15m、推定面積28m²を測る円形住居址である。埋土は主としてI・II層からなる。床はほぼ平坦面をなし、壁は斜めに立ち上がり、壁溝は存在しない。主柱穴はP 2~4、が該当すると考えられる。中央ピットは橢円形を呈し、長軸を南北に取る。長径100cm、短径70cm、深さ50cmを測り、南壁側に炭化物が厚く堆積している。遺物はI・II層より壺（60~68）、甕（69~72）、石包丁（296）、打製石斧（263）、また一部に丹塗のみられる（スクリーントーンで示す）磨石（304）がII層より出土している。一応中期IIの時期と考えてよかろう。

S T 8 ピット計測表

No	径(長×短)(cm)	深さ(cm)	備考
1	100×70	50	中央ピット
2	32×26	8	主柱穴
3	24	21	"
4	"	5	"
5	21	9	

S T 9

東半分は調査区外に存り、西側は近代の溝に切られ、北側はS D 4を切っている。径7.80m、深さ0.30m、推定面積約47m²を測る円形住居址である。埋土は濃茶褐色粘質土単純一層で西壁寄りを近代の溝に切られているが、床面は破壊されていない。床は平坦面をなし、大小のピットが多数存在する。主柱穴はP 1・5・8等が考えられる。P 11は中央ピットで不定形の平面形を有し、長軸方向をN-71°-Wに取る。長径100cm、短径76cm、深さ46cmを測り、ピット内には10cm大の河原石が4個入っていた。壁溝は幅15~32cm、深さ2~10cmを測り一定しないが、総

して北側が深く南側が浅い。

遺物は埋土及び床面より多量に出土している。土器は壺（73～87）、甕（88～97）、高杯（98～101）で、叩目のある甕（96）が床面で、その他はすべて埋土中より出土している。組成を見ると壺15、甕10、高杯4である。石器は床面より叩石（273）、磨石（305）が、埋土より打製石包丁（291）、勾玉状を呈す用途不明石器（300）、および叩石が8個出土している。石器の出土状況で注目すべきことは、いま一つの用途不明の棒状石器（306）が壁溝内に4cm突き刺さって出土していることである。

S T 9 の時期は中期IIIに該当すると考えられる。

S T 10

調査区の南端に位置し、住居址の3分の2以上が調査区外にある。全形を推定すると、径7.00m、深さ0.12～0.15m、推定面積は約38m²を測る円形住居址である。北西においてS D 7 を切っている。床はほぼ平坦面をなし、大小ピットが多く存在するが、P 2が主柱穴をなしているものと考えられる。周縁部には壁溝がめぐっているが、一部二重になっている。これは埋土の堆積状況から判断して住居址の拡張に起因するものと考えられる。大部分の埋土は濃茶褐色粘質土であるが、二重の溝がめぐるところは濃茶褐色粘質土の間にセクションE-Fに見られるような地山の黄茶褐色粘質土が1cmぐらいの厚さで堆積している。これは内側の壁溝の埋土は拡張された段階で埋められ、その上に黄茶褐色粘質土が敷かれたものと考えられる。また、拡張区の床面は旧床面よりも高くなっている。壁溝の規模は場所によって幅、深さ共に差異がみられるが、外溝は平均して幅10cm前後、深さ3cmを測り、連結していないところがある。内側の溝は外溝よりも幅広く25cm前後を測り、深さは外溝と同じである。

遺物は少なく、甕（102）が床面より出土し、石包丁（290）が壁に密着した状態で出土している。S T 10は中期IIIの段階である。

土塙

S K I

一辺が3.20mほどの方形の土塙である。北ではS D 2を切っているが、南は近代の溝に切られており、東壁も搅乱のために切られている。長軸方向をN-80°-Wに取る。深さは0.20～0.25mを測る。埋土はおおむねII層の黄淡茶褐色粘質土であるが、西壁際の一部にIII層の茶褐色粘質土が堆積している。底面はほぼ平坦であるが、西南隅に径44×36cm、深さ20cmのピットがある。

遺物は甕（103）、高杯（104、105）が出土している。（105）は底面より出土しており他は埋土からである。他に弥生中・後期の土器及び須恵器の細片が見られるが、須恵器は搅乱塙からの混入であろう。弥生後期の土塙と考えておかしくない。

S K 2

溝状の土塙で長軸方向をN-75°-Eに取る。長径1.42m、短径0.26m、深さ0.20mを測る。埋土は黄茶褐色単純一層である。底は平坦面をなすが、東端で斜めに上がっている。遺物は東端より壺底部（106）が1点出土した。

S K 3

S K 2の南西に位置し、長軸方向をN-65°-Eに取る溝状の土塙で、一部が調査区外に在る。長径2.54m、短径1.00m、深さ0.35mを測る。底は東西両端から2段に掘り込まれており、埋土は黒褐色粘質土と黄黒褐色粘質土からなる。遺物は埋土より壺（107～110）が出土しており、すべて中期のものである。他に170点の細片が出土しているが、その中で22点が薄手の土器である。石器は蛤刃石斧の刃部1点が出土している。中期II段階の土塙である。

S K 4

楕円形の土塙から溝状の細長い土塙が北に伸びる。2つの遺構の切り合いも考えられるが、精査の結果、平面形、断面ともに切り合いはつかめない。遺構の南半分は長軸方向をN-45°-Eに取り、長径0.88m、短径0.66m、深さ約0.30mを測る。北半部は長径2.40m、短径0.40m、深さ0.14mを測る。埋土は黒褐色粘質土に黄褐色の地山がブロックで入っている。遺物は中期IIの壺（111）が出土している他、少量の細片が見られる。

S K 5

S T 4とS T 5に近接する溝状の土塙であり、長軸方向をN-65°-Eに取る。長径2.96m、短径0.40m、深さ0.2mを測る。底面はほぼ平坦であり、壁は斜めに立ち上がり、断面形は逆台形をなす。埋土はI～III層からなり、遺物は各層に見られるが、II・III層は中期の土器のみで、I層は中・後期の土器が混在している。I層より高杯（112）、石器はII層より砥石（287）が出土している。S K 5の時期決定は難しいが、中期II～III段階の土塙と考えられる。またS K 2・3・5はほぼ同時期であり、長軸方向も大体同一である。

S K 6

S T 4の南に接している。楕円形の平面形を有し、長軸方向をN-40°-Wに取る。規模は長径1.00m、短径0.48m、深さは最も深いところで0.56mを測る。底は西から階段状に掘り込んでいる。埋土はI～III層が堆積している。遺物は全く出土していない。

S K 7

S T 8の南に位置し、大部分が調査区外に在る。また、北壁側は攪乱により崩されており、

南壁側はP2に切られている。溝状をなす土塙で、長軸方向をN-61°-Wに取る。残存規模は、長径2.40m、短径1.22m、深さ0.57mを測る。長軸断面はなめらかに斜めに下降し、階段状をなして底面に至る。埋土はI-VII層で、粘質土が堆積している。

遺物は壺(113、114、117)、甕(115)、高杯(116)の他に200余点の細片が出土している。(117)は無頸壺で、明らかに搬入品である。SK7は中期IIIに該当する。

SK8

SK7の南に位置し、一部が調査区外に在る。不定形の平面形を有し、長軸方向をN-21°-Wに取る。長径1.40m、短径1.20m、深さ0.52mを測る。またSK8をはさむように南北に小ピットがあるが、SK8に付属するものと考えられる。底面はほぼ平坦で、断面形は逆台形をなす。埋土は下からII層黄褐色粘質土とI層灰黃濃茶色粘質土が堆積している。

遺物は壺(118)の他50点余りの細片が出土している。中期IIの土塙とみられる。

SK9

ST9の南に位置する。橢円形の平面形を有し、長軸方向をN-59°-Eに取る。規模は長径0.68m、短径0.56m、深さ0.10mを測る。底面は平坦で断面形は逆台形をなすが、部分的に段状に掘り込んでいる。埋土は濃茶褐色粘質土で、遺物は細片を含めて約100点が出土している。遺物は壺(119~122)があり、中期IIIに該当する。

SK10

SK9の南に位置し、東は調査区外に在り、西隅は中・近世の溝に切られている。方形の平面形を有し、長軸方向はN-65°-Eを取る。規模は長径1.30m、短径1.20m、深さ0.34mを測る。底面形は平坦で、断面形は逆台形を呈す。埋土は濃茶褐色粘質土単純一層である。

遺物は壺(123、124)、鉢(125)が見られるが、その他埋土下層より中期の細片100点が出土している。SK10は中期IIに該当する。

SK11

細長い溝状の土塙で、南部を中・近世の溝によって切られている。長軸を南北に取り、長径3.26m、短径0.54m、深さ0.28mを測る。底面は平坦で、長軸断面形は台形状、短軸断面形は半球状を呈す。埋土は濃茶褐色粘質土であるが、一部に壁が崩れ、そのための地山土が混入する。また北端にはP20があるが、SK11との新旧関係は不明である。

遺物は壺(126)、高杯(127)の他約100点近い中期土器の細片が出土している。石器は環状石斧未製品(265)が底面より4cm浮いて出土している。

SK12

SK17の北に位置し、平行四辺形の平面形を有する。長軸方向はN-61°-Wに取り、規模は1辺約0.90mで深さ0.14mを測る。底は平坦面をなすが東側は段状に掘り込んでいる。また、底面北端に径10cm、深さ3cmの小ピットがある。埋土は黄茶色粘質土単純一層で、遺物は弥生中期土器細片が8点出土しているが、図示できるものはない。

SK13・14

SK13は一部が調査区外に在り、SK20を切っている。楕円形の平面形を有し、長軸方向をN-70°-Eに取っている。規模は長径0.72cm、短径0.32m、深さ0.35mを測り、長軸断面形は階段状をなし、短軸形断面は逆台形をなす。埋土はI～IV層の粘質土が堆積している。遺物は弥生土器片が11点出土しているが、図示できるものはない。

SK14は、残存長径0.76m、深さ6cmを測り、長軸方向をN-76°-Eに取る。底面は平坦で、埋土は茶褐色粘質土単純一層である。遺物は認められない。

SK15

細長い溝状の土塙で、長軸方向をN-27°-Wに取る。規模は長径3.00m、短径0.50m、深さ0.24mを測る。底は北から南に向かって緩傾斜しており、南の3分の1ほどが深く落ち込んでおり、断面形は逆台形を呈す。またP24はSK15を切っている。埋土は黒褐色粘質土単純一層である。

遺物は壺(128～130)、甕(131～135)、高杯(136、137)で、壺(130)は南端の底上から出土している。その他は遺構の中央部から集中して出土した。図示したもの以外に弥生土器細片が200点近く出土している。石器は打製石鏃(297)が出土している。SK15は中期IIIの土塙である。

SK16

調査区の南西隅に位置し、長方形の平面形を有する土塙であるが、南側にきわめて不定形の浅い土塙が存在する。SK16との切り合いが考えられるが、平面、断面ともに切り合いはつかめない。長軸方向をN-77°-Wに取り、残存長径1.76m、短径0.50m、深さ0.34mを測る。断面形はU字形をなす。埋土は黒褐色粘質土に地山の黄褐色シルト層がブロックで入った土層と、黒褐色粘質土からなるII層が堆積している。

遺物は甕底部(138)がII層より出土した他、弥生土器細片がI層より54点、II層より3点出土しているが、I・II層で出土土器の時期差は見られない。

SK16の時期は弥生中期か後期か決め難い。

SK17

調査区の南端に位置する。遺構の半分以上を近代の溝に切られており、平面形をつかむこと

はできない。残存長径2.80m、短径1.20m、深さ0.18mを測る。底は西に向って傾斜している。埋土は黒褐色粘質土単純一層で、出土遺物は見られない。

SK18・19

SK15に並行している。溝状のSK18と方形に近いSK19は切り合っていると考えられるが、平面形、断面形ともに精査したが先後関係はつかめない。

SK18は、長軸方向をN-23°-Wに取り、規模は長径2.20m、短径0.60m、深さ0.24mを測る。P25はSK18を切っている。底面にはかなり凹凸が見られる。埋土は黒褐色粘質土である。遺物は壺(140)、甕(139、141)が出土している。これらの弥生土器は中期IIIである。

SK19は平行四辺形の平面形を有し、長軸方向をN-15°-Eに取る。規模は長径1.28m、短径0.96m、深さ0.12mを測る。またP23に切られている。底面及び北壁側に小ピットが4個存在するが、SK19との関係は不明である。埋土は黒褐色粘質土で遺物は出土していない。

溝

SD1

ST4の南3mに位置し、調査区を東西に横断する幅の広い溝である。長さ6.60m、幅4.70m、深さ0.50~0.70mを測る。中央部は大きな攪乱を受けており、一部底面も破壊されている。底面は一部が凸状をなしている。埋土は南・北壁側にIV・VI層の粘質土が堆積しており、その内側にシルトと砂礫が交互に堆積している。IV・VI層はSD1の第1次堆積であり、I~III・V層は、第1次堆積を抉るような形で流れ込んだ第二次堆積土層であると考えられる。

遺物は、I-a・I-b・II・V-b層からコンテナケース10箱分の弥生土器が出土したが、全出土量の80%がII層から出土している。また底面からの出土は極めて少ない。(142~146、148、149、151~155)は中期II~IIIの壺、(156~163)は中期II~IIIの甕、(147、150、164~183)は後期Iの壺、(184~194、196)は後期Iの甕、(197~202、206)は後期Iの高杯、(193、195)は後期IIの甕、(203~205)は後期の鉢と考えられる。この他、土錐(207)が出土している。以上のうち、(157、197、198、200)は明らかに搬入品である。石器は叩石(269)が出土している。SD1は出土遺物から層位的に先後関係をつかむことはできないが、中期III及び後期Iの遺物が圧倒的に多い。

SD2

SD2は、SD1の南に位置し、調査区を東西に横切る溝である。長さ7.00m、幅0.90~1.90m、深さ0.20~0.35mを測る。南側をSK1に切られ、東は旧道路下であるためにかなり攪乱を受けている。耕作土を除くと検出面であり、夥しい量の土器がその上半部を削りとばされたような形で見られるところから全体的に相当削平されていることがわかる。埋土はI・II層の粘質土

が堆積しており、遺物は I～II層にまたがるものもあるが、大半が II層に集中しており、完形に近い土器が敷きつめられたような状態で多量に出土している。これらの土器は底面へばりつきの状態ではなく、底より 3cm 内外浮いている。これらの土器は、SD 2 が機能している時期に多量に、しかも短時間内に廃棄されたものと考えられる。

遺物は壺(208～238、241)、高杯(239)、鉢(240)で、すべて中期 II の段階のものである。(225、226) は比較的初現期の凹線文を有する土器であり、出土遺物中に内面ヘラ削りの見られるものはない。今一つの注目すべきこととして、甕の出土が皆無に近い状態である。石器として石錐(299) の他、砥石、叩石が出土しており、石器加工具に使う軽石も出土している。

以上のことから SD 2 は中期 II の段階に機能し、同時期のうちに埋没したと考えられる。

SD 3

SD 3 は、ST 5・6 の南に位置し、調査区をほぼ東西に走る溝で、西端で ST 7 に切られている。規模は長さ 6.00m、幅 0.30m、深さ 0.18m を測り、断面形は箱形を呈す。埋土は濃茶褐色粘質土単純一層である。SD 4 と切り合っているが、クロス部分が近代の溝によって切られている。出土遺物は見られない。

SD 4

調査区を北西方向から南東方向に走る溝で、ST 9 及び ST 5 に切られている。残存長 3.00m、幅 0.40m、深さ 0.18～0.30m を測り、底面は南に緩傾斜している。断面形は概ね箱形を呈すが、部分的に段状に掘り込んでいる。埋土は濃茶褐色粘質土単純一層で、埋土中より弥生中期土器細片が 10 点出土している。

SD 5

北端を近代の溝に切られているが、長さ 3.30m、幅 0.50m、深さ 0.20m 内外を測り、北に向って下降している。長軸方向は N-48° E を取る。北端底に小ピットが 2 つ存在する。埋土は濃茶褐色粘質土単純一層で、遺物は見られない。

SD 6

SD 5 の南に位置し、長軸方向は N-25° W を取り、北端は極端に細く浅くなっている。長さ 5.00m、幅 0.80～1.00m、深さは最も深いところで 0.32m を測る。底は中央部よりやや北寄りのところで凸状をなし、底面を二分している。断面形は逆台形をなす。埋土は概ね I 層の黒褐色粘質土であるが、南部では I 層の下に地山の黄褐色シルトがブロックで入る II 層が薄く堆積している。南端底面には小ピットが 1 つ存在する。

遺物は壺(242～244) の他 110 点の細片が出土しているが、すべて中期のもので、内面ヘラ削り

凹線文を有するものは全くない。また薄手の土器は2点入っている。石器は石包丁(293)が出土している。SD 6は中期IIの時期である。

SD 7

SD 7は中央部を近代の溝に切られ、南側を中・近世の溝及びST 10に切られている。長さ5.00m、幅0.70m~1.00m、深さ0.30~0.50mを測り、底面は北に行くほど深くなり、南端と北端とでは20cmの高低差がある。幅も北に行くほど広くなっている。断面形は南半分は逆台形をなすが、北半分は北壁が比較的緩傾斜であるのに対し、南壁は急傾斜をなす。埋土は南部はI・III層で、北部はI~IV層が堆積している。

遺物は多量の弥生土器及び石器が出土しているが、すべてII層に集中しており、I・III・IV層には全く見られない。したがって、III層が堆積した段階で短い期間に放棄されたものと考えられる。壺(245~250)、甕(251~255)、高杯(256)、小型土器(257、258)である。これらはすべて中期IIIのものである。石器は石包丁(294)が出土している。

SD 7は中期IIIの時期のものである。

ピット

P 1

ST 5の北側で検出した。径26cm、深さ10cmを測り、底に径8cmを測る柱根跡が残る。埋土は茶褐色粘質土で弥生土器細片が1点出土している。

P 2

SK 7を南壁側で切っている。径24cm、深さ14cmを測り、埋土は黒褐色粘質土である。甕(259)が出土している。弥生後期Iのものである。

P 3

SK 7の東端に近接し、楕円形の平面形を有する。長径44cm、短径36cm、深さ16cmを測る。埋土は黄茶褐色粘質土で、弥生土器細片1点が出土している。

P 4

径35cm、深さ18cmを測り、埋土は黄土褐色粘質土で、弥生土器細片3点が出土している。

P 5

楕円形の平面形を有し、長径42cm、短径36cm、深さ26cmを測る。埋土は濃茶褐色粘質土で、遺物は甕(260)が出土している。弥生中期IIIのピットである。

P 6

楕円形の平面形を有し、長径28cm、短径22cm、深さ30cmを測り、底面に径14cmの柱根跡を認める。掘り方より弥生後期の土器細片5点、柱根跡より弥生土器細片5点が出土した。

P 7

隅丸方形の平面形を有する。長径44cm、短径30cm、深さ26cmを測る。埋土は黒褐色粘質土で、弥生中期の土器細片が1点出土している。

P 8

楕円形の平面形を有し、長径25cm、短径22cm、深さ18cmを測る。埋土は濃茶褐色粘質土で、弥生中期の土器細片2点が出土している。

P 9・10

P 9がP10を切っている。P 9は楕円形の平面形を有し、長径70cm、短径42cm、深さ34cmを測る。埋土は茶褐色粘質土で、弥生土器細片3点が出土している。

P10も楕円形を呈すると考えられ、長径30cm、短径24cm、深さ30cmを測る。埋土は黒褐色粘質土で、弥生土器細片1点が出土している。

P 13

楕円形の平面形を有し、長径44cm、短径34cm、深さ22cmを測る。埋土は濃茶褐色粘質土で、弥生土器細片1点が出土している。

P 14

楕円形の平面形を有し、北端に瘤状の小ピットがつく。長径60cm、短径54cm、深さ26cmを測る。埋土は黒褐色粘質土で、弥生土器細片13点が出土している。

P 18

S K18を切っている。径32cm、深さ36cmを測り、埋土は黒褐色粘質土で、弥生土器細片6点が出土している。

P 19

S K15を切っている。径23cm、深さ30cmを測る。埋土は黒褐色粘質土で、弥生土器細片1点が出土している。

P 20

S K 18を切っている。楕円形の平面形を有し、長径32cm、短径24cm、深さ12cmを測る。弥生土器細片3点が出土している。

P 22

径28cm、深さ15cmを測り、埋土は黄茶色粘質土である。弥生土器細片7点が出土している。

小結

以上検出遺構について詳細に述べた。検出遺構を時期的に見れば、住居址は中期IIが1棟(S T 8)、中期IIIが6棟(S T 4~7・9・10)、後期Iが2棟(S T 2・3)、後期IIIが1棟(S T 1)である。土塙は中期IIが4基(S K 3・4・8・10)、中期IIIが4基(S K 7・9・15・18)、後期Iが1基(S K 1)、時期不明のものが6基(S K 2・6・11・13・16・17)である。溝については、中期IIが2条(S D 2・6)、中期IIIが1条(S D 7)、中期に属するものが1条(S D 4)、後期に属するものが1条(S D 1)、時期不明のものが2条(S D 3・5)である。Loc.45は時期不明の遺構を含むが、住居址、土塙、溝ともに中期IIの段階に始まり、後期に終わる集落遺跡として把握することができる。以下各遺構別に若干の分析を試みたい。

(Ⅰ) 壇穴住居址

量的な制限はあるが、時期別に特徴を見ると先ず第一に、壁溝の有無を挙げることができる。すなわち中期IIのS T 8には見られないが、中期IIIになるとS T 6・7以外の4棟には壁溝が存在している。しかしながらS T 9・10のように全体にめぐっているものと、S T 4・5のように部分的に欠如するものとがある。後期のS T 2とS T 3は全周しているものと考えられるが、後期後半(S T 1)になってベッド状遺構を有するようになると壁溝は再び見られなくなる。前期においては、壁溝の存在するものは1例もないところから、当地方においては、中期IIIの頃にその初現を見ることができよう。また壁溝内のピットについては、確認することができなかった。

次に注目すべきこととして、S T 4の屋内貯蔵穴を挙げなければならない。北部九州地方においては、中期初頭以降の壇穴住居内に小型の屋内貯蔵穴を持つ例が知られているが、当地方においては、S T 4の例が初現である。もっとも柱穴大の規模の貯蔵穴が前期以降存在しているのは周知のとおりである。屋内貯蔵穴については、後述の土塙と統一的に把握しなければならない問題である。

中央ピットについては、確認できた6例中S T 5以外はすべて多量の炭化物が入っているが、中央ピットの壁、底、周縁部には、火を受けて変色をしているような例は全くない。これとは別に、床面の一部が火を受けて紅く変色しているのが、S T 2・3・5に見られることは一考

を要するものであろう。

また、これらの住居址の廃絶の在り方であるが、S T 4とS T 7については、火災による焼失が考えられる。

(2) 土塙

土塙は、その形態から2つに分けることができる。すなわち平面形が方形に近いものと溝状をなすものとである。前者はSK 1・8~10・12~14・17・19が該当し、後者は、SK 2~4・5~7・11・15・16が該当する。両者に見られる形態の差違は、その性格の差違に帰因するものである。

前者は、大型であるSK 1以外に、ほとんど遺物が見られず、これらの遺構の性格を決めるることは難しい。しかし、SK 8・10・12・19は、方形の平面形を呈しているところから、前期以降の貯蔵用小豎穴を想定することは可能であろう。

前期の貯蔵用小豎穴群に対して、中・後期の貯蔵用小豎穴は散在的であり、住居址の数に比較してもその量は少ない。中期以降普遍的に見られるこのような現象について、その帰因するところは、一般的に高床式倉庫の出現、普及によると考えられている。果してそうであろうか。当然この時期の貯蔵形態としては、高床式倉庫の存在が考えられるが、高床式倉庫が前期以降存在することが明らかになっている以上、貯蔵用小豎穴に見られる上述のごとき変化の原因を高床式倉庫の出現に求める積極的な根拠はないものと考えられる。中期以降の貯蔵用小豎穴の量的僅少さと散在性、及び先述の屋内貯蔵穴の出現という諸現象は、共同体における経済的、社会的変化として統一的に把握すべきものである。貯蔵用小豎穴を生産手段の脈管系統としてとらえる以上、共同体と住居址、及び貯蔵穴との間に現われた変化は、共同体における生産関係の変化として把握することが自然であろう。

次に後者について見ると、先述のように短径に対して、長径が非常に長いことを特徴として挙げることができる。したがって溝として扱ったSD 5~7は、SK 7やSK 15と同様の性格を有するものと考えられるので、ここで一緒に述べる。よって対象となる遺構はSK 2~7・11・15・16、及びSD 5~7である。これらは長軸の方向によってⒶ-SK 11・15・18、SD 6・7、Ⓑ-SK 2・3・5、Ⓒ-SK 7、Ⓓ-SK 16、SD 5に分類することができる。Ⓐは、SD 7、SK 15・18が中期III、SD 6が中期II、SK 11は中期のものであり中期IIIに属する可能性もある。またⒷのSK 2・3・5は、中期IIとして把握できる可能性もある。長軸方向と時期とには、矛盾もあるが、何らかの規則性を有していることは、首肯することができる。この規則性を出自の違いに求めることもできよう。

遺構の規模について見れば、長径の長さが1.42~5.00mと大小さまざまであるが、遺物の出土状況を見れば、総じて大きな遺構からは多くの遺物が出土しており、小さな遺構からは、出土量が少ないか、皆無である。またSD 7からは、供獻用と考えられる小型土器(257、258)

も出土している。以上のように、筆者が指摘した後者の土塙は、いくつかの群をなし、併せて出自による方向性も示し、さらに供獻用土器とも取れる土器群の出土から、これらを土塙墓として把握したい。

(3) 土器

当地方の弥生中期土器は、遺構に伴った一括資料に乏しかったが、Loc.45のS D 2によって、中期II段階の一括資料を得ることができた。S D 2出土土器は、甕を欠くが、壺、高杯、鉢など各種が揃っているので、今後の土器編年の1つの指標となると考えられる。先ず壺に見られる特徴を挙げると、①頸部が長いもの(211、212、215、218、222、223)が多いこと。②頸部や上胴部に断面三角形の小突帯がつけられていること(薄手の土器に見られる微隆起帯と区別するために小突帯とした)。③櫛状原体による直線文、波状文もかなり見られる(218、220、221、223)が、櫛描簾状文は見られない。④口縁部内面及び胴部外面に櫛描扇形文が少数ではあるが見られる。⑤この時期に出現する手法として凹線文が挙げられる。この時期の凹線文は、これ以降のものと異なり、凹線に挟まれた部分が、突帯状をなしている(225、226、228)。⑥中期土器の伝統的手法である粘土帶貼付口縁は盛行するが、口縁部内面の刻目隆帯は中期III以降姿を消す。

甕は、その出土例が壺に比較して少ない。これは、中期I以降に見られる1つの現象である。高杯においても同様で、この僅少さは前期以降見られる現象である。そして中期III段階以降、甕、高杯が急増する現象が見られることと好対称をなす。次に叩き技法について見なければならない。中期III段階のS T 9出土土器(96)に叩目が見られる。従来の調査では、南四国における叩き技法の出現は、後期後半とされていたが、その点で興味ある土器である。

最後の搬入品の問題を挙げなければならない。S T 1出土土器(13)、S K 7出土土器(117) S D 1出土土器(157、182、197、198、200、201、205)がそれである。時期的に見れば(157)が中期IIIに、(117、197、198)は後期Iに、(200、201、205)は、後期II以降に属するこのうち(117、157、197、198、205)は全く同一の茶褐色の胎土で、中に角閃石を含んでいる。(197)のごときは山陽地方の上東I式土器そのものであり、これらの搬出地は、中部瀬戸内のどこかに求めることができよう。中期III段階から後期にかけて見られるこのような現象と、先述した甕、高杯の急増現象とは、大きな文化変容の諸側面をなしているものと考えられる。今後追求していくべき大きな課題である。

(4) 鏡片(307)

鏡片は、後期IIIの住居址であるS T 1から出土した。鏡片の縁辺部を上に鈕側を下にして、床面に突き刺さっていたような状態で出土している。出土位置は床面のほぼ中央部である。

鏡片は、方格規矩四神鏡である。添緑色の色調を呈し、鏡面は光沢を保っている。鏡面、背面、断面ともに著しい磨滅、研磨が見られるが、穿孔はされていない。復原直径は約16.5cm、厚さは内区で1.5mm、外区で3mmを測る。外区の端部は平縁をなし、2重の外向陽鋸歯文、その

間に複線波文、内側に櫛齒文と続き、内区との境に銘帯がある。銘文は「竟真大」の文字を読みとることができ、おそらく「尚方作竟真大」と続くものであろう。内区はT・L・VのV字形と爪形文1個と鳥像かと思われる一部を確認することができる。

第18表 積穴住居址計測表

挿図番号	遺構番号	平面形	規模 (m)	主軸方向	柱穴 (個)	面積 (m ²)	施設	備考
第 99 図	S T 1	円形	6.2	——	4	31		
"	S T 2	"	9.4	——	4	(69)		
第 101 図	S T 3	"	——	——	——	——		
"	S T 4	"	5.6	——	——	24		
第 100 図	S T 5	"	7.0	——	2	(38)		
"	S T 6	"	5.6	——	2	——		
第 102 図	S T 7	"	7.0~8.0	——	——	——		
"	S T 8	"	6.0	——	3	(28)		
第 103 図	S T 9	"	7.8	——	3	(47)		
"	S T 10	"	7.0	——	1	38		

第19表 土塹計測表

挿図番号	遺構番号	平面形	規 模 (m)			長軸方向	断面形	備考
			長径	短径	深さ			
第 104 図	S K 1	方形	3.20	3.20	0.25	N-80°-W	逆台形	
"	S K 2	溝状	1.42	0.26	0.20	N-75°-E	箱形	
"	S K 3	"	2.54	1.00	0.35	N-65°-E	階段状	
"	S K 4	楕円形	0.88	0.66	0.30	N-45°-E	逆台形	
第 105 図	S K 5	溝状	2.96	0.40	0.20	N-65°-E	"	
"	S K 6	楕円形	1.00	0.48	0.56	N-40°-W	階段状	
"	S K 7	溝状	(2.40)	(1.22)	0.57	N-61°-W	"	
"	S K 8	不定形	1.40	1.20	0.52	N-21°-W	逆台形	
第 106 図	S K 9	楕円形	0.68	0.56	0.10	N-59°-E	"	
"	S K 10	方形	1.30	1.20	0.34	N-65°-E	"	
"	S K 11	溝状	3.26	0.54	0.28	N	"	
"	S K 12	平行四辺形	0.90	0.90	0.14	N-61°-W	段状	
"	S K 13	楕円形	0.72	0.32	0.35	N-70°-E	逆台形	
"	S K 14	不定形	(0.76)	——	0.06	N-76°-E	"	
"	S K 15	溝状	3.00	0.50	0.24	N-27°-W	"	

挿図番号	遺構番号	平面形	規 模 (m)			長軸方向	断面形	備 考
			長 径	短 径	深 さ			
第 107 図	S K 16	長方形	(1.76)	0.50	0.34	N - 77° - W	U字形	
"	S K 17	不定形	(2.80)	1.20	0.18	—	皿 形	
"	S K 18	溝 状	2.20	0.60	0.24	N - 23° - W	逆台形	
"	S K 19	平行四辺形	1.28	0.96	0.12	N - 15° - W	"	

第20表 遺構出土土器観察表

挿図番号	遺構番号	器 種	法量 (cm) 口径 器高 胴径 底径	形 態・文 様	手 法	備 考
1	S T 1	壺	9.5 (5.5) — —	長頸壺である。直立する頸部から口縁部はなめらかに外反する。口唇部は丸くおさめる。		
2	"	"	13.0 (11.4) — —	長頸壺である。直立気味の長い頸部からなめらかに外反する。端部は上下につまみ出し、口唇部は凹状をなす。	口縁部内面は横方向のハケ調整。 口唇部及び口縁部外面は横方向のナデ調整。頸部外面は縦方向のハケ調整。	
3	"	"	13.8 (7.0) — —	長頸壺である。口縁部は頸部からなめらかに外反する。口唇部は丸味をおびる。	頸部外面は部分的に縦方向のハケ調整を認める。	
4	"	甌	18.4 (3.3) — —	口縁部は丸味をおびて、「く」の字状に外反する。端部は上方に拡張し、口唇部は凹状をなす。	口唇部外面は横方向のナデ調整。	外面は全面がススけている。
5	"	"	15.0 (6.0) — —	口縁部は「く」の字状に外反。口唇部は上下に肥厚し、2条の凹線文を配す。厚いつくりである。	上胴部内面以下横方向のヘラ削り (右→左)。口縁部内外面横方向のナデ調整。胴部外面縦方向のハケ調整。	"
6	"	"	— (2.5) — 4.6	小さい底部である。球形に近い大きな胴部がつくものと考えられる。		"
7	"	高 杯	21.5 (3.0) — —	口縁部は稜をなして直線的に外反し、端部は下方にわずかに肥厚する。	口縁端部は横方向に強くナデる。	
8	"	"	26.0 (2.8) — —	口縁部は杯部から段をなして強く外反する。 口唇部は面をなす。	口縁端部をつまみ上げて横方向にナデしている。	外面はススけている。
9	"	"	— (4.5) — 13.5	「ハ」の字をなす脚部で、端部は上下に拡張し、2条の凹線文を配す。裾部外面に2条のヘラ描沈線を配す。	脚端部内外面に横方向のナデ調整。 内面はヘラ削り。	
10	"	"	— (8.5) — —	「ハ」の字をなす脚部で、杯底部は円盤充填であると思われる。	外面は縦方向、内面は横方向のハケ調整を施す。	
11	"	"	— (6.0) — 21.4	「ハ」の字をなす脚部で、端部は凹状をなし、上端をつまみ上げている。円孔あり。	内外面ナデ調整。	

插図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
12	S T 1	高杯	— — — (6.2) — 9.0	脚付鉢といつた方が良いかも知れない。脚部はなだらかなカーブを描いて外方に伸びる。端部は丸くおさめる。			
13	"	鉢	14.8 (3.0) — —	内湾気味に立ち上がり、口縁部は近く外反する。	口縁部外面は横方向の強いナデ調整。		搬入品である。
14	"	"	17.0 (7.0) — —	わずかに内湾気味に立ち上がる胴部から、口縁部は直線的に外反。口唇部は面をなす。	外面は綫方向のハケ調整。内面は横方向のハケ調整。口縁端部は、つまみ出して横方向にナデする。		胴部外面はススケている。
15	S T 2	壺	16.0 (5.0) — —	なめらかに外反する口縁部で、口唇部は面をなす。			
16	"	"	17.5 (9.0) — —	球形に近い胴部から、なめらかに外反する口頭部を有す。上胴部に1条、頸部に2条のヘラ描沈線を配す。	全体に厚いつくりである。外面は、口頭部が綫方向、胴部が横方向のハケ調整。口縁部内面は不定方向のハケ調整。		
17	"	"	28.3 1.0 — —	水平に大きく聞く口縁部で、わずかに肥厚する端部には2条の凹線文を配す。	外面にハケ調整あり。		
18	"	甕	23.0 (2.5) — —	直線的に外反する口縁部である。端部はわずかに上下に肥厚し、1条の沈線を配す。			
19	"	"	15.3 (7.5) — —	球形に近い胴部から、口縁部は「く」の字に外反する。端部は上下に肥厚させ、口唇部に2条の凹線文を配す。	胴部外面に横位の叩きを施すが、ほとんどナデ消す。内面は横方向(右→左)のヘラ削り。		
20	"	高杯	21.1 (3.0) — —	口縁部は一旦直線的に立ち上がり、強く外反する。口唇部は面をなす。厚いつくりである。	内外面ナデ調整。		
21	"	甕	— (10.0) — 6.0	下胴部は直線的に立ち上がる。	底部側面は横方向のナデ調整。内面に指頭圧痕あり。		
22	S T 3	壺	15.3 (13.5) — —	長頸壺である。わずかに外反気味に立ち上がる頸部から、口縁部はなめらかに外反。口唇部は面をなす。	頸部外面は綫方向、内面は右下りのハケ調整。口縁部内面は、横方向のナデ調整。胴部は厚いつくりで内面に指頭圧痕あり。		
23	S T 4	"	22.5 (2.5) — —	なめらかに外反する口縁部。口唇部は凹状をなし、下端に刻目を配す。外面に1条の微隆起帯を貼付する。	内外面共にナデ調整。		
24	"	"	— (9.0) 15.0 — —	あまり肩の張らない胴部にわずかに外反する頸部がつく。	胴部内面は下→上のヘラ削りあり。		胴部外面はススケている。
25	"	"	— (5.4) — 12.0	安定した厚手の底部。			
26	"	鉢	19.0 (6.0) 16.8 — —	口縁部はなめらかに外反し、端部はわずかに下垂気味で、口唇部は面をなす。	口唇部は横方向の強いナデ調整。		

挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm) 口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
27	S T 4	壺	22.0 (1.5) —	口縁部は内湾気味に外反する。口唇部は凹状をなす。	内外面は横方向のナデ調整。	
28	"	"	16.7 (11.6) 22.0 —	口縁部は、丸味をもって「く」の字に外反する。端部は上方に拡張され、口唇部に2条の凹線文を配す。	口縁部内外面は横方向のナデ調整。 内面はヘラ削り(下→上及び右→左)	内外面共にススけている。
29	"	"	15.2 25.1 17.7 5.2 —	胴部中位に最大径を有す。口縁部は「く」の字に外反する。端部を厚くつくり、口唇部に2条の凹線文を配す。上胴部の1ヶ所に5個ずつ2列に刺突文を配す。	内面下半に下→上のヘラ削りを施す。	外面は全面ススけている。
30	S T 5	壺	— (2.5) —	口唇部を上下に拡張し、3条の凹線文を配す。		
31	"	"	14.3 (3.0) —	直線的に外方に立ち上がる頸部から、口縁部は強く外反。 口唇部は上方に拡張し、2条の凹線文を配す。		
32	"	"	12.5 (10.0) 11.3 —	直線的に外反する口縁部で、外面に1.1cm幅の粘土帯を貼付。	口縁部外面は指頭による圧痕が顕著。	外面は全面ススけている。
33	"	"	— (3.0) 6.0		内外面とも磨耗のため調整不明。	
34	"	壺	24.7 (3.0) —	口縁部は強く外反し、端部は上方に拡張し、3条の凹線文を配す。 屈曲部内面は棱をなす。	内外面は横方向のナデ調整。 端部の拡張は粘土帯の貼付による。	
35	S T 6	壺	15.4 (5.5) —	なめらかに外反する口頸部で口縁部外面には、粘土帯を貼付する。 口唇部は面をなす。	貼付部外面には、指頭圧痕あり。 頸部外面は縦方向、内面は横方向のハケ調整。	
36	"	"	17.5 (7.0) —	なめらかに外反する口頸部で口縁部外面には、粘土帯を貼付する。 口唇部に円形浮文を貼付する。	外面にわずかに縦方向のハケ調整。	
37	"	"	16.4 (4.4) —	なめらかに外反する口頸部で、口縁部外面に1.5cm幅の粘土帯を貼付する。	口縁部外面に指頭圧痕あり。	
38	"	"	16.0 (7.0) —	肩の張らない胴部から、なめらかに外反する口頸部で、口縁部外面に幅1.4cmの粘土帯を貼付する。	口縁部外面に、ヒダ状の指頭圧痕あり。 外面は縦方向、口頸部内面は横方向のハケ調整あり。	
39	"	"	18.0 (2.5) —	口縁部は強く外反し、外面に2.5cm幅の粘土帯を貼付する。口唇部には3条の凹線文を配し、2個1対の円形浮文を貼付し、内面にも2個1対の竹管文を刺突する。		
40	"	"	— (11.0) —	口縁部をつけていない未完成品である。大きく張った胴部から頸部は垂直に立ち上がる。	内面に指頭圧痕あり。擬口縁直下の細い突帶は上に積む粘土帯を受けるものと思われる。	何らかの事情のもとに未完成のまま焼いたものと思われる。
41	"	"	18.7 (2.5) —	口縁部は大きく外反し、口唇部は面をなす。	内面は横方向のハケ調整。	

挿図番号	遺構番号	器種	口径 法量 (cm) 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
42	S T 6	壺	32.9 (5.0) — —	口縁部はなめらかに外反する。口縁部外面には幅2cmの粘土帯を貼付し、口唇部は凹状をなす。	口唇部及び口縁部内外面は横方向のナデ調整。	
43	"	"	15.2 (6.0) — —	口縁部は直線的に外反する。口唇部には3条の凹線文を配す。	口縁部内外面は横方向の強いナデ調整。 頸部外面は縦方向のハケ調整。	
44	"	"	18.5 (2.0) — —	口縁部は強く外反する。外面に2.5cm幅の粘土帯を貼付し、口唇部に3条の凹線文を配す。内面には、竹管による刺突文を配す。		39と同一個体の可能性あり。
45	"	"	25.0 1.7 — —	下方に強く肥厚した口縁端部で、下端に深い刻目を施す。	内外面及び口唇部は横方向のナデ調整。	
46	"	"	— (6.0) — 9.0	安定した厚手の底部。		
47	"	"	— (8.5) — 8.2	安定した底部で、わずかに上げ底状を呈す。	外面はヘラ削り(下→上)の上をナデしている。	
48	"	"	— (8.0) — 13.0	厚手の底部で、中央部は上げ底になる。	下胸部内面は、指頭で右下から左上にかき上げている。	
49	"	鉢	20.5 13.8 18.5 8.5	一見前期の鉢を思わせる。半球形の体部から、口縁部は2段に外反する。口唇部は丸くおさめる。	口縁部内面は、横方向のハケ調整。	
50	"	壺	24.8 (12.1) — 35.0	口縁部は「く」の字に外反し、端部は上下に拡張させ、口唇部に3条の凹線文を配す。	内面の胴部中位以下はヘラ削り。(右→左上)	搬入品。
51	"	"	15.5 (11.0) — 19.2	丸く肩の張った上胸部から、口縁部はなめらかに外反する。端部は上下に肥厚し、2条の凹線文を配す。胸部外面にヘラ状工具によって、左上りの列点文を配す。	口縁部外面は横方向のナデ調整。 胸部外面は横方向のハケ調整。内面胸部中位以下横方向(右→左)のヘラ削り。	
52	"	"	16.0 (19.0) — 22.8	丸く肩の張った胸部から、口縁部は丸く外反する。端部は上方に拡張され、口唇部に2条の凹線文を配す。	外面は縦方向のハケ調整。内面は、横方向(右→左)のヘラ削り。上胸部及び口縁部内外面は横方向のナデ調整。	外面は全面スッケている。
53	"	"	— (6.0) — 5.5	高台状に強く張り出した底部である。	底部外面及び胸部内面に指頭圧痕あり。 底部凹部には横方向のナデ調整。	
54	"	"	— (17.0) — 9.3	台形状の底部をなし、わずかに上げ底である。	内面はヘラ削り(下→上)の後ナデしている。	下胸部外面がスッケている。
55	"	"	41.0 (8.0) — 37.4	口縁部は如意形に外反し、口唇部は丸くおさめる。	外面は縦方向、内面は横方向のハケ調整。	
56	S T 7	壺	18.5 (1.9) — —	強く外反する口縁部で、口唇部は凹状をなす。	口唇部及び口縁部内外面は横方向のナデ調整。	

挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm) 口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
57	S T 7	壺	7.7 (4.0) — —	直線的に外方に立ち上がる口縁部で、端部は丸くおさめる。		
58	"	高杯	25.0 (3.5) — —	口縁部は垂直に立ち上がり、口唇部は面をなす。外面に4条の凹線文を配す。	外面ナデ調整。	
59	"	"	28.2 (5.2) — —	口縁部は垂直に立ち上がり、口唇部は面をなす。外面は2条の凹線文を配す。	杯部外面縦方向のヘラ磨き。	
60	S T 8	壺	— (1.8) — —	口唇部は丸くおさめ、下端に刻目を配し、その下に微隆起帯を貼付する。		薄手式土器。
61	"	"	— (1.8) — —	口縁部外面に幅1cmの粘土帯を貼付する。口唇部は面をなし、下端に刻目を配す。その下には櫛描直線文を配す。		"
62	"	"	13.4 (3.5) — —	ラッパ状に外反する口頸部で、口縁部外面に幅1.5cmの粘土帯を貼付する。口唇部は凹状をなす。	口唇部及び口縁部外面は横方向のナデ調整。 外面は縦方向のハケ調整。	
63	"	"	16.7 (5.0) — —	口縁部はなめらかに外反し、外面に幅2.8cmの粘土帯を貼付し、指頭でヒダ状の圧痕を施す。	口縁部内面は横方向のハケ調整。 頸部外面は縦方向のハケ調整。	
64	"	"	15.0 (2.8) — —	口縁部は近く外反し、端部は厚くつくられる。	口縁部内外面横方向のナデ調整。	
65	"	"	21.8 (3.5) — —	口縁部はなめらかに外反し、口唇部は丸くおさめる。	口縁部内面横方向、外面は縦方向のハケ調整を施す。	
66	"	"	16.5 (11.5) — —	肩の張らない胴部に、直立気味の頸部がつき、口縁部はなめらかに外反する。口唇部は面をなす。		
67	"	"	— (5.5) 21.2 —	胴部外面に櫛描直線文と櫛描波状文を認める。		
68	"	"	18.4 (3.5) — —	直線的に外反する口縁部で、端部外面は上下に肥厚させ、3条の凹線文を配す。	口縁部内外面は横方向の強いナデ調整。	
69	"	甕	16.0 (2.0) — —	口縁部は、丸味をおびて強く外反し、口唇部は凹状をなす。	口唇部は横方向のナデ調整。	外面はススけている。
70	"	"	— (3.8) 4.2 —		内面にヘラ状工具による圧痕あり。	
71	"	"	15.3 (6.0) 15.4 —	口縁部は直線的に外反し、口唇部は丸くおさめる。	内面は頸部直下より右→左のヘラ削り。	

挿図番号	遺構番号	器種	口径 法量 (cm) 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
72	S T 8	壺	12.0 (4.5) — —	卵型の胴部から、口縁部はゆるく外反する。	口縁部内外面に指頭圧痕がつき、口唇部は丸くおさめる。	外面はススけている。
73	S T 9	壺	— (7.0) — —	胴部上端に列点文あり。	外面は縦方向のハケ調整。内面に指頭圧痕あり。	
74	"	"	20.5 (2.5) — —	大きく外反する口縁部で、端部は上方に拡張され、口唇部に3条の凹線文を配す。	口縁部内外面横方向のナデ調整。	
75	"	"	19.0 (3.5) — —	口縁部は大きく外反し、外面に幅2.3cmの粘土帯を貼付し、指頭によるヒダ状の圧痕を施す。口唇部下端に刻目を配す。		
76	"	"	8.0 (9.5) — —	口縁部は直線的に立ち上がる長頸壺である。 口唇部は丸くおさめる。		
77	"	"	17.0 (29.0) 27.8 —	長胴の体部で、口縁部は直線的に外反する。端部は上下に肥厚し、口唇部には2条の凹線文を配す。	口縁部内外面及び頸部外面は横方向の強いナデ調整。胴部外面はナデ調整。	胴部外面の一部にススが付着する。
78	"	"	27.0 (7.5) — —	なめらかに外反する口縁部で、外面に幅2.5cm、厚さ1.2cmの粘土帯を貼付し、端部は大きく下垂する。口唇部には3条の太い凹線文を配す。内面はハケ状原体による列点文を配し、その内側に衝撃波状文を配す。	頸部外面は縦方向のハケ調整。	
79	"	"	9.8 (3.7) — —	口縁部は大きく外反し、口唇部は丸くおさめる。	外面は縦方向、内面は横方向のハケ調整。	
80	"	"	17.4 (4.0) — —	口縁部はなめらかに外反し、口唇部は面をなす。外面に幅1.4cmの粘土帯を貼付する。	口縁部内面は横方向のナデ調整。 頸部外面は縦方向のハケ調整。	
81	"	"	29.3 (3.4) — —	口縁部は直線的に外反し、端部は上下に肥厚させ2条の凹線文を配す。	内面は横方向のハケ調整を施す。	
82	"	"	14.2 (6.5) — —	口縁部は頸部から大きく外反する。 口唇部は面をなす。	外面は縦方向のハケ調整。	
83	"	"	— (7.5) — 11.5	底部から直線的に立ち上がる胴部である。	内面は指頭でナデ上げている。	
84	"	"	13.0 (5.0) — —	口縁部はなめらかに外反する。端部は厚くつくられ、面をなす。	口縁部内面は横方向のハケ調整。 外面はヒダ状の圧痕がつく。	
85	"	"	— (5.0) — 10.0	内湾気味に立ち上がる。		
86	"	"	— (7.5) — 5.3	安定した上げ底気味の底部で、内湾気味に立ち上がる。		外面はススけている。

挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
87	S T 9	壺	— (4.5) — 8.8	安定した上げ底気味の底部で、内湾気味に立ち上がる。	底部内外面は横方向のナデ調整。胴部外面に縦方向のハケ調整あり。		
88	"	甕	15.5 (3.5) — —	口縁部は「く」の字に外反する。端部は上方に拡張され、口唇部には3条の凹線文を配す。	口縁部内外面は横方向の強いナデ調整。胴部内面は左→右のヘラ削り。外面は縦方向のハケ調整。	頸部外面がススける。	
89	"	"	14.2 (3.5) — —	口縁部は「く」の字に外反し、端部は上下に拡張され、口唇部には棒状工具による沈線を1条配す。			
90	"	"	20.2 (5.5) — —	口縁部は強く外反し、口唇部は凹状をなす。	口縁部内外面は横方向のナデ調整。胴部内面は縦方向の指ナデ。		
91	"	"	15.4 (6.0) — —	口縁部はなめらかに外反し、端部をわずかに上下に肥厚させ、口唇部は凹状をなす。	口縁部内外面はナデ調整。頸部内面は横方向のハケ調整。		
92	"	"	20.0 (3.0) — —	口縁部は直線的に外反し、端部は下方に肥厚する。口唇部は面をなす。	口縁部内外面横方向のナデ調整。		
93	"	"	15.5 (5.5) — —	肩の張った胴部に、わずかに外反気味の頸部がつき、口縁部はなめらかに外反する。口唇部は上方に拡大され、2条の凹線文を配す。	口縁端部はつまみ上げて、横方向に強くなる。頸部内面は横方向、上胴部外面は縦方向のハケ調整。		
94	"	"	17.0 (4.4) — —	口縁部は丸味をおびて「く」の字に外反する。口唇部は面をなし、外面に1条の沈線を配す。			
95	"	"	20.0 (2.6) — —	口縁部は「く」の字に外反。端部は上下に肥厚し、口唇部には3条の凹線文を配す。	口縁部内外面は横方向のナデ調整。		
96	"	"	— (15.3) 22.5 8.7	しっかりした底部を有し、上胴部で「く」の字状に屈曲する。	外面は横位の叩きを施す。内面は胴部中位が横方向のハケ調整。上位は指頭圧痕がみられる。	外面は全体がススけている。	
97	"	"	— (8.0) — 7.0	上げ底状の底部から、直線的に立ち上がる胴部である。	内面は左上りのヘラ削り。		
98	"	高杯	22.5 (3.0) — —	口縁部は直立気味に立ち上がる。外面に2条の凹線文を配し、口唇部は丸味をおびた面をなす。	内外面共にナデ調整。		
99	"	"	— (4.5) — 9.5	なめらかに外反して開く脚部である。端部は下に拡張される。			
100	"	"	— (4.8) — 9.5	なめらかに外反して開く脚部である。端部は面をなし、内面は削りによって段をなす。	内面は右→左にヘラ削り。		
101	"	"	— (2.7) — 14.0	なめらかに外反して開く脚部で端部は丸くおさめる。	端部内外面は横方向のナデ調整。内面は横方向のハケ調整。		

挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
102	S T 10	甕	24.8 (7.2) — —	口縁部は内面に稜をなして強く外方に屈曲する。端部は上下に肥厚させ、口唇部に2条の凹線文を配す。	胴部内外面は左上りのハケ調整。	外面にススが付着する。	
103	S K 1	"	11.6 (9.0) 12.6 —	上胴部で「く」の字状にカーブし、口縁部は直線的に伸びる。口唇部は丸くおさめる。	頸部内面に明瞭な粘土帯接合部を認める。 口頭部内面は、横方向のナデ調整。		
104	"	高杯	— (5.0) — —	一旦「ハ」の字状に開き、強く外反する脚部である。	外面は横方向のナデ調整。		
105	"	"	— (4.5) — 6.8	なめらかに外反する脚部である。	外面は縦方向のヘラ磨きを施し、端部は横方向のナデ調整。		
106	S K 2	壺	— (7.5) — 6.7	わずかに上げ底状の底部から、内湾気味に立ち上がる。	外面は縦方向のハケ調整。内面には指頭圧痕あり。		
107	S K 3	"	27.7 (1.2) —	大きく外反する口縁部で、口唇部は凹状をなし、下端に刻目を配す。外面には2条の微隆起帯を貼付する。		薄手式土器。	
108	"	"	26.0 (5.7) — —	口縁部はなめらかに外反し、口唇部は凹状をなす。 外面には幅2cmの粘土帯を貼付する。	頸部外面はナデ調整。		
109	"	"	9.0 (9.5) — —	厚手の底部でわずかに上げ底である。			
110	"	"	— (8.7) 23.0	肩部に微隆起帯を貼付し、その上に楕円形浮文を配す。またその上位に刺突文を配す。			
111	S K 4	"	19.0 (3.2) — —	口縁部はなめらかに外反し、端部は下方に肥厚する。口唇部は面をなす。 外面には幅2cmの粘土帯を貼付する。	口唇部はナデ調整。		
112	S K 5	高杯	10.5 (4.5) — —	「ハ」の字に開く脚部で、端部は上方に肥厚し、3条の凹線文を配す。	内面は下半が右→左、上半が不定方向のヘラ削り。		
113	S K 7	壺	17.8 (4.0) —	口縁部は大きく外反する。 端部は下方に拡大し、口唇部に2条の凹線文を配す。	口縁部内外面は横方向のナデ調整。 頸部外面は縦方向のハケ調整あり。		
114	"	"	17.4 (4.5) —	口縁部はなめらかに外反し、端部は上下に拡張。 口唇部は凹状をなす。	口縁部内外面は横方向のナデ調整。		
115	"	甕	— (4.5) —	口縁部はなめらかに外反し、端部はわずかに肥厚気味である。	頸部内面に明瞭な接合痕を認める。		
116	"	高杯	19.0 (2.5) — —	口縁部は直角に屈曲してわずかに外反気味に立ち上がり、口唇部は内外に肥厚する。 外面に4条の擬凹線を、口唇部には2条の凹線文を配す。			

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
117	SK 7	壺	13.0 (8.0) 16.5 —	無頸壺である。胴部中位に最大径を有するもので、口縁部は近く直線的に立ち上がる。口唇部はわずかに凹状をなす。口縁部に径0.6cmの円孔を穿つ。	外面は縦方向のヘラ磨き。内面は中位以下右→左のヘラ削り。	
118	SK 8	"	26.5 (2.5) —	口縁部は近く外反し、端部を厚くつくる。口唇部は面をなしぱ状原体で密な圧痕を施す。		内面はススけている。
119	SK 9	"	34.0 (6.5) —	口縁部はなめらかに外反し、口唇部に2条の凹線文を配す。胴部上端に列点文を配す。	口頸部外面は横方向のナデ調整。	
120	"	"	— (17.5) 21.6 —	頸部はなめらかに外反し、長い。胴部上端に列点文を配す。	内外面共にナデ調整。	
121	"	"	19.5 (6.0) —	口縁部はなめらかに外反し、口唇部には細い凹線文を2条配す。外面に列点文を配す。	口縁端部内外面に横方向のナデ調整。 内面は横方向、外面は縦方向のハケ調整。	
122	"	"	4.0 (6.0) —	やや厚手のつくりである。		外面はススけている。
123	SK 10	"	18.6 (10.0) —	口縁部は大きく外反し、外面に2.2cm幅の粘土帯を貼付し、口唇部に刻目を施す。上胴部に断面三角形の突帯を貼付する。		
124	"	"	— (5.0) 9.8	大きな底部から、内湾して立ち上がる胴部である。	内面に指頭圧痕を認める。	
125	"	鉢	10.0 9.5 — 5.5	厚い底部から直線的に立ち上がり、口縁部は内側にやや肥厚する。	内外面ナデ調整。	
126	SK 11	壺	11.5 (8.0) —	口縁部は頸部からなめらかに外反する。口唇部は面をなす。外面に1条のヘラ描沈線を配し、その下に竹管文を2列配す。	頸部外面は縦方向のハケ調整。内面は横方向のナデ調整。	
127	"	高杯	— (5.0) —	極めて厚いつくりで、「ハ」の字状に開く脚部である。		
128	SK 15	壺	16.0 (4.0) —	口縁部は大きく外反する。口唇部は凹状をなす。	口唇部は横方向の強いナデ調整。	
129	"	"	28.8 (3.5) —	大きく外反する口縁部で、端部は下方に肥厚させ、刻目を施す。	口縁部内外面は横方向の強いナデ調整。	
130	"	"	7.0 16.8 10.0 6.2	細長い胴部で、上胴部に段を有す。口縁部はなめらかに外反し、端部はわずかに内面に肥厚する。口唇部は丸くおさめる。	外面は縦方向のハケ調整。 内面はナデ調整。	
131	"	甕	14.0 (9.5) 16.0 —	直線的に内傾して立ち上がる胴部から、口縁部は「く」の字状に外反する。口唇部は凹状をなす。	口縁部内外面横方向のナデ調整。 内面胴部下半は右→左及び下→上のヘラ削り。	外面はススけている。

挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm) 口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
132	SK 15	甕	16.0 (19.0) 21.4	胴部中位に最大径を有す。 口縁部は丸く外反し、口唇部は凹状をなす。		
133	"	"	14.5 (5.0) 14.5	内傾して立ち上がる上胴部から口縁部は短く外反する。端部は外方に肥厚させ、口唇部は面をなす。	口縁部外面は横方向のナデ調整を特に強く施す。 胴部は厚いつくりである。	
134	"	"	22.0 (5.5)	口縁部は「く」の字に外反し、口唇部は凹状をなす。 胴部の張りは少ない。	内面上胴部以下は、右→左のヘラ削り。	
135	"	"	20.1 (17.5) 23.9	口縁部はあまり胴の張らない体部から、「く」の字に屈曲しやや長く伸びる。端部は面をなす。	外面は縦方向のハケ調整。口唇部及び口縁部内面は横方向のナデ調整。	
136	"	高杯	— (5.0) — —	「ハ」の字状に開く脚部である。	杯底部は円盤充填による。	
137	"	"	22.6 (4.5)	口縁部は外方に立ち上がり、端部はわずかに内外に肥厚する。 口縁部外面に2条の凹線文を配す。		
138	SK 16	甕	— (4.0) — 7.0	やや外方に張り出す底部である。		内面は底部より少し上がったところからススけている。 外面は全面ススけている。
139	SK 18	"	12.0 (4.0) — —	あまり張らない胴部から口縁部は丸く外反する。 口唇部は丸くおさめる。	口縁部外面は縦方向、内面は横方向のハケ調整。	
140	"	壺	— (3.5) — 4.0	円盤状の底部である。		外面はススけている。
141	"	甕	20.7 (9.0) 26.8	口縁部は「く」の字に外反し、端部は下方に肥厚させ、口唇部は面をなす。	口縁部内面は横方向のハケ調整、 胴部外面は縦方向のハケ調整。	
142	SD 1	壺	11.0 (4.0) —	口縁部は直線的に外反し、口唇部は丸くおさめる。口縁部外面に円形浮文を配し、頸部外面は横描直線文を配す。		
143	"	"	15.0 (4.0)	口縁部は大きく外反し、端部は上方に拡張される。 口唇部は凹状をなす。 口縁部外面に粘土帯を貼付する。	口縁部内外面及び口唇部は横方向のナデ調整。 口頸部内面は横方向のハケ調整。	
144	"	"	14.2 (6.5)	口縁部は大きく外反し、外面に粘土帯を貼付する。口唇部は面をなす。頸部下端に列点文を配す。	厚手のつくりである。 頸部外面は縦方向のハケ調整。	
145	"	"	19.5 (9.5)	口縁部は大きく外反し、端部はやや厚くつくる。口唇部は広い面をなし、刻目を施す。 頸部下端に列点文を配す。	頸部内面にしぶり目あり。	
146	"	"	21.8 (7.5)	頸部からなめらかに外反する口縁部で、外面に3.6mmの粘土帯を貼付し、指頭でヒダ状の圧痕を施す。端部は下方に肥厚する。 口唇部にはしっかりした刻目を施し、更に右上りのヘラ描沈線を配す。		

挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口径 器高 胸径 底径	形態・文様	手法	備考
147	S D 1	壺	— (5.0) — —	丸く張った頸部に直立する頸部がつく。頸部に2条の突帯を貼付し、その下に列点文を配す。	外面は横方向のナデ調整。		
148	"	"	26.8 (4.0) — —	口縁部は大きく外反する。口唇部は凹状をなし、横描波状文を配す。口縁部は断面三角形の粘土帯を貼付し、外面には指頭でヒダ状の圧痕を配す。	口縁部内面は横方向のナデ調整。		
149	"	"	15.0 (2.0) — —	大きく外反する口縁部で、端部は上下に肥厚させ、口唇部には2条の凹線文を配す。	内外面横方向のナデ調整。		
150	"	"	— (7.0) — —	大きく張った頸部に直立する頸部がつく。頸部間に断面三角形の突帯を貼付する。	外面は縦方向のハケ調整。内面は右上りのハケ調整。突帯の上下は横方向のナデ調整。		
151	"	"	16.5 (1.8) — —	大きく外反する口縁部である。接合部で剥離している。端部は上下に拡張し、口唇部には3条の凹線文を配す。	内外面横方向のナデ調整。		
152	"	"	17.3 (1.4) — —	口縁部は大きく外反し、端部は上下に肥厚させ、口唇部には3条の凹線文を配し、更に竹管による刺突文を配す。	"		
153	"	"	16.8 (4.0) — —	ラッパ状に外反する口縁部を有し、口唇部は凹状をなす。	口縁部内外面は、横方向のナデ調整。頸部内面横方向、外面は縦方向のナデ調整を施す。		
154	"	"	12.0 (7.0) — —	直線的に立ち上がる頸部になめらかに外反する口縁部がつく。端部はわずかに内外に肥厚し、口唇部には2条の凹線文を配す。	口縁部内外面横方向のナデ調整。頸部外面は縦方向のハケ調整を施す。		
155	"	"	9.0 (9.5) — —	直線的に伸びる細く長い頸部から、口縁部はなめらかに外反する。口唇部は面をなす。	口縁部内外面及び口唇部は横方向のナデ調整。頸部外面は縦方向のハケ調整。		
156	"	壺	15.9 (4.0) — —	口縁部は大きく外反し、口唇部は凹状をなす。上脣部に横描直線文を2条まで確認することができる。	口縁部内外面は横方向のナデ調整。頸部外面は縦方向のハケ調整。		
157	"	"	14.4 (6.5) — —	口縁部は強く外反し、口唇部は上下に拡張し、3条の凹線文を配す。	外面は左上りの叩目の上を縦方向のハケ調整。内面上脣部は縦方向の指ナデ。それ以下は下→上のへラ削りを施す。	搬入品。	
158	"	"	13.2 (4.0) — —	最大径を上脣部に有す。口縁部は「く」の字に外反し、端部を下方に屈曲させる。口唇部に2条の凹線文を配す。	口縁部内外面は、横方向のナデ調整。脣部外面には左上りのハケ調整を施す。		
159	"	"	17.0 (6.0) — —	最大径を上脣部に有す。口縁部は水平に外反し、端部を上下に肥厚させる。口唇部には2条の凹線文を配す。	口縁部内外面横方向のナデ調整。脣部内面指頭による縦方向のナデ調整。		
160	"	"	15.1 (6.0) — —	最大径を上脣部に有す。口縁部は「く」の字に強く外反し、端部は上下に肥厚させ、口唇部に2条の凹線文を配す。	口縁部内外面及び脣部外面は横方向のナデ調整。		
161	"	"	16.3 (3.0) — —	"	口縁部内外面は横方向の丁寧なナデ調整。		

挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm) 口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手 法	備考
162	S D 1	壺	18.2 (4.5) — —	口縁部はなめらかに外反し、口唇部に2条の凹線文を配す。	口縁部内面及び口頸部外面は横方向のナデ調整。外面は、下地に縦方向のハケ調整。	
163	"	"	24.3 (3.0) — —	口縁部はなめらかに外反し、端部を上方に肥厚さす。 口唇部に3条の凹線文を配す。	内面は横方向、外面は縦方向のハケ調整後、横方向のナデ調整を施す。	
164	"	壺	13.2 (4.0) — —	なめらかに外反する口縁部で、口唇部は面をなす。	外面は縦方向のハケ調整。	
165	"	"	13.2 (4.5) — —	直立気味の頸部から口縁部はなめらかに外反する。 口唇部は面をなす。	口縁部内は横方向、外面は縦方向のハケ調整を施す。	
166	"	"	18.0 (4.0) — —	ラッパ状に外反する口縁部で、口唇部は凹状をなす。	内面は横方向、外面は縦方向のハケ調整を施す。 口唇部及び口縁部内面は横方向のナデ調整。	
167	"	"	14.8 (5.5) — —	口縁部は頸部からなめらかに外反する。口唇部は面をなす。	口縁部内外面は横方向のナデ調整。 頸部内面は横方向、外面は縦方向のハケ調整。	
168	"	"	13.2 (5.0) — —	なめらかに外反する口頸部である。 口唇部は丸くおさめる。	口縁部内外面は横方向のナデ調整。	
169	"	"	15.0 (5.0) — —	直線的に立ち上がる頸部から口縁部は、直線的に短く外反する。 口唇部は面をなす。	口縁端部をつまみ上げて横方向のナデ調整。頸部外面は縦方向、内面は横方向のハケ調整を施す。	
170	"	"	10.8 (8.0) — —	直線的に外方に立ち上がる頸部から、口縁部はわずかに外反する。 口唇部は丸くおさめる。	口縁部内面及び頸部内面上半は横方向のナデ調整。 頸部外面は縦方向のハケ調整。	
171	"	"	11.0 (9.0) — —	長頸壺である。直立気味の頸部から口縁部はなめらかに外反する。 口唇部は丸くおさめる。	口縁部外面は横方向のナデ調整。	
172	"	"	14.5 (6.0) — —	長頸壺である。直線的に立ち上がる頸部から、口縁部はなめらかに外反する。口唇部は面をなす。	口縁部外面は横方向のナデ調整を施す。	
173	"	"	13.2 (5.0) — —	長頸壺である。直線的に立ち上がる頸部から、口縁部は強く外反し、端部は下垂気味で、口唇部は面をなす。	口縁部内外面は横方向のナデ調整。	
174	"	"	15.2 (6.0) — —	なめらかに外反する口頸部で口唇部は凹状をなす。	口縁部下端をつまみ出して横方向に強くナデる。 頸部外面縦方向、内面上位は横方向、中位以下は縦方向のハケ調整。	
175	"	"	18.5 (6.5) — —	丸く張った上胴部から、口縁部は強く外反する。口唇部は面をなす。	厚手のつくりである。	
176	"	"	15.5 (9.5) — —	長頸壺である。わずかに外反気味に立ち上がる頸部から口縁部は強く外反する。	口縁部は内外面ナデ調整。	

挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口径高 胴後 底径	形態・文様	手 法	備考
177	S D 1	壺	14.5 (6.0) — —	肩の張った上胴部に、直立気味の短い頸部がつき、口縁部はなめらかに外反する。端部は上下に肥厚し、口唇部に3条の凹線文を配す。	口縁部内外面に横方向のナデ調整を施す。		
178	"	"	15.5 (5.0) — —	直線的に外方に伸びる頸部から、口縁部は近く外反する。口唇部には1条の凹線文を配す。	口縁部内外面及び頸部外面は横方向のナデ調整。頸部内面は横方向のハケ調整。		
179	"	"	— (2.5) — 5.5	逆台形の底部で、球形状の胴部がつくものと考えられる。	内面は横方向のナデ調整。		
180	"	"	— (6.0) — 7.8	"	外面は縦及び左上りのハケ調整。		
181	"	"	— (12.0) — 8.8	内湾気味に立ち上がる下胴部である。	外面中位は縦方向のハケ調整。下位は縦方向のヘラ磨きを施す。内面は、中位は縦方向のハケ調整、下位は縦方向のヘラ削り(下→上)	外面は全面ススけている。	
182	"	"	— (6.0) — 4.6	小さい底部からなめらかに内湾しながら立ち上がる大型壺の下胴部である。	外面は縦方向のヘラ磨きを施す。		
183	"	"	— (9.5) — 10.2	大形壺の下胴部である。	外面は縦方向のハケ調整を施し、内面は左上りハケ調整を丁寧に施す。		
184	"	甕	20.2 (4.0) — —	口縁部は「く」の字に外反し、口唇部は凹状をなす。	口唇部及び口縁部内外面は、横方向のナデ調整。胴部外面縦方向、内面は横及び右上りのハケ調整。		
185	"	"	21.6 (5.5) — —	"	胴部外面に縦方向のハケ調整。	外面はススけている。	
186	"	"	20.2 (4.5) — —	"	口縁部内外面及び口唇部は、横方向のナデを施す。胴部外面は左上りのハケ調整。内面は右上りのハケ調整。	外面は全面にススが付着する。	
187	"	"	19.0 (2.0) — —	口縁部は「く」の字に強く屈曲し、端部付近は下方に肥厚する。口唇部は面をなす。	口縁部内面は横方向のハケ調整を行った後、横方向ナデ調整を施す。口唇部及び口縁部外面は横方向のナデ調整。		
188	"	"	19.0 (4.5) — —	口縁部は「く」の字に外反し、口唇部は面をなす。	口縁部下端をつまみ出し横方向にナデる。 上胴部外面は縦方向及び左上りのハケ調整。		
189	"	"	21.0 (5.0) — —	口縁部は丸く外反させ、口唇部は面をなす。	頸部及び上胴部外面は縦方向のハケ調整を施す。頸部内面は横方向のハケ調整。口縁端部及び口唇部は横方向のナデ調整。		
190	"	"	17.8 (7.4) — —	肩の張った上胴部から口縁部は強く外反する。口唇部はわずかに凹状をなす。	口縁部内外面及び口唇部は横方向のナデ調整を施す。胴部外面は縦方向のハケ調整。		
191	"	"	18.3 (6.5) — —	あまり肩の張らない上胴部から、口縁部はなめらかに外反する。口唇部はわずかに凹状をなす。	口縁部内面は横方向のハケ調整。外面は左上りのハケ調整。口唇部は横方向のナデ調整。		

捕図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口径高 器高 胴径 底径	形態・文様	手 法	備 考
192	S D 1	甕	19.0 — —	(3.5)	短く外反する口縁部で、口唇部は面をなす。	口縁部内面は横方向のハケ調整を行い、胴部外面は左上りのハケ調整を施す。	
193	"	"	— — —	(13.0) — —	上胸部に最大径を有す甕である。	内面は水平の叩きを施し、その上を部分的に縦方向のハケ調整施す。内面は指頭による縦方向のナデ調整を施す。	
194	"	"	18.0 — —	(7.5) — —	口縁部はなめらかに外反し、端部を上下に肥厚させる。口唇部に2条の凹線文を配す。	口縁部内外面は横方向のナデ調整を行ふ。内面頸部直下に右上りのヘラ削りを施す。	
195	"	"	— — —	(4.5) — —	あまり肩の張らない長胴の甕の上胸部である。	外面頸部及び胴部上端は縦方向のハケ調整を施す。それ以下は、水平方向の叩きを施す。断面観察により粘土帯の接合部が明瞭に見られる。	
196	"	"	— — —	(10.5) 12.0 2.3	小さな底部から内湾気味に立ち上がり、頸部で外方に屈曲する。やや肩が張っている。	外面下胸部は縦方向のハケ調整を施す。内面は横方向のヘラ削りを施す。	
197	"	高杯	33.6 — —	(9.0) — —	杯部は直線的に外方に長くのび、口縁部は段を有して屈曲、端部は内外に拡張され、口唇部には2条の凹線文を配す。	杯部内外面ともに丁寧なヘラ磨きを行う。杯底部は円板充填による。	搬入品である。
198	"	"	— — —	(4.5) 15.0	「ハ」の字状に開く脚部である。端部はわずかに上下に肥厚し、2条の凹線文を配す。	下半は右→左のヘラ削りを施し、中位は左上りのヘラ削りを施す。	搬入品であり、197の脚部であると思われる。
199	"	"	24.0 — —	(3.3) — —	浅い杯部で口縁部の立ち上がりは、極めてゆるい。端部を上下に肥厚させ、口唇部に2条の凹線文を施す。	口縁部内外面は横方向ナデ調整。杯部外面は縦方向のハケ調整を施す。	
200	"	"	23.6 — —	(3.5) — —	口縁部は稜をなして屈曲し、外方に立ち上がる。端部は尖り気味である。	口縁部外面は上下に2段にわたって横方向の強いナデ調整を施す。杯部内面は丁寧なヘラ磨きを施す。	搬入品である。
201	"	"	12.5 — —	(3.0) — —	口縁部は強く屈曲し、端部近くでなめらかに外反する。口縁部外面に櫛描直線文と櫛描波状文を配す。屈曲部外面には一条のヘラ描沈線を配す。		
202	"	"	25.8 — —	(4.0) — —	口縁部は強く外反して立ち上がり、口唇部に一条の沈線を配す。	口縁部外面は丁寧なナデ調整を施す。杯部内面はヘラ磨きを施す。口縁部の接合手法を断面観察することができる。	
203	"	鉢	— — —	(3.0) — 5.0	上げ底状の底部を有す。	底部は指頭でつまみ出す。内面に指頭押圧を認める。	
204	"	"	— — —	(3.3) — 6.3	台形状の底部を有す。	底部は指頭によって外方に強くつまみ出している。外面右上りのハケ調整を施す。内面に指頭押圧を認める。	
205	"	"	— — —	(4.0) — 5.3	上げ底の底部である。	全体に薄手のつくりである。外面は縦方向のヘラ磨きを施す。内面は左上りのヘラ削りを施す。	
206	"	高杯	— — —	(7.0) — —	「ハ」の字状に開き下半で大きく外反する。	外面は縦方向のヘラ磨きを施す。内面にしぶり目を認める。	

挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口徑 器高 胸径 底径	形態・文様	手法	備考
207	S D 1	土錘	全長 (3.3) 径 3.6 重量(g) 44	11.0 (3.5) — —	0.8cmの円孔を穿つ。		
208	S D 2	壺	"	15.0 (2.0) — —	なめらかに外反する口頸部である。口縁部外面に1.1cm幅の粘土帯を貼付する。口唇部は丸くおさめる。	口縁部外面に横方向のナデ調整施す。	
209	"	"	16.4 (5.0) — —	口縁部外面に2.6cm幅の粘土帯を貼付し、口唇部は面をなし、刻目を施す。	口縁部外面にヒダ状の指頭押圧を認める。		
210	"	"	15.9 (12.0) — —	ラッパ状に外反する口縁部である。外面に2.1cm幅の粘土帯を貼付し、口唇部は面をなす。			
211	"	"	12.3 (6.0) — —	直立気味の頸部から大きく外反する口縁部を有す。口縁部外面に1.4cm幅の粘土帯を貼付し、口唇部はわずかに凹状をなす。胸部上端に2条の微隆起帯を貼付する。	外面は綫方向のハケ調整後、ナデ調整によって仕上げたと思われる。頸部内面は指頭による綫方向のナデ調整を施す。口唇部は横方向の強いナデ調整を施す。		
212	"	"	16.5 (2.5) — —	直立気味の頸部から大きく外反する口縁部を有す。口縁部外面に1cm幅の粘土帯を貼付し、口唇部は丸くおさめる。頸部に櫛描直線文を配す。			
213	"	"	17.2 (6.0) — —	口縁部は大きく外反し、外面に2cm幅の粘土帯を貼付する。口唇部は凹状をなす。	口唇部は横方向の強いナデを施す。		
214	"	"	17.3 (29.5) 29.4 —	口縁部はなめらかに外反し、外面に1.6cm幅の粘土帯を貼付し、口縁部は丸くおさめる。			
215	"	"	22.0 (7.2) —	長い頸部に直立気味の頸部がつき、口縁部はなめらかに外反する。口縁部外面には2.1cm幅の粘土帯を貼付する。	頸部内面は横方向のハケ調整、外面は綫方向のハケ調整。胸部外面には横及び綫方向のハケ調整。		
216	"	"	20.0 (24.0) 31.6 —	口縁部はなめらかに外反し、外面に2cm幅の粘土帯を貼付し、口唇部は面をなす。			
217	"	"	14.0 (26.0) 20.5 —	最大径を胸部中位に有す。内傾して立ち上がる頸部から口縁部はなめらかに外反する。口唇部は凹状をなす。胸部上端に列点文を配す。	口縁部は厚いつくりである。頸部外面は綫方向のハケ調整を施し、上胸部外面は左上りのハケ調整がかすかに認められる。胸部内面に指頭圧痕あり。		
218	"	"	19.0 (23.0) 19.0 —	細長い頸部からなめらかに外反する口縁部を有す。断面三角形の突帯を2条貼付する。頸部及び上胸部には櫛描波状文と直線文を配す。口縁部内面に扇形文を配す。		波状文の一部は擬似流水風をなす。	
219	"	"	(10.0) 14.0 —	長い頸部から大きく外反する口頸部を有す。口縁部外面に1cm幅の粘土帯を貼付する。口唇部は面をなし、下端に刻目を施す。頸部外面に綫方向の沈線を施し、右上りの列点文を配す。その下に微隆起帯を貼付し、横内折浮文を貼付する。		薄手式土器である。	
220	"	"	(17.0) 22.6 8.0 —	最大径を胸部中位に有す。上胸部から頸部にかけて、櫛描波状文を配すが、磨耗のため十分に観察することができない。	胸部及び頸部内面に指頭圧痕を認める。		
221	"	"	—	最大径を胸部中位に有す。上胸部に櫛描波状文を施す。	外面胸部下半に綫方向のヘラ磨き。		

插図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口径 高 胸 底 径 径 底 径	形態・文様	手法	備考
222	S D 2	壺	— (12.0) — —	内湾して立ち上がる上胴部に直立気味の長い頸部を有す。頸部外面に7条の断面三角形の突帯を有し、突帯間に列点文を配す。	全体にナデ調整がなされており、上胴部内面には指頭圧痕が認められる。		
223	"	"	— (36.0) 22.6	長い胴部に直立する頸部がつく。上胴部に横描直線文と波状文を施し、更に断面三角形の粘土帶を貼付。	胴部外面ハケ調整。		
224	"	"	— (23.0) 32.0	最大径を胴部中位に有す。胴部上端に微隆起帯を貼付する。その下に円形浮文を施し、径0.3cmの円孔を刺突する。	頸部外面は縦方向のハケ調整、胴部外面は横方向及び斜めのハケ調整を施す。		
225	"	"	21.0 (13.0) — —	直線的に外反する口頸部で、口縁端部は上下に大きく拡張している。口唇部外面に4条の凹線文を施し、その上に羽文状に列点文を配す。	口頸間に厚い粘土帶を貼付し、指頭によってヒダ状の圧痕をつけ。		
226	"	"	16.6 (11.0) — —	細くしまった頸部からなめらかに外反する口縁部を有す。口縁端部は上下に拡張され、口唇部には2条の凹線文を配す。	口縁部外面は横方向の強いナデ調整を施す。胴部外面は左上がりのハケ調整を施し、内面には指頭圧痕が認められる。		
227	"	"	15.6 (6.0) — —	口縁部はなめらかに外反し、口唇部に3条の凹線文を配す。	やや厚手のつくりである。		
228	"	"	17.2 (6.2) — —	頸部は逆「ハ」の字状に開き、口縁部は大きく外反する。外面には2.3cm幅の粘土帶を貼付する。口縁端部は上方に肥厚させ、口唇部には2条の凹線文を配す。	口縁部上端をつまみ上げて、横向に強くナデ調整を施す。外面は全面横方向の強いナデ調整を施す。		
229	"	"	— (6.0) — 4.6	厚手の底部から内湾気味に立ち上がる下胴部である。	外面は縦方向のヘラ磨き、内面には指頭圧痕を認める。		
230	"	"	— (6.0) — 6.0	厚手の底部から内湾気味に立ち上がる。	内外面ナデ調整。	外面はススけている。	
231	"	"	— (5.4) — 8.4	わずかに上げ底状の底部。			
232	"	"	— (6.6) — 6.4	内湾気味に立ち上がる。			
233	"	"	— (13.4) 14.0 5.0	最大径を胴部中位に有す。	内外面はナデ調整。		
234	"	"	— (6.0) — 9.0	しっかりした底部から、直線的に外方に伸びる下胴部である。	内面にしぶり目あり。 外面に縦方向のヘラ磨き。		
235	"	"	— (29.0) — 12.1		内面に指頭圧痕あり。 胴部外面は横方向、下胴部は縦方向のヘラ磨きを施す。		
236	"	"	— (12.0) — 20.4	わずかに内湾気味に立ち上がる大型の壺である。	外面は縦方向のハケ調整。		

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
237	SD 2	壺	— (22.0) — 9.0	比較的小さな底部から内湾気味に外方に立ち上がる胴部である。	外面にわずかに右上がりのハケ調整を認める。	
238	"	"	— (22.8) 22.0 9.6	外方への張りの弱い胴部である。	下胴部外面に縦方向のヘラ磨きを施す。内面底部附近に指頭圧痕を認めることができる。内面観察により粘土帯の接合を認めることができる。	
239	"	高杯	— (12.0) 13.0 —	脚部下半で「ハ」の字状に開く。端部はわずかに内外面に肥厚させている。	端部は丸くおさめ、外面は横方向のナデ調整。外面上半にヘラ磨きあり。	
240	"	鉢	17.0 (7.0) — —	口縁部は直降気味であり、口唇部は面をなす。	外面は縦方向のハケ調整。	
241	"	"	15.0 (4.6) — —	直線的に外方に立ち上がり、端部は外方にわずかに肥厚させ、口唇部は面をなす。	外面は縦方向のハケ調整を施す。口唇部及び口縁部外面は、横方向のナデ調整を施す。	
242	SD 6	壺	17.0 (5.4) — —	口縁部は大きく外反する。口唇部は面をなし、下端に刻目を施す。口縁部外面に微隆起帶を貼付する。	外面は縦方向のハケ調整である。	薄手式土器である。
243	"	"	— (6.6) — —	長い頸部で、外面には櫛描直線文を2条配す。	外面は縦方向のハケ調整。	
244	"	"	— (5.6) — 8.0	わずかに上げ底状を呈す。		
245	SD 7	"	15.8 (5.0) — —	口縁部はわずかに外反する。外面に1.2cm幅の粘土帯を貼付する。	外面は横方向のハケ調整。	
246	"	"	31.0 (11.0) — —	なめらかに外反する口縁部で、外面に3cm幅の粘土帯を貼付。	口縁部外面は横方向のハケ調整。外面は縦方向のハケ調整。口縁部外面に指頭圧痕。	
247	"	"	— (16.0) — 8.5	上げ底状の底部を有し、直線的に外方に立ち上がる下胴部である。	外面はハケ調整後、ナデたものと思われる。	
248	"	"	— (5.5) — 6.8	内湾気味に立ち上がる。	底部の円盤が剥離している。	
249	"	"	— (12.0) — 10.0	直線的に外方に立ち上がる下胴部である。	内面に指頭圧痕を認める。	
250	"	"	— (2.2) — 11.0	わずかに上げ底状の底部から大きく外方に開く下胴部である。		
251	"	壺	12.6 (5.0) — —	長い胴部に短く外反する口縁部を有す。端部は丸くおさめる。	口縁部外面は横方向のナデ調整を施す。胴部外面は縦方向のハケ調整を認める。内面頸部直下は右→左のヘラ削り。胴部は下→上のヘラ削りを行う。	胴部外面は火を受けて変色剥離している。

挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口径高 器胴径 底径	形態・文様	手法	備考
252	S D 7	甕	15.0 (16.0) —	—	口縁部は「く」の字に外反し、 口唇部は面をなす。	口唇部及び口縁部内面は横方向の ナデ調整。胴部中位以下左→右の ヘラ削りあり。	胴部外面はススけている。
253	"	"	17.0 (7.0) —	—	口縁部は直線的に外反し、端部は 厚い。口唇部は面をなす。	胴部内面は右→左のヘラ削りを施す。	鉢の可能性あり。
254	"	"	12.2 (9.4) 15.0	—	丸く張った上胴部から口縁部は 「く」の字に外反する。口唇部は 丸くおさめる。	口縁部外面にヒダ状の圧痕が残る。 口縁部内外面は横方向の強いナデ 調整。胴部内面に指頭圧痕あり。	
255	"	"	12.6 (15.0) 16.0	—	最大径を胴部中位に有す。口縁部は水平に屈曲し、端部は上方に 拡張する。口唇部は面をなす。	口縁部内外面及び口唇部は横方向 の強めのナデ調整を施す。下胴部内 面は下→上のヘラ削りを施す。	胴部内面中位 がススけてい る。
256	"	高杯	24.0 (5.0) —	—	口縁部外面には4条の凹線文を配す。端部は内外に肥厚さす。口唇部は面をなす。	全面横方向のナデ調整。	
257	"	小型土器	3.5 3.0 — 2.0	—	上げ底の底部で、直線的に立ち上 がり、端部は丸くおさめる。	内面はナデ調整。 外面はハケ調整後にナデ調整。	手捏ね土器。
258	"	"	4.1 4.6 — 3.0	—	コップ状を呈す。	外面は縦方向のハケ調整。 内面はナデ調整。	"
259	P 2	甕	13.7 (12.0) 15.2	—	あまり胴の張らない体部から、な めらかに外反する口縁部である。 口唇部は丸くおさめる。	胴部内面は下→上のヘラ削りあり。 外面は右下がりのハケ調整を施す。	外面は火を受 けて赤く変色。
260	P 5	"	21.4 (22.5) 19.7	—	上胴部は直立気味で、口縁部はな めらかに外反する。口縁部外面には 2.1cm幅の粘土帯を貼付。口唇部は 面をなす。	口縁部及び上胴部内面は横方向の ハケ調整を施す。 口縁部外面は、指頭圧痕あり。	
挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口径高 器胴径 底径	形態	文様・手法	備考
261	P 12	小皿	8.6 1.7 — 4.7	—	口縁部は一度屈曲して外方に立ち 上がり、口唇部は丸くおさめる。	内外面横方向のナデ調整。 底部糸切りあり。	

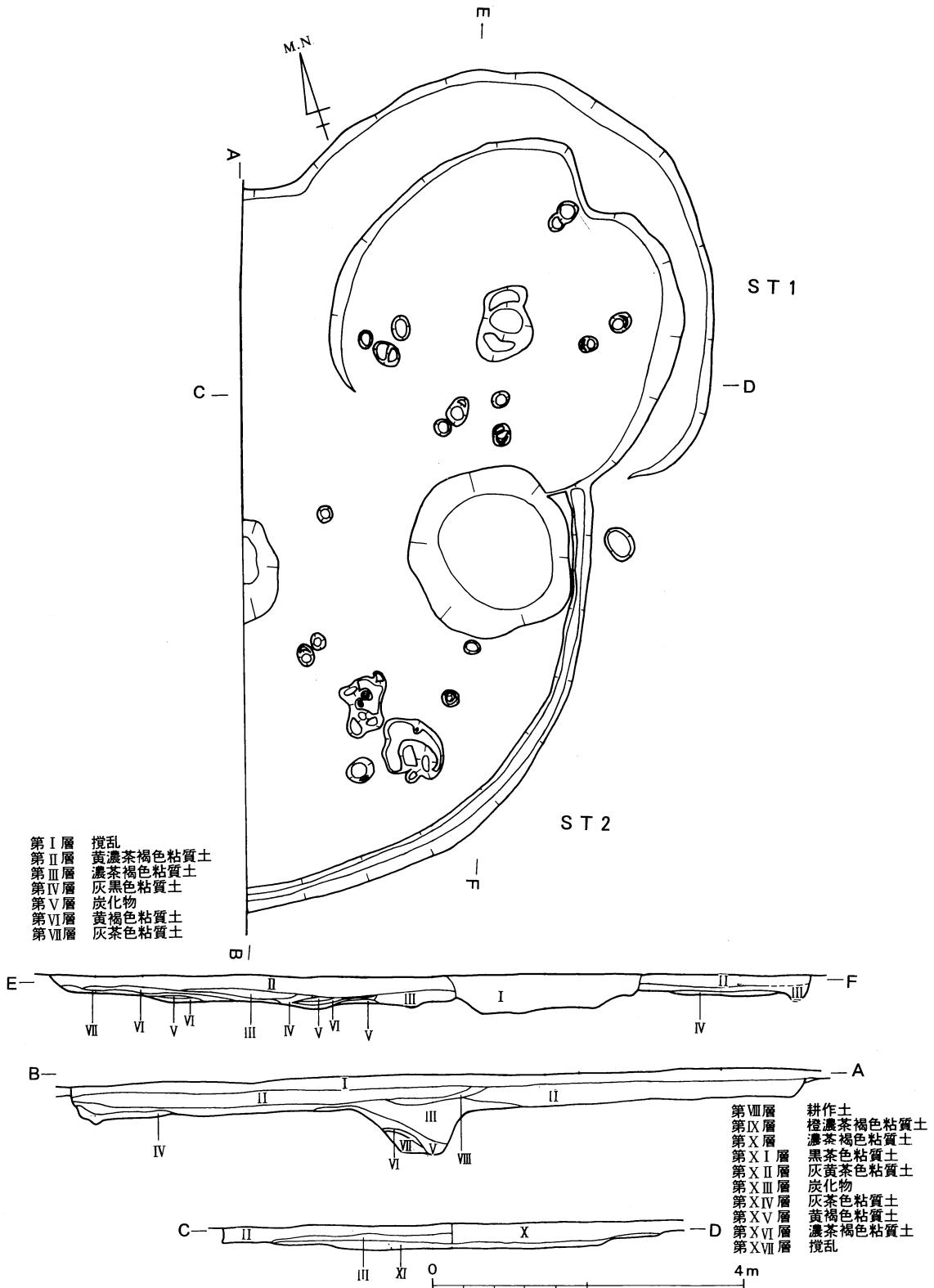
第21表 遺構出土石器観察表

挿図番号	遺構番号	器種	計測値 (cm, g)	最大長 最大幅 最大厚 重 量	材質	特徴	備考
262	S T 9	石斧	(7.6) 4.2 2.0 105.0	—	頁岩	柱状片刃石斧の基部である。刃部及び基端部は欠損している。両正面及び一方の側縁は丁寧に研磨されている。	
263	S T 8	"	(8.7) 5.2 1.3 80.0	—	—	扁平な打製石斧である。基端部は欠損している。基部から刃部に向ってわずかに幅が広くなっている。刃部は直線的で、使用による溝痕がみられる。	

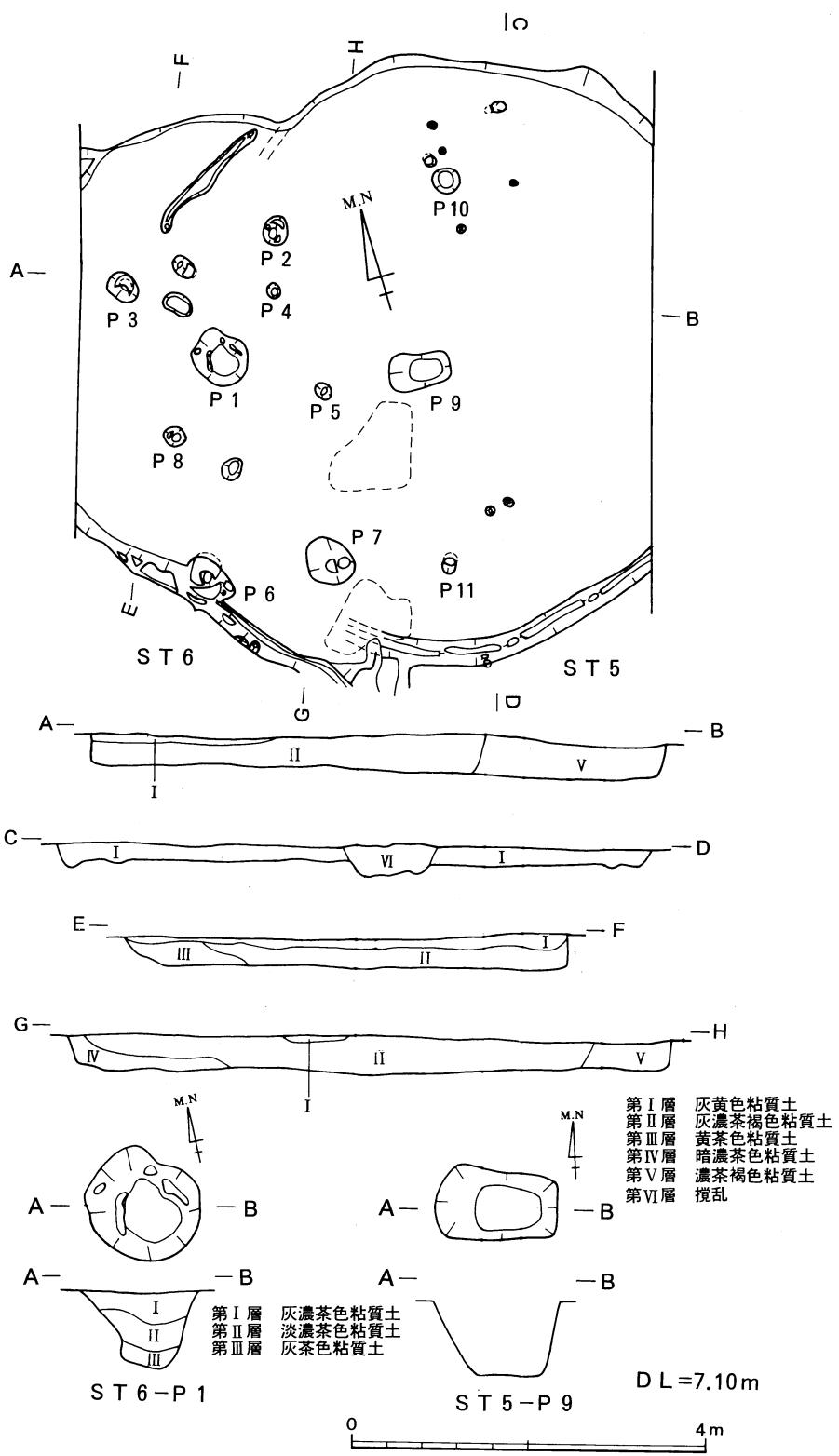
挿図番号	遺構番号	器種	計測値 最大長 最大幅 最大厚 (cm, g)	材質	特徴	備考
264	S T 6	石斧	(13.7) 3.7 1.2 80.0	千枚岩	扁平で縁に長い打製石斧である。一方の主面は丁寧に研磨されている。基端部は欠損しているが、丸くなるものと考えられる。	
265	S K 11	"	径 9.5 厚 2.0 130.0	みかぶ緑色岩	環状石斧である。中央の円孔が貫通する前に半分に破損したものと考えられる。縁部には特に使用痕は認められない。	
266	S T 3	叩石	8.5 7.2 2.2 210.0	砂岩	扁平梢円の河原石をそのまま利用している。縁部に使用痕を認める。	
267	S D 3	"	10.0 9.8 3.5 600.0	みかぶ緑色岩	河原石をそのまま利用している。縁部に使用痕が認められ、1部が大きく欠損している。	
268	S T 6	"	9.0 8.2 3.3 360.0	砂岩	河原石をそのまま利用している。全面が磨かれている。	
269	S D 1	"	11.6 10.0 3.1 645.0	"	河原石をそのまま利用している。縁部は全面に使用痕が認められ、両主面中央部が使用によりくぼむ。	
270	S T 6	"	6.5 6.0 1.7 60.0	"	河原石を打ち欠いたものであり、自然面と主剥離面とからなるが、自然面にも一部剥離面が見られる。縁部に使用痕あり。	
271	S T 9	"	10.2 9.0 4.7 620.0	"	河原石をそのまま利用したものである。縁部及び両面中央部に使用痕がある。	
272	"	"	10.1 8.0 3.9 470.0	"	河原石をそのまま利用したものである。縁部の一部と、両面の中央部に使用痕がある。	
273	"	"	11.3 4.5 1.8 145.0	千枚岩	扁平梢円形で、両短側縁に使用痕がある。一方の長側縁は研磨されている。砥石として利用されたものであろう。	
274	S T 6	"	8.0 4.8 1.8 100.0	砂岩	河原石をそのまま利用したものである。短側縁の一部に使用痕が見られる。他の面は磨かれている。	磨石の可能性あり。
275	"	"	10.5 9.0 3.2 450.0	"	河原石をそのまま利用したものである。全縁部と両面の中央部に使用痕が見られる。	
276	"	"	12.0 6.5 2.6 320.0	"	扁平梢円形の河原石を利用している。両長側縁部に使用痕が見られる。	
277	S T 1	"	13.0 8.0 3.2 495.0	"	河原石をそのまま利用したもので、縁部の一部に使用痕が見られる。	
278	S T 6	"	10.3 9.7 3.5 500.0	"	河原石をそのまま利用している。両主面の中央部にわずかに使用痕が見られる。	

挿図番号	遺構番号	器種	計測値 最大長 最大幅 最大厚 重量 (cm, g)	材質	特徴	備考
279	S T 9	叩石	9.8 8.8 3.2 420.0	砂岩	河原石をそのまま利用している。 縁部及び両面中央部に使用痕が見られる。	
280	S T 7	"	9.5 8.3 3.3 390.0	"	河原石をそのまま利用している。縁部及び 両面中央部に使用痕が見られる。	
281	S T 9	"	9.6 8.5 3.2 370.0	"	河原石をそのまま利用している。 全縁部と一方の面の中央部に使用痕が見ら れる。	
282	"	"	(7.2) 8.2 3.5 310.0	"	河原石を利用したものであるが、全体の3 分の1ほどが欠損している。縁部の一部に 使用痕が見られる。	
283	S D 2	"	8.5 8.5 2.3 235.0	"	河原石を縦に割ったもので、自然面と剥離 面とからなる。縁部に使用痕がみられる。	
284	S K 9	"	10.4 8.8 1.7 210.0	"	"	
285	S D 2	砥石	(7.8) 5.6 3.2 255.0	"	3面を使用しており、各使用面は凹状をな している。	
286	S T 4	"	(9.3) 5.9 4.3 296.0	"	1面を使用しており、使用面は凹状をなす。	
287	S K 5	"	(11.5) 9.8 5.1 690.0	"	2面を使用している。	
288	S T 4	"	(15.1) 15.4 4.3 1915.0	"	2面を使用しており、使用面は凹状をなす。	
289	"	"	(29.5) 11.0 4.2 2500.0	"	3面を使用しており、使用面は凹状をなす。 使用面の一部に敲打痕が見られる。	
290	S T 10	石包丁	13.3 4.3 0.8 85.0	千枚岩	直線刃片刃の磨製石包丁である。 全面を丁寧に研磨している。中央部に両面 から一孔を穿つ。片面の円孔付近に3ヶ所 穿孔痕が見られる。	
291	S T 9	"	14.0 7.3 0.8 150.0	結晶片岩	扁平な長方形をなす。 未製品と考えられる。	
292	S T 1	"	7.7 4.4 0.5 30.0	千枚岩	直線刃片刃の磨製石包丁である。元はもっ と大型であったと考えられるが、両穿孔部 から切断している。	
293	S D 6	"	(6.0) 5.0 0.8 40.0	頁岩	直線刃片刃の磨製石包丁である。全面丁寧 に研磨している。背部近くに2孔を両面か ら穿つが、円孔の位置が片寄っている。半 分が欠損している。	

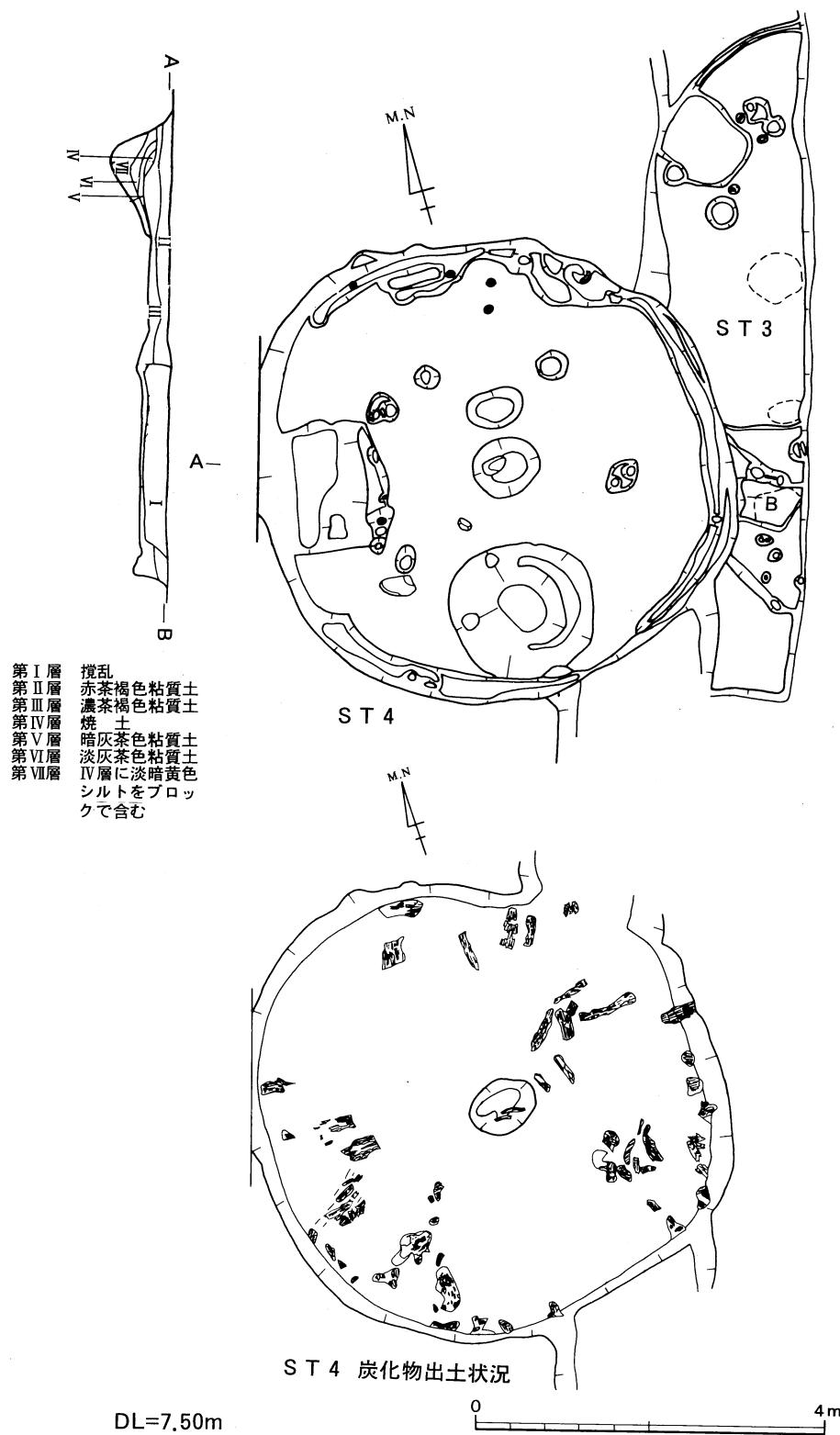
挿図番号	遺構番号	器種	計測値 最大長 最大幅 最大厚 (cm, g)	材質	特徴	備考
294	S D 7	石包丁	(6.9) 6.5 1.8 61.0	みかぶ緑色岩	未製品である。穿孔の途中で破損したものと考えられる。研磨は全く施されていない。	石包丁製作過程を知る上で良好な資料である。
295	S T 1	"	9.7 4.4 1.0 55.0	頁岩	打製石包丁であり、両端は凹状をなす。	
296	S T 8	"	7.6 5.0 0.7 30.0	チャート	自然面を残す扁平なフレークを素材とし、研磨して刃部をつくり出す。両側縁は表面に大きな剥離がみられ、背部には裏面側に少剥離による調整がみられる。	
297	S K 15	石鎌	(2.0) 1.9 0.5	サヌカイト		
298	S K 1	"	2.9 2.0 0.5	"		
299	S D 2	石錐	7.5 5.5 2.5 154.0	砂岩	河原石を利用したもので、紐かけ用の溝を切り込んでいる。	
300	S T 9	ノミ状石器	(5.7) 1.6 1.0 140.0	千枚岩	磨製石器の一部と思われる。一面に研磨痕が残っている。	
301	S T 5	勾玉状石器	4.9 2.2 2.2 50.0	砂岩	カギ状になった石器で、全面が研磨されている。	302と近接して、床面より出土。
302	"	磨石	3.5 2.9 2.4 30.0	"	楕円形の石玉で少し研磨されている。	
303	S T 6	"	4.8 3.6 2.4 55.0	"	"	
304	S T 8	"	(6.2) 6.6 3.6 200.0	"	欠損しているが、全面を研磨。先端に丹塗り。	
305	S T 9	"	12.1 6.0 3.3 420.0	"	全面を丁寧に研磨している。 両長側縁が、わずかに凹んでおり、紐を掛けた痕跡の可能性がある。	ツチノコとして使用されたものか。
306	"	棒状石器	13.1 3.6 2.9 124.0	千枚岩	柱状に剥離しており、一面は自然面である。 特に、加工痕は認められない。	壁溝に突き刺さっていたものである。



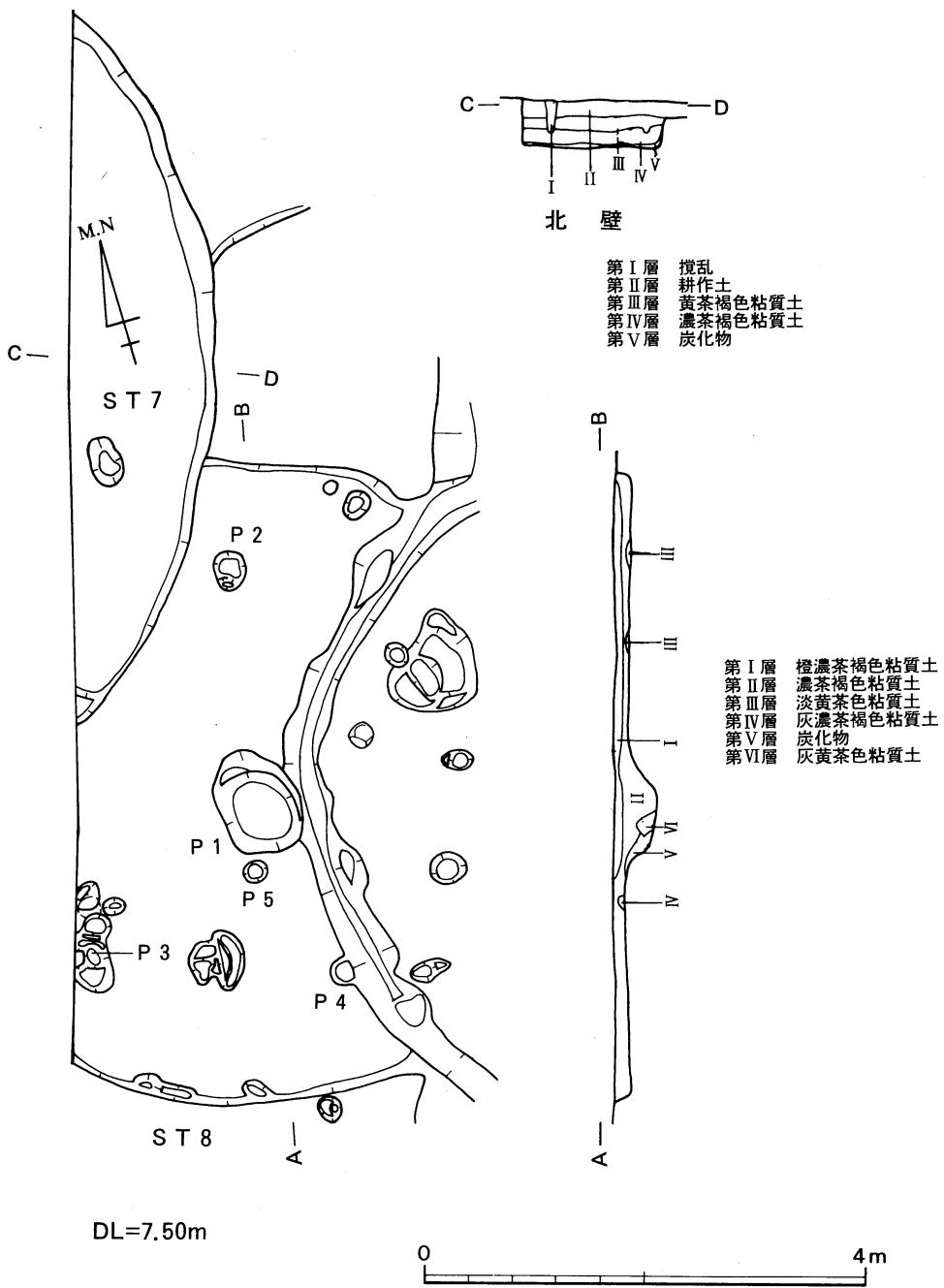
第99図 S T 1・2



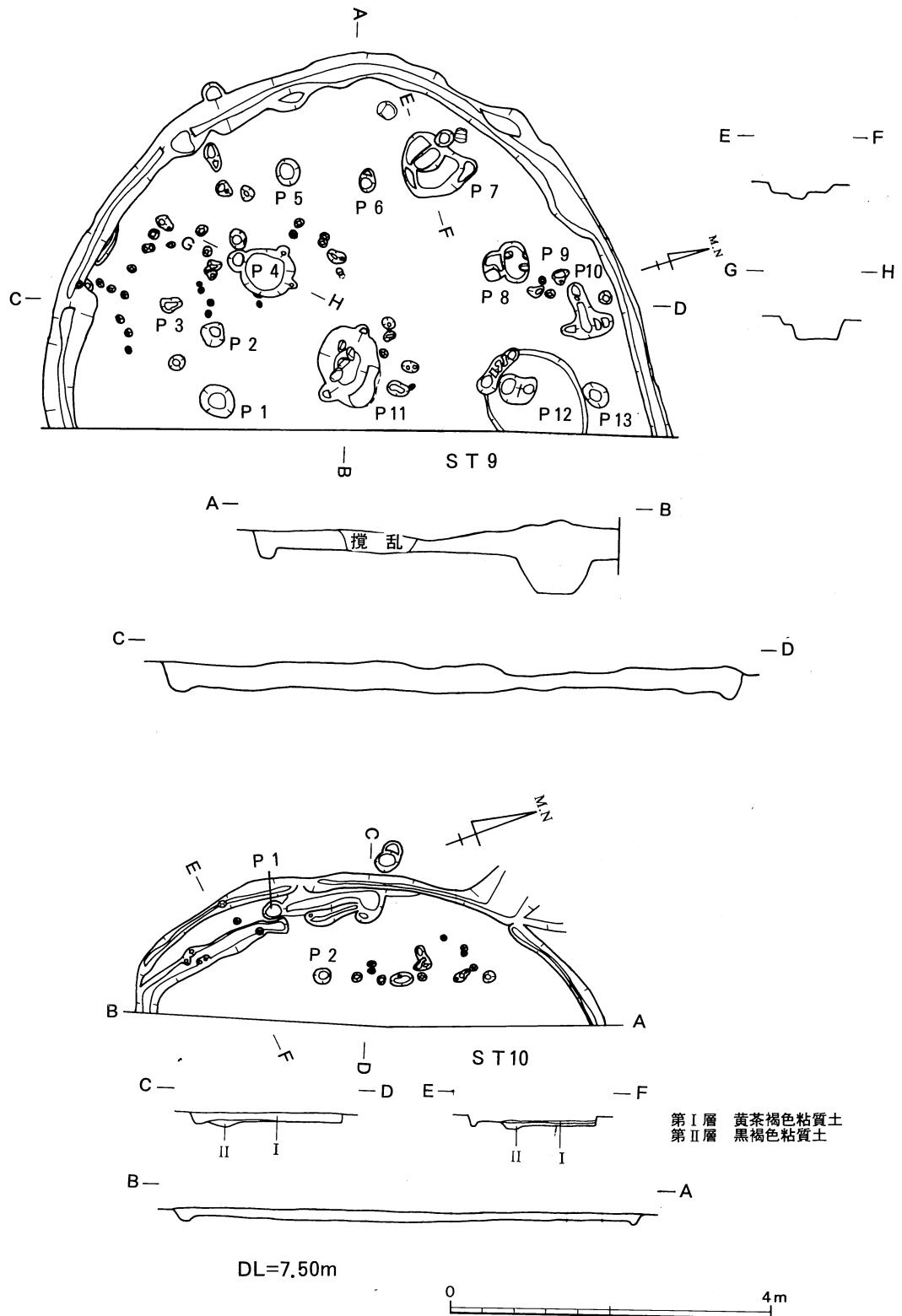
第 100 図 ST 5・6, ST 6-P 1, ST 5-P 9



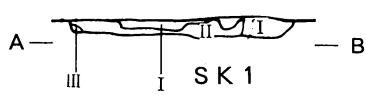
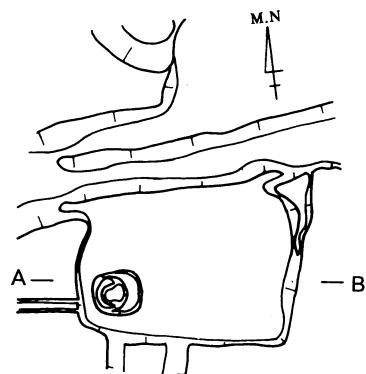
第 101 図 ST 3・4, ST 4 炭化物出土状況



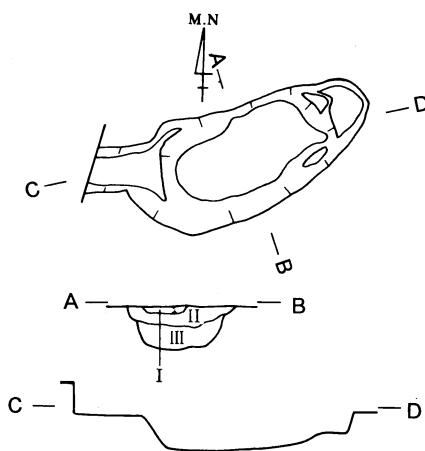
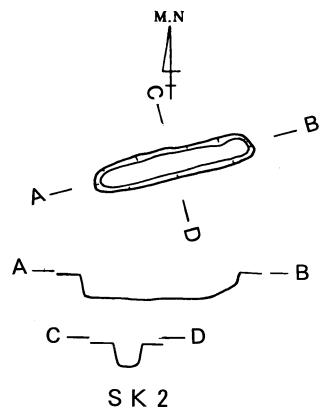
第 102 図 ST 7・8



第 103 図 ST 9・10

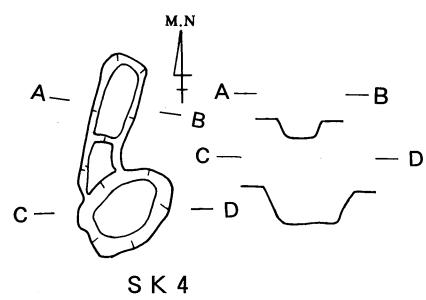


第Ⅰ層 搅乱
第Ⅱ層 黄淡茶褐色粘質土
第Ⅲ層 茶褐色粘質土



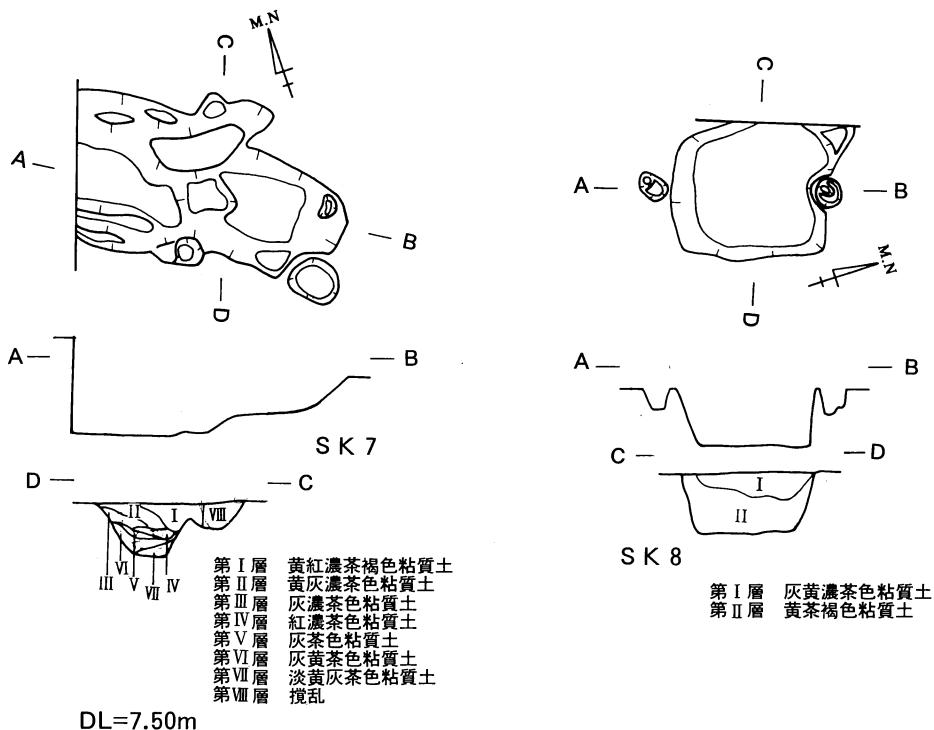
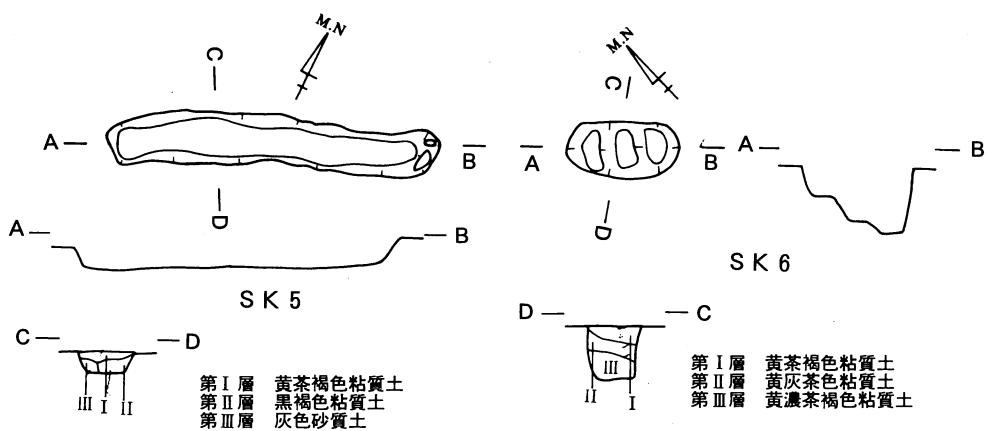
第Ⅰ層 搅乱
第Ⅱ層 黄黒褐色粘質土
第Ⅲ層 黑褐色粘質土

DL=7.50m

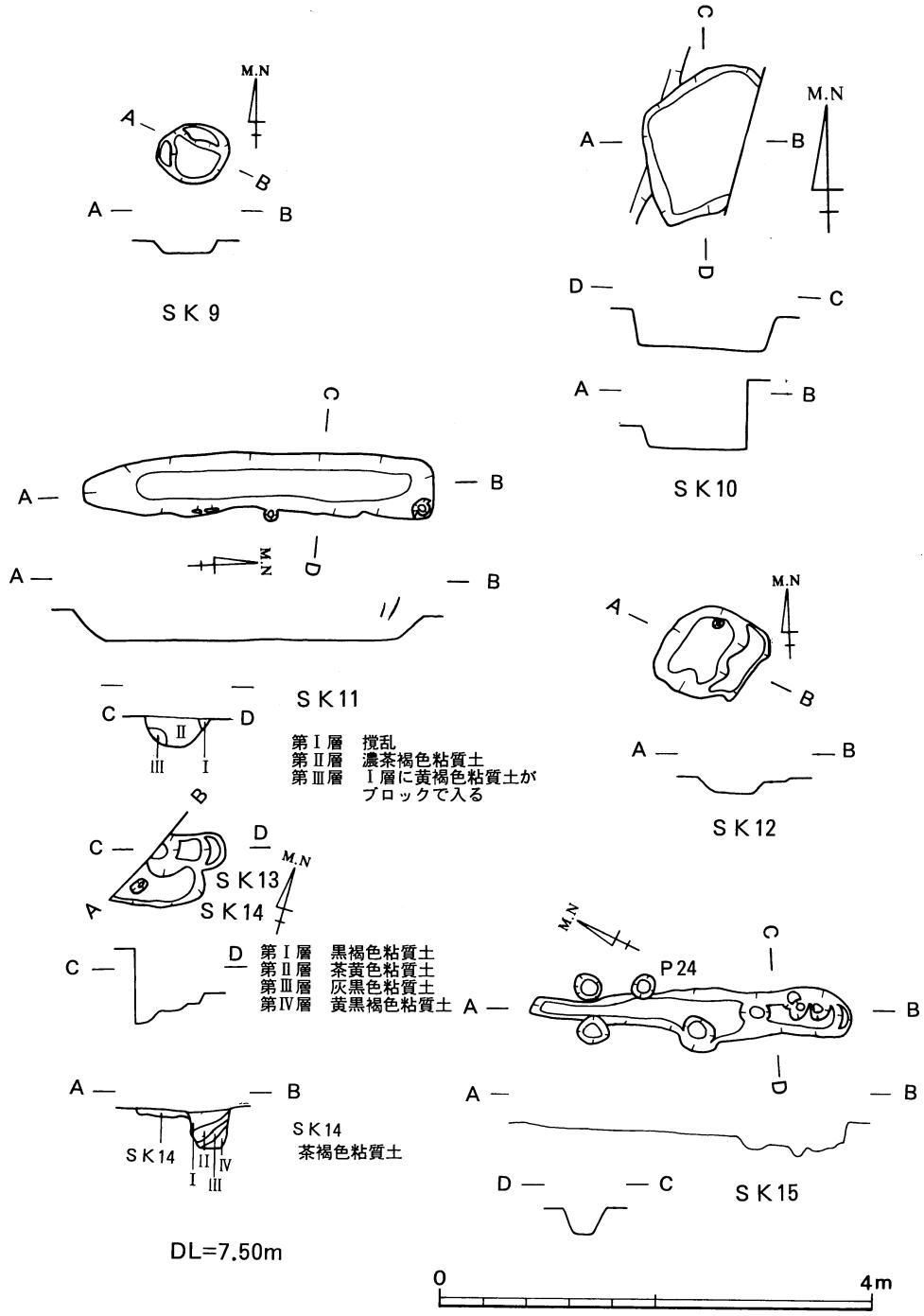


0 4m

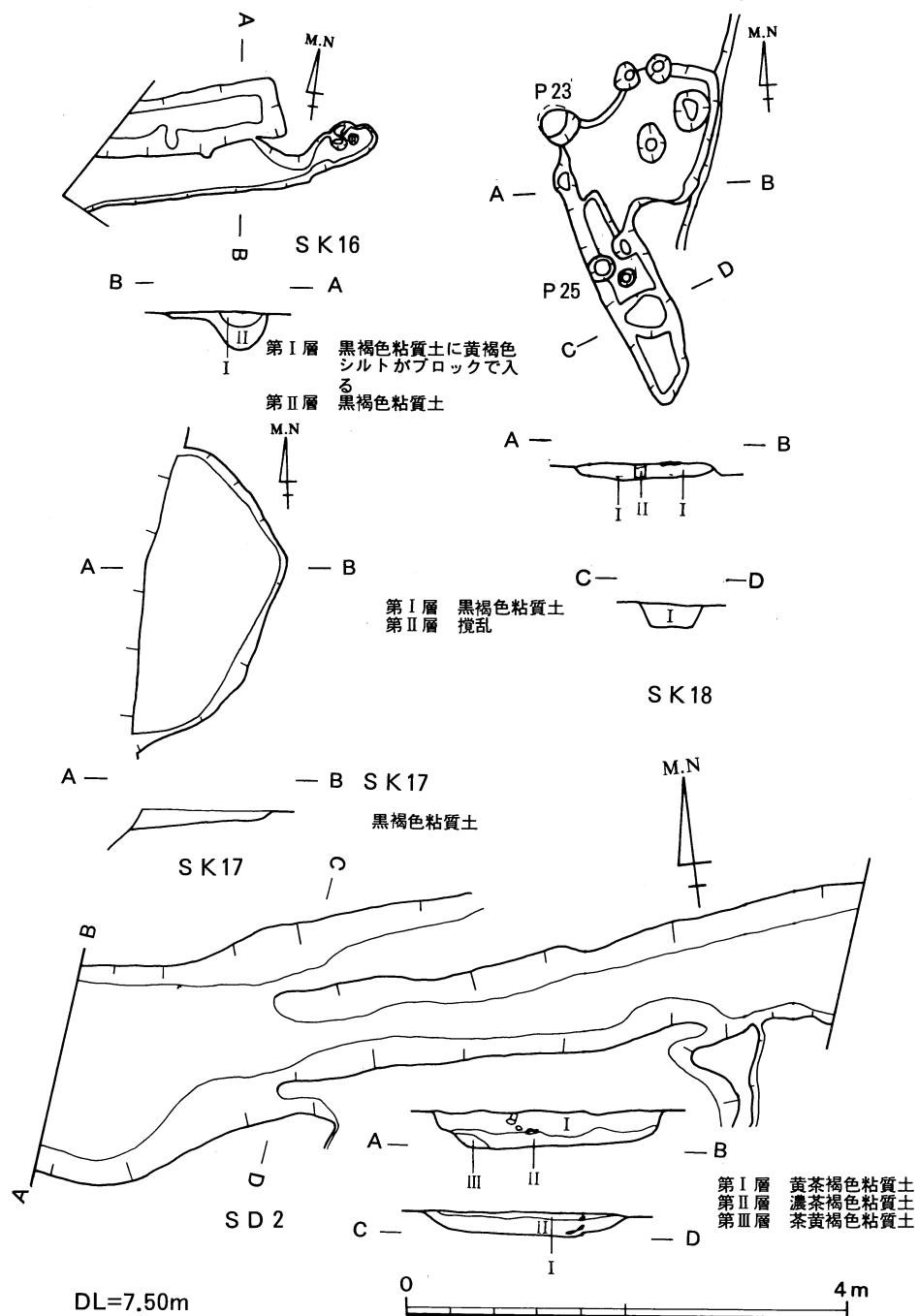
第104図 SK 1 ~ 4



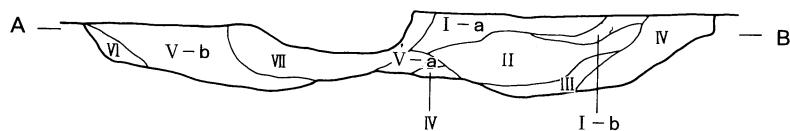
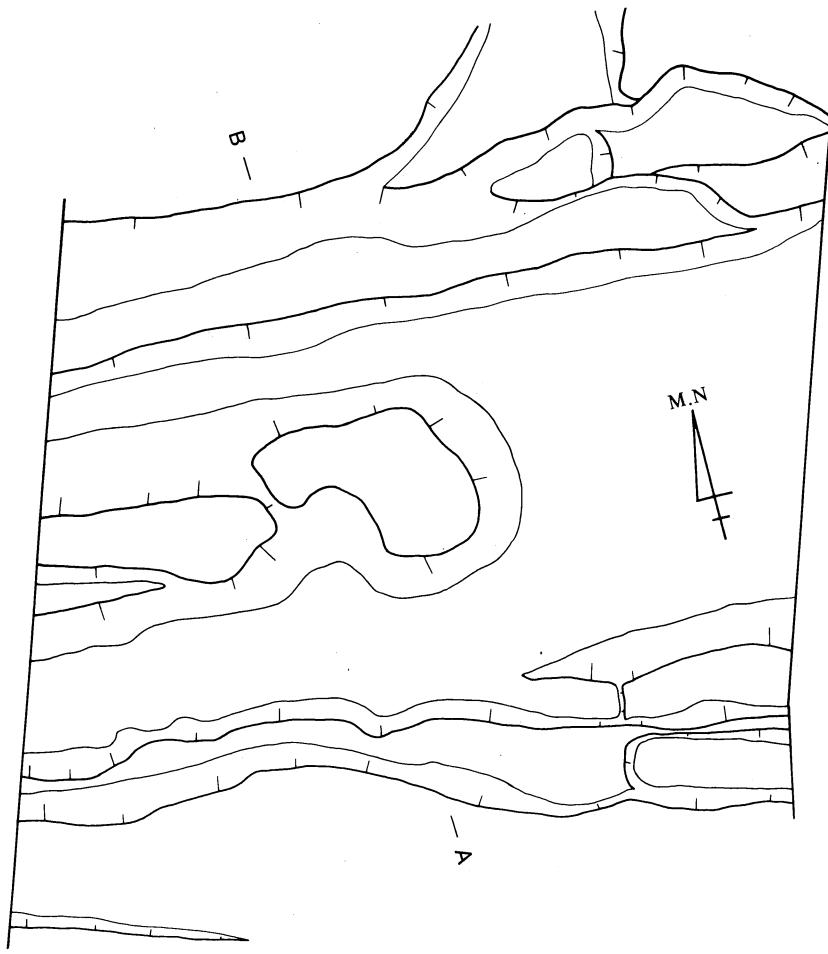
第105図 SK 5~8



第 106 図 SK 9 ~ 15



第 107 図 SK 16~18, SD 2



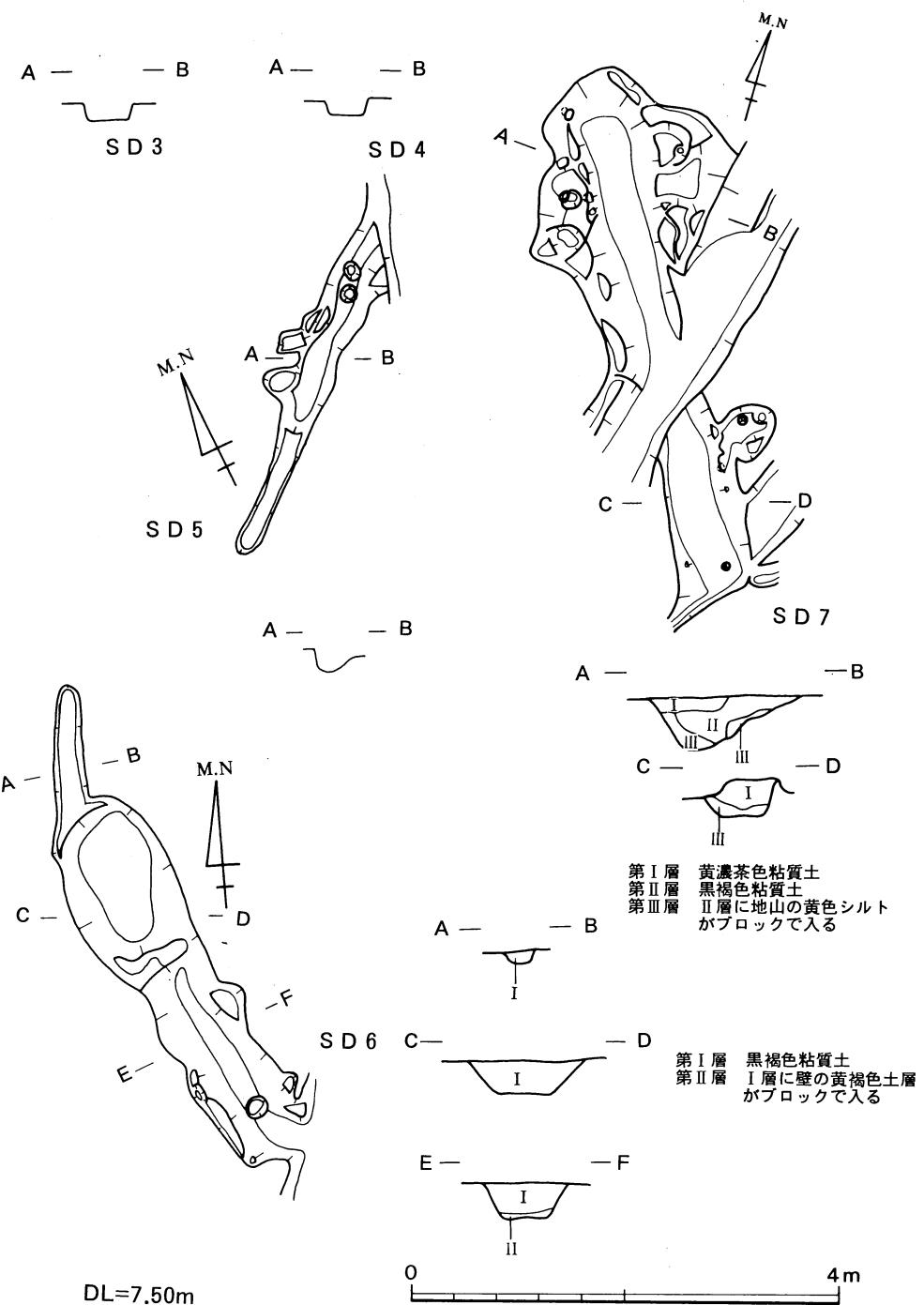
SD 1

第 I - a 層	淡茶褐色シルト
第 I - b 層	灰茶色シルト
第 II 層	茶褐色沙礫
第 III 層	茶褐色シルト～粘質土
第 IV 層	茶褐色粘質土
第 V - a 層	黄茶色シルト
第 V - b 層	青灰色シルト
第 VI 層	灰茶色粘質土
第 VII 層	搅乱

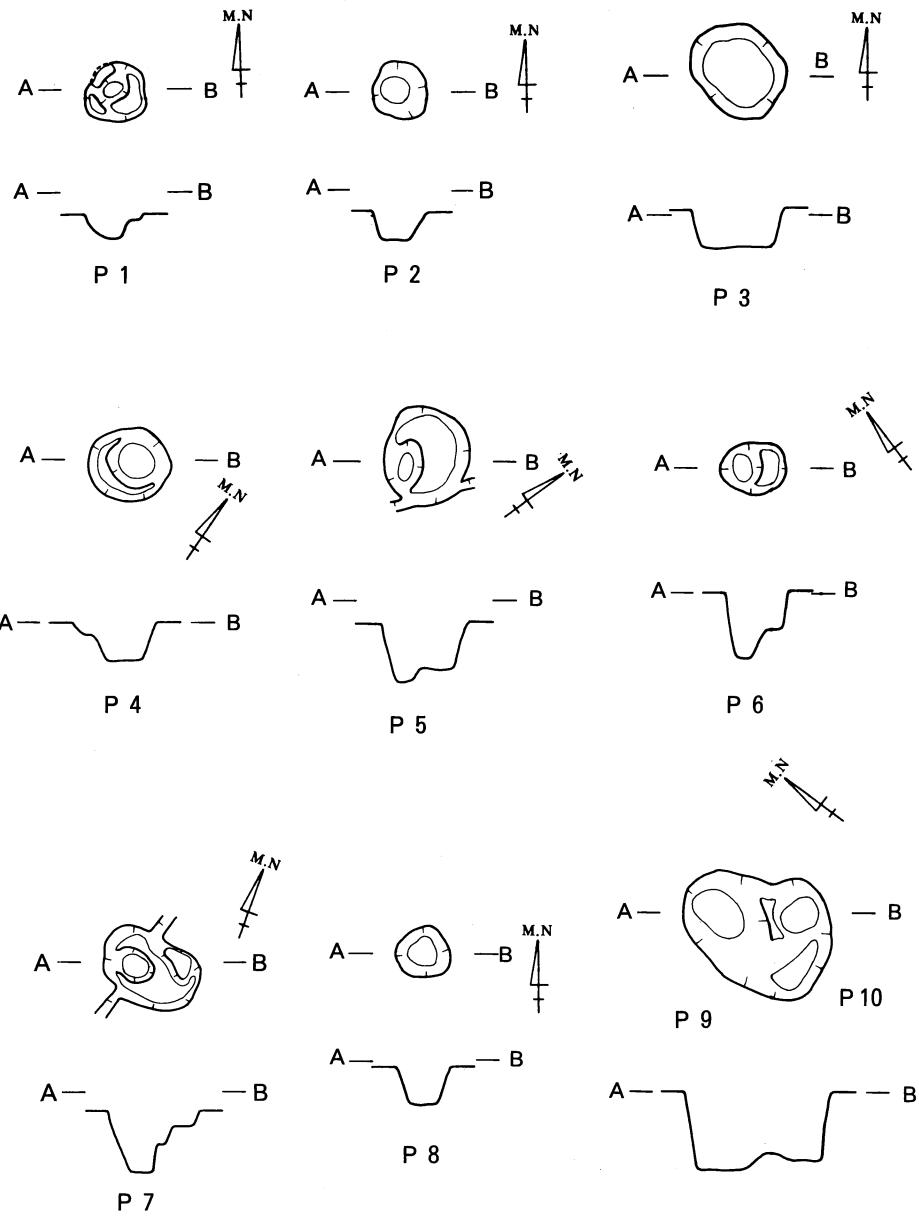
DL=7.50m



第 108 図 SD 1



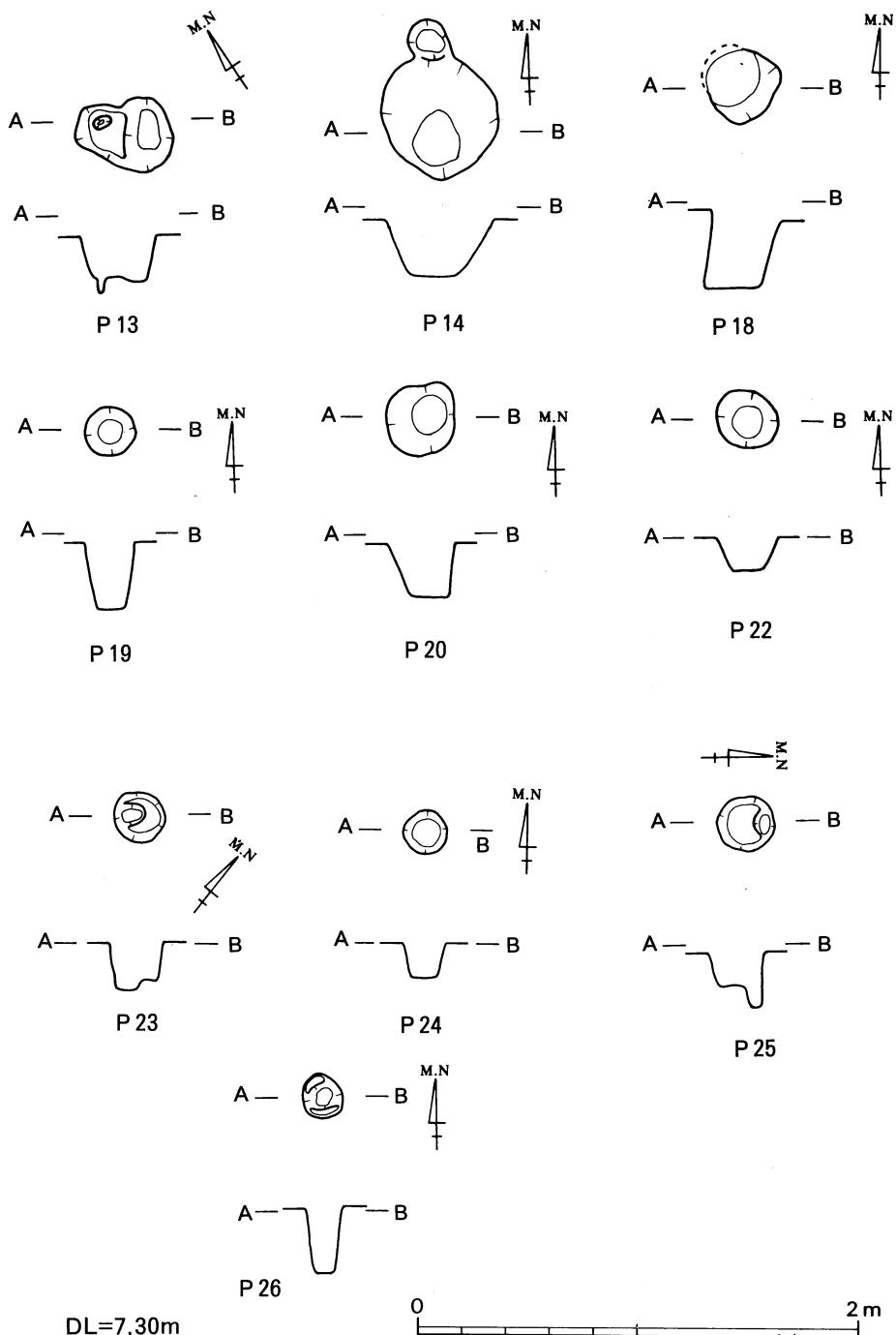
第 109 図 SD 3 ~ 7



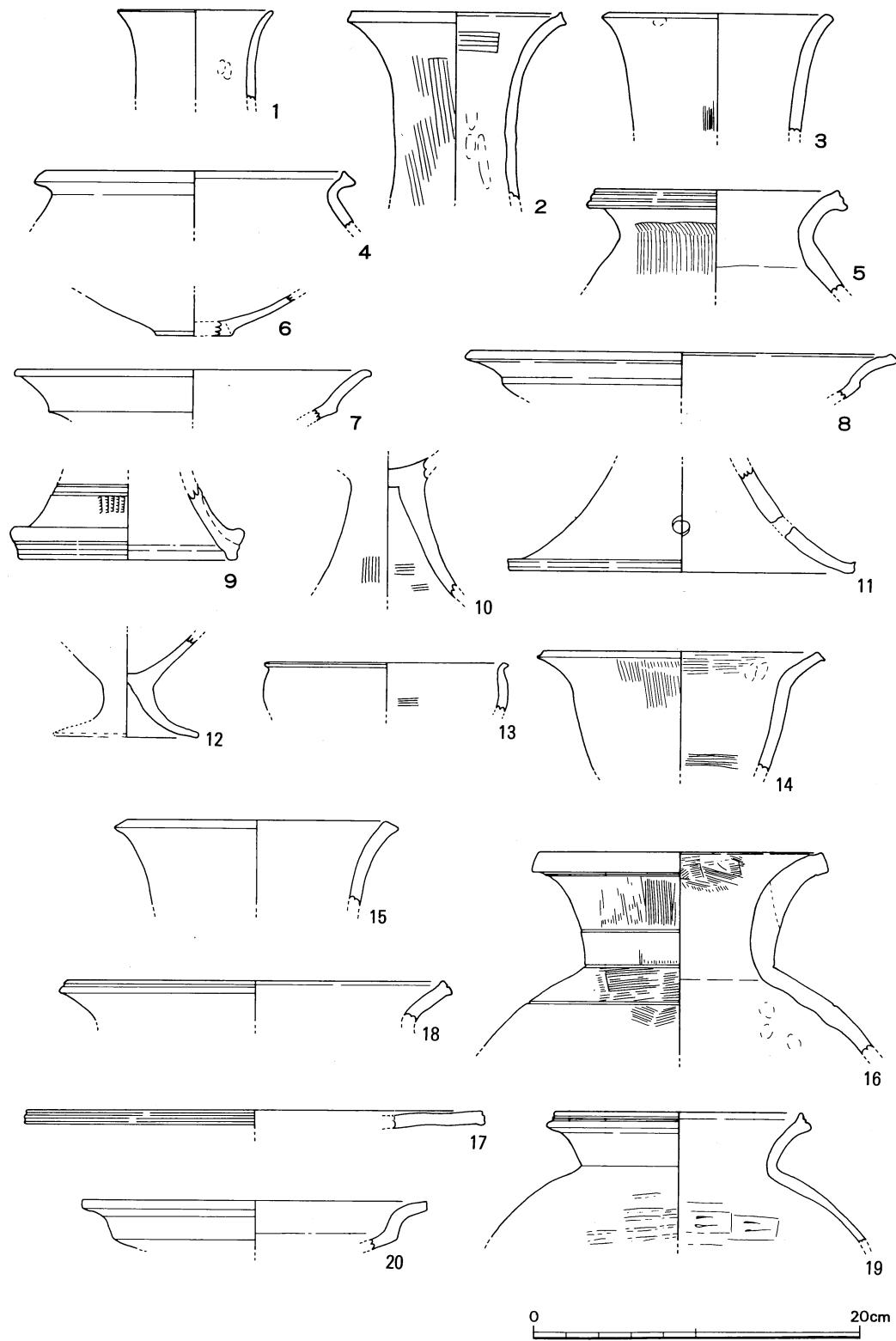
DL=7.30m

0 2m

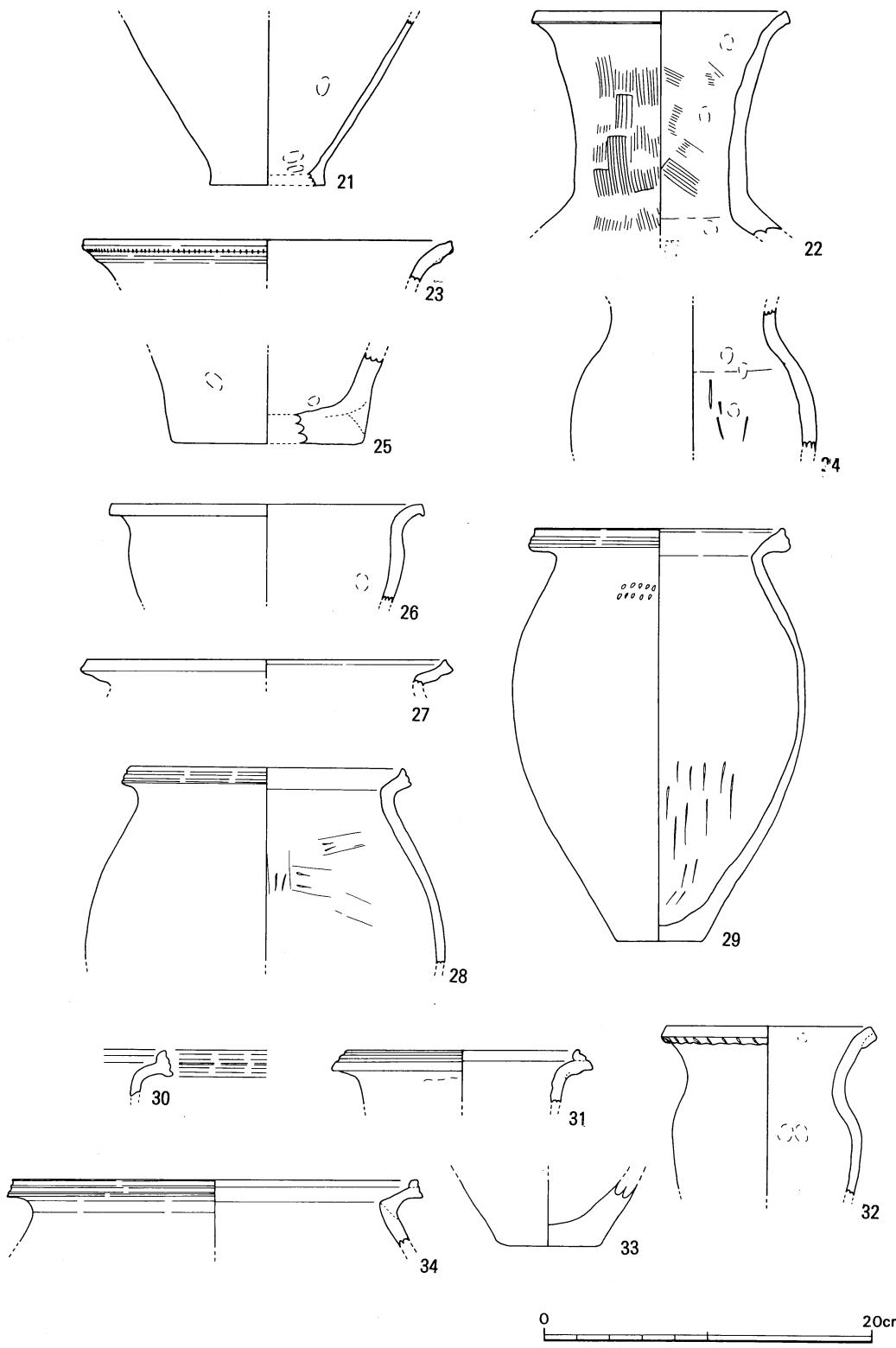
第 110 図 P 1 ~ 10



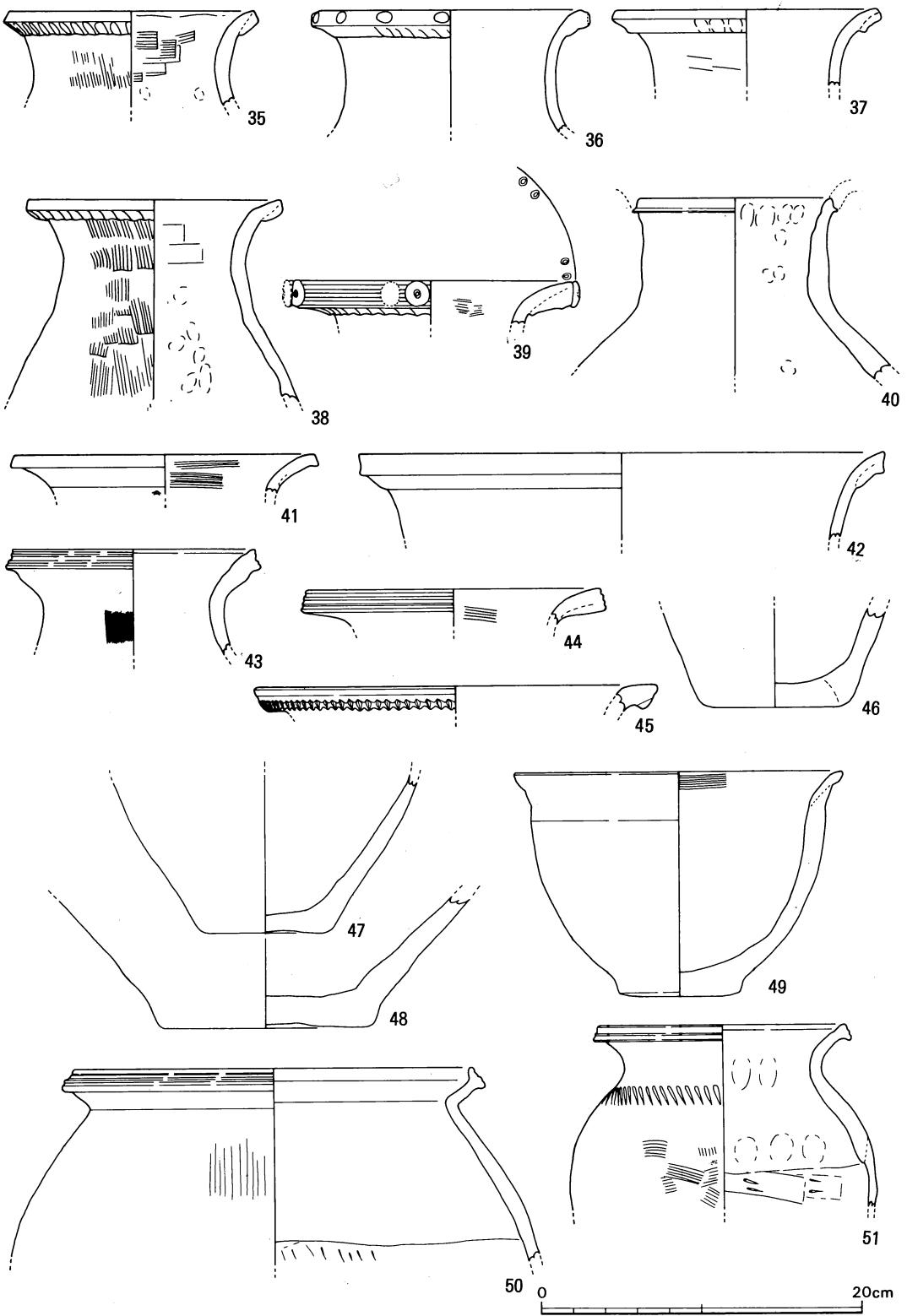
第111図 P13・14、18~20、22~26



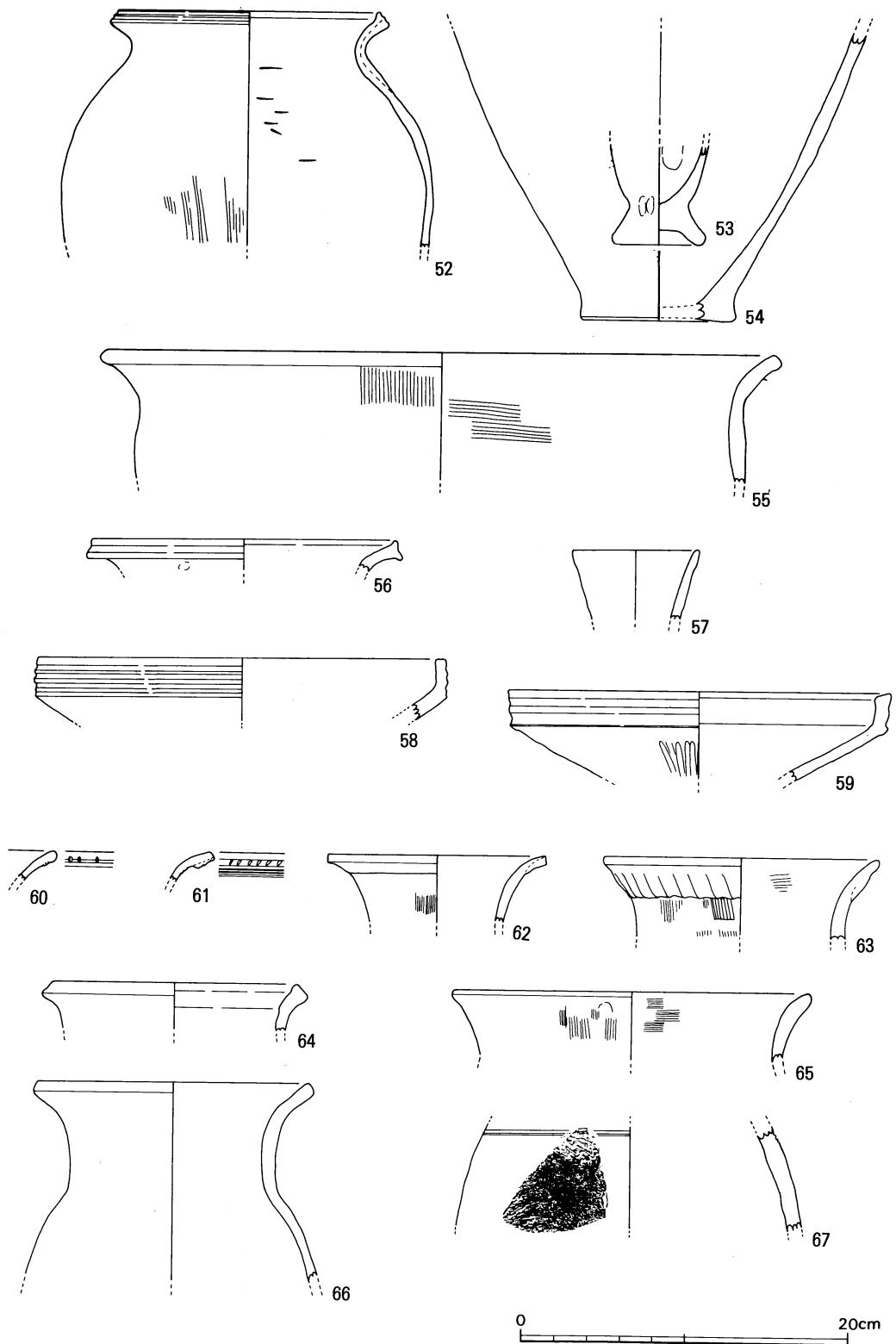
第112図 S T 1・2 出土遺物



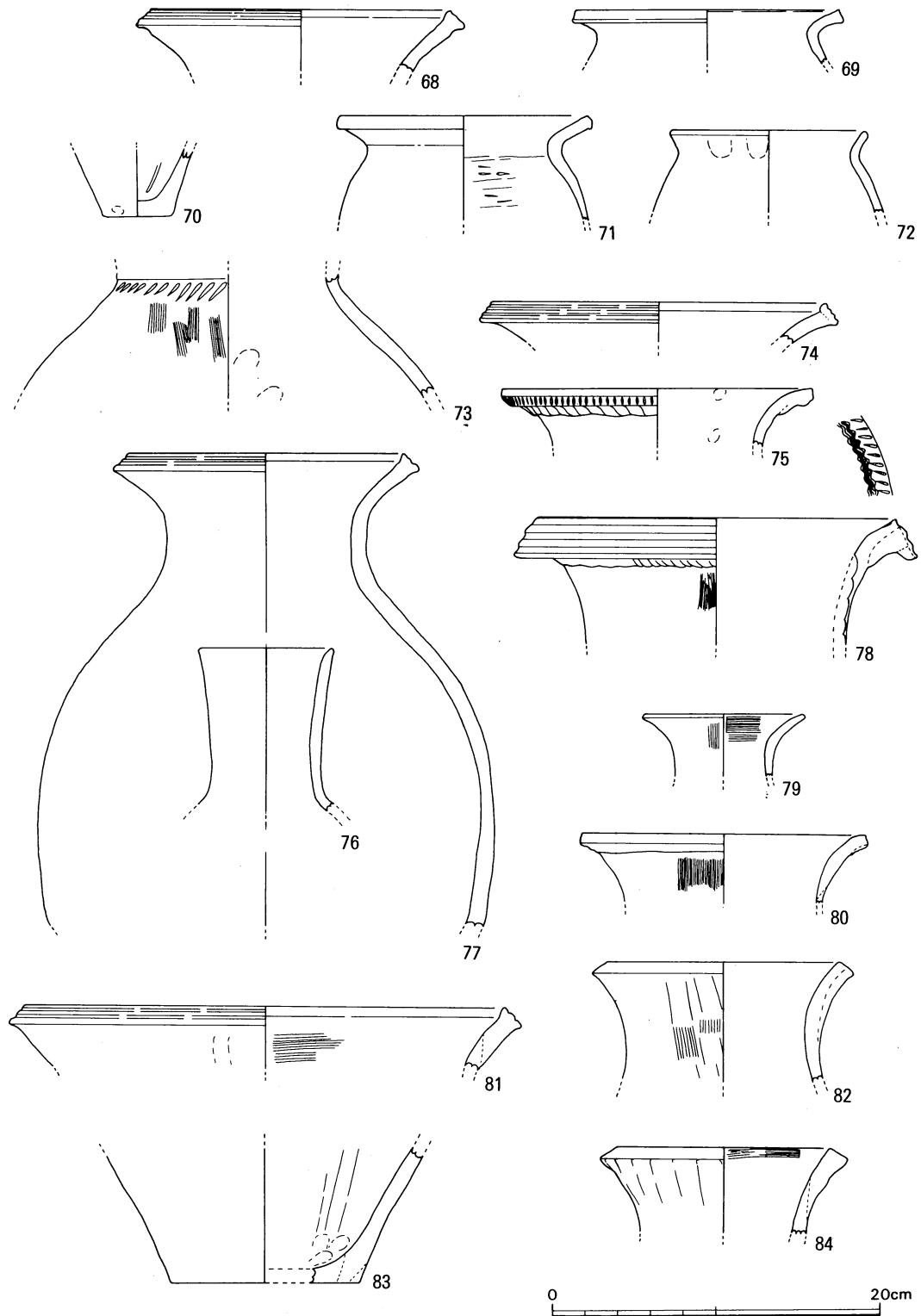
第 113 図 S T 2 ~ 5 出土遺物



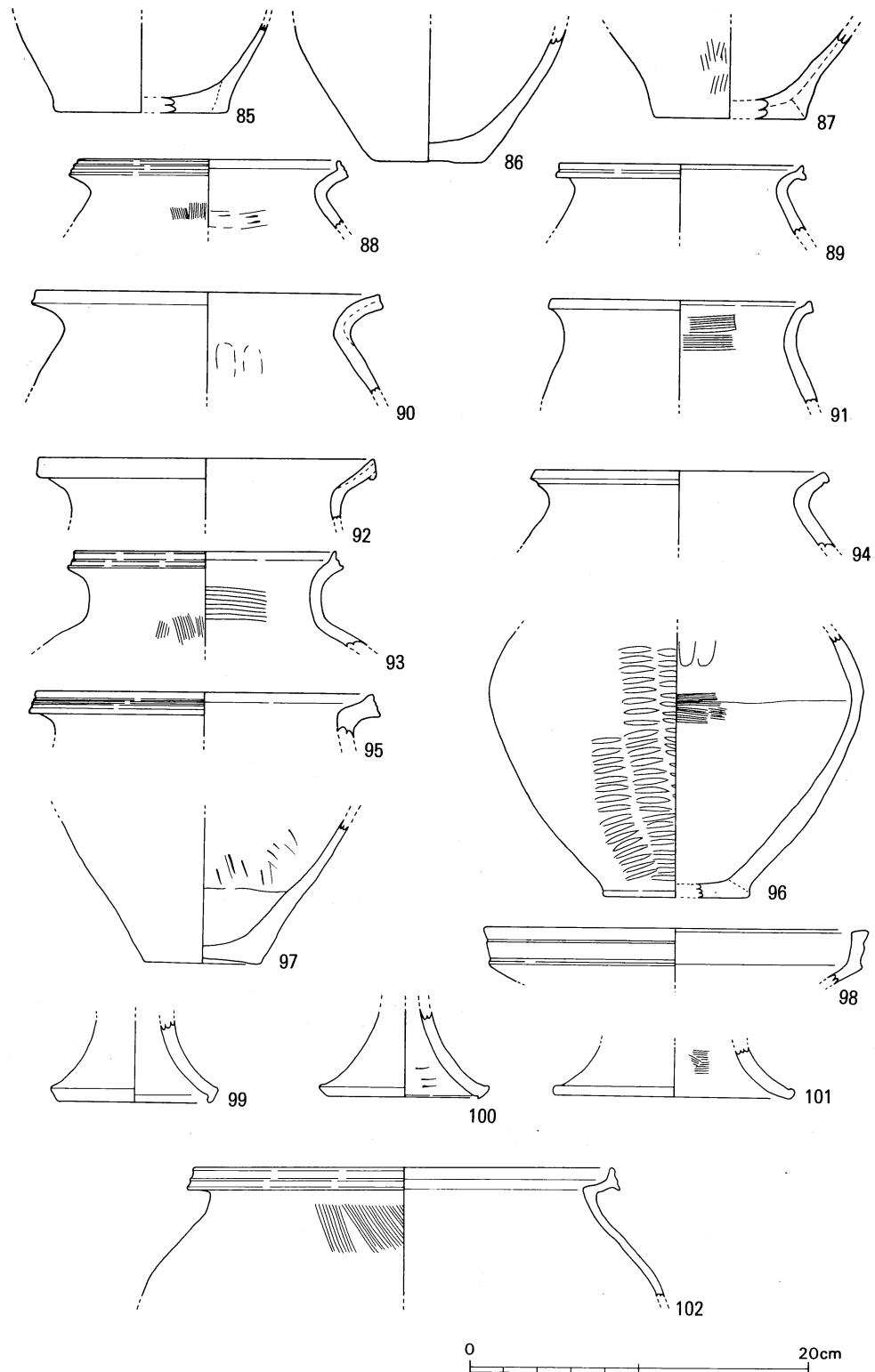
第 114 図 S T 6 出土遺物



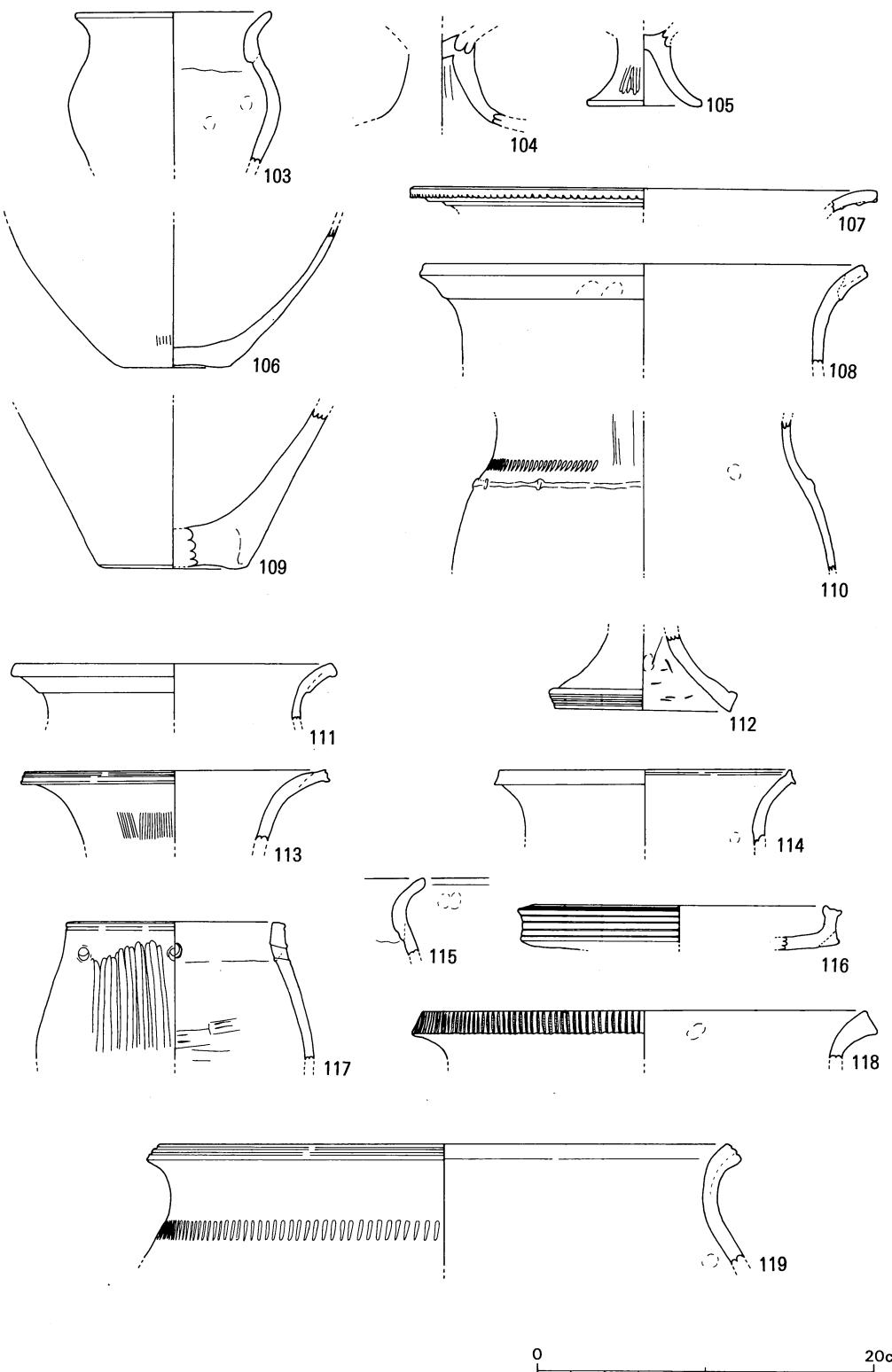
第115図 S T 6~8出土遺物



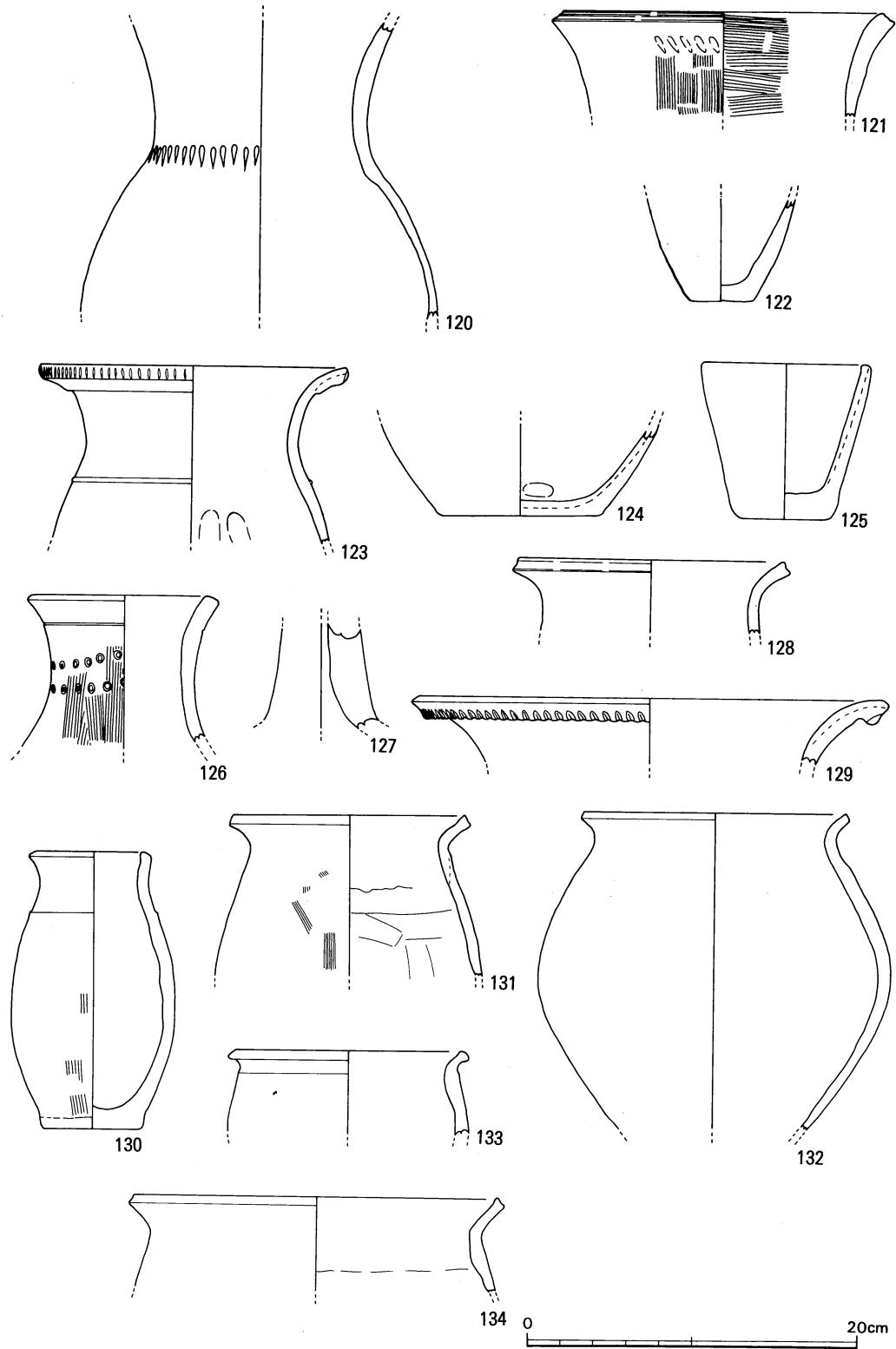
第 116 図 S T 8・9 出土遺物



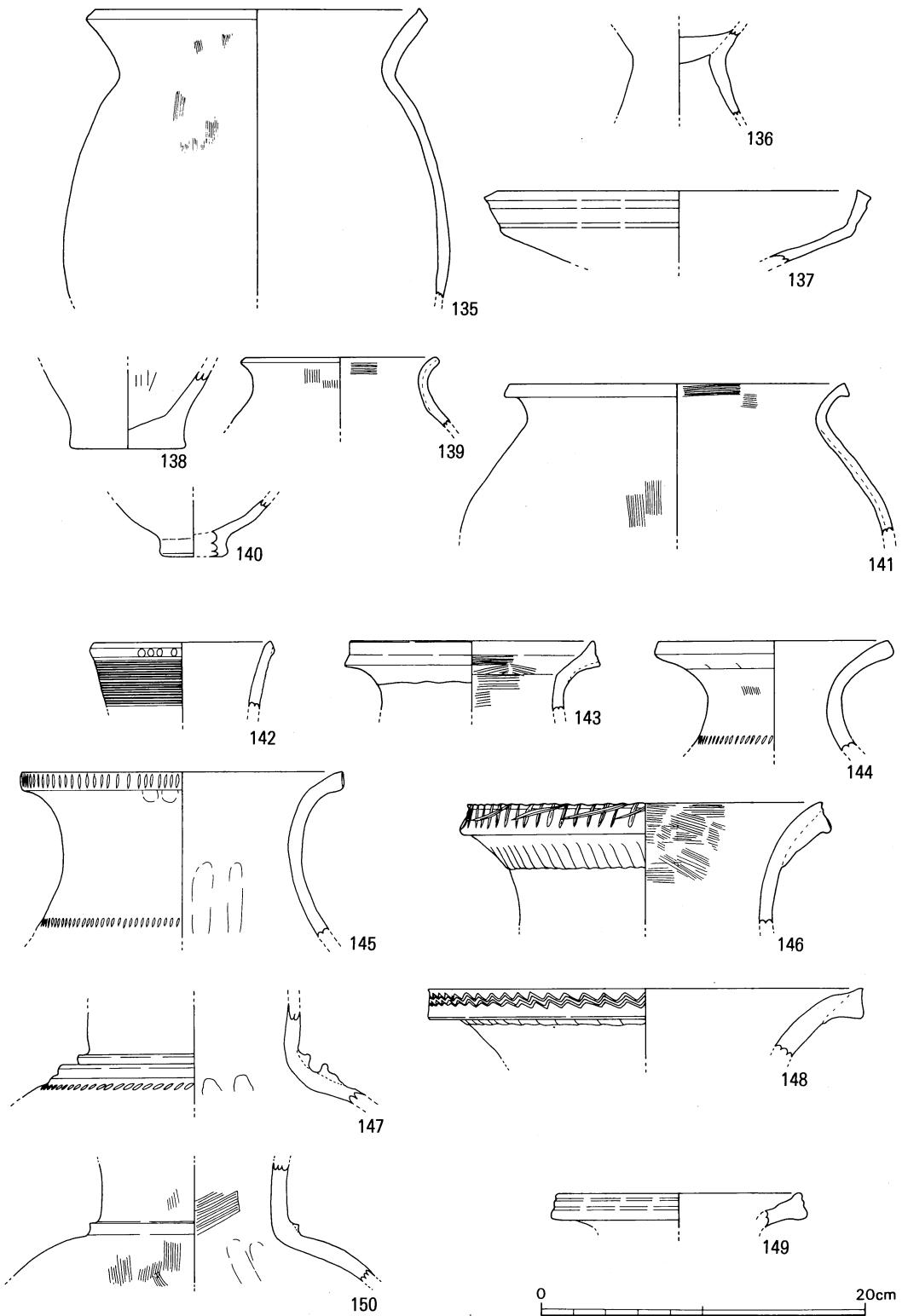
第117図 S T 9・10出土遺物



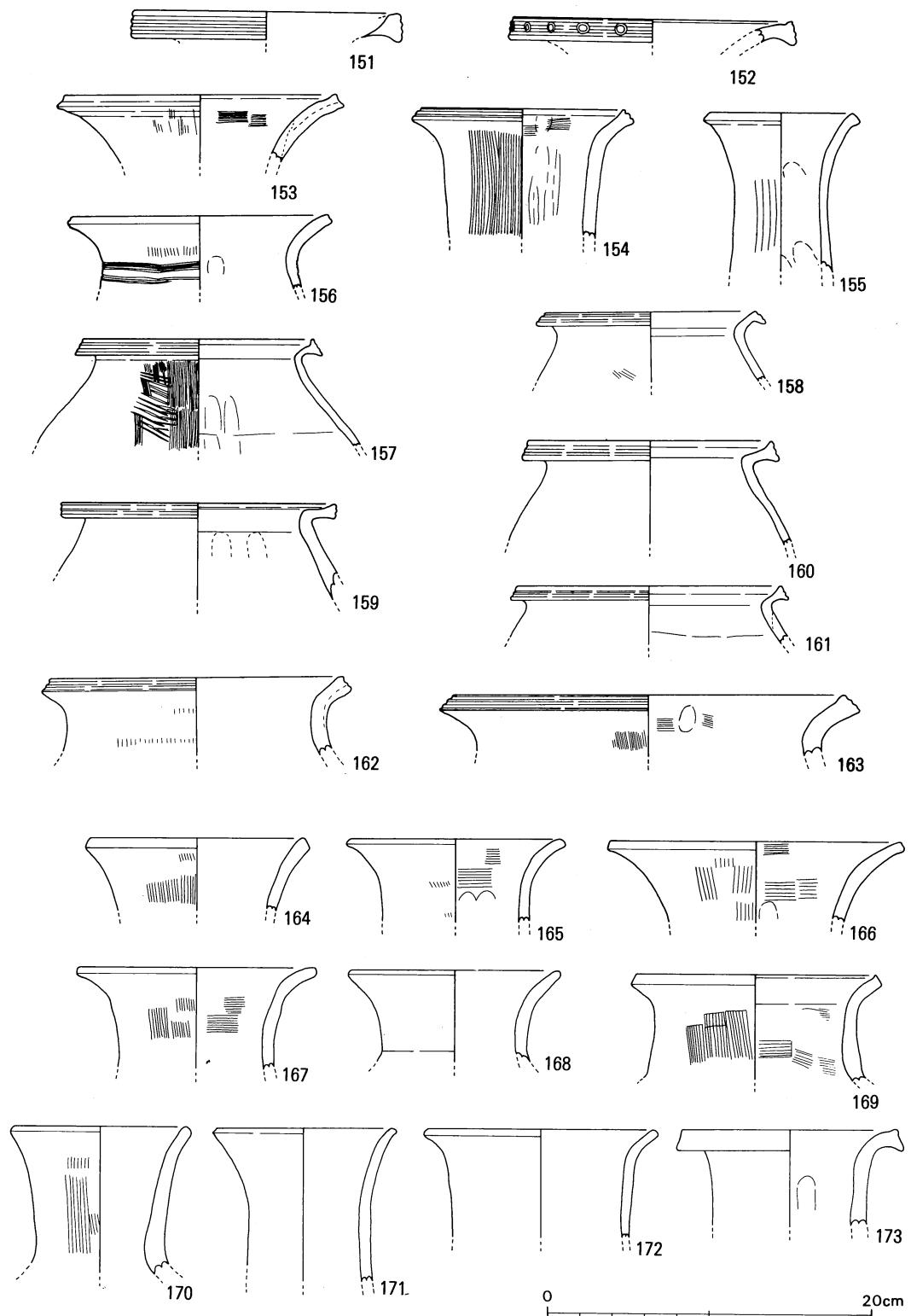
第118図 SK1~5、9~11出土遺物



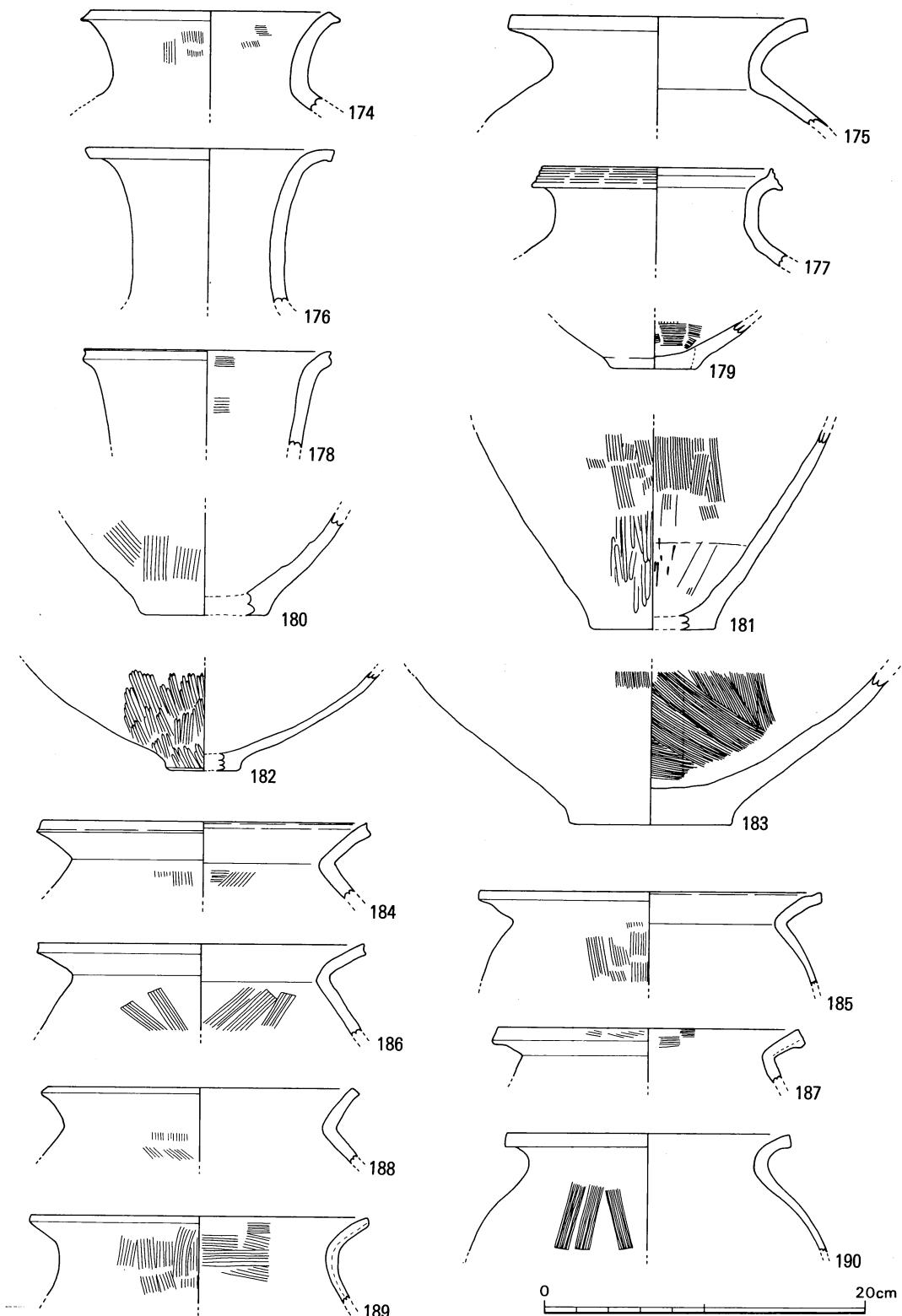
第119図 SK 11~16出土遺物



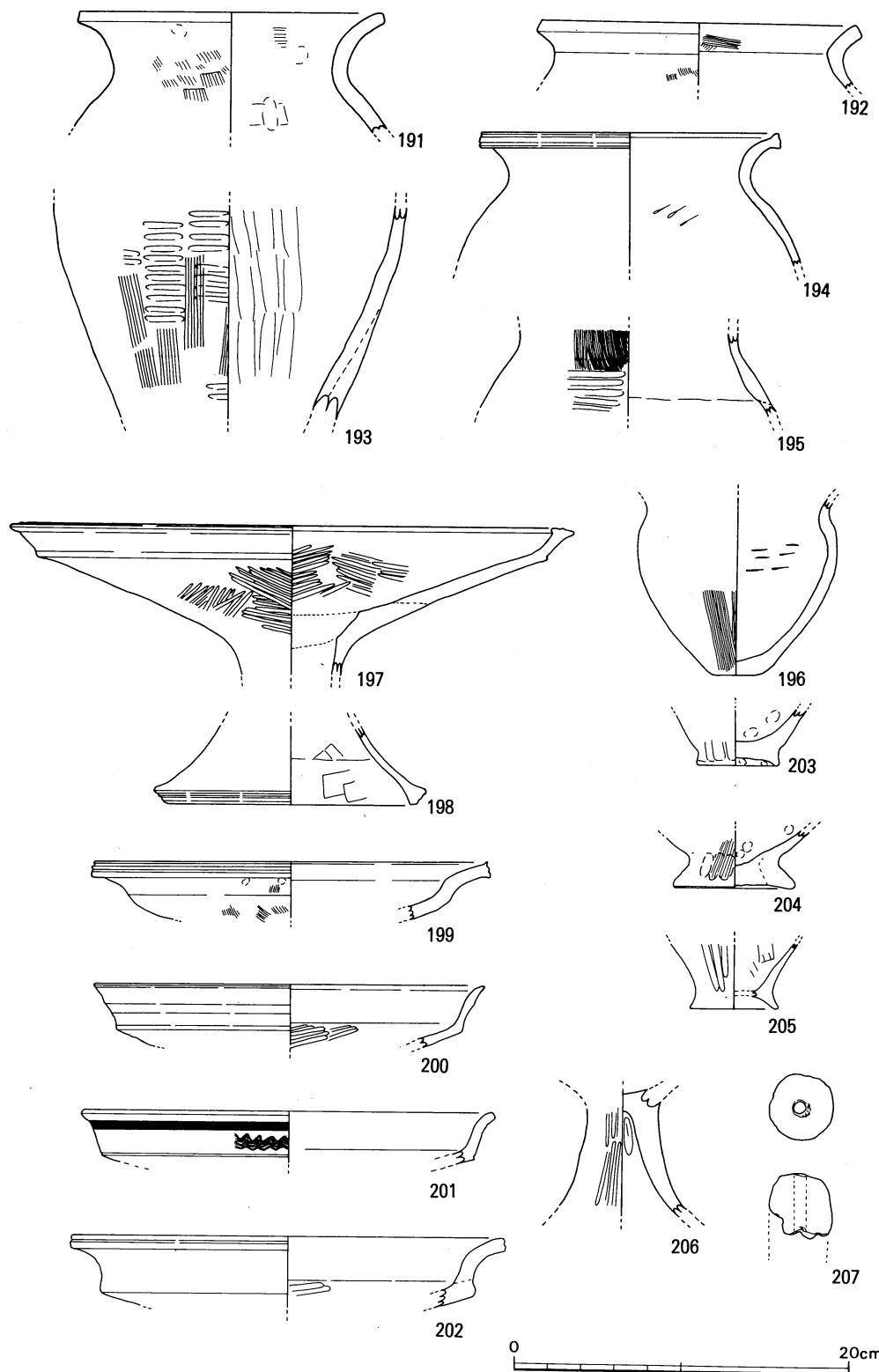
第120図 SK 16~19, SD 1出土遺物



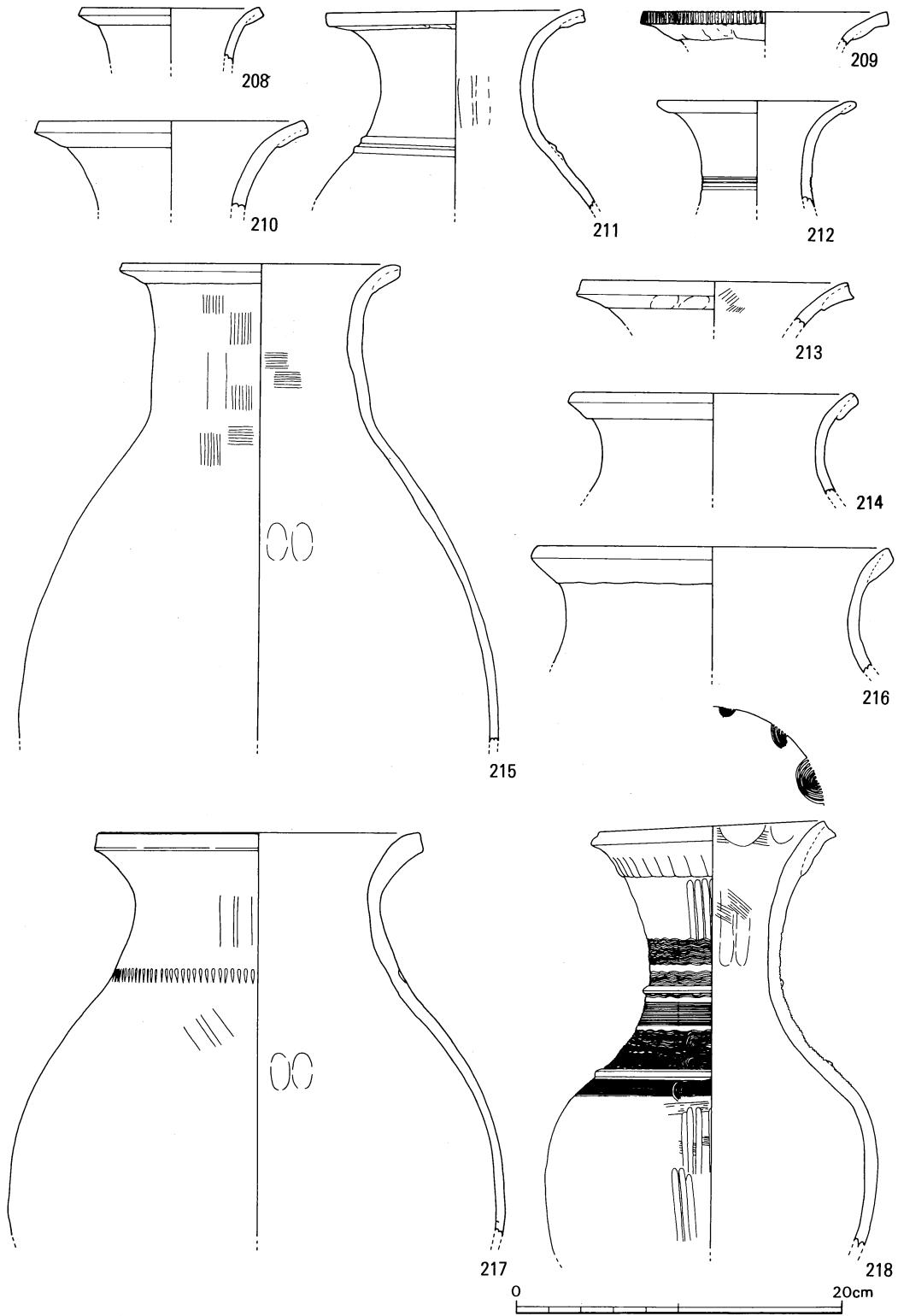
第 121 図 SD 1 出土遺物



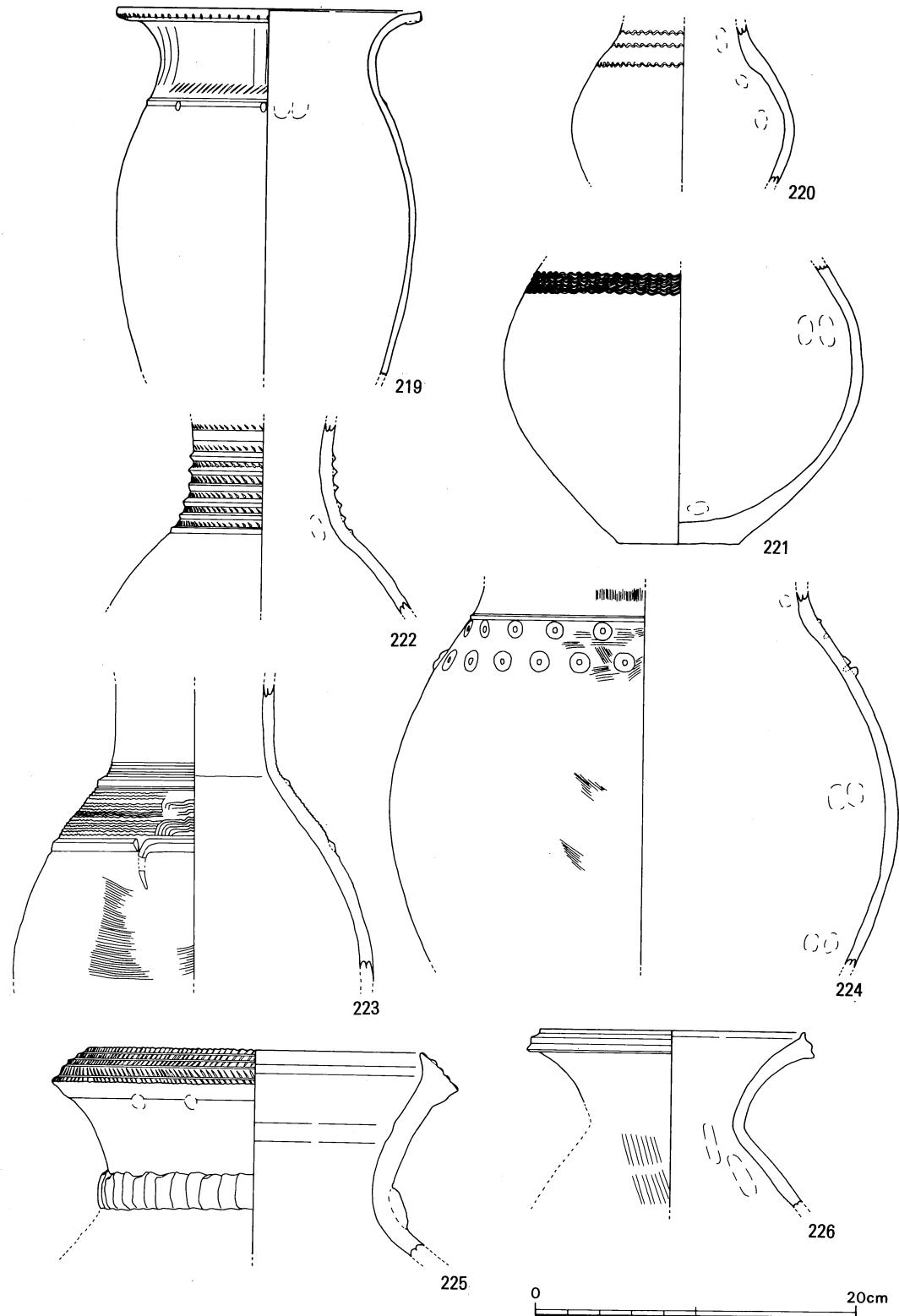
第122図 SD 1 出土遺物



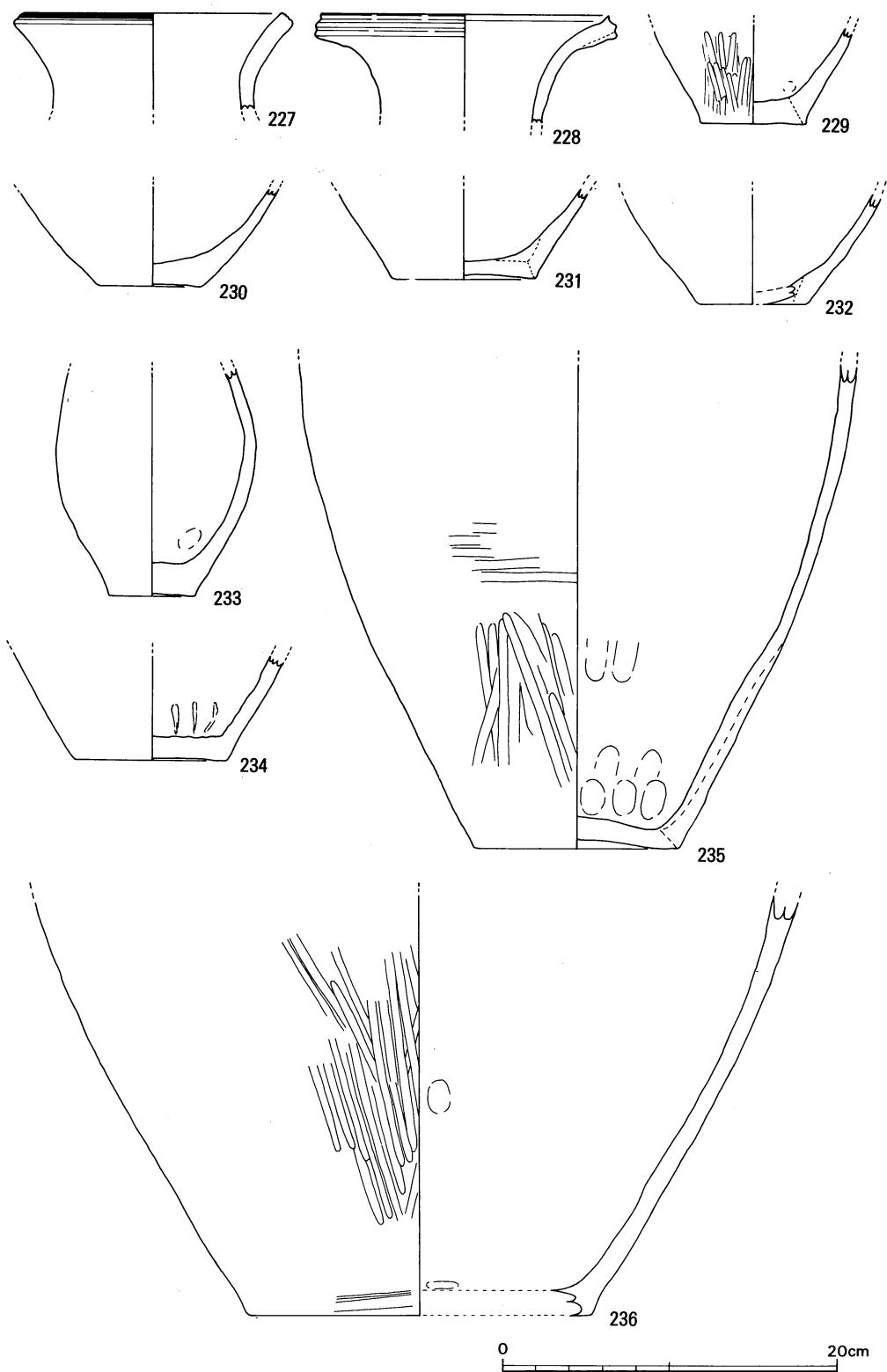
第 123 図 S D 1 出土遺物



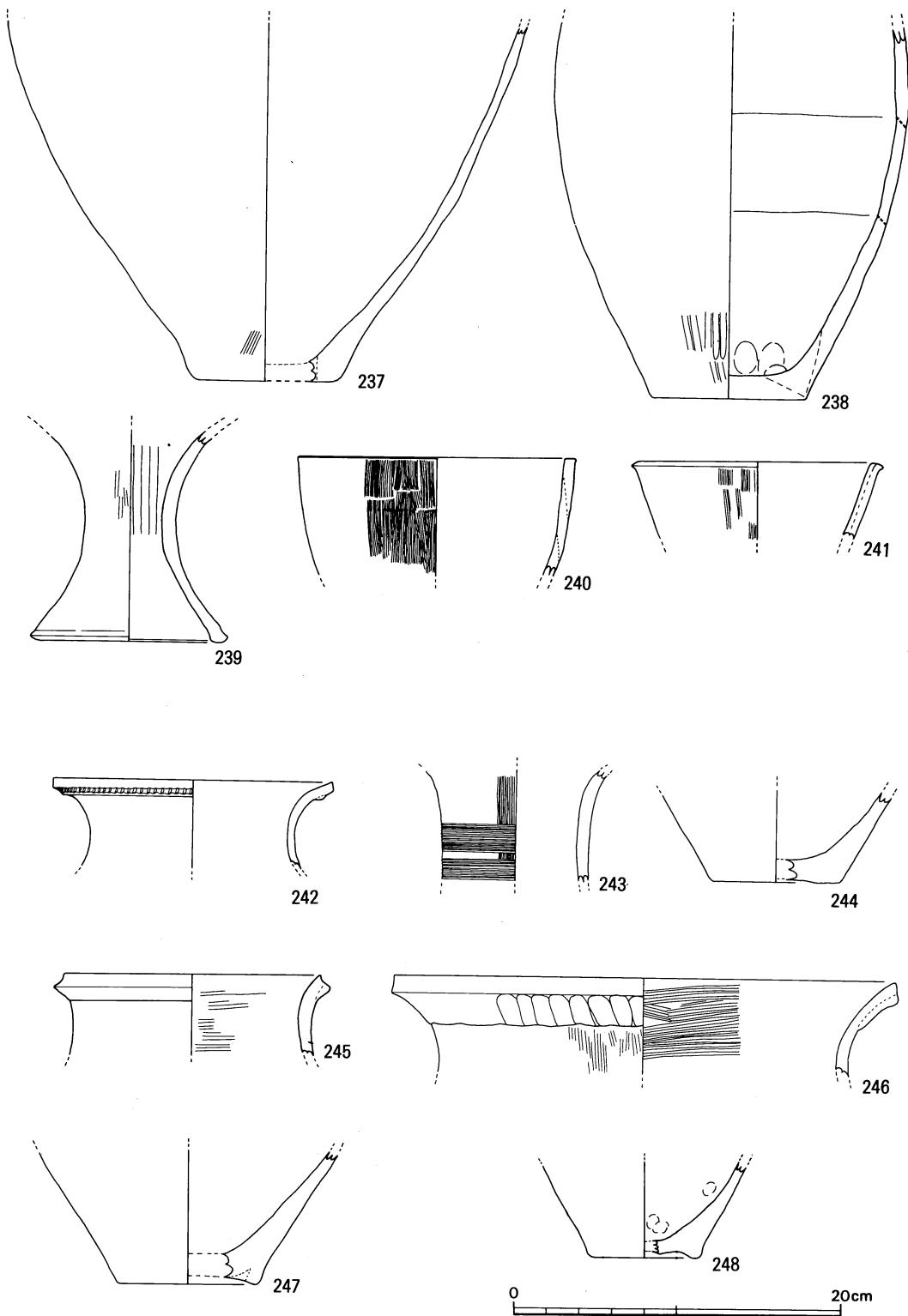
第 124 図 SD 2 出土遺物



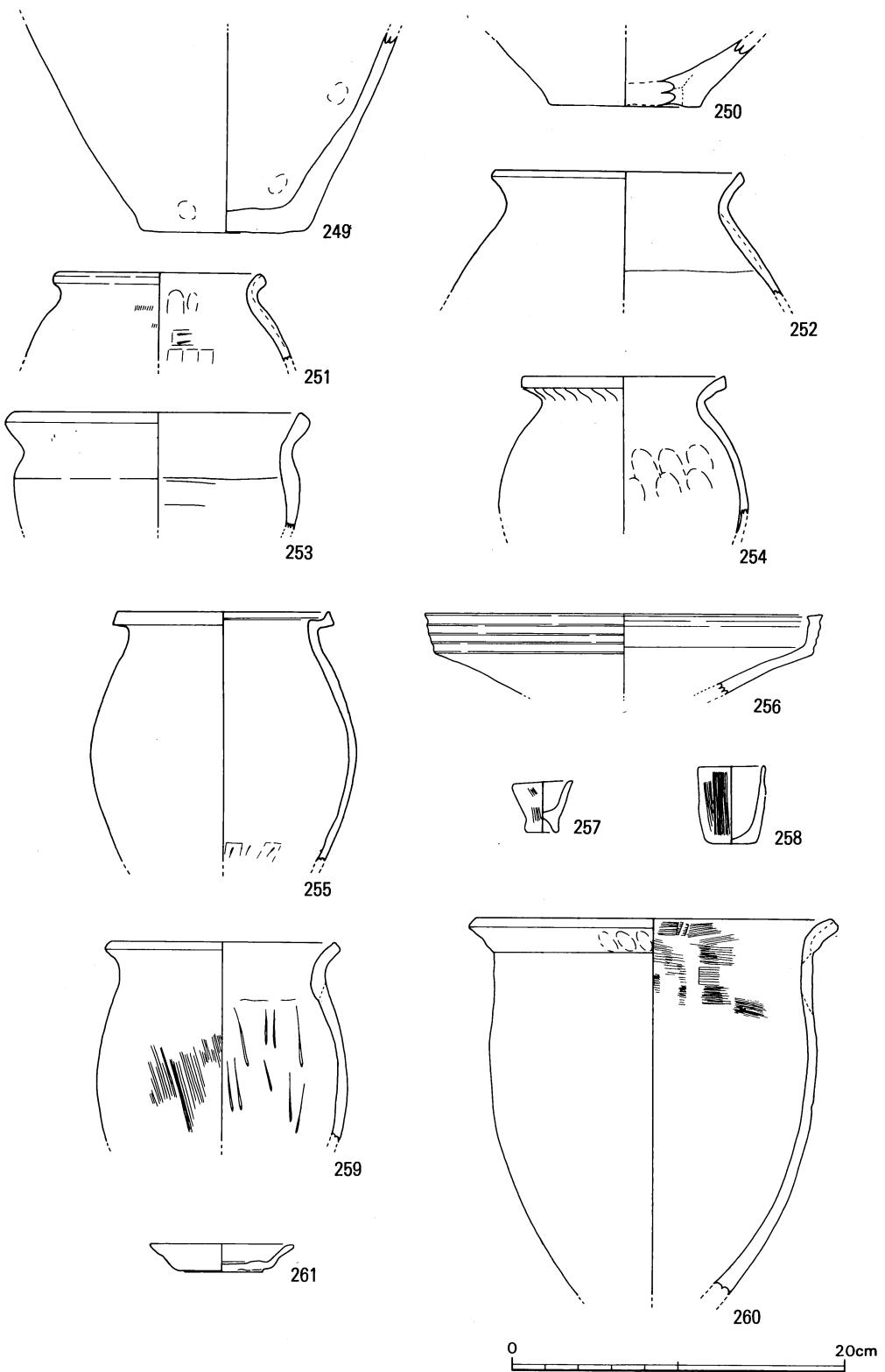
第125図 SD 2出土遺物



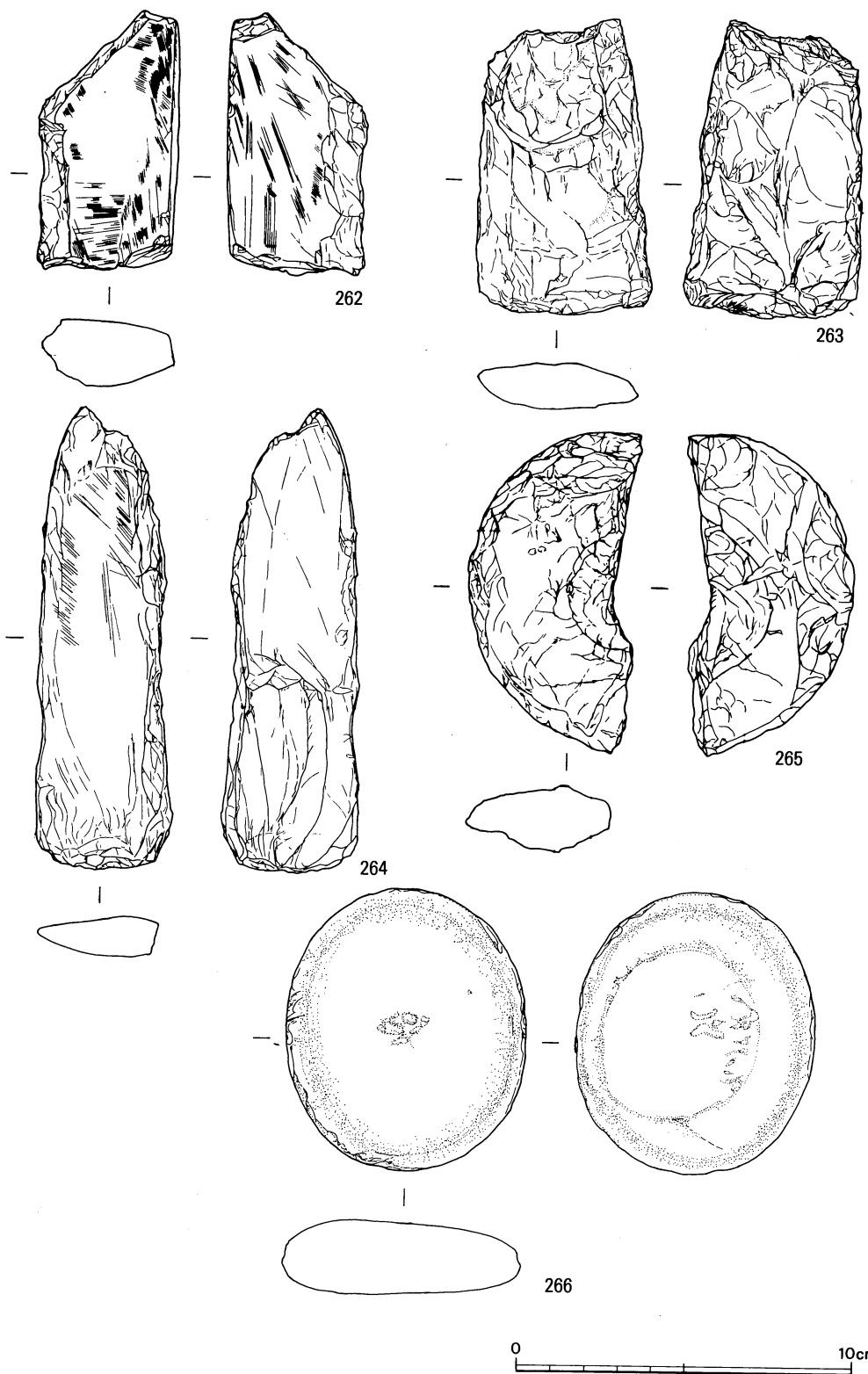
第 126 図 SD 2 出土遺物



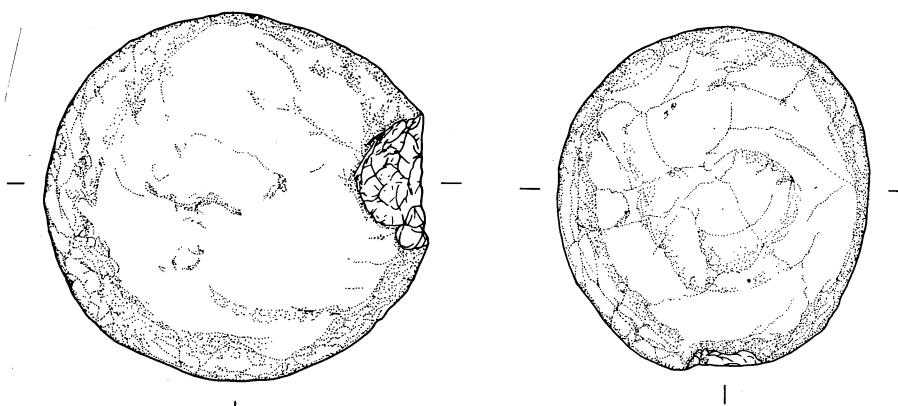
第127図 SD 2・6・7出土遺物



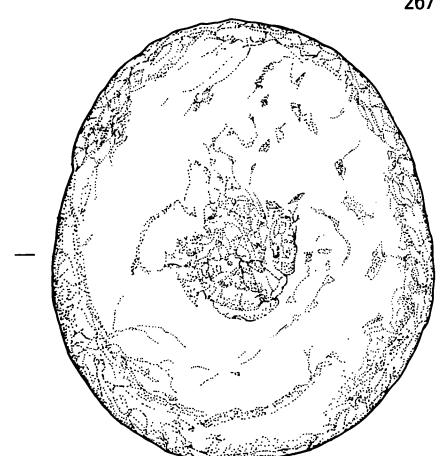
第128図 SD7, P2・7・12出土遺物



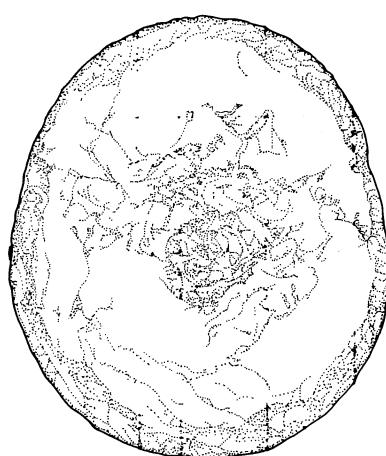
第129図 ST3・6・8・9, SK13出土遺物



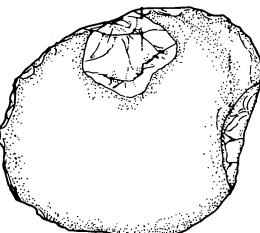
268



267



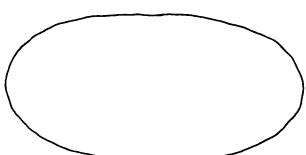
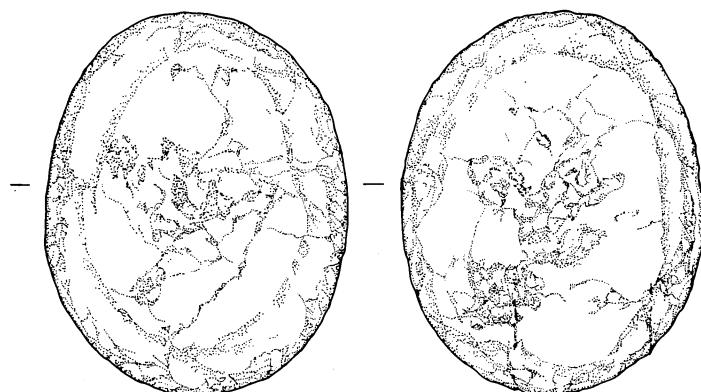
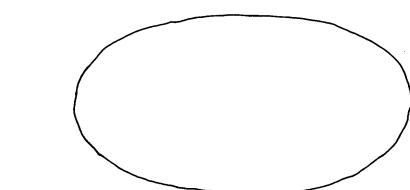
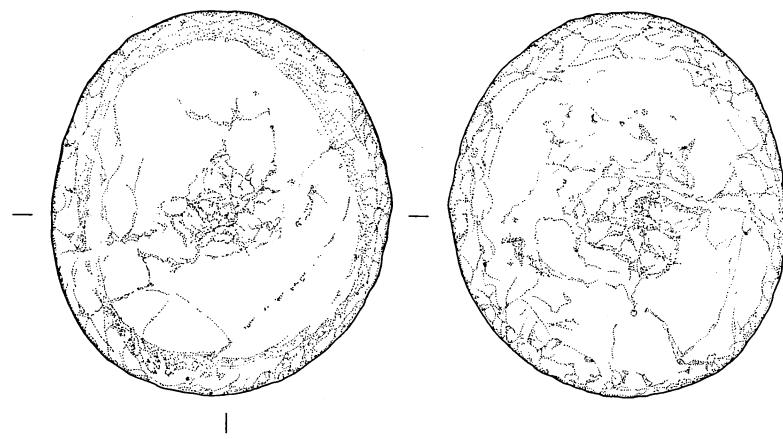
269



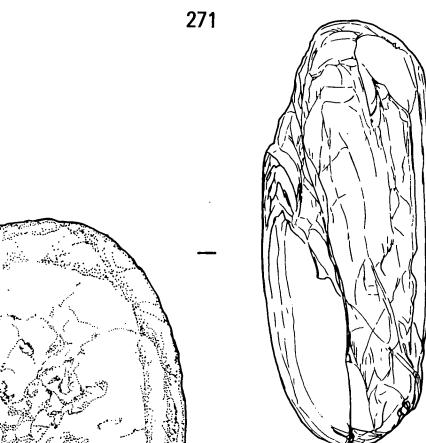
270



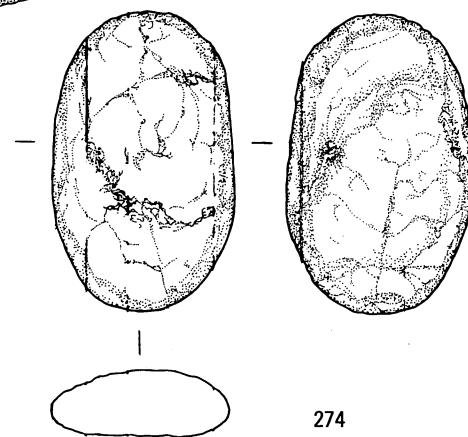
第130図 SD1・3, ST6出土遺物



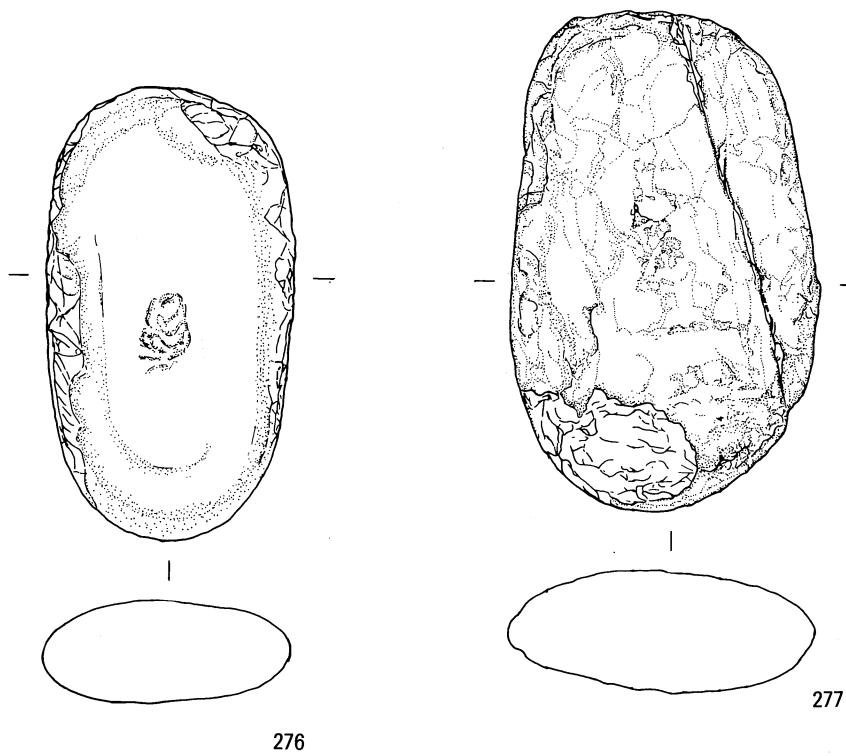
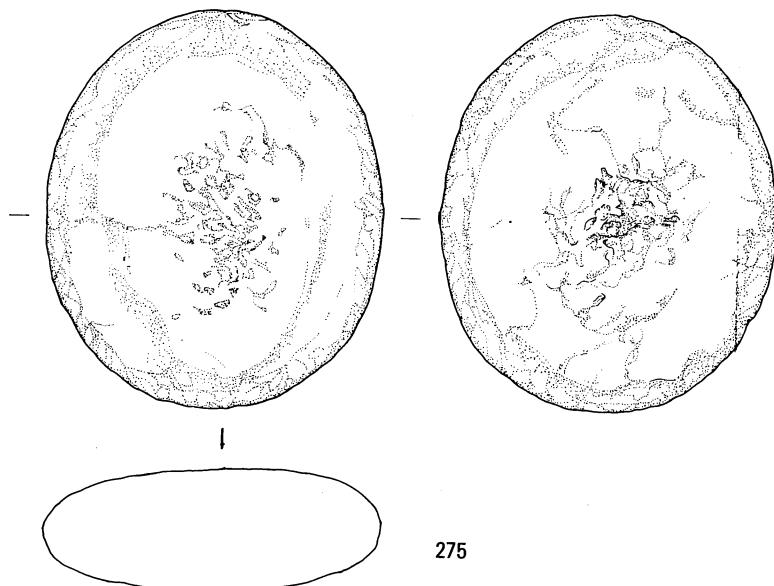
272



273

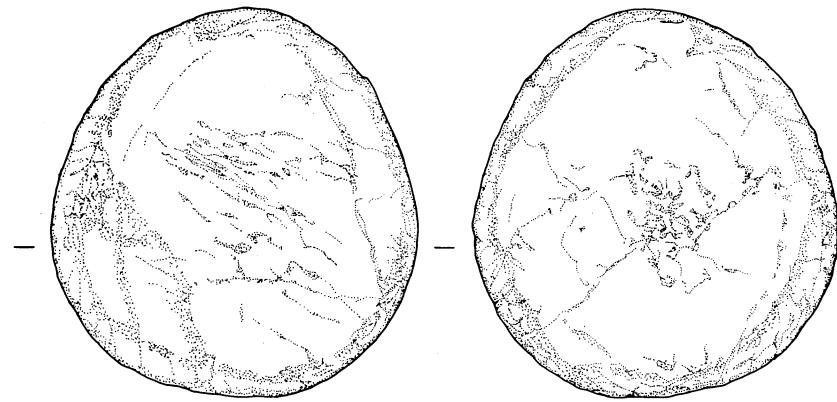


第131図 ST6・9出土遺物



0 10cm

第132図 S T 1・6 出土遺物



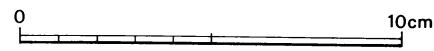
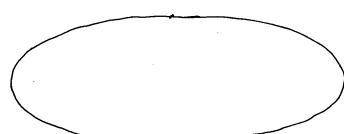
1

278

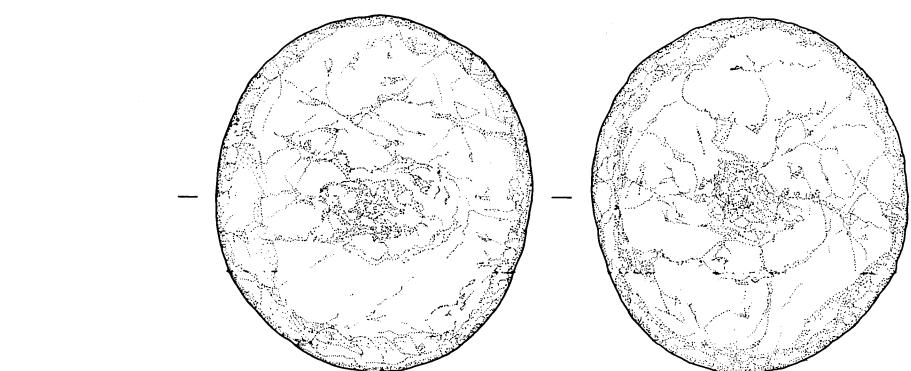


1

279



第 133 図 ST 6・9 出土遺物



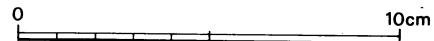
280



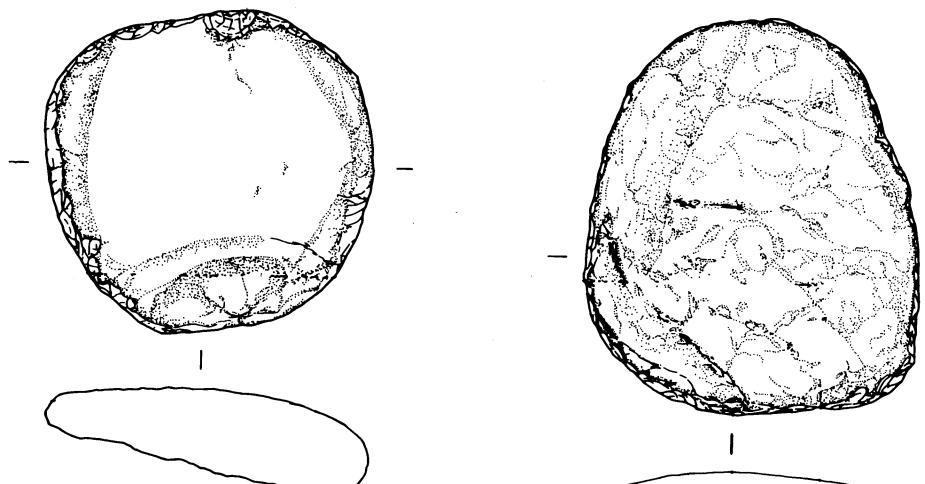
281



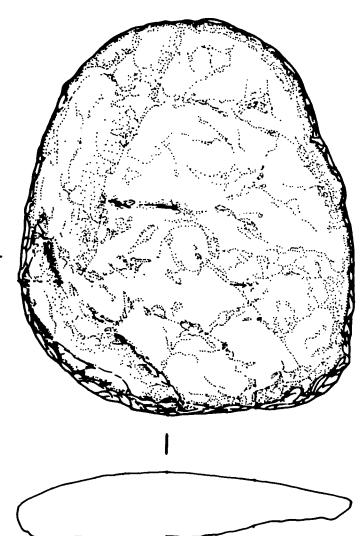
282



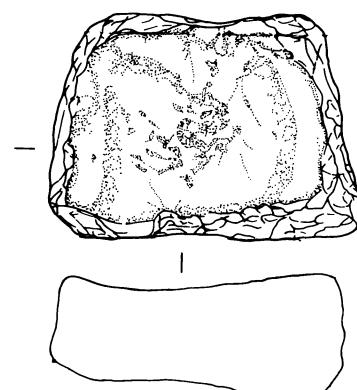
第134図 ST 7・9出土遺物



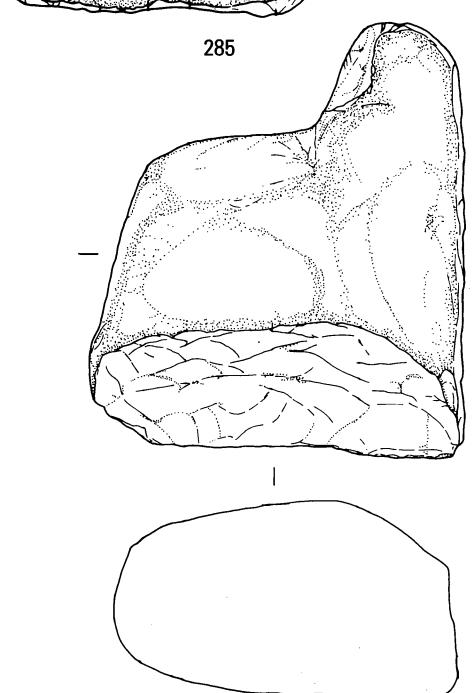
283



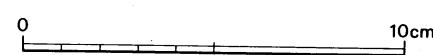
284



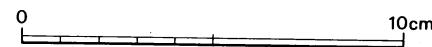
285



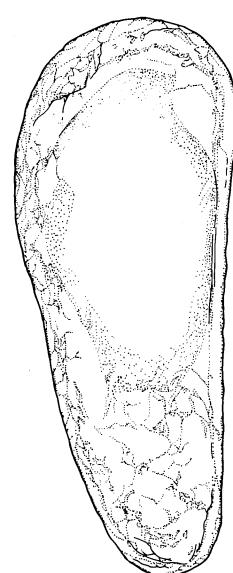
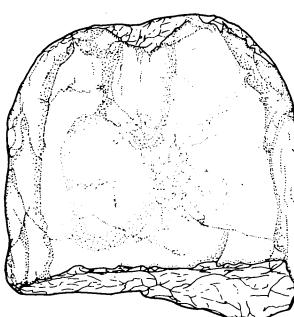
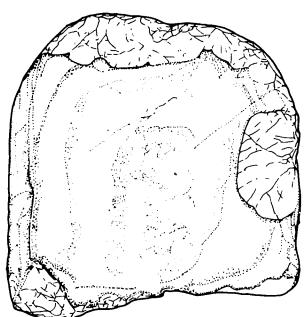
286



287



第135図 ST4, SK5・9, SD2出土遺物



288

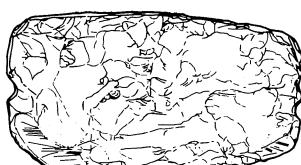


290

289



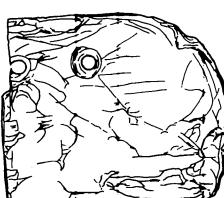
291



292

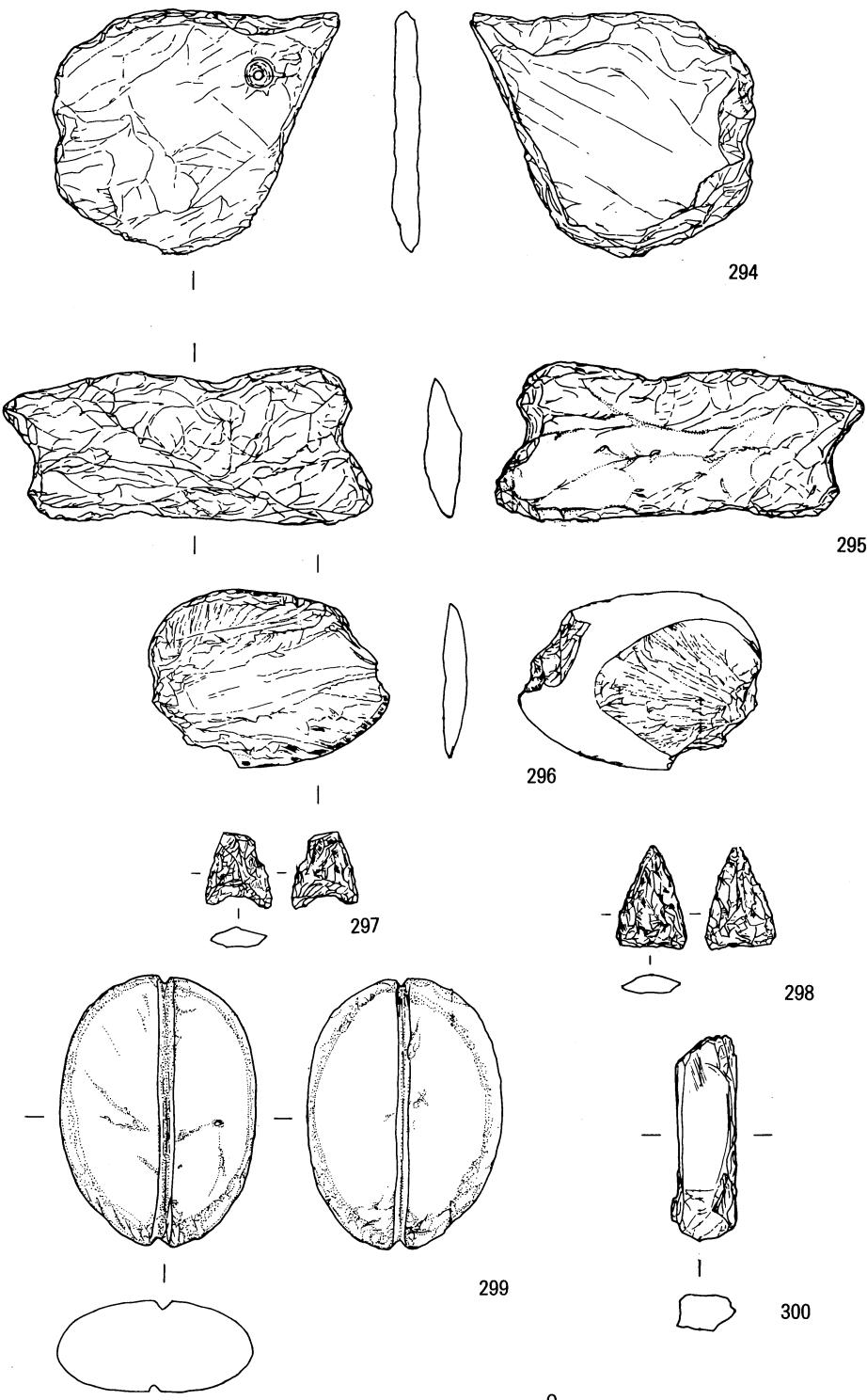


293

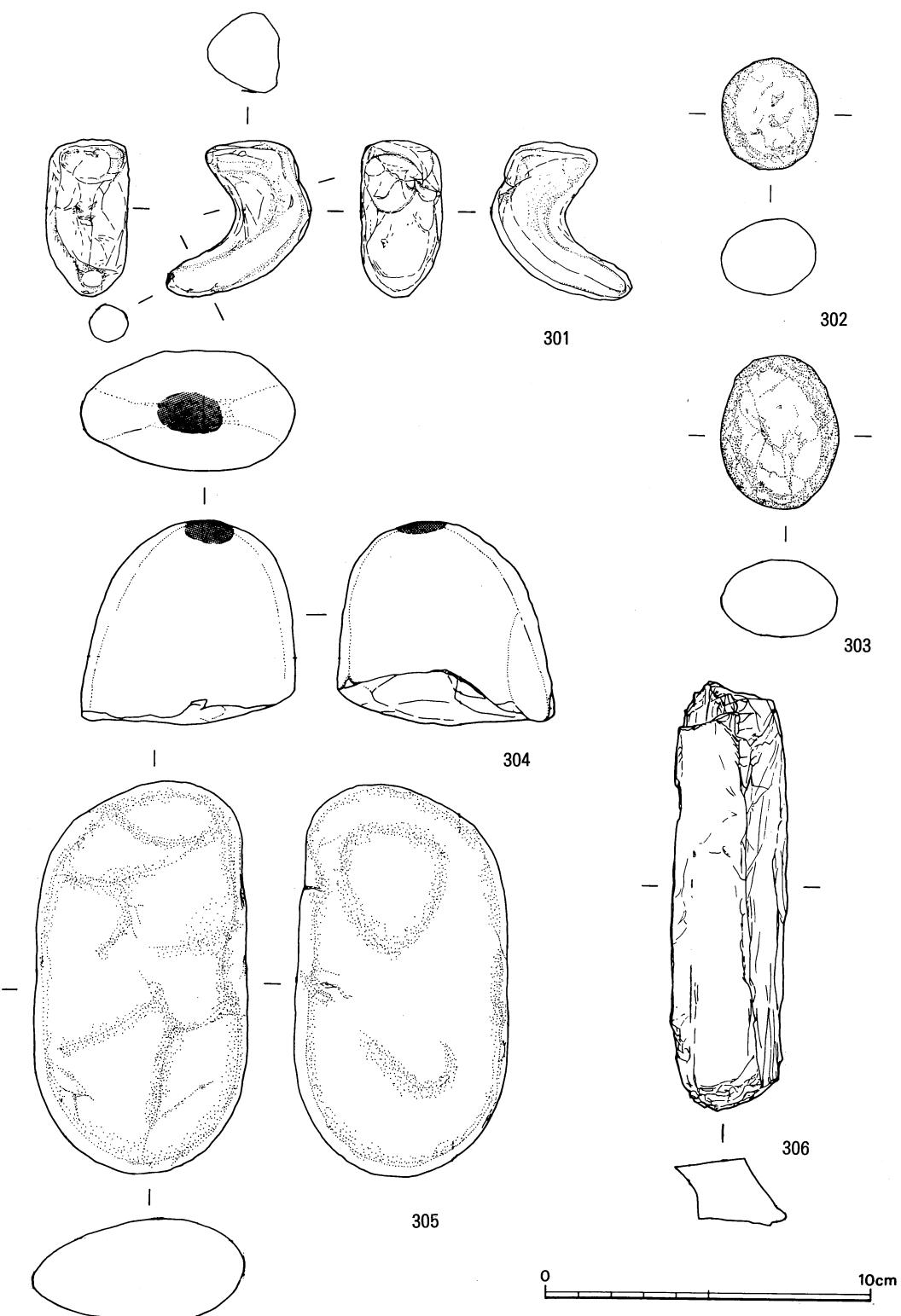


10cm

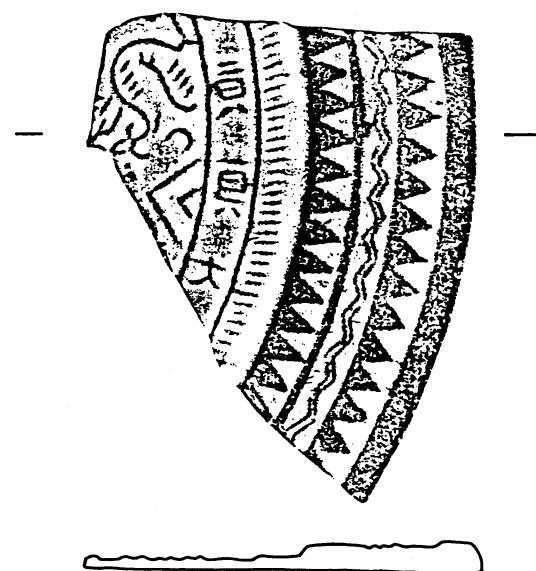
第136図 ST1・4・6・9, SD6出土遺物



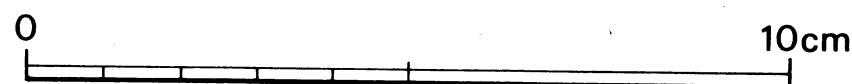
第137図 ST1・8・9, SK1・16, SD2・7出土遺物



第138図 ST 1・5・6・9出土遺物



307



第139図 S T 1出土鏡片

7. Loc. 46

Loc.46

1. 位置と調査経過

Loc.46は、空港拡張範囲の西端部を南北に走る1—2号場外場周道路と第5号用水路の改修工事に伴う調査区である。改修工事範囲は、南北約300mであり、北にLoc.45(田中)、南にLoc.47(シマイテン)が存在し、字名は未通しと呼ばれている。改修計画は、現存する幅2.5mの市道を西へ移動し、幅8mに拡張するものであった。調査は、道路の移設拡張範囲を調査区として、10m間隔を基準とし4×8mの試掘グリッドを、8グリッド設定した。試掘グリッドは南からA～Hグリッドとし、南より順次調査を行った。その結果、G・Hグリッドにおいて、自然流路を1条検出したので拡張し、完掘した。他のA～Fグリッドでは、Fグリッドに溝を1条検出したのみであり、他に遺構はみられず、遺物もほとんど出土しなかった。調査期間は、昭和57年7～8月の約1ヶ月間であり、調査面積は試掘も含め347m²である。

2. 調査概要

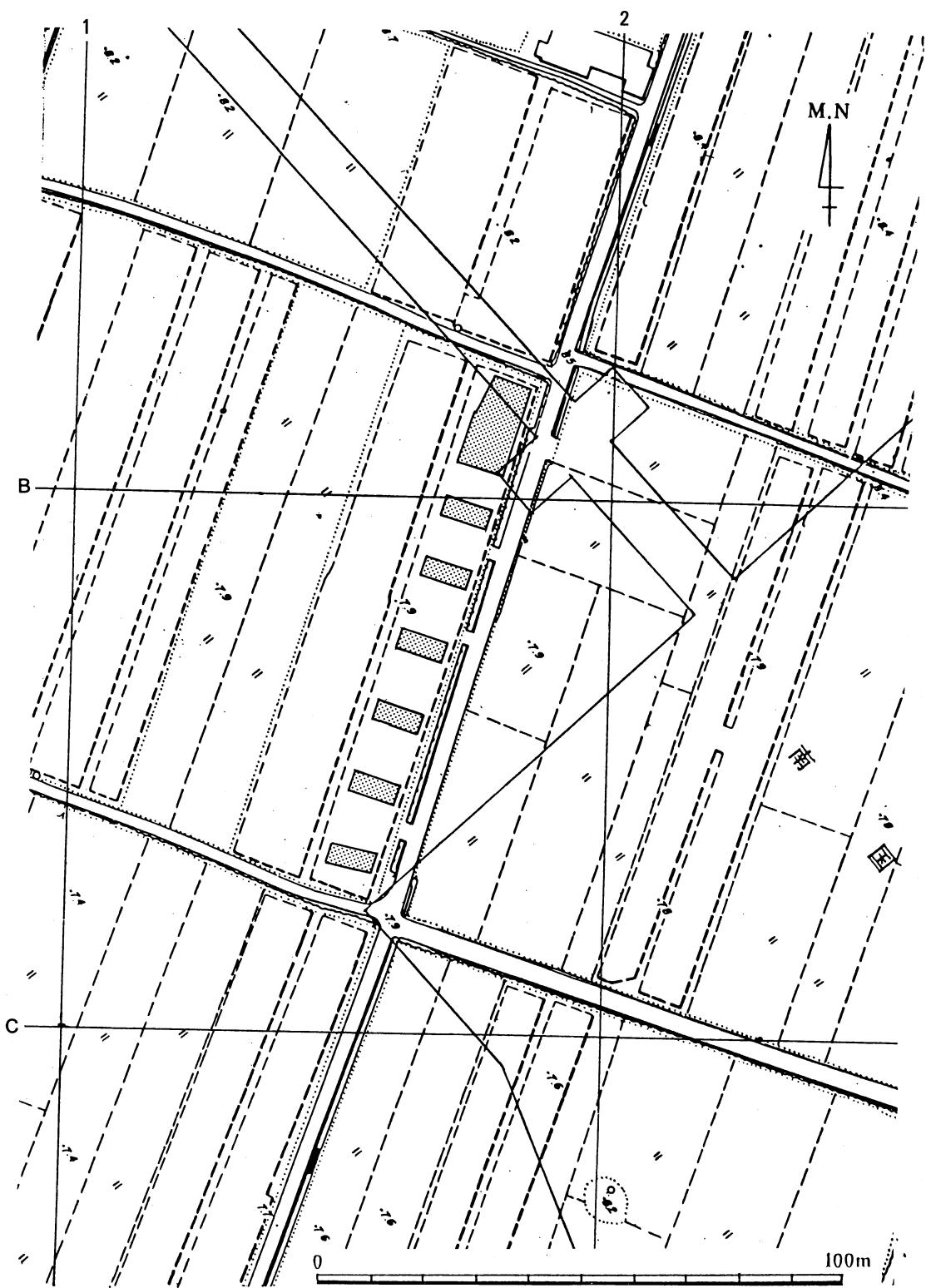
試掘グリッドの中で、A～Eグリッドまでは、遺構はまったく発見されず、遺物もほとんど出土しなかった。Fグリッドでは、小さな溝が1条検出されたが、出土遺物もなく、時期、性格ともに不明である。Gグリッドの北部とHグリッドの南部にかけて、砂層を埋土とする北東から南西へ延びるプランが検出され、自然流路の肩の部分と考えられたので、G・Hグリッドの間を拡張し、9×17mの範囲を調査区とした。調査の結果、幅3.84m、深さ0.8mを測る北東から、南西方向の自然流路(SR1)を検出し、埋土中より多量の遺物が出土した。自然流路は床面で小さく4～5条に分かれており、セクションからも一部切り合っていたが、埋土中判明しがたく、遺物も自然流路として一括し取り上げた。

3. 層序と出土遺物

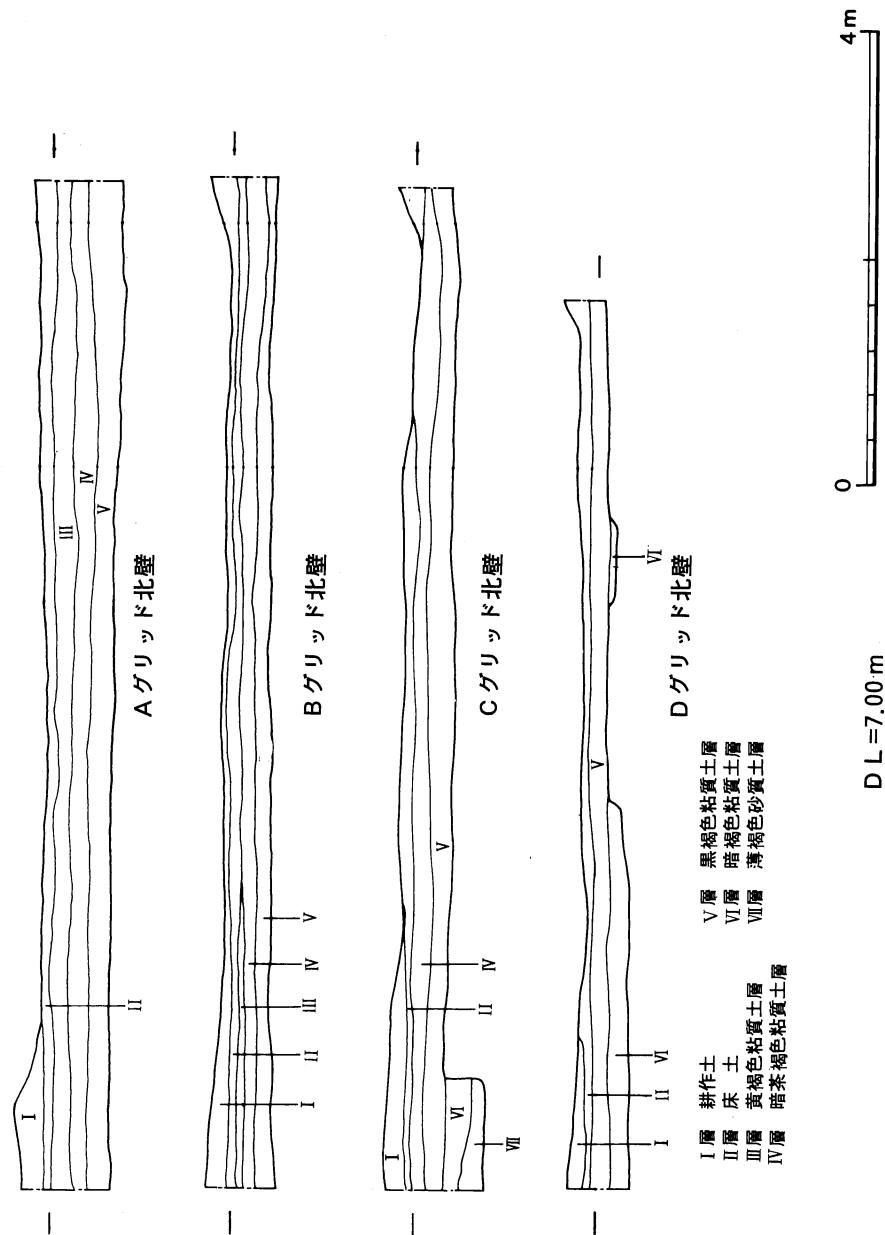
試掘グリッドも含めた基本層序は次の通りである。

- 第I層 耕作土
- 第II層 床土
- 第III層 黄褐色粘質土層
- 第IV層 暗茶褐色粘質土層
- 第V層 黒褐色粘質土層
- 第VI層 暗褐色粘質土層
- 第VII層 薄褐色砂質土層
- 第VIII層 青褐色砂質土層

試掘グリッドの層序からみれば、基盤となる第VII層薄褐色砂質土層、第VIII層青褐色砂質土層



第140図 調査区設定図



第141図 調査区セクション

が、南へと低く傾斜しており、第III～V層は途中から出現し、南へと厚くなっている。G～Hグリッドでは、第II層床土下に第VI層暗褐色粘質土層がみられ、Eグリッドで、第V層黒褐色粘質土層が新たに出現し、第VI・VII層は傾斜を増し低くなる。Cグリッドでは、第IV層暗茶褐色粘質土層が出現し、Bグリッドでは、第III層黃褐色粘質土層が出現している。Aグリッドでは、地表下83cmで第VI層暗褐色粘質土層が検出されている。

いずれの層位からも、出土遺物はほとんどなく、わずかに第I～II層中に土師質土器の細片を出土したのみである。

4. 遺構と遺物

Loc.46で検出された遺構は、Fグリッド検出の溝とG・Hグリッド検出の自然流路だけである。

溝

S D I

S D 1は、Fグリッドの第VI層暗褐色粘質土層上面に検出されて、方向は北東から南西へ延びており、N—58°—Eを測る。規模は、検出長10.8m、幅1m、深さ9cmを測り、断面形は非常に浅いU字形である。底面は平坦であり、埋土は第V層と同じ黒褐色粘質土層の單一層である。

出土遺物は皆無であり、時期、性格についてはまったく不明であるが、検出面、埋土からみれば、中世以前の溝と考えられる。

自然流路

S R I

S R 1は、G・Hグリッドにおいて検出され、その間を拡張し完掘した。検出面は浅く、第I層耕作土直下である。

規模は、検出長11.2m、幅7.0m、深さは最深部で0.56mを測る。方向は、北東から南西へ延びており、N—68°—Eを測る。床面は4条ほどに分かれしており、またセクションをみれば、一度に埋没したものではなく、数回にわたり埋没したと考えられる。埋土は、砂層が大半を占めるが、細砂から粗砂まで混在しており、色調も赤褐色から青灰色まで分かれている。また、上面には粘質土もみられる。

出土遺物は、弥生時代前期から後期に至るまで含んでいるが、前期の遺物は少なく、中期から後期の遺物を中心にコンテナケース約10箱ほど出土している。

出土遺物の中で、前期の壺は（1～5）のみであり、中期の壺は（6～40）、後期の壺は

(41~62) である。甕は、中期から後期にかけて出土しており、中期は（63~123）、後期は（126~143）である。底部は（144~166）であるが、明らかに後期とされる底部は（164~166）である。その他に、高杯は（167~184）が出土しており、（185）は器台の脚部と考えられる。鉢は、（186、187）の2点が出土しており、（187）は、後期の小形鉢である。（188）は小形壺の蓋と思われ、（189）は把手と考えられる。

石器は、非常に少なく、無茎平基式のサヌカイト製の石鎌（193、194）2点に、石包丁未成品（190）、叩石（191）、砥石（192）が各1点出土している。

5. まとめ

Loc.46では、溝と自然流路を各1条検出し、調査した。SD 1は出土遺物もなく、中世以前と推定されるのみであり、性格などについてはまったく不明である。SR 1は、検出長11.2mと短いが、多量の遺物を出土した。時期的には、前期の遺物も若干出土しているが、中心は中~後期であり、特に、中期IIIから後期Iの遺物が多い。埋没時期については、後期IIの遺物も少數ながら含んでいるので、後期IIの段階で数回にわたり埋没したものである。また、SR 1の方向などからみれば、北東の調査区、Loc.35・36付近の自然流路から分離した一支流と考えられる。

第22表 遺構出土土器観察表

插図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
1	S R 1	壺	11.5 (5.4) — —	直立しわざかに開く口縁部。 口唇部は丸くおさめ、口頸間に1条のヘラ描沈線を施す。	口縁部ヨコナデ。沈線下にタテハケを残す。		
2	"	"	14.9 (3.4) — —	やや強く屈曲し、外反する口縁部。 口唇部は面をなし、口頸間に接合により有段部を形成する。	内外面ともにヘラ磨きを施すが磨耗する。		
3	"	"	18.4 (4.4) — —	口縁部は大きく屈曲し外反する。 口唇部は丸くおさめ、口頸間に2条のヘラ描沈線を施す。	"		
4	"	"	14.8 (4.5) — —	直線的に小さく外反する。口唇部は丸くおさめ、口頸間に3条のヘラ描沈線を施す。	"		
5	"	"	12.0 (4.2) — —	大きく緩やかに外反し開く。頸部に突帯を貼付、刻目を施し、3条のヘラ描沈線を配す。 口縁部内面に刺突文あり。	内外面ともにナデ調整。		
6	"	"	23.2 (2.9) — —	強く外反する口縁部の内面に3条の突帯を貼付、刻目を施し、突帯間に刺突文を配す。	口縁下外面に指頭圧痕を残し、上部に爪跡がみられる。		
7	"	"	17.4 (3.1) — —	緩やかに外反する貼付口縁であり、 外面に縦長の刻目を強く施す。	内外面ともにナデ調整。	断面に接合痕あり。	
8	"	"	24.6 (1.8) — —	大きく開き外反する貼付口縁であり、下端部に刻目を施す。	"	"	
9	"	"	17.6 (2.8) — —	直線的に開き外反する貼付口縁であり、口唇部は垂直な面をなし、下端部に刻目を施す。	"	"	
10	"	"	27.2 (5.6) — —	強く外反する貼付口縁であり、口唇部は面をなし、端部に斜めの刻目を施す。	"		
11	"	"	17.0 (3.9) — —	直立する頸部から外反する口縁部。 口唇部は貼付により拡張し、外傾する面をなし、斜めの刻目を施す。	内外面ともに磨耗のため不明。		
12	"	"	17.6 (6.9) — —	大きく外反し開く口縁部。口唇部は拡張し、垂直な面をなし、4条のヘラ描斜行沈線がみられる。	頸部外面にタテハケを施す。		
13	"	"	18.8 (4.4) — —	短く外反する口縁部。口唇部は肥厚し、面をなす。刻目を施す。	内外面ともにナデ調整。		
14	"	"	14.4 (2.1) — —	大きく外反する貼付口縁である。	頸部にタテハケを施す。		
15	"	"	16.8 (2.6) — —	直線的に開く頸部より、やや外反する口縁部。口唇部は貼付により下方に拡張し、内傾する面をなす。	口唇部はヨコナデ。	全体に磨耗する。	

挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm) 口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手 法	備考
16	S R 1	壺	19.4 (4.0) — —	直立する頸部により、なめらかに外反する貼付口縁。口縁部内面はナデによりわずかに内湾する。	口唇部はヨコナデ。	磨耗が激しい。
17	"	"	13.2 (5.6) — —	張りの少ない胸部より、緩やかに外反する貼付口縁である。口唇部はほぼ垂直な面をなす。	口唇部外面貼付帶に指頭圧痕を残し、以下ナデ調整。	
18	"	"	21.1 (5.1) — —	大きく緩やかに外反する貼付口縁であり、口唇部は下方へ、さらに拡張し、外傾する面をなす。	外面ともにナデ調整。	全体に磨耗する。
19	"	"	18.5 (5.5) — —	緩やかに小さく外反する貼付口縁であり、口唇部はナデによりわずかに、下方へ拡張する。	外面は口縁下にわずかのタテハケを残し、内面は横から右下がりのハケ調整を施した後にナデ調整。	口縁部外面の貼付帶は薄い。
20	"	"	27.4 (3.5) — —	直立する頸部より強く外反する厚い貼付口縁。口唇部はやや丸味をおびた面をなし、わずかに下方へ拡張する。	外面は口唇部にヨコハケ、頸部にタテハケを施し、内面はヨコハケを施す。貼付帶には指頭圧痕を残す。	
21	"	"	15.4 (2.5) — —	直立する頸部より強く外反する。口縁下外面に微隆起帶をもち、下部にヘラ描沈線を1条配す。口唇部外端に刻目を施す。	外面ともにナデ調整。口縁部はやや肥厚する。	器壁は薄い。
22	"	"	19.4 (2.6) — —	強く外反する口縁部であり、口縁下外面に微隆起帶をもち、下部に2条のヘラ描沈線を施す。丸くおさめた口唇部下端に刻目を施す。	"	"
23	"	"	18.3 (2.8) — —	大きく外反する口縁部であり、口縁下外面に微隆起帶をもち、下部に3条のヘラ描沈線を配す。丸くおさめた口唇部下端に刻目を施す。	"	"
24	"	"	18.4 (1.9) — —	大きく外反する口縁部であり、口縁下外面に微隆起帶をもち、下部に4条のヘラ描沈線を配す。丸くおさめた口唇部下端に刻目を施す。	"	"
25	"	"	17.2 (4.0) — —	直立する頸部より強く外反する。口縁下外面に微隆起帶をもち、下部に5条の沈線を配す。口唇部下端には刻目を施す。	"	"
26	"	"	12.0 (1.9) — —	直線的に開く口縁部。口唇部は上下に拡張、外傾する面をなし、4条の横描波状文を施す。	外面ともに丁寧なナデ調整。	
27	"	"	10.0 (5.3) — —	直立する頸部よりなめらかに外反する貼付口縁。貼付帶に縦のヘラ描沈線を施し、下部に4条の横描直線文がみられる。	外面ともにナデ調整。	外面に黒斑あり。
28	"	"	9.2 (4.0) — —	直線的に開く貼付口縁。貼付帶に縦のヘラ描沈線を施し、下部には小さな貼付文がみられる。さらに下には1条のヘラ描沈線を施す。	外面ともに磨耗のため不明。	
29	"	"	17.2 (2.3) — —	直線的に開き、端部は強く屈曲し、水平に延びる。上面は凹む面をなし、外面は垂直な面となる。	外面にタテハケを残し、外面ともにナデ調整。	
30	"	"	15.5 (1.8) — —	大きく、直線的に開く口縁部。口唇部はやや下方に拡張し凹む面をなす。	口唇部はヨコナデ。以下ナデ調整。	

捕囲番号	遺構番号	器種	法量 (cm) 口徑 器高 胴徑 底径	形態・文様	手法	備考
31	S R 1	壺	15.2 (4.2) — —	緩やかに外反する口縁部。口唇部はほぼ垂直な面をなし、小さな刺突文を施す。	口縁部はヨコナデ。以下外面はタテハケ、内面はヨコハケを施す。	端部にかけて薄くなる。
32	"	"	20.9 (2.9) — —	大きく外反する口縁部。口唇部はほぼ垂直な面をなす。	口唇部はヨコナデ。口縁下外面に指頭圧痕を残す。	
33	"	"	29.3 (5.5) — —	強く外反し開く口縁部。口唇部はやや肥厚し、凹面をなす。	口唇部はヨコナデ。以下内外面ともにナデ調整。	
34	"	"	16.3 (6.5) — —	緩やかに外反し開く口縁部。口唇部は面をなし、刻目を施す。口縁下にハケ状工具による羽状文、下部には浅い沈線がみられる。	口縁部はヨコナデ。以下内面にヨコハケを施す。	
35	"	"	12.6 (3.5) — —	緩やかに外反する口縁部。口唇部は上下に拡張し、3条の凹線文を施す。	内外面ともにナデ調整。	
36	"	"	15.4 (2.8) — —	直立気味の頸部より外反する口縁部。口唇部は肥厚し、下に拡張、2条の凹線文を施す。	外面にハケ目を残しナデ調整。	
37	"	"	11.3 (8.2) — —	直立する頸部より小さく外反する口縁部。口唇部は上下に拡張し、2条の凹線文を施す。	頸部外面にタテハケを施し、内面には指頭圧痕を残す。	
38	"	"	13.0 (7.6) — —	直立気味の頸部より緩やかに外反する口縁部。口唇部は上下に拡張し、ナデにより偽凹線をもつ。	口縁部ヨコナデ。以下内外面ともにナデ調整。	
39	"	"	13.8 (3.9) — —	くの字状に屈曲する口縁部。口唇部はわずかに肥厚し、2条の凹線文を施す。	内外面ともにナデ調整。	
40	"	"	13.1 (4.0) — —	大きく外反する口縁部。口唇部は丸味をおびる面をなす。	外面にわずかにハケ目を残し、磨耗する。	
41	"	"	13.8 (10.7) 17.0 — —	最大径を胴部上位にもち、強く屈曲する。口縁部はくの字状に強く外反し、口唇部は上方に拡張し2条の凹線文を施す。	口縁部はヨコナデ。外面は屈曲部の上にタテハケを残し、以下、横と縦方向のヘラ磨きを施す。内面は頸部のやや下より左方向、底部は上へのヘラ削り。	鉢の可能性大。
42	"	"	14.0 (7.7) — —	より張りをもつ胴部より、緩やかに外反する口縁部。口唇部は下方に拡張し、外傾する面をなす。	口縁部はヨコナデ。以下外面はタテハケを施し、内面は指頭圧痕を残す。	
43	"	"	17.8 (5.0) — —	強く外反する口縁部。口唇部は垂直な面をなす。	口唇部はヨコナデ。頸部外面は斜めのハケ調整を施し、内面はヨコハケ。	
44	"	"	13.7 (4.0) — —	直線的に大きく外反する口縁部。口唇部は丸味をおびた面をなし、下方にやや拡張する。	口縁部はヨコナデ。頸部外面は一部ヨコハケの下にタテハケを施し、内面はヨコハケを施す。	
45	"	"	13.0 (6.3) — —	直立気味の頸部より緩やかに外反する口縁部。口唇部は小さな面をなす。	頸部外面にタテハケを施す。	全体に磨耗する。

挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm) 口徑 器高 脣径 底径	形態・文様	手法	備考
46	S R 1	壺	16.8 (6.0) — —	緩やかに外反し開く口縁部。口唇部は上下に拡張し、外傾する面をなす。	口縁部はヨコナデ。	全体に磨耗する。
47	"	"	15.8 (8.8) — —	よく張った胸部から、緩やかに外反する口縁部。口唇部はやや凹む垂直な面をなす。	口縁部はヨコナデ。内外面に指頭圧痕を残す。	
48	"	"	15.6 (10.2) — —	直立気味の頸部より緩やかに外反する口縁部。口唇部はやや肥厚し、外傾する面をなす。	口縁部はヨコナデ。以下内外面とともに磨耗する。内面に指頭圧を残す。	
49	"	"	16.0 (3.2) — —	直立する頸部より直線的に開く。口唇部は下にやや拡張し、外傾する面をなす。	口縁部はヨコナデ。	
50	"	"	13.8 (5.5) — —	直立する頸部より緩やかに外反する口縁部。口唇部はやや凹む面をなす。	"	
51	"	"	12.5 (8.2) — —	緩やかに外反し直立する口縁部。口唇部は外傾する面をなす。	内外面ともに磨耗のため不明。	断面および内面に接合痕を残す。
52	"	"	15.3 (12.9) — —	緩やかに開く胸部より直立し、わずかに外反する口縁部。口唇部は面をなし上端をナデ上げる。	口縁部はヨコナデ。頸部はタテハケを施し、内面に指頭圧痕を残す。	上胸部内面に黒斑あり。
53	"	"	10.1 (10.7) — —	直立し、わずかに外反する口縁部。	外面はタテハケを施すが、内面は磨耗のため不明。	
54	"	"	11.8 (4.7) — —	直立する頸部より、直線的に開く口縁部。口唇部は丸味をおびた面をなす。	内外面ともに磨耗のため不明。	
55	"	"	8.7 (3.9) — —	直線的に開く口縁部。口唇部はやや内傾する面をなす。	"	
56	"	"	18.8 (5.7) — —	直線的に開きわずかに内湾し終わる口縁部。口唇部は外傾する面をなす。	内外面ともにナデ調整。	
57	"	"	13.0 (5.4) — —	直立気味に開き、受口状に内湾する口縁部。口唇部は丸くおさめる。	頸部外面に細いタテハケを施し、内面は右下がりのハケ目がみられる。	
58	"	"	12.5 (6.4) — —	直立気味に開き、大きく内湾する口縁部。口唇部は丸くおさめる。	頸部外面にタテハケを施す。内面は磨耗のため不明。	
59	"	"	— (11.7) — —	より張りをもつ胸部から大きく外反し開く頸部。	外面全面にタテハケを施し、内面には指頭圧痕を残しナデ調整。	
60	"	"	— (7.0) 19.4 —	最大径で強く屈曲する偏平な胸部であり、屈曲部に突帯を貼付しナデにより凹む面をなす。	内面に指頭圧痕を残す他は磨耗のため不明。	断面に接合痕あり。瀬戸内系の長頸壺である。

插図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口徑 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
61	S R 1	壺	(10.0) — 9.8	やや大きな平底から緩やかに立ち上る。	内外面ともに磨耗のため不明。	
62	"	"	(4.1) — 4.2	小さな平底から大きく、緩やかに開く。	外面に一部、横方向のヘラ磨きがみられ、内面には指頭圧痕およびヨコハケがみられる。	
63	"	甕	15.0 (2.6) —	強く屈曲し、外反する口縁部。口唇部は丸味をおびた面をなし、下端部に刻目を施す。	内外面ともにナデ調整。	
64	"	"	14.8 (5.5) —	緩やかに外反する貼付口縁。外面に綫の斜行沈線を廻らし、下に列点文を施す。	胸部内面に綫方向の指ナデがみられる。	器壁が薄い。
65	"	"	15.8 (5.3) —	くの字状に外反し、屈曲して開く口縁部。口唇部は肥厚し、下端部に刻目を施す。頸部に列点文を配す。	胸部外面にタテハケを施し、内面はナデ調整。	
66	"	"	15.2 (4.2) —	くの字状に緩やかに外反する口縁部。口唇部は上下に小さく拡張し、下端部に刻目を施す。頸部に刺突文を配す。	口縁部はヨコナデ。口縁下外面はタテハケを施し、内面は頸部以下を削り、ナデ調整。	屈曲部から肥厚する。外面に煤の付着あり。
67	"	"	17.6 (3.0) —	強く屈曲し外反する口縁部。口唇部はやや外傾する面をなす。	内外面ともにナデ調整。	口縁下外面に煤の付着あり。
68	"	"	14.8 (3.6) —	くの字状に屈曲し外反する口縁部。口唇部は外傾する面をなす。	内外面ともに磨耗のため不明。	
69	"	"	19.0 (8.7) —	直立気味の胴部より、強く屈曲し、逆し字状をなす。口唇部はナデにより、やや上下に拡張し面をなす。	"	
70	"	"	13.7 (4.1) —	直線的に内傾する胴部より強く外反する口縁部。口唇部は丸くおさめる。	"	
71	"	"	15.1 (3.7) —	くの字状に強く屈曲する口縁部。口唇部は外傾する面をなす。	内外面ともにナデ調整。	
72	"	"	17.8 (3.5) —	直立気味の胴部より強く屈曲し、逆し字状をなす。口唇部は丸味をおびた面をなす。	"	
73	"	"	21.2 (5.7) —	緩やかに強く外反する口縁部。口唇部はやや肥厚し2条の凹線文を施す。	口縁下外面に指頭圧痕を残し、内外面ともにナデ調整。	
74	"	"	16.7 (4.7) —	くの字状に強く外反する口縁部。口唇部は下方へ拡張し、2条の凹線文を施す。	口縁部内面にわずかにヨコハケを残し、ナデ調整。	
75	"	"	18.6 (4.4) —	くの字状に強く外反し、やや直線的に開く。口唇部は下方へ拡張し、2条の凹線文を施す。	内外面ともにナデ調整。	

挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口徑 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
76	S R 1	甕	17.0 (3.4) — —	くの字状に強く屈曲し内面に稜をもつ。口唇部は肥厚し、2条の凹線文を施す。	口縁下外面にタテハケを施し、内面はナデ調整。		
77	"	"	19.5 (4.1) — —	緩やかに外反し、口唇部は上方に拡張。2条の凹線文を施す。	内外面ともにナデ調整。		
78	"	"	15.2 (5.2) — —	くの字状に強く屈曲し、内面に稜をもつ。口唇部は上下に拡張し、2条の凹線文を施す。	"		
79	"	"	15.5 (3.6) — —	くの字状に強く屈曲し、内面に稜をもつ。口唇部は肥厚し2条の凹線文を施す。	"		
80	"	"	12.1 (6.3) — —	なめらかに強く外反し、口唇部は肥厚させ、2条の凹線文を施す。	口縁下外面にタテハケを施し、内面はナデ調整。		
81	"	"	14.4 (10.4) 17.0	強く張った胴部より、なめらかに外反する口縁部。口唇部は上下に拡張し3条の凹線文を施す。	胴部外面に斜めのハケ目を残し、内面ともにナデ調整。		
82	"	"	13.2 (5.1) — —	よく張った胴部より強く屈曲し、口唇部を肥厚させ、2条の凹線文を施す。	胴部外面にハケ目を若干残し、内面ともにナデ調整。		
83	"	"	14.1 (5.8) — —	球形に強く張った胴部から強く屈曲する短かい口縁部。口唇部は肥厚し、2条の凹線文を施す。	内外面ともにナデ調整。		
84	"	"	16.1 (7.6) — —	よく張った胴部よりくの字状に外反し、口唇部は上下に拡張する。2条の凹線文を施す。	胴部外面にハケ目を残し、内面ともにナデ調整。		
85	"	"	14.2 (9.8) — —	球形に強く張りをもつ胴部より、くの字状に外反する口縁部。口唇部は下方へ拡張し、2条の凹線文を施す。	胴部外面はタテハケを施す。内面は上胴部に、上方のヘラ削りがみられる。		
86	"	"	13.7 (4.5) — —	くの字状に短かく外反する口縁部。口唇部は肥厚し、2条の凹線文を施す。	内面上胴部から、左方向のヘラ削りがみられる。	器壁が非常に薄い。	
87	"	"	13.7 (2.3) — —	くの字状に強く屈曲し、口唇部は上方へ拡張し、2条の凹線文を施す。	内外面ともにナデ調整。		
88	"	"	14.4 (3.6) — —	直立気味の胴部より強く屈曲し、口唇部は大きく拡張し2条の凹線文を施す。	"		
89	"	"	21.4 (3.8) — —	胴部より強く水平に屈曲し口唇部は上方へ大きく拡張し、3条の凹線文を施す。口縁部内面も、凹線状をなす。	口縁下外面にハケ目をわずかに残し、内面ともにナデ調整。		
90	"	"	17.9 (3.3) — —	なめらかに大きく外反し、口唇部は上方へ拡張、2条の凹線文を施す。口縁部内面も凹線状をなす。	口縁下外面にハケ目を残し、内面ともにナデ調整。 口縁部内面にヘラ圧痕あり。		

挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
91	S R 1	甕	16.0 (3.2) _____ _____		水平に強く屈曲する口縁部。口唇部は肥厚し、2条の凹線文を施す。	口縁下外面に斜めの粗いハケ目を残し、内面ともにナデ調整。	
92	"	"	14.8 (5.0) _____ _____		水平に強く屈曲する口縁部。口唇部は肥厚し、上方へ拡張、2条の凹線文を施す。	内外面ともにナデ調整。	口縁部および 胴部に黒斑あり。
93	"	"	16.3 (5.8) _____ _____		直線的に内傾する胴部より強く水平に屈曲する口縁部。口唇部は上方に拡張し、2条の凹線文を施す。	"	胴部外面に黒斑あり。
94	"	"	9.8 (5.5) _____ _____		よく張った胴部からくの字状に外反し、口唇部は上方に拡張し、2条の凹線文を施す。	内面に指頭圧痕を残し、内外面ともにナデ調整。	"
95	"	"	13.4 (2.5) _____ _____		強く屈曲し、直線的に開く口縁部。口唇部は上方に大きく拡張し、2条の凹線文を施す。	内外面ともにナデ調整。	
96	"	"	14.0 (2.1) _____ _____		強く屈曲し、内面に稜をもつ口縁部。口唇部は大きく上方に拡張し、3条の凹線文を施す。	"	
97	"	"	24.0 (1.7) _____ _____		強く水平に屈曲し、口唇部は上へ折り曲げ拡張、2条の凹線文を施す。	"	
98	"	"	16.6 (3.3) _____ _____		くの字状に強く屈曲し、口唇部は上方へ拡張、2条の凹線文を施す。	"	
99	"	"	14.4 (9.6) _____ _____		なだらかに立ち上がる胴部から緩やかに外反する。口唇部は下方に拡張し、やや凹む面をなす。	胴部内外面にタテハケを施した後にナデ調整。	外面に大きく黒斑あり。
100	"	"	14.0 (6.4) _____ _____		直線的に内傾する胴部より緩やかに外反する。口唇部は下方に垂下し拡張する。	胴部外面にわずかにタテハケを残し、内外面ともにナデ調整。	
101	"	"	12.8 (2.7) _____ _____		非常に強く屈曲し、開く口縁部。口唇部は上方へ拡張しやや丸味をおびた面をなす。	内面は頸部や下より右方向への削りがみられる。外面はナデ調整。	
102	"	"	14.5 (3.0) _____ _____		緩やかに外反する口縁部。口唇部は上方に拡張し凹む面をなす。	口縁下外面に縦方向のハケ目を残し、内外面ともにナデ調整。	
103	"	"	13.4 (3.2) _____ _____		緩やかに外反し、口唇部は直立する。外面は凹む面をなす。	口縁下外面に斜めのハケ目をわずかに残し、内外面ともにナデ調整。	
104	"	"	15.0 (4.0) _____ _____		直線的に内傾する胴部より強く水平に屈曲する。口唇部は上下に拡張し、凹む面をなす。	内外面ともにナデ調整。	
105	"	"	16.3 (3.5) _____ _____		緩やかに外反し、口唇部は凹む面をなし直立する。	胴部外面に斜めのハケ目を残し、内外面ともにナデ調整。	

挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
106	S R 1	壺	12.4 (5.8) — —	直線的に内傾する胴部より強く水平に屈曲し、口唇部は凹む面をなし直立する。	内面は上胸部から左方向のヘラ削りがみられる。外面はナデ調整。		
107	"	"	19.6 (4.4) — —	なめらかに外反し口唇部は上方に拡張、凹む面をなす。	胸部外面に斜めのハケが施され、内面はナデ調整。		
108	"	"	14.4 (3.0) — —	くの字状に外反し、口唇部は上方に拡張、頸部内面に稜をもつ。	内外面ともにナデ調整。		器壁が薄い。
109	"	"	15.5 (6.3) — —	緩やかに外反し、口唇部は上方に拡張、強いナデにより偽回線をなす。	"		
110	"	"	19.4 (3.0) — —	強く屈曲し開く口縁部。口唇部は上下に拡張し、ナデにより偽回線をなす。	"		
111	"	"	19.6 (6.0) — —	くの字状に緩やかに外反し口唇部は上下に拡張、ナデにより偽回線をなす。	口縁下外面にタテハケを残し、内外面ともにナデ調整。		
112	"	"	13.6 (3.5) — —	くの字状に外反し、口唇部を上下に拡張、外傾する面をなす。	内外面ともにナデ調整。		
113	"	"	16.6 (4.2) — —	短かく屈曲し、外反する口縁部。口唇部は下方に拡張し、やや凹む面をなす。	胸部外面にタテハケを残し、内外面ともにナデ調整。		
114	"	"	17.4 (6.8) — —	くの字状に強く屈曲し、口唇部は上下に拡張、外傾する面をなす。	内面に指頭圧痕を残し、外面ともにナデ調整。		
115	"	"	13.2 (6.3) — —	くの字状に強く外反し、口唇部は上方へやや拡張、凹む面をなす。頸部下にハケ状工具により烈点文を施す。	内外面ともにナデ調整。		
116	"	"	14.8 (9.0) — —	球形に強く張る胴部から短かく強く屈曲する口縁部。口唇部は小さく肥厚し、上胸部に斜めの烈点文を施す。	口縁部はヨコナデ。胴部外面全面にタテハケを施し、内面には上胸部に接合痕がみられ、以下左方向のヘラ削りが行なわれる。		断面に接合痕がみられ、外面に黒斑あり。
117	"	"	17.5 (6.3) — —	くの字状に強く屈曲し、内面に稜をもつ。口唇部はわずかに拡張し凹む面をなす。	内外面ともにナデ調整。		胸部に比べ口縁部は薄い。
118	"	"	14.5 (5.0) — —	くの字状に強く屈曲する口縁部。口唇部は上方へ肥厚し凹む面をなす。	頸部外面は強くナデを施され、胸部はタテハケを残す。内面はナデ調整。		
119	"	"	15.6 (4.8) — —	強く張る胴部よりくの字状に外反し口唇部はやや肥厚する。	胸部外面に斜めのハケ調整を施し、内面はナデ調整。		
120	"	"	17.2 (5.6) — —	球形によく張りをもった胴部から、強く屈曲し外反する。口唇部はやや凹む面をなす。	内外面ともにナデ調整。		

插図番号	遺構番号	器種	法量(cm)	口径高 脣径底径	形態・文様	手法	備考
121	S R 1	甕	18.0 (9.3) — —	よく張った胴部よりくの字状に外反する口縁部。口唇部はやや肥厚し凹む面をなす。	外面はナデ調整。内面は上胴部に上方向へのヘラ削りがみられる。		
122	"	"	17.0 (15.2) 21.8 —	球形の張りの強い胴部から強く屈曲し外反する。口唇部はやや肥厚し、凹む面をなす。	胴部外面全面にタテハケを施し、上胴部内面にも斜めのハケ目がみられる。		
123	"	"	18.7 (8.8) — —	くの字状に強く屈曲する口縁部。口唇部は凹む面をなす。	胴部外面にタテハケを施し、内面は口縁部にヨコハケ、胴部に斜めのハケ目がみられる。		
124	"	"	22.2 (4.0) — —	緩やかに外反する口縁部。口唇部は肥厚しやや凹む面をなす。	口縁下外面に指頭圧痕を残し、タテハケを施すが、磨耗する。		
125	"	"	19.4 (3.6) — —	短かく強く屈曲し、口唇部はやや凹む面をなし外傾する。	内外面ともにナデ調整。		
126	"	"	16.1 (3.6) — —	なめらかに強く外反し、口唇部はやや凹む垂直な面をなす。	口縁下外面にタテハケを施す。 内面はナデ調整。		
127	"	"	12.6 (2.3) — —	短かく強く屈曲し口唇部は丸味をおびた凹む面をなす。	内外面ともにナデ調整。		
128	"	"	16.7 (3.5) — —	なめらかに強く外反し、口唇部は垂直な面をなす。	口縁下外面にタテハケを施し、内面はナデ調整。	口縁部外面に黒斑あり。	
129	"	"	16.0 (4.4) — —	くの字状に強く外反し、口唇部はやや丸味をおびた垂直な面をなす。	内外面ともにナデ調整。		
130	"	"	13.0 (3.8) — —	くの字状に強く外反し、内面に稜をもつ。口唇部は上下にやや拡張し垂直な面をなす。	胴部外面にタテハケ、内面にヨコハケを施すが、磨耗する。		
131	"	"	13.5 (5.2) — —	緩やかに外反し、口唇部は下方に拡張、外傾する面をなす。	内外面ともに磨耗のため不明。		
132	"	"	11.4 (3.6) — —	なめらかに強く外反し、口唇部は肥厚し、丸味をおびた面をなす。	胴部外面にタテハケ、内面にヨコハケを施すが磨耗する。		
133	"	"	10.4 (4.2) — —	くの字状に緩やかに外反し、口唇部は上方にやや拡張し、外傾する面をなす。	口縁下外面にタテハケを施すが磨耗する。		
134	"	"	20.4 (2.9) — —	くの字状に強く屈曲し、口唇部は肥厚し、外傾する面をなす。	内外面ともにナデ調整。		
135	"	"	12.2 (6.2) 14.4 —	やや偏平なよく張った胴部より、くの字状に緩やかに外反する。口唇部はやや肥厚し外傾する面をなす。	内面は上胴部から左方向へのヘラ削りがみられ、外面はナデ調整。		

挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
136	S R 1	甕	12.4 (5.6) — —	くの字状に緩やかに外反し、口唇部は外傾する面をなす。	内外面ともにナデ調整。		
137	"	"	15.5 (6.0) — —	張りの少ない胴部よりくの字状に外反する。口唇部は丸味をおびた面をなす。	内外面ともにナデ調整であるが、磨耗する。		内面に黒斑あり。
138	"	"	16.4 (10.2) 16.1 —	大きく外反し開く口縁部。口唇部は丸味をおびた面をなし胴部の張りは少ない。	外面全面にタテハケを施し、内面は口縁部にヨコハケ、胴部に指頭圧痕を残す。		胴部に黒斑あり。
139	"	"	15.2 (2.5) — —	緩やかに外反する口縁部。口唇部はやや凹む面をなす。	口縁下外面にタテハケを施す。 内面はナデ調整。		
140	"	"	16.4 (4.2) — —	緩やかに外反し、大きく開く。口唇部は丸味をおびた面をなす。	内外面ともに磨耗のため不明。		
141	"	"	13.1 (3.0) — —	緩やかに外反し、口唇部はやや内湾気味に面をなす。	口縁部はヨコナデ。		
142	"	"	11.7 (5.2) — —	緩やかに小さく外反し、口唇部はやや凹む面をなす。胴部の張りは弱い。	口縁部はヨコナデ。以下磨耗のため不明。		頸部の器壁が厚い。
143	"	"	13.3 (4.5) — —	緩やかに外反し、口唇部は丸味をおびた面をなす。	上胸部外面に平行の叩目を薄く残す。		
144	"	"	— (3.7) — 4.3	しっかりとした上げ底から直線的に立ちあがる。	外面に指頭圧痕を残す。		胴部の器壁が薄い。
145	"	"	— (2.2) — 5.5	底面全体がやや凹む平底から丸味をおび小さくしゃくれ立ち上がる。	内外面ともにナデ調整。		
146	"	"	— (2.3) — 6.3	平底から小さくしゃくれ立ち上がる。	内外面ともに磨耗のため不明。		全体に器壁が薄い。
147	"	"	— (2.2) — 6.4	底面全体が、やや凹む平底から直立気味に立ち上がる。	"		
148	"	"	— (3.8) — 6.8	平底から丸味をおび立ち上がる。	内外面ともにナデ調整。		底面にかけて黒斑あり。
149	"	"	— (4.3) — 5.8	強い上げ底から丸味をおび直線的に立ち上がる。	外面にタテハケを施し、内面はナデ調整。		断面に接合痕あり。
150	"	"	— (4.5) — 4.2	強い上げ底からやや内湾気味に立ち上がる。	内外面ともにナデ調整。		

挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
151	S R 1	甕		(3.3) 6.8	しっかりとした平底。	外面にハケ目をわずかに残し、内外面ともにナデ調整。	
152	"	"		(4.0) 5.3	底面全体が凹む平底から小さくしゃくれ立ち上がる。	内外面ともに磨耗のため不明。	
153	"	"		(4.9) 4.5	中央部が、やや凹む平底からなだらかに立ち上がる。	"	
154	"	"		(3.5) 6.8	しっかりとした平底から直線的に開き立ち上がる。	内外面ともにナデ調整。	
155	"	"		(4.5) 6.8	非常に厚い平底から直線的に開き立ち上がる。	外面にタテハケを施す。	
156	"	"		(4.9) 6.8	底面全体がやや凹む平底から直線的に開き立ち上がる。	"	
157	"	"		(4.5) 6.4	"	内面に右方向へのヘラ削りがみられる。	
158	"	"		(18.6) 20.2 7.8	中央部が凹む平底から丸味をおびなだらかに立ち上がる。脇部の張りは少ない。	外面全面にタテハケを施し内面底部近くにヘラ削りがみられる。	底部内面に黒斑あり。
159	"	"		(6.5) 5.1	中央部がやや凹む厚い平底から直立し立ち上がり、なだらかに開く。	内外面とも磨耗のため不明。	
160	"	"		(6.3) 7.0	しっかりとした平底から丸味をおび小さくしゃくれ立ち上がる。	外面にタテハケを施す。	
161	"	"		(7.8) 7.6	底面全体が強く凹む上底から直線的に開き立ち上がる。	内面に指頭圧痕を残す。	磨耗が激しい。
162	"	"		(7.2) 6.0	しっかりとした平底からやや丸味をおび立ち上がる。	内外面とも磨耗のため不明。	
163	"	"		(18.9) 23.4 7.2	底面全体が強く凹む上底からなだらかに立ち上がり、脇部はあまり強く張らない。	外面にタテハケを施し、内面は下脇部に上方向への幅広いヘラ削りがみられる。	
164	"	"		(7.3) —	やや厚みをもつ丸底である。	外面に平行叩目を残す。 内面はヨコハケを施す。	
165	"	"		(4.6) 6.1	平底から丸味をおび立ち上がる。	外面にやや右下りの平行叩目を残す。 内面には指頭圧痕を残す。	外面に黒斑あり。

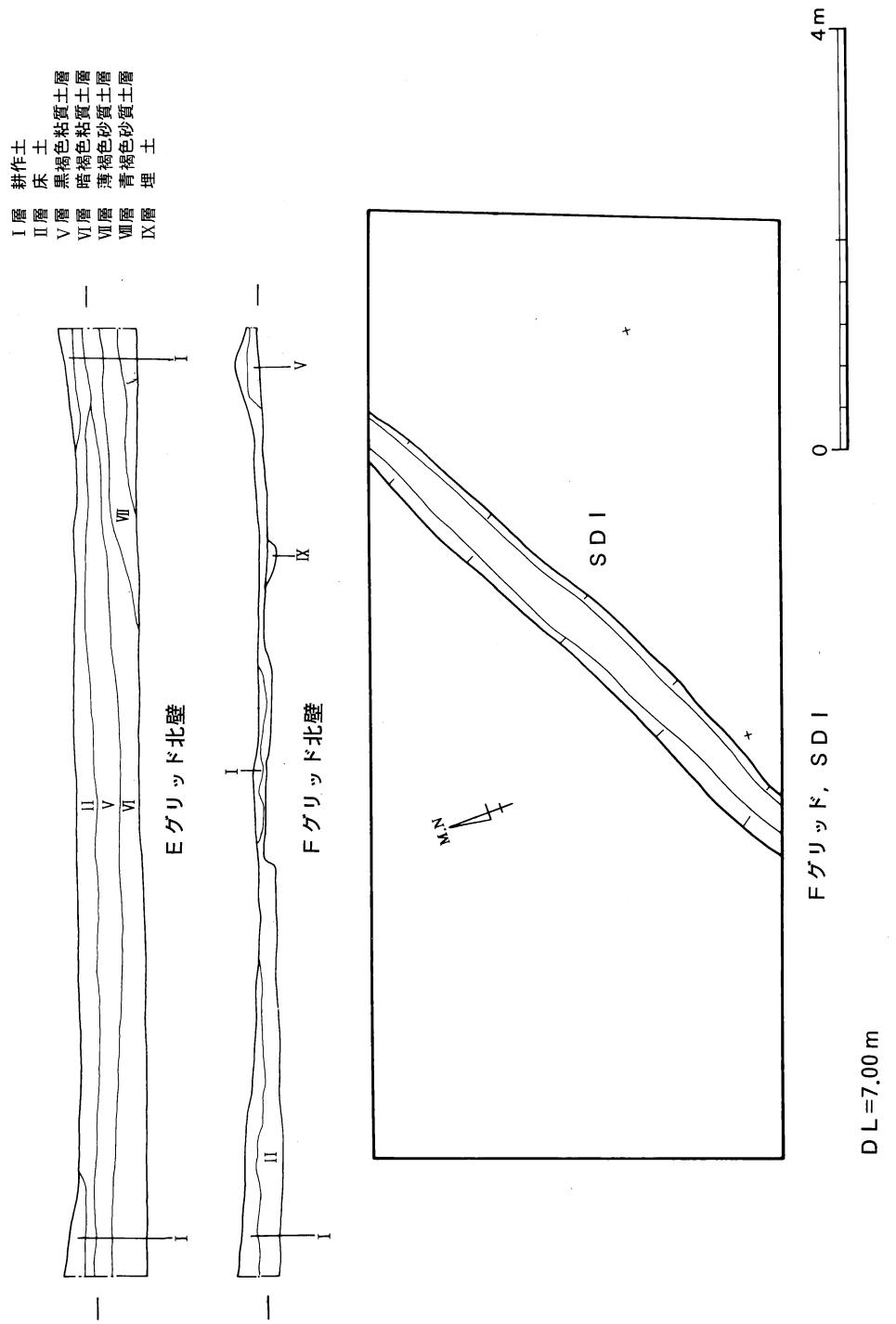
挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm) 口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
166	S R 1	壺	15.0 (8.3) —	緩やかに開く丸底を呈すると思われる。	内面にハケ目を残すが、外面は磨耗のため不明。	
167	"	高杯	20.6 (3.0) —	直立する口縁部外面に3条の凹線文を施す。	内外面とも磨耗のため不明。	
168	"	"	16.4 (3.9) —	やや深い杯部から口縁部は直立し、外面に4条の浅い凹線文を施す。	"	
169	"	"	18.4 (3.6) —	内湾気味に直立する口縁部。外面は口唇部に1条の凹線文をもち、下部はやや凹む面をなす。	内外面ともにナデ調整。	
170	"	"	26.8 (3.2) —	浅い杯部から緩やかに短かく立ち上がる。	"	
171	"	"	23.2 (4.0) —	やや深い杯部から強く屈曲し外反する口縁部。外面にも稜をもつ。口唇部上面に2条の凹線文を施す。	"	
172	"	"	21.0 (3.7) —	やや深い杯部から直立し立ち上がる。外面は強く外反し稜をなす。	"	
173	"	"	25.0 (4.5) —	浅い杯部から強く屈曲し外反する。外面は特に強く外反し稜をなす。	"	
174	"	"	28.4 (3.5) —	緩やかに立ち上がり外反する。外面はより強く屈曲し、稜をなす。その間に山形の暗文を施す。	"	口縁部に黒斑あり。
175	"	"	25.4 (3.4) —	強く屈曲し、大きく外反する口縁部。口唇部は凹む面をなす。	"	
176	"	"	10.8 — (6.4)	裾端部に2条の凹線文を施し、内面端部はナデにより大きく凹む。	外面はナデ調整。内面は左方向のヘラ削りがほぼ全面に施される。	
177	"	"	10.9 — (6.0)	裾端部は上方へ拡張し、2条の上部に4条の凹線文を施し、その間に刺突文による円孔を廻らせる。	外面はナデ調整。内面は右方向のヘラ削りがほぼ全面に施される。	
178	"	"	15.4 — (4.4)	裾端部は大きく肥厚し、3条の凹線文を、上部には7条の横描直線文を施し、その間に刺突による円孔と4個1組の竹管文を配す。	外面はナデ調整。内面は下部に左方向のヘラ削りが施される。	
179	"	"	8.7 — (3.3)	裾端部は小さく、上下に拡張し強いナデにより凹み、上部には6～7条を1単位とする横描直線文を2ヶ所に施し、刺突による円孔を配す。	外面はナデ調整。内面は下部に左方向のヘラ削りがみられるが磨耗する。	
180	"	"	10.8 — (7.0)	短かい柱状部より小さく開き、裾端は丸くおさめる。	外面はナデ調整。内面は中央部に左方向のヘラ削りを施す。	

挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口径 器高 胸径 底径	形態・文様	手法	備考
181	S R 1	高杯	— — — (5.4) — —	緩やかに開く柱状部。中央部に穿孔を施す。	外面にタテハケを施す。		
182	"	"	— — (11.8) — —	直立する太い柱状部。裾部は大きく開く。下部に穿孔を施す。	外面にわずかにタテハケを残し磨耗する。		
183	"	"	— — (3.8) — —	直線的に開く脚部。	"		
184	"	"	— — (7.9) — —	直立する柱状部から裾部は大きく開くと思われる。	内面に絞りがみられる。		
185	"	器台	— — (15.0) — 20.2	緩やかに開き裾端部はやや肥厚する。	外面の全面に太い凹線文を施す。 内面はナデ調整。		
186	"	鉢	27.2 (5.1) — —	緩やかに内湾し立ち上がる。口唇部は丸くおさめ、外面はナデにより凹む。	口縁部はヨコナデ。以下磨耗のため不明。		
187	"	"	13.4 7.3 — 3.4	貼付状のやや不安定な底部から緩やかに立ち上がる。口唇部は未調整。	外面は右下りの小さなタタキを施し、上部はナデ調整により消す。 内面は右下りのハケ調整を全面に施す。		
188	"	蓋	5.9 1.3 — —	小型の蓋であり、中央部に撮みをもち両端に2個1組の穿孔をもつ。 端部はナデにより段差がみられる。	内外面ともにナデ調整。		
189	"	把手	— — 1.7	断面円形をなす把手である。	全面に指頭圧痕を残し、弱いナデ調整。		

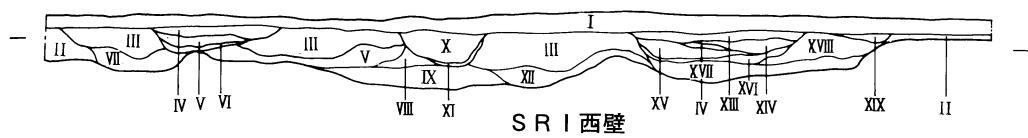
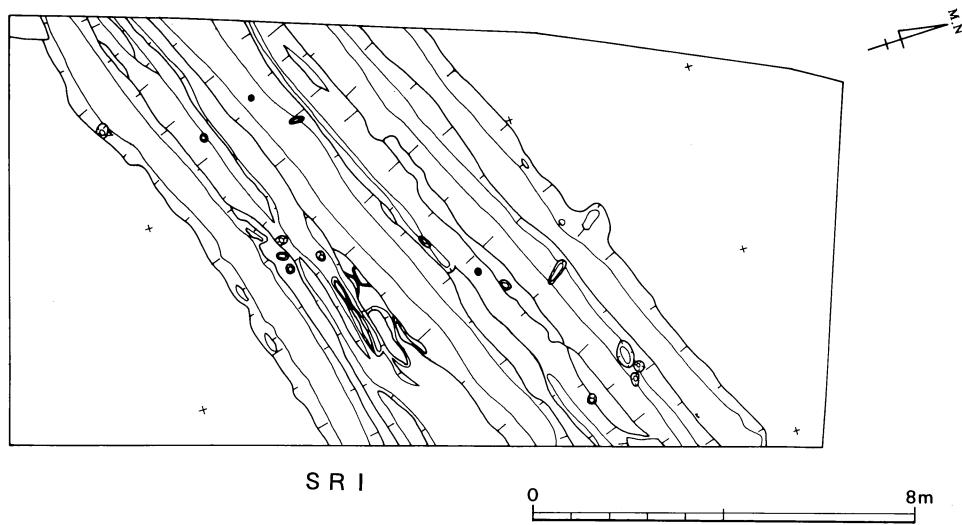
第23表 遺構出土石器観察表

挿図番号	遺構番号	器種	計測値 (cm, g)	最大長 最大幅 最大厚 重量	材質	特徴	備考
190	S R 1	石包丁	(8.1) 4.5 1.0 35.7	粗粒砂質片岩	刃部はやや外済気味であり、背部は大きく欠損する。表裏面に穿孔のために浅い凹みが2ヶ所みられる。		
191	"	叩石	(8.8) 3.1 505.0	砂岩	大きく半分に欠損する。中央部に凹みをもち、楕円形の縁辺部に打痕がみられる。		
192	"	砥石	6.1 5.6 3.0 505.0	"	小型の砥石であり、表面を砥面として使用し、やや凹む。他の面は欠損している。		
193	"	石鎌	4.0 2.6 0.8 5.4	サヌカイト	やや大型の平基式の石鎌であり、表裏面とともに全面によく調整されている。		

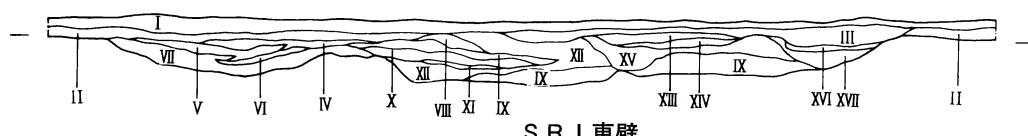
插図番号	遺構番号	器種	計測値 最大長 最大幅 最大厚 重量 (cm, g)	材質	特徴	備考
194	S R 1	石鎌	3.9 1.3 0.4 3.1	サヌカイト	平基式の石鎌であり、表裏面とともに周辺部に剥離が集中しており、中央部には主剥離面およびネガティブな面を残している。	



第142図 調査区セクション、SD 1

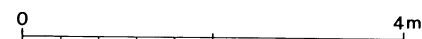


I 层 耕作土	VI 层 赤褐色粘质土	X I 层 赤黃褐色粘質土	X VI 层 灰褐色砂
II 层 暗褐色粘質土	VII 层 灰茶褐色砂質土	X II 层 明青灰色砂	X VII 层 青灰色砂質土
III 层 褐色粘質土	VIII 层 明灰色細砂	X III 层 黄褐色粘質土	X VIII 层 黄茶褐色粘質土
IV 层 黄褐色粗砂	IX 层 青灰褐色砂	X IV 层 青黄色粗砂	X IX 层 灰褐色粘質土
V 层 青灰色砂	X 层 青褐色粗砂	X V 层 青灰色粗砂	

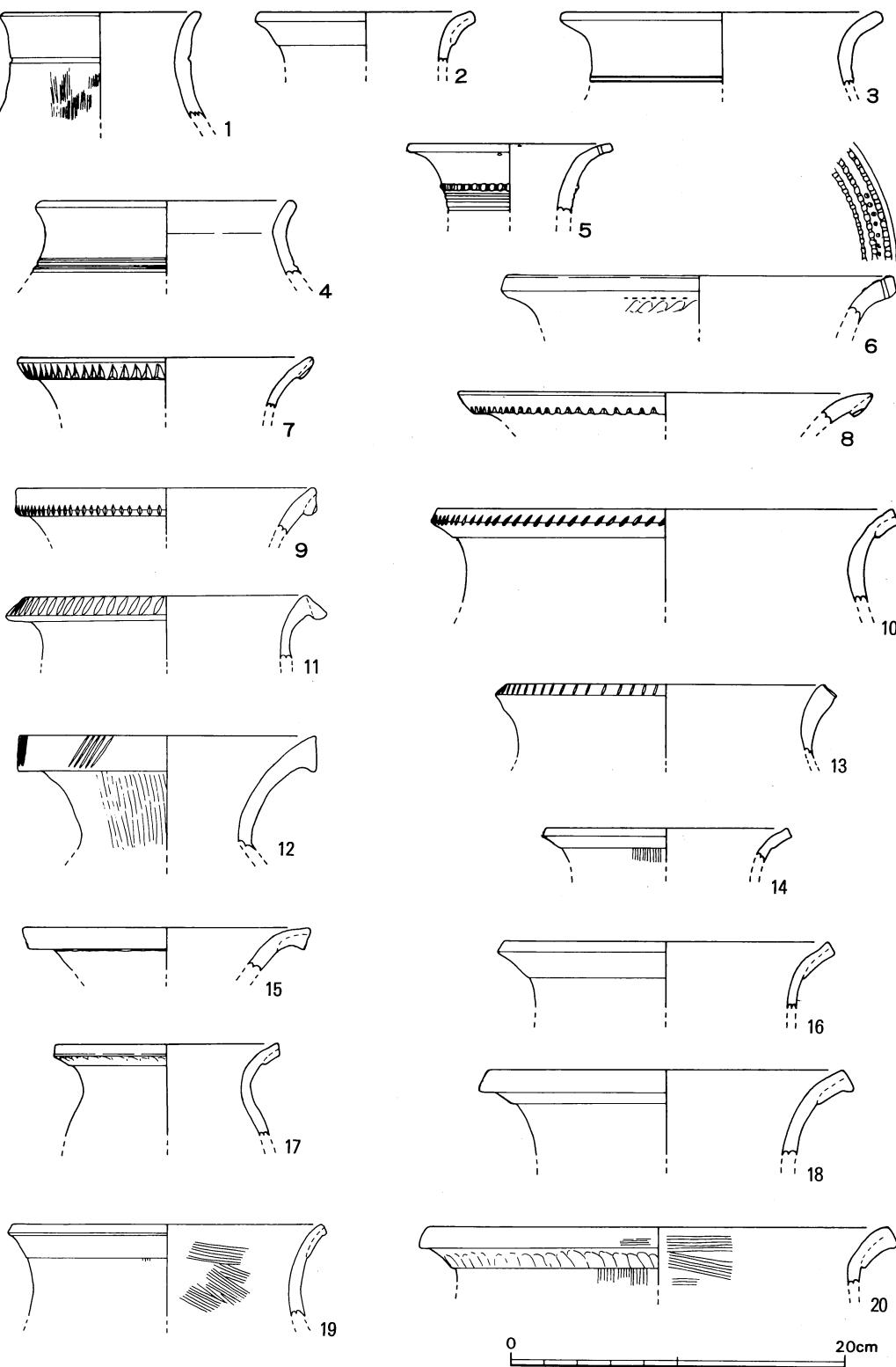


I 层 耕作土	VI 层 明黄色砂	X I 层 暗青灰色砂	X VI 层 青黄色砂質土
II 层 暗褐色粘質土	VII 层 青灰色粗砂	X II 层 明黄色砂質土	X VII 层 暗褐色粗砂
III 层 暗黄褐色砂質土	VIII 层 黄褐色砂質土	X III 层 明褐色砂質土	
IV 层 青灰色粘質土	IX 层 青灰色砂	X IV 层 暗茶褐色砂質土	
V 层 明青灰色砂質土	X 层 暗黄色砂	X V 层 暗青灰色砂質土	

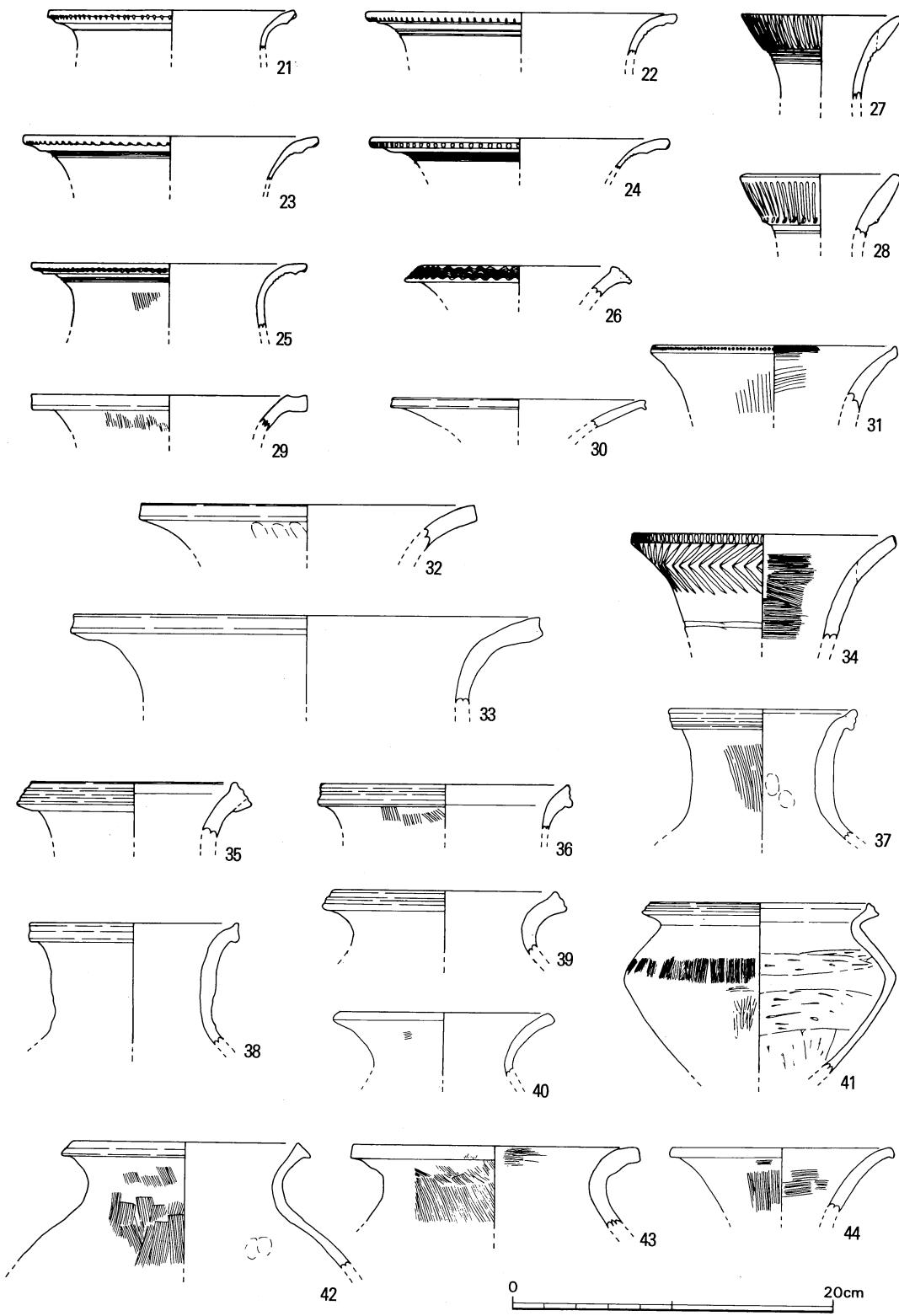
D L = 7.00 m



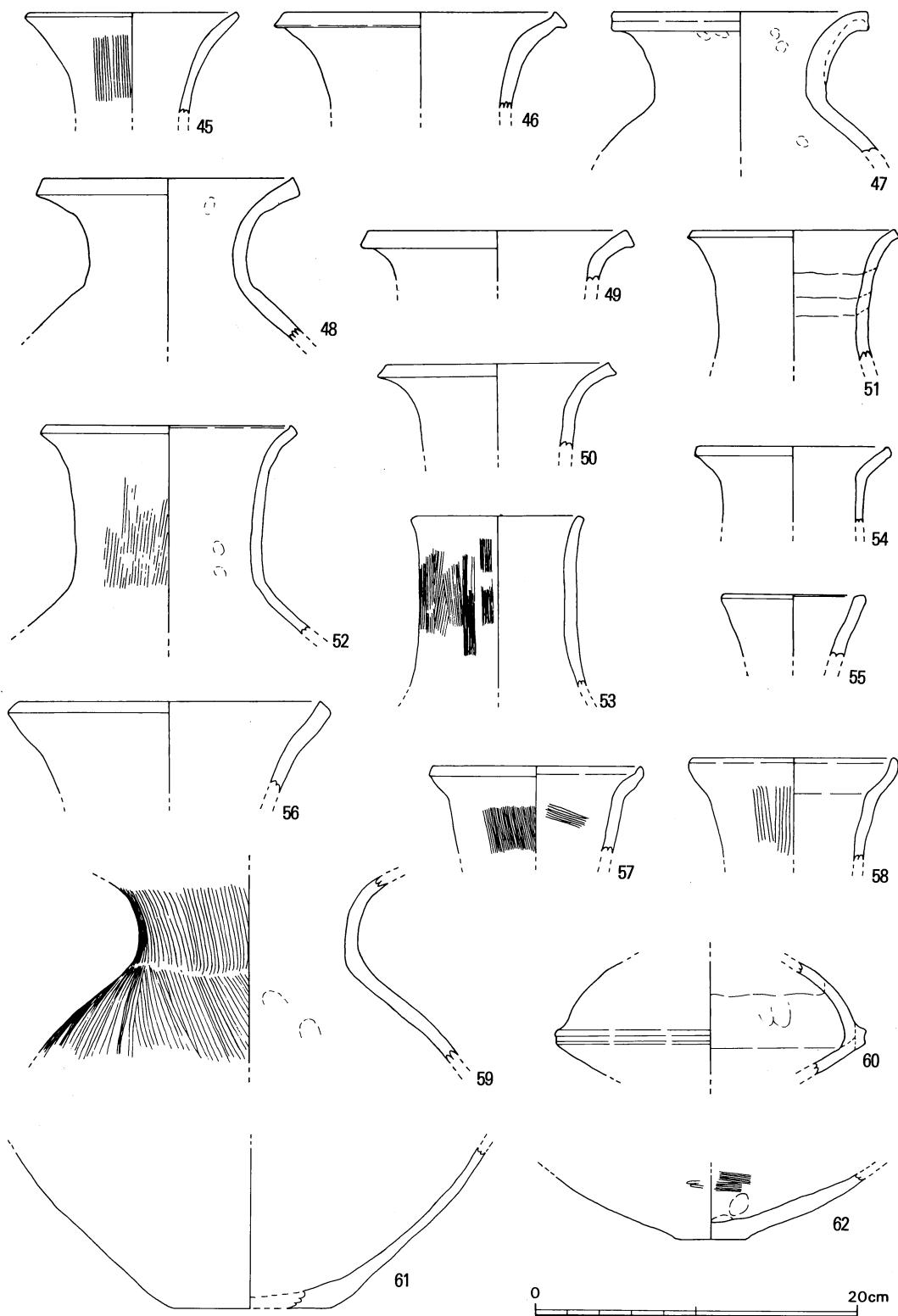
第 143 図 SRI・セクション



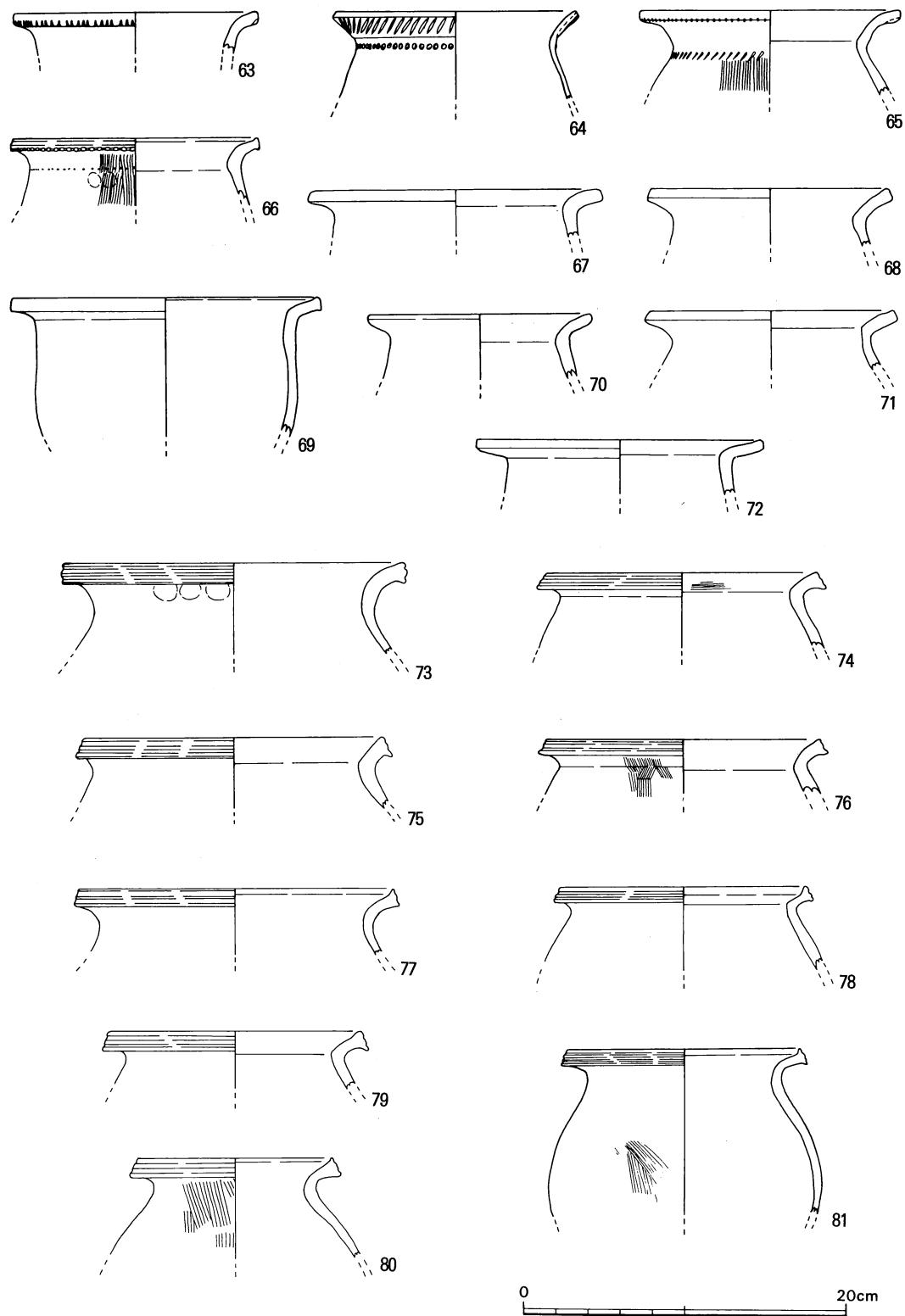
第144図 SRI出土遺物



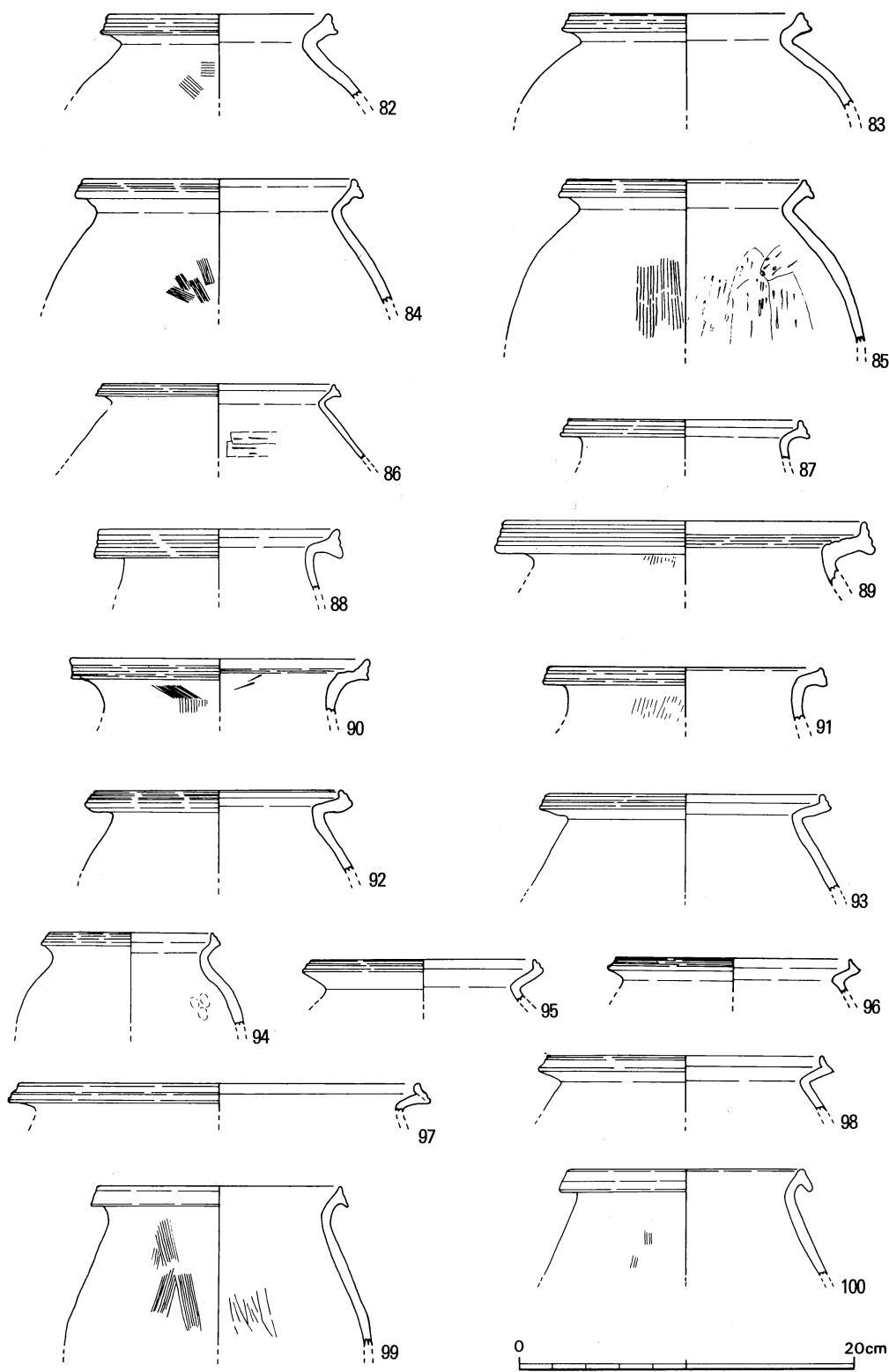
第145図 SRⅠ出土遺物



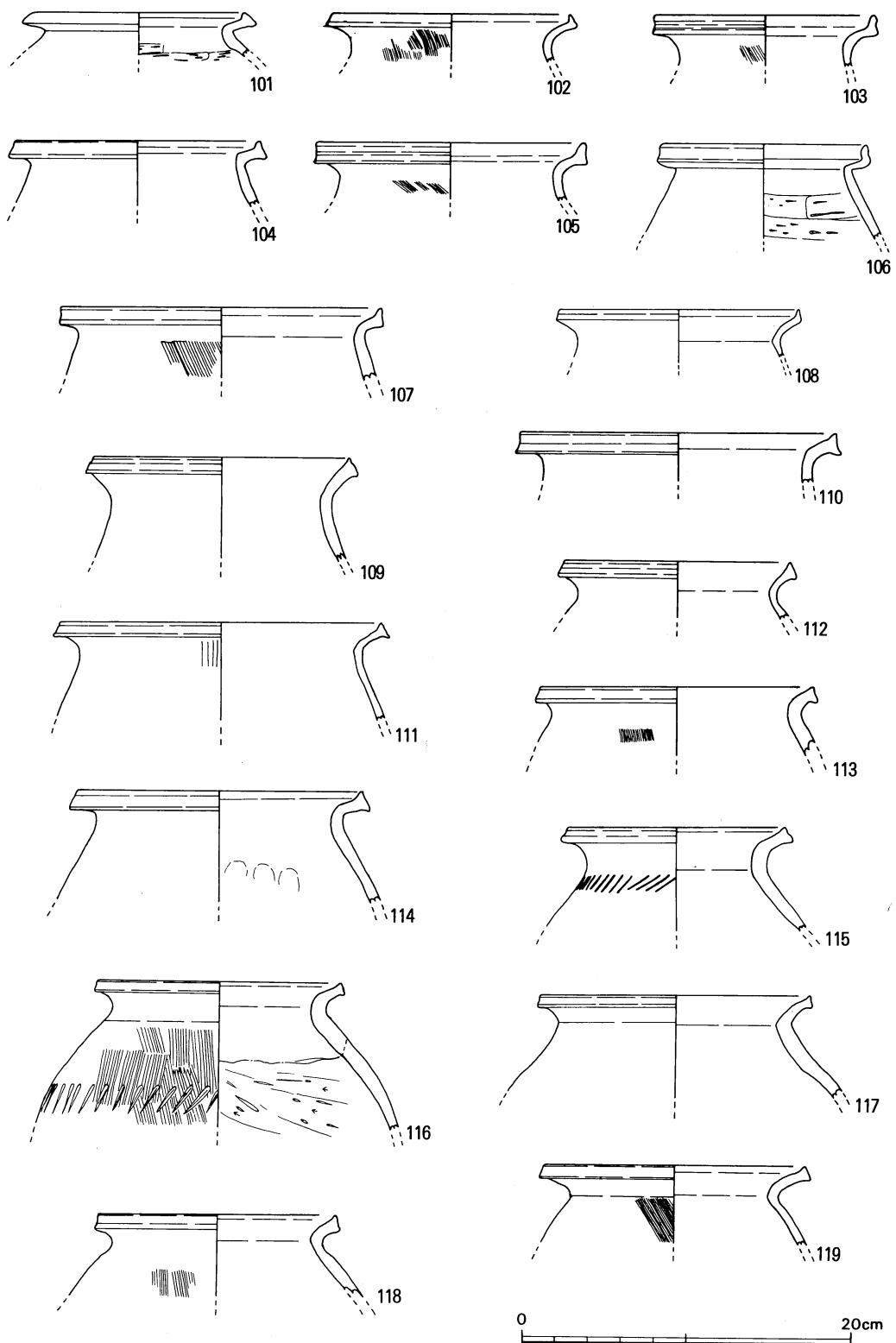
第146図 SR I出土遺物



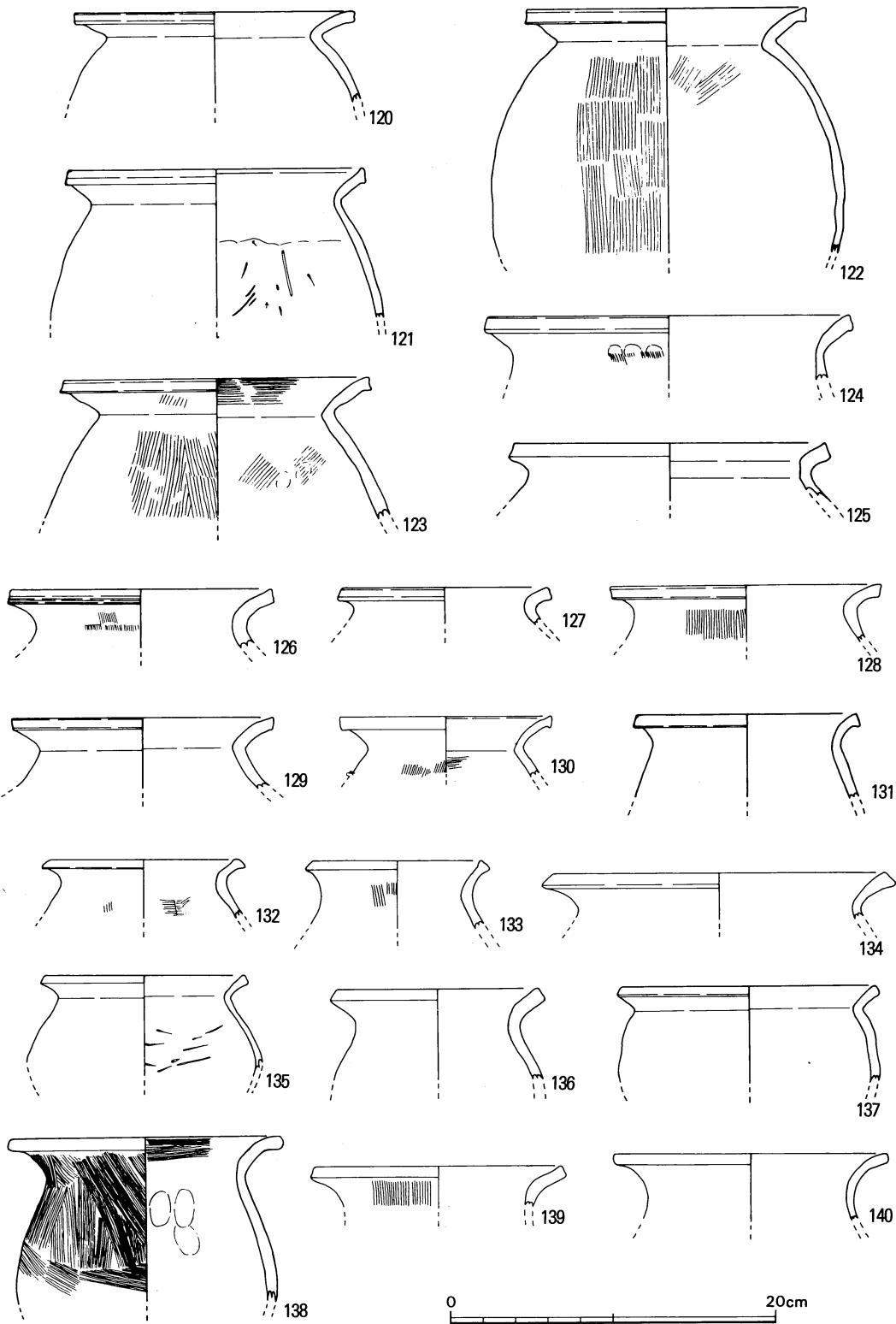
第 147 図 S R I 出土遺物



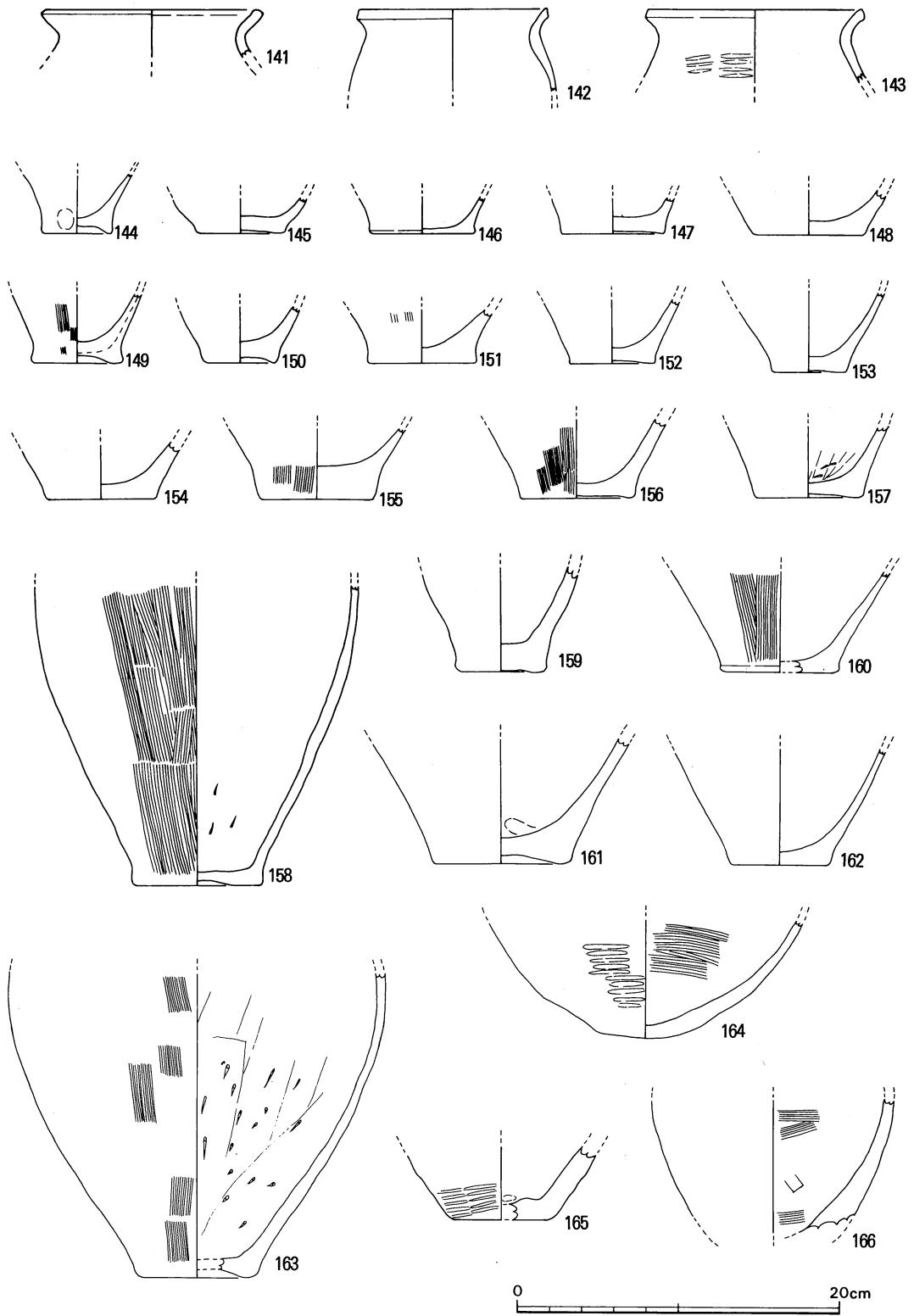
第148図 S R I 出土遺物



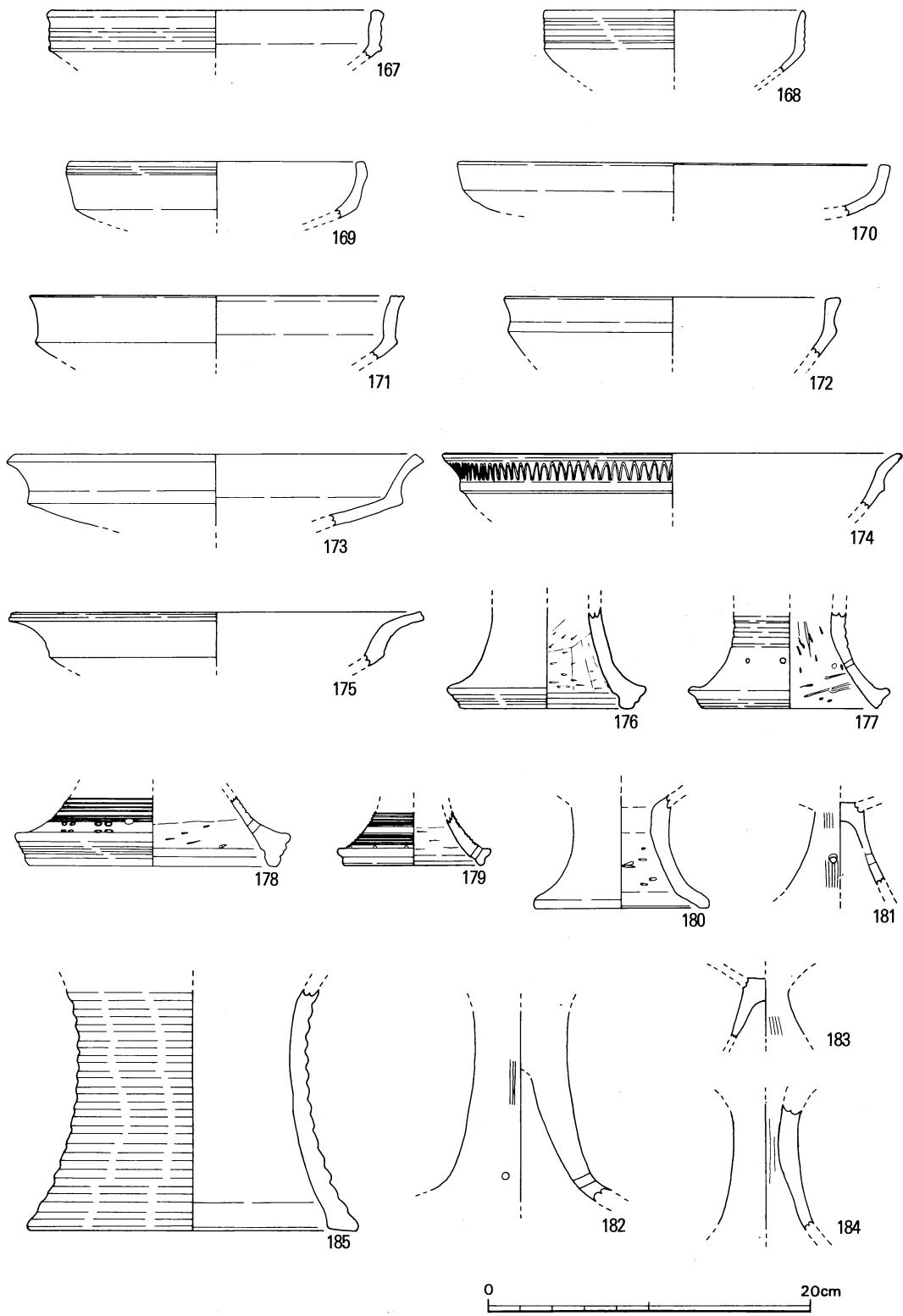
第149図 SR I出土遺物



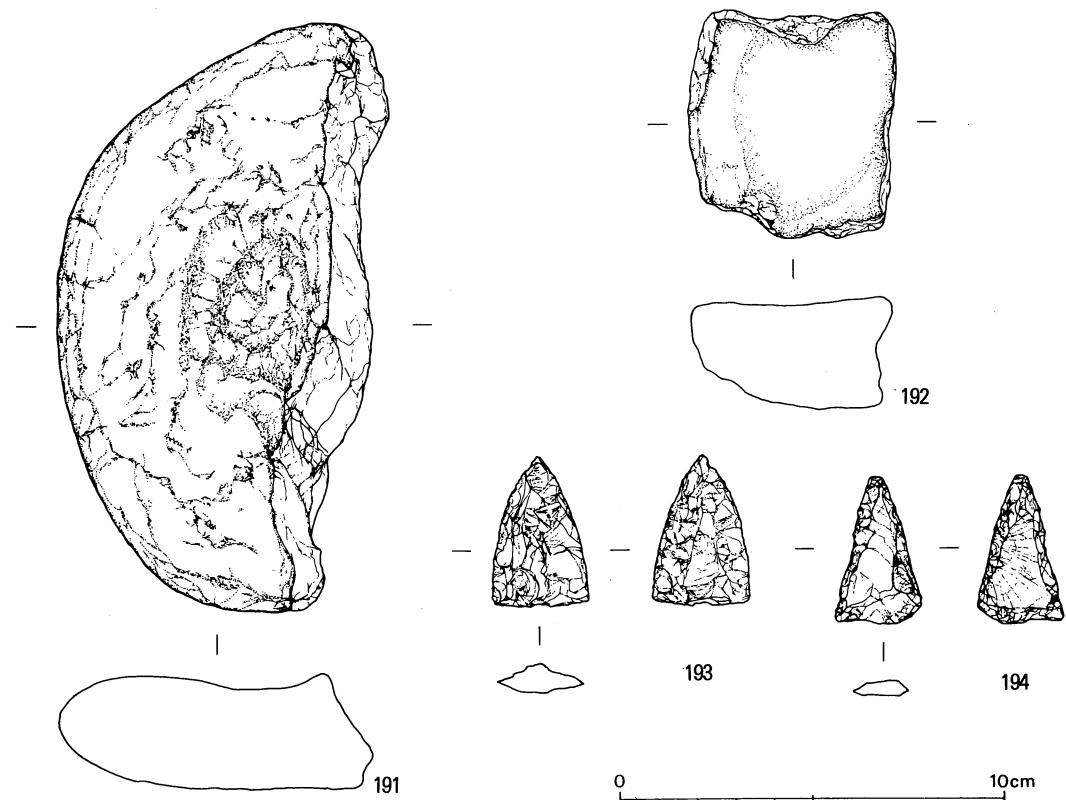
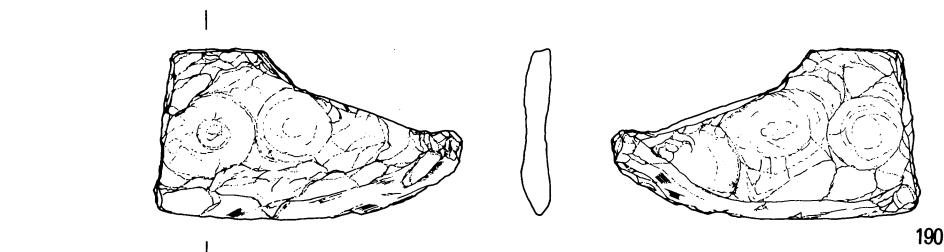
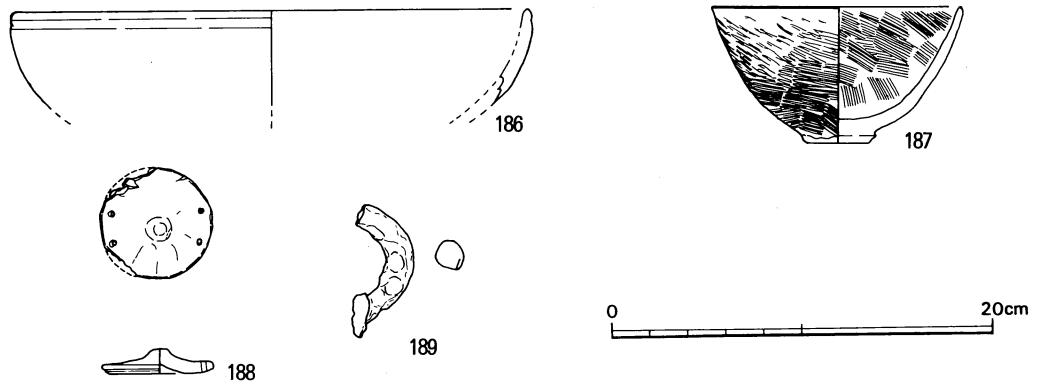
第150図 SR I出土遺物



第 151 図 S R I 出土遺物



第152図 S R I 出土遺物



第153図 S R I 出土遺物

8. 弥生時代中期小結

8. 弥生時代中期小結

はじめに

中期の遺物・遺構についての概略を述べる。中期の遺構は、田村遺跡群の北西部を中心に分布しているが、良好な一括資料は量的に少なかった。したがって、中期の土器をⅠ期からⅢ期に時期区分することにした。中期Ⅰの土器の分類は、Loc.36AのSD2出土土器をもとにし、中期Ⅱの土器は、Loc.45のSD2出土土器を主として編年を試みた。中期Ⅱの土器は、古相と新相に分かれるが、良好な資料が得られなかつたため、細分を断念した。中期Ⅲの土器は、Loc.31～36・45・46等の各地点から多量に出土している。

I. 遺物（土器）

壺

(i) 中期の壺を形態及び貼付口縁の有無等により、A～E類に大分類した。

A類：貼付口縁のみられない壺

B類：貼付口縁のみられる壺

C類：薄手の壺

D類：細頸壺

E類：口唇部に凹線文の施された壺

(ii) 口頸部の施文による分類

I類：口頸部が無文のもの

II類：口頸部を幅の狭い貼付突帯と櫛描文で飾るもの

III類：口頸部を櫛描文で飾るもの

IV類：口頸部を貼付突帯で飾るもの

V類：その他の施文

(iii) 口唇部の施文による分類

a類：口唇部が無文のもの

b類：口唇部に刻目のあるもの

甕

(i) 中期の甕を口縁部の形態等により、A～C類に大分類した。

A類：口縁部が如意形に外反する類

B類：口縁部がくの字状に外反する類

C類：口縁部がくの字状に外反し、口唇部に凹線文の施される類

(ii) 上胴部の施文による分類

I類：上胴部が無文のもの

II類：上胴部に微隆起帯の施されるもの

III類：上胴部に櫛描文の施されるもの

(1) 中期 I の土器

壺

A I類：貼付口縁のみられない壺で、口頸部が無文の類である。A I類の壺は、口唇部の刻目の有無により、A I a類とA I b類に分かれる。

類例

A I a : L.34A-44, L.36A-9・58

A I b : L.36A-10~12・53

A II類：貼付口縁のみられない壺で、口頸部を貼付突帯と櫛描文で飾る類である。A II類の壺は、口唇部の刻目の有無により、A II a類とA II b類に分かれる。

類例

A II a : L.36A-67・69・70・73・74

A II b : L.34A-412・413, L.36A-72・76

A III類：貼付口縁のみられない壺で、口頸部を櫛描文で飾る類である。A III類の壺は、口唇部の刻目の有無により、A III a類とA III b類に分かれる。

類例

A III b : L.36A-52

B I類：貼付口縁の壺で、口頸部が無文の類である。B I類の壺は、口唇部の刻目の有無により、B I a類とB I b類に分かれる。

類例

B I a : L.36A-59

B I b : L.36A-13・61・62

B II類：貼付口縁の壺で、口頸部を貼付突帯と櫛描文で飾る類である。B II類の壺は、口唇部の刻目の有無により、B II a類とB II b類とに分かれる。

類例

B II a : L.36A-68, L.44A-8

B II b : L.36A-14

B III類：貼付口縁の壺で、口頸部を櫛描文で飾る類である。B III類の壺は、口唇部の刻目の有無により、B III a 類と B III b 類に分かれる。

類例

B III a : L.36A-63

B III b : L.36A-64・65

C類：薄手の壺で、上胴部に3条の微隆起帯がめぐらされる。C類の壺は、前期IVの薄手の壺に酷似しているが、上胴部に3条の微隆起帯がめぐらされる点が異なる。

類例

C : L.36A-15・16

甕

A I類：口縁部が如意形に外反し、上胴部が無文の甕で、やや胴が張り出す類である。

類例

A I : L.36A-23

A II類：口縁部が如意形に外反し、上胴部に3条の微隆起帯の施される類である。

類例

A II : L.36A-286・448、L.44A-3

A III類：口縁部が如意形に外反し、上胴部に粗い櫛描文の施された甕で、口唇部に刻目がある。

類例

A III : L.32-38

(2) 中期IIの土器

壺

A I類：貼付口縁のみられない壺で、口頸部が無文の類である。A I類の壺は、口唇部の刻目の有無により、A I a 類と A I b 類に分かれる。

類例

A I a : L.45-217

A I b : L.45-145

A II類：貼付口縁のみられない壺で、口頸部を貼付突帯と櫛描文で飾る類である。A II類の壺は、口唇部の刻目の有無により、A II a類とA II b類に分かれる。

類例

A II b : L.34A-275

A III類：貼付口縁のみられない壺で、口頸部に櫛描文を施す類である。A III類の壺は、口唇部の刻目の有無により、A III a類とA III b類に分かれる。

類例

A III a : L.33-69

A IV類：貼付口縁のみられない壺で、口頸部に貼付突帯を施す類である。A IV類の壺は、口唇部の刻目の有無により、A IV a類とA IV b類に分かれる。

類例

A IV b : L.36A-98・99、L.45-123

B I類：貼付口縁の壺で、口頸部が無文の類である。B I類の壺は、口唇部の刻目の有無により、B I a類とB I b類に分かれる。

類例

B I a : L.45-215、L.44A-47~52・54

B I b : L.44A-46・53

B III類：貼付口縁の壺で、口頸部に櫛描文の施される類である。B III類の壺は、口唇部の刻目の有無により、B III a類とB III b類に分かれる。

類例

B III a : L.33-7、L.36A-206、L.45-218

B III b : L.34A-457

B IV類：貼付口縁の壺で、頸部下端に貼付突帯の施される類である。B IV類の壺は、口唇部の刻目の有無により、B IV a類とB IV b類に分かれる。

類例

B IV a : L.45-211、L.44A-39・42

B IV b : L.44A-38

C 類：高知県の西部地域から搬入されたと考えられている薄手の壺である。

類例

C : L.34A-424・429、L.36A-187~194・287、L.44A-56~61、L.45-219

D 類：細頸壺である。

類例

D : L.34A-468・469、L.34B-88

E 類：出現期の凹線文土器であり、口唇部に凹線文が施された壺である。

類例

E : L.36A-207、L.45-228

甕

A I 類：口縁部が如意形に外反する甕で、口頸部が無文の類である。

類例

A I : L.45-65

B I 類：口縁部がくの字状に鋭く外反する甕で、胴部の張りは弱い。

類例

B I : L.44A-62~65

鉢

A 類：口縁部が如意形に外反する鉢である。

B 類：口縁部が直立気味に立ち上がる鉢である。

類例

B : L.45-240

C 類：口縁部が直線状に外反する鉢である。

類例

C : L.45-125・241

(3) 中期IIIの土器

壺

A V類：貼付口縁のみられない壺で、口頸部に刷毛状原体による羽状文が施される類である。

類例

A V a : L.34B-139

B I類：貼付口縁の壺で、口頸部が無文の類である。

類例

B I a : L.34B-83・84

C 類：高知県の西部地域から搬入されたと考えられている薄手の壺である。

類例

C : L.36A-2

D 類：細頸壺である。

D : L.36A-246、L.45-76・155

E 類：口唇部に凹線文の施された壺である。

類例

E : L.33-11・12、L.34A-112~114・481~484、L.34B-1、L.45-77・78

甕

A I類：如意形に外反する貼付口縁の甕であり、上胴部が無文の類である。

類例

A I : L.34A-543、L.45-260

B I類：くの字状に外反する口縁部を有した甕で、上胴部が無文の類である。

類例

B I : L.34B-2

C I類：くの字状に外反する口縁部を有した甕で、口唇部に凹線文の施された類である。

類例

C I : L.36A-4・5・7、L.45-29

鉢

A 類：口縁部が如意形に外反する鉢である。

類例

A : L.45-26・49、L.34A-366

B 類：口縁部が直立気味に立ち上がる鉢である。

C 類：口縁部が直線状に外反する鉢である。C類の鉢は、貼付口縁のもの（C₁類）と、口縁部外面に凹線文の施されるもの（C₂類）とに分かれる。

類例

C₁ : L.36A-348

C₂ : L.34A-62

高杯

A 類：杯部は上方で稜を有し、口縁部外面に凹線文の施された高杯である。脚部は、中空で、粘土板充填法がみられる。

類例

A : L.33-47、L.34A-24・870・871、L.34B-3・4、L.45-58・59・256

B 類：杯部の形態は、A類に酷似するが、口唇部を拡張し、そこに凹線文を施す点が異なる。脚部は、中空で、粘土板充填法がみられる。

類例

B : L.34A-636～640・872

2. 遺構

以上の田村遺跡群中期弥生土器3期分割の上に立って、中期の住居址を中心に論じたい。

田村遺跡群では、中期に属する住居址は全体で18棟検出されている。これらの内訳は、Loc.34Aが9棟（S T 1・3・5・7・8・12・15・16・20）、Loc.35が1棟（S T 1）、Loc.35Bが1棟（S T 1）、Loc.45が7棟（S T 4～10）である。これらの時期は、第24表の通りであり、中期Iに属するものが1棟、中期IIに属するものが2棟、中期IIIに属するものが14棟及び中期に属するが時期の不明なもの1棟である。なお、中期IIIから後期Iに属するものが5棟検出されているが、後期の小結の項で述べているので、ここでは割愛した。今回検出された中期の住居址では、圧倒的に中期IIIに属するものが多いが、これは調査範囲が限定されたためで、今後の周辺部の調査によって、中期I・IIの住居址も多数発見される可能性がある。

これらの集落構成についてみてみると、Loc.34Aでは主に中期IIIから後期Iにかけての集落が検出されており、住居址の総数は20棟に及び今回確認された集落では最大規模を誇る。この集落は住居址数からして、中期IIIの段階に繁栄期ともいえる時期をむかえたことがうかがえる。Loc.35は、従来から西見当遺跡として有名な地区で、前期II・IIIの時期の集落が確認されており、S T 1が1棟だけ中期IIIに属している。これは、S T 1が集落形態をとらずに存在したことを意味するとも把れるが、調査範囲が限定されたことに起因したとも考えられ、どのような集落構成であったかは今後の調査を待たねばならない。Loc. 35Bは、Loc. 34Aの北東約100mの地点で、S T 1以外に後期Iの住居址（S T 2）が検出されている。このS T 1は中期IIに属する住居址であるが、周辺部では、この期の住居址は検出されておらず、どのような集落

第24表 中期に編入される住居址の時期区分

地区・ 住居址 △ 時期	中 期 I	中 期 II	中 期 III
L.34A			
S T 1	- —— -		
S T 3			— — -
S T 5	— —	— —	— —
S T 7			— -
S T 8			—
S T 12			—
S T 15			—
S T 16			—
S T 20			— — -
L.35			
S T 1			— — -
L.35B			
S T 1		— — -	
L.45			
S T 4			— — -
S T 5			—
S T 6			—
S T 7			—
S T 8			—
S T 9			—
S T 10			— — -

構成になっていたかは不明である。Loc.45は、Loc.34Aの西約50mの地点で、10棟の住居址が検出されており、中期IIが1棟、中期IIIが6棟、後期Iが1棟、後期IIIが1棟及び後期に属する住居址が1棟確認され、Loc.34A同様中期IIIに集落の繁栄期をむかえたことが看取できる。また、周辺部にもまだ多数の住居址が埋蔵されていると考えられ、大集落であったと推測される。以上の集落構成から、中期IIIの時期の集落は、田村遺跡群の北西部にその中心があったことが判明した。しかし、中期Iの時期は、Loc.34AのS T 1以外にLoc.10BのS D 2しか遺構が確認されておらず、集落の中心及び集落構成については、今回の調査では明確にできなかった。中期IIの時期も中期I同様、確認できた遺構は先述の住居址2棟以外にLoc.45の溝2条(S D 2・6)のみで、その集落については明確にできなかった。

次に、住居址の形態と規模についてみてみる。検出された住居址は、すべてほぼ円形を呈し、完掘していないものや後世の遺構に壊されているものを除けばすべて住居址の真中に、平面形が円形ないし橢円形を呈す中央ピットを1個保有する。また、壁溝も各期の住居址で確認されたが、時期及び住居址によってそのあり方が異なる。すなわち、壁直下を一周する壁溝は中期III期の住居址に限られ、中期I・IIの住居址ではごく一部に設けられているにすぎない。ただし、中期IIIの住居址でも、一部にしか壁溝が設けられていないものもある。これら住居址は、主に4~6個の主柱で棟を支えていたとみられ、中には建替えを行ったと考えられる住居址(Loc.34AのS T 1・5・12・15、Loc.35BのS T 1、Loc.45のS T 10)もある。集落内での建替えの比率をみてみると、Loc.34Aの中期III期で29%、Loc.45の中期III期で17%であり、建替えを行った住居は比較的少なかったといえるのではなかろうか。また、焼失住居は全体で6棟確認されている。その内訳は、Loc.34Aが3棟(S T 7・15・16)、Loc.35が1棟(S T 1)、Loc.45が2棟(S T 4・7)である。Loc.34Aの3棟はほぼ同期のものであり、1棟の火災により他の2棟が類焼したとみられる。Loc.45の2棟はほぼ同期と考えられるが、約40m離れ、かつ、その間の住居の様相が不明であるため、類焼による焼失住居であったとは断定できなかった。次に、住居址の面積をみてみると、中期Iは1棟のみで、21.2m²、中期IIは2棟でその平均は28.6m²、中期IIIの14棟の平均は29.5m²である。中期I・IIの資料に乏しく、断定できないが、中期IからIIIにかけてその面積は徐々に広くなったと考えられる。そして、後期にはいり、住居の面積の縮少化がみられる。このことは、Loc.34Aの集落でもいえることであり、また、住居の面積の縮少傾向に伴って、集落自体も縮少している。すなわち、Loc.34Aの場合、中期III期には、集落の境界をなすS R 1までの場所に万遍なく住居が存在するのに対し、後期にはいり、中央部に集中する傾向がある。このことが、他の集落でも言えることかどうかは今後の調査に期するところである。

最後に、住居址以外の遺構についてみてみる。ここでまず注目されるのは、自然流路(S R 1)が確認されたことである。S R 1は幅3~10m、深さ1~2mを測り、Loc.33から南へ向って約200m延び、さらに調査区外へ延びている。Loc.33以北では2本に分かれ、北西へ延びる

ものはLoc.34Aの集落の北側と東側の境となり、北東へ延びるものはLoc.35Bの北へさらに伸びている。また、SR1は多数の支流に分かれる。ここからの遺物は、前期から後期、一部古式土師器まで出土しているが、そのほとんどは、中期IIIから後期Iにかけての遺物であり、この自然流路もその頃に存したと考えられる。また、この自然流路の水を利用した水田経営も考えられるが、今回の調査では確認できず、今後の周辺部の調査によって、弥生中期後半から後期にかけての水田址も発見される可能性が強い。

土塙についてみてみると、平面形が舟形を呈するものが多い。特に、Loc.34Aの集落では、住居址に隣接して、1~2基が存する。時期的には、出土遺物が少なく、明確にし得なかったが、ほぼ同期のものと考えられる。構造的には、底面中央部にピットが検出されたものがあり、当時は、柱を1本たて、それによって覆いをしていたと考えられ、貯蔵穴的性格を有していたのではないかろうか。一方、平面形は異なるが、Loc.34BのSK69から中期IIIの土器がセット（壺1、甕1、高杯2）で出土している。このような例は他にはなく、意識的に埋められたものとみられ、何らかの祭祀に関係すると考えられ、Loc.34Aの集落との関係や中期IIIの土器の組成を考える上で注目される。

以上、弥生中期の遺構についてみてきたが、集落址を確認できたのは、Loc.34AとLoc.45の2地区のみである。Loc.45は、トレンチ調査であったため、集落の規模や構成については論ずることができなかった。一方、Loc.34Aの集落では、住居址の変遷を概ね把握し得たと考えるが、西側には集落の約1/3が残存しているとみられ、十分な集落構成をつかめたとは言い難く、今後の周辺部の調査を待って、解明していきたい。

9. 弥生時代後期小結

9. 弥生時代後期小結

I. 遺物

弥生後期の土器は、時期的に大きく2時期に分ける事ができる。すなわち、叩き技法を持つものと持たないものであり、叩き技法を持つものが時期的に後出である。これは、畿内地方の影響が後期中葉以降増大したためとみられる。この叩き技法を持つ土器は、岡本健児氏が土佐山田町ヒビノキ遺跡の報告で述べたように、さらに2つの時期に分類できよう。そこで、本報告では叩き技法をみない段階^{註1}の後期の土器を後期I、叩き技法が出現する段階の土器を後期II、そして、叩き技法が盛行する段階の土器を後期IIIとし、大きく3期に分けた。なお、後期Iはその高杯形土器から、さらに細分される可能性を含んでいるが、今後の課題としたい。

今回の発掘調査で検出された住居址の大半は後期Iであり、後期II・IIIのものは少なく、その出土遺物も同様な状況である。それがゆえ、後期II・IIIの弥生土器資料は乏しく、詳述できない。

さて、弥生後期の土器を各器種とも形態により以下のように便宜上分類する。もちろん各期にすべての類が存するとは限らない。

壺形土器 口頸部の形態により6類に分ける。

- A類 口頸部がゆるやかなカーブを描いて、口縁部が上外方へ開くもの。
- B類 頸部が斜めに直線的に開くもの。
- C類 頸部が外反するもの。
- D類 頸部が短かく、やや強く外反するもの。
- E類 長頸壺の類。
- F類 短頸壺の類。
- G類 口縁部が水平に開くもの。

甕形土器 口縁部の形態により3類に分ける。

- A類 頸部がくの字状に屈折するもの。
- B類 頸部がゆるやかなくの字状の屈折をなすもの。
- C類 口縁部が跳上状口縁をなすもの。

高杯形土器 杯部の形態により3類に分ける。

- A類 杯部に稜を持ち、斜め上方へ延びる口縁部を持つもの。
- B類 杯部に稜を持ち、外反する口縁を持つもの。
- C類 梶状の杯部を持つもの。

鉢形土器 口縁部の形態により大きく2類に分ける。

- A類 外反する口縁を持つもの。
- B類 直口の口縁を持つもの。

以上の基本的分類に従って、各遺構出土の土器を次の如く三型式に分類して述べる。

〈後期 I〉

この段階は、多数の遺構が検出され、ほぼ全器種が出土している。ここで記載したものは、住居址及び土塙からの一括資料であり、ほぼ同時期とみて間違ないと考えるものである。

壺形土器

A類 口径12cm前後的小形と口径20cm以上の大形とがある。口唇部は、中期IIIのように上下に大きく拡張されず、ヨコナデ調整により若干拡張したものや拡張されないものもある。また、中期IIIの凹線文は擬凹線文に変化する。頸部には施文がない。

類例

L.34A-111・360

B類 口唇部を下方に拡張している点が特徴であるが、拡張部は中期のものに比すると短い。凹線文に類するものは認められず、ヨコナデ調整によって仕上げている。

類例

L.34A-239

C類 口唇部は面をなし、凹線文は施されない。中期IIIに比べ肩が張り、胴部最大径が上胴部にある。胴部内面中位以下に範削りが施される。

類例

L.34A-240

D類 A類に比べ、頸部からの外反の度合が大きい。口唇部は、ヨコナデ調整によってやや拡張され、擬凹線文を施す。口頸部内外に刷毛調整を施しているものもある。

類例

L.34A-236・312・313

E類 長頸壺の類であり、頸部が長く立ち上がり、口縁部がやや外傾し、端部は面をなすもの、それと同時にいわゆる細頸壺もある。

類例

L.34A-311、L.35B-6、L.45-22

F類 中胴部に胴部最大径を有する短頸壺である。頸部以上は短く外傾する。後期II以降にはこの類の出土はなかった。

類例

L.34A-253・353・582

甕形土器

A類 この類の甕は、他の甕形土器に比べ出土頻度が高く、甕形土器の主要部分を占めていたとみられる。上胴部に胴部最大径を有するものと中胴部に胴部最大径を有するものとがある。内面頸部直下より範削りを行っているものもある。口唇部に擬凹線文を施しているものもある。

類例

L.34A-128~130・246~249

B類 上胴部に胴部最大径を有するとみられ、口唇部は面をなす。擬凹線文が施され、甕形土器A類に比して大型のものが多い。

類例

L.34A-231・256

C類 この類は量的に少ない。頸部は短く立ち上がり、口縁部で外傾し、跳上状口縁をなす。後期II以降の類例はない。

類例

L.34A-127

高杯形土器

A類 口径15cm前後の小形のものと口径20cm前後の中形のものとがあり、口縁部の傾斜度はゆるい。杯に稜の明確なものは後出的な要素を持つものである。脚部は、内面にしばり目が残存するが、範削りは施されていない。杯底部の成形は円板充填であり、この段階まで円板充填による杯底部成形が一部残存していたことを知る事ができる。

類例

L.34A-97・98・263・324・364

B類 口縁部は短く外反し、杯部は内湾気味に立ち上がる。口唇部は外傾する面をなし、擬凹線文を施すものもある。後期IIのものに比べると稜線以上が短い。脚部は大きく開き、円形の透しを施すものもあり、また、端部に擬凹線文を施すものもある。脚部内面はナデ調整のみで、範削りは全く施されず、杯底部成形はへそ状粘土充填による。

類例

L.34A-265

鉢形土器

A類 口縁部は外反し、端部を丸く仕上げ、体部は平底から内湾気味に立ち上がる。B類に比べ大形のものが多く、大型の鉢形土器の主流をなしていたと考えられる。

類例

L.34A-366

B類 口縁部が直口する類であり、口縁部の存り方で少し異なり2つに細分できる。すなわち、口縁部が、体部からそのまま立ち上がるものと体部から角度を変えて立ち上がるものである。底部は、平底のものとあげ底気味のものとがある。これらはいわゆる銘々器と呼称される鉢の類であり、この段階から出現するとみられる。

類例

L.34A-269・325・326・365

〈後期II〉

この段階のものは、一括資料に乏しく、一部Loc.34AのS T14出土のものがあげられる以外は、溝及び自然流路からの出土であり、他の時期のものと混在して検出されたため、全てを抽出することは困難であった。そのため指摘し得たのは、壺形土器A・D、甕形土器A、高杯形土器B・C、鉢形土器Bの各類である。

壺形土器

A類 口唇部に擬凹線文に類するものが全くなくなる。直立する頸部から短く外傾する口縁部を有するものと、直立する頸部から外反する口縁部を有するものとに分けられる。ともに口頸部内外面に刷毛調整を加えている。

類例

L.45-165・167・169

D類 前段階と形態的にはほとんど変化しないが、壺形土器A類同様口唇部に擬凹線文に類するものは姿を消す。端部は外傾する面をなし、口頸部内外面に刷毛調整を加える。

類例

L.45-166

甕形土器

A類 前段階に比べ頸部のカーブの度合が大きくなり、口唇部に擬凹線文に類するものはなくなる。胴部最大径は中胴部に求めることができ、上胴部外面以下に平行の叩き目が残存し、その上に縦方向の刷毛調整を加えるものもある。胴部内面には中位以下に範削りが施される。

類例

L.34A-250、L.34B-162

高杯形土器

B類 杯部に明瞭な稜を持ち、口縁部は外反する。端部は外傾する面をなし、杯部内外面に丁寧な範磨きを施す。杯底部成形はへそ状粘土充填による。脚部は内面にしづら目が残存する。脚は裾部で大きく開く。

類例

L.34A-264・268

C類 杯部は浅い椀状をなし、口縁部は外傾し、端部はほぼ丸く仕上げられる。脚部は短く裾部は開く。中実の脚部上端外面に粘土を継いで杯部を成形するもので、この段階以降脚部の中実のものが主流をなす。

類例

L.34A-25

鉢形土器

B類 体部は内湾氣味に上がり、口縁部は内傾するもので、前段階にみられなかつた新相である。その端部は丸く仕上げられる。体部内面には横方向の刷毛調整が施される。なお、前段階と同じタイプのものも残存すると考えられるが、出土していない。

類例

L.34A-270

〈後期III〉

この段階のものは、前段階以上に資料が乏しい。よって指摘し得たのは壺形土器F類、甕形土器F類、高杯形土器B類、鉢形土器A類のみである。

壺形土器

G類 III期のみに見られる。口唇部には凹線文が残る。

類例

L.45-17

甕形土器

A類 前段階に比べ、叩きが施される部位が頸部まで達し、その単位も不明瞭になる。頸部のカーブは前段階に増し大きくなる。口唇部は外傾する面をなし、口縁部内面には刷毛調整が施される。

類例

L.33-53・54

高杯形土器

C類 杯部は椀状を呈し、脚部は円柱状からなし、ハの字状に開く。

類例

L.44C-195

鉢形土器

B類 外面に叩きを有する。

類例

L.44C-192

2. 遺構

以上の田村遺跡群後期弥生土器3期分割の上に立って、後期の住居址について論じたい。

田村遺跡群では、後期に属する住居址は全体で15棟検出されている。これらの内訳は、Loc.10Bが1棟(S T 3)、Loc.34Aが9棟(S T 2・4・6・10・11・13・14・17・19)、Loc.45が3棟(S T 1~3)、Loc.35Bが1棟(S T 2)、Loc.36Bが1棟(S T 1)である。これら住居址の時期は、第25表の通りであり、中期IIIから後期Iに属するものが5棟後期Iに属す

るものが8棟、後期IIIに属するものが1棟及び後期に属するが時期の不明なもの1棟である。この内、Loc.34AのST14は後期IIの時期にも属するとみられる。これから、後期Iに属する住居址が圧倒的に多く。後期II以降の住居址は非常に少ない。このことは、調査範囲が限定されたためとみられ、単に後期II以降他の地域へ集落の主体が移行したとは即断できず、今後の調査によってそれらの数が増加する可能性もある。

これらの集落構成についてみてみると、Loc.10Bは、前期IVの時期に属する集落が検出され、後述の4地区より南東へ約700m離れた地点にあり、後期IとみられるST3は単独で存在する。このことは、ST3が集落形態をとらずに存在したことを意味するとも把れるが、これとて発掘範囲の限定から断言は出来難い。Loc.34Aは、中期IIIから後期Iにかけての集落が検出された地区であり、確認された住居址は20棟に及び、中期IIIの住居址が7棟、中期IIIから後期Iにかけての住居址が5棟、後期Iの住居址が4棟であり、後期になって集落の縮少化がみられ、ST14を最後に住居址は姿を消す。この地区的西約50mの地点がLoc.45である。Loc.45からは、10棟の住居址が検出されており、中期IIから後期IIIにかけての集落とみられる。内6棟は、中期IIIとみられ、Loc.34A同様中期IIIの集落の繁栄が察知できる。なお、Loc.45の周辺には、まだ多数の住居址が埋蔵されている可能性が非常に強く、その集落構成については多くの課題

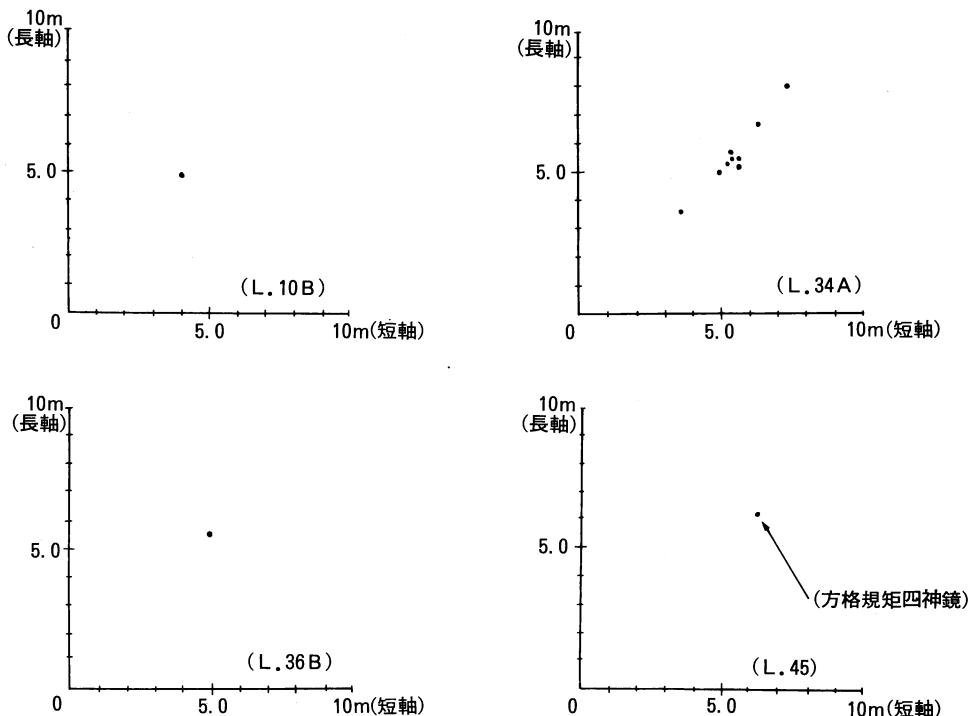
第25表 後期に編入される住居址の時期区分

時 期		中 期 III	後 期 I	後 期 II	後 期 III
地 区・住 居 址					
L. 34A	ST 2	-	-		
	ST 4		-	-	
	ST 6	-	-		
	ST 10		-	-	
	ST 11	-	-		
	ST 13	-	-		
	ST 14		-	-	
	ST 17	-	-		
	ST 18	-	-		
L. 45	ST 1				- - -
	ST 2		-	-	-
	ST 3		-	-	
L. 35B	ST 2		-	-	
L. 36B	ST 1		-	-	
L. 10B	ST 3		-	-	

を残すものである。それと同時に、Loc.34Aと近接していることから、一連の集落あるいは密接な関連にある集落と考えてもおかしくないものである。Loc.35BのST2は、中期IIの住居址(ST1)を切っているが、Loc.34Aの北東約100mの地点で単独で検出された。Loc.34Aの集落とは直接結び付けることができないが、何らかの関連を持っていたのではなかろうか。Loc.36Bから検出された住居址(ST1)は、Loc.34Aで確認された集落とは自然流路(SR1)を隔てて存在する。Loc.34Aの集落は、SR1に東側を区画された形で集落を構成しているとみられ、その住居址がこの集落の一環であった可能性を残すとしても、このような形での住居址の存在が集落内においてどのような役割を果していたかは今後の問題点である。

次に、住居址の形態と規模についてみてみる。検出された住居址は、すべて円形ないし円形に近い楕円形を呈し、その面積の平均は約27.2m²である。これら住居址のほとんどは、住居内に壁溝や中央ピットを保有し、4~6個の主柱で棟を支えていたとみられる。これらの内、建替えが確認されたのは、Loc.34AのST13・14・17であり、Loc.10BのST13もその可能性がある。また、焼失家屋であったとみられるものは、Loc.34AのST14のみであった。これらのほとんどは、一般的の住居とみられるが、特異な形態を示す住居址も数棟確認された。まず、Loc.34Aでは、ST14がそれに該当し、同集落内では最大の規模を誇り、かつ、勾玉等他の住

第26表 調査区における後期堅穴住居址の規模



居址ではみられなかった遺物も出土している。このことは、S T14が集落内で中心的存在であったことを示している。次に、Loc.45では、S T1からベット状遺構が検出され、床面より方格規矩四神鏡片が出土している。このような特異な住居址、特異な遺物の住居址内の出土は、そこに比較的有力な(農業)共同体の存在を示唆していると考えてよかろう。また、同地区のS T2は、推定径9.4mと後期の住居址の中では最大のものであり、Loc.34AのS T14の例から考えて集落の中心的存在であったとみられるが、出土遺物が他の住居址とほとんど同じであり、その点で集落における共同集会所等の共同的性格の濃いものであった可能性が強く感ぜられる。Loc.36BのS T1は、規模及び出土遺物から特異な住居址とは考えられないが、小さな壇部を有する点で他と異なる。ただ、この壇部がベット状遺構として把握できるかは今後の調査の課題である。

これら後期の住居址に密接な関連を持つものとして、Loc.34BのS P1から出土した方格規矩四神鏡片をあげることができる。これも破碎鏡であるが、Loc.45のS T1から出土した方格規矩四神鏡片が破碎面を研磨しているのに対し、全く調整を加えていないものである。これは、明らかに廃棄されたものであり、Loc.34Aの集落と密接に関連するとみられる。この集落の西側は未調査であり、断言できないが、S T14が時期的に一応この集落において最後まで存した住居と考えてよかろう。このことからして、この方格規矩四神鏡片は、S T14が廃絶する後期II段階に廃棄されたとしなければならない。Loc.45のS T1が後期IIIの時期に属していることから、この2つの鏡片の廃棄された時期は、後期II～IIIの時期であろう。ここで、いま少しこの2つの鏡片の意味について考えてみたい。高橋徹氏は「廃棄された鏡片」の中で「鏡片は比較的有力な農業1共同体に少なくとも1～2点程度保有されており、ある種の権威の象徴として、あるいは、また、祭祀品としての機能を有す間伝世されたと考えてきた。そしてこれらの鏡片に水系、あるいは平野単位での各共同体群の結合や統合の象徴としての機能までは想定し得ないとした。」と述べている。これは豊後においてのものであり、集落の実体がまだ十分解説していない本地方へ直接結び付けて考えるのは危険であるが、将来的な予測としては十分参考になり得る。そして、この2つの鏡片の存在は、Loc.34AとLoc.45で検出された集落が密接な関連を持っていたことを示唆していると考えられる。しかし、それらがこの田村遺跡群の存在する香長平野や物部川水系のどの範囲までを包指していたかは、今後の調査に期するしかない。また、高橋氏は、同論文で「小地域共同体が平野的規模での強力な結合、統合の関係に入るには、平野的規模で君臨する大形古墳(前方後円墳等)の出現を待たねばならないだう。」と記し、鏡片の廃棄は、弥生時代的なものの否定、そして新たな動きが開始された反映ではないかと考えている。この田村遺跡群の場合、後期III以降古墳時代にはいってからの遺構はほとんど発見されていない状況であり、物部川水系全体でもこのことは言えることである。しかも前期古墳はこの地域で全く発見されていない。この2つの破棄された鏡片により、高橋氏所論の新たな動きは予測されるが、これを証明するには、今後この地域の前期古墳の調査

が一つの鍵であると言えるのではなかろうか。

註1 土佐山田町教育委員会『ヒビノキ遺跡』 1977

註2 高橋徹「発棄された鏡片」『古文化談叢』第6集 1979 P83

註3 2に同じ P80

10. 総括 I

10. 総 括 I

——縄文・弥生時代——

田村遺跡群は南四国中央部の弥生時代の拠点的母村集落遺跡であるが、今次の発掘によって発見された遺構は全てこれを裏付けるものである。実はそのような弥生遺跡群よりも更に古く、この土地に縄文後期中葉の遺跡が検出されたのは驚くべき事であった。最近高知平野の低地にも2～3の縄文遺跡が発見されているが、Loc.47の縄文遺跡はそれらの遺跡の中では、最も数多く遺物の検出された遺跡である。特に多く検出されたのは彦崎K I式土器と、それに伴う打製石斧である。四国地方で多量に打製石斧が出土するのは、この遺跡から検出されている彦崎K I式土器の段階がその最上限であって、それ以前の縄文時代ではこれ程の打製石斧は検出されない。この打製石斧の用途として、筆者は当時の平野部に繁茂したクズ・ワラビ・ユリ・カタクリ・ヒガンバナ・ヤマイモなどの地下茎・球根類の掘り棒と考える。また、この遺跡からは多くの石錘も検出されている。この石錘は河川流域の漁網のものより大きく、海浜での漁網のものと考えられる。縄文前期の海進が終り、以後の海退に伴って本遺跡の南部2キロの太平洋岸にある砂丘の内側に広大な潟が、この当時存在していたと筆者はみる。この潟での漁網の重りがこの石錘である。Loc.47の縄文遺跡で発見されている考古資料では、縄文後期稻作論を証する事は出来難い。また、この遺跡は四国の山間部の大半の縄文遺跡と同様に、土器型式で^{註1}言えば1型式の時期のみの短住・移動型の遺跡である。

弥生時代の遺構として注目すべきものにLoc.16・Loc.25における掘立柱建物址群と竪穴住居址群の検出、Loc.23・Loc.37・Loc.39における弥生水田の発見、さらにLoc.34の弥生中期III～後期I段階の竪穴住居址群の検出であろう。また弥生関係遺物の発見として重要なものはLoc.35の土塙から検出された朝鮮式無文土器、Loc.34B検出の分銅形土製品等の祭祀遺物類、そしてLoc.34B・Loc.45からの方格規矩四神鏡の破碎鏡の検出、さらにLoc.45を中心にみられる搬入品とみられる弥生土器群の検出である。搬入の土器の時期は中期II・中期III、そして後期Iである。茶褐色の胎土に角閃石を含む土器で、なかに上東I式土器とみられるものもあり、その大半は中部瀬戸内地方からの搬入とみられる。それらの搬入の土器は、生活址としての貯蔵穴から多く検出する事から特殊な品を土器に入れ運ばれて来たものと考えてよい。南四国では製塩土器が全く検出されていないので、瀬戸内の塩がこれに収まっていた可能性は非常に強い。

田村遺跡群における前期Iの土器は注目さるべきものである。この土器が検出された当初、これは南四国で未発見の前期弥生土器である所から、検出地の地名を取って東松木式土器と命名した。その特徴は、特に1部の甕形土器にみられ、甕形土器の口縁に接して突帯文土器の突^{註2}帶に近いものを付する。この東松木式土器の甕形土器は、東松木式土器よりやや先行すると考えられる入田B式・入田I式土器を出土する入田遺跡からも検出されている。田村遺跡群そしてごく1部であるが入田遺跡で検出された東松木式土器は、現在までの発見状況からみて南四^{註3}

国で成立したものと考える。そしてその場合、その土器文化の系譜を筆者は亀の甲土器文化の中に求めたい。しかもそれは九州西海岸沿いに南下するものでなく、九州東海岸を南下する^{註4}1条突帯を特徴とする亀の甲土器を考える。東九州にみられる同土器文化系統の下城式土器よりも早い段階に、それは成立したものである事は論を待たない。田村遺跡群における前期IIの弥生土器は、これも筆者が西見当I式土器と称し、板付IIA式土器に近い特色を持つものとした事がある。^{註5}この前期IIの土器の成立についても、前期I（東松木式）土器の後、第2波として北九州からの影響を考える。^{註6}

Loc.23・Loc.37・Loc.39の弥生水田について、その地理的位置、集落と水田の比高、水田への灌水等々を考慮すると、西見当・カリヤ・北カリヤにまたがる環濠集落—前期II・III段階—の水田と考えるのが順当であると思う。そして同じ観点でLoc.16・Loc.25にみられる前期Iの集落址に伴う水田を求めるすれば、該当集落の東部から東北部の当時の低湿地「川原田」周辺に常識的に的を絞る事になろう。山中三男教授の田村遺跡の花粉分析について、兎や角言うものでないが、Loc.6の花粉分析資料に存するイネ花紛のあるものは弥生前期Iの段階のものであるかも知れない。しかし、この考え方は調査に当った発掘担当者の報告内容とは異なるものである。

Loc.10は前期IV段階のもの、この段階は県内諸遺跡をみても分村が盛んに行われる段階である。特にLoc.10で注目される事は、前期IV段階のみに限定されて集落が成立している事である。県内各地のこの時期の集落は、中期Iの段階まで継続して営まれているのが普通であって、住居址内や貯蔵穴で前期IVと中期Iの弥生土器が混在して検出される事が多いが、Loc.10は前期IVの土器だけが検出されている。さらにLoc.10の住居址や土塙の中の土器を詳細に検討すると、前期IV段階でも主体となるのは、その前半のものであって、Loc.10については前期IVの前半段階で分村し集落が形成され、その盛期はその段階であり、前期IV後半の段階ではすでに集落の衰退期を迎えている事が察知できる。田村遺跡群の発掘で特に注意すべき事は、弥生時代の井戸が1基を検出されていない事である。これは発掘で数多く検出された溝状遺構がこれに代わるものであり、特に遺跡の南北を貫く自然流路S R 2の存在は重要なものであろう。Loc.23・Loc.37・Loc.39の弥生水田の灌漑用水の検出は出来なかったが、多分この旧田村川と称してよいS R 2より引いたものであろうし、飲料水もこれから得たと考えられる。

弥生中期I・II期の住居址の検出は少ない。Loc.34 AのST1は中期IまたはII、そしてLoc.45のST8、Loc.35BのST1は中期IIである。この3地点に囲まれる地区は未発掘であるが、調査すれば中期II段階の住居址群が検出される可能性を持っている。しかし、それでも中期I・IIの段階の住居址の検出は少ない。これは筆者のこれまでの分布調査の結果として、それらの時期の土器片は西見当遺跡の東北部に多く集中して包蔵されており、今回の調査区外にそれらが存したためである。中期III～後期IIの住居址群はLoc.34・Loc.45において30棟近く検出されている。うち大半は中期IIIと後期Iの時期のものである。しかもこれらの住居址群中にその

型態や出土遺物によって、住居址群中の中心的なものが1棟～2棟存する。また住居址中に火災に遭遇したものがあるが、集落全部の火災でなく計4棟の竪穴住居が火災に遭遇している。うちS T7・S T15・S T16の3棟は共に中期IIIの土器を出土し、中期IIIの段階で隣接する竪穴住居である点から考えて、これらは類焼したものとみられる。しかも3棟の住居址とも、火災後建て替えられている点を考慮すると、この火災は失火と推理せざるを得ない。これに対し、出土遺物から特殊な住居址とみられるS T14は後期I～IIの段階のものであるが、これと同時期の住居址の広がりはその西部の未発掘区にあるとみられる。その点でS T14の焼失原因等を明確にする事は出来難いが、この住居址の焼失は後述する破碎鏡の放棄と関連させて考えてよい問題であろう。

Loc.34Bからも重要な弥生中～後期の遺構群が検出されている。SK69からは壺・甕が各1点とやや型態を異にする高杯2点が出土しているが、これらは中期IIIの土器で、筆者の言う典型的な龍河洞式土器である。高杯の脚部内面と壺下胴部内面に範削りが存する事は注目してよい。このSK69に接するSK70からは小型の抉りのある石製品が検出されている。筆者はこの石製品の型態から岩偶の一種と考える。人面を表現していないが護符か祖靈像としての使用も考えられる。いま1つ祭祀用の土塙とみられるものに、SK69とは12m程離れたSR1の中の1土塙がある。この中からは、筆者が古くから県西部の中期III段階の土器てみている神西式土器が入子で2個検出されている。この2個の壺には範削りはみられない。祖靈像を収めた土塙、そして龍河洞式土器4点を収めた土塙、さらに神西式土器2個を入子にして収めた土塙、後者の土器を収めた土塙は祖靈像への供献の土器なのであろうか。また集団内の出自によって、このような型式の異なる土器を供献したのであろうか。以上の3土塙の他に、Loc.34Bからは方格規矩四神鏡片が水溜り状遺構とみられるSP1から検出され、SR1の下部から分銅形土製品が出土している。以上の如くLoc.34Bは、多くの祭祀のための土塙・遺物が出土し、いわば弥生中～後期の祭祀のための場であったと考えてよかろう。

弥生後期の土器について、I・II・IIIと型式編年がなされている。うち後期IIはヒビノキI式、後期IIIはヒビノキII式と呼称しているものである。そして、後期IはLoc.34の発掘によって^{註8}検出され、龍河洞式土器からの系譜のもので、かつヒビノキI式・II式土器のように叩き技法を持たない後期前半の土器で、検出当初横手II式土器と呼称したものである。このように南四国の後期弥生土器を3型式に分かち得たのも、田村遺跡群の発掘の成果である。弥生後期の「小結」でも述べられているように、Loc.34の住居址20棟のうち、後期I段階の住居址は4棟、そして後期IIの段階はST14の1棟のみ、しかも後期IIで以てこの集落は姿を消す。さらにLoc.45においても中期II～後期IIIにかけての住居址はみられるが、その内で中期III段階の繁栄の姿は把握出来ても、後期II・III段階の繁栄の姿を掴む事は困難だという。田村遺跡群における後期II・III段階の集落の衰退は、同遺跡群が拠点的母村集落の役割を果し得なくなった事を物語っていると同時に、またそれが故に後漢の2面の破碎鏡が放棄されているのである。

- 註1 繩文後期の宿毛貝塚では3～4型式の繩文土器が発見され、長期にわたって繩文人の定住が考えられる。これを筆者は定住・定着型の遺跡と呼び、これに反して1世代ないしはそれ以下の集落形成の遺跡を短住・移動型の遺跡と呼んでいる。県内の繩文遺跡の80%は後者の短住・移動型である。
- 註2 岡本健児「土佐考古学の諸問題」『高知の研究』1 清文堂 1983
- 註3 木村剛朗「高知県入田遺跡出土の入田B式土器」『遺跡』27 遺跡発行会 1985
- 註4 刻目突帯文系の弥生甕形土器を持つ土器型式群を総括して亀の甲土器文化と筆者は呼称している。
- 註5 宮本工・村上久和・城戸誠「山国川下流域における繩文時代後・晚期の遺跡」『九州考古学』59 九州考古学会 1984
- 註6 岡本健児「西見当I式土器とその繩文的要素」『考古学ジャーナル』170 ニュー・サイエンス社 1979
- 註7 本報告書中に、山中三男「高知県南国市田村遺跡の沖積世後期堆積物の花粉分析学的研究」がある。
- 註8 岡本健児・広田典夫『高知県ひびのき遺跡』土佐山田町教育委員会 1977
- 註9 註2と同じ。

執筆分担

- | | |
|-------------|---------------|
| 1. Loc. 35B | 下村 |
| 2. Loc. 35C | 下村 |
| 3. Loc. 36A | 角谷 |
| 4. Loc. 36B | 下村 |
| 5. Loc. 41 | 下村 |
| 6. Loc. 45 | 出原 |
| 7. Loc. 46 | 森田 |
| 8. 弥生時代中期小結 | 角谷（遺物）、廣田（遺構） |
| 9. 弥生時代後期小結 | 廣田 |
| 10. 総括 I | 岡本健児 |

高知空港拡張整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

田村遺跡群 第5分冊

本文 V

1986年3月31日

編集・発行 高知県教育委員会
印 刷 弘文印刷株式会社